今週の主張

バックナンバー

〈追体験〉・山口二矢と三島由紀夫

今週の主張1月1日

謹賀新年。おススメの３冊

(1)初めて、「選ばれる立場」になりましたよ

明けましてお目でとうございます。　今年もよろしくお願いいたします。去年はやたら忙しかったような気がします。もの凄く仕事をやった気もするし、でも余り、結果として残ってないような気もするし。ビミョ〜ウです。本を出したのは一冊。『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書）だけですね。幸い、いろんな所で取り上げてもらえました。ありがたかったです。

時流というか、時局にマッチしたこともあったのでしょう。教基法改正などもあり、〈愛国心〉の是非が論議され、その中で取り上げられたことが多かった。書評も沢山出ましたし、僕の本の中では一番多かったでしょう。大々的に取り上げてくれた新聞・週刊誌もありました。ありがたいです。それと共に、この本が、いささかでも〈問題提起〉になれたかなと思っております。

去年の締めとして、「週刊朝日」（06年12月29日号）の特集「2006。おススメ３冊」でした。青木るえかさん（コラムニスト）が、私の本を「３冊」の中に入れてくれたのです。嬉しかったですね。１年にどれだけの本が出てるか分からない。その中の「３冊」に入るなんて。こんなに評価してもらい、恥ずかしいですね。

青木さんは、前にも「週刊朝日」で取り上げ、詳しく書評してくれました。新書の中で、「いちばん面白く、胸のすく本」と書いてくれてます。ちなみに、青木さんの「おススメ３冊」の他の２冊は…。三浦しをん『シュミじゃないんだ』（新書館）。小野谷敦『谷崎潤一郎伝・堂々たる人生』（中央公論社）です。

実は、こういう企画は結構あります。「今年のおススメ」「今年、心に残った本」「今年のスグレ本」…と。新聞、週刊誌にはよくあります。10ケ位あるでしょう。いや、もっとかもしれません。だって僕ですら、三本、原稿を頼まれて書きましたし。

そうなんです。ずっと、「選ぶ立場」でした。ウーン、今年読んだ本で、これは面白い、これも感動した。でも３冊となると迷うな。と、言いながら選んでいたんです。それなのに、去年は青木さんのおかげで、「選ばれる立場」にもなりました。別世界の話だと思っていたのに。ありがたいですね。

さて、「おススメ３冊」です。何故か「３冊」です。どうして？１冊じゃ苦労するからかな。かといって、４冊以上だと大変だし。アンケートとして書いてもらうには「３冊」が手頃なんでしょう。

でも、選んで書く人も、ライターが多い。黙っていたら自分の本を書いて、宣伝するかもしれな

い。かつてはいたんでしょうな、そんな人が。だから、「ご自分の著作以外からお選び下さい」と但し書きが必ず付いている。

しかし、これは余計なことじゃないのかな。必要なくない？フツー？自分の本を書きたければ書かせりゃいいだろう。「今年のおススメ」の３冊とも自分の本なんて。それを読んだ読者が何て思うか。馬鹿にされ恥をかくのはその人なんですから。大いにやらせたらいいでしょう。

それにしても、トーク番組に出た人が、話す前に自分の本の宣伝をする。あれはどうかな、と思う。フェアーじゃない。「これはいい本です。ぜひ読んで下さい」なんて言って、自分で自分の本を宣伝する。公共の電波を使ってCMをする。いかんだろうよ。日本人は元々は謙虚で、「言挙（ことあ）げしない民族」だ。自分のことを自慢しない。言葉少ないシャイな民族なんだよ。

だから、トークの時に、自分の本をわざと置いたり、手に取って「買って下さい」と言ったりするのは、やめなさいよ。多分、出版社から言われるんでしょうね。「テレビに出た時はぜひ宣伝して下さい」と。だからといってCMをやることはない。本来なら、出版社がテレビの時間を買ってCMをしなくちゃいかん。それをタダでCMできる。それで著者を利用してるだけですよ。セコイ話だ。

僕なんて、一度もやったことはない。出版社に、「ぜひやれ！」と言われたことは何度もあるが、やらない。もし、司会者から、「これはいい本ですね」と言われたら、「ありがとうございます」とは言うが、でも、もっとキチンと言うべきでしょうな。「いや、つまんない本ですよ。とても読めるもんじゃありません。どうぞ買わないで下さい」。それでこそ、「謙遜」を信条とする日本人といえるでせう。

(2)次の私の本は『愛国者のノルマ』か『愛国者の堕落』にしようかな

さて、「今年の３冊」だ。私も頼まれた。ある出版社から頼まれ書いた。ところが、別の新聞社から、同じように「今年の３冊」を頼まれた。迷った。だって、「ベスト３」を選んだのなら、別の所でも、それを書くべきだ。理由も同じことを書くべきだ。でも、そうしたら、「同じ原稿だ！」「同じ原稿で、原稿料を二重取りしている！」と叱られる。さらに、もう一つ、「今年の３冊」を頼まれた。又もや迷った。これも同じ原稿を出すか。こんな時、他の人達はどうしているんだろう。

論理的に考えたら、「ベスト３」は、そのまま、どこでも通すべきだ。必死になって選んだものだから、じゃ、２紙も３紙にも同じことを書けるか。そうすると「何だ、ズルイ。同じ原稿だ。詐欺だ」と言われる。うーん、迷う。忠ならんと欲すれば孝ならずだ。天皇への忠をとるか、父・平清盛への孝をとるか。悩みに悩む平重盛の心境だわいな。

それで、考えた末に私は、「孝」をとりました。「ベスト３」をどこでも通し、「同じ原稿」を書くのでは、ライターとしての誇りが許さん。詐欺だと言われる。それで、別の「ベスト３」を用意しておきました。いいのかな、とも思いましたが、仕方ないじゃん。つまり、「ベスト３」を三つ書いた。計、「ベスト９」だ。でも、他に方法がない。あったら教えてくれよ。それとも、何紙に頼まれても、同じ「ベスト３」で通し、その「理由」だけを変えるか。しかし、それもセコイような気がする。それに、英語の表現だと、「ベスト」はいくつもある。「世界で最も優れた本」といったら１冊のようだが、最も優れた本の「一つ」という。高校でこの表現を学んだ時は、違和感がありましたね。

じゃ、恋人にも言える。「君のことは世界で最も好きだ」と言っていて、他にも恋人が出来てもよいんだね。問いつめられたら、「最も好きな人の一人だ」と言えばよか。だから、今年の

「ベスト３」だって、いくつもあっていいんじゃ。オラの頭の中もアメリカンになってしもうた。いかんな、昔は「反米愛国」だったのに。

じゃ、私の「ベスト３」のベスト３を紹介しますねん。最初に３冊をあげ、次に理由を書いちょる。まずは、「新刊ニュース」（07年１月号・株式会社トーハン）。

・「外交敗北」重村智計著。講談社
・「悪魔のささやき」加賀乙彦著。集英社新書
・「1968年」すが秀実著。ちくま新書（「すが」は糸へんに圭だけど、パソコンで出えへん）

・まるで推理小説を読んでいるようだった。覚悟を決めて書いている気迫が伝わる。
・政治運動でもこれはある。非合法活動に走る時のキッカケにもなっている。
・この年が転機だった。若者はよく学び、悩み、闘っていた。幸福な時代だった。

では、次の「ベスト３」。「週刊読書人」（12月15日号）だ。

・姜尚中『愛国の作法』（朝日新書）

タイトルがいい。「やられた！」と思った。「愛国者」は自己申告で、誰でもすぐになれる。集団になれば牙をむき、暴走する。それなのに「愛国心を持つのは当然だ」と思われ、冷静に論議されることもない。せめて、ルールや作法が必要だ。今こそ必読の書だ。
（これを見て、朝日新書の人から電話があった。「やられた！」のところを本の宣伝に使っていいか。どうぞ、どうぞ、と言った。だから、どこかに載るでせう。最近本屋に行ったら『愛国者の条件』という本もあった。いいね。悔しい。じゃ、オラは『愛国者のノルマ』を書こうかな。『愛国者の受難』でもいいか。『愛国者の愛人』『愛国者の変態』でもいいかな。ダメか）



・斎藤貴男『ルポ　改憲潮流』（岩波新書）

善意から自警団を作っている人がいる。「まず安全だ。その為には自由が制限されてもいい」と考える善意の人々もいる。その善意につけ込んで、「だから改憲を！」と大きな流れに持ってゆく人々がいる。自由のない「自主憲法」よりは、自由のある「占領憲法」の方がいいや、と思ってしまう。



・岡留安則『編集長を出せ！』（ソフトバンク新書）

凄絶な闘いだ。平和国家・日本にあって、ここだけは〈戦場〉だ。トラブル、抗議の連続だ。右翼の抗議で、スポンサーをつぶされ、襲撃され、大怪我をする。しかし、くじけない。一歩もひかない。そのたびに強くなる。したたかだ。腰の引けたマスコミの多い中、『噂の眞相』の復刊が待たれる。

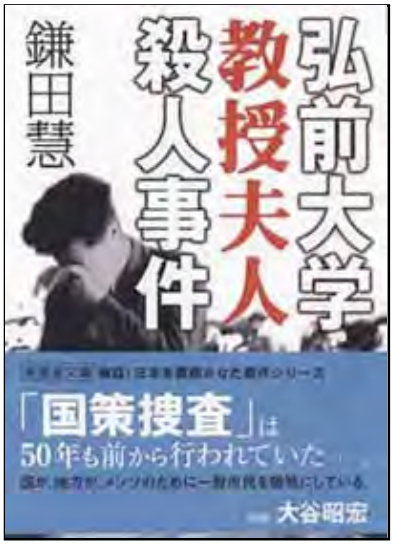
(3)三島事件の「番外編」じゃね。鎌田慧のこの力作は

そして三番目の「ベスト３」だ。あれっ、これはまだ出てないのかな。じゃ、本だけを挙げよう。と思ったら、今、届いた。「東京新聞」（12月24日付）で、「2006・私の３冊」だ。

・太田光・中沢新一『憲法九条を世界遺産に』（集英社新書）

・筆坂秀世『日本共産党』（新潮新書）

・鎌田慧『弘前大学教授夫人殺人事件』（新風舎文庫）



・は、このHPでも紹介しましたよね。太田光が読んでたので私もジョン・ダワーの本を読んだんだわー。『敗北を抱きしめて』だ。塩見さんの忘年会に行ったら、「あのHPを読んで、私もジョン・ダワーを買ってきて読んでるダワー」と言ってる人がいた。嬉しかったですね。私の本を読んでくれるよりも嬉しかった。私としては、こういうハイテクのツール（＝パソコン）を使って、読書などというローテクの大事さ、楽しさを訴えているつもりなんだワー。

それに、太田、中沢対談には、いろんな人が出てくる。小説家、哲学者、宗教家…と。二人はよく本を読んでるし、よく知っている。よく考えている。宮沢賢治も出てくる。平和を希求する賢治がなぜか国柱会に入る。田中智学の創始した国柱会は過激な国家主義的な宗教だ。そこには石原莞爾もいる。その〈疑問〉を太田は中沢にぶつける。

又、９条の理想をどうやったら守れるか。二人で必死に考えている。だって今は、保守派、現実主義派の天下だ。政治トーク番組でも、「核を持て」「改憲しろ！」「愛国心だ！」という人が勝つ。〈平和〉や、理想、夢を言う人は、すぐに蹴散らされる。「何を言ってんだ。北朝鮮が日本に核ミサイルを落としたらどうするんだ！」「闘うしかないだろう」と。それで終わりだ。じっくりと考えることはない。理想や夢を語る自由もない。時間もない。これではいかんだろう。その点、この二人は、若者のように夢や理想を語り合っている。いいですよね。「夢みる権利」まで奪われてはいけないダワー。

・の筆坂さんは元日本共産党のNo.4だ。この本は決して「告発本」ではない。その点は清々しい。この本を読んで、「共産党の人々も真面目にがんばってるんだ」と思った。爽やかだった。

又、今だから言えることもある。僕は、月刊『旬なテーマ』で対談し、大阪のテレビ「たかじんのそこまで言って委員会」で一緒に出演し、そして、ロフトでトークした。３回会っている。会うたびに新鮮で、教えられることが多い。

そうだ。ロフトでのトークについて筆坂さんが「展望社のHP」にこんなことを書いてくれた。（展望社からは天木直人さんとの対談本『九条新党宣言』が出ている）

〈鈴木さんとトークをやった。いきなり鈴木さんからとんでもない質問が私に浴びせられた。「筆坂さんは、実は共産党が世間の評判を上げるために野に放ったのではないか。なぜなら筆坂さんが書いたものを読んでみると共産党の批判をしているようにみえるが、実はかならず良いところについても述べている。共産党の高度な戦略ではないのか」ざっとこんな質問である。もち

ろん私は否定したが、鈴木さんらしい斬新な興味深い見方ではあった〉

ウーン、違うのですか。でも、その位のことを考える共産党だったら凄いなーと思いますよ。又、その位の太っ腹なところを見せたら、共産党もグンと評価が上がり、票も伸びると思いますがね。

さて、・の本だ。鎌田慧さんは数年前、沖縄で会った。喜納昌吉さんに呼ばれたんだ。鎌田さんの仕事は、じっくりと取り組み、綿密な取材をして書いている。特にこの本はそうだ。57年前、青森県で弘前大学教授夫人が殺された。三人ほど怪しい男が浮かんだ。そのうちの一人は、「変態性欲行動」がある。しかし、それだけでは逮捕できない。東大の法医学の教授に「血液鑑定」を頼んだ。そしたら、その男の血液と現場の血痕が98.5%の確率で一致した。これは間違いない。それで青年は逮捕され、刑務所に送られた。

ところが、これは冤罪だった。でも、自分の力で〈無罪〉を証明できない。普通なら、冤罪のままだった。ところが何と、20年も経ってから、真犯人が名乗り出たのだ。されで、やっと冤罪が晴れた。凄い話だ。

それに、なぜ、20年も経って真犯人が名乗り出たかだ。実は、三島由紀夫が説得したのだ。いや、そうじゃないな。三島事件の直後だった。この三島事件に衝撃を受けて、真犯人は名乗り出たのだ。だから、三島が説得し、事件を解決したようなものだ。三島事件のどこに感動したのか。それは鎌田の本をぜひ読んでほしい。この本は歴史に残る力作だと思う。又、「もうひとつの三島事件」というか、「三島事件・番外編」だ。

ということで、正月第一弾は終わり。「去年、何冊読んだか？」って。今、集計しちょる。紅白歌合戦のボールと一緒に数えちょる。計算結果は来週じゃね。

【だいありー】

(1)12月25日（月）午後７時からネーキッド・ロフト。國貞陽一さんの『寿（kotobuki）魂』（太田出版）の出版記念パーティ＆ライブ。凄い人だった。ギュウギュウ詰めで、後ろは立ち見だった。歌あり、トークあり。沖縄料理ありの贅沢なライブでした。ごちそうさまでした。

(2)12月26日（火）「オーマイニュース」（日本版）がリニューアルするという。８月から毎週火曜に僕はコラムを書いてたが、次週で終わる。つたない原稿だったが、僕なりに必死に書いたし、愛着がある。やっと軌道に乗った所だと思っていたので、残念だ。淋しい。

いつ打ち切られても仕方はない。そう思っていたし、覚悟をしていた。しかし、現実になると、ガクッとくる。いくつかの連載の中の一つが終わっただけだ。そう思っても、何か自分の〈全て〉を否定されたようで落ち込む。気晴らしに渡辺謙の映画「明日の記憶」を見た。主人公はアルツハイマーになって仕事が出来ず、会社をクビになる。ああ、オイラみたいだなと思った。訳もなくポトポトと涙がこぼれた。

(3)12月27日（水）図書館。夜６時半。一水会事務所に。久しぶりだ。大掃除が終わった後で、反省会と納会。最近は若い人も頑張っているし、レコンも充実している。活動もよくやっている。偉いと思う。僕なんて、何もやってないので申しわけないと思う。反省することの多い年末でした。

(4)12月28日（木）夜７時から、忘年会。何の忘年会か知らないが出る。場所が探せない。公衆

電話はない。焦って、見知らぬ通行人から携帯を借りて赤坂に電話した。ロフトの平野さんの忘年会だと思って行ったら、「鈴木さんのオフ会ですよ」と言われた。知らんかった。「明日の記憶」のように、アルツハイマーになったのかしらん。赤坂さんや、風見、河井さんなどと久しぶりに会った。まだ名前は憶えていた。偉い。ボケとらん。

(5)12月29日（金）家の掃除をしようと思ったが、全く手につかない。書類や本はどう整理していいのか、途方に暮れる。

(6)12月30日（土）やはり同じ。原稿も書かにゃならんし、返事を書かにゃならん手紙も多い。あれもこれも…と思ってるうちに、何も出来ん。正月は銀行が休みなので、金を少々下しに行く。

連合赤軍の植垣康博さんは、革命資金を作る為に、よく銀行強盗をした。全てうまくゆき、捕まらない。金がなくなると、『じゃ、銀行へ下しに行くか！」。つまり、強盗に行くんだ。その軽さ、明るさがいいね。当時は「監視カメラもなかったから、包丁一本でやれた」と言っていた。

今はATM機のそばには必ず監視カメラがある。うーん、この角度だと写らないかな。でも他のカメラに写るかな…と、いろいろ考えながら、キョロキョロと見回していた。いや、数字を押す画面に小さな穴があいていて、そこに監視カメラを仕込んでいるという説もある。

だから、丹念に調べていた。そしたら、背後から警備員に声を掛けられた。ギクッとしただわー。「まだ僕は犯罪を犯してませんよ。どうしたら出来るかを調べていただけですよ」と言おうとしたら、「やあ、鈴木さん。大晦日の朝生には出ないんですか？」

ビックリするやら、ホッとするやら。「出ませんよ。でも毎月見てるんですか。ありがとうございます」と礼を言った。どこで誰が見てるか分からない。だから犯罪はやめませう。犯罪の予備行為もやめませう。あっ、これは私だけのことか。うーん、これからはもう犯罪は出来ないね。人の目があるから。これも、淋しい。

金を下して、無声映画を見る。鈴木義昭氏（ライター）が澤登翠さん（活動弁士）を紹介してくれた。感激した。

(7)12月31日（日）夜７時からロフトプラスワン。吉田豪さんらとトーク。大晦日なのに凄い人でしたね。楽しかったです。「蛍の光」を歌いました。でも、今の日本人は、誰も「蛍の光」や「窓の雪」で本を読んでる人はおらへん。嘘っぽい歌だ。

【お知らせ】

(1) １月２日（火）オーマイニュースに僕の最後のコラムが載る。おつかれさまでした、と自分で自分に言う。誰も言うてくれへんから。

(2) １月５日（金）月刊「論座」２月号発売。浅羽通明の『右翼と左翼』（幻冬舎新書）の書評を書いている。小林よしのりさんと編集長の大型対談もある。



石川カメラマン救出事件(1986)について「月刊タイムス」(07年2月号)に書いた。（左）石川カメラマン(右)野村秋介氏

(3)１月６日（土）月刊「創」（２月号）発売。ある出版記念会に出た。そこで思いがけず、学生運動のヒーローに会った。その話を中心に僕の連載に書いた。

(4)１月12日（金）月刊「タイムス」（２月号）発売。野村秋介さんの「事件簿」から。石川カメラマン救出について書いた。それと、「三島由紀夫事件簿」から。弘前大学教授夫人殺人事件の真犯人が実は、三島事件に衝撃を受けて名乗り出た。その話を中心にして書いた。

(5)１月17日（水）「わしズム」発売。私も出てるようです。

(6)１月22日（月）７時。一水会フォーラム。中村粲先生で「東京裁判と松井大将」---南京事件を考へる---」

(7)２月27日（火）岩波書店より『連続講義　東アジア・日本が問われていること』（2100円）が発売されます。06年に慶応大学で行われた連続講義をまとめたもので、私の講義、討論（加藤哲郎教授との）も入っております。岩波から本が出るなんて初めてです。感激しています。



(8)加藤紘一さんの本『テロルの真犯人』（講談社・1500円）が発売中です。衝撃的で、考えさせられる本です。僕も一緒にシンポジウムに参加したりしたので、僕のことにも触れています。読んでみて下さい。本の帯には、こう書かれています。

〈なぜ狙われたのか。老テロリストを決起させたのは、先鋭化していく「時代の空気」だった。政治家の一言が、人を動かし、時代の歯車を回す。政治家にとって、言葉とはなにか。覚悟とはなにか。それでも私は、発言を続ける〉

(9)３月１日（木）7:30p.m.ネーキッド・ロフト。今年の都知事選に革命家・外山恒一氏が立候補します。この日、外山氏を中心にイベントをやります。ゲストとして僕も出ます。他に、森達也さん、雨宮処凛さん、すが秀実さんなどが予定されています。破天荒な集会になるでしょう。

(10)ザ・ニュース・ペーパーの渡部又兵衛さんが本を出しました。『お笑い芸人。糖尿病と二人連れ』（グラフ社・1429円）です。一気に読みました。感動しました。涙が出ました。「今年の３冊」に入れたかったです！

(11)新聞やテレビでご存知の方も多いと思います。元「よど号」グループの田仲義三さんが病魔と闘っています。熊本刑務所にいたのですが、ガンのため、刑期一時停止で出て、大阪医療刑務所に移され、さらに今はそこを出て病院に入ってます。支援する会から、ぜひ励ましのお手紙とカンパを送ってほしいと頼まれました。以下に記しますので、よろしくお願いいたします。

（手紙の宛先）
郵便番号177-0053　東京都練馬区関町南2の2の6の508　前之園紀男方　田中協子

（振り込み口座）
みずほ銀行　大山支店（店番号628）普通預金　口座番号　1018963　田中娘基金　田中協子

HOME

----------0xKhTmLbOuNdArY Content-Disposition: form-data; name="userfi　le"; fi　lename='

今週の主張

バックナンバー

一代の風雲児・田中義三さん逝く

今週の主張1月8日

(1)奇跡を信じていたのに…



田中義三さんとタイの裁判所で（98年9月）

田中義三さんが亡くなった。新しい年・07年を迎えて11分が経った時だった。「俺は絶対に死なない」と言っていた。不屈の気力で新しい年を迎えたのに…。

「タイで地獄を体験した。そこから生還したのだ。こんなことで死ぬわけがない」と言っていた。うん、そうだよと思っていた。タイの裁判では奇跡的に〈無罪〉を勝ち取った。今度も奇跡を起こしてくれる。僕らはそう思っていた。しかし、二度目の奇跡は起こらなかった。

今年の９月12日に熊本刑務所で面会したのが最後になった。「嬉しくて昨夜は眠れなかったですよ」と言ってくれた。元気一杯だった。ところが、11月に末期ガンと診断され、大阪の医療刑務所に移され、さらに12月15日に千葉の総合病院に移された。そして２週間後、世を去った。何とも残念だ。

田中さんは元赤軍派であり、1970年、「よど号」ハイジャックに参加して北朝鮮に渡った。ところが、1996年、カンボジアで逮捕された。北朝鮮からカンボジアに行っていたのだ。「偽米ドル事件」の容疑でタイに送られ、そこで裁判になった。その時、塩見孝也、宮崎学さんらが支援闘争を組織し、僕も５回、タイに行った。会った瞬間、意気投合し、話し込んだ。

その裁判では「無罪」になった。しかし、日本に送還され、「よど号」事件の裁判が始まった。そして、懲役12年の判決を受けて熊本刑務所に収監された。2003年のことだ。それから３年たち、未決勾留を引くともう６年の刑だった。さらに、06年５月からは、「友人面会」も出来ることになった。

それまでは、刑務所に入ったら、肉親しか面会が出来なかった。だから運動関係者が長期刑を受けると、「結婚」や「養子」縁組することがあった。「これで10年近く会えないのか」と思っていた。

ところが人権的な配慮で法律が変わり、友人でも面会出来るようになった。ただし、出所後の「更生」に役立つ人だけだ。「出たら又、武装闘争をやりましょうよ」などという人は認められない。（今時、そんな人はもういないか）。その点、僕は、いつも「出たら一緒に合法闘争をやりましょう」と言っている。何せ、「よど号」裁判の時だって、弁護士に頼まれて「証言」した位だ。「立場の違う鈴木さんの方がいいですよ」と言われたのだ。僕は今まで右翼の裁判を何十回と傍聴している。百回を超えてるかもしれない。（まだ、ノルマは超えてない）。しかし、「証

人」なんて生まれて初めてだ。右翼の裁判でも証人はないのに、左翼の人の「証人」なんて、変な気分だった。

しかし、田中さんは、「左翼の人」という狭い枠の人じゃない。今まで会った中で、最高の男だと思った。思想や立場、過去の運動など、どうでもいい。「いい奴だ」と思った。だから裁判では、こう証言した。

「これほど素晴らしい男はいない。こんな有能な、いい人を長期間、刑務所に入れるなんて“国家の損失”だ」と。

これは今でもそう思う。明治時代だったなら、こんな有能な人間は即座に釈放し、国家の仕事に就かせているよ。たとえば函館で投降した榎本武揚、大鳥圭介は、一旦獄に入れられた後、国家の重要な仕事を任されている。

それに、30年も経ってから「よど号」裁判は行われている。殺人だって15年で時効だ。彼らは誰一人殺さず、傷つけず北朝鮮に渡った。とっくに時効だ。ところが外国にいる場合は時効は「停止」する。何とも不運だ。

しかし、もったいない話だ。こんな有能な人間を。国会を見ても、テレビでお喋りしている評論家を見ても、ただペチャペチャと喋っているだけだ。「大人のオタク」だけじゃないか。田中さんのように体を張って、行動してきた人は誰もいない。これだけの体験を持ち、地獄を潜り抜けた男こそが、国のことで発言し、行動すべきだ。他の奴らは黙れ！と言いたい。

10年近くも刑務所に入り、会えないのか。と思っていた時に、「友人面会」が出来ると聞き、刑務所長に手紙を書いた。そして9月12日に面会したのだ。元気だった。中では図書係をしていると言っていた。「ピッタリじゃないですか。じゃ、本も沢山読めるでしょう」と聞いたら、「他の人の貸し出し係だから大変ですよ。自分じゃあまり読めませんよ」と言っていた。

「僕も中学の時は図書委員をやったんですよ」と言ったら、喜んでいた。



田中義三さん（中央）左は木村三浩氏（98年9月タイ）

(2)吉村昭の『桜田門外ノ変』を、タイでもらった

田中さんは、どこにいても、誰からも好かれる。人徳というか、人柄だろう。タイの刑務所でも皆に好かれ、皆が守ってくれた。熊本刑務所でもそうだった。それに真面目だ。運動の時は、「150メートルの運動場を10周する」とノルマを決め、どんな時でも実行していた。北朝鮮にいた時も、「毎朝１時間、散歩する」「ジョギングする」と決めたら、どんな時でも必ず実行したという。

「鈴木さんと同じで、真面目な人でした」と奥さんは言う。いや、僕なんて不真面目ですよ。でも、ノルマを決めるとこだけは似ている。

刑務所では同じ囚人だけでなく、刑務官からも好かれ、頼りにされた。生活態度がいいと、〈級〉も上る。そうすると、手紙や面会の回数も多くなる。

「今は面会が月に２回ですが、もうすぐ３回になります。そうしたら、ここで３泊して会いましょう」と言う。驚いた。まさか刑務所には泊まれないから市内のホテルに泊まる。それで３日間、面会に行く。贅沢な面会だ。でも、奥さん、子供たち、仲間たちがいる。僕だけが田中さんを独占しては悪い。そう言うと、「かまいませんよ。ぜひ、そうして下さい」と言う。

「３日連続」は無理としても、１年に１回か２回は来ることになるだろう。そう思っていた。これから６年か。長いな、とも。

ところが実は僕と面会する前に、病に倒れ、検査してたのだ。痛みを訴え、七転八倒の苦しみだったが刑務所の検査では異常を発見出来なかった。そんな大変な事があったのに、僕と会った時は、ニコニコして、健康そのものだった。「吉村昭が死んじゃって残念ですね」という話をした。

実は、吉村昭という小説家は、田中さんに教えてもらった。タイに５回行った時、吉村昭の『桜田門外ノ変』と『生麦事件』（共に新潮社）をもらった。逆「差し入れ」だ。明治維新の志士たちに学んで、しっかり民族派運動をやってくれ、という意味だった。

田中さんは〈左翼〉というよりも〈志士〉だな、と思った。「今は明治維新と同じだ」と思ったのだろう。ここで躊躇したら、一生悔いを残す。そう思い、小さな水たまりをポンと飛び越えるように、ハイジャックにも参加したのだろう。

僕だって、その状況で、田中さんのように魅力的な人がいたら、参加しただろう。田中さんは、あの時代を生き、先頭を走り、人に出来ない体験をした。反省も含め、その貴重な体験を、時代の息吹きを、多くの人々に伝えるべきだろう。そう思った。



田中義三『よど号、朝鮮、そして日本へ』（現代書館）

田中さんは吉村昭も司馬遼太郎も好きで、ほとんど読んでると言った。よし、僕も読破しようと思った。吉村は『彰義隊』など、維新ものを随分と書いている。又、『破獄』『漂流』など、極限状況の男たちの物語を書いている。田中さんだって、そうした極限状況を生き抜いた男だ。吉村昭も田中さんについて書いてみたらいいのに。ところが吉村も田中さんも亡くなってしまった。

今、手元に田中義三さんの本がある。『よど号、朝鮮、タイ。そして日本へ』（現代書館・1800円）だ。2001年８月15日に出ている。タイから日本に移送されて、「よど号」裁判が始まった時だ。刑務所に行く前に、全ての思いを書いておこうと思ったのだ。ハイジャック、北朝鮮での生活、タイでの偽ドル疑惑、そして日本への帰還だ。

第４章は「友より。待ってるぜ！義三」と題し、３人の友人が書いている。その一人として、僕も書かせてもらった。「あとがきにかえて」はピョンヤンにいる小西隆裕さんが書いている。

田中さんの略歴を見たので、ちょっと紹介する。1948年７月23日、青森県三沢市で生まれた。だから今は58才だった。お兄さんは一平さんという。兄弟は５人だという。長男は一平で、義三さんがいる。「じゃ、次男は何という名前ですか」と聞いた。次男だから次郎とか、義二だろう。そう思ったら、男は二人で、後は女だという。「じゃ、次男で義三はおかしいですね」と言ったら、その「三」じゃなく、三沢で生まれたので義三なんですと言う。だから「義三（よしみ）」と読むんですよ。そうか、それで納得した。

1960年　父母の故郷である熊本市に引っ越し。
1967年　熊本の済々學高校卒業。
1968年　明治大学政経学部２部入学と同時に学生運動に参加。社会主義学生同盟参加。

1969年　共産主義者同盟赤軍派加入。
1968年から1970年まで防衛庁突入闘争、赤軍派の行った本富士警察署襲撃闘争などに参加。
1970年３月31日　よど号ハイジャック闘争で８人の仲間と朝鮮民主主義人民共和国に渡朝。
1972年　赤軍派の思想とハイジャック戦術を自己批判し、組織として新たに出発。
1996年　カンボジアで米国により偽ドル事件容疑で逮捕。タイに強制連行され、米財務省シークレット・サービスによる苛酷な取り調べ、起訴、裁判を経て、1999年６月、「完全無罪」判決を勝ち取る。
2000年５月　日本政府の強制送還要求に対して自主帰国表明。
同年６月28日　30年ぶりに祖国日本の土を踏む。帰国と同時によど号ハイジャック容疑などで逮捕、起訴。

そして裁判が始まり、12年の刑を受けて熊本刑務所に収監された。熊本刑務所は昔、金嬉老が入っていた。二人を殺し、静岡県の寸又峡温泉に人質をとって立て篭った。1968年の事だ。この時テレビ局を呼び寄せ、「朝鮮人差別」を訴え、多くの左翼人が支援し、現地に駆けつけた。そして、熊本刑務所で服役し、後、釈放され、今は韓国にいる。

二人の大物が熊本刑務所にいた。それも、朝鮮がらみだ。偶然はこれだけではない。この二人は、三島由紀夫に大きな影響を与えたのだ。特に田中さんだ。田中さんがいなければ三島事件は起きなかった。いや、あのような形では起こらなかった。

(3)田中義三さんの「日本刀の決起」が三島事件の遠因になった



日本刀を持ってるのが田中義三さん（よど号ハイジャック事件）

このことは「月刊タイムス」の僕の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」に書いた。
三島事件以前、人質をとって立て籠るという事件はない。いや、金嬉老があった。人質をとって〈思想〉を訴えたのは、彼が初めてだ。三島は、そこを評価した。巨大な米軍を相手に闘うベトコンのようだと評した。三島事件の２年前だ。
又、よど号ハイジャック事件にも三島は衝撃を受けた。「こんな手があったのか」と思った。三島事件の半年前だ。特に「日本刀による決起がいい！」と絶讃していた。新左翼だが、日本刀だ。そこに感動していた。今、『戦後50年』（毎日新聞社）を調べて、その写真を探したので、載せよう。福岡空港で一旦、女性と子供を降ろした。その時、タラップの上に日本刀を縦にして構えている男がいる。彼が田中義三さんだ。この写真を見て、三島由紀夫は、「日本刀による決起がいい！」と言ったのだ。
もっとはっきり言うならば、田中義三さんが三島事件を起こさせたのだ。
これは決してオーバーな話ではない。「楯の会」の人間も証言している。一期生の本多清が書いた本がある。『314』（毎日ワンズ）という本だ。「さんいちよん」と読む。「三島由紀夫の仇討ちが始まった」とサブタイトルが付いている。その中でこんな箇所がある。

よど号ハイジャック事件が起こった日だ。三島は本多の家に電話をくれた。「三島由紀夫と申

します」と言った。文房具店を営んでいたお母さんが電話を受けビックリした。あわてて、「清、三島先生から電話」と呼びに来た。何事かと思い電話に出た。

〈「やられたな」
先生が唐突にそう言った。そのとき意味が分からなかった。
「そうですね」
言葉を合わせた〉

それが、ハイジャックだったのだ。本多は言う。

「すでに先生は行動計画を練っていた。世の中に、命を懸けた自分達の行動の意図を認識させるために、世間の注目を集める必要があった。しかし赤軍派によってセンセーショナルな事件を起こされ、先を越されたという思いがあったのか」

それと同時に、〈日本刀による決起〉だ。これを「やられた！」と思った。赤軍派の９人は、爆弾などを各々持って乗り込んだ。日本刀を持っていたのは田中義三さんだ。福岡空港で給油のために降りたち、女性や子供を降ろした。その時、仁王立ちになっている男が田中さんだ。三島には、それが目に焼き付いた。

よど号の９人は、北朝鮮に行ったあと、そこの人々の愛国心の強さに教えられた。「祖国愛に基づいた変革運動をしなくてはならない」と思った。そして、同じ「民族主義」では新右翼の人達とも共に話せるはずだ、と僕らに接触を持ってきた。
木村三浩氏と見沢知廉氏は、よど号グループの招待に応じて、北朝鮮に行った（僕だけは何故かビザが下りなかった）。
そして、僕は、タイで田中さんと会い、意気投合した。あるいは三島由紀夫が引き合わせてくれたのかもしれない。日本刀をめぐっての左右の立場を超えた壮大な物語だ。

そして、これから又、新しいドラマが始まると思った時に、田中さんは亡くなった。一代の風雲児は足早に駆け去って行った。もうこんな男は出ないだろう。

【だいありー】

(1)１月１日（日）ロフトプラスワンで年越しをしました。吉田豪さん（ライター）と31日の８時からトーク。そのあと、お笑いのコンテストがあり、審査員をさせられた。面白かった。プロとして通用する人ばっかりじゃんと思った。「冷蔵庫マン」「教祖さま」「ロボコップ」が面白かった。（ブログの方に、一緒に撮った写真があります）。一番初めにやった藤波さんという女性もいい。お笑いなんだけど、言ってることに納得してしまった。
たとえば、クリスマスカードは１日だけ、年賀状は１日から５日位だ。喪中だから出さない。出さないでくれという人もいる。そのあと寒中見舞いもある。めんどうくさい。いっそのこと全てを「寒中見舞い」に統一したらどうか。そうしたら、おめでたい人も、不幸な人も、全てに通用する。期間だって、11月から２月末まで、いつ出してもいい。これはいいアイデアだと思った。
それと、年賀状に「夫婦」「家族」の写真を載っけてくる人、ヤダよね。何か見せつけてるようで。独身者差別だ。独ハラだ。そんなものは法律で禁止しろよ、と審査員の私は吠えました。
でも、最近、分かったんです。写真を出してる人は大体、「偽装夫婦」「崩壊家族」です。一年

に一遍だけ集まって、無理に笑顔を作って写真を撮ってるんです。あの家も、この家も、この夫婦もあの夫婦も。だから、もう一度、丁寧に見直して下さい。本当です。私は嘘は言いません。万が一、幸せに見えても、写真を撮った瞬間に幸せは逃げて行くでせう。

そんなことをしてる間に、年が明けた。「あーあ、こんな地下の穴倉で新年を迎えちゃったよ」と言ってる人もいた。

せっかくだから、初詣でに行きました。でも、恐いからおみくじは買いません。「大凶」なんて出たら、もう立ち直れませんし。案外と、影響されやすいタチなんです。

そして、家に帰ったら、田中義三さんの奥さまから電話。今日の午前０時11分に亡くなったとのこと。愕然とした。「必ず元気になる」「死なない」と言ってたのに…。全身の力が脱けた。思想や立場を越えて、人間として好きだった。一番の親友だったかもしれない。ガックリときた。「鈴木さんに会いたい、と言ってたんですが」と言う。でも、元気になってから会いたかったようだ。それなのに…。

(2) １月２日（火）田中義三さんは家族だけで密葬するという。「でもその前に、鈴木さんには会ってほしいのです」と言う。「今、家で眠ってますから」と言う。それで朝９時半にお伺いした。本当に眠っている。血色もいいし、ほほえんでいる。いろいろと話をした。スースーと寝息が聞こえる。そんな気がした。なんでこんないい人が、と思った。涙がポタポタと落ちた。

「オーマイニュース」の僕の連載「愛国者の座標軸」がこの日で終わり。４ヶ月の連載だった。惜しんでくれる人もいた。

(3) １月３日（水）何をしようとしても手につかない。気力がない。田中さんの「不在」をいやという程感じる。

(4) １月４日（木）同じ。

(5) １月５日（金）中野図書館で一日、本を読んでいた。田中さんの記事をコピーした。こんな大事な凄い人なのに、どこの新聞も扱いが小さい。偉大さが分からないんだ。「朝生」で田中さんについてやったらいい。若者が夢を持ち、理想を持った唯一の時代だ。その先頭を行った人間だ。そして、左右の思想、学生運動、愛国心、北朝鮮、アジアと日本、などを考えたらいい。

深笛さんは見沢知廉の漫画の原作を書いたが、田中さんの漫画も書いてくれ。高木ひろしさん（脚本家）は見沢氏と同時に、田中さんの芝居を書いたらいい。ぜひお願いしたい。

【お知らせ】

(1) １月12日（金）「月刊タイムス」（２月号）発売。野村秋介さんの「石川カメラマン救出事件」。それに、弘前大学教授夫人殺人事件について書いた。

(2) １月17日（水）「わしズム」発売。特集は「愛国心と愛郷心」。私も参加している。

((3) １月22日（月）７時、一水会フォーラム。中村粲先生で、「『東京裁判と松井大将』---南京事件を考へる」

((4) ２月27日（火）岩波書店より『連続講義　東アジア・日本が問われていること』（2100円）が発売されます。私の講義と対論も入っております。

HOME

----------0xKhTmLbOuNdArY Content-Disposition: form-data; name="userfi le"; fi lename='

今週の主張

バックナンバー

バーチャルな明日

今週の主張１月15日

(1)130円で宅配便が送れるなんて

なるほど、こんな手があったのかと思った。超格安・超特急の宅配便だ。荷物は大阪まで３時間足らず。費用は鍵代と入場券代だけだ。

何の事か分からないだろう。説明する。自転車の鍵がある。番号式の鍵だ。長いチェーン式のものでなくていい。小さなヒモでもいい。ただ、番号式の鍵がついてればいい。あとは東京駅で入場券を買う。130円だ。それだけ。たったそれだけで荷物は３時間後に大阪に着く。

そこまで説明しても分からんですか。しゃあないな。補足する。東京駅で入場券を買い、新大阪行きの新幹線の網棚に荷物を置き、番号式の自転車の鍵をかける。そして大阪の知人に電話をしてこう言う。

「ひかり○○号の○号車の一番Ａ席の網棚に荷物を置いた。鍵の番号は○○○○だ」

これを聞いて大阪の知人は入場券で駅に入り、荷物を受けとる。３時間の「超特急便」だ。「アイデアの勝利」だ。実は、これは水面下ではかなり行われていた。本当の話だ。なんせ「社内便」として使っていた会社もあったという。これは最近読んだ本に出ていた。

でもJR側でもやっと気がついた。大体、網棚のバーと荷物を結びつけている、なんて不自然だ。それに近くの人間ではなく、他の車輌（実は乗ってない人間）が物を取りにくる。そんなケースがいくつか報告されて、「もしかしたら」と分かったのだ。

そういえば、よく車内放送がありますよね。

「持ち主の分からない荷物がありましたら車掌までお知らせ下さい」と。過激派が爆弾を仕掛けてるんじゃないか。それを警戒してるのかと思ったら、それだけじゃない。こうした（荷物の）「無賃乗車」を警戒してたんですな。だったら、キチンと説明すればいいのに。でも説明すると、「なるほど、そんな手があったのか」と真似する人が出る。それで曖昧なアナウンスになってるわけだ。

これだったら、人間だって送れる。子供なら旅行バックに入れて網棚に乗せられる。大人だって、海外旅行用のスーツケースに入れて、一番はじの隙間に置いとけばいい。ただで、新大阪まで行ける。でも駅まで運ぶのが大変だな。重い。じゃ、やめた。

でも普通の荷物なら大丈夫だ。頭のいい人ですね、これを考えついた人は。この「事件」は新聞やテレビでも報道していない。本当にうまい手口は報道しないんですよ。真似られるから。他にもうまい手口は一杯あるし知ってるけど、私も書けない。

まあ、この「新幹線便」の話は、本にも出たし、表に出た。オープンになったので、JR側も警戒してるし。今は出来ん。「お前はどこで知ったのかって？」だから、本で読んだんですよ。古瀬幸広・廣瀬克哉の『インターネットが変える世界』（岩波新書）だ。最近、ネット関係の本を読み漁っている。「ネット博士」になっちゃった。名刺だって、QRコードが入ってるし。渡した

ら相手は携帯で写して、すぐにこのHPを読んでくれる。ハイテク名刺じゃわい。
　ところで、無料の「新幹線便」が何故、インターネットの本に紹介されたかだ。まだ分からんかね。ネットもこれと同じだ。いや、似てるということじゃ。
　荷物を運ぶのは、昔は飛脚に頼んで運んでもらった。それから、車で運ぶようになった。電話だってそうだ。電話線を引いて、やっと話せるようになった。だから、どんな田舎にも、山の上にも引いた。ネットだって、はじめは電話線を利用してやった。そのうち、何とか安く、あわよくばタダで回線を使うことを考えた。そして、今のネットが生まれた。「新幹線便」を考えた「犯罪者」と同じ発想だよ。
　と、までは古瀬、廣瀬も言っちょらんが、〈発想〉は似てたと言うんだな。

(2)〈過去〉や〈未来〉なんて、もう簡単に行けるんじゃい

　では話は変わって、「世界日報」（06年12月30日）の記事だ。「英首相官邸の見学はいかが。ネットで仮想ツアー」という楽しい記事が出ていた。これは実際に12月28日から始まったのだ。誰でも官邸に入って見学することが出来る。日本にいながらにして、ロンドンに行き、官邸の中に入れる。閣議室に入り、歴代首相の肖像が飾られた大階段、玄関ホールなどを見ることが出来る。これは感激です。皆さんも見たらよかと。ツアーには www.pm.gov.uk　からアクセス出来る。

　居酒屋のHPを開くと、店の内部がかなり詳しく紹介されてますね。あれと同じです。そのうち美術館やお城、名園などもネットで行けるようになります。ゲームでありますよね。自分が主人公になって、画面の中の自分が歩いて行く。その主人公の目線で、風景も、町並みも出てくる。いいですね。
　そうすると、〈過去〉にも戻れる。昔の映像データを揃え、時代順、時刻順に並べておく。そうすると、「〇年〇月〇日に戻りたい」となれば、そこにポンと戻れるのです。「江戸時代に戻りたい」というのは、まだ無理ですが、今の子供たちが大人になり、「子供時代に戻りたい」と思ったら、簡単に戻れる。子供時代（つまり今）のデータならいくらでもある。そこにポンと本人が入り、心ゆくまで懐かしんで、遊べる。小学校の同級生だっているだろう。「もう外の世界に戻るのはヤダ」「ネットの中でずっと住んでいたい」と思えば、それも出来るでしょう。これはなかり、「タイムマシン」に追いついたのではないでしょうか。又、これは〈未来〉についても出来るでしょう。昔の人が考えた「タイムマシン」とは、案外、このことかもしれません。ネット問題の権威・村井純さんも『インターネット・＝次世代への扉＝』（岩波新書）の中で、この「タイムマシン」について触れてました。
　又、歌田明弘も『本の未来はどうなるか＝新しい記憶技術の時代＝』（中公新書）の中で、同じようなことを書いてます。「タイムマシン・コンピューティング」「時間旅行ダイヤル」と言っています。

〈映像データを保存して再生できるようにしておけば、部屋どころか町並みごと「時間旅行」することも可能だろう。好きなときに、過去や未来の街並みが現われる〉

　野口悠紀雄は『超整理法』で、さらにもう一歩先を行きます。

〈過去に戻るばかりでなく、「未来」に行くこともできる。未来のデスクトップに現われるようにフィルムや画像を設定できる。天気予報やニュースを未来のデスクトップに出現するようにして

おけば、その日がどういう日か知らせてもらえる。つまり未来にもリンクが張れるというわけだ〉

いいね。未来にリンクを張るのか。でも、これだとまだ「年間天気予報」の域だ。過去の統計から見て、この日は雨になる確率が高いとか。それだけじゃつまらん。この日には日本が沈没するとか、そんな大予測もしてくれるかも。何なら、「予測」して、それを「実行」してくれればいい。出来るだろうよ。小学生の絵日記のように、まず書いてしまう。それに従って、今日は勉強、今日は川で遊ぶ…と実行する。

それを、もうちょっと大がかりにすればいいんだ。10年後、富士山が爆発する。20年後、共産党が政権をとる。30年後、日本、中国、韓国、北朝鮮は合併し、「アジア合衆国」になる。そして、実行したらいい。すると、これは単なる「予測」ではない。未来を見たのだ。そして皆は、未来にネットを張って、今、体感してるのだ。

過去の話に戻る。いつでも過去に行けるとなると、もう「失恋」はなくなる。愛（いと）しい人との「死別」もなくなる。だって映像データはいくらでもあり、そこで一緒に会話でき、遊べるからだ。「何だ。昔のビデオを見るだけだろう」とお思いのあなた。それは違います。メカの進歩を何も知っちょらん。

その人のデジタル・データを保存しておけばいい。そうすると、どんな動きも出来る。「恋人」は、もっといろんな事をしてくれる。いつでも、接吻でも、合体も出来る。あんなことも、こんなこともしてくれる。「現実の恋人」は他の男の元に行ったかもしれん。あるいは床の下に埋まっているかもしれん（そう、あなたがカッとなって殺したのだ）。　でも、ネットの中の「恋人」はいつも優しい。いつまでも若い。従順だ。いつだって「裸でエプロン」だ。これは決して「夢」ではない。実は、ハリウッド映画では本当に考えられている。いや、一部、実現している。

トム・ハンクスは言っている。

〈もし私の映像がデジタル・データとなって保存されれば、あとで監督がそれを使って好き勝手な演技をさせることができる〉

しかし、２年ほど前の映画にあったよね。アニメなのに顔は全部、トム・ハンクスだ。彼が演技して、アニメのように細工したのか。あるいは、彼の映像データを使って、監督がアニメ風に作り直したのか。

「スタートレック」の特殊効果アニメーションを担当したロブ・ボンチューンは、こう豪語する。

「昔のスタートレック・シリーズを（俳優を含めて）全てCG化し、続編を作ることも可能だ」と語る。

いいじゃないか。やってほしいね。俳優はいつまでも若いし、どんな「演技」も出来る。

〈一旦、自分の肖像写真を撮ってデジタル化してイメージ・データを保存すれば、あとはもうお役御免となる可能性もある〉

これもいい。「使い捨て」で、いいじゃないか。国会議員も、俳優も、ライターも、使い捨てですよ。私だって、仕事はどんどん切られるし。「使い捨てライター」「百円ライター」と呼ばれ

てますよ。それに、俳優はいいじゃん。若く元気な時の映像を撮ってデータにすれば、何百年、何千年経っても、いろんな映画に出て活躍出来る。それで「出演料」（いや、何ていうのかな。著作権料か、イメージ料か）は、ずーっと入るんだ。いいじゃないか。オードリー・ヘップバーンなんてやってほしかった。永遠に美しいままで、出てほしかった。そうなると、現実に生きている彼女は、むしろ「ニセ者」だよね。年をとって、おばあちゃんになるなんて、「スター」じゃないよ。

(3)「もう一人の自分」が遠い世界で活躍できちゃう

そこまで大胆でなくても、部分的な修正はもう、かなりしている。

〈実際、1997年の「コンタクト」では、ロバート・ゼメキス監督がフィルム撮影後、ジョディ・フォスターの「眉の動き」をCGで若干修正している〉

今はこの位だが、これからはどんどんやられる。

〈最近では、俳優やミュージシャンたちは、CGに翻弄されるというより、むしろ、自分たちに都合よく利用している。彼らはCGエンジニアを使って、ビデオに収録された自らの顔や体型を美しく修正している〉

ズルイやね、これは。そういえば、本に出ている「著者紹介」ゃ講演会の「講師紹介」でも、10年か20年も昔の写真を使ってる人がいる。特に女性だよ。これもCGの修正のようなもんだ。いかんだろうが。

さて、それでは、もっと凄いバーチャル体験の話だ。〈過去〉や〈未来〉に行くだけではない。遠く離れた所にいる孫と遊んだり、あるいは、ライオンと触れ合って遊ぶことが出来るのだ。「遠隔操作ロボット」を使って、「もう一人の自分」がそこに行くんですよ。ドッペルゲンガーのようですね。

そうですね。ゲームセンターで、ゴルフ、バッティング、ボーリングがありますね。クラブを振ると、画面と連動していて、ボールが飛ぶ。あんなものをイメージしてもいいですね。では、こっちはさらに、「現実的」です。自分の動作で、遠くにあるロボットを動かすんです。それも自分が動くように。
これは、「アール・キューブ」（Realtime Remote Robotics）と呼ばれるアメリカのプロジェクトなんです。

〈ヴァーチャル・リアリティ技術によって、ロボットの感覚器をとおして入ってくる情報をリアルタイムに、居ながらに遠隔操作しようというものだ
たとえば、「動物とのコミュニケーション」。さらに、「ロボットを介して孫の愛情を感じる」ことなどだ。まず、一番目だ。ヘッド・マウンテッド・ディスプレイをかぶり、手首足首の付け根にリングをつける。すると、はるか遠くにいる雌ライオンのロボットの感覚がフィードバックされ、ロボットの目に映り聞こえ、触れる感覚を得ることが出来る。
四つ足ではいずり回る人間の眼前に雌ライオンが現われれば、ともに愛をささきやきあうことも可能だ〉

と説明されている。もう一つは「孫の愛情」だ。孫の男の子が、家の中の「アール・キューブ」

装置の前で肩をとんとん叩く格好をする。すると、遠くに住んでいるおばあちゃんの家のロボットが実際に肩を叩くんです。ロボットが叩いてるんですが、本当は、遠く離れた孫が叩いてるんですね。「アール・キューブ」を使って。

〈家庭内のパソコンに、パーソナルロボットがコンピュータの端末機器のように接続され、インターネットを通してあやつったり、また、操作者の目となり耳となって環境を認識し、分身のように行動する日が来ることが予想される〉

そうなんですよ。自分が「もう一人」いて、遠くのおばあちゃんの肩を叩く。又、アフリカに行って、トラやライオンと直にたわむれたりも出来る。（そのうち、デモゃビラ配りも、ロボットがやってくれます。捕まったって、ロボットだからいい。何なら、逮捕されたら即、自爆するようにしてもいい。こうなったら警察も怖いね。だから警察官もロボットになるよ）
そうすると、遠距離恋愛の恋人同士や遠く離れた別居夫婦の〈性の問題〉も一挙に解決ですね。でも、ロボットの方に心が移ってしまい、新たな「三角関係」が生まれるかもしれません。だから我々、別居夫婦は気をつけないといけません。

そうなんです。以前の生徒から、こんな年賀状をもらったんです。
「毎週HP見ています。まるで別居婚している妻へ定期報告している様な書きぶりが面白いです」
ギクッとしましたね。勘がいい生徒だったんです。バレたかな、と思いました。やはり分かりますかね、ウーン。別居婚の妻への報告になってますか。確かにそんな書き方かもしれません。

最後に、この本の著者・歌田明弘の言葉です。

〈インターネットのようなデジタル空間の先に動かすことができる「もう一人の自分」がいることになる。遠隔ロボットはまぎれもなく自分の身体の延長であり、それと同時にどこにでも行ける「歩く感覚器」である。「もうひとつの自分」を所有するにいたった人間は、自分が「いま、ここ」で日常生活を送りながら、別の空間にいる感覚を得られる。さらにその空間で活動することも可能になってくる〉

【おまけ】

現実だってバーチャルです。日本では、バーチャルをよく「架空の」とか、「虚構の」と訳しますが、これは違います。元々、バーチャルはバーチュ（virtue）の形容詞です。virtueは〈徳〉と訳されてますね。その物をその物としてならしめている本来的な力という意味です。
「仮想敵国」をうっかり、「virtual enemy」と訳すと深刻な外交問題になります。「友好国のように振る舞っているが、ほんとうの敵」の意味になります。virtualは〈実在〉〈その本質〉なんです。
「仮想敵国」と言いたい時は、「supposed enemy」と言います。この部分は舘ススム（ネットでは使えない漢字で「日」へんに「章」）の『バーチャルリアリティ入門』（ちくま新書）に書いてました。読んだら面白かでしょう。

【さらに、おまけ】

先日、高円寺の駅構内でDVDをいくつか買いました。昔の映画が500円で売ってます。その１本が「オズの魔法使い」です。どんな話か知らなかったから、見たのです。結構、思想的な話でした。女の子が、ブリキ男や、ワラ男、ライオン男を従者にして旅を続けます。桃太郎みたいです。従者は「私は心がない」「脳ミソがない」「勇気がない」と嘆きますが、そんなものはなくっていいんです。「持ってる」と思ってる人だって、錯覚してるだけです。なかなか文明批評です。そして、悪い魔女を倒して家に帰ります。わが家がやはり一番です。

「青い鳥」も、外に幸せを探したけど、家にあったという話ですね。「子供は親のもとにいるのが一番」と教えるお話です。兄と妹の近親相姦が一番、という解釈もあります。それを拒否されたので予備校生の兄はタレント志望の妹を殺したのです。そんな〈解釈〉もあります。　そう、最近の渋谷の歯科医師の兄妹の事件です。「週刊新潮」では、「亜澄（あづみ）さんは近親相姦の恐怖におびえていた」と出ていました。昔話は本当は残酷ですが、現実の事件はもっと残酷です。そして、バーチャルです。

それにしても、又しても、「ア行殺人事件」です。去年殺された女性も、あゆみ、あやか、あずみ…と全て「ア行」です。何故でしょうか。そのあおりで、子供に「ア行」の名前をつける親は激減したそうです。

【だいありー】

(1) １月９日（火）券をもらったので国立劇場の「梅初春五十三驛（つぎ）」を見る。国立劇場は創立40周年だ。そうか、三島事件は37年前。その１年前に、この国立劇場の屋上で「楯の会」がパレードをやったのだ。三島が国立劇場の理事だったから出来た。今はとてもそんなことは出来ん。事件後、「屋上」は「封印」されたままだ。見てみたい。夜、柔道。

(2) １月10日（水）７時から一水会事務所。打ち合わせと、新年会。今年は「一水会35周年」だ。いろんな企画を考えているようだ。

(3) １月11日（木）図書館。

(4) １月12日（金）図書館。

(5) １月13日（土）仕事の打ち合せ。

(6)1月14日（日）外国の人に取材された。

【お知らせ】

(1)今出ている「週刊新潮」（１月18日号）の「墓碑銘」に田中義三さんが出ています。木村三浩氏や僕もコメントしています。



元・日大全共闘議長、秋田明大さん（左）と。詳しくは『創』（２月号）

(2)「創」（２月号）の私の連載では「小日本主義」について書きました。日大全共闘の秋田明大さんに会った話も書きました。

(3)「月刊タイムス」（２月号）には野村秋介さんの「石川カメラマン救出事件」。それに、「三島由紀夫事件簿」から、「弘前大学教授夫人殺人事件」について書いた。この真犯人は三島事件に衝撃を受けて自白している。知られざる「三島事件・外伝」だ。月刊タイムスは530円。大きな本屋にはあるが、tel 03(5269)8461。FAX 03(5269)8460

(4)1月17日（水）「フセイン大統領追悼の夕べ」。午後7時。高田馬場のリサイクルセンター。ぜひ、ご参加下さい。

(5)１月17日（水）小林よしのりさん責任編集の『わしズム』発売です。「愛国心と愛郷心」の特集で、座談会に私も出ています。なかなか面白いテーマで、話も盛り上がりました。

(6)１月19日（金）7:00p.m.からネーキッドロフトで若き民族派の人々が集まって、「男たちの国防論」。「義勇軍議長・針谷大輔が斬る！」。針谷氏の他に、舟川孝、丸川仁、木村三浩氏など民族派の若手論客が結集します。ぜひ聞きに行って下さい。

(7)１月20日（土）から26日（金）高田馬場の早稲田松竹で、ソクーロフ監督の「太陽」が再上映されます。併映は「ヨコハマ・メリー」です。



田中義三さんと（タイ・チョンブリ裁判所で）

(8)１月22日（月）７時から一水会フォーラム。高田馬場のホテルサンルート。中村粲先生で「東京裁判と興亜観音の思想」です。

(9)２月４日（日）「田中義三さんを偲ぶ会」。１時からお茶の水の総評会館の予定です。知ってる人も知らない人でも、一人でも多くの人にいらしてもらいたいと言ってます。

(10)２月10日（土）午後７時から、中野ZEROホール。「教育に自由を！」の集会。小森陽一さん（東大教授）と私の討論があります。

(11)２月27日（火）慶応大学でやった講演が本になります。『連続講義　東アジア・日本が問われていること』（岩波書店・2100円）です。

(12)３月６日（火）大浦信行監督の映画「9.11～8.15　日本心中」が大好評だったので、再度上映されます。ポレポレ東中野です。それで、上映記念トークも又、行われます。この日、７時からの最終回の後、監督と私のトークがあります。

【お知らせ２】

1月15日（月）発売の「週刊朝日」に大型特集「ニッポンの右翼」が出ています。4週連続の予定だそうです。読んでみて下さい。

HOME

今週の主張

バックナンバー

数字は美しい・数字は神である

今週の主張１月22日

(1)「日本以外全部沈没」で全ての問題は解決！

数字は美しい。完璧だ。人生のように曖昧ではない。だから人生は数字に嫉妬する。数字のように美しくなろうとする。

仕事は9時から5時まで8時間、と決めてるのもそうだ。体を鍛えるのでも、「疲れるまでやろう」なんてことはない。「10キロのダンベルを10回×３セットやる」と数字を決めてやる。柔道で「打ち込み稽古」をする時も、10本ずつ5回とか決めてやる。受ける相手は、「1、2、3…」と数を数えてやる。

道を歩く時も、無意識のうちに頭の中のカウンターが勝手に作動して、歩数を数えている。「今日は５千歩しか歩いてない。もう少し歩けよ」とカウンターが命じる。「はい分かりました」と私は従う。主人は数字なんです。

1月10日に一水会の新年会に行った。木村ゼミの若者Ａ君は、「月に15冊読んでる」という。立派なノルマだ。「そのうち1月は戦後史、１冊は時局的なもの、１冊は民族派思想史…」と、必須文献を決めて読んでるという。偉いですね。もう一人のＢ子さんは「月10冊」のノルマだという。「仕事が忙しくてノルマが危ない時は新書ばかり読んで何とか達成しようとしてる」という。

「何もそれほどまで…」と思う人もいるだろうが、ノルマを達成しようというヤル気・根気・イワキが大切なのだ。ノルマ（数字）の中でもがき、格闘する中で、自分にピッタリ合う美しい数字も見つかる。美しい読書法も見つかる。

私は月に30冊読んでいる。あっ去年の統計と「月平均」を出さなくてはならんな。月に20冊は図書館の本を読んでるし、あとは、もらった本、新しく買った本、万引きした本（いや、今はやっとらん）で、10冊は読むさ。だから30冊なんてそんなに難しい数字ではない。しかし、私にとっては「美しい数字」だ。

それに、映画や芝居も見ている。ビデオは月に18本見ている。中野図書館から月２本借りている。今は、大江健三郎の「文学再入門」を見ている。それに新宿のTSUTAYAで１回に4本借りると、１週間で返すから、月に16本だ。主に洋画だ。いい映画は洋画だよ。でも邦画でも面白いものがある。「嫌われ松子の一生」なんて、３，４ヶ月前に上映したのに、もうビデオになっている。「日本以外全部沈没」もそうだ。早い。だから無理して映画館で見ることもないや。と思っちゃう。

「日本沈没」は小松左京の原作だ。そして、映画化された。最近又、映画になった。筒井康隆はそのパロディ版を書いた。「日本以外全部沈没」だ。かなり前に書いたが、去年の秋に映画化され、もうビデオになっている。面白かったね。見てみんしゃい。日本だけを残して世界中が沈

む。だから、アメリカ、ロシア、フランスの大統領も日本に亡命する。中国、韓国、北朝鮮のトップも亡命する。国連総長も…。こうなると、日本が世界だ。日本が国連だ。八紘一宇が実現しちゃったのだ。

日本の首相は大いばりだ。「安泉首相」だったかな。外国の大統領や国連総長を怒鳴りつけている。「おい、国連！」「国連は何をしてたんだ！」と苛める。三人の日本人が、苛めている。国連総長は堪りかねて叫ぶ。「何で君たちまで日本と一緒になって国連を苛めるんだ。君らは日本に侵略された歴史を忘れたのか！」

相手は日本人3人と思ってたら違ったんですね。一人が日本人、あとは中国人と韓国人だ。顔が似てるから分からへん。それに対して、二人は言うんですな。「侵略された歴史といったって…。その侵略された国土が沈没したんですから」「そうです。全ては水に流しました」

ヒャー、凄いギャグですね。水没したら国境紛争もないし、歴史観の対立もないんですね。自衛隊の海外派遣もない。大体、行くべき「海外」はない。自国だけを防衛していればいい。いや、自衛隊なんてなくていい。攻めてくる国はないんだし。国内の治安を守る警察だけでいい。９条改正論議もなくなる。9条は守られ、護憲派が勝利したわけだ。

(2)「友愛数」と「完全数」。数字も恋をするのかな

いかん、いかん。こんな沈没映画に沈没していてはいかん。映画「博士の愛した数式」の話じゃよ。これが又面白かったね。「美しい数字」のとりこになりましたね。



映画になった「博士の愛した数式」の原作（新潮文庫）

博士の家に新しい家政婦が来る。家政婦の誕生日を聞くと2月20日だという。たまたま博士が腕にはめていた時計の裏側には「学長賞No284」とあった。「これは凄い！」と博士は叫ぶ。この「220」と「284」は、とても美しい関係だという。そして、黒板に書いてみせる。「220」の約数は1，2、4、5、10、11、20、22、44、55、110だ。この約数の和は284だ。一方、「284」の約数の和は220になる。

だから、220と284は「友愛数」という。めったにない組合わせだ。博士は言う。

〈友愛数だ。滅多に存在しない組合わせだよ。フェルマーだってデカルトだって、一組ずつしか見つけられなかった。神の計らいを受けた絆（きずな）で結ばれあった数字なんだ。君の誕生日と僕の手首に刻まれた数字が、これほど見事なチェーンでつながっているなんて〉

この「友愛数」を最初に見つけたのはピタゴラスだ。紀元前6世紀の話だ。そんなに昔から数字はあったのか。博士は言う。

「この世界が出現する前からもう数字は存在していた。気が付いた時には、もう既にそこにあったんだよ」

じゃ、数字こそが〈神〉だったのかもしれない。だから、そこからは逃げられない。神を否定する人はいても、数字を否定する人はいない。じゃ、数字は神以上だ。数字が人間をつくり、神

をつくった。万物の想像主だ。

さて、「友愛数」だ。220と284以外には？　君達も見つけてみんしゃい。なかなか無いよ。次に小さい友愛数は1184と1210だという。いきなり四桁になっちゃう。
さらに博士は面白い話をする。28という数字は美しい。神秘だ。何と、28の約数を足すと、28になる。

28＝1+2+4+7+14

これを「完全数」というのだそうな。一番小さな完全数は6。6=1+2+3だ。じゃ、いくらでもあるのかと思うと、違う。6，28の次は496だ。その次は8128。その次は33550336。次は8589869056。数が大きくなればなるほど、完全数を見つけるのは難しくなる。

博士は数字のことなら何でも分かる。何せ、大学で博士号をとり、長く、数学の先生をしていた。いろんな発見もしたし、大論文も書いた。しかし、博士は病気なのだ。1975年に交通事故に遭い、記憶障害になる。1975年以前の記憶はある。数学についても万全な知識と記憶はある。しかし、1975年以降の記憶がない。いや、すぐに忘れてしまう。80分しか持たないのだ。
だから、「僕の記憶は80分しか持たない」と背広の袖にメモを留めておく。80分のビデオが頭の中にあるだけだ。他に、「家政婦が来る」「ごはんを何時に食べる」…と、メモを留めておく。
テレビの「世界ビックリショー」でも、こんな病気の人が出てますよね。異常な記憶力を持ってるが、今現在の記憶はどんどん無くなってゆく。用があって台所に行くと、もう忘れている。何の為に台所に来たのかを。だから、台所に行こうと思った時に、「顔を洗う」とか、「食事をする」とかメモに書いていく。だから、メモだらけになる。

そんな天才でもあり病人でもある博士のもとに家政婦が来る。記憶が80分しか持たないから大変だ。毎日、新しい家政婦と会うようなもんだ。「ほう、新しい家政婦さんですか」「足のサイズはいくつかな」「誕生日は？」と毎日、毎日、聞かれる。

(3)僕らだって、「博士」に会ってるんだ

「昔のことは覚えている。最近のことは分からん」ということは実は、我々にだってある。三島事件（1970年）や、山口二矢（1960年）の事件は、よく覚えている。あの時、どこでテレビを見て、その時、誰がいて、何を喋ったか…と。
ところが、昨日、何を食べたか。先週誰に会ったかを思い出せない。台所に行って、はて何のために来たんやろ、と思うこともある。だから他人事ではない。
そこで、ハタと気がついた。と、ここでトイレに行ったりしたら忘れるので、すぐに書き記しておく。これは学生運動家の話だ。博士は1975年で記憶がストップしたが、運動家は1970年でストップしている。1970年の春には「よど号」事件があった。秋には三島事件があった。そこで「全て」が終わっている。
その後20年、刑務所に入った人がいるが、今の記憶がない。今は縄文時代だと思っている。昨夜、塩サバを食ったことも忘れている。しかし、1970年以前の記憶は鮮明だ。革命の話なら何時間だって喋る。
これは右翼の運動家もそうだ。100人の「楯の会」の人々もそうだ。三島事件のことは、まる

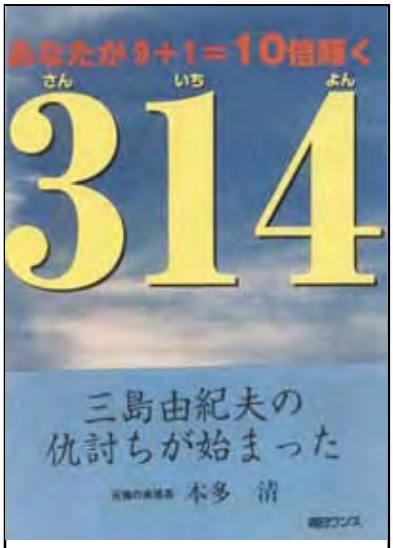
で昨日のことのように覚えている。何時間でも喋れる。しかし、昨日のことは忘れている。1970年11月25日。三島事件。この日の衝撃が余りに大きかったので、それ以降の記憶は吹き飛んだのだ。

もっと怖い話がある。「SPA!」で連載してた時、「楯の会」の人に取材して書いた。持丸博、伊藤邦典、本多清…だ。初代学生長は持丸博、二代目は森田必勝だ。そして三代目は本多清の予定だった。

だから三島は、本多にあてて「遺書」を渡した。彼個人への遺書。そして「楯の会」全員に対する遺書も彼に託した。

本多清は、旧姓・倉持清だ。結婚して本多になった。結婚式は三島事件後だ。三島は、仲人を引き受けていた。行けないことは分かってた。だが、断わると決起を勘ぐられる。だから引き受けた。そのことも含め、三島は「遺書」の中で、本多に謝った。

謝られた本多もいたたまれない。「なぜ、連れて行ってくれなかったのか」と嘆き、苦しんだ。



「楯の会」本多清氏が書いた衝撃の本『314』

彼は、2004年に本を出している。「博士」になったのだ。〈数字〉の神秘についての本なのだ。嘘だと思うなら、読んでみたらいい。本屋になかったら、アマゾンで買いなさい。

本多清『314』（毎日ワンズ）という本だ。1500円だ。タイトルからして、数字の神秘だ。「さんいちよん」と読む。この数字に三島事件の謎を解く鍵があるという。又、2.26事件、オウムサリン事件、阪神大震災などに関する神秘の数字についても詳しく書いている。

『314』という題だけでは分からないので、サブタイトルには「三島由紀夫の仇討ちが始まった」と書かれている。さらに帯には…。

〈なぜ、私は三島由紀夫という人から遺書を貰う事になったのだろう。
この32年、私の頭から消えることはなかった〉

この衝撃的な本が出た頃だったと思う。本多氏に会った。「SPA!」の取材だ。その時のことを思い出そうと、今、「SPA!」のFILEを見ている。これは単行本には入ってない。「夕刻のコペルニクス」は３巻まで出てるが、その後の60回分は本になってない。惜しい。（自分で作ろうかな。パソコンで。自分一人のためだけの本だ）。

「本多氏の巻」は４回ある。最後は、「今明かされる『豊饒の海』全４巻をめぐる謎」になっている。

全4巻を通し、「本多繁邦」が出て来る。生まれかわりの主人公４人を見守る「語り部」だ。本多清と関係があるのか。偶然だと思おうとしたが、どうも思えない。又、松戸という運転手が小説には出て来る。本多清が住んでたのは松戸だ。又、「春の雪」の主人公は松枝清顕だ。これは、「全ての謎を倉持清が顕（あきら）かにするという意味なんです」と言う。それに気付いて生前、「『豊饒の海』第5巻は僕が書きます！」と三島に言ったそうな。三島も驚いたことだろう。感動したのか。いや、「それだけはやめてくれ」と言われたそうな。



「週刊SPA!」に連載していた「タコペ」より

そうだ。久しぶりに会った本多清は、初めに僕にこう聞いたんだ。「鈴木さんの誕生日はいつですか？」。そして、〈数字の神秘〉について謎解きをしてくれた。まるで、「博士」のようじゃないか。さらに三島由紀夫との関連性についても…。

ここまで読んできたあなた。「そんな偶然はないよ」と思うかもしれない。小川洋子の『博士の愛した数式』（新潮文庫）を読んで、無理矢理、「楯の会」に結びつけてるんじゃないか…と。

違うんです。少しでも疑うのなら、小川洋子の小説を読んでほしい。そして、「タコペ」の連載を読んでほしい。単行本にはなっていないが、図書館にはある。そして原物を見てほしい。私も、「SPA!」の原文そのままを引用して紹介しておこう。こう書かれている。

〈…さらに倉持は、いろんな数字を書き並べて三島事件の謎解きをしてくれる。30年間、毎日考えてたのだ。三島や森田の生年月日、決起の日、本の出た日…と。僕の生年月日や大学入学の日、サンケイ新聞入社の日なども書いてゆく。言霊学ならぬ数霊学だ。

「ほら、鈴木さんと三島先生は生命体の半分は合致してるんです」

でも、半分合致したらどうなんの。俺も世界的に有名な大作家になれるのか。それとも、最期は切腹なのか〉

三島と私は〈友愛数〉なのでせうか。不思議ですね。あの時は呆気に取られて、よく聞いてなかったけど、今度会って、キチンと詳しく聞こう。三島だけが〈完全数〉で私なんかは〈虚数〉だと思いますがね。



これも「週刊SPA!」に連載していた「タコペ」より

【附録】

映画「オズの魔法使い」について先週書きました。この映画については、いろんな人がblogに書いてますね。詳しいですよ。だから、それらを踏まえて、〈続編〉を、おずおずと紹介しませう。1939年の映画ですね。70年以上も前ですが、凄いですね。

主人公ドロシーのお供は、犬を除けばかかしと木こりとライオンだ。わらで出来たかかしは「脳みそ」がないと嘆き、ブリキの木こりは「心」がないと嘆く。ライオンは「勇気」がないと嘆く。ドロシーは何としても家に帰りたい。

それらの「願い」をかなえてもらいたいと旅を続け、オズの魔法使いのとこへ行く。魔法使いは彼らの「願い」をかなえてやる。数字の魔力を使って。じゃなかった。これじゃ「博士」か本多君だ。〈言葉〉を使って、「願い」をかなえてやる。この言葉が実に思想的なんじゃ。

「脳みそ」が無いと嘆くかかしにはこう言う。「脳みそなんて誰だって持っているよ。虫けらだってね。私の故郷には、大学を卒業した学士たちがおる。彼らの脳みそだって君の脳みそと変わりはしない。君が持っていないのはただ一つ、卒業証書さ。さあ、私がこの証書をあげよう」

ウーン、これは深いですよね。事実その通りじゃないですかね。「勇気」がないと嘆くライオンにはこう言う。

「君は誤解をしてるんだ。危険を避けることは臆病なのではなくて、知恵があるということなんだよ。私の故郷には英雄と呼ばれる者たちがおる。その英雄の勇気だって、君の勇気と変わらないさ。君が持っていないのはただ一つ、勲章だよ。さあ、この勲章をあげよう」

これも真理ですね。まるでイエス・キリストの言葉か、芥川龍之介の『侏儒の言葉』のようだ。たとえば芥川はこんな事を言っている。

軍人は小児に近いものである。そのゆえに軍人の誇りとするものは小児のおもちゃに似ている。緋縅（ひおどし）の鎧（よろい）や鍬形（くわがた） の兜（かぶと）は成人の趣味にかなったものではない。勲章も----わたしには実際不思議である。なぜ軍人は酒にも酔わずに勲章を下げて歩かれるのであろう？〉

では、「オズの魔法使い」に戻る。「心」がないと嘆く木こりにはこう言う。

「心なんてない方が楽でいいよ。心とは複雑なものなんだ。私の故郷には善良な人と呼ばれる者たちがある。彼らの心の広さも君と変わらないよ。 君が持っていないのは、感謝の印だけだ。私の感謝の印として、これを君にあげよう。心の評価は、どけだけ人を愛するか、そしてどれだけ人に愛さ れるかということで決まるんだよ」



さらに他の人のblogでは、この映画は「実はきわめて政治的な映画だ」という人もいた。これは全く知らなかった。何と、これはアメリカ大統領選挙の話だという。1890年代、アメリカには、人民党という政党があり、『オズの魔法使い』の作者ライマン・バームは、1896年のアメリカ大統領選挙で人民党の候補ブライアン氏が敗れたことから、この選挙のことを童話にしたのだという。「心のないブリキの木こり」は職を失った労働者。「脳のないかかし」は政治に無関心な農民。「臆病なライオン」は大統領候補だった人民党のブライアンを表わすんだそうです。

でも、そんなことは知らなくても、純粋に〈童話〉として楽しめます。又、書くようになった動機や時代背景を超えて、世界中に通用する〈童話〉になったのです。だから、「実は…」という話は、気にすることはないでしょう。それよりも、これを読んで、今の私が「何を感じたか」です。それを大切にしたらよいでしょ

う。おわり。

【だいありー】

(1)１月15日（月）ジャナ専の授業が始まる。9:00a.m.から「時事問題」。10:40a.m.から「戦後史」。
　帰り、「週刊朝日」（1月26日号）を買ってビックリした。何と、短期集中連載「ニッポンの『右翼』大研究」。９ページもある。凄いですね。木村三浩氏はじめ、右翼団体の代表たちへのインタビューもある。今までにない画期的な企画だ。ぜひ読んでみて下さい。宮崎学（作家）氏と「週刊朝日」の記者が総力を結集して取材している。４回にわたって連載する。今回は第１回で「言論とテロ」だ。

　15日（月）の夜は５時から、畑中純さん（漫画家）の個展に行く。フランス版「まんだら屋の良太」の出版記念会だ。そのオープニング・パーティで畑中さんと会う。銀座のスパンアートギャラリーで。
　７時半から、青山でシンポジウムの打ち合わせ。

(3)1月17日（水）昼、小林旭コンサートに行く。7:00から「フセイン大統領追悼の夕べ」。高田馬場のリサイクルセンターで。多くの人が集まり、フセイン大統領の冥福を祈り、イラク問題を考えた。
　この日、『わしズム』（冬号・小学館・1000円）が発売になった。これが素晴らしい。〈故郷（パトリ）なき「美しい国」を愛せますか？〉と銘打っている。16日に会った畑中純さんの漫画「まんだら屋の良太」外伝も載っている。「美し村」だ。又、「愛郷心と愛国心」の討論会も。小林さんの他、八木秀次、富岡幸一郎、笹幸恵、そして僕。こんな素晴らしい雑誌の企画に出してもらって光栄だ。

(4)1月18日（木）図書館。夜、スポーツ会館。

(5)1月19日（金）取材。夜、柔道。

(6)1月20日（土）JR東労組第200回記念。政治フォーラム。午後１時半、目黒雅叙園。僕も挨拶をさせられた。

(7)1月21日（日）舟木一夫コンサートを見る。私の青春だ。

【お知らせ】

(1)1月22日（月）午後7時から一水会フォーラム。高田馬場のホテルサンルート。中村粲先生で「東京裁判と興亜観音の思想」です。

(2)2月4日（日）「田中義三さん友人葬」。１時からお茶の水の総評会館。204号室。準備の都合上、参加者は前之園紀男さん tel 03(3929)0959　へお知らせ下さい。との事です。

(3)2月10日（土）午後7時から、中野ZEROホール（小ホール）。「教育に自由を！」の集会。小森陽一さん（東大教授）と私の討論があります。

(4)２月27日（火）『連続講義　東アジア・日本が問われていること』（岩波書店・2100円）が出版。私も書いてます。

(5)3月1日（木）7:30p.m.　ネーキッドロフト。都知事候補の外山恒一氏のイベント。私も出ます。

(6)3月6日（火）ポレポレ東中野。「9・11～8・15　日本心中」の最終回上映（7:00p.m.）の後、大浦信行監督と私のトークがあります。

(7)今発売中の「漫画実話ナックルズ」（３月号）に「反戦ストリッパー・沢口友美物語」が載ってます。原作・深笛義也、漫画・入倉ひろしです。なかなか素晴らしい漫画です。読んでみて下さい。私も登場します。

HOME

今週の主張

バックナンバー

06年度「ノルマ式読書法」の内訳を申請します

今週の主張１月29日

(1)「荒れた学園」の方が皆、勉強してたんだよ

ちょっと遅くなったけど、総計を出してみる。去年読んだ本の総数だ。それと、月平均何冊読んだか、だ。毎年1月の初めに紹介してたが、今年は遅れた。ボヤボヤしてたら２月になっちゃう。急いで計算する。

1月（32冊）。2月（33冊）。
3月（37冊）。4月（31冊）。
5月（34冊）。6月（31冊）。
7月（32冊）。8月（43冊）。
9月（32冊）。10月（40冊）。
11月（40冊）。12月（34冊）。

これが2006年（平成18年）度の私の成績だ。合計すると419冊。それを12で割ると34.9冊だ。これが去年の「月平均読破数」だ。もう一冊読むと、月平均35冊だったのに。ちょっと残念だ。でも、頑張ってやった方でしょう。5月には『愛国者は信用できるか』を出した。それ以来、〈愛国心〉についての原稿、取材、対談、トーク、テレビ出演が多かった。いわば、「愛国イヤー」だった。そんな忙しい中で、34.9冊だ。うん、頑張ったよね。と自分で自分をほめてやった。誰もほめてくれないし。「ペッ！勝手にやってろ」と、どうせ皆は思ってることでしょうし。

「要するにヒマなんだよ、お前は」「そんだけ読んでも全く進歩がねえじゃねえか」と言われるが、まあ、いいでしょう。何も、そんなに〈効果〉だけを求めて読んでるわけじゃない。
産経新聞に勤めていた時から、この月30冊の「ノルマ」は自分に課してきた。だから35年位になるのかな。何とか、ノルマは毎年、達成してきた。去年は、月に40冊以上読んだ「優良月」が３つもあった。8月、10月、11月だ。8月は学校も休みだったし、どこにも遊びに行かないで本を読んでたんだ。10、11月はどうしてかな。多分、IT関係の新書をむさぼり読んだからだろう。
さて、今までは、どれだけ読んだんだろう。そう思って過去の記録を見た。大体、「月平均35冊」位だ。頑張っている。一昨年は433冊。月平均で36冊だ。去年より多い。でも、それにはこだわらない。2003年（平成15年）なんて486冊。月平均40.5冊だ。よほどヒマだったのかと思うが、そうではない。海外に２回も行ってる。大体旅行したりすると、かえって読める。飛行機や新幹線に乗ると、他にやることがない。だから集中して読める。

本を読む為だけに新幹線に乗る。というのもいいな。東京から博多まで5時間位だ。心ゆくまで読める。そして博多の街をぶらついて、喫茶店で本を読む。そして帰る。また、5時間、読める。人には会わない。本の中の偉人とだけ会話する。これは今、最も贅沢な楽しみかもしれない。今度、やってみよう。

そうだ。過去8年間の年間読破数と月平均を紹介しよう。始めは読破数。カッコ中は月平均読破数だ。

2006年（平成18年）＝419冊（月平均34.9冊）。
2005年（平成17年）＝438冊（月平均36冊）。
2004年（平成16年）＝412冊（月平均34.3冊）。
2003年（平成15年）＝486冊（月平均40.5冊）。
2002年（平成14年）＝427冊（月平均35.5冊）。
2001年（平成13年）＝398冊（月平均35.1冊）。
2000年（平成12年）＝435冊（月平均36冊）。
1999年（平成11年）＝461冊（月平均38.4冊）。

気付くのは2003年の断トツぶりだ。486冊。もう少しで500冊だ。凄いね。「月平均40冊」を超えている。もうこの記録は破られることはないでしょう。じゃ、この年はヒマだったのか。時間があり余っていたのか。そんなことはない。２月にはイラクに行った。10日間だ。開戦直前のイラクだ。そして4月にはフランスに行った。ルペン党首の「国民戦線」30周年記念大会に招待され、木村三浩氏と行ったのだ。６日間だ。

又、この年の12月30日には、ちくま新書の原稿250枚を渡している。『公安警察の手口』だ。それで１年近くかけて、書き直したり、ゲラ待ちしてたりして、2004年10月に出た。　とにかく、2003年はメチャ忙しい年だった。そんな年なのに、〈月平均40冊〉を突破したのだ。ヒマだから読めるわけではない。忙しいからこそ読めるのだ。

イラク、フランスに行くので、その準備のため、多くの本を買いあさり、読みまくった。公安の本を書く時もそうだ。〈必要〉に迫られると読むさ。大学の試験の時も、「明日は試験だ」という時は、徹夜して、３冊位、本を読んだ。さらにメモをとり、ノートをとり。中にはカンニングペーパーを作る奴もいた。いや、私はしませんよ。

ともかく、〈必要〉ならば読むんだよ。イラク、フランスに関する本は大量に読んだし、又、旅行中は本を読める。飛行機に乗ってる間、空港で待ってる時間。それがやたらに長い。その時に、ひたすら読みましたね。旅行だから大きい本は持っていけん。文庫本を20冊位、カバンに入れて読みましたよ。

思い出した。小田実が言ってたな。学生運動が激しくて、授業も出来なかった時の方が、学生はよく勉強してたし、〈学力〉は高かったと。つまり、学園が「荒廃」してた時の方が、学生は本を読み、勉強してたんだ。ストライキがあって、授業はない。毎日、デモや集会ばかりだ。僕らは全共闘と毎日、論争し、乱闘していた。その時の方が、本を読んでいたんだ。

要は、社会に対し、時局に対し関心が高かったし、問題意識を持ってた。又、本を読まないと、ついて行けなかった。知的雰囲気が満ち満ちていた。「レーニンの『国家と革命』を読まにゃいけんよ」「やっぱ高橋和巳だよ。エッ読んでねえの？」といった知的会話が毎日飛びかっ

ていた。今の学生のように、「ビミョー」「フツー」「ナクナイ？」の三語しか使えん奴らとはちゃいまんねん。

あの頃は、私も読みましたよ。その頃の話は『行動派のための読書術』（長崎出版）に書いてある。まァ、古本屋にはあるだろう。ネット古書店で探して読んでみなせえ。それに、思想全集、哲学全集、文学全集を集中的に読みましたね。よく分からんけど読んだ。その時の「蓄積」というか知的「貯金」で今あるようなものだ。体力があったからかもしれん。今ならあんな難しい全集なんて、とても読めん。



「わしズム」（07年冬号）

(2)この年は「三島全集」を読破した年として鈴木史に残るだろう

さて、現在の話に戻る。いつまでも学生時代の話をしてはおられんち。去年の話だ。

去年も忙しいから読めたんだ。『愛国者は信用できるか』を出し、１年で４刷か。テレビにも随分出た。地方にも随分行った。そうか、それが大きいかな。仕事で大阪によく行ったが、自費で新潟、熊本などにも行ったし、それで、読めた。別にノルマのために新書ばかり読んだわけじゃない。

画期的なことは「三島由紀夫全集」を読破したことだ。これは鈴木史の中でも記録に残る壮挙だろう。それに、「新潮現代文学」「日本の詩歌」などの全集を読破した。

「三島」や「新潮」などは別に、この年だけで読んだのではない。その前年、前々年からの数年に亘る〈大プロジェクト〉なのだ。このプロジェクトは完成したといっても、金が入るわけじゃない。他人が誉めてくれるわけでもない。誉めてくれるのは私だけだ。そう考えると淋しい。虚しい。でも、人生にはそういう虚しい努力が必要なんですよ。

では、全集以外ではどんな本を読んだのでせうね。藤原正彦『国家の品格』、佐藤優『国家の崩壊』、河上徹『アカ』、村岡到『社会主義はなぜ大切か』、星川淳『魂の民主主義』、井上ひさし『円生と志ん生』、古川隆久『皇紀・万博・オリンピック」。

保坂正康『あの戦争から何を学ぶのか』（講談社文庫）。うん、この人の本は随分、読んだな。この人は、阿部勉（楯の会）に紹介されて会った。5.15事件、橘孝三郎、三島由紀夫に関心があり、その関係の本も出している。皆も読んだらいいでせう。

保坂さんの「『特攻』と日本人」（講談社現代新書）も良かったね。〈特攻〉については、多くの本を読んだけど、これが一番いい。説得力がある。単なる「特攻ベタほめ」本ではない。斎藤貴男『人間選別工場』（同時代社）。この人の本は、ほとんど読んでる。社会批判は鋭いし、過激だ。

板垣恭介『明仁さん、美智子さん、皇族やめませんか』（大月書店）。「天皇制反対」の本の

ようなタイトルだが、違う。愛情あふれる本だ。僕は読んで、勉強になったし、心を打たれた。
渡部昇一、中川八洋『皇室消滅』（ビジネス社）。女性天皇になったら皇室は消滅だ、という本だ。この手の激しい本も、随分と読んだな、去年は。　東野圭吾、島田荘司、法月綸太郎などの推理ものを随分読んだ。コナン・ドイル、アガサ・クリスティを初め、世界中の推理ものも読みあさった青年時代もあったっけ。乱歩、横溝、高木彬光、森村誠一も読みあさったわさ。

去年の話を続ける。「檀一雄全集」も読んでるね。『夕日と拳銃』『火宅の人』などだよ。葦津珍彦先生の本が復刻されたんで読んだ。『大アジア主義と頭山満』『日本の君主制』『近代民主主義の終末』『土民のことば』『永遠の維新者』だ。今読んでも啓発されることが多い。葦津先生については鶴見俊輔が『回想の人々』（ちくま文庫）で書いている。とてもいい文だ。
丸山明日果『歌声喫茶「灯」の青春』（集英社新書）なんて本も読んでる。学生時代、新宿には「灯」「カチューシャ」という歌声喫茶があった。一世を風靡しとった。コーヒーを飲みながら、ロシア民謡、労働歌、革命歌をうたっていた。夢があり、青春のあった時代だよ。学生運動もあったからだろう。
吉見俊哉『博覧会の政治史』（中公新書）も面白かった。藤夏子『銀座ママの本』（河出書房新社）という本も読んでる。このHPでも紹介したよね。
吉田よし子『マメな豆の話』（平凡社新書）も読んでる。豆は「畑の肉」だ。豆さえ食べてれば人間は大丈夫だ。だから健康のことを「マメだね」と言う。マメを食べてる人は思想も正しい。日本人の〈原型〉である右翼は皆、マメ顔だ。その反対に左翼は皆、ジャガイモ顔だ。ということを書いてたのかな。いや、それはこの本を読んで感じた私の理論だろう。そうか、『マメとジャガイモ』という本を書こうかな。サブタイトルは「日本の右翼と左翼」だね。「世界の右翼と左翼」でもいいかな。世界的規模で考えてもこの「鈴木理論」は当てはまるでしょう。
星新一『夜明けのあと』（新潮社）。これはこのHPでも紹介しましたが、とてもいい本です。庶民のサプライズな歴史です。
渡辺恒雄・若宮啓文『靖国と小泉首相』（朝日新聞社）も勉強になった。その他、面白かったのをアトランダムに並べてみるか。

(3)年末に読んだ渡部又兵衛さんの本がよかったね

近藤史人『藤田嗣治』（講談社）
小熊英二『日本という国』（理論社）
吉田進『ラ・マルセイエーズ』（中公新書）
（これは凄い本だ。読んでみんしゃい。近々HPでも書いてみたい）
ジェームズ三木『憲法はまだか』（角川書店）
李御寧（イー・オリョン）『ジャンケンの文明史』（新潮新書）これについても紹介しようと思っていた。いい本だ。
中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』（岩波新書）
山岸哲『オシドリは浮気をしないのか』（中公新書）
小松左京『SF魂』（新潮新書）
井上宏生『日本人はカレーライスがなぜ好きなのか』（平凡社新書）

山崎浩一『危険な文章講座』（ちくま新書）

武村政春『ろくろ首の首はなぜ伸びるのか』（新潮新書）

島泰三『親指はなぜ太いのか』（中公新書）

山田恒夫『ザリガニはなぜハサミをふるうのか』（中公新書）

爆笑問題『爆笑問題の戦争論』（幻冬舎）

『梨本宮伊都子妃の日記』（小学館）これも去年読んだのか。新書ばかりじゃなく、カタイ本、ぶ厚い本も読んでる。しかし、 このHPで紹介したものは抜かしてるから、「なぜなぜ本」が多いように思えるんじゃな。

岡嶋裕史『暗証番号はなぜ４桁なのか？』（光文社新書）

富岡幸一郎『新大東亜戦争肯定論』（飛鳥新社）

竹田恒泰『語られなかった皇族たちの真実』（小学館）

上田篤『一万年の天皇』（文春新書）

佐高信『黄沙の楽土』（朝日新聞社）

浅羽通明『ナショナリズム』『アナキズム』（ちくま新書）

小林英夫『「昭和」をつくった男』（ビジネス社）

田嶋陽子『もう「女」はやってられない』（講談社）

穂坂邦夫『教育委員会廃止論』（弘文堂）

ボズウェル『サミュエル・ヂョンスン伝』（上・中・下）（岩波文庫）これもいい本だね。読むのに苦労したけど。オーマイニュースのHPで書いた。

高宮壇『芥川龍之介の愛した女性』（彩流社）

若井敏明『平泉澄』（ミネルヴァ書房）

切通理作『恋愛論』（角川書房）

砂川幸雄『大倉喜八郎の豪快なる生涯』（草思社）

北田暁大『嗤う日本の「ナショナリズム」』（NHKブックス）

荻原雄一『靖国炎上』（夏目書房）



渡部又兵衛さんの本

そして年末ギリギリに読んだ感動的な本。「ザ・ニュース・ペーパー」の渡部又兵衛の『お笑い芸人・糖尿病と二人連れ』（グラフ社）これは素晴らしい、感動的な本だった。〈お笑い〉に命をかけている。〈お笑い〉とは何かを語り、実践する。

「重度の糖尿病を患いつつ舞台にすべてをかけ、笑いを紡ぎ続ける。芸人魂の本音を語る」と帯には書かれてる。インシュリン注射、網膜病、人工透析、左足膝下切断…。そんな凄い体験をしながら、それらを〈お笑い〉の中で語る。笑いながらも、感動し、涙した。去年読んだ本で一番感銘を受けた本だ。年末ギリギリに読んだので、「今年の三冊」には入れられなかったけど。読んでみたまえ。読んでつまらなかったという人がいたら私がお金を返します。それも倍返しで。それだけ自信をもってすすめられる本です。

では終わる。気になった本、面白かった本をあげていったらキリはない。去年読んだ419冊全部を紹介しなくちゃいけん。うん、それもいいな。でも、中にはエッチな、いやらしい本も読んでるから、それは出来ん。清く正しい読書人の私のプライドにかけて出来ん。『熟年性革命報告』『老年期の性』『「人妻」の研究』『野獣の性生活』を読んだなんて、とても書けん。わ、書いちゃったか。これ以上書くと、さらに何を書くか分からんのでやめる。

では皆さんも頑張って読んでちゃぶだい。又、これはオモロかったよ、という本があったら、BBSで紹介して下さいませ。

【グリコのおまけ】



ニューヨークで

先週、ニューヨークに行ってきた。寒かった。街を歩いてたら、変な外人がいた。あっ、こっちが「外人」なのか、ニューヨークじゃ。奇妙なTシャツを着ている。「キスさせろ、俺は日本人だ」。なんじゃい、これは。

そうか。アホな日本女性がこれを見て、「いいわよ、アメリカ人なら」とさせるんやろ。それを目的にこんなTシャツを着やがって。だから勇気をもって声を掛けた。勿論、英語で。「日本人をバカにしとる。許せん！」と思ったけど、心とは裏腹に、「いいTシャツだね。どこで買ったの？」と自虐的に聞いちゃった。ニューヨークの何とかという店だという。「写真撮っていいですか？」と許可を得て、撮った。でも、日本人のふりをしてキスをせがむなんてセコイ野郎だ。あるいは、アメリカ人のジョークか。そんで、アメリカ人ならいいわと、ホイホイ、日本娘は接吻させるんだろう。悔しいな。ついでに俺にもさせろ！

「それで、皆、キスさせましたか？日本娘は」と聞いた。これが一番聞きたかったことだ。「いえ、一人もいませんでした。残念です」ホッとした。でも、本当かな。謙遜して言ったのかもしれん。

と、ニューヨークからのレポートでした。えっ、この外人の後ろのボードに日本語が書かれて

いるって？ニューヨークの和食レストランですよ。それにしては変？　ウルセーなー。自供するよ。日本だよ。高田馬場の「さかえ通り商店街」だよ。でも、入ってすぐ左側の「ニューヨーカーズ・カフェ」なんだ。だから、ニューヨークには間違いないだろうが！

【だいありー】

(1)1月22日（月）ジャナ専の授業。「時事問題」と「戦後史」。全共闘と「よど号」ハイジャックの話をする。偏向した歴史だ。夜7時から一水会フォーラム。中村粲（あきら）先生で「東京裁判と興亜観音の思想----南京事件を考へる----」。とてもいい話だった。次のレコンに講演要旨が載るので、ぜひ読んでほしい。「30万虐殺説」は勿論、ウソだと言う。しかし、決して「南京事件は幻だ」と言うのではない。「ここまではある。ここは虚構だ」とキチンと数字をあげて説明する。だから保守陣営からも叩かれ、孤立してるという。いいことだ。心強い味方だ。

　実は、中村先生とは30年以上前からの知り合いだ。「あの時、僕は30代、鈴木さんは20代でしたよ」と言う。「ゲタをはいて来てましたね」。靴がなかったんだろう。貧しくて。

　この日も来てくれたが沢龍さんという愛国者がいる。芸能プロダクションをやっている。高円寺に事務所があった。そこによく我々は集まっていた。笹井兄弟、原君をはじめ、一水会初期のメンバーが集まっていた。そこで中村先生を紹介されたんだ。「あの時、鈴木さんは防衛庁に突っ込んで産経をクビになったんですよね」と中村先生。そうですね。もう遠い昔のことですよ。

　二次会の終わり頃に、花房東洋氏が来た。「生長の家」時代の仲間だ。僕は学生道場、花房氏は飛田給道場だった。なつかしい昔の話に華が咲いた。

(2)1月23日（火）一日、原稿を書いとった。



JR東労組の松崎明さん（右）と

(3)1月24日（水）３時から目黒さつき会館。JR東労組の新年会だ。松崎明さんとは今月２回目だ。「71才のテロリストです」と自己紹介していた。「週刊現代」に「テロリスト集団JR東労組」と書かれ、その親玉として批判されたからだ。でも、松崎さんと会うとホッとする。度量の大きい人だ。左右を問わず、幅広い人脈がある。僕なんかを労組の講演会に呼んでくれたし、一緒に本も作っているし。

(4)1月25日（木）午前中、元赤軍派の前之園さんに会った。午後3時から河合塾コスモ。今日から授業が始まる。

(5)1月26日（金）映画「ヨコハマ・メリー」を見る。いい映画だった。夜は柔道。

(6)1月27日（土）原稿。夜は柔道。

(7)１月28日（日）図書館。

【お知らせ】

(1)2月4日（日）田中義三さんの友人葬です。１時からお茶の水の総評会館。204号室です。どな

たでも参加できます。

(2)2月7日（水）「守れ！我が領土・国民決起集会」があります。7時から文京シビックcenter小ホールです。佐藤優、田久保忠衛、中山嶺雄三氏の豪華な記念講演があります。参加費は千円です。

(3)2月10日（土）午後7時から中野ZEROホール（小ホール）で「教育に自由を！2.10集会」があります。小森陽一さん（東大教授）と私の討論があります。

(4)3月1日（木）ネーキッドロフト。都知事候補の外山恒一氏のイベント。私も出ます。「そのまんま東」現象が東京でも起きるでしょう。

(5)3月6日（火）ポレポレ東中野。大浦信行監督の映画「9・11～8・15　日本心中」が再び上映されます。この日の夜、7時の回が終わって、監督と私のトークがあります。

(6)「9月29日（土）にシンポジウムをやるのですが空いてますか？」と聞かれた。そんな先の予定なんて入ってるわけがない。だから参加しますよ。詳細は決まっとらんけど。

(7)「週刊朝日」の「ニッポンの右翼大研究」は毎回凄いですね。毎週月曜日発売です。今週（1月29日発売）で３回目。もう１回やるそうです。

(8)「週刊読書人」（07年1月26日号）に原稿を書きました。堀幸雄さんの『最新右翼辞典』（柏書房）の書評です。「光と影を余す所なく伝える」「今、問題になっている全てのルーツがここに」と見出しが出ています。

(9)メルマガ「北海道人」に２回目の原稿を書きました。ポアロの「愛国殺人事件」ならぬ、「愛国いじめ事件」についてです。私の少年時代の懺悔です。

(10)「SAPIO」（2月14日号）の小林よしのりさんの「ゴー宣・暫」に私のことがちょっと出てました。

(11)足立正生監督の「幽閉者」が2月3日（土）から渋谷のユーロスペースで上映されます。日本赤軍の岡本公三を主人公にした重厚な映画です。

(12)森達也さんの『日本国憲法』（太田出版）はいいい本です。読んでみて下さい。一水会や僕のことも出てました。

HOME

今週の主張

バックナンバー

ある天才画家の少年時代

今週の主張２月５日

(1)「東北のゴッホ」が描いた白雪姫

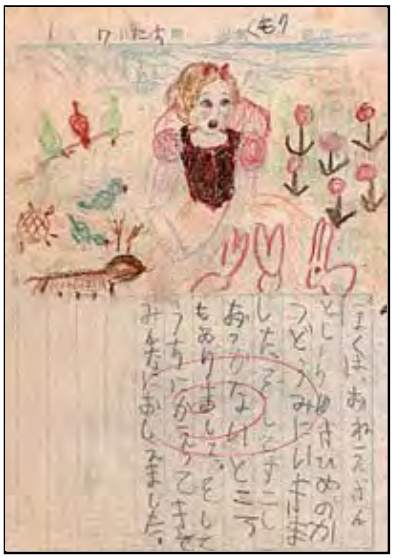
これが、「東北のゴッホ」と呼ばれた天才画家の子供時代の絵だ。小学校2年生だ。弱冠７才だ。クレヨン画だ。実にうまい。白雪姫だ。表情もいい。ウサギやシカや小鳥たちもいい。鳥も花々も唄い、白雪姫をたたえている。

ウォルト・ディズニーの映画「白雪姫」を見て感動し、家に帰って、思い出しながら描いたのだろう。今から50年前だ。半世紀前だ。映画のパンフレットもチラシもない。自分の頭の中の記憶と感動だけで、この素晴らしい絵を描いたのだ。

後に画家になるこの少年は当時、秋田市の保戸野小学校の２年生だった。「２年さくら組」だった。冬休みの宿題（絵日記）として学校に提出したものだ。先生も驚いた。「これは天才だ」と驚嘆した。「東北のゴッホだ」と思い、両親を呼んでそう告げた。「ぜひ、東京の芸大に行くべきだ」「画家になるべきだ」と。

しかし、子供の才能や可能性は様々だ。まだまだ生まれるかもしれん。又、本人に言ったら慢心して、ダメになるかもしれない。だから、本人の耳には達しなかった。本人は、ただ素直に、無邪気に描きたいものを描いていた。学校ではいつも優秀賞をとり、教室の後ろに貼られた。木の内デパートにも貼られた。秋田県下の優秀絵画が集められたのだ。そこでも最優秀賞だった。

絵だけ描いてればよかったが、その他にもいろんな勉強がある。又、父親の仕事の関係で転校をする。そのうち、母の関係で「生長の家」を知り、その宗教運動をする。いつしか、人生という巨大なキャンバスに絵を描こうとする。天才少年画家は、さらに大きく飛翔した。そのことによって、元々の「画家」の道は捨てた。思えば惜しい話である。こうして、「東北のゴッホ」は未完の大器のままで消えた。



「それは誰か？」って。まだ分からんですかね。今、君が向かい合ってる人ですよ。私ですよ。

さて、「白雪姫」だ。私が小学校２年生だから、８才。昭和26年（1951年）の「１月7日（日）曇」だ。そう書いてある。朝鮮戦争の翌年か。自衛隊の前身、警察予備隊が出来たのが50年だ。52年には、それが保安隊になり、54年には自衛隊になる。

でも、天才少年画家はそんなことは知らん。政治のことなんて何も分からん。ただ、ひたすら自分の身の回りのことだけを見、絵にしていた。

「絵日記」だから日記だ。文章がある。こう書かれている。

〈ぼくは、おねえさんとしらゆきひめのかつどうみにいきました。そしてすこしおっかないところもありました。そしてうちにかえってきてみんなにおしえました〉

文章は下手くそだな。「そして」が続いているし。全部、平仮名だ。この絵日記を全部見たけど、漢字は一つもない。まだ習ってないのだろうか。それともオラだけが遅れていて、漢字を知らんかったのか。

今、気がついたけど、「かつどう」って言ってるよ。大人が「活動写真」と言ってたのかな。私の生れた時から、「映画」といってたと思うけど。あるいは皆、「映画」といってたけど、ギャグで「活動」という古い表現をしてみたのか。受けようと思って。なんせ「天才画家」だし。注目されてたから…。

「おっかないところ」って何だろう。そうか、魔法使いのおばあさん（実は義母。さらに実は本当の母）が毒リンゴを白雪姫に食わせるところか。だったら舞台に駆け上がって阻止すればいいのに。そんなことは考えもつかない。（やっても阻止できんか）。

絵日記を全部紹介したいけど、ムリだわね。それに、天才画家のうまい絵ばっかり紹介したら、皆に対してイヤミになる。だから、下手そうな絵も紹介してあげる。勿論、わざと下手に描いてるんだ。「この子は天狗になってる」「何とかわい気のない子供でしょう」という周りの声が耳に入った。だから、わざと自虐的に、「いえいえ、実際はこんな子供らしい、下手な絵ばっかり描いてるんですよ」と「弁解」してるんだ。周りの嫉妬を買わんようにしてるんだ。７才にして、何という心配り。泣けてくるじゃありませんか。

(2)小学校３年生でもう三島由紀夫に出会っている



２番目の絵を見てくんなまし。「1月14日（にち）はれ」だ。コタツにあたった子供がビラを撒いている。「共謀罪反対！」「憲法改正！」というビラだろう。このあと、何十年後かあとの私自身を透視して描いた「未来図」です。そうお思いの皆さま、それは早ガテンでんがな。じゃ、「絵日記」の文を読んでみませう。

〈ぼくはあさ、ふみあきちゃんのうちにいって、ふみこちゃんと、ふみたかちゃんと、ふみあきちゃんと、ぼくとかるたとりをしてあそびました。かるたをかっていたら、ふみたかちゃんがあきてみんなかるたをなげました〉

ひどいね。ふみたかちゃんは。私はカルタで勝っていた。しかし彼は、負けてたんでしょう。遊びにあきて、「もう、やめた！」と叫んでひっかき回し、カルタを宙に飛ばしたんでしょう。失礼な奴だ。査問だよ。でも子供だからいいのかな。

私はこの頃、秋田市の鷹匠町に住んでいた。その近くにいたのが高橋ふみこ、ふみあき、ふみたか姉弟なんだよ。そうだ。思い出した。このふみたかちゃんには、僕の新しいおもちゃの自動車を壊されたこともある。僕が持ってたのが悔しかったんだろう。でも僕は文句も言わなかった。人間が出来てたんでしょう。人とは争わない子供だったんですよ。

さらに３番目の絵を見て下さい。これは３年生の時の絵日記です。これを見た時、私は驚きの余り、気を失いそうだった。だって、この時があの「三島由紀夫」と出会った日だったのだ。多分、三島とも知らずにだ。



〈1月6日。火。くもり。
ぼくはたけしちゃんと夏子のぼうけんをみにいきました。えいががおわってから、かばやをかって家にかえっていきました〉

アララ、初めて漢字が出てきた。夏子と家だ。小３で初めて漢字を覚えたのか。おくての子だ。それに生まれて初めて書いた漢字が「夏子」かよ。この時は多分、知らないと思うが、この「夏子の冒険」の原作は三島由紀夫なのだ。昭和27年だから、三島は27才だよ。それなのにもう作品が映画化されている。たけしちゃんというのは僕の従兄だ。自衛隊に入っていた。〈三島・自衛隊〉というキーワードがすでに出ている。「かばや」はカバヤ・キャラメルのことだろう。

「夏子の冒険」は文庫本では出てない。今は単行本もない。「三島全集」にのみ入っている。そこで去年、私は読んだ。「週刊朝日」昭和26年8月5日号から11月25日号に発表された。同年12月に単行本が出た。昭和28年1月、中村登監督、山内久脚本により松竹映画で映画化され、封切された。

と、「三島全集」の「解説」には書かれている。でも書いていて奇妙な事に気づいた。私は昭和18年8月生まれ。映画が出来たのは28年1月。とすると私は小学校5年生だ。でも小学3年生の絵日記に「映画を見た」と書いている。「解説」が間違っているのか。私の計算が違うのか。あ

るいは、映画が出来る前にすでに見ていたのか。「鈴木史」の謎だ。　それに、「私の記憶」では小学校5年の時に湯沢市の「湯沢劇場」で見たとなっている。大きな看板の絵も瞼に焼きついている。でも小３の絵日記には出ている。不思議だ。超能力少年だったのだろう。

　では、「夏子の冒険」だ。男が熊を撃ちに北海道に行く。夏子がついてゆく。そして見事熊を撃った。おわり…という筋しか覚えてない。でも原作を読んだら、もっと心理的な小説だった。

　夏子は美人で、頭もよく、縁談は降るほどにある。しかし、皆つまらん男ばかりだ。「男なんて下らない。函館の修道院に入るわ」と言って北海道に行く。その旅の途中に、この男と会う。何でも恋人を熊に殺され、その復讐で熊を探している。目をギラつかせ、闘う男だ。夏子は、この男に興味を持ち、ついて行く。そしていろいろあって、見事、熊を撃ち殺す。「仇討ち」小説だね。「白鯨」に似てるな。

　でも、「復讐」を終えた男は、途端に「普通の男」に戻った。あんなに恋したった男は、もう覇気もなく、闘う男でもなくなっていた。夏子は失望し、男の元を去る。よくあるよね。三島作品には。

　しかし、映画では、そんな複雑な筋ではない。目出たく、２人は結ばれました。という結論だったようだ。

(3)子供の時から過激派だね。ピストル、刀を振り回して…



　では、４枚目の絵です。これも不思議な絵です。何とも謎の多い少年ですね。クニオ君は。小３の「2月11日（日）くもり」です。ピストルを撃ってますね。火を吹いてますね。そんな殺伐とした映画を見たのでしょうか。ちゃいまんねん。これは私です。小３で、私がピストルを撃ってるんです。テロリストです。では「日記」です。

〈ぼくは夜にピストルをならしたら火がでました。ぼくはおもしろいのでふみあきちゃんと弟をつれてきてピストルごっこをしてあそびました〉

　ヒャッ！「ピストルごっこ」をしてたのか。都会では「パンパンごっこ」をしてた子供がいたのに、われわれ田舎の子供は「ピストルごっこ」だ。米兵のまねをして、アメリカに魂を売った子供と違い、われわれは闘っていた。ゲリラ戦を闘っていたんだよ。

　でも、オモチャのピストルだ。当然だ。それなのに火が吹き出る。何なんだこれは。私の記憶の中でも、撃つと、ポーッと火が出たような気がする。おそろしいオモチャだ。今なら大問題になっただろう。カンシャク玉のように、パンパン音がするタマはあった。しかし、これは「本物の火」だ。絵日記が証明している。何だったんだ、これは。誰か解明してほしい。

　こう書いてくると、他の記憶もさらに甦ってきた。この頃、私は空気銃を持っていた。なぜか母親が買ってくれた。当時、はやっていたんだ。小３のハンターだった。そして鳥を撃ったり、猫を撃ったりしていた。殺伐とした子供だ。ヨチヨチと歩いてる赤ん坊を見ると、「ウザイ」「カッタルイ」と思い、足元に脅しで撃ってやった。そのうち、手元が狂って、子供に当った。そこで記憶がとぎれる。本当にやったことなのか。あるいは猫や子供を撃ったのも夢なのか。分からんち。母親から空気銃を買ってもらったというのも夢か。

いや、「火の出るピストル」を撃ちまくっていたんだ。空気銃くらい持っていただろう。

パラパラと絵日記をめくったら、「ピストルごっこ」「ギャングごっこ」「カウボーイごっこ」という言葉が出てくる。毎日、ピストルばっか撃っていたんだ。又、「チャンバラごっこ」もやってるし、「すもう」もやっている。相撲なんて、テレビがないから見れない。映画を見に行くと、「ニュース映画」がかかり、そこで、相撲の結果をやっていた。昔から「闘う少年」だったんだ。

あれっ、こんな日記もあるよ。

〈きょうぼくは、やおやにいってめがねとふえとピストルをかいました。こうぞうはピストルを買いました。そしてギャングごっこをしました〉

「こうぞー」というのは弟だ。しかし、八百屋で売ってたんですね、ピストルは。メガネ（勿論、オモチャでしょう）、笛も売っていた。まァ、雑貨屋のようなもんでしょう。今ならコンビニですかね。

もっと面白い日記もあるんやけど、キリがないのでやめる。絵日記を主にして自分の「少年史」を書いてもいいな。「少年日本史」だ。

絵の他に、書道もあった。整理して、又、発表しよう。書道もうまかったんだ。書道塾に行ってたし。よく貼られていた。書道は５級だよ。大したもんだ。

そうだ。正月に亡くなった田中義三さんのことだ。お兄さんに聞いたら、田中さんは熊本刑務所で書道部に入っていたという。初めは６級だったが、どんどん上達し、３段になったという。これは凄い。「級」の上に「段」まであったのか。知らんかった。３段じゃ先生になれるよ。そういえば手紙の字はうまかったな。書道３段の田中さんと５級の私じゃな。余りにも対照的じゃわいな。



最後に映画の話をちょっと。前にこのHPに書いたけど、私が生れて初めて見た映画は「二つの瞳」だった（と思う）。美空ひばり（子供役だった）とアメリカのオブラエン嬢が出とった。秋田市で見た。

そして、初めて見たアニメは「白雪姫」だ。さらに、「洋画」を初めて見たのは「クオ・ヴァディス」だった。湯沢小劇場だったと思う。ローマ時代、キリスト教徒が迫害される映画だ。筋は全く覚えてない。ただ、暗くて、こわかった。それだけしか記憶に残ってない。「なんで子供にこんなこわい映画を見せるんだ！」と親をうらんだ。それしか記憶にない。その後、映画館ではやらない。ビデオにもなってない（と思う）。

ところが、つい先週、本屋で見つけた。今、500円で昔の名作が売ってるよね。DVDで。著作権が切れたんで、ドッといいのが売り出されている。これはいい。前に紹介した「オズの魔法使い」も買ったし、「ガリバー」「白雪姫」も買った。「白雪姫」なんて全く、覚えてなかった。

さて、「クオ・ヴァディス」だ。53年ぶりに会ったわけだ。子供の時の記憶では、「暗くて、こわい」映画だった。それに３時間近くある。まぁ、少しずつ見ようと思ったら、驚いた。面白い。壮大なスペクタクルだ。目が釘付けになって、あっという間に3時間、見ちゃったよ。こんなに熱中してDVDを見たなんて初めてだ。

「クオ・ヴァディス」とは「主よ、いずこへ」という意味だ。キリストが殺され、その後の弾圧されるキリスト教徒の物語だ。暴君ネロが自らの「芸術」のためにローマに火をつける。そして勇将マーカスが暴君ネロに立ち向かう。凄い映画だ。又、捕えたキリスト教徒をライオンに喰わせる。よく撮ったもんだ。感動的だ。いやー、よかったね。

多分、母親に連れられて見たんだろう。母は熱心な「生長の家」の信者だったから、こういう宗教的な映画を子供にも見せようと思ったのに違いない。それにこの子は、「ピストルごっこ」や「ギャングごっこ」ばかりしている。大きくなって「過激派」か「犯罪者」になって、お巡りさんのごやっかいになっては大変だ。そう思ったのかもしれない。

でも、この壮大な大スペクタクル映画を理解する頭がこのガキにはあらへんで。ただ、こわがって震えていた。そして53年たって、やっと、この映画のよさが分かった。500円だ。安い。皆も、見たらよかでせう。主演はロバート・テイラーとデボラ・カーだ。「史上空前のスケールで展開する歴史ロマン超大作」と書かれとる。50年以上たった今でも「史上空前」のままだよ。こんないい映画に連れて行ってもらったのか。ブーブー文句を言っていた私は愚かでした。53年たって母の愛に涙しました。合掌。

【だいありー】

(1)1月29日（げつ）はれ。あたたかかったです。じゃーなりすとせんもんがっこうへゆきました。べんきょうをしました。

あっ、いけん。小学生の日記になっちゃったよ。

前の日、徹夜したせいか、喉が痛い。ゴッホ、ゴッホと咳をしてた。今じゃ、「落合のゴッホ」と呼ばれちょる。

(2)1月30日（火）京都に行きました。木村三浩氏と一緒に。山科にある京都刑務所に面会に行ってきたのです。

(3)1月31日（水）図書館。柔道。

(4)2月1日（木）３時から河合塾コスモ。現代文要約。この日は、瀬木慎一の「自画像・考」をやりました。そんで私が小学6年の時に書いた「50年後の自画像」を見せてやりました。ウケました。このHPにも載ってます。03年7月14日です。見て下さいましな。「基礎教養」のゼミでは「週刊朝日」の「ニッポンの右翼・大研究」をテキストにして話しました。

(5)2月2日（金）取材。今日から渋谷のユーロ・スペースで「幽閉者（テロリスト）」が公開。凄い映画です。見たらいいでしょう。

(6)2月3日（土）7:30p.m.下北沢の本多劇場。月蝕歌劇団の芝居「花と蛇」（原作・団鬼六）を見た。凄い！驚いた。今までの月蝕とは全く違う。主演の三坂知絵子さんの体当りの演技には驚嘆した。会場は超満員だった。

(7)2月4日（日）午後1時から「田中義三さん友人葬」。総評会館で。多くの人がつめかけて、田中さんへの哀悼の意を表し、思い出話をしてくれました。本当に残念です。2月11日には関西でも友人葬が行われるそうです。

【お知らせ】

(1)2月7日（水）「守れ！我が領土・国民決起集会」があります。7時から文京シビックcenter小ホールです。佐藤優、田久保忠衛、中山嶺雄三氏の豪華な記念講演があります。参加費は千円です。

(2)2月7日（水）午後7時半からロフトで「第7回・塩見塾」があります。「改憲は阻止できるか」「“９条改憲阻止の会”に聞く」。私も出ます。

(3)2月7日（水）月刊「創」（3月号）発売です。私は「田中義三さんの死」を書きました。出会いから別れまで詳しく書きました。何とも惜しい人を亡くし、残念です。

(4)2月10日（土）午後7時から中野ZEROホール（小ホール）で「教育に自由を！2.10集会」があります。小森陽一さん（東大教授）と私の討論があります。

(5)2月25日（日）午後1時半～3時半。ロフトプラスワンで佐川一政さん（作家）の出版記念会があります。久しぶりの佐川さんの登場です。私も出ます。佐川さんの近著は『業火』（作品社）です。

(6)3月1日（木）ネーキッドロフト。都知事候補の外山恒一氏のイベント。私も出ます。「そのまんま東」現象が東京でも起きるでしょう。

(7)3月6日（火）ポレポレ東中野。大浦信行監督の映画「9・11～8・15　日本心中」が再び上映されます。この日の夜、7時の回が終わって、監督と私のトークがあります。

HOME

今週の主張

バックナンバー

皇国史観と平泉澄

今週の主張２月12日

(1)私が出会った「皇国史観」

人間は何を規範として生きているのだろう。親の生き方か。歴史上の人物か。最近では、アニメのヒーローか。

かつては、〈規範〉は歴史だった。歴史が人間の生き方を決定した。マルクス主義がそうだし、キリスト教の歴史もそうだ。「世界はこうなるべきだ」と思い、それに尽力することが素晴らしい「生き方」だった。マルクス主義と対極の皇国史観もそうだ。

〈かつて、この国の歴史を天皇を中心とした「国のかたち」つまり国体を守ろうとした人々の歴史ととらえ、それこそが日本人としての生き方にほかならないことを力説した歴史家がいた。一般に皇国史観と呼ばれたこの歴史観を説きつづけた代表的な歴史家が平泉澄である〉

これは若井敏明の『平泉澄＝み国のために我つくさなむ＝』（ミネルヴァ書房）に書かれている。最近読んで考えさせられた。

「皇国史観」というと〈悪の代名詞〉のように言われ、戦前・戦中の日本を戦争に駆りたてた元凶のように言われる。又、「日本は神の国だ」と言い張り、一切、批判を許さない。…そんな偏狭な思想のような感じがする。そんなことは無いのだが、ネーミングで損をしている。大体、平泉が「皇国史観」と言ったわけではない。彼は歴史家だ。日本の歴史を研究して発表した。それを左翼の人たちが「皇国史観」と批判したのだ。

僕はこの「皇国史観の親玉」と言われた平泉澄（きよし）に二度会っている。一度は学生時代に、平泉の主宰する日本学協会の夏期錬成会に参加した。そこで何度も講義を受けた。もう一回は、かなり後になって福井市の平泉寺白山神社におられた平泉を訪ねて話を聞いた。野村秋介さんが一緒だった。福井で民族派の集会があり、その帰りに地元の人が案内してくれたのだ。先生は気さくに会ってくれ、いろんな話をしてくれた。

学生時代の合宿は、「楯の会」の持丸博に誘われて行った。森田必勝も行った。

「楯の会」は三島が創ったが、雑誌「論争ジャーナル」を基盤にして、人を集めた。又、そこが「楯の会」の事務所になった。実は、「論争ジャーナル」の編集部は全員、平泉門下生だった。そして「楯の会」だった。持丸もそうだ。

だが、後に三島と仲たがいをし、「論争ジャーナル」グループは全員、「楯の会」を去る。もしかしたら〈天皇論〉の違いも別れる原因になったのかもしれない。

最近亡くなった村尾次郎さんも平泉門下生だ。又、「女帝論を認めた」として右派の中からも大バッシングにあった田中卓、所功さんなども平泉門下だ。だから今も「皇国史観」は健在だ。

それに「女帝論」を認めるなど、考え方は柔軟だ。今の保守論壇の方がずっと過激だし、排外的だ。

「アエラ」で田中卓先生が取り上げられていた。「私は左翼と長い間、闘ってきたのに、今は女帝問題で国賊と非難される。心外だ」と嘆いていた。田中先生は「ＹＰ体制」という言葉を初めて使った人でもある。民族派運動を領導した人だ。それなのに、「国賊」呼ばわりはひどいだろう。



平泉澄『物語日本史』（講談社学芸文庫）

何も「皇国史観」を弁護しようというのではない。左翼が必死に「皇国史観」を批判するのは、それだけ影響力が強かったからだ。平泉について、最近もう一冊、読んだ。田々宮英太郎の『神の国と超歴史家・平泉澄』（雄山閣出版）だ。サブタイトルは「東条・近衛を手玉にとった男」だ。そう思われても仕方ないほどの影響力があったのだ。

しかし、狂信的、排外的な〈神がかり学者〉ではない。これは誤解してはいけない。その証拠に、今も平泉の本は大出版社から出ている。『物語日本史』（上・中・下）だ。講談社学術文庫から出ている。とてもいい本だ。大きな本屋にはあるので読んでみたらいい。分かりやすいし、穏健な歴史書だ。今の保守派の方がずっと狂信的だ。これには驚く。僕が『ヤマトタケル』（現代書館）を書いた時も、この本は参考にさせてもらった。

さて、若井敏明の『平泉澄』だ。アレッと思ったことがある。平泉は戦時下に、「国史の浅薄なる美化主義」と「過酷なる摘発主義」に反対し、批判した。日本の歴史はただ素晴らしい。完全無欠だ。天皇は素晴らしい。一つも問題はない。…という単純な〈美化主義〉はおかしいと言った。又、これは「不敬だ！」「国賊だ！」「非国民だ！」といった〈摘発主義〉にも反対した。もっと大らかに歴史を見るべきだという。そう主張することで平泉自身も「不敬だ」と非難された。しかし、平泉を批判する資格のある奴などいるのか。そういえば、北一輝や大川周明だって「不敬だ」と言われたことがある。（この３人からはズーンと落ちるけど、私だって、よく「不敬だ」「非国民め！」と愛国者たちから糾弾されちょる）

(2)単なる「天皇美化」では護れない

さて、「浅薄なる美化主義」だ。皇室は常に正しく、国民全てに支持されたという考えだ。これによると、道鏡などは出てこない。皇室をおびやかす者などいなかった、というわけだ。

〈平泉は、国体が持続していたことを賛美するのではなく、いくたびも危機的状況に陥った国体が幾多の先哲・忠臣・義士によって護持されてきたことに焦点を当てるのである〉

なるほど、学問的だ。当然の話だ。「美化主義」ではなく、「皇国護持史観」とも呼ぶべきだ。だが、それを強調すれば、「不忠の者」の存在も描かなくてはならなくなる。このような点から文部省と平泉の間には国史の見方について見解が相違し、しだいに疎遠になった。

もう一つ、平泉が批判した「過酷なる摘発主義」だ。平泉が『神皇正統記』を訳して文部省思想局『日本精神叢書』第十編として出版したとき、武烈天皇の条の記事が問題になり、「不敬

だ！」と告発運動が起こったという。そうなると、『神皇正統記』そのものも「不敬の書」になる。すさまじい話だ。

武烈天皇は『日本書紀』でとんでもなく残虐な天皇と記されている人物だ。愛国者たちは、そんな天皇はいなかった、というのか。あるいは、「残虐な面は書くな」というのか。平泉は攻撃された。では、武烈天皇とはどんな天皇だったのか。

所功（京都産業大学教授）の『歴代天皇』（実業之日本社）によると。

〈『古事記』には伝えないが、『日本書紀』には天皇の暴虐ぶりが数多く記されている。妊婦の腹を裂き、人の生爪を剥（は）がしたうえで墓を掘らし、人を池に入れ、流れ出るところを三刃の矛（ほこ）で刺し殺す。などなど〉

すさまじい。腹を裂いて胎児を見たんだそうな。連合赤軍事件のようだね。女は「総括」するが、腹の子は取り出して革命家として育てようとした。ということは、二千年たったら、連合赤軍事件も「日本の神話」になるのかもしれない。森恒夫は武烈天皇かな。いかん、いかん。こんなことを言うと又、「不敬だ！」と言われちゃう。

武烈天皇は他にも、木に登っている人を弓で下から射落としたとか。頭の毛を全部抜いて木の上に登らせ、木を切り倒して落ちるのを見て楽しんだとか…。まるで暴君ネロだよ。しかし、よく考えつくもんだ。悪の天才だ。アイデアマンだ。そんな人が第25代天皇だ。

この天皇をどう扱い、どう教えるか、困ったんだろう。人々も。

所教授は、こう書いている。

〈これは、同時代の『百済新撰』という百済の書物にみえる末多（まつた）王の暴虐記事をもとにして、『書紀』に意図的に混入したという説がある〉

〈「有徳」の仁徳天皇の王系が、「有徳」と「悪徳」の二面性をもつ雄略天皇を経て、「大悪」の武烈天皇で絶えることが、ここには暗示されている。　事実、武烈天皇には後嗣がなく、やむなく子代として小長谷部（おはつせべ）を定めた。そのことも、『書紀』が自由に悪行を書き記した理由である〉

(3)〈武烈天皇〉をどう教えたらいいのか？

三浦佑之の『日本古代文学入門』（幻冬舎）でも、武烈天皇の悪行を取り上げている。天皇を信奉する人々にとって、「ウソだと言いたい心理」は分かるが、案外、こんなことは、あったかもしれない。あるいは、他の王の話をまとめたのかもしれない。中国の模倣という話もあるが、それだけではない。…と言う。さらに…。

〈我らが天皇はそんなことはなさらなかったと、目くじら立てて否定する必要はないのではないかと思います。ここに描かれている通りではなくても、これに近い出来事はあったのではないか〉



鈴木邦男著『ヤマトタケル』（現代書館）

私もそう思いますね。「権力とはそういうことだ」と教えたかったのか。いや、そんなことよりも、書いてる人も、面白がって興に乗った部分もあったのでしょう。あるいは、「偉大な天皇」を証明しようとして、「善にも強い」「悪にも強い」面を強調しようとしたのかもしれません。

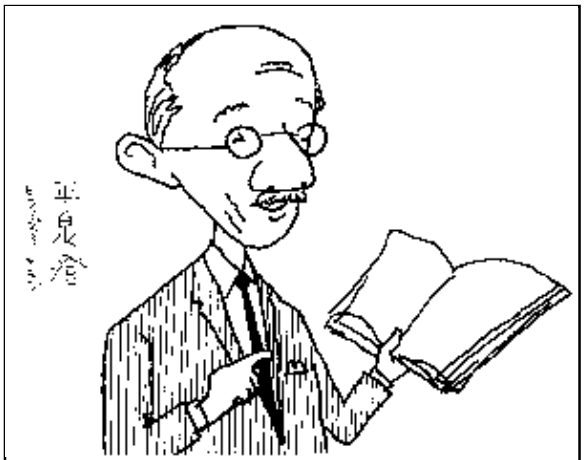
織田信長だって、天下統一したけど、〈悪業〉も多いです。〈悪〉に対する考え方も、今の僕らとは全く違っていたのでしょう。ここまでやれば、ただただ、驚くしかない。サプライズだったんでしょう。

思い出した。昔、子供たちは「父ちゃん自慢」をしていた。「恐い父ちゃん」自慢だ。「うちの父ちゃんなんか、こわいぞ。すぐぶん殴るんだから。オラなんていつも、アザだらけだよ」「おらんとこの父ちゃんなんてすぐに卓袱台をひっくり返すんだから」「うちなんて、もっとすごいよ。毎晩酔っ払って暴れまくるんだから」「うちの父ちゃんなんか、人殺して刑務所にいってんだぞ」「うわー、スゲーな！」と、無邪気に「父親自慢」をしてたもんですよ。「うちの父ちゃんはメカケが３人もいて、カアちゃんといつも取っ組み合いの喧嘩だよ」。「ヒャー、凄いね」「偉いね」…と。

「チョイ悪」どころか「デカ悪」の父ちゃんを自慢しあってたんですよ。武烈天皇も同じかもしんない。中国にはスケールの大きい、悪業の王がたくさんいる。負けるもんか。我が国だって…と必死に話を集めて書いたのではないか。

だって、天皇の〈美しい歴史〉を書くだけだったら、何もこれは必要ない。単なる美化だけではダメだ。ただ、「美しい国」と言ってればよいわけじゃない。そういうことだろう。

まあ、『ヤマトタケル』も読んでみんしゃい。神話の神々だって嫉妬し、殺人をやり、間違いもする。嘆きもする。神々の子孫の天皇も嫉妬し、争い、殺し、懺悔する。実に「人間」らしい。神や天皇だって間違う。ましてや我々、小さな人間は間違うものだ。だから他人に優しく、謙虚に生きようよ。…というのが神話の教訓だと思うが、どうだろうか。


平泉澄『ヤマトタケル』より（絵・清重伸之）

最後に憲法の話だ。戦後、平泉は「マッカーサー憲法」を破棄し、明治憲法を復活してこそ日本の国体は明確になると論じた。「生長の家」と同じだ。谷口雅春先生も、言っていた。「占領憲法を破棄したら、明治憲法が生きている。これを基にして、改正をしたらいいと。「憲法復元改正論」だった。

ただ、平泉は晩年、「改憲論」にも憂慮していたという。若井敏明は書いている。

〈現状で憲法改正をおこなえば、現在よりまずいものになると考えていたという。国体すなわち主権の問題に触れず、アメリカの要請にしたがって軍隊の保有を認めるように「マッカーサー憲法」をさらに改めようという昨今の改憲論議など平泉に言わせれば「現在よりまずいもの」に違いない〉

では又、平泉については触れてみたい。平泉は1984年（昭和60年）2月18日に亡くなった。90才だった。

1980年、司馬遼太郎は『街道をゆく』の取材で白山神社を訪ねるが、平泉とは面会していない。司馬のポリシーゆえか、たまたま会えなかったのか。

【だいありー】



畑中純さん（左）と。後が「まんだら屋の良太」（1月15日）

(1)2月5日（月）ジャナ専。今期の最後でした。レポートの〆切でした。夜、スポーツ会館に行きました。体が痛いので、柔軟をやり、サウナに入りました。

(2)2月6日（火）原稿を書いてました。

(3)2月7日（水）夜、柔道に行きました。終わって、ロフトに行きました。「塩見塾」の第2部に出て、憲法の話を「塩爺」としました。

(4)2月8日（木）11時、ホテルニューオータニ。加藤紘一さんの『テロルの真犯人』（講談社）出版記念会。あの放火事件以来、加藤さんとは4回ほど対談、座談会をしています。この日も挨拶をさせられた。

午後3時から河合塾コスモ。

この日、「創」（4月号）発売。

(5)2月9日（金）又、結核検診をさせられた。学校から、講師は全員受けるといわれて、乳ガンだったらどうしよう。結核だったら隔離され山奥のサナトリウムで一生を終わるのか。と不安だったが異常はなかった。ホッとする。夜、出版社の人達と打ち合わせ。飲み会。

(6)2月10日（土）７時から中野区民ホールで「教育に自由を！2.10集会」。小森陽一さん（東大教授）と対談した。満員だった。

(7)2月11日（日）東京では2月4日（日）に「田中義三さん友人葬」をやったが、この日、関西での「友人葬」。大阪の北区民センターで午後６時から。私はこちらにも参列した。

【お知らせ】

(1)2月19日（月）一水会フォーラム。午後7時から高田馬場のホテルサンルート。講師は三輪和雄さんで、「東京裁判史観とマスコミ」。ぜひ、いらして下さい。

(2)2月25日（日）午後1時半から3時半。ロフトプラスワンで佐川一政さん（作家）の出版記念トークがあります。私も出ます。佐川さんの近著は『業火』（作品社）です。とてもいい本です。ぜひ読んで、ロフトにいらして下さい。

(3)3月1日（木）7:00p.m.ネーキッドロフト。都知事選候補の外山恒一氏のイベント。私も出ます。

(4)3月6日（火）ポレポレ東中野。大浦信行監督の映画「9.11～8.15日本心中」が再上映されま

す。この日の夜の回（7:00〜）の後に、監督と私のトークがあります。

(5) ４月15日（日）7:00p.m.から、ネーキッドロフト。針谷大輔氏と中野ジロー氏の民族派過激トークです。「第2回・塀の中で懲りちゃった面々」。

HOME

今週の主張

〈愛国的髪形〉とは何か？大正13年の国民的大論争を考える

今週の主張２月19日

バックナンバー

(1)加藤紘一さんの出版記念会で挨拶した



加藤紘一『テロルの真犯人』（講談社）

僕が〈真犯人〉かもしれない。それに、このテロルで〈利益〉をえたのは僕かもしれない。「申しわけありません」と加藤紘一さん（衆議院議員）に謝った。「いや，そんなことはありませんよ」と加藤さんは言ってくれたが…。

２月8日（木）、午前11時から加藤紘一さんの出版記念会があって、僕も挨拶をした。ホテルニューオータニだ。本の題名は『テロルの真犯人』（講談社）。ドキッとする題名だ。去年の8月15日に鶴岡の実家・事務所が右翼の人に放火され全焼した。その事件について書いている。

もっとも、事件があって急遽、本を書いたのではない。事件前から、講談社から頼まれて自らの政治姿勢について書いていた。ほとんど出来上がったときに例の事件があった。それで、この事件についても書いた。又、タイトルも変更した。

「このタイトルはちょっと抵抗があったのですが…」と加藤さん。講談社の人がつけたのだろう。新聞に出ていたが、沢木耕太郎さんの『テロルの決算』をイメージしてつけたという。1960年に山口二矢が浅沼社会党委員長を刺殺した事件について書いた本だ。ということは、単なる「テロ憎し」の本ではない。ということだ。

講談社の人に聞いた。このタイトルは誰が考えたんですか、と。「小沢一郎だよ」と言う。エッ、民主党の党首が！　と驚いた。と思ったら、出版局に同姓同名の人がいたのだ。その人に聞いたら、「いや私でなく○○さんです」と教えてくれた。「○○さん」が鳩山さんだったか菅さんだったか忘れた（そんな偶然はないか）。その人が、かつて沢木さんの担当だったので、このタイトルを考えついたという。

さて、加藤さんの『テロルの真犯人』だ。僕は加藤さんからサイン入りの本をもらった。　しかし、その前に、待ち切れずに、出た当日に本屋で買って読んだ。実にいい本だ。ビックリしたが、犯人への怒り、憎しみがない。むしろ、時代の雰囲気、マスコミに煽られ、追いつめられてテロルをやった犯人への同情すら感じられる。加藤さんは何と度量の広い人かと思った。

僕は4年前、アパートに火を付けられた。洗濯機とドア、それに入り口を燃やされた。加藤さんの放火とは比べものにならない小さな放火だ。しかし、あの時はパニックになった。又、犯人への怒り、憎しみは激しく、カーッとなり、我を忘れた。今でも、見つけたら殺してやりたいほど

だ。もしあの日、現場で見つけたら自分は何をしたか分からない。怒りにかられて殺したかもしれない。普段は眠っているが凶暴な狼の血がある。自分でも怖い。とても加藤さんのように、「犯人への憎しみはありません」などと言えない。

加藤さんは、むしろ犯人は、かわいそうだ、という。65才の老テロリストだ。放火は罪が重い。15年か20年。あるいは無期の判決になるかもしれない。そういうことへの同情もあるのだろう。

むしろ犯人も時代の犠牲者かもしれない。右傾化、保守化の中で、右翼は取り残されている。俺達は命をかけてやらなければと焦る。又、そうするようにマスコミも煽り、追いつめる。そういう風に追いつめた〈真犯人〉について加藤さんは書いている。ぜひ読んでほしい。

加藤さんは被害者だ。だから、犯人への怒り、憎悪だけを書いてもいい。しかし、それはない。さらに、「地元の人に迷惑をかけた」と謝っている。「たまたま加藤紘一という政治家の事務所があったために地元の人々に怖い思いをさせてしまった。申しわけない」と言う。そこまで謝ることはないと思うのに…。

「でも、あの事件以来、地元の人が皆、あたたかく声をかけ、励ましてくれるようになったんです」と言う。又、これでメゲずに、毅然として発言を続けている。「その姿勢は立派だ」と右翼の中でも評価する人もいる。政治家としてグンと大きくなった。そんな気がする。放火されたことにより、存在感が増した。



鶴岡での「言論の自由を考える！」集会（06年10月27日）

僕は、この事件について、「放火はいけない」「言論には言論で闘うべきだ」とコメントした。当たり前のことだろう。それなのに右翼の人からは総スカンをくった。非難された。当然のことを言うのに「勇気」がいる。奇妙な話だ。

「山形新聞」に取材された記事を見て加藤さんは、「鈴木さんこそ本当の国士だ」と言ってくれた。僕なんて、とても国士じゃないが、でも、嬉しかった。それから、加藤さんとの縁が生まれた。鶴岡でのシンポジウムでも一緒に話した。朝日ニュースターにも出た。そして、今回の出版記念会でも挨拶した。又、放火事件について、佐高信、宮崎学さんらと雑誌で対談した。

だから、ちょっと疚しい気もする。この事件で一番〈利益〉を得ているのは僕かもしれない。推理小説では、「一番利益を得たものが真犯人だ」となってる。だから僕が〈真犯人〉かもしれない。

右翼の人からも批判されている。「自分は何もしてないくせに、命をかけた人間を批判しているだけだ」と。確かにそれも言えるな、と思う。ただし、命をかけた人をけなしてはいない。同情している。実行者は「65才で、組織からは疎外されてた。存在意義を示すためにやった」と新聞に出ていた。「うん、俺と同じじゃないか」と思った。僕も同じことをやらなくちゃいけないのか。とも思ったりして、我が身のように思う。

でも、彼だって、〈言葉〉を訴えようとして放火した。放火が目的ではない。だったら、事件に訴えなくても〈言葉〉が伝わる方法を考えたらいい。「言論の場」を作ったらいい。それを僕はやってるつもりだ。

(2)「パパ、ママと言うのは非国民だ！」と文部大臣が…



「言論・暴力・ナショナリズム」のシンポジウム（06年12月9日）

この事件の後、いろんな人と話をした。その中で、教えられることも多かった。「創」で佐高信さんと対談した時、佐高さんが言っていた。「加藤さんのお父さんは石原莞爾の又いとこだよ。だから、紘一という名前は八紘一宇からとったんだよ」と。

「八紘一宇に火をつけちゃまずいじゃないですか」と僕は言っちゃった。又、中央大学駿河台記念館でシンポジウム「言論・暴力・ナショナリズム」をやった時、半藤一利さん（評論家）が、こんなことを言っていた。戦争前だって、急に時代の空気が変わったわけじゃない。いろんな条件があって段階的に変わっていったと。それが今と似てるという。

一番大きいのが〈言葉〉だという。威勢のいい言葉が飛びかい、空疎な「過激な言葉」が前面に出てくる。又、すぐに他人を「不敬！」「非国民！」「売国奴！」と罵る。　なるほど、これは言えると思った。小泉さんをちょっと批判したら、「売国奴！」といって放火される。たまらない。「愛国運動40年」の私ですら、「非国民！」「売国奴！」と批判される。やってらんないよ、と思う。

半藤さんは面白いことを言っていた。戦前、文部大臣が、「パパ、ママという言葉を使うのは非国民だ。やめろ！」と訓告した。昭和9年、斎藤内閣の時の松田源治文部大臣だ。こんな敵国の言葉を使っちゃいけんというわけだ。野球だって、ストライク、ボールなどを日本語にさせられた。「いい球」「悪い球」とか言って。六大学野球も中止させられた。「いや、これは手榴弾を投げるのに役だつ。見て下さい」といって軍人を招いてピッチャーが手榴弾を投げてみせた。そんな涙ぐましい「努力」をしたが、ダメだったんだ。

シンポジウムが終わって、半藤さんに私は言いました。「パパ、ママなんて、今じゃ皇室でも使ってますよ」と。皇室が非国民なのかな。半藤さんも笑っていました。

さらに話は変わる。戦前だけでない、そのずっと前。大正時代だって、こんな「非国民論争」があったんじゃ。大正13年初めの「髪型」をめぐっての論争だ。当時、流行した髪型に「耳隠し」というのがあった。今は皆、耳隠しだが、昔の大和撫子（なでしこ）は、キチンと耳を出していたのだろう。髪で耳を隠しちゃいけん。すっきりと出せということだ。それが大和心なのか。（だから乳だって隠してはいない。「乳隠し」「乳バンド」「ブラジャー」が出来たのはかなり後だ。もっとも当時は着物をきてたから、乳バンドをしようがしまいが変わらなかったけど）。

話を戻す。大正13年初め、「『耳隠しの女』に告ぐ」という檄文が出された。愛国心の至情にあふれる檄文だ。

〈汝の髪は米国の女乞食の髪に彷彿たり、汝に一片の愛国心があり且つ国家危急の時を知らば直ちに髪を結い直すべし〉

凄いね。アメリカの乞食（こじき）の髪だという。じゃ、現代の女たちは全員、「アメリカ乞食」だよ。ともかく、大正13年に、こんなビラが東京丸ビル周辺にばら撒かれたんだ。いわゆる

「耳隠し騒動」が始まる。それも、東京だけでなく、全国で論争が巻き起こる。地方の新聞にも人々が投書し、全国的な「朝生」現象だ。私が加藤さん放火についてコメントした「山形新聞」も例外ではない。大正11年7月4日（ということは、東京でビラが撒かれる２年前だ。山形の方が、〈流行〉が早かったのか）。「山形新聞」には、こんな投書が載った。

〈いやにカミを引っぱって耳をふくらませた形。そして妙に上半身と顔を振りつつ歩く。あのスタイルで教育者かと一言いいたくなる。スタイルから推してその精神を知るべしである〉

「耳をふくらませた」とあるが、別にダンボのように本当に大きな耳にしたわけじゃない。（それなら面白いが）。耳の辺の髪をふくらませたのだろう。学校の女先生もハイカラだから、やったんだろう。そして顔と身体をクネクネ動かして歩く。いやらしい、コケティッシュだ。アメリカかぶれめ！と批判されたんだろう。

「北国新聞」（大正13年6月25日）には同じような「憂国の投書」が載っている。

〈耳隠しの女へ。君はわが国民たるか。日本には古来より純日本式女子特有の髪型があるを知らざるか。口ばかり達者でなく、母らしく忠君愛国心を磨くべし〉

(3)「耳隠しは非国民」に対し、「じゃ、殿方はどうなのさ」



203高地まげ

髪型にも「忠君愛国」があるのかよ。そうだ。日露戦争の時には「２０３高地まげ」という髪型が流行ったそうな。乃木大将が攻めた激戦地だよ。「私だって難攻不落よ」という意味だったのかな。それとも、ひたすら「忠君愛国」の情を表わしただけかな。あるいは、上に突き出したマゲが大砲に似てたからかな。

さて、「耳隠し」だ。今なら女性は皆、「耳隠し」だ。皇族の方々もそうだ。愛子さまもそうだ。皆、「非国民」なのか。「忠君愛国心」がないのか。

ただ、当時の騒動で一つ救いがあるのは、「反論」も堂々となされていることだ。「耳隠しで何故わるい」「そんなことで愛国心をいうな！」という投書もかなり載った。〈言論の自由〉があったのだ。その点、今の「愛国心論争」の方が不自由だ。「愛国心論争」の方が不自由だ。「愛国心を持つのは当然だ！」で、終わりだ。「愛国心なんていらない」なんて言えない。皆、口をつぐんでいる。だらしがない。「大正デモクラシー」に負けてるよ、今の言論は。

さて、反論ですが、「北国新聞」（大正13年6月21の投書だ。これには、ウッと唸りましたね。

〈耳隠しが亡国的というのなら私たちにも言い分があります。男は米人が着ている洋服を脱ぎ捨て和服と着替えよ。オールバックや横髪は全て断髪せよ。耳隠しを絶滅させよと呼ばわる方が果たしてこの要求を実行なさいましょうか〉

これじゃ男はグーの音も出んやろう。ついでに、「チョンマゲに戻れ！」と言ったらいい。これこそが大和男子の伝統的なヘアースタイルじゃないか。そうだ。忠君愛国的なヘアーヌードというのもあるのかな。沢口ともみさんや風見愛さんのストリップはそうなのかな。

続いて「東京日日新聞」（大正13年6月13日）の投書だ。これも実に論理的な反論だ。大正の女性は賢い。と思ったわさ。

〈私たちの耳隠しが亡国の兆しだと、むきになって怒る方があります。日本って私たちの髪の結い方で興亡するような国でしょうか。愛国をご自分の専有と思うことは止してください。愛国の名の下に無知な一人よがりを強うることが排米なら日本の前途は暗いと思います。
自分たちのみ悲壮がる男子をどうやって信用出来るでしょうか。真実の前に耳隠しをする男子たちこそ、亡国の兆しを醸するのではないでしょうか〉

すごい、すごい。今だって、これだけ堂々と論陣を張れる人はいないよ。「朝生」に出ている論者たちよりも立派だよ。それに、男子こそ、真実の前に耳をおおって聞こうとしない。見ようとしない。これは、卓見です。愛国心を言ってる人間こそ信用できないと、言ってます。大正版「愛国者は信用できるか」ですね。ぜひお会いしたいですね。でも、もう亡くなっているか。
こう見てくると、人間なんて何も進歩してないんだよね。むしろ〈退歩〉してるかもしれん。

そうそう。この「耳隠し論争」は清永孝の『裁かれる大正の女たち』（中公新書）に出てたんですよ。「〈風俗潰乱〉という名の弾圧」とサブタイトルがついている。他にも、いっぱい事件が紹介されていて興味深い。読んでみなせえ。
大正13年をピークに、「耳隠し論争」は全国で起こった。しかし、大正14年には、警視庁が「うす物姿の取締り」に乗り出した。「耳隠し」で大正女性に論破されたんで、今度は「うす着物姿」で復讐したのかしらん。続いて清永はこう結んでおります。

〈…耳隠しの事件からわずか20年後、昭和18年秋の東京に見られた、いかにも戦時下らしい風景もその一つの表れだろう。銀座を通る長袖の着物姿の女性たちに、道端で待ち構えた人たちから一枚の紙切れが手渡されたのだ。
「決戦です！　すぐ、お袖をきって下さい！」というメッセージだ。この様子を伝えるグラビア（「アサヒグラフ」昭和18年9月22日号）の見出しは、「心の長袖を切りましょう」となっている〉

贅沢は敵なんですね。長袖は非国民です。必要もないのに長くたらした袖はいかんのです。必要もないのにふくらませた巨乳も非国民です。大きな人は恥じて、サラシを巻き、しめつけていたのです。だから、ペチャパイの人は皆、愛国者です。今でもそうです。「ほしがりません。勝つまでは！」。終わりです。

【だいありー】



田中義三さん友人葬で（07年2月4日）。右は「人権110番」の千代丸健二さん

(1)2月12日（月）網走に面会に行く。「網走刑務所から帰ってきました」というキャラメルがあったので買ってきた。ロフトの客にあげたら喜ばれた。

(2)2月13日（火）取材。

(3)２月14日（水）大阪の新聞社の人がわざわざ取材に来た。

(4)2月15日（木）河合塾コスモ。

(5)2月16日（金）一日中、図書館にいた。お勉強。夜、柔道。

(6)2月17日（土）５時。全電通ホール。映画「蓋山西（ガイサンシー）とその姉妹たち」の完成上映会。なかなかよかった。班忠義監督とも話をした。この日の新聞を見て驚いた。又しても「ア行殺人事件」だ。荻野亜利沙さん（20）が殺された。殺人で逮捕されたのは右翼団体の鈴木会長（僕ではない）。

(7)2月18日（日）取材。

【お知らせ】

(1)2月19日（月）一水会フォーラム。午後7時から高田馬場のホテルサンルート。講師は三輪和雄さんで、「東京裁判史観とマスコミ」。ぜひ、いらして下さい。この日発売の「週刊朝日」に木村三浩氏、加藤紘一氏、宮崎学氏の座談会が出るそうです。

(2)2月25日（日）午後1時半から3時半。ロフトプラスワンで佐川一政さん（作家）の出版記念トークがあります。私も出ます。佐川さんの近著は『業火』（作品社）です。とてもいい本です。ぜひ読んで、ロフトにいらして下さい。

(3)3月1日（木）7:00p.m.ネーキッドロフト。都知事選候補の外山恒一氏のイベント。私も出ます。

(4)3月２日（金）「週刊朝日」で連載した「ニッポンの右翼・大研究」がアスコムから単行本になって、この日、出ます。

(5)3月6日（火）ポレポレ東中野。大浦信行監督の映画「9.11～8.15日本心中」が再上映されます。この日の夜の回（7:00～）の後に、監督と私のトークがあります。

(6)４月15日（日）7:00p.m.から、ネーキッドロフト。針谷大輔氏と中野ジロー氏の民族派過激トークです。「第2回・塀の中で懲りちゃった面々」。

(7)2月10日（日）の「教育に自由を！」の集会のことを「オーマイニュース」で市民記者の方が紹介して下さいました。ありがとうございました。とても楽しかったです。皆さんも、ぜひ、見て下さい。

HOME

今週の主張

バックナンバー

右翼・左翼の遺伝子

今週の主張２月26日

(1)この国を愛し、抱きしめるには…



小森陽一さん（左）と。（中野ZEROホール）

2月10日（土）、午後7時から中野ZEROホールで「教育に自由を！2.10集会」が行われました。小森陽一さん（東大教授）と僕は対談をしました。楽しかったですし、いろいろと教えられました。「教育基本法」改正問題から話に入りました。改正教育法ではこう書かれています。

〈伝統と文化を尊重し、我が国と郷土を愛し、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う〉

養うべき「態度」という言葉は文の全体にかかるんですね。勿論、「我が国と郷土を愛」する態度も養うのです。「愛する心」を持て、というのではなく、「愛する態度」を養えという。行動的です。攻撃的です。

「国を愛する心」というと、心ですから各人が胸の中にしまっておく。それも可能です。でも、「国を愛する…態度」となると違います。「態度」は行動で示さなくてはいけません。「私は愛国心を持ってますよ」「愛国者ですよ」と大勢の前で叫ばなくてはなりません。それだけでなく、「証拠」や「実績」を示さなくてはなりません。

「幸せなら手を叩こう」という歌がありましたね。「幸せなら手を叩こう。幸せなら態度で示そうよ。ほら、皆で手を叩こう」という歌でした。手を叩くという「態度」「行動」で幸せであることを示すのです。まあ、こんなことは簡単ですし、他愛のない事です。

でも、愛国心を態度で示すということはどういうことか。手を叩いて済むことではありません。「愛する」態度について小森陽一さんはこんなことを言ってました。お母さんが子供を抱きしめる。これは「愛する」態度だし、証明です。恋人同士も抱き合います。さらに接吻し、交わります。これが愛する態度です。愛する行動、証明です。又、愛する人のために、イザという時は命をかける。これも愛する態度です。究極の愛です。

相手が人間なら分かりやすいです。じゃ、相手が国ならばどうか。つまり、国を愛する〈態度〉というのは、どうか。どういう風に愛を示すのか。小森さんに聞かれて私も、分からなくなりました。大体、理詰めで考えることは苦手なんです。頭が緻密には出来てません。だから、面倒だから、こう答えました。

「ウーン、どうなんでしょう。じゃ、日本に接吻することじゃないですか」と。破れかぶれで

す。でも、さすがは東大教授です。それに文学の先生です。

「あっ、大地に接吻するんですね。それもいいですね」

文学的に表現し直してくれました。「あれっ、大地に接吻した人がいたな。誰だっけ」と思っていたら、私の心を読んだのでしょう。「『罪と罰』のラスコーリニコフです」。あっそうだった。小森さんは「日本近代文学」の専攻です。文学には詳しいのです。「国を愛する態度」とは結局のところ、「国のために死ね」という所に行く。そんな国民を国家は作りたいんです。と小森さんは言ってました。

その日の対談の模様は「オーマイニュース」で、市民記者の安住るりさんが書いてくれてます。とてもよくまとまってますし、写真も出てますので、そちらを読んで下さいませ。私の下手なサインまで紹介されていて、恥ずかしいですが…。

当日は会場一杯の人で驚きました。「教育委員会を告発する」「教え子を学校に送れるか」といった報告。「日の丸・君が代裁判」原告、弁護士、市民、若者などの発言もあり、実に活発な、元気のいい集会でした。左翼的な人が多いのでしょうか、私は、こういう集会の方が居心地がいいし、落着きます。というより、考え方の違う人達と話す方が楽しいし、勉強になります。

右翼、保守派の集会ですと、「100%考えが同じはずなのに、ここは違う！」「許せん！」と批判されることが多いので疲れます。ビクビクします。その点、左の人の集会は、「全く考えが違うはずなのに、あれっ、こんなに一致する所がある。話し合えるんだね」というサプライズがあります。

つまり、「許容量」というか許容度の問題なんだわさ。「同じ思想の集団」では許容量が狭い。違う集団だと、許容量が広いのです。

「フーン、右翼は人殺しだと思ってたけど、温和な人じゃん」とか、「全然こわくないじゃん」と思われる。イメージと違う。それだけで喜ばれちゃう。その〈落差〉だけで持ってるようなもんですな、私は。

(2)オルグするなら、双子ですよ

「よど号」事件の田中義三さんについても、それは言えますね。今年1月１日に亡くなりましたが、とてもいい人でした。お互い、初対面で、意気投合しました。「一目惚れ」の恋人みたいです。多分、お互い、許容度が大きかったのでしょう。変に「政治的期待」をしなかったからでしょう。

左右の翼ちゃんたちは、人と会う時には、誰にでも〈期待〉〈作戦〉を持って会います。「こいつをオルグして仲間にしよう」「カンパさせよう」「仲間には出来なくとも、少なくともシンパにしよう。集会に来させよう」…と。そんな功利的観点から人間を見てるのです。私だって昔はそうでしたよ。一水会の若者たちに、「革命マシーンになれ！」と言ってたんですから。全員が「機械」になればいいと思ってたんです。

その点、田中さんと会った時は、そんな作戦、計画は何もありません。白紙の状態であったのです。「北朝鮮の内状を聞いてやろう」というジャーナリスティックな気持ちもありません。変に「求めるもの」「期待するもの」がなかったから仲良くなれたのです。時には変な質問をしても、「あっ、この人は40年も右翼の世界にいたんだから、仕方ないや」と思ってくれたんでしょう。そういう無限の〈許容量〉がお互いにありました。100%違っていても、それを前提にしてるから、一致する所が１%でもあれば、それが嬉しかったんです。

その点、田中さんの「同志」たちは違います。いろんなことがあっても、葬儀には駆けつけら

いいのに、来れない人がいます。「よど号」について暴露・批判本を出した高沢さんとか、喧嘩した塩見さんたちです。僕なんかとは比べものにならない位、親密な同志でした。100%の仲間です。でも途中で考え方が違い、20%か30%、違った。そうなると、もう来れない。僕なんて、99%も違うのに、〈親友〉になっちゃった。何か、申し訳ない気持ちです。

さらに、「よど号」グループがヨーロッパでの拉致にからんでいた、と報道され、田中さんは悩み、孤立します。田中さんの救援をしてた人の中でも去っていく人もいました。

「だから皆、面会に来てくれない」と田中さんは嘆いていました。そんなことはないのですが、そう思えたのでしょう。ブントの代表・荒岱介さんには僕が連絡をして連れて行きました。又、塩見さんとも会わせようとしましたが、それは無理でした。でも変ですよね。かつては敵だった僕が、左翼同士を会わせ、仲直りをさせようと必死になったんですから。

ZEROホールの集会の時も言いましたが、人間には「右と左」があるのではない。「話し合える人と話し合えない人」がいるだけだと。お前とは同じ考えだといいながら、小さな違いも許せない、という狭量な人もいます。考えが違っても、会うとホッとする人もいます。

40年前、大学で殴り合いをしていた〈敵〉でも、今は話し合えるし、なごむ人も多い。反対に、同じ立場だったのに、狭量な人間は今も狭量です。人柄、人徳の問題かもしれません。思想は動産ですが、人柄は不動産なのでしょう。人柄がいい人は、思想はどうあれ、多くの人に愛されるのでしょう。

さて、人間が右翼になり、左翼になるのは何故でしょうか。ちょっとしたキッカケです。人との出会い、環境…そんなもんでしょう。だから、右だったから、左だったからといって、人を差別してはいけません。右だっていい人もいれば、卑怯な人もいます。左だって同じです。

「いや、正しい人が左になり、間違った人が右になる」という人もいます。これは間違ってます。又、「頭のいい人が左になり、頭の悪い人が右になる」という人もいます。これは少し当たっているでしょう。さらに、右になるか、左になるかは、遺伝子が決めるのだ、という人もいます。

双子の話からします。生まれてすぐに引き離され、全く会うこともなかった双子（兄弟）が20年ぶりに会いました。再会というよりは初対面に近いです。でも驚くことに、二人は同じ消防士になっていました。そして同じ服装、同じ口ヒゲをはやしていました。

又、30年たって会った双子（姉妹）は、同じ色の服、同じ髪形で、同じピアスをしてました。「好み」が同じだからでしょう。さらに驚くべき報告があります。一卵性の双子の一方が犯罪者の場合、他方も犯罪者である率は、50%に及ぶという。これはキチンと統計をとって調べたそうです。大石道夫の『DNAの時代・期待と不安』（文春新書）に出てました。

ということは、双子が犯罪を犯したら、即、もう一人を逮捕すればいいんだ。「僕は何もやっちゃいない！」と叫んでも、「ウルセー、近い将来、必ずやる。その確率が50%以上だ」と警察官は言う。うん、未然に犯罪を防止したんだね。映画「マイノリティ・レポート」で似た話があったね。犯罪を予知して、あらかじめ逮捕するんです。この「双子の50%」から作り上げたストーリーかもしれましぇん。

〈犯罪〉と〈思想〉を同じに考えちゃいかんのだろうが。では、右や左はどうなんだろう。それに、体制側にとっては左右は「犯罪者」だ。少なくとも「犯罪者予備軍」だ。

どうせ統計をとるんなら、思想的な統計もとってくれよな。双子の場合、一方が右翼だと、も

う一方も右翼になる。犯罪者の双子は犯罪者になるんだから、多分、そうでしょう。そうするとオルグするのも楽だわさ。一人オルグして仲間に獲得したら、自動的にもう一人がオマケで付いてくる。千人の仲間を勧誘したら、自動的に二千人の仲間が出来る。これはいい。オルグ好きの塩見さんに教えてやろう。何せ、今でも人をみれば喫茶店に連れ込み、１日10時間も話し込んで、オルグしている。

大変な労力だ。時間のムダだ。どうせなら、双子だけを狙いなさいよ、と教えちゃる。そうしたら、双子でない人は助かるだろう。

しかし、双子の活動家っているのかな。右にはいなかったな。左にはいたんだろうか。もしかしたら、生まれた時から双子だということを隠して活動してたりして。爆弾事件や内ゲバ殺人で捕まっても、「私にはアリバイがあります」と主張する。双子のもう一人は、別のとこで皆と飲んでたとか。全員がアリバイを証明してくれる。これだと完全犯罪だ。

ラスベガスの有名マジシャンにはこの手を使ってる人がいる。だから、舞台から消えて、突然、離れた所に現われる。こんなことも出来る。

そうか、生まれた時、双子でも、一人しか出生届を出さない。もう一人は、ひっそりとどこかに隠して育てる。そんで大きくなったらマジシャンか活動家にする。あるいは、彼らに高い値で売る。うん、これは商売にもなるな。双子オークションをやる。やってみよう。そのためには、まず双子を生まなくちゃ。これが難しい。その為には双子と結婚しなくっちゃ。でも、似てるから、間違って接吻したり、抱き合ったりしちゃうよな。それで査問、総括。そんで埋められたりして。「元右翼団体会長の鈴木、殺害される。犯人は双子」と新聞に出ちゃうよ。

(3)「大和心」と「大和魂」の違いは？と聞かれて…

話を戻そう。学生運動の盛んな時。双子はいなかったと思うが、兄弟はよくいた。連合赤軍の加藤三兄弟。中核・革マルの小野田三兄弟。日本赤軍、よど号の岡本兄弟…と。昔は兄弟仲がよかったから、兄ちゃんのやることに弟がついて行ったのだろう。兄弟仲良く。日本文化だ。教育勅語でも言ってたな。

又、お父さんが活動家だったから子供も活動家になる。というのも多かった。しかし、今はないね、こんなの。子供が父の思想を継がない。元日本共産党のNo.4の筆坂秀世さんと対談した時、言ってましたね。「共産党はどんどん老齢化で若い人が入らない」と。じゃ、「産めよ増やせよで、どんどん子供を産んで、入党させればいいでしょう」と私は言った。「でも、子供が皆、入らないんです」。

そうか。親を見て、こんなキツイ活動は嫌だ、と思うのか。そのうち「ゴー宣」を読んで右翼になったりして。これじゃ、〈敵〉のために子供をせっせと産んでるようなもんだ。サケやマンボウの卵のようだ。いくら産んでも、他の魚のエサになってしまう。かわいそうだね。共産党の卵たちは。



筆坂英世さん（右）と

ということで、遺伝子を調べても右翼、左翼は増えないし、左右の翼の出生、増殖、死滅の秘密は解明されませんね。でも大石道夫の『DNAの時代』には面白いことが書かれちょりました。

〈もしDNAを調べることによって、主要な病気にかかるリスク、すなわちその人のある程度の寿命がわかると、病気にかかりやすい、寿命が短いDNAを持っている人と、病気にかかりにくい、寿命が長いDNAを持っている人が同じ額の掛け金を払うのは不合理だという意見が当然出てくるだろう〉

生命保険の話ですよ。これは言えますね。さて、どうする。

〈もし近い将来ゲノムDNAの情報からある病気にかかる可能性がわかったら、その人を被保険者の対象として除く、あるいは高い保険料を請求する。
また雇用に際して会社は、一般に病気になりやすい人を敬遠しがちだが、近い将来、就職希望者のDNA情報を雇う側が安易に入手できるようになったら、どういう事態を招くかは明白だろう。本人にはどうにもならない両親由来のDNAによって、雇用までが制限されることになるのだ〉

こうなったら大変ですね。こうしたことを見越し、アメリカでは、DNA情報を雇用に際し使うことを禁止する法律が出来てます。又、生まれながらの難病を治療するために遺伝子操作を認めるべきだという声もあります。そうすると、治療だけでなく、別の方向にも使われるでしょう。特別な頭脳を持った子を作る。有能なスポーツ選手を作る。有能な右翼を作る（これは無理か）。さてさて未来はどうなるのでせうか。
そうそう。大石の本の中に、こんなエピソードが紹介されていた。寿命というのは、かなり、遺伝子に原因する。
イギリスの哲学者バートランド・ラッセルは、長生きの家系に生まれ97才まで生きたが、「長生きをしたければ良い先祖を選びなさい」といって、普通の人には無理なことを言っている。
ウーン、似たようなことを聞いた。格闘技はグレーシー一族がメチャ強い。かつては、グレーシーにかなう人間はいなかった。その時、ホイラー・グレーシーに雑誌でインタビューした。「強くなるにはどうしたらいいんですか？」と。そしたら何と、「グレーシー一族に生まれることです」。ギャッと思った。一族にしか教えない技があるし、DNAがあるというんですよ。
おっと忘れるところだった。BBSに質問があったね。「大和魂と大和心」だ。僕も余り厳密に考えてこなかったし、混乱して書いた時もあったと思うけど、要はこういうことだと思います。
大和心といえば〈心〉ですから、自分のうちにひっそり持ってればいいんです。「国を愛する心」ですね。穏やかな、静的なものだと思います。まァ、日本人としての心得とか、気持ち、みたいなもんでしょう。まァ、水ですよね。だから一水会もその精神で作ったのです。
それに対し、大和魂は、水が凝縮して固くなった氷でしょう。ツララかな。だから、これは人をも殺せます。「魂」ですから、動的ですし、攻撃的です。他人に示さなくてはいけません。「国を愛する態度」ですね。そんな感じがします。又、ゆっくり考えてみませう。

【おまけ】



網走刑務所で

網走刑務所に行ってきましたが、今、この刑務所の他に、もう一つあるんです。元の刑務所で、今は観光名所になってます。中には蝋人形の囚人もいて、不気味です。入口の売店ではおみやげ品も売ってます。記念テレカも作ってくれます。サンプルを見たら、小太りの男が写っていました。誰かに似てます。えっ、私かな？　でも来たはずがないし。デジャブかな。不思議です。映画「夏子の冒険」と同じように、これも「昭和史の謎」です。

【だいありー】

(1)2月19日（月）午後７時から一水会フォーラム。ホテルサンルート。講師は三輪和雄さんで、「東京裁判とマスコミ」でした。

久しぶりにお会いしました。元気な人です。僕が書いた『行動派のための読書術』（長崎出版）を取り上げ、評価してくれました。ありがたいです。「今でも月30冊のノルマを実行してるんですか？」「ええ。他に能がありませんから」。

この日は、ブラジルから帰国した笹井宏次朗氏も出席してくれました。「日本は暖冬だというが、寒い、寒い！」と震えていました。ブラジルは夏ですからね。リオのカーニバルで、さらに燃えてます。笹井氏は初期一水会を支えた功労者です。演説はうまいし、レコンの編集も長い間やってました。みやま荘で二人で朝までかかって、編集・割り付けをやってました。懐かしいです。

この日、二つの週刊誌に木村三浩氏（一水会代表）が出てました。まずは「週刊朝日」（３月２日号）。ガチンコ対談「今だからわかる加藤邸放火の真実」。木村三浩氏と加藤紘一氏が対談しております。司会は宮崎学氏です。迫力ある対談です。

もう一つは、「サンデー毎日」（３月4日号）。「あえて今、旧竹田宮家御曹司が暴露した。小泉前首相『皇室は最期の抵抗勢力』発言の重大波紋」。木村三浩氏もコメントをしています。

「小泉氏は一体、どこのだれの声を聞いて政治を行ってきたのか。靖国神社参拝にしても、単なるパフォーマンスにすぎない」と厳しく批判しています。

(2)2月20日（火）午後2時。憲法について新聞の取材。７時から下北沢スズナリ。演劇企画集団「THE・ガジラ」の『セルロイド』を見る。なかなか、シリアスで恐い芝居だった。島尾敏雄の『死の棘』を思わせる。又、ある一家の話なのだが、大きく広がって、アジア各国から戦争責任を追及される日本のようでもあった。

終わってから出演した大久保鷹さんたちと近所の居酒屋で飲みました。月蝕歌劇団の高取英さん（社長）と、女優の三坂知絵子さんも一緒でした。先頃の月蝕の「花と蛇」は大評判で、新聞、週刊誌にも大々的に取り上げられてました。「フライデー」（２月23日号）にはこう出てました。

〈演劇の聖地「本多劇場」で団鬼六のエロスが開化。東大大学院卒。才媛女優・三坂知絵子が披

露した『花と蛇』緊縛ヌード〉



塩見孝也さんのトークライブ（ロフトプラスワン）で

彼女は早大を出て、東大大学院に行った。教授の座を目指すのかと思ったら一転、女優になる。そして体当たりの演技。凄いです。大ブレイクです。早大在学中も、芝居をやっており、週刊誌に水着で出てました。その時、「三坂ファン」の男が三人、コメントをしてました。師匠の宮台真司、オルグ魔の塩見孝也、早大の先輩・鈴木邦男です。三人とも三坂さんに憧れてたんでしょう。「三坂知絵子三分割計画」を提案してた男がいました。「一番大事な愛は宮台にあげる。次に大事な思想は塩見にあげる。そして、どうでもいい、抜け殻の肉体は鈴木にあげる。これで解決だ。万万歳だ。三方一両得だ」。一体、誰だったんでしょうか、こんなアホな提案をしてたのは。忘れました。あれも、「フライデー」だったかな。でも、この革命的な「分割計画」は実行されませんでした。残念。

(3)2月21日（水）図書館。取材。

(4)2月22日（木）河合塾コスモ。現代文要約と、基礎教養ゼミ。メルマガ「北海道人」に私の原稿が載りました。

(5)2月23日（金）原稿。夜、柔道。

(6)2月24日（土）昼、ビデオ撮影。AVの。ちゃいまんねん。そんなパワーはあらへん。
夜、芝居を見る。アプラオス第13回公演。高木尋士脚本の芝居「泣き燕逆刃拵え」。よかった。力作です。山口二矢も出てくるのでビックリしました。高木氏は秋には見沢知廉氏を主人公にした芝居をやるそうです。

(7)2月25日（日）１時半からロフトプラスワン。佐川一政さんの『業火』出版記念ライブ。久しぶりに会いました。元気でした。とてもいい本です。文章もうまいし。感動しました。本の内容のこと。両親のこと。見沢氏との交友も含めて、いろいろ聞きました。楽しかったです。

【お知らせ】

(1)2月27日（火）慶応大学でやった連続セミナーをまとめた本が出ます。岩波書店です。

(2)3月1日（木）7:00p.m.ネーキッドロフト。都知事選候補の外山恒一氏のイベント。私も出ます。

(3)3月２日（金）「週刊朝日」で連載した「ニッポンの右翼・大研究」がアスコムから単行本になって、この日、出ます。

(4)3月6日（火）ポレポレ東中野。大浦信行監督の映画「9.11～8.15日本心中」が再上映されます。この日の夜の回（7:00～）の後に、監督と私のトークがあります。

(5)3月12日（月）午後6時30分開場　7時開演　一水会フォーラム。講師は菅沼光弘さん（アジ

ア社会経済開発協会会長）。場所はホテルサンルート高田馬場です。

【お知らせ・おまけ】

先週書いた「２０３高地まげ」のことです。日露戦争の時にはやった髪形です。頭の上に小高く突き出た髪形です。大砲の形かなと思ったら、それがあの山（２０３高地）の形になってたそうです。河合塾の牧野剛先生が教えてくれました。おばあちゃんが、この髪形をしてたそうです。愛国者だったのでせう。でも、牧野先生は学生運動の過激派でした。

HOME

今週の主張

バックナンバー

愉快な沈没。愉快なハイジャック

今週の主張3月5日

(1)全世界を敵に回す覚悟で作った映画だと



昨年公開した映画「日本以外全部沈没」

なにげに見たんですよ。映画「日本以外全部沈没」を。面白かった。という話を前にこのHPで書いた。それで原作を読んでみた。これも、なにげに。昔読んだはずなのに感想は？と聞かれると。ビミョー。映画がメチャ面白くて迫力があったから、原作の方は、フツーってかんじ。これって変じゃナクナイ？

あっいかんな。学校で若者たちと会話していると、なにげに日本語が変になっちゃう。いかんばい。

筒井康隆の『日本以外全部沈没』（角川文庫）を読んだ。表題作を始め、全11巻が収録されている。「パニック短編集」と銘打っている。昭和37年（1962）～昭和51年（1976）に書かれた次の11作だ。

日本以外全部沈没。あるいは酒でいっぱいの海。ヒノマル酒場。パチンコ必勝原理。日本列島七曲り。新宿祭。農協月へ行く。人類の大不調和。アフリカの爆弾。黄金の家。ワイド仇討。

この中では、「農協月へ行く」が一番有名で、この名を冠した文庫本も出ている。しかし私には、「日本列島七曲り」が一番面白かった。まァ、その話は、ゆっくりやるとして、「日本以外全部沈没」だ。小松左京の「日本沈没」のパロディだが、いかんせん、古いやね。その当時は、アハハ、ギャハハと「同時代」的に笑ってられたんだろうが…。どうも〈歴史〉になっちゃってる。へエー、この頃はこんな大物がまだ生きてたのかという、そんな「驚き」の方が先に立っちゃうんだね。で、素直に笑えん。歴史的な笑いになる。

世界中が沈没して、日本列島だけが残っちゃった。世界中から要人、大スターが日本に亡命してくる。フランク・シナトラが東海林太郎のナンバーを歌っている。そこに、毛沢東と周恩来が飲みに来る。でも、「蒋介石が来ている。よその店へ行きましょう」と言って出る。外にはエリザベス・テイラーが夜の女になって客を引いている。オードリー・ヘップバーンも夜の女だ。世界中の大スター、英雄、偉人がこの頃は生きてたんだね。そんで日本にドッと押し寄せて、生きていく為に必死だ。問題を起こしたら「国外退去」だ。即、死だ。だから、日本人のご機嫌をとり、必死に生きていく。

当時はゲラゲラ笑いながら私も読んだんでしょうな。でも、今、読むと、やはり古い。35年近く前の小説だから仕方ないか。その点、去年上映した映画「日本以外全部沈没」は面白い。ブッシュ、小泉、金正日などが出てくるし、同時代のハチャメチャだ。監修は実相寺昭雄、監督は河

崎実。映画の謳い文句はこうだ。

〈日本映画界の鬼才が全世界を敵に回す覚悟で叩きつける国際問題必至の超問題作！〉



1970年の「よど号」ハイジャック事件。（タラップ上で日本刀を構えているのが田中義三さん）

残念ながら「国際問題化」はしなかったけど、面白いことは事実だ。もうビデオ屋に出てるので、見たらよかんべえ。

あっ、そうだ。ハイジャックの話を書こうと思ってたんだ。いかんな、物忘れがひどくて。記憶が80分しかもたん。いや、８分しかもたん。だから、メモ用紙に、あれをする、これをすると書いて貼っておく。そのうち、メモを無くしてパーだわさ。

筒井康隆の『日本以外全部沈没』（角川文庫）はパにニック短編11本が収められているが、この中の「日本列島七曲り」が面白かった。オッ、「よど号」ハイジャックじゃないか、と思った。多分、1970年のハイジャック事件の直後に書いたものだろう。

私だって、考えたことがあるんですよ。「もし、その場にいたら、どうしたろう」と。じっと大人しくしてるか。命をかけてハイジャッカーと闘うか。いやいや、「ラッキー！」と思ったんじゃないかな。おっ「がんばれ！新左翼」と声をかけて、協力したりして。お調子もんだから、こいつは。「じゃ、乗客の手を縛りましょうよ」なんて言って率先して縛ったりして。うん、やりかねないな。事件後、「恐くて、犯人に言われた通りにしただけです」と供述してもダメだろうな。「ウソつけ。自分から喜んでやったくせに！」と他の乗客から告発される。

さて、さて。そんな私の実存的不安を書いてくれたような小説だわさ、これは。　では、筒井の小説だ。紹介する。飛行機がハイジャックされた。日本初のハイジャックだから、やる方も、やられる方も初体験。混乱、パニックだ。

乗客とハイジャッカーの会話だ。

乗客「泥棒じゃねえだか」
犯人「飛行機を乗っ取ったんだ」
乗客「ではやはり飛行機泥棒でねえだか」
犯人「ウルセー、だまってろ」



タイ・チョンブリ裁判所で。左が田中義三さん。右が鈴木（1998年）

ウーン、ハイジャッカーだった田中義三さんに読ましてやりたかったな。だって、タイのチョンブリ刑務所に入ってる時、同房の人たちと同じような会話がかわされていたんだ。「あの日本人は飛行機を乗っ取ったんだそうだよ」「スゲーな」「オレなんか自転車を盗んで捕まったのに、あの男は偉いな。飛行機を盗んだのか」「でも、どうやって運んだんだ。どこへ売っ払ったんだ」

…といった話になったそうな。これは本当だ。田中さんから聞いた。又、2月4日の「田中さん友人葬」

で、宮崎学が、この話を披露していた。「飛行機泥棒の田中さん」としてタイ刑務所では有名だったんだ。

(2)一度位、ハイジャックに会ってみたいね。さて、あなたなら、どうする？

　では、筒井の本だ。人質になった爺さんが言う。

「その日本刀は、本物けえ」
「先祖伝来家宝の名刀、菊正宗だ」
「そんな刀があるもんけ」

「あれま。この人、高倉健そっくりだにい」
と婆さんがいった。
「かっこいい」

　ゲッと思った。これも田中義三さんだにい。だって日本刀を持ってたのは田中さんだ。福岡で女や子供を釈放した時、タラップの上で日本刀を構えて仁王立ちしてたのも田中さんだ。それをテレビで見て、三島由紀夫は「日本刀による決起がいい！」と絶讃した。そして６ヶ月後の三島の決起につながる。三島も「日本刀による決起」だった。　それに、田中さんは男前だし、高倉健に似てた。本人もそうなろうとしていた。ヤクザ映画が好きで、いつも見に行っていた。デモや集会をサボって映画に行き、重信房子によく叱られていた。（これも昔の同志が証言してた）。
　又、活動家は仮名を使う。（コードネームかな）。対警察への警戒心からだ。田中さんは「鶴田健」だった。何のことはない。鶴田浩二と高倉健を合わせたんだ。
　だから、ハイジャックの時、「キャー、かっこいい。健さんみたい」と乗客に言われたんだろう。そんな事情は全く知らないはずなのに、自らの想像力で描き切った筒井は凄い。筒井にパワーがあった時代の作品だからね。鬼気迫るものがある。

　〈現実〉のハイジャックは福岡で女、子供を降ろした。〈小説〉でも、女、子供を釈放しようとする。でもその理由がちゃいまんねん。

〈ひとりの学生が大声で叫んだ。「女の人は降りてください。強姦されるおそれがあります。われわれは若くて精力があり余っていて、女に飢えているからです。ほら、この通りです」　彼はピャーツと鼻血を出してみせた〉

　でも誰も降りようとしない。こんな面白いものに出くわしたんだ。皆、ワクワクしている。女たちだってそうだ。犯されたっていいわ、と思っている。全く脅しが効かない。たまりかねて男がスチュワーデスに「こい！」といってトイレに連れ込む。しかし、しばらくして出て来た時、犯人はしくしく泣いている。スッチーがなぐさめている。「泣かないで。初めてだったんだもん。ムリないわ。ああいうことはよくあることなのよ」

　ハイジャッカーは全員学生だ。ウブなんだわさ。童貞ばかりだから、犯し方も知らん。スッチーにもバカにされる。小説の中では、犯人の中に一人、女子学生がいる。彼女が怒る。「何だ、そのザマは！総括だ！査問だ！」と。いきなり同志をひっぱたく。あらあら、田中さんは殴られちゃったよ（田中さんじゃないかな）。

「ようし、わたしが仇討ちをしてくるわ。おい、そこのおっさん！」

と彼女は指名する。農協のオッさんだ。隣りに奥さんもいる。無理矢理、引き立てられ、トイレに拉致される。そして帰ってきた。犯された男は妻に詫びる。「しかたなかった。許してくれ」

妻が抱きしめて、言うんだわさ。

「気にしないわ。交通事故なんだから。あれは犬に咬まれたみたいなものよ。あなたの体は汚されていないわ。あなたは純潔よ」

美わしい夫婦愛ですね。そんなわけで、ハチャメチャな機中だ。そのうち日本刀を持った男は剣舞をやる。犯人、人質入り乱れてみんなでゴーゴー大会をやる。中には大学の総長が何人かいた。集まって「総長賭博」を開帳する。キャーキャー、わいわい。楽しい旅が続く。

ところが、北朝鮮のピョンヤンでは着陸を拒否される。じゃ、北京かハノイか？　と迷っている時に、機中でコレラが発生する。これでは世界中、どこも引き受け手がない。「さまよえるオランダ人」ならぬ「さまよえる日本人」になってしまった。

さて、どうする、どうなる「よど号」だ。続きは本を買って読んでみなんしょ。

(3)『日本沈没』の秘密。もう一つの「ベン・ハー」。そして「世界標準時」



大正14年（1925年）公開された映画「ベン・ハー」

おまけだ。もう一つ、映画の話だ。昔のDVDを買った。500円で売ってる名画だ。「BEN-HUR（ベン・ハー）」だ。チャールトン・ヘストン主演だ。このHPにも書いた。えーと、いつだったかな。と探してみたらあった。2002年3月11日だ。5年前か。〈昭和天皇と「ベン・ハー」〉というタイトルだ。1960年（昭和35年）に日本で封切られている。多分、史上最高の映画だろう。この時、昭和天皇・皇后が試写会を見ている。初めてのことだ。チャールトン・ヘストンもお出迎えをした。

その「ベン・ハー」ですよ。でも、いくら名作でも、もう何十回も見てるからいいやな、と思ったら、どうも違う。主演が違う。ラモン・ノヴァロ、フランシス・X・ブッシュマン、メイ・マカヴィオ…と出ている。知らない名だ。公開年度を見てビックラこいた。1925年。大正14年だよ。今から82年も前かよ。フーン、どんなもんかなと思って買った。500円なら、まあ、つまらなくてもいいか、と思って。ところが、凄い。驚きの連続だ。

まず、これはサイレント（無声映画）なのだ。勿論、白黒だ。でも、後半、部分的に色がついている。２時間半だ。まだ、コンピューター・グラフィックなどない。人間も船も戦車競争も、ホントにやったんだろう。迫力があった。もしかしたら、本当の戦争のようにやって、大量に人が死んでるんじゃないのか。そんな気さえしましたね。どうやって撮ったんでしょうか。ローマ軍の軍艦が戦うところもいい。ベン・ハーがローマの指揮官メッサアーと戦車競争をするところといい、手に汗握る迫力だ。これに比べたら、1960年の「ベン・ハー」の方が何かチャチに見えるほどだ。嘘だと思うなら見たらいい。

アクションだけでない。宗教の話もある。イエス・キリストも出てくる。「愛と憎しみ」「癒

す力」についても語られている。夜、寝る前にちょっと見て、つまらなかったら捨てようかと思ったら、ひきずり込まれて、一気に見てしまった。

さらに、おまけ。筒井の『日本以外全部沈没』は小松左京の『日本沈没』のパロディだ。ところで小松左京は自らの作品『日本沈没』について面白いことを言ってた。『ＳＦ魂』（新潮新書）で。

なぜ『日本沈没』を書いたかと言われれば、「一億玉砕」「本土決戦」への引っかかりがあったからだ、という。1963年に林房雄の「大東亜戦争肯定論」が出た。小松だって、日本があんな負け方をしたのは悔しい。しかし、戦争末期の「一億玉砕」「本土決戦」という空気はどうしても肯定する気になれなかった、と言う。そこで考えた。

〈政府も軍部も国民も、「一億玉砕」と言って、本当に日本国民がみんな死んでいいと思っていたのか。だったら一度やってみたらどうだ。----そこから、日本がなくなるという設定ができないかと考え始めた〉

そうだったのか。「玉砕」については、私も今、考えている。それを小松は、こういう形で考え、問いつめたんだ。

〈国を消すことで日本人とは何か、日本文化とは何か、そもそも民族とは何か。国家とは何かということを考えることができる。国を失った日本人たちに、小説の中で、それを考えさせることができる〉

この目論見は当たった。1973年に初版を上下３万ずつ出したが売れに売れ、上下で400万部も売れた。反響、批判も多くきた。

〈右翼からも左翼からも文句を言ってきた。右翼は、「あれだけ大事なことを書いていて、天皇という言葉が一回しか出てこないのはどういうことなんだ」　左翼は、「自衛隊を英雄視してけしからん」。左翼系の方がしつこかった〉

去年、リメイク版の映画「日本沈没」が上映されたが、あれだと、天皇陛下を永世中立国のスイスにお移しする…という話だった。

小松は、さらに面白い「その後」を語っている。

〈「日本沈没」は74年の日本推理作家協会賞を受賞し、日本ＳＦ大会のファン投票で選ばれる星雲賞の日本長編部門賞を受賞した。　ちなみに、日本短編部門賞は筒井康隆さんの「日本以外全部沈没」。筒井さんは後に紫綬褒章をもらうわけだけれど、それはこの時日本以外を沈めたからじゃないかという説がある。やっぱり勲章は愛国者でないともらえないらしい〉

これには笑った。小松は日本を沈めたが、筒井は日本を助けた。だから愛国者か。

もう一つ、おまけだ。2月22日（月）に一水会フォーラムがあった時、笹井宏次朗君も出席してくれた。ブラジルから帰国したばかりで、「日本は寒い」と言っていた。それに、ブラジルでは時差が20時間くらいある。でも、「時差をなくそうという動きがあるんだよ」と言ったら、「そんな馬鹿な」と皆に言われた。いや、時差はあるとしても、〈世界標準時〉を作ろうという動きはある。「今、日本時間では何時、ブラジルでは何時、…フランスでは…」といってたら、仕事にならない。それが実現化しつつある。「ありえませんよ」と笹井君は言うし、木村ゼミの女性

たちにも「何、夢みてんの？」「ボケ！」と馬鹿にされた。
　しかし、ネットに詳しい人なら、この〈動き〉を知っている。それに、織田一朗の『「時」の国際バトル』（文春新書）にも出とったが。

〈すでにインターネット上で世界中の人々が参加した会議が開かれたり、電子取引が急拡大しているが、これからは商品をインターネットで世界同時発売するような企業も増えてくるだろう。そうなると、時差を前提にした現行の世界時は繁雑で紛らわしい〉

　それでインターネット上で活用できる「世界標準時」（インターネット・タイム）を設定してはどうか、という動きになったのだ。
　もうすぐにも出来るかもしれない。遅れているのは君たちだ！

【だいありー】



佐川一政さん（中央）の出版記念イベントで。（2月25日ロフト）

(1)2月26日（月）図書館に行きました。夜は柔道に行きました。腰の痛いのも治り、元気に闘っております。骨法整体のおかげです。体も大きくなったような気がしました。24日（土）にビデオに出た時、身長を計られました。173センチでした。「ウワー！　1センチ伸びたよ。運動してるからだ！」と狂喜したら、「靴を履いてるからですよ」。ガクッとしました。
　この日の産経新聞を見て驚きました。快楽亭ブラックさんが東京、渋谷区長選に出馬するという。面白い。外山恒一氏は都知事選に出るし、当選したら、都知事と渋谷区長は私の友達だよ。

(2)2月27日（火）午後３時半から試写会。松田洋子さんの漫画『赤い文化住宅の初子』（太田出版）が映画になったのだ。これは何が何でも見なくてはと渋谷シネ・カノンに駆けつけた。監督はタナダユキ。力作だ。貧乏で、孤独で、切ない初子。「赤毛のアン」は大嫌いだ。でも、いつも一緒にいる。高校受験を控えた初子の闘い、純愛。そして、ひたむきさが伝わってくる。松田洋子さんの少女時代の体験も入っているのだろう。と勝手に思って見た。松田さん本人もワンカット、出演している。
　松田洋子さんは週刊「SPA!」で、「リスペクター」という漫画を連載していた。僕が「夕刻のコペルニクス」を連載していた頃だ。有名人をリスペクト（尊敬）するというか、誉め殺しにする漫画で、実に面白いし、風刺のきいた漫画だった。この漫画が単行本になった時は、僕は松田さんと対談させてもらった。漫画のことだけでなく、「右翼」のこと、「日の丸・君が代」のことなども大いに話をした。
　その松田さんの『赤い文化住宅の初子』が映画になったのだ。5月中旬、渋谷シネ・アミューズでロードショーです。ぜひ見て下さい。

(3)2月28日（水）夜、打ち合わせで銀座に。

(4)3月1日（木）3:00から河合塾コスモ。「現代文」と「基礎教養ゼミ」。今日が今年度最後の授業なので、終わって、食事会をした。
　夜7時からネーキッドロフト。ちょっと遅れてゆく。都知事候補・外山恒一氏のトークライブ。すが秀実さん、山本夜羽さんなどと共に私も出た。大いに盛り上がった「政見放送」の予告ビデ

オは迫力があって面白い。
　すが秀実さんは、元、ジャナ専（ジャーナリスト専門学校）の講師で、とてもお世話になった先生だ。最近出した『1968年』（ちくま新書）は実にいい本だ。1970年はよど号ハイジャック、三島事件があって、印象深いが、じつは1968年こそが世界史を画する歴史的なターニングポイントだったという。特に僕は、「第4章・ヴァーチャルな世界のリアルな誕生」と「第5章・内ゲバ。連合赤軍事件。革命」を面白く読んだ。教えられることも多かった。「右翼と左翼の奇妙なコラボレーション」のところには、私のことも出ていた。
　この日は、そんな話もした。

(5)4月2日（金）夕方まで中野図書館。夜、柔道。

【お知らせ】

(1)去年、国内外の学者、教授、政治家を招待して行った慶応大学経済学部「現代社会史」の連続講義録がまとまり、岩波書店より出版されました。『連続講義。東アジア・日本が問われていること』です。僕も出ております。加藤紘一さん、土井たか子さんなども出ております。

(2)3月２日（金）「週刊朝日」で連載した「ニッポンの右翼・大研究」がアスコムから単行本になって、この日、出ます。宮崎学『右翼の言い分』（アスコム・1600円）です。

(3)3月6日（火）ポレポレ東中野。大浦信行監督の映画「9.11～8.15日本心中」が再上映されます。時間を間違って告知しました。すみません。正しくは、毎日、夜7時からトークです。この日も夜の回（5:30p.m.～）の後に、7:30p.m.より監督と私のトークがあります。

(4)3月7日（水）『創』（4月号）の私の連載は「インターナショナル」です。『論座』（4月号）は驚きです。特集が「グッとくる左翼」です。まるで、「がんばれ！新左翼」ですね。「週刊朝日」が「右翼」特集をしたので、『論座』は「左翼」特集なのでしょうか。

(5)3月12日（月）一水会フォーラム。午後6時30分開場　7時開演。講師は菅沼光弘さん（アジア社会経済開発協会会長）。場所はホテルサンルート高田馬場です。

HOME

今週の主張

バックナンバー

首都騒乱！政府転覆！

今週の主張3月12日

(1)外山恒一氏の勇気ある挑戦だ



外山恒一氏（左）と。（ネーキッドロフト3月1日）

石原都知事の対抗馬が続々と名乗りを上げてますね。黒川紀章さん（建築家）は以前「朝生」でご一緒しました。浅野史郎さんは我が宮城県の知事を３期も務めた人です。丸山弁護士、ふくろう博士も名乗りを上げました。さらに、外山恒一（とやま・こういち）さんが出馬します。

3月1日（木）の夜、ネーキッドロフトで外山さんの出馬宣言がありました。外山さんの他、すが秀実さん、山本夜羽さん（漫画家）、そして私が出ました。供託金が300万円で、それをどうするかの話から始まりました。そういう初歩的、実務的な話から激論するところが実に人間的、庶民的でいいですね。他の大物候補にはないカラーです。

本人のビデオも上映されました。その中で政見放送は、こんな感じでやるという試作盤も披露されました。普段の外山氏とは一転して、やけに迫力のある演説でビックリしました。こんな外山氏は見たことがない。ウン、これを全国的に流すだけでも都知事選に出る意義はある。私は思いました。満員のお客さんもそう思いました。

実は、もう一人ビッグな人が、「都知事選に出たい」と言ってました。本気だったのかどうか分かりません。酒席の発言だったので、私の聞き違いかもしれません。「出たら面白いだろうなー」と言っただけかもしれません。

へたなことを書いちゃマズイので、本人に電話をして確かめました。『エッ、あれは冗談ですよ」と言ってました。「でも300万の供託金があったら、やってみてもいかな」と言ってました。だから名前は書きません。出られたら面白いのに…。と思いました。

では都知事選の話は終わりです。そうそう。石原都知事は野村秋介さんとも親しく、野村さんについての小説、エッセイも書いてます。野村さんのような激烈な生き方をした人への羨望と嫉妬があるのでしょう。又、三島由紀夫論も書いてます。三島、野村両氏に対する嫉妬心、羨望と共にライバル意識もあるのでしょう。都知事の顔とは違った本音の部分が出ています。読んでみたらよかでしょう。

これは人に聞いた話です。「座頭市」シリーズで有名な勝新太郎と石原都知事が会った時です。いきなり勝新は仕込み杖を抜いて石原に斬りかかったそうです。そしてつぶやいたんですな。「い

やな渡世（都政）だな」。笑いましたね。前にこのHPでも書いたかな。志の輔さんかな。続きがある。勝新は大麻をハワイから持ち帰って捕まったことがある。「パンツの中に勝手に入ってた」と言ってた。「これからはパンツをはかない」と反省した。よく分かんないけど、大スターなんだから、いいだろうよ。奥さんは中村玉緒で、今も生きている。勝新の生前の話だ。

家に帰って、呼び鈴を押した。
「ヒロポーン」
玄関に入って言った。
「タイマー」
玉緒が言った
「コカインなさい」

うーん、いい話だ。本当に言ったそうだ。いいんだよ、大スターだから。
さて、「いやな都政（渡世）だな」の話だ。外山さんも、これをキャッチフレーズにやればいい。でもキャッチはもう決まっている。

「政府転覆」


山本夜羽氏、外山氏、鈴木、すが秀実氏

これなんだ。物騒だ。３月10日、ネーキッドロフトに行ったら、ドアに「政府転覆、共同謀議！」と大きく書かれていた。思わず足がすくんだ。オラは気が弱いから、思わず帰ろうかと思っただよ。
ネーキッドは超満員で、激越な意見、提言、罵倒が飛びかい、凄い雰囲気だった。後半、昔の新左翼の人が５、６人入ってきた。山本夜羽氏と激論になった。そんで、何と、取っ組み合いの喧嘩になった。いやー、盛り上げてくれますね。さすがは、「乱闘酒場」「流血酒場」と言われるだけのことはある。ロフトは…。まわりの人は必死に止める。私は思わず叫んじゃった。「とめるな！やらせろ！」と。
大の大人が自らの判断でやってるんだ。自由に、伸び伸びとやらせたらいい。何をやっても警察は入ってこない（あっ、昔、警察を呼んだアホな左翼の親玉がいたけど）。みんな「自己責任」だよ。かつての大学は毎日、こんなことをやってたんだ。
この乱闘劇には皆、驚いていましたね。「やめろ！お前はクリスチャンだろうが！」という声も飛んでました。これは本当です。山本夜羽（ヨハネ）という名前は、キリストの弟子のヨハネからとったんです。この「神の声」にヨハネはハッと我に返ったのでせう。乱闘をやめて、懺悔しロフトの大地に接吻してました。いや、そこまではしなかったか。「剣によって立つものは剣によって滅ぶ」「右の頬を打たれたら、左の頬を出しなさい」とイエスは教えている。そう言って、ヨハネをいましめました。私も。でも、さっきは、「とめるな！やらせろ！」と叫んでたんだし。いかんな。ミッションスクール出身の私も。懺悔です。

(2)私も熱くなって、過激派だった昔を思い出しましたよ

思い出しました。学生時代、内内ゲバがあった。突然殴り合いが始まった。「やらせりゃいいだろう」と私は思って、見とった。そしたら、一人が後ろから抱きついて止めた。頭に来たん

で、その止めてる奴に私は抱きついて止めた。「止めるな！やらせろ！」と身をもって示した。そしたら、そいつが殴りかかって来た。何だこの野郎。と私は思った。じゃ、こっちも「正当防衛」だ。殴り返した。そして乱闘が始まった。気がついたら、はじめ喧嘩してた二人はもう終わっている。「あれっ、君ら、何で喧嘩してんの？」と言われた。何でだったのかな。

だから暴力はいけない、ということですよ。山本夜羽氏はクリスチャンだ。教会で結婚式をあげた。何年か前だ。私は招待された。嬉しかったですね。一度、教会の結婚式に出たかったんだ。だって、ミッション・スクールでは毎日、聖書を読み、讃美歌をうたっていた。ところが右翼になってからは、そんな清らかな時間はない。街宣車で怒鳴ったり、軍歌をかけて走ったりばかりだ。聖なるものに憧れた。「聖なる聖なる聖なるかーな…」と讃美歌をうたいたい。でも、カラオケに行っても全くない。

そんな讃美歌に飢えていた時だったので夜羽氏の結婚式は嬉しかった。聖書を読み、讃美歌をうたって、感動した。終わって食事が出た。「粗末なものですが」と新郎新婦は言う。まァ、謙遜してるんだ…と思った。結婚式の食事なんだから、と。（いやしいね）。期待したんですな、私は。ところが、本当に粗末だった。紙コップでビールを飲み、サンドイッチとつまみだけ。当時、「週刊SPA!」に連載を持ってたんで、「本当に粗末だった」と書いた。幼な子のような清らかな素直な目で、その通りを書いたのだ。でも夜羽夫妻は激怒した。すみませんでしたね。もう10年近く前かな。遅すぎましたが、懺悔します。あれは間違いでした。千円か二千円の会費では文句を言えません。それに、本当は豪華な食事でした。みんな、おいしくいただき、こんな素晴らしいご馳走はないと皆、言ってました。お腹もふくれました。

さて、「いやな都政（渡世）」の話です。だから、「渡世」というのは、〈ヤクザ的な生き方〉の意味で使われます。「世の中を渡る」だから、本当は、「生き方」「人生」の意味です。でも、いい意味では使われません。政治家か自分のことを「渡世」とは言いません。大学教授も評論家も言いません。アウトローの、無頼の「生き方」を言うんでしょうな。この「渡世」という言葉だ。「渡世人」とか。「ヤクザ渡世」とか。すべて、「ヤクザ」を表わしてます。

だから、この人が「渡世」と言った時には驚きました。『わたしの渡世日記』（文春文庫）です。ヤクザが書いたと思うでしょう。でも、ちゃいまんねん。高峰秀子です。「極道の女」ではありません。女優です。大女優です。「戦後日本のトップ５人」を選ぶとしたら、必ず入る人です。この『渡世日記』が、実にいい本です。名作です。名文です。そういっちゃ失礼だが、この人は、ほとんど学校に行ってない。小さい時から子役をやってて学校なんか行けない。九九も知らなかった。字もよく知らなかった。でも、文がうまいんですよ。今のタレントのように、誰かに書いてもらうんじゃない。高峰は自分で書いてる。でも人生経験が豊富だからでしょう。それが文にあらわれている。

「現代文」のテキストにもなる。ライターを目指す人には、いい「教科書」であり、「参考書」になります。この自叙伝を、大作家・川口松太郎が「人生の指導書」と絶讃しました。又、これは「日本エッセイスト・クラブ賞」を受賞しています。

(3)「渡世人」高峰秀子の凄絶な人生…

高峰秀子は大正13（1924）年北海道生れです。生きていれば83才です。失礼、生きてます。83才で元気です。５才のときから「子役」として映画界にデビュー。その後、「二十四の瞳」「浮雲」「名もなく貧しく美しく」など多数の映画に出演。

木下恵介監督の「二十四の瞳」は何度も映画化されている。田中裕子とか、あと誰だっけ。でも、高峰を超えるものはない。（何という偶然でしょう。現在、銀座の東劇で「二十四の瞳」のデジタルリマスター版が上映されてます。見たらよかでしょう）

「浮雲」など、成瀬巳喜男（みきお）監督の作品にも多く出ている。「ラピュタ阿佐ケ谷」で「成瀬巳喜男特集」があった時に毎日通って全部観た。よかった。何年前かな。5、６年前かな。仕事がなく、暇だった時だ（今も暇だけど）。成瀬巳喜男は余り知らなかった。こんないい映画を撮ってたのかと驚いた。私のような心の冷たい人間でも、胸が熱くなる。ついホロリとして涙ぐんでしまう。「なるせ・みきお」だが、「やるせなきお」と言われたらしい。人生のやるせなさを描いたら第一人者だ。ビデオ屋では「成瀬監督」のコーナーがあるので見たらいいでしょう。

その「成瀬特集」の時、この高峰の本も売ってたんですよ。女優の本なんて、どうせゴーストライターが書いたもんやろう、と思って、パラパラとめくったんです。ところが違う。本人の文だ。本人にしか書けない〈人生〉の凄まじさが出ている。

華麗でうまい、という文章ではないが、味わいのある、いい文章だ。体験した本人にしか書けないという文章だ。ひきこまれた。それで買った。家に帰って読むのも、もどかしくて、阿佐ケ谷の「ルノアール」で４時間かけて上下二冊を読んだ。いやー、いい本に出会ったな、と思った。

この本の裏表紙には、こう書かれている。

〈女優・高峰秀子は、いかにして生まれたか。複雑な家庭環境、義母との確執、映画デビュー、義父・東海林太郎との別れ、青年・黒澤明との初恋など、波瀾の半生を常に明るく前向きに生きた著者が、ユーモアあふれる筆で綴った、日本エッセイスト・クラブ賞受賞の傑作自叙エッセイ〉



高峰秀子『わたしの渡世日記』

「子役」「女優」という枠や殻にはまりたくないと思ったのだろう。スターという虚像から逃れようと、７ヶ月のパリ独り暮らしをしたり、谷崎潤一郎や志賀直哉、梅原龍三郎らとの交友を楽しんだりした。この『わたしの渡世日記』は上下巻とも梅原龍三郎が描いている。なんとも贅沢な表紙だ。こんな豪華な表紙は他にないよ。

彼女はずっと「学歴コンプレックス」に悩んでいた。学校にも行かないで、「子役」をやってたからだ。

〈もう小学校どころの騒ぎではなかった。朝から晩まで、私は助監督の背中から背中に運ばれ、カメラの前に立たされ、それが何という題名の映画なのかも知らず、監督の言うセリフをオウム返しに喋っていた。私は、言ってみれば猿まわしの猿であった〉

〈猿〉だと言っている。凄いね。でも、世の中の「常識」は知らない。12才になったころ、初潮をみて、「お尻がやぶれた！」と叫んだ。同じ年の女の子に比べて、自分は何と物知らずの人間なんだろう…と悩む。30才で結婚した時の話だ。ここが一番、印象的だった。

〈三十歳で松山善三と結婚した私が、二ケタ以上の掛け算に首をひねっているのを見た彼ははじめの内、私がカマトトぶっているのだと本気で思ったらしい。が、冗談ではない。私のほうは真剣に困っていたのである。九九も満足に言えない私を、彼はようやく信用（？）したらしく、掛け算や割り算を教えてくれた。分からない字があると、そこらの新聞や雑誌をガサゴソひっくり返して、それらしい似た字を探している私を見た彼は、しばしあっけにとられていたが、私を神田の本屋に連れて行き、「国語辞典」なるものを買ってくれて、その引きかたを教えてくれた。私は三十歳になるまで、辞書をひいたこともなければ、「漢和大辞典」などというおそろしい本のあることも知らなかった。私は結婚すると同時に、タダの家庭教師を獲得したわけである。
私はしゃにむに勉強がしたかった〉

これは感動的なシーンだ。サリヴァン先生とヘレン・ケラーのようじゃないか。水に手を入れて、「WATER」という字を教える。本で読みましたね。
でも、高峰は30才だ。それでロクに漢字も読めないし、九九も知らない。辞書なんて、見たことも使ったこともない。でも、そんな人が、「二十四の瞳」では大石先生をやって、子供を教える。又、映画を観た何百万という人を感動させ、泣かせた。でも、でも。その「大石先生」は、九九を知らない。掛け算、割り算も知らない。漢字も知らなかったんだ。これは驚きだ。
考えてみりゃ、僕らだって、九九なんてよく知らない。7×8はいくらかな。8×9はいくらかな。君らだって、すぐには答えられないだろうが。ましてや分数の足し算ゃ引き算なんて出来んだろう。私はもう出来ん。分数や小数点なんて使うことはない。通分もしたことがない。そんなもの必要ないんだよ。知らなくっても大女優になれたんだし。

(4)〈映画の力〉で戦争を止めてみろよ！

彼女が子役をやってた時だ。山本嘉次郎演出の「綴方教室」に出演した。これもいい映画だ。この映画については前にこのHPでも書いたので見てほしい。さて、高峰の文だ。

〈この映画は、ブリキ屋の娘である豊田正子が綴方に書いた生活記録で、出版されると同時にたくさんの人々の反響を呼んだ。貧しい家の、貧しい記録であったが、少女豊田正子の眼は生き生きと、その貧しさの背後にある世の中の不平等に向けられていた。彼女と私の貧しさは、はた目から見れば大きな違いがあったこもしれないけれど、私もまた、その不平等を荷物に背負わされた、貧しい少女の一人であった〉

なるほど、うまいですね。〈天才子役〉として、皆にチヤホヤされ、人気はある、お金はある。しかし、学校に行けなくて九九も漢字も知らない。それを、「貧しい少女」と表現している。この感性がいい。今なら、こんなタレントなら、それだけで、何の疑問も持たず、生活をエンジョイして、天下をとった気になるだろう。「九九や漢字なんか必要ないよ」「こんなに有名なんだ」「何だって買えるよ」と驕りたかぶるだろうに…。高峰は違ってたんですね。

戦争中のことだ。彼女は、何本もの戦争映画、国策映画に出させられた。撮影所には軍服に軍刀をさげた陸軍将校が、のべつまくなし姿をあらわし、威張っていた。
ある日、撮影所でマル秘の試写が行なわれた。陸軍が南方で押収した外国フィルムの特別公開だという。数人の軍人を中心に映写がはじまる。当時の日本では上映禁止だったアメリカ映画だった。それも生まれて初めて見るテクニカラーの「風と共に去りぬ」と、ウォルト・ディズニー

のアニメーション・フィルム「ファンタジア」の二本だった。



「大日本国防婦人会」のたすきをかけた高峰秀子（13才頃）

〈軍が何の目的で、この映画の試写をしたのか知らないけれど、「風と共に去りぬ」のヒロイン、ヴィヴィアン・リーの美しさ、ストーリーの美しさ、面白さ、「ファンタジア」の画面に流れるチャイコフスキーの「胡桃割り人形」の素晴らしいオーケストラ演奏…。

私は闇の中で興奮していた。しびれるような感動とショックの連続であった。二本の映画が上映された五時間ほどの間、私は、何か得体の知れない「栄養」が身体の隅々まで浸透するような快さに、われを忘れ、時間を忘れ、ついでに戦争も忘れていた。

試写が終わって、ドアが開かれ、夕闇のせまった戸外へ出たとき、だれかの、呟きとも、ひとり言ともつかない声が低く聞こえた。

「こんな映画を作っている国と戦争しちゃ、まずいな…」〉

この二作品は、今見ても凄いと思う。山本五十六だったかな。アメリカで戦前、「ファンタジア」を見て、やはり同じことを言っていた。だから「半年か１年なら思い切って暴れてみせますが、それ以上は無理です」と言っていた。でも、「バカヤロー、アメリカの〈物量〉には、日本の〈精神〉で闘うんだ！」と言ってた単細胞な軍人たちが多かったんで、日本は無謀な戦争に突入した。映画人も、直接見なくとも、アメリカ映画の素晴らしさは知っていたんだろう。だったら、「こんな国と戦争しちゃまずいな」と開戦前に大声で言わなくちゃ。それで逮捕されてもいいじゃないか。仕事がなくなってもいいじゃないか。と僕も、今だから言えるのかもしれないが…。

考えさせられる高峰の本だった。

【だいありー】

(1)３月４日（日）午前10から３時まで、東京フォーラム。「生長の家講習会」。昔の仲間が券を送ってくれたので。谷口雅宣、純子先生のご講話を聞きました。よかったです。谷口雅春先生の『叡知の断片』を買いました。昔の仲間たちにも会いました。犬塚哲爾氏も聞きに来ていました。

終わってから、東京フォーラムの中にある「相田みつを美術館」を見ました。本も買いました。相田の詩を熱心に写している若者がいました。僕も気にいった詩をノートに写しました。今日は何も仕事はしませんでした。でも、精神的な、心洗われる一日でした。得体の知れない「栄養」が身体の隅々まで浸透しました。こんな日もあっていい。人間だもん。

「やれなかった、やらなかった。どっちかな」

「しあわせはいつも自分のこころがきめる」

「アレもコレも　ほしがるなよ」

「夢はでっかく　根はふかく」

(2)３月５日（月）ジャナ専のレポートの採点。かなりの数のレポートを見た。皆、がんばって書いている。「時事問題」は「どうする、憲法９条」。「現代史」は「愛国心と愛郷心」。読んでいて自分も教えられた。
　夜、柔道。フランス人、中国人と闘った。叩きのめされた。やはり、日本は弱い。オラが弱いだけか。バテた。

(3)３月６日（火）午後７時からポレポレ東中野で「日本心中　9.11～8.15」の監督・大浦信行さんとトーク。〈映画の力〉について話した。今週書いた高峰秀子の話もした。又、最近観て感動した「グッドバイ・レーニン」と昔の日本の戦争映画「キスカ」の話をした。「横浜メリー」の話もした。終わって、近くの居酒屋で飲んだ。「ベン・ハー」「クオヴァデイス」。それにスカーレット・ヨハンソンの「真珠の首飾りの女」「マッチ　ポイント」などの話もした。ビデオ、DVDを週４本見てる。忙しい時は、電車の中でパソコンで見ている。劇場で見逃した名作を見ている。これもノルマだ。アルパチーノの「ヴェニスの商人」もよかったな。宅配便の仕事をしてる関口君は、「日本心中」の１、２を今日、通しで見たという。その前に池袋文芸座で高倉健の「日本侠客伝」を２本見たという。凄い。１日に４本か。若いから体力があるのだろう。「田中義三さんは健さんが好きだと聞いたので」と言ってた。田中さんに代わって礼を言いました。
　高木尋士さんも来ていた。今年９月に見沢知廉氏を主人公にした芝居をやる。もう紹介ブログが出来てるので見て下さい。実は、大浦監督も「見沢知廉の映画を作りたい」と言っている。それでお二人を私が紹介したわけです。二人は見沢論で話が盛り上がっておりました。

(4)３月７日（水）午後１時から京橋の日本映画美学校でソクーロフ監督の「ロストロポーヴィチ・人生の祭典」。いやー、いい映画でした。これこそ本当の音楽だと思いました。我々、日本人は日々、貧しい音楽しか聴いてない。不幸な民だよ。ソクーロフさんは、あの「太陽」の監督です。今年の４月、シアター・イメージフォーラムで公開されます。見て下さい。
　３時から河合塾コスモ。「基礎教養ゼミ」の補講。筒井功『サンカの真実・三角寛の虚構』（文春新書）と、鈴木直『輸入学問の功罪』（ちくま新書）を皆で読みました。衝撃的な本でした。勉強になりました。

(5)３月８日（木）10:30a.m.から河合塾コスモ。全体会議。2:00p.m.から生徒たちの一年の締めくくりイベント「千秋楽」に付き合う。おでんを食べたり、生徒の芝居を見たり…。

(6)３月９日（金）原稿。夜、柔道。今日も外国人と闘う。体が痛い。

(7)３月10日（土）午後１時から「戦場体験放映保存の会」総会に出席しました。渋谷区勤労福祉会館です。
　上田哲さんに会った。若松孝二監督の「首相官邸の女」を見た。昔の映画だ。上田さんも特別出演していた。その話をしたら懐かしがっていた。

(8)３月11日（日）午後１時から。又、ビデオの撮影。夜までかかった。

【お知らせ】

(1)３月12日（月）一水会フォーラム。午後6時30分開場　7時開演。講師は菅沼光弘さん（アジア社会経済開発協会会長）。場所はホテルサンルート高田馬場です。

(2) ３月13日（火）「月刊タイムス」（４月号）発売。野村秋介さんが「風の会」を立ち上げて参院選に出た。あの時の話を書きました。

(3) ４月15日（日）7:00p.m.ネーキッドロフト。針谷大輔、中野ジロー氏らのトークがあります。

(4)ちょっと早いのですが。９月６日（木）から９日（日）まで、見沢知廉氏の芝居が行われます。高木尋士さんの脚本です。意欲的な見沢知廉物語です。ご期待下さい。

(5)快楽亭ブラックさん（落語家）が渋谷区長選に出るのは本当なんですね。推薦人を頼まれたので、推薦、激励の言葉をおくりました。

HOME

今週の主張

親父について
＝「私のアーカイブス」第１弾です＝

今週の主張3月19日

バックナンバー

(1)税務署長だった父・鈴木一郎について…



父親です

初めの写真を見てほしい。私の父です。赤ん坊は当然、私です。と思いましたが、違いました。兄貴です。長男です。長男が生まれた喜びで、父は写真館に行って撮ったのです。これで後継ぎは出来た。鈴木家も安泰だ、という歓喜、安堵、誇りが感じられる写真です。父は税務署長でした。明治人の気骨が感じられるいい写真です。（写真の裏を見たら、「昭和10年11月28日。１才誕生」と書かれていました）

でも、この写真は特別です。長男が生まれたんで、喜んで写真館に行ったのです。他の子供たちの時は、そんな「記念撮影」はありません。姉も、次男（私）も、三男（弟）も…。長男が生まれたからもういいや、と思ったのでしょうか。「附録」の私たちに写真はありません。

いや、少しは写真がありました。そんな気がします。昔、自分の赤ん坊の写真を見たことがあります。ムシロが敷かれていて、その上で私はハイハイをしてました。これが生まれて初めての写真です。ムシロの上で放し飼いにされていたんです。でも、本当にその写真があったのか、自分の記憶なのか。よく分かりません。写真が見つかったら又、紹介しましょう。

他には、税務署の入口で父と撮った写真がありました。うろ覚えですが。父からリンゴをもらった気がします。税務署までハイハイをして行ったんで、「おっ偉い。感心だ」といってリンゴをもらったんでしょう。いや、違うな。幼稚園の頃だろう。あるいは前世の記憶かもしれません。

リンゴは貴重品だったんですね。幼稚園は秋田県の横手市でした。隣りの家の女の子が、リンゴを食べてました。「あっ、いいな」と言ったら、「じゃ、あげる」と食べかけのリンゴをくれました。半分以上ありましたが、私は全部食べました。そしたら、女の子の母親にひどく叱られました。「このリンゴはこの子の昼ゴハンなのよ！」。リンゴ一個が昼ゴハンだったんです。日本は貧しかったのです。子供心に「悪いことをした」「申し訳ない」と思い、以来、自虐的な子供になりました。アダムとイブのような話ですね。だから、家に引き篭もって絵日記ばかり書いてました。

もうちょっと頭が良ければ、「これは日本の社会構造が悪いからだ」「格差社会がいけん」といって、社会の矛盾に気づいて、「マルクス・ベイビー」になったでしょう。あるいは、貧困のあ

りのままを書いて、豊田正子のように「綴方教室」になったでしょう。でも、そんな文才もなく、批判精神もなかったので、ただ、絵日記を書いてるだけでした。隣りの女の子も、もう還暦でしょうね。すみませんでした。読んでいたら連絡下さい。リンゴを返しますから。

さて、話は変わります。又、父に戻ってくるんですが、少し横道です。

NHKの「アーカイブス」は実にいい番組です。昔、放映したいい番組を再度放映し、現在に於ける意義を考える。「硫黄島」は、昨今の映画よりもずっといい。戦争の愚かさや、「玉砕」の真実がよく出ていた。又、徳島にあったドイツ人俘虜収容所の話も感動的だった。第一次大戦や日露戦争の頃は、日本人も優しかった。捕虜に対しても優しかった。「全力を尽くして戦い、敗れたんだ。それは恥ではない。よく闘った証拠だ」といって捕虜を優遇した。徳島のドイツ人捕虜は、街を自由に歩き、音楽や料理を人々に教えたりした。こんな日本人がいたことは誇りだ。ところが大東亜戦争では、「捕虜になることは恥だ」「死ね」と自国民に強制した。「玉砕」という美名のもとに。何ということだ。

そのことは又、じっくり考えてみたい。「玉砕」の問題も考えてみたい。でも今は、「アーカイブス」だ。私のアーカイブスも、このHPでは、少しずつ、やっていこうと思っている。「アーカイブス・クニョニョン」だ。私の小学校の「絵日記」を紹介したが、あれもその一環だ。

(2)15年前、「文芸春秋」に載ったんだ



『オヤジとおふくろ』（文春文庫）

では、今回は、私の父親のことだ。父親について書いたのは、多分、これだけだと思う。母親については、『新右翼』（彩流社）など、いろんな所に少しずつ書いてきた。母は「生長の家」の熱烈な信者であり、その影響で私も、宗教や天皇制、民族主義に目覚めた。いわば新右翼になる原点が母親にあった。しかし、父親はどうか。そんな思想的な影響は受けてない。しかし、〈生きかた〉の点では多くを学んだ。又、その姿勢を私はなぞっているのかもしれない。

それは、こうして「書く」ことによって発見し、確認したことだ。ボーッと頭の中で考え、あるいは話をしても、思い出せないことだ。「書く」ことによって過去の記憶も思い出す。次から次と思い出す。そして知らなかった〈影響〉に気づかされる。

だから、この本に書いたことは大きかった。原稿を依頼されなかったら、自分の中で、「父親像」は、未だに漠然としたままだったろう。

文芸春秋編の『オヤジとおふくろ』（文春文庫・448円）。これがそうだ。1999年４月10日第１刷になっている。平成11年だ。８年前に出た本だ。これは月刊「文芸春秋」の1985年２月号～1996年10月号に載った連載「オヤジとおふくろ」をまとめたものだ。私の原稿は、92年（平成4年）５月号に載ったのだ。

「文芸春秋」に原稿が載ったのは、これが初めてだ。父親が亡くなって、２年後位だった。この依頼があったので父親のことを見詰め直し、考えてみた。自分との距離や影響についても考えた。文春には、ありがたいキッカケを与えてもらったと思う。私のタイトルは「古本を買ってはダメだ」。古本屋の人には申し訳ないが、明治人の頑固さ、ポリシーが出ている言葉だと思っ

て、今も覚えている。今は私も古本屋からはよく買っているし、古本屋の友人もいて、お世話になっている。それに、「本を手放す」「本を売る」という側の気持ち、状況が今と昔では、全く違う。そんなことを考えながら読んでもらえればと思う。

ところで、この『オヤジとおふくろ』は、いきなり文庫になっている。普通なら、連載されたものは、まず単行本になり、それから数年して文庫になるのに…。それに「文芸春秋」の1985年２月号から1996年10月号に連載されたという。すると141回、載ったわけだ。本の裏表紙には、こう書かれている。

〈「文芸春秋」の長期連載から厳選した父母への想い、全100篇を収録〉



父（左）と私

厳選されて私の原稿も載せてもらった。ありがたい。感動だ。しかし、同時に、厳選されて落とされた41人の人々には申し訳ない。誰が落とされたんでしょう。つまらなかったからか。内容にヤバイ所があったからか。いろいろ妄想してしまう。ともかく、落とされた人には申し訳ない。私ごときが入り、そのために落とされたなんて…。

100人だから、実に様々な「父、母」がいる。

〈一度も叱らなかった淀川長治の母、荒木経惟に初めてカメラを与えたゲタ屋の父。カフェーのマダムだった美輪明宏の母は、変幻自在の艶姿で長崎の男たちを魅了した。保坂正康が、反発し続けた父の死の直前、全ての仕事をなげうって調べた彼の苛酷な過去とは…〉

裏表紙にはこう書かれている。他には、こんな人たちが書いている。渡辺美智雄、赤塚不二雄、滝田ゆう、金田一春彦、中島らも、阿川佐和子、呉智英、南伸坊、小林亜星、小池百合子、小川和久、福田和也、大前研一…。

「百人の親の姿」が出ていて実に興味深い。それに「親を語る」ことは、即、「自分を語る」ことだ。自分の原点を語ることだ。そう思った。読みやすい本だし、百人の原風景も分かる。本屋にあるだろう。なかったら、「古本屋で買いなさい！」

では私の原稿、「古本を買ってはダメだ」

「お父さんは本当に姿勢がいいですね。いつも背筋をピンと伸ばして座っているし」

と、家に来る人は皆、そう言っていた。テレビを見る時でも常に正座していたし、あぐらをかいたのを見たことがない。外に出る時は背広にネクタイ。家にいる時は和服で正座。そう自分で決めていたように頑に守っていた。それが自分の憲法だったのかもしれない。あるいは明治生まれの気骨だったのか。だらしのない格好が嫌いだった。服装においても、精神面においても、自分には厳しく他人には優しかった。そんな父だった。だから愚痴はこぼさなかったし、他人の悪口も言わなかった。

「自分の誕生日は国民みんなが祝ってくれる」と、よく言っていた。昭和天皇と同じ四月二十九日が誕生日だった。年は父の方が二歳下だった（だから皇太后さまと同じ年になる）。そして昭和天皇崩御の二年後に父も亡くなった。こういう偶然もあるものだ。

だから息子が民族派の運動に入ったのか、などと勘違いしないでほしい。そういった方面には父は関心はなかった。むしろ母の方からそうした面は影響を受けた。母が入信していた「生長の

家」を通じて、神さまや天皇陛下のこと、国のことを教わった。父はリベラルで、政治や宗教の運動には無関心を装っていたが、でも好意的に見守っていた。

僕が「生長の家」の本部に入り、宗教活動に専従しようかと悩んでいた時（二十代後半だったと思う）、父がポツリと言った。

「他人の為に愛行しようと思ったら、まず自分が自立して生活することだ。その上でやるべきだ。給料をもらってやったり、他人の献金をあてにして宗教活動や政治運動をするのは間違っている……」と。

そうなのかなあと思ったが、今ではこれは真理だと思っている。宗教活動ではなく政治運動に走ることになったが、一人一人が自立した上での運動というのは今でも心がけている。　父は子供の教育にはとりわけ気をつかっていた。税務署に勤め、二、三年おきに転勤という生活をしていたが、これではダメだ、都会の学校に子供を入れなくてはと決断し、税務署を辞め、仙台に移った。又、本は大切にしろといつも父から言われた。本をまたいで叱られたことを今でもはっきりとおぼえている。「古本を買ってはダメだ。貧乏で泣く泣く本を売り払った人の恨みがこもっているから」とも言っていた。自分の体験だったのかもしれない。だから本は大切にしてきた。今でもそれは変わらない。民族運動や宗教から多くのことを学んできたと思ったが、今にして思えば案外と父の生き方から一番多くを学んでいたのだ。

本の思い出は最後まである。父の出棺の時、葬儀社の人が「息子さんの新しい本を一緒に入れましょう」と言ってくれた。「読みやすいように ページを開いて入れますからね」と入れてくれた。思わず涙がこみ上げてきた。

【お知らせ・特別版】



『連続講義・東アジア。日本が問われていること』（岩波書店）

はい、いかがでしたか。私の「アーカイブス」が終わったところで、次は慶応の本の話です。

前にも紹介したが、『連続講義・東アジア。日本が問われていること』（岩波書店）は、実にいい本だ。去年の夏、慶応大学経済学部で１ヶ月にわたって行われた連続講義「現代社会史」の記録だ。学生、それに社会人の受講者で連日超満員。大盛況だった。その熱気が伝わってくる記録だ。松村高夫、高草木光一両教授が編集をしている。そして講演者は次の14人だ。

嶌信彦、藤原作弥、金子勝、加藤紘一、田中秀征、土井たか子、小川和久、鈴木邦男、加藤哲郎、久保孝雄、草刈隆郎、殿平善彦、歩平、池明観。

本の帯にはこう書かれている。

〈「東アジア共通の価値」はあるのか？東アジアのスタンダードを創造するために、日本が抱える諸問題にチャレンジする。各界識者による連続講義〉

第１部は東アジアの中の日本

第２部　特別講義（池明観）

第３部　日本の選択

第４部　共同討議

という構成だ。私は第３部の第２章に出ている。「まえがき」で松村先生はこう紹介している。

〈第二章「天皇制と民主主義」では、民族派団体・一水会顧問で、新右翼の代表的論客、鈴木邦男氏と、天皇制を民主主義にとって異質な要素として批判する政治学者、加藤哲郎氏に真っ向から対決してもらった。ここでも問題になったのは天皇制だけではなく、日本の戦後民主主義の「質」が対アジア、対世界との関係で問題にされた〉

去年（2006年）７月７日に行われた。朝から夕方まで一日中だ。午前中に、「天皇制の現在と未来」を私が講義し、昼食をはさんで、加藤哲郎さんが「〈天皇制民主主義〉論」を講義する。そして、二人の討議。会場の質問を受けての対論と続く。この本では、28ページにまとめられている。速記者が優秀で、よくまとまっている。

加藤哲郎さんは一橋大学教授。『国家論のルネサンス』（青木書房）、『戦後意識の変貌』（岩波書店）などの著書がある。2005年に出した『象徴天皇制の起源--アメリカの心理戦「日本計画」』（平凡社新書）は衝撃的な本だ。敗戦のドサクサに「象徴天皇制」が生まれたのではない。かなり以前からアメリカはそれを考えていた。そのことをアメリカの原資料から解明している。講演の中では、この本について、こう話している。

〈1942年６月、つまり開戦半年の日本がまだ勝利に酔っている時期に、アメリカのＯＳＳ（現在のＣＩＡの前身である戦略情報局では、日本の政治・経済・文化を詳細に分析して、「天皇を平和のシンボルとして利用する」計画を立てていました。ワシントンの米国国立文書館に眠っていたその「日本計画」という文書は、私が発見して記者会見を行ない、『世界』2004年12月号に発表しました。その中には、たとえば、「天皇は、西洋における国旗のような名誉あるシンボルであり、政治的・軍事的行動の正当化に利用されている。天皇シンボルを、軍当局への批判の正当化に用いることは可能だし、和平への復帰の状況を強めることに用いることもできる」という一節があります〉

そして戦後の「天皇制民主主義」は始まった。民主主義は本来、闘いとるものだが、日本では、こうして与えられ、いろいろな矛盾を含んだまま進行してきたと加藤さんは言う。天皇制と国民主義、憲法第９条と自衛隊、日米安保体制が並存している。そこから多くの問題も発生したと言う。さらに、具体的に論じる。実に詳しいし、説得力がある。そして、こう結論する。

〈天皇制があったからこうした国民の側の問題が生じた、とは言いません。しかし、天皇制という仕切りが、日本の民主主義の歪みに重要な役割を果したことは否めないでしょう。天皇制が、地球的な規模での民主主義をめざす場合に、桎梏ないし障害になる可能性もあります。いますぐ廃止せよとは言いませんが、いつまでも持ち続ける必要のあるものかどうか。天皇家の人々の人権の問題を含めて、もう一度考える必要があると思います〉

ここから私との〈激論〉が始まります。それはぜひ、この本を読んでほしい。この本は、よくあるような、「言いっ放し」の激論ではない。お互いの立場・主張を大いに論じながら、よく聞き、そして話を噛み合わせようとしている。「共通の価値」を見つけ、考えようとしている。僕も、とても勉強になった。加藤さんとの対等な〈激論〉にはならなかったかもしれない。加藤さんの話を聞き、学生（私です）が驚き、衝撃を受けながら質問する。そんな感じになったかもしれない。

二人の討論の他にも多くの考えさせられる講義、討論がある。日本の、いや東アジアの全ての問題がそこにある。じっくり読んでみたらいい。

【だいありー】

(1) 3月12日（月）税金の申告で苦闘している。収入はそんなにないのだが申告すると返ってくるので必死に計算する。算盤４級の腕前も、こんな時にしか使わないので、鈍っている。引き算をよく間違える。いかんな。「試し算」をやるたびに違う。「e-tax」に挑戦してみた。ネットで申告出来るというが、難しくて出来なかった。
夜、一水会フォーラム。菅沼光弘さん（アジア社会経済開発協会会長）。元公安調査庁の大幹部で、テーマは「六カ国協議を受けて今後の日朝関係」。他の打ち合わせがあって10分ほど遅れて行ったら、部屋は超満員。立って聞いている人もいて、入れない。
仕方ないから廊下でドアに耳を当てて聞いてた。まるで公安みたいだ。こんな体験は一水会が出来て初めてだ。それだけ菅沼さんの話を皆、聞きたかったのだろう。迫力のある話だったし、テレビでは聞けないオフレコの真実の話が聞けた。

(2) 3月13日（火）図書館で勉強。調べもの。夜、松元ヒロさんのライブを見る。面白かった。超満員。１週間の公演のチケットは全て完売。私は特別にいれてもらった。立川談志さん、志の輔さんも来ていたので挨拶した。ありがとうございました。終わって、「新右翼」発祥の地といわれる居酒屋で飲みました。

(3) 3月14日（水）朝、中野税務署に確定申告に行きました。引き算の間違いを注意され、その場で直して提出しました。ホッ。これでお金が戻ってくる。嬉しい。
午後、取材、打ち合わせ。夜は柔道。押したり、投げたりする力はあるが、私はどうも、引く力が弱い。これでは柔道でさらに上を目指せない。そんで、チューブを買った。これで引く力を鍛えちょる。柔道の帰り、疲れ果てて居酒屋に行った。焼き鳥を食べながら生ビールを飲んでたら、千代丸健二さん（人権110番）にバッタリ会った。以前、大変お世話になったんだ。相変わらず元気だった。

(4) 3月15日（木）午前10時から京王プラザホテルでジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の卒業式。１時から卒業パーティ。女性は振り袖の人が多い。聞いたら、結構高いんですな。借り賃が。男も着物の人がいる。そうか。私も着物を借りて着たらよかったな。来年はチャレンジしてみよう。日本刀も差して行くか。家に持ってるし…。夜、「それでもボクはやってない」を見る。実にいい映画だった。「創」の篠田編集長も見ていた。

(5) 3月16日（金）一日、原稿を書いとった。電話は鳴らないし、一日中、誰とも会話しなかった。テレビをつけたら、「こんにちわ」とアナウンサーが言ったので、「こんにちわ」と答えてしまった。今日の会話はこれだけ。

(6) 3月17日（土）ポレポレ東中野で大浦信行監督の「日本心中　9.11～8.15」が上映されている。夜はゲストとのトーク。この日は元社会党委員長の土井たか子さんだ。聞きに行った。自慢じゃないが私は土井さんのテレカを持っている。お宝だ。見せてあげよう。と思ったら、今日のトークは昼にやったそうだ。空振りでした。

(7) 3月18日（日）一水会の引っ越し。といっても住所は同じ。ビルの４階から２階に移る。「第

23鈴木総合ビル」という。「鈴木さんが持ってるビルですか」とよく言われる。人を見て言ってくれよ。ビルを23も持っていて、木造６畳のアパートに住んでる人がいるかよ。そうだ。前日歩いてたら「新宿池田文化会館」というのがあった。池田名誉会長の名から付けたんだろう。でも、「第23鈴木総合ビル」は鈴木一水会不名誉顧問から付けたのではない。

【お知らせ】

(1)４月15日（日）7:00p.m.　ネーキッドロフト。針谷大輔、中野ジロー氏らのトークがあります。

(2)私の処女作は『腹々時計と〈狼〉』（三一新書）だ。男なのに処女作だ。恥ずかしい。この童貞作は絶版になり、その後、『テロ』と題名を変えて彩流社から出ている。ある雑誌社の人が、これを元に漫画にしたいと言っていた。ありがたい。楽しみだ。

(3)「レコンキスタ」(３月号)の木村三浩氏の「代表活動日誌」に「雨宮処凛さんに取材を受けた」と出ていた。雨宮さんは『14歳でもわかる右翼と左翼』(河出書房)を執筆中で、左右の主だった活動家に取材している。実は附録で私も取材された。しかし、目の付け所がいい。やられましたね。こんな本は私も書いてみたかった。

(4)中川右介さんの『カラヤンとフルトヴェングラー』(幻冬舎新書)はとてもいい本です。音楽家という人々は、(左右の活動家と違い)心の美しい人達ばかりと思ってました。ところが、野望も、嫉妬も、追い落としも、中傷合戦もあり、凄いんですね。驚きました。「最も美しい音楽をめぐる、最も酷い権力と野望の物語」と帯に書かれてます。又、ナチスとの関係も詳細に書かれています。今まで誰も書かなかった音楽史です。でも、たとえ悪魔の心を持ち、どんな謀略をめぐらしても、素晴らしい音楽を作れたら、それでいいではないかと、著者の中川氏は評価します。
　この著者も変わっています。それもそのはず。かつては左翼で、(株)アイピーシーの代表でした。私の『脱右翼宣言』という本も出してます。右介といいながら、左翼ですから、本当は左介です。この本も、ネットの古本屋で探したらあるでしょう。面白い本です。下の脚注は、中川さんと二人で書いてます。だから同じ言葉について、全く反対の解説を二人で書いてます。それだけでも読む価値はあるでしょう。『カラヤンとフルトヴェングラー』の方は本屋でどうぞ。もう、増刷です。

(5)月刊『ケータイBANDITS』(４月号・ミリオン出版)では、凄いグラビアが載ってます。「右翼が脱いだ！」。「２１才春、決意の愛国ヌード」です。石巻沙梨さんです。この国を変えるために、ヌードにならなくっちゃ。と思ったんだそうです。偉いですね。前にこのHPで、ヘアー・スタイルの話を書きました。「耳かくし」は売国的で、「203高地まげ」は愛国的だと。「愛国的ヘアーヌード」もあるのかな、と書いたら、あったんですね。別にあれを読んで決意したわけじゃないでしょうが、凄いです。

(6)今発売中の「SAPIO」(３月28日号・小学館)の、小林よしのりさんの「ゴー宣・暫」はいいです。実にスカッとします。題して、「馬鹿保守の『格差肯定論』を撃破する」。左翼の人々が「格差社会」を批判すると、保守派は単純に左翼憎しで、「格差は当然だ」といっている。「日本に格差はない」「外国に比べたら無いのも同然だ」「あってもいい」と言っている。それらの「反共」「資本主義肯定」のバカ保守を徹底的に論破している。読むべし。

それと、単行本の『ゴー宣・暫』(第１巻)もいい。堀辺正史先生とよしりんの天皇制についての対談も素晴らしい。読むべし。

HOME

今週の主張

バックナンバー

ボクの思想的原郷＝アーカイブス・第二弾「母のこと」＝

今週の主張3月26日

(1)とても勉強家の母親でしたね



（左から）父、母、私（仙台で）

勿体ないですよね。昔書いた原稿がそのまま忘れ去られ、捨てられるなんて。有名な作家やライターならば、雑誌や週刊誌に書いたコラムや対談も全て単行本になっている。でも無能、無名なあたしじゃ、そんなチャンスはない。そのうち、自分で書いたことも忘れちゃう。いかんよな。

「昔、ビートルズについて書いたやろ」「マルクスについて書いてたよね」と言われるが、「あれっ？そうだっけ」とこっちが聞き返している。面白い原稿もあったと思うが、「単行本にしましょう」と言ってくれる出版社はない。いろんな人と面白い対談もしてるんだが、「じゃ、対談集を作りましょう」と言ってくれるとこもない。

そんで、家をガサゴソと探して、古い記事、原稿を見つけている。じゃ、読者の要望に応えて…。要望はないかもしれないが、オンデマンドのアーカイブスですよ。自分でも何言ってるか分からんけど、横文字を使うと、偉くなったような気がする。

その「アーカイブス」の第一弾として先週は「父親のこと」を書いた。いや、15年前に書いた原稿を載せた。その流れで今週は「母親のこと」だ。一応、〈昔話〉はこれで終わり。アーカイブスばかりやってちゃ、未来がない。前進がない。だから、これからは、面白い原稿を見つけたら、その時は、たまにやろう。

ということで、母親の話だ。９年前に書いたものだ。

こんな人達に影響されてきた
僕の思想的原郷　vol.1　鈴木邦男



母と父です

「邦男の母ちゃんは勉強家だったよなー。だって、邦男が風邪で休むと、代わりに母ちゃんが授業に出てノート取ってたんだから」と、小学校の同窓生に言われた。嘘だろう、何をからかってるんだと初めは思った。息子の代わりに授業に出てノートを取るなんて、そんな馬鹿なと思った。それに僕には全く記憶にない。でも同窓会に出ると皆そう言う。「中学校の時でもそうだったぞ。びっくりしたよな」という奴もいる。そのうち、あの母親ならやりかねないなーと自分でも思いだした。

父親が税務署に勤めていたので子供時代は東北地方を転々としていた。福島、青森、秋田…と。小学校４年から中学３年までは秋田県の湯沢市にいた。そこが一番長かったし、一番思い出が多い。特に湯沢東小学校６年１組は結束も強く、いまでもときどき集まっては酒を飲んでいる。「邦男はまだ結婚しねーのが」「右翼なんかやめでまじめになれ」といつも言われる。そして決まって母親の話だ。「あんな母ちゃんはいねーよな」「よっぽどかわいがったんだべなー」とみんなで酒の肴にする。

しかし、不思議だ。母がとったというそのノートを僕は見せてもらったことはない。だったらなんのために授業に出ていたんだろう。それに母親は「教育ママ」ではなかった。当時、そんな言葉もなかった。「勉強しろ」と言われたことは一度もない。田舎の自然に囲まれて遊んでばかりいた。それに当時はガスも水道もテレビもなかった。井戸汲みや風呂炊きにこき使われていた。「宿題があるから」と言うと、「そんなの後でいい」と言われた。そんな母親が息子のためにノートを取るはずがない。

それが長い間、疑問だったし、謎だった。もしかしたら、息子の為ではなく、自分の勉強の為に、いや、「自分の楽しみ」の為に授業に出ていたんじゃないか。最近ではそう思っている。きっとそうだ。そうに違いないと自分を納得させている。僕は今、日本ジャーナリスト専門学校と河合塾コスモで教えているが、空いた時間に自習室や図書館で生徒と一緒に勉強している。また、古文や漢文、世界史の授業にもぐって聞いたりしている。へエー、勉強ってこんなにおもしろいものだったのかと驚いている。生徒と違い僕は試験がないから暗記する必要もない。そうするとスラスラと頭に入る。そして母親のことをフッと考えた。この楽しみだったのかもしれない、と思った。

当時、つまり小学、中学の頃は僕は勉強家ではなかった。大体、田舎の子は誰も勉強なんかしなかった。しかし、母親だけは勉強家だった。それに、家の中で一人でいつも本を読んでいた。子供に井戸汲みをさせ、買い物をさせ、その間、母親はちゃぶ台に向かって本を読んでいた。「フーン、大人って本を読むものか」と思った。何の本を読んでいたのか覗き込んだことはなかった。威厳があって、とてもそんなことはできなかった。今どきの「友達親子」とは違う。今考えると、多分、「生長の家」の本だろう。

母は「生長の家」の熱心な信者だった。「生長の家」は早大中退の谷口雅春先生が始めた宗教で、「インテリ宗教」と言われ、膨大な量の出版物を出していた。出版部の日本教文社からは、霊界ものや、日本の歴史もの、さらにはフロイト全集、ユング全集も出ていた。母親は毎日、それらを読んでいた。「人間、死んでも死なぬ」「霊界からの通信」なんて奇妙なタイトルの本もあった。何だこれはと思った。

「生長の家」も好きだったが、それよりも母は本を読むのが楽しくて仕方なかったのだろう。学校に行きたかったのに家が貧しくて行かせてもらえなかったのかもしれない。だから何でも読んでいたし、息子の領分を侵して学校にも行っていたのだ。今、85歳だが、たまに実家に帰ると、やはり本ばっかり読んでいる。「邦男、これ読んだか？」「これおもしろいぞ」と紹介してくれる。寝床でも夜中遅くまで本を読んでいる。すごい人だ。僕の書いたものは全て読んでいる。昔は難解な文章も書いていたがそれも全て読んでいる。そして遊びに来た親類の人達に解説してやっている。それがまた、僕以上によく理解しているのだ。

本が好きで、また、本について話すのが好きだ。だったら教師か作家にでもなったらよかったのにと思う。でも、そんなことは言えない。友達のように話せる雰囲気ではないのだ。それに勇気をもって言ったとして「そうしたかったけどアホな息子のために犠牲になってきたから」なんて言われたらかなわない。だから、とても聞けない。本当に親不孝な息子だと思う。親だけではない。兄弟、親類中に迷惑をかけている。ろくに会ったこともない親類から「お前のことで警察が聞きに来たぞ」なんて言われると本当に申し訳ないと思う。「鈴木一族の恥だ。こんな奴、死んじまえ」と皆思っていることだろう。

でも、そんな僕でも親孝行な点はあるし、母親の性格を継いでいる点がある。子供の頃は本嫌いだったが、大学に入ってからは猛烈に読むようになった。これも遺伝子か。今、学校で教えているが、教師というより生徒という感じだ。月に30冊以上はノルマを決めて今も読書している。いつか本格的にものを書くときが来るだろう。それまでは勉強だと思っている。それに後悔している訳ではないが、「右翼生活40年」は長かったかなと思う。「集団思考」ばかりで自分の考えでなかった。これからが勉強だ。そうすると、今でも猛烈に本を読んでいる母親はライバルのようにも思える。

考えてみると不思議な人だ。僕が右翼学生運動に入ったときも、逮捕されたときも一度も文句を言わなかった。「好きにやったらいいだろう」という感じだった。そして自分は好きな本ばっかり読んでいた。いや、「生長の家」の活動家になり、それが元で僕は右翼運動に入ったのだ。その点で、「自分がきっかけを作ったのだから仕方ないか」と思っているのかもれしない。

(2)親の背中を見てる子供は育つんよ



手前、座ってる人が母親です

どうでしたか。本が好きで、勉強家の母親だったんですよ。

最近、清水義範の『わが子に教える作文教室』（講談社現代新書）を読みました。面白かったですね。「うちの子は本を読まない」「うちの子は文章を書かない」「どうしたらいいんでしょうか」「対策は？」と、よく聞かれるんだそうです。世の母親たちに。うん、分かりますね。その悩みは。その時、清水は答えているんです。

「お母さん、じゃ、あなたは本を読んでいますか？」「作文を書いてますか？」

これが解答です。たしかに、そうですね。お母さんが本を読んでりゃ、その姿を見て子供は自然に本を読む。私がいい見本だ。自分は本を１冊も読まんくせに、「うちの子は全く本を読まん。嘆かわしい。誰に似たんだろう」と文句を言っても仕方ない。お前に似た

んだよ。バカ！」

わが家の母親は本が好きで勉強家だった。でも作文は書いてなかったと思う。あるいは息子の代わりに授業に出た時、ノートを取りながら、自分の感想なども書いてたのかもしれん。しかし、それは残ってない。もしかしたら、思想的・哲学的なノートだったのかもしれん。見つかったら、「鈴木マサ著作集」としてまとめてやりたい。

そうです。母親の名前は「マサ」です。手紙が来ると、「マサ様」だから、上から読んでも下から読んでも「まささま」なんです。それがどうしたと言われると困るけど、ちょっと思いついたんで書いてみただけです。ちなみに父は「一郎」です。鈴木一郎だから、野球のイチローと同じです。でも、平凡な名前だから、銀行なんかに置いてある、「伝票の書き方のサンプル」なんかに使われている。お金を下そうとして名前を書くと、「ダメですよ。サンプルを写しちゃ。ご自分の名前を書いて下さい」とよく注意されたそうな。

みずほ銀行が富士銀行だった時、サンプルの名前は「富士太郎」だった。本当にこんな名前の人はいるだろうな。名前を書いたら、「ダメ、ダメ。サンプルを写しちゃ」と言われるだろう。じゃ、他の銀行に行って通帳を作ろうとしたら、富士のスパイかと警戒されちゃうし。大変だ。

清水義範の本には、さらに面白いことが書かれちょった。どうやって子供に書く癖をつけるかだ。「絵日記を書かせる」「読書感想文を書かせる」といっても難しい。母親だってやってないんだから。そこで、〈 利で釣る〉ことをすすめる。たとえば子供が、「あのゲームを買ってほしい」とねだる。「ダメです」と頭ごなしに言わない。こう言うんです。「じゃ、その欲しい理由を原稿用紙400字で書きなさい。なるほどと思ったら買ってあげます」

こうなると子供は必死です。説得力のある文を書こうとする。「アイスクリームが欲しい」「ディズニーランドに行きたい」と言ったら、その都度、作文を提出させる。うん。これはいいですね。作文を書かせるに当たっての注意を清水はこう言います。

1. まず親が読む。書く。
2. 原稿用紙でタテ書きさせる。ヨコ書きはダメ。（メールではダメですね。文がいい加減になるし、親に対してもタメ口になる）
3. ほめる。（どんなにつまんなくても、けなさない。「こんなに長く書けた。偉いね」とか「ユニークだね」とか、ともかく、何かをほめる）
4. 文は短く。
5. 読書感想文は書かせるな（これで作文がいやになった人が多いね）
6. 本の帯を作ってみる。

それから。「子供に手紙を出す」というのもいい。メールじゃダメだ。ちゃんと便箋（or原稿用紙）に書く。旅先から出すのもいいだろう。そうすると子供も返事を出す。書く癖をつける。訓練をする。うちでも実行してみよう。

(3)ロフトも復刊してくれよ。『TALKING LOFT』を！



『TALKING LOFT』第２号表紙

さて、私の「母のこと」に戻ります。この原稿は何に書いたのでしょう。実は、『TALKING LOFT』第２号に書いたのです。1998年11月26日に出ています。９年前です。まだ母が生きてる時でした。新宿にあるロフトプラスワンが出したのです。これが２号だから、１号はあったんでしょう。そして３号まで出て、廃刊になったのかな。ともかく豪華な本です。金がかかってます。かかり過ぎです。パンフのたぐいではなく、『諸君』『正論』『創』『論座』に対抗できる位の内容と厚さをもった立派な雑誌です。

ロフトも社運をかけて、力を入れ、大々的に宣伝をして出しました。書店でも話題になり、新しいタイプの雑誌として注目されるはずでした。でも、時代が悪かったんでしょう。それに、こりにこってる。金がかかり過ぎている。それで、発行人と編集者の間でもめて、廃刊になったそうです。勿体ないです。悔しいです。

発行人はロフトの親分、平野悠さん。編集人は?師（つるし）一彦さんです。伝説の名編集長です。元「週刊SPA!」の編集長でした。その時は、小林よしのり、宅八郎、松沢呉一などの連載があり、やたら元気でした。さらに私にも声をかけてくれ、「夕刻のコペルニクス」を連鎖させてくれました。お世話になりました。あそこから私のライターとしての出発があったと思います。?師さんには本当に感謝しております。私の恩人です。

「SPA!」と同じ頃、月刊「創」の「鈴木邦男主義」の連載も始まりました。又、河合塾、日本ジャーナリスト専門学校の講師になったのもこの頃です。母はとても喜んでました。ちゃんとした雑誌に連載が始まり、学校の講師になった。今までは無頼の生活を送ってたが、やっと「社会復帰」した。そう思って喜んだのでしょう。そんな「復帰」のチャンスを与えて下さった人々には本当に感謝しております。

さて、『TALKING LOFT』です。〈ニュータイプ・カルチャーマガジン〉と銘打ってます。やる気満々です。ロフトでやった面白いイベントを再録したり、ロフトに出てる人たちに新たに連載を書かせたり。他にもグラビア、企画もの、取材、インタビューと、盛り沢山です。

この号では、塩見孝也と宮台真司のトーク「まつたりか？革命か？」。若松孝二と崔洋一の「映画は客との真剣勝負」。ヒモくんの「完全ヒモマニュアル」などが目玉です。「ヒモくん」は塩見さんのペンネームではありません（念の為）。

他に、「強力新連載」が竹熊健太郎、大泉実成、松沢呉一、天久聖一などなど。私の連載は「最弱新連載」ですね。だって「VOL.1」になってますから。この次は何を書いたんだろう。それとも、『TALKING LOFT』は３号は出なかったのかな。今度、ロフトに行った時に聞いてみよう。

それにても、これから何を書くつもりだったんだろう。「僕の思想的原郷」というタイトルはいいですね。「こんな人達に影響されてきた」とある。うーん、そうすると、こうかな。

三島由紀夫、谷口雅春、竹中労、遠藤誠、野村秋介、森田必勝、葦津珍彦…といった人々のことを毎月、書こうと思ったのかな。面白そうだ。でも、廃刊になったんじゃ淋しいね。



『TALKING LOFT』の私の原稿

それと、私の連載にはイラストが入っている。時田千絵さんのイラストだ。私の文と関係ありそうで、なさそうで、ビミョーだ。何やら勝手に自立し、自己主張してるようだ。これなんかもロフトらしくてよいでしょう。ぜひ、復刊してほしいですね。『TALKING LOFT』を。そして、私の連載「僕の思想的原郷」も続けさせてくれ！

【だいありー】

(1) 3月19日（月）２時、「パーゴラ」で打ち合わせ。「ジョナサン」が３月一杯でなくなった。駅のそばですぐ分かるし、取材、打ち合わせには最適の場所だったのに。又、24時間空いてるので助かった。三島由紀夫全集を読むのに随分とお世話になった。図書館に返す日が迫ると、夜中、ここに来て、５時間も６時間もひたすら読んだ。ありがたかった。ジョナサンがなければ三島全集の読破はできんかった。これからどうしたらいいのだろう。途方に暮れている。

今回は、近くのパスタ屋「パーゴラ」で打ち合わせした。混んでて大変だ。落合、東中野はちょっと前まで、喫茶店、本屋が一杯あった文化的街だった。それなのに今は、コンビニと居酒屋だけだ。いかんな。再び「文化の街」にするために中野区長に立候補するしかないか。そんで「区立喫茶」をつくる！

鬱憤がたまったので、夜スポーツ会館に行って、ひたすら走った。

(2) 3月20日（火）図書館。柔道。

(3) 3月21日（水）７時、志の輔さんの落語会に行く。

(4) 3月22日（木）午前10時、外国のジャーナリストの取材を受ける。英語で話をする。　午後１時から京橋の映画美学校で試写会を見る。「映画は生きものの記録である。土本典昭の仕事」。いい映画だった。夜、豆腐料理で有名な本駒込の「五右衛門」で痛飲する。前に、『まとりた』という雑誌で若松孝二監督と対談したところだ。

(5) 3月23日（金）3:30P.M.からシネカノン試写室。「レベル・サーティーン」の試写。面白かった。犯罪、殺人ものは努めて見ることにしている。いろいろと日常生活で参考になるので。

【おまけ】

(1)「ミヤコ蝶々物語」をテレビでやってましたね。蝶々は久本雅美だった。産経新聞のテレビ欄に、「あまり見せない久本の隠された色気が出ていて、思わずドキリとした」と出ていた。その文が気になって見たが、一度もドキリとしなかった。私の感性が鈍いからか。もう色気を感じる若さがなくなったのか。

ミヤコ蝶々はロクに学校も出とらん。九九も漢字も知らん。通分も出来ん。脚本が渡されても、相方の吉村君に、「これなんという字？」と聞いてばっかり。だから、相方の名は「南都雄二」なんや。まるで高峰秀子のようですな。

ミヤコ蝶々と南都雄二の「夫婦善哉（めおとぜんざい」はラジオ、テレビで20年間続いた。私もよく見ていた。面白かった。これが原点なんです。思想的原郷なんですよ。シロウトの夫婦を呼んで、あれこれ聞き出す番組の。そんで、ちょっとお色気もある。

このあとが京唄子と鳳圭介の「おもろい夫婦」でんな。それから桂三枝の「新婚さんいらっしゃい」と続く。島田紳助の「キスイヤ」もこの路線でしょうな。

(2)ボールペンは年間６億本、売れている。一人平均年に６本使うわけだ。その中でもペンテルの「細字0.7。油性ボールペン」が一番書きやすい。「これはいいですね」と有田芳生さんも驚いていたので、あげた。でも、何故か、このボールペンは製造中止になった。私にボールペンを使わせない為の陰謀か。淋しい。

【お知らせ】

(1)雨宮処凛さんの『14才でもわかる右翼と左翼』（河手書房）は近々出るようです。木村三浩氏や私も取材されました。

(2)洋泉社のムック本『現代右翼・アンダーワールド』が４月２日発売です。木村三浩氏と森達也さんとの対談など、読みどころが一杯です。ソクーロフさんと私の対談「太陽」について、も収録されております。

(3)４月15日（日）7:00P.M.　ネーキッドロフト。針谷大輔、中野ジロー氏らのトークがあります。

(4)「人権新聞」（発行・自由人権協会）2007年２月号に、あのシンポジウムの様子が再現されています。去年12月９日に、中央大学駿河台記念館で開かれたシンポジウムです。「言論・暴力・ナショナリズム」です。加藤紘一、岡留安則、半藤一利、弘中淳一郎、そして私が出席しました。なかなか旨くまとまっております。

HOME

今週の主張

バックナンバー

お茶の水の「ニコライ堂」の話です

今週の主張4月2日

(1)あのニコライではなく、聖人のニコライさんの話です


亜使徒日本の大主教聖ニコライ

ズドラーストヴィチェ（こんにちは）。ほう、これがニコライ堂か、と見た。しみじみ見た。じつくり見た。由緒ある建物だし、文化財だ。東京名所だ。何せ明治に出来た。それに過去のメモリアルではない。今も生きて、活動している教会だ。

去年の暮から、３度ほどお茶の水に用事があって出かけた。そのたびに、あのニコライ堂の前を通った。そして中に入ってみた。ニコライさんも苦労したんだ。ニコライさんというのは、この教会を造った人だ。宗教は本来、国境を超える。民族も、為政者の権力も超える。だからニコライさんは、日露戦争の時もロシアに帰らず日本にとどまって、「普遍的な」「神の愛」を説いた。偉い人だ。でも、ロシアがボロ敗けすると、「何をしてるんだ！」と思う。乗り越えたはずの「祖国愛」がムックリと頭をもたげる。

又、日本人民衆からの警戒、批判の目もある。さらに複雑なのは日本人信徒だ。「ロシアのスパイめ」「売国奴」と罵られる。又、他の国から来たプロテスタントの牧師たちは、ロシアの敗戦に、「ザマーミロ」と露骨な態度を取る。現世の政治、争い、戦争からは超然として「神の愛」を説く宗教者の間でも、こんな争いはある。〈祖国〉の問題は断ち切れなかったのだ。

さて、ニコライ堂だ。JR両国駅のすぐ隣りに「江戸東京博物館」という、ドデカイ建物がある。国技館のすぐ後ろだ。「江戸」の部、「東京」の部と、広い広いフロアーがある。「江戸」では、千両箱や当時の印刷技術が展示され紹介されちょる。芝居小屋のミニチュアもあって楽しい。鶴屋南北の「東海道四谷怪談」の仕掛けも見せてくれる。提灯が割れてお岩さんが出てくる。仏壇返しでお岩さんが消える…と、「仕掛け」の数々がミニチュアで見れる。

そして「東京」になってからは、代表的な建物のミニチュアとして紹介されてるのが鹿鳴館とニコライ堂、銀座の風景だ。これこそが「明治の日本」を象徴するものだった。又、鹿鳴館では外人を招き、政府高官たちが夜な夜な、舞踏会を催していた。馬車で乗りつける。ダンスをする。そこでは小さな人形たちが踊っている。見ていても楽しい。音楽はいつも「美しき青きドナウ」だったという。（鹿鳴館も、ロシア寄りだよ）。

その鹿鳴館に、刀を振りかざした壮士たちが殴り込んでくる。「国賊め！」「非国民め！」と怒鳴って、斬りまくる。という場面はなかったかな。作れば面白いのに。

ではニコライ堂だ。明治に、こんなハイカラな教会は他にない。ここだけだ。たちまち東京名所になった。高い、荘厳な教会だ。江戸東京博物館では、ニコライ堂を中心にした東京の地理が

ミニチュアになっている。やはり高い。今と違い、ニコライ堂だけが高い。どこからでも見えたんだ。でも今は、まわりにもっと大きなビルが乱立している。だから、ニコライ堂も目立たなくなった。かわいそうに。

ニコライ堂はニコライさんが建てたから、そう呼ばれた。でもこのニコライさんは、あのニコライさんではない。ニコライという名前の人は多い。一番有名なのは、「ニコライ・世」だ。ロシア革命最後の皇帝だ。ロシア革命が起こり処刑された。又、皇太子の時に日本に来て、警官に斬りつけられた。大津事件だ。かわいそうな人だ。（吉村昭に『ニコライ遭難』（新潮文庫）という本があって、そのことを詳しく書いている）。「ニコライ・世」という位だから・世もいる。イッセー尾形は映画「太陽」で昭和天皇を演じた。ちょっと関係なかったな。『辞林21』（三省堂）で「ニコライ」を引いたら、４人のニコライさんが出てきた。３番目のニコライさんだけが今回、必要なんだが、ついでに紹介しちゃおう。世界史のおさらいですよ。

ニコライ（Nikolai）

1. （1世）（1796-1855）ロシア皇帝（在位　1825-1855）。デカプリストの乱を鎮圧。徹底的な専制反動政治をすすめた。地中海進出をねらってトルコを圧迫。クリミア戦争を起こす。
2. （2世）（1868-1918）帝政ロシア最後の皇帝（在位1894-1917）。積極的な極東進出で日英と対立。日露戦争で敗れる。三月革命により退位。のち銃殺。
4. （1836-1912）ロシアの正教会宣教師。1861年函館に来日、日本ハリスト正教会の礎を築いた。ニコライ堂を建立。
5. 【Otto Carl Ehrenfried Nicolas】（1810-1849）ドイツの作曲家・指揮者。オペラ劇場で指揮活動。声楽、器楽にわたって作品を残す。代表作「ウィンザーの陽気な女房たち」

(2)宗教は国家も権力も全てを超えるはずだろうが…

どうです。勉強になりますね。３番目のニコライさんが建てたんで、ニコライ堂という。でも、これは通称で、正確には「東京復活大聖堂」と言う。重要文化財になっている。昭和37年６月21日文部省指定だ。さらにこんな説明が出ていた（ニコライ堂の前に）。



ニコライ堂の前で

〈この聖堂は明治17年3月に起工し工期７年を以って同24年２月完成したもので、設計者はロシア工科大学教授シチュールボフ博士、工事監督は、英国人コンドル博士です。
頂上までの高さ　35米
壁厚　1メートル　乃至　1.63メートル
日本最大のビザンチン式建造物として知られております。
日本ハリストス正教会教団〉

この「ハリストス」というのは、ロシア語で「キリスト」のことなんですよ。このビザンチンの美しい建物を私は最近、３回見た。１回目は去年の12月９日。中央大学駿河台記念館で開かれたシンポジウムに出た時だ。自由人権協会主催の「言論・暴力・ナショナリズム」と題するシンポだった。パネラーは、加藤紘一（衆議院議員）、岡留安則（「噂の眞相」元編集長）、半藤一利（作家）弘中惇一郎（弁護士）、そして私だ。活発な討論が展開された。この様子は「東京新聞」に大々的に紹介された。又、自由人権協会で出している「人権新聞」（07年2月号）でも報告・紹介されている。パネラーの一人、弘中弁護士は最近、叶姉妹の弁護士としてテレビにもよく出ている。。うらやましい。

さて、ニコライ堂を通った２回目だ。今年の２月４日（日）だ。田中義三さんの友人葬だ。お茶の水の総評会館で行われた。ニコライさんの所を通って行った。

３回目は、２月17日（土）だ。試写会でお茶の水の全電通ホールに行ったのだ。班忠義監督の映画「蓋山西（ガイサンシー）とその姉妹たち」だ。いい映画だった。考えさせられた。班監督とは１月24日（水）のJR東労組の新年会で初めて会った。「ぜひ鈴木さんには見てもらいたい」と招待された。「反日映画じゃないか」と言う人もいるだろうが、違う。勿論、日本軍の侵略は批判しているが、戦争のいろんな面を描いている。光も影も、全て明らかにして、その上で日中の真の友好も出来るはずだと監督は言う。これは賛成だ。よく、テレビに出てる「論客」の人々は、ただ怒鳴り、わめき立てている。相手の話を聞き、一致点を見出そうと努力もしない。「一致点なんかあるか。バカヤロー！」という感じだ。それでは討論ではない。一人よがりの感情的怒号だ。もっと冷静に話し合えるはずなのに。この映画を見て、そのことを感じた。もうすぐロードショー公開されるので見てほしい。



この映画を見て、班監督と話し合った後だっただけに、ニコライ堂を通った時も、又、〈国家〉〈民族〉〈宗教〉について、いろいろと考えてしまった。そして、少し前に読んだ本を思い出した。中村健之介の『宣教師ニコライと明治日本』（岩波新書）だ。実にいい本だ。1996年８月に発行されている。

ニコライは1861年25才で来日している。50年間日本にいて、日記を書き残している。日本の各地の庶民の生活、伝道の記録、さらに日露戦争時の苦悩など、

つぶさに記録されている。函館時代、さらに東京に来て、ニコライ堂を建て、本格的な伝道活動をする。

班忠義監督（左）と

ニコライ堂が出来た時、当時の新聞は、「ニコライの聖堂が皇居を見下す位置に建ったことに反発を覚えた日本人が多かった」と報じている。皇居までは遠いと思うが、当時は、高い建物がないから、見えたのだろう。今なんて、もっと高い建物が皇居のまわりにいくらでもある。

ニコライ堂は明治24年に完成した。しかし明治37年（1904年）には日露戦争が始まる。他の国から来たプロテスタントの宣教師たちは、いい機会だとばかりにロシア攻撃をする。

「プロテスタントの宣教師たちほど、ロシアを憎み、ロシアの不幸を願っている者はいない」とニコライは「日記」で嘆く。（1904年11月19日）。

戦争が始まったのだから、ニコライさんも、本来ならばロシアに帰るところだ。まわりからもそう言われる。しかし、神の国に敵も味方もない。等しく「神の子」だ。神の愛を説くのに国境はない。だから、あえて日本に留まる。しかし、受難が待っていた。正教会信徒たちにも。

(3)でも、「愛国心」が疼くんです



やっぱり、ニコライ堂の前で、聖クニョニョン

日本で布教するのだ。日本こそわが巣だと思った。でも、日本の勝利が報じられ、ロシアの敗北が確認されると、不思議なことにロシア人としての「愛国心」が疼（うず）く。もう、超越したはずなのに…。
ちょっと長いが、その時の日記だ。

「またしても日本軍は旅順を攻撃し、わが軍の駆逐艦一隻を撃沈した。わが軍ときたら、みんな思い上がって、あくびをしていて、〈日本人に何ができるか〉と思っていたのだ。馬鹿にしていたその日本人にやられてこのていたらくだ。いまや連中が君たちのことをなんだこりゃ、ロシアは腰抜けだ、と嘲笑っているではないか。

君たちは一体どうなったのだ。いつまでもこんなままなのか。そうではないはずだ。ロシア魂はこのまま引き下がりはしないはずだ。立ち直るはずだ。きっと立ち直るだろう。陸上ではまだ戦闘は起きていない。陸上ではわが軍は日本軍を打ち破るだろう」（1904年３月11日）

読んでいて、不思議な気持ちがする。こんなに偉い宗教家でも「祖国愛」は断ち切れないのか。「ロシア魂」は超えられないのか。「ロシア人よ、しっかりしろ。負けるな！」と言っている。つまり、戦争で日本人をどんどん殺せ（！）と言っているのだ。宗教者の言う事かね。それだけ、〈国家〉は大きいのか。

だったら、ロシアに戻ればいい。そして共に闘えばいい。でも宣教師として、あえて日本に留まる。日本政府も寛容で、それを許している。彼は日本に長くいるし、日本が好きだ。日本人も好きだ。そして日本人の勤勉性も知ってるし、日本軍人の強さも知っている。そんな日本人のことを本国のロシア人は知らない。馬鹿にしている。それがじれったい。なんか二人の男にはさまれて、どっちに付こうかと悩み苦しむ女のようだ。

「ニコライは新聞でロシアの敗北の報を読むたびに「大変だ、恥辱だ」と感じ、気が滅入る。根

が熱い活動的な性質であるだけに、その気分の「落ち込み」も激しい。
「戦争はロシア側の目もあてられない惨敗の連続。おかげで気分は最低だ。しかし不機嫌な顔をしているわけにもいかない。毎日、ショックを受けるのを避けるために、新聞を見るのは三日に一度にしよう」（1904年6月29日）

最後の行が衝撃的ですね。ニコライさんは愛国者だから、新聞は三日に一度しか読まない。あれ？似たようなことを前に読んだな。「愛国心と新聞」の関係だ。そうそう、私の本に書いたんだ。『愛国者は信用できるか』の57ページだ。清水幾太郎の『愛国心』（岩波新書）に出ていたのだが。
フィヒテの友人は、毎日、午後の30分間を「愛国の実践」のために献（ささ）げている、と言う話だ。一体、何だろう。
（【注】フィヒテはドイツの有名な哲学者（1762-1814）。ナポレオン占領下のベルリンで行なった「ドイツ国民に告ぐ」と題する講演は有名）

では、30分間で出来る「愛国の実践」とは何か。街頭演説か。「国賊」に抗議をすることか。脅迫か。違う。清水の本では、こう書かれている。

〈どういうふうにやるんですか、とフィヒテがたずねたところ、彼の答えるには、私は新聞を読んで、政府の賞讃すべき活動を記事の中から探し出し、これが見つかったら、精神をこれに集中して、楽しい冥想に耽ることにしています。もし不幸にして満足すべきものが見つからなかった時は、その日の記事のうち、一番よいと思われるもので我慢します。と言い、こう附け加えた。
「愛国者は賞（ほ）めなければなりませんからね」〉

ウーン、新聞の役割は大きいんですね。これは今でも同じだ。日本の「愛国者の条件」は、「産経新聞を読むこと」だ。愛国者は皆、この新聞を読んで、行動を決めている。朝日新聞を読む者は非国民だ（と思っている）。単純で分かりやすい。
ニコライさんは日本人が好きだ。でも、その好きな日本人は、ロシアを破ったことに歓喜している。そんな日本人には素直に同化出来ない。ニコライさんは苦悩する。日記にはこう書く。

「私の悲しみは複雑だ。わが国が打ち破られたことの悲しみはまだ残っている。わたしの愛する日本人たちは勝利を祝っています。しかし、いかにわたしが、かれらを愛していても、いまは、かれらとは一緒になれない。祖国のほうが愛しいし大切だ」（1904年４月18日）

この本の著者・中村健之介は言う。

〈この戦争の間、「ニコライ宗」と言われた信者たちは苦しみに遭った。日本政府は日本正教徒を糾弾する方針はとらなかったが、周囲の日本人たちは、かれらを裏切り者扱いする態度であった。田山花袋の『田舎教師』や生方敏郎の『明治大正見聞史』などを見てもわかるように、この時期、日本の国家的規模の愛国心は確立し、庶民層において特に熱烈に燃え上がったのだった〉

そうか。日露戦争の時に初めて、「愛国心」は生まれたのか。江戸時代は、「藩」が全てだったから、愛国心なんかない。明治になって、「国」を意識したが、「愛国」の実感はまだない。日清戦争で、政府は煽り立てたが、まだそれほど燃え上がらない。日露戦争になって、俄然燃え上がった。多くの人が戦争に駆り出され、「国民の戦争」になったし、犠牲も大きかった。それだけに「自分たちの戦争」と思い、愛国心も燃え上がったのだ。

(4)白人コンプレックスもここに極まれりだ。情けないぞ、日本人！



この人は、ロシア皇太子ニコライさん（後のニコライ2世）

「ニコライ宗」の日本人信徒にはキツかったでしょうね。「非国民」「露探（＝ロシアのスパイ）」と見られ、白眼視された。それに耐え切れず、「いや、私たちは日本人です。日本の勝利を願っています」と言明し、行動に表わす人もいた。神学校教師たちは、『日露軍用会話』を急ぎ編んで出版し、軍に献上した。祖国への忠誠を表わそうとしたのだ。悲痛な愛国心だ。痛々しい。

そして、戦争は終わった。日本は大勝利だった。政府も新聞もそう発表した。本当はもう戦う力は残ってなかったのだが、国民は〈真実〉を知らない。だからポーツマス講和会議で、賠償金は取れなかったことに国民は激怒した。樺太の南半分は取ったが、そんなもんじゃ収まらない。東京は暴動になって、警察や教会などが襲われ、火をつけられた。何と東京の派出所の７割以上は焼失したというから凄まじい。この暴動については吉村昭の『ポーツマスの旗』（新潮文庫）が詳しい。

さて、暴徒は当然、ニコライ堂にも向かった。宣教師ニコライも標的になった。群衆が押し寄せ、まさに火をつけんとした時に、軍隊が駆けつけ必死で守った。それも、天皇陛下の命に従って、近衛兵が来たのだ。そして、ニコライさんたちを守った。群衆を必死に押しとどめている。中にいて、ニコライさんは、冷たく、こう書く。

「群衆は長い間、まるで何千匹もの猫が一斉に鳴くような甲高い声と叫びをあげていたが、叫び声をあげたまま、どっとわきへ動きだした」

ウーン、日本の群衆はネコかよ。日本人を最も愛し、50年も日本で布教したのに、こんな時は、「猫の鳴き声」にしか聞こえなかったのだろう。

でも、ストレートに憎しみをぶつける日本人はまだいい。実は、外国のキリスト教宣教師の方がニコライさんには〈敵〉だった。同じキリスト教じゃないかと思うが、全く違うのだ。特に、プロテスタント諸派からのロシア批判は、とりわけ痛く感じられた。

「ロシアが敗北し辱められることを全世界が喜んでいる。とりわけあからさまに喜んでいるのはプロテスタントの宣教師たちだ。イムブリーとかバチェラーとか、プロテスタントの宣教師はみんな憎しみの声をロシアに浴びせている。実際の敵になっている日本人のほうが、このキリストの教えを説いている連中よりも、はるかに人間的だ」（1904年８月14日）

さらに「奇妙な現象」が起きる。ロシアは遅れた国だ。日本の方が先進国だ。日本の方が西欧と同じだ。〈黄禍〉はむしろロシアだ。日本は違う。「白い心」を持っている。ヨーロッパと同じだ。…と。そんな馬鹿なと思うが、本当だ。「白い肌」にあこがれて、肌は黄色いが、でも「心だけは白い」と言う。これが「愛国心」なのかよ、と思ってしまう。こう書いている。

「ロシア罵倒の熱心においてとりわけ際立つのはプロテスタントのコザキ（小崎弘道）である。かれは「ロシアは16世紀の野蛮国だ。それに対して日本は20世紀の文明国だ」と言った。

これは1904年５月３日の「全国宗教者大会」での発言だ。「愛国心」に燃えた宗教者たちが次々と発言する。仏教界の代表の大内青巒（せいらん）は、

〈日本人は黄禍などは全然ない。日本人は黄色い肌の下は白い心を持っている。ロシア人こそは、まさに黄禍なのである。かれらの白い肌の下には黄色い心がある」とロシアを論難した〉

又、「白い肌」にあこがれる日本人に対し、本物の西欧人もオベンチャラを言う。

〈英国国教会宣教師ウッドも『ジャパン・デイリー・メイル』で、「ロシア人は白い肌の下に黄色い心を隠している。逆に日本人はその行動に照らしてみるに、黄色い肌の下に、白い心がひそんでいる」という。同じ論法、同じたとえの「日本人称賛」を大得意で展開した」（1904年９月26日）

こんなことを言われて嬉しがっている日本人なんて馬鹿だよ。「どうせ、オレっちは黄色い肌。黄色い心だよ」「どうせ、イエロー・モンキーだよ」と居直ってやればいいんだよ。ニコライさんの目には、欧米人とその「白い」欧米人にあこがれを持つ日本人が、ロシアを下に見て手を取り合う光景に見えたのだ。中村健之介もそう書いている。その通りだ。

最後に、今日の「その時」です。50年間、日本に留まって布教活動を続けたニコライさんはすでに数万に達していた正教の信者たちに惜しまれながら、明治45年２月16日、75才でこの世を去りました。1970年４月10日、聖人の列に加えられました。お茶の水に行った時はぜひ、ニコライ堂に寄ってみて下さい。そして「愛国心」について考えてみて下さいませ。では、ダスビダーニア（さようなら）。

【だいありー】


右も左も取り込め！
新右翼・鈴木邦男が支援する「政府転覆」を掲げる“革命家”

「週刊朝日」（4月6日号）

(1) ３月26日（月）２時から５時半まで、本の対談。ハードでした。でも、楽しかったです。夜、スポーツ会館に行きました。デブを治そうと思って、走ったり、鳥肉ばかり食べたり、大変です。でも、デブは治りません。

この日発売の「週刊朝日」に出てましたね。異色の都知事候補たちが。私が推薦する外山恒一氏も大きく取り上げられてました。

(2) ３月27日（火）図書館で勉強。夜、柔道。

(3) ３月28日（水）４時から、衆院第一議員会館の第４会議室。「憲法改正手続き法案」に反対する緊急院内集会。100人ほどが集まって超満員だった。主催は「憲法行脚の会」。パネラーは佐高信、吉田司、鎌田慧、そして私の４人。なかなかエキサイティングな集会でした。佐高さんは、先頃亡くなった城山三郎さん（憲法行脚の会の呼びかけ人だった）の追悼の話をした。とてもよかった。終わってから佐高さんたちと会館の食堂でお茶を飲んだ。

(4) ３月29日（木）昼、打ち合わせ。午後３時から河合塾コスモで、国語科講師の会議。

(5) ３月30日（金）11時、仕事の打ち合わせ。４時から新宿の居酒屋「大久」。四宮正貴氏の還暦を祝う集まり。

(6) ３月31日（土）一日中、中野図書館にいた。

【お知らせ】

(1) ４月２日（月）洋泉社ムックの『現代右翼・アンダーワールド』が発売されます。木村三浩氏と森達也氏との対談など凄い企画が一杯です。映画「太陽」の監督・ソクーロフさんと私の対談も収められております。

(2) ４月15日（日）7:30p.m.ネーキッドロフト。針谷大輔、中野ジロー氏らのトークがあります。

(3) ４月19日（木）7:00p.m.から一水会フォーラム。講師は杉嶋岑氏（元日経社員）で「私が北朝鮮に拘束された２年２ヶ月を振り返る」。会場はホテルサンルート高田馬場３階会議室。

(4) ５月23日（水）7:30p.m.ロフトで「闘う！居酒屋」という企画がスタートするそうです。行ってみようと思ってます。

HOME

今週の主張

バックナンバー

〈転び〉の世界史的、哲学的、形而上学的考察

今週の主張4月9日

(1)「批判される人間」になろう！



「2.26事件」参加者の末松太平氏

挫折しない人生なんてない。転ばない人生なんてない。いいじゃないか、転んだって、人間なんだもん。そう思いますね。転んだ後、どうするかですよ。失敗を恐れて何もしない。これではつまらんでしょうが。

30年ほど前、『証言・昭和維新運動』（島津書房）という本を出しました。血盟団事件、5.15事件、2.26事件などに参加した人々に会い、話を聞いてまとめた本です。2.26事件に参加した末松太平さんはこんな事を言ってました。

「自分は批判される人間になりたい」…と。エッと我が耳を疑りましたね。他人に認められたい。評価されたい、というのなら分かりますが…。「いや、何もしなければ批判もされない。行動してるから批判されるのだ」

なるほどと思いました。2.26事件だってそうですね。あれからずっと批判されっ放しです。「国を憂うる純粋な決起だった」と言う人もいますが、「上官に騙されただけだ」「本当はロシアの共産主義者と同じだ」という批判もあります。何もしないで、無事に兵役を終えたら、「いい兵隊さんだった」で終わったでしょう。批判はむしろ、望むべきだといいます。



『証言・昭和維新運動』（島津書房）

昔、合気道の稽古で顔面に怪我をしたことがあります。合気道の先生は言いました。「向こう傷は武士の誇りだ」と。真正面から闘った証拠だというんですね。その反対に、背中に刀傷を負ったのは、逃げようとして傷を負ったのだから不名誉だ、恥だ、と。

だから、怪我を恐れてはいけません。批判を恐れてはいけません。

そう思っていたので、寝床でメイドが持ってきてくれた新聞を読みながら、「おっ、これもそういう本だろうな」と思いました。４月２日（月）付の産経新聞を読んでたら、こんな見出しが目に入りました。

〈高校校長　独自の「転び方」本に〉

そうか。これは人生論だろうな、と思いました。学校は誘惑も多いし、危険も多い。自らのムラムラとした欲望に負けて転ぶ人は多い。又、女子生徒の誘惑に負けて転ぶ教師も多い。あるいは、生徒からのいじめに会ってる教師

も多い（私もそうだ）。あるいは同僚教師のいやがらせ。PTAの圧力…と。そんな時に、どう自衛するか。不幸にして転んだ時、どう立ち直るか。それを書いた本なんだろう。そう思いました。

あるいは、もっと思想的な本かもしれません。昔、思想を持った人が、その思想を捨てることを「転ぶ」といいました。共産主義者がその思想を捨てるのは、「主義者が転んだ」と言いました。さらに、「転向」という言葉があります。転んで向きを変えるのです。ただ、転ぶだけでなく、ついでだから、正反対の思想に行っちゃうのです。左翼をやめて、右翼になる。あるいは、右翼をやめて左翼になる。後者は難しいから、あまりいない。ほとんど前者です。左翼（社会主義者、共産主義者）が、思想を捨て、運動をやめるのが「転ぶ」です。塩見さんがロフトに来て、イスにつまずいて転んだら皆に、「主義者が転んだ」と言われました。

「転向」となると、転んだ上に、さらに「敵」の理論を信じ、敵の陣営に走ることです。昔、共産党で、今は右派の論客になったり、右派の市民運動のリーダーになってる人は多いです。戦前、戦中よりも、今の方が「大量転向」の時代なんでしょう。『共同研究・転向』という本がありましたが、今こそ、続編を書くべきでせう。

(2)あなたの知性や感性は「寝たきり」じゃない？



「転びの研究」（その１）柔道と合気道をやっちょる

ここに来て、ちょっと迷いました。主義を捨てるのが「転ぶ」。さらに敵に寝返るのが「転向」。こう定義しましたが、「転ぶ」という表現に、すでに「寝返り」も含まれている。いや、そういう使い方をしますね。「どうせあいつは転んだんだ」と言う時、単に左翼の運動を捨てた、というだけではない。生き方が段々とブルジョア的になってきた。つまり、「敵」の思想にドップリとつかっている。そんな意味あいもあります。

そうだ。「転びバテレン」という言葉もありますね。江戸時代、キリスト教が禁制だった時、拷問されて転向したキリスト教の宣教師や信者のことです。遠藤周作の名著『沈黙』がありますね。あれは、キリスト教のみならず、思想とは何か。宗教、人生とは何か、を問いかけています。宗教者に限らず、右であれ左であれ、これは必読書でしょう。

先週書いたニコライさんは、転びません。でも、「国家を超えた普遍的な愛」と「ロシアへの愛」の間で揺れ動きます。心は千々に乱れ、転びそうになるのです。

だから、「転び」の研究は大事なんです。そういった大きな歴史的、思想史的な見地からこの校長先生は「転びの研究」をなさって、本にしたんでしょう。私はそう思いました。ところが、ちゃいまんねん。こう書かれちょる。

〈高齢者が転んで骨折し、寝たきりになるケースを減らしたいと、秋田県立矢島高校の船木賢咲校長（56）が独自の転び方を考案。『柔らかころび』という本にまとめた。転倒を防ぐ方法を書いた本はあるが、転び方自体をテーマにした出版物は珍しいという〉

なんだ、老人の転倒の話か。と思ったが、これだって重大な問題だ。日本の高齢者の寝たきり

というのは、これが多い。転んで骨折し、本当はリハビリして治さなくちゃならんのに、リハビリは痛い。キツイ。ベッドで寝てる方が楽だから、ついつい寝てる。「まだ痛いからダメ」「まだ立てない」と言って、自分に甘えて、リハビリしない。そして、本当に寝たきりになる。

老人だけじゃなく、我々だってそうです。太ってきた。腹が出てきた。よし、じゃ毎朝ジョギングを30分やろう。腹筋を100回やろう。腕立てを100回やろうと決意する。しかし、皆、三日坊主だ。三日も続かない。これは精神的な「寝たきり」状態なんです。

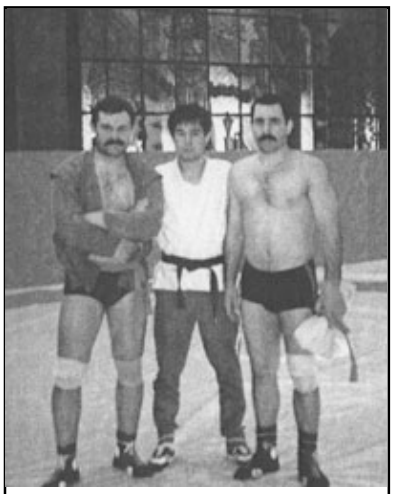
又、パソコン、携帯ばかりやってては馬鹿になる。それに、馬鹿な友達と毎日、飲んでばかりいたら馬鹿の二乗、三乗になる。よし、「一日に本を２時間読もう」と決意する。でも、「今日は忙しいから」「今日は眠いから」と、実行できない。そう。これも精神や知性が「寝たきり」状態なんです。

他人のことは言えません。「寝たきり」は君の問題です。私の問題です。

アメリカは、「寝たきり」の解消を目指して、大々的に国家が中心になり、リハビリを取り入れたそうです。それで「寝たきり」を半分に減らしたそうな。医療費は激減です。日本でもその位やるべきです。若いかわいいインストラクターを大量に投入し、「たのしいリハビリ」をやるんですよ。「どうせ、治ったって、老人だから」「もうすぐ死ぬんだし」とあきらめていては、「寝たきり」は治りません。〈目標〉を与えるのです。「色と金」でもいいでしょう。和田秀樹の『大人のための勉強法』にならって、こっちも楽しく、目標をもったリハビリをやるんです。そうしたら、治りも早いです。

『老人の性愛』だったかな。変な本を読んでたら、老人ホームでも恋愛はたくさんある。80才以上でも、女の取り合いで喧嘩になったり、死闘になったり。又、80才以上で恋をして、そんな人は、リハビリも必死でやるから、治りも早いそうな。早く体を治して、彼女（これも80以上）を抱きたいと思う。その一念でがんばる。でも、いいことでしょう。これからは、日本はどうせ老人大国です。右翼も左翼も市民運動も、どこに行っても老人ばかりです。だから、そんな人達は、怪我をしても「寝たきり」になってはいられません。「早く治して、闘いの現場に復帰し、デモをやらなくちゃ」「火炎瓶を投げなちゃ」…と目標を持ってリハビリするから、治りも早い。頑張りましょう。

(3)要は「人生の受け身」です



「転びの研究」（その２）サンボを習いにロシアに行った

では船木校長の『柔らかころび』の話です。うん、これは柔道の「受け身」だろうな、と私はピンときました。読んでたら、やはりそうでした。船木校長は柔道をやり、長年、柔道の指導をしてきた。だから「受け身」を基に作り上げたといいます。

考案した転び方は、転倒時に一ヶ所で体重を受け止めずに尻、腰、背中の順などで接地し、重心を移動させるのが特徴だ。衝撃を分散させて骨折などを避けることができる。同書では、前と後ろに転ぶ場合に分けて解説。転び方を習得するため、転がる動作と起き上がる動作を続けて行なう反復練習で、転ぶ感覚を身に付けるよう提案している。

これは大事ですね。柔道をやってる人でも、車に撥ねられて、瞬間的に受け身をとり、軽い傷で済んだという人は多い。俳優の小林

旭は、アクション映画の撮影の時に、手順が狂って、たなり高い所から落ちた。重傷だった。２週間位、病院で昏睡状態で、「臨死体験」もしたという。でも治った。首に傷を負ったが、普通なら、首の骨折で即死だったという。「瞬間的に受け身を取っていた。それで助かった」と言っていた。小林旭は柔道の有段者だ。昔の映画では、ヤクザの抗争で、柔道技で投げ飛ばすシーンもあった。

だから、老人だけでなく、若者にも、子供にも「受け身」は教えた方がいい。人の殴り方や投げ方、絞め方、関節の極め方も面白いが、それよりも「受け身」だ。「受け身」さえ知っていれば何があっても大怪我はしない。これは肉体だけではない。「人生の受け身」も大切なんだ。いや、これさえあればいい。

子供のうちから、「どう自己主張するか」「いかに競争社会に勝ち抜くか」「いかに他人を出し抜くか」だけを考えていたんじゃ、殺伐とした人間ばかりができる。もっと、優しい、謙虚な人間を作るべきだよ。そして、失敗した時どうするか。どう謝るか。そうした「受け身」と「失敗学」を身に付けた方がいい。「私はこう思う」「私はこれが優れてる」なんていう子供じゃなくて、すぐに「ありがとうございます」「ごめんなさい」が言える子供をつくる。「主張する子供」じゃなく、「謙虚な子供」ですよ。これだけでいいんじゃないか。極論かもしれないが、私はそう思いますね。だから自分の子供にもそう教育している。いや、そう教育するつもりだ。押忍！

【ニュースです】



『現代右翼・アンダーワールド』（洋泉社）

(1)今発売中の『現代右翼アンダーワールド』（洋泉社Mook・1000円）は凄いですね。驚きました。「潜入！誰も触れないニッポンのタブー」と銘打ってます。「街宣・抗議行動・特攻・テロ！」〈行動右翼〉その生き様のすべて！」「総力取材！週末右翼」…と、なかなか読ませます。木村三浩氏（一水会代表）と森達也氏の対談も迫力あります。ぜひ読んでみて下さい。「太陽」のソクーロフ監督と私の対談も載ってます。

(2)「サンデー毎日」（４月８日号）で木村三浩氏が衝撃的なことを語っています。

〈「国策捜査」で幻に終わった「右翼訪朝団」の全真相〉

「レインボーブリッジ」代表の小坂浩彰氏が逮捕されました。これは「ある計画」をつぶす為の「国策捜査」だと言います。「ある計画」とは「右翼訪朝団」です。木村氏も行く予定でした。実は私も行く予定でした。でも小坂氏の逮捕でダメになりました。詳しくは次回に…。

【だいありー】

(1)４月２日（月）午後２時から本の対談。なかなか内容の濃いものになった。

(2)４月３日（火）午後３時、御徒町。打ち合わせ。夜、柔道。帰り、喫茶店で本を読もうと思うが、喫茶店はどんどんなくなる。図書館に返す本もあるし、「ノルマ」もあるし。気がついたら

地下鉄大手町のベンチで３時間も本を読んでいた。最近は、スーパーのベンチとか、駅のベンチ、公園で読んでる。読むとこがないから、「自衛」だ。これだって「柔らかころび」の実践だ。

(3)４月４日（水）午後２時。ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の入学式。中野ZEROホールで。先生たちに声をかけられた。「選挙に出るんですか？」「よくポスターを見ますよ」。よく分からん。夜、柔道。「柔らかころび」の練習だ。「柔道の鬼」木村政彦は立ち技で瞬間的に関節技を極めたそうな。試合で。組んだり、投げたりしなくていい。腕をつかんで、その瞬間に極める。体力も使わないし、〈省エネ〉殺法だ。私もそんな技を研究している。手首を握った瞬間に折ってしまう「必殺かん切り」を開発した。又、手首をねじり切る「必殺雑巾しぼり」も開発した。特許をとっておこう。そんな技の数々を忘れないように、イラスト入りで、パソコンに入力しておいた。

(4)４月５日（木）午前11時、取材で高田馬場のサンルートホテル。落合のジョナサンがつぶれたので、馬場まで出るしかない。不便だ。取材で会う場所がない。本を読む場所がない。世の中、どんどん不便になってゆく。
　６時から横浜に行く。長谷川光良氏の出所祝い。以前、首相官邸に車ごと突っ込んで抗議した人だ。車に火をつけ、特攻テロだった。奇跡的に命は助かり、逮捕された。今年３月に出てきた。昔からの熱心な活動家だ。僕は30年以上前から知っている。行動家だが、読書家でもある。僕の書いた『右翼・公安用語の
基礎知識』や『これが日本の右翼だ』も読んでくれて、その都度、電話をくれた。嬉しかった。

(5)４月６日（金）図書館。３時半から渋谷のシネカノンで試写会。「パッチギ！LOVE&PEACE」。面白かった。大人気だ。前の週にも試写会が大劇場であったが、入れなくて、急遽、追加の試写会になった。その理由も分かった。今まで見た邦画の中では最高だと思った。ハラハラ、ドキドキと面白いし、その中に〈思想性〉もある。５月19日、全国一斉ロードショーだ。

(6)４月７日（土）午前11時。河合塾コスモの会議。午後１時から入塾式。いよいよ、新学期だ。私も新入生のような気分だ。新入生は、ほとんどが平成生まれだ。驚く。

(7)４月８日（日）都知事選の投票に行き、そのあと、図書館に。外山恒一氏はユーチューブで大人気だっただけに、「もしかしたら」と思いましたが…。お疲れさまでした。それにしても、15059票は大健闘だ。よくやった！次につながるよ。

【お知らせ。その１】

(1)慶応大学でまとめた本、洋泉社Mookの『現代右翼』と今年は２冊、出ましたね。私は〈附録〉というか、〈おまけ〉ですけど。今年はこれで終わりかな。そうだ。森達也さんの対談集が夏に出るそうな。僕との対談も入る。それと、雨宮処凛さんの本『右翼と左翼はどう違うの』（河出書房新書）にも、ちょっと出る。いずれにしろ、「他人のお情け」で生きてるようで嬉しい。私自身の本は書けるのか。ちょっとビミョー。

(2)「鈴木さんも入れときましたよ」と言われ、「ありがとうございました」と礼を言いました。何の本かと言ったら、佐高信さんと岡留安則さんの『100人のバカ』（七つ森書館・1300円）。いやー、「日本の100人」に入れてもらえて光栄です。嬉しいです。「日本の100人」だったら、

たとえ「100人の痴漢」でも「100人のED」でも、何でもいいですよ。名誉です。誇れますよ。

(3)グリンピース・ジャパン事務局長の星川淳さんからご本を頂きました。『日本はなぜ世界で一番クジラを殺すのか』（幻冬舎新書）。いい本ですね。感動しました。クジラは哺乳類です。貴重な野生動物です。保護すべきです。食べる対象ではなく、見る対象です。

【お知らせ・その２】

(1)４月15日（日）7:00p.m.　ネーキッドロフト。針谷大輔、中野ジロー氏らのトークがあります。

(2)４月19日（木）7:00p.m.から一水会フォーラム。講師は杉嶋岑氏（元日経記者）で、「私が北朝鮮に拘束された２年２ヶ月を振り返る」。会場はサンルート高田馬場３階会議室。

(3)去年の10月3日（火）、青山ブックセンターでやった岡留安則さん（元「噂の眞相」編集長）と私の対談「日出ずる国の最新タブー」がネットで発売されるそうです。

(4)前にネットテレビに出ましたが今度はネットラジオに出ます。どうやって収録するんでしょうか。日程が決まったらお知らせします。

【おまけ】

(1)ニューヨークの話。妻が浮気した。車の中で男と抱き合っていた。その現場を夫に見られ、瞬間的に、「助けて！レイプよ！」。夫は妻を助けようと、男を射殺。凄い話ですね。浮気妻の「ころびの研究」でしょうか。来週詳しく書く（かもね）。

(2)「痴漢だ！」と言われたら、逃げようがないですね。無実を証明するのも難しい。「じゃ、全車輌にカメラを付けろ！」なんて思っちゃいます。「監視カメラ」は「防犯カメラ」に言い換えられ、さらに、「セキュリティ・カメラ」になってます。「セキュリティなら、いいじゃん」と思ってしまう。怖いですね。

　映画「それでも僕はやってない」を見たら、弁護側は「再現ビデオ」を作り、「こんな状況で痴漢は無理だ」「不自然だ」と証明する。スポーツニッポン（３月29日付）を見たら、植草一秀さんの裁判でも「再現ビデオ」をつくり、無罪を主張したそうです。　驚きました。映画だけの話かと思ったら、実際の裁判でもやってるんですね。

　この映像は、「真犯人が別にいる」「植草さんは冤罪だ」と証明する為のものだそうです。裁判を支える10人ほどの素人のボランティアが出演したそうです。裁判では上映されたそうですが一般には公開されません。これも、「ころび方」の研究でしょう。見てみたかったです。

HOME

今週の主張

バックナンバー

元気です！「アンダーワールド」な人達

今週の主張4月16日

(1)「政府転覆」は成らず。でも健闘でした。外山さん！



外山恒一氏のポスターの前で

都知事選の外山恒一氏は大健闘でしたね。週刊誌でも取り上げられ、ネット上でも大ヒーバーでした。あの迫力ある政見放送は大きな話題になりました。「１万以上行くだろう」と私は周りの人達に言ってました。「いや、もっと行くでしょう」と言う人もいました。ネット上の過激な人気から見れば、「10万だって…」「20万だって」「共産党を上回るのでは…」と言う人もいました。ネットの力が試されると思いました。

NHKの開票速報を見ていたら、石原は早々と当確。ずっと見ていたら夜の10時45分で外山氏は616票。エッ？あんなに騒がれたのに。あんなに頑張ったのに…と思いました。ところが、どんどん票が伸び、最終的には15059票。私の予想を超えました。これは凄い。立派です。

革命家・外山恒一氏。さて次は何をやってくれるのでしょうか。楽しみです。

では、本編です。先週の話は予告編ばかりだったので今週は本編です。まずは、今話題の『現代右翼・アンダーワールド』（洋泉社MOOK）から。売れてますね。どこの本屋でも平積みで置かれてます。どこへ行っても、「読んだ？」「うん。読んだ。凄いね」という会話が交わされています。

「右翼」本の決定打でしょうな。



「現代右翼アンダーワールド」から

〈街宣・抗議行動・特攻・テロ！
「行動右翼」
その生き様のすべて！〉

と銘打ってます。頁をめくると、いきなり右翼の武闘訓練の写真。70年安保を前にした時の右翼のようですね。危機感にあふれるグラビアです。「現代に生きる武士道」と書かれてます。

「フォト・ドキュメント」の次は、街宣車です。

「街宣車　150台。大分を占拠！
日教組大会糾弾デモに右翼・民族派が集結！」

これも凄いですね。

さらに、「ドキュメント・建国記念の日」

そして、「これが街宣車だ」

「全日本愛国者団体会議・反中国デモグラフィティ」
「右翼連合軍、対馬に上陸！」



同じく「現代右翼アンダーワールド」から

…と、見せますね。読ませますね。又、「女性活動家」の紹介。あるいは、「週末右翼」。これはいいネーミングだ。普段はキチンと仕事をして、土、日は右翼をやる。いいですね。

さらに、本文では、「現代右翼」とは何かを蜷川正大氏が解説している。「現代右翼キーワード集」も。これは詳しいし正確だ。又、漫画もあるし、エンターテイメントもある。「右翼団体リーダーは語る」では矢野隆三氏、山崎誠氏、針谷大輔氏が出ている。森達也さん（映画監督）と木村三浩氏（一水会代表）の対談もいい。右翼の闘いや思想だけでなく、日常生活のことも語られている。これは実にいい。元右翼活動家・雨宮処凛さんのインタビューもある。

さらに、これは参考になると思ったのが、「右翼を体系的に知る映画」「右翼・民族派の入門書」がある。「入門書」には私の『新右翼』（彩流社）も入っていた。ありがたいですね。

「誰も書かなかった企業への鉄拳制裁」という〈実録漫画〉もある。まさにアンダーワールドだ。「ヤクザと右翼--その似て非なる存在」「右翼のシノギ」なんていうヤバイものもある。「北朝鮮抗議の肉体言語」「ソ連軍と闘った日本人たち」「日本青年社・竹島へ特攻！」といったハードなレポートもある。

よくこれだけまとめたもんだ。取材も大変だったろう。苦労したんだろう。「現代右翼」について、勉強になった。理論的、体系的に教えてくれる。又、今の活動を伝えるレポートがある。タブーに挑戦するレポートもある。楽しいレポートもある。なかなか読ませる。

そして、私もちょっと出ている。昭和天皇を描いた映画「太陽」の監督・アレクサンドル・ソクーロフさんと私の対談だ。これは、昨年「映画秘宝」でやった対談の再録だ。でも、これだけはちょっと浮いてるような感じがして心配だ。「太陽」はいい映画だと思うし、考えさせられた。しかし、「ひどい映画だ」「許せない」と怒る人々もいる。対談を読んでもらったら、ソクーロフさんの〈真情〉は分かると思う。とても日本が好きだし、昭和天皇を敬愛している。日本の歴史にも詳しく、僕よりも〈日本通〉だ。「ソクーロフさんは僕よりも日本のナショナリストですよ」と私は言っちゃった。

この元気一杯、過激な雑誌の中では「浮いてる」と思ったが、ある意味、この対談も過激で危ういのかもしれない。どんな反応があるか。聞きたくもあり、聞くのが怖くもある。

(2)納豆売り、ビル清掃、焼鳥屋…。いろんなバイトをしたよな。我々「現代右翼」は

森達也氏と木村三浩氏の対談は、この本のメインだ。「激論10,000字対談！」と銘打ち、実に様々な話をしている。「右翼についての素朴な疑問」「右傾化」「憲法９条」「テロとは何か」…などについてだ。本音で語り合い、かつ、カッチリと噛み合って話が展開している。これはいいと思った。よくあるような、「言いっ放し」はない。お互いの話をじっくりと聞き、そして語る。

「三浩さん、テロは認めますか？」と森氏は聞く。又、右翼の信条、生活、カネ…についても聞く。木村氏は、バイトしながら運動してきた体験を具体的に話す。こうした具体的な話は余りしたことがないので、実によかった。皆で、デパートの食品売場に行って納豆売りをしたこともある。

「僕は納豆を売らせたら上手いですよ（笑）。鈴木邦男さんも面白がって手伝いにきてました」

と木村氏は言っている。アッそんなこともあったな。と思い出した。他にも、いろんなバイトをした。皆で、ビル清掃のバイトに行ったこともあるし、ほとんど派遣社員の会社のようになった時もある。運動よりもバイトの方が多かった時もある。

さらに凄いのは、焼鳥屋を一軒まかされて、皆で、やったこともある。ちゃんと写真を撮っておけばよかったな。思い出して、今度詳しく書いてみよう。そんな昔のことを思い出させてくれる人間味あふれる対談でしたね。森さんはポロッとこんなことを言う。　「平和な状態を望みながら、平和になるのが怖い。だから仮想敵を作らないと不安になってしまう」

ウーン、右翼のある面の真理を衝いているかもしれない。ぜひ読んでみて下さい。

さて、その木村三浩氏が「サンデー毎日」（４月８日号）で、衝撃的な発言をしている。「ワイド。サクラの珍事」という特集の中の一つ。

〈「国策捜査」で幻に終わった「右翼訪朝団」の全真相〉

数年前に、塩見孝也さんが団長になって「白船訪朝団」をぶち上げた。私も副団長で行く予定だった。北朝鮮の政治家、学生、青年と公開討論をし、拉致の問題を解決する。と打ち上げた。30人ほどで行く予定だったが、直前でつぶれた。この時は左翼の人が多かったが、今度は純粋に「現代右翼」だけで訪朝する。そして拉致問題解決を目指す。凄い計画だ。でも、それを計画した人が直前に逮捕されてしまった。人道支援ＮＧＯ「レインボーブリッヂ」の小坂浩彰さんです。

この人はテレビによく出ていたので、僕も知っていた。２月４日（日）の「田中義三さん友人葬」で初めて会った。右翼の人脈も多いようだ。北朝鮮には80回も行っている。向こうには絶大な信用がある。ところが厚生労働省の補助金を騙し取ったとして、同省技官らとともに詐欺容疑で逮捕された。でも、これは「国策捜査」だと木村氏は言う。「サンデー毎日」によると…。

〈小坂さんは、こともあろうにミサイル発射や核実験、拉致問題を糾弾する右翼・民族派による「訪朝団」の編成を極秘裏に進めていた。

「主要な右翼団体で訪朝して『日朝民族交流協会』を作る」「北朝鮮が怖いのは信念を持つ勢力。北はそういう人たちとハラを割って議論したいと言っている」

----小坂氏は、そう話していたという〉

〈実際に訪朝を誘われたのは、新右翼団体「一水会」など行動派で鳴らす団体の幹部だった。一水会の木村三浩代表が言う。

「訪朝には条件があった。拉致問題を進展させる確約、例えば生存者を確認できることや、被害者の安否の詳細が判明することだ。自腹で３泊４日という話だったが、まだ議論の段階で、決定したものではなかった〉

政府同士で問題が動かないのなら「民間」の手で打開しようという計画だった。北朝鮮も本気だったようで、金正日総書記と近い人物が受け入れの段取りをしていた。しかし、３月９日、

「今日中に（右翼団体幹部らの）パスポートのコピーを届けてほしい」と連絡した数時間後に、小坂さんは逮捕された。そうです。私もパスポートのコピーを送りましたよ。

〈「権力にやられた。民間の手で拉致被害者が帰国するようなことになれば、『何もやってない』と外務省などが批判される。権力側はそれを危惧したのかもしれない」（木村氏）
　その見方にはそれなりの根拠があるのだ。民間人が拉致被害者の返還へ道筋をつけるのに成功すれば、安倍政権のメンツは丸つぶれ。だからこそ「逮捕は国策」という批判が出るわけだ〉

　今度こそ北朝鮮に行けると思っていたのですが、私の夢も終わってしまいました。

(3)浮気妻の「自衛」でせうか。「転びの研究」か

　これも先週、予告編をやったけど。アメリカ・テキサス州の話。夫が家に帰ったら、小型トラックの中で妻が男と抱き合っていた。見知らぬ男だ。それに妻は下着姿。大胆にも、浮気してたのだ。
　これからが凄い。浮気現場を見られた妻は、いきなり、「レイプよ！」と叫んだ。「助けて！」と。それで夫は所持していた銃で男を射殺、殺人容疑で逮捕された。まるで、シャロン・ストーンの「氷の微笑」のような話ですな。浮気現場を見つかったらどうするか。「究極の選択」です。「転びの研究」です。
　女は怖いですね。いい気持ちで愛し合ってたのに、いきなり、「レイプだ！」と叫んで、殺してしまう。いや、夫に殺させる。カマキリ夫人ですな。何も、わざと夫に殺させたわけではない。でも、夫はいつも銃を所持している。それにテキサス男はカッとなりやすい。そんな事はよく知っていて、とっさに「助けて！」と叫んだんでしょう。その、とっさに叫んだという頭の回転、クレバーさ、それが怖いですね。
　しかし、浮気してた男も驚いたでしょう。女に誘われ（きっと誘われたんだ）、トラックの中で抱き合っていたら、いきなり、「キャー！助けて」と叫ばれ、いきなり、ズドン。気がついたら、死んでいた。何が何だか分からんうちに殺されとった。かわいそうです。
　まァ、日本でも昔は、こんな時は殺してもよかったんです。明治になる前は、妻が浮気したら、相手の男と共々に斬り殺してよかった。殺しても無罪です。でも今は違います。アメリカでも違います。
　この事件では、男は殺された。女は口封じをしたんだ。夫は殺人罪で逮捕。でも、「妻を守るため」にやった自衛の行動だ。無罪になるだろう。そして、二人の「平和な家庭」が戻ってくる。メデタシ、メデタシだ。
　そういう「結論」になるはずだった。ところが、警察が調べたところ、妻がウソを言ってることが判明。なぜ分かったのか。携帯電話のメッセージだったんですな。妻は男に、「あなたの温かい抱擁が必要なの」と送信していた。メールだったのか。両方あったのでしょう。これじゃ、逃げられん。自分の携帯のメッセージやメールを消しても、相手には残る。それも消しても、電話局には残る。ウーン、逃げようがないな。
　それで、急転直下、妻が逮捕された。居合わせた夫に相手を殺させたのが、「故殺罪」（計画性のない殺人）だとして。手を下した夫は、家庭を守ろうとしただけだと判断されて殺人に問われなかった。産経新聞４月２日付の記事からでした。
　でも、まだまだ問題がある。「故殺罪」は無理じゃないですか。だって、「殺してくれ！」と言ったわけじゃない。浮気の現場を見られ、とっさに嘘をついただけだ。こんなことは誰だって

やる。まさか、それで夫が殺すとは思わない。腕のいい弁護士がついたら、妻は無罪ですな。この事件の進展を見守りたいです。

(4)冤罪をどう晴らすか。植草さんの受難

もう一つ、「転びの研究」。植草一秀さんです。女子高生のスカートの中を手鏡でのぞいたと逮捕され、今度は、女子高生のお尻を触ったと逮捕された。どちらも「無罪」だと主張している。「二度もやってるんだ。無罪のはずはないだろう」と一般の人は思う。しかし、運の悪い人はいる。気が弱く、落ちつきがなく、オドオドしている男はいる。特にエリートに多い。そして何かあると、「あっ、こいつが怪しい」と周りの人に思われてしまう。

今回の事件の時も、そうらしい。電車に乗っていたら、「やめて下さい!!」という声が聞こえた。「あっ痴漢騒ぎだな。いやだな。巻き込まれたら大変だ」と思った。それでジーッと、下を見ていた。それが、かえって「挙動不審」に見えた。車内の目が一斉に、彼に集まった。それで、あわれ、「痴漢」にされてしまった。一斉に彼を見たといったが、真犯人も、見たんだ。これも、「転びの研究」だ。じっとしてたら、「痴漢」にされる。サッと横を見る。「おっ、こいつか！」という顔で視線を向ける。何なら、指を示して、「こいつか！」と言う。「非難する大衆」に自分を同化する。助かるにはこれしかない。

「いやだな。巻き込まれちゃ」とビクビクし、胸がドキドキし、顔まで赤くなって、じっとうつむく。こんなに小心な男は、皆の視線が集まる。「こいつだ！」となる。かわいそうだ。

ウーン、これは、十分にありうる話だと思いますね。映画「それでも僕はやってない」もそうだった。それで、植草さんの弁護士は、「再現ビデオ」を撮って、裁判所に提出した。「こんな状況でした。こんな形で、冤罪は生まれたのです」と。裁判も演劇的になる。迫力がある。「スポーツニッポン」（3月29日付）によると、こうだ。

植草さんの公判が３月28日、東京地裁で開かれ、「弁護側が現場状況を再現したＤＶＤ映像を上映し、あらためて無罪を主張した」。

〈映像は真犯人が別にいると仮定し、真犯人と植草被告、被害女性、乗客に扮した計約10人が出演。電車内とほぼ同じスペースになるよう線を引いて区切り、被告が混雑した車内で痴漢と間違われたとする主張を再現した〉

随分と大掛かりなＤＶＤだったようだ。じゃ、この「真犯人」が名乗り出てくれればいいんだ。そんなことはないか。でも、当日の他の目撃者が名乗り出たらいい。一般の人は「どうせやってるんだ」と予断の目で見ている。しかし、植草さんの言い分も説得力がある。特に、こう答えているからだ。

〈植草被告はその後の被告人質問で、電車内の状況を、「酒に酔って記憶がなく、ぐったりしていた。被害女性の大きい声で痴漢騒ぎと思ったが、以前に事件に巻き込まれたことがあり、絶対にかかわり合いになりたくないと思い、目をつぶり下を向いていた」と述べた〉

オドオドして下を向いた状況がまるで目に見えるようだ。だから、かえってそれが〈不審〉に見えたのだろう。植草さんの受難だな。裁判の行方を見守りたい。

そう思っていたら、又しても知り合いが逮捕された。三浦和義さんだ。４月６日（金）付の新聞に出ていた。自宅近くのコンビニでサプリメント６点（3600円相当）を上着のポケットに入れ

て盗んだ疑いだ。犯行の様子が防犯カメラに映っており、これがテレビのニュースでも放映された。しかし、現行犯逮捕ではなく、事件は３月17日のこと。そのあと、３月30日に三浦さんが来店したので店員が問いただした。

〈「うっかり忘れてた。払います、と話したが、そのまま立ち去ったため110番通報」〉産経新聞（４月６日付）

　ウーン、よく分からん。これを読むと、店員とは顔見知りで、親しかったようでもある。不思議な事件だ。あんなに冷静で、頭のいい三浦さんが、本当にこんなことをしたのか。

【だいありー】



四宮正貴先生の還暦を祝う会（3月30日）

・４月９日（月）図書館。「創」（５月号）の連載で私は「戦後か。戦前か」を書いた。「くまぇり」の獄中手記、そして、「週刊ゴング」休刊の内容が面白かった。

・４月10日（火）11時、雑誌の打ち合わせ。その後、新宿の紀伊国屋に行く途中、パッタリと山根二郎弁護士と会い、話をする。山根さんは東大全共闘、金嬉老の弁護などをした過激な弁護士だ。

・４月11日（水）ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の授業が始まる。今期は文芸科の「時事問題1」で、水曜の２時40分から。

　この日の「東京新聞」の「こちら特報部」に私のコメントが出てました。「都知事選が映した深層」について。

・４月12日（木）知り合いのカメラマンの「写真展」を見に行く。フォトエントランス日比谷。夜、「鈴木宗男を叱咤激励する会」に出る。いつも元気だ。筆坂秀世さんや小沢遼子さん、宮崎学さんらと会った。ホテルニューオータニ。

・４月13日（金）昼、打ち合わせ。午後７時から生長の家飛田給道場に行く。楠本加美野先生の講話を聞く。「生長の家」は私の思想的・宗教的な原郷だ。高校生の時に、この飛田給に来て、練成会を受けた。それが「全て」の出発点だった。久しぶりに来た。何十年ぶりか。懐かしかった。私も「再生」したような気がした。

・４月14日（土）昼、図書館。夕方、５時半から慶応大学に行く。『連続講義・東アジア、日本が問われていること』（岩波書店）の出版記念パーティ。私も書いている。三田キャンパスの「山食」で。

・４月15日（日）１時から試写会。新橋ＴＣＣ試写室。韓国映画「まぶしい一日」。「日本と韓国の交流」をテーマに韓国の若手映画監督によって作られたオムニバス作品。「在日問題」「竹島問題」など。テーマは堅いが、笑いや友情もあり、よく出来ている。面白いし、考えさせる。いい映画だ。

【お知らせ】

・４月15日（日）７：00p.m.ネーキッドロフト。針谷大輔、中野ジロー氏らのトークがあります。

・４月19日（木）７：00p.m.一水会フォーラム。講師は杉嶋岑氏。『素顔の北朝鮮～抑留２年２ヶ月の体験から～』場所はホテルサンルート高田馬場　３階会議室。

・辛口のコント集団「ザ・ニュース・ペーパー」が主催する「ライブ塾」が高田馬場にあり、塩見さんや私も出てましたが、なくなってしまいました。
ところが、５月から新たに、高田馬場駅前にオープンします。又、私も出ることになります。



まだまだ選挙は続きます（中野区で）

・５月12日（土）「岡山レコン読者の集い」があります。木村代表と私が行く予定です。この日、『アウトロー列伝』（宝島文庫・600円）が発売です。私も、野村秋介さんについて語ってます。

・５月14日（月）は一水会フォーラムです。講師は水島愛一郎氏。『日本を喰い物にするハゲタカファンドの実態』場所はホテルサンルート高田馬場　３階会議室。

【お知らせ２】

・４月22日（日）は中野区議選の投票日です。友人のまき・やすとも氏が立候補して頑張っています。私も推薦人になって応援しています。

HOME

今週の主張

バックナンバー

投票と民主主義と私

今週の主張4月23日

(1)婦人も若者もナメられたもんだ！



「まだ反抗期」の外山恒一氏。「週刊文春」（4月19日号）

投票と民主主義について考えた。真面目に考えた。「一人一票」。これは当たり前で、民主主義の基盤・前提になっている。しかし、以前は、制限選挙だった。身分の高い人や高額納税者だけが選挙できた。それが、25才以上の男子に与えられ、さらに戦後は婦人参政権も認められた。つまり、以前は「25才以下の男」や「婦人」は「一人の人間」に認められなかったのだ。

婦人参政権も、日本の人民が闘いとったものではない。アメリカから与えられたものだ。「女に参政権なんてとんでもない」と言って反対した人もいた。平成２年の「朝生・日本の右翼」の時だって、「婦人参政権はいらない！」と言っていた右翼の長老がいた。

でも、戦後、婦人参政権は、すんなりと認められた。「これで保守派の票が増える」と思ったからだ。つまり、「女は夫の言う通りに投票する」と時の政府は思った。だから、「我々の票が二倍になる」と踏んだ。女性は20才頃には結婚するものだと思われてたから、大部分は「妻の票」だ。

「アメリカさんも粋なことをしてくれる」と喜んだのだ。20才になってまだ結婚してない娘もいる。でも、それは父親の言う通りに投票するだろう。そう思われていた。夫の意志に逆らい、父親の意志に逆らう日本女性などいるはずがない。そう思われたのだ。こうした従順な女性が「大和撫子（やまとなでしこ）」だと思われた。女性もなめられたものだ。

そして今回の「国民投票法案」。どうも18才以上に投票権を与えるらしい。これだって、「若者は保守的だ」「右傾化している」という前提があってのことだ。若者の票がドット、政権党に入ってくる。いいじやん。という読みだ。そのうち、普通の選挙も「18才以上」にするだろう。その布石ですよ。

20年前、30年前なら考えられなかった。18才以上にしたら、皆、社会党や共産党に入れちゃう。若者は革新的だから。だから、自民党だって「18才以上」なんて考えもしなかった。でも今は、若者も保守化で、「じゃ、18才以上に与えよう」となったんだ。なめられてるよ。

ただ、〈誤算〉が一つあった。ネットだ。今回の都知事選を見るがいい。ネットという、この怪物は暴れ回り、ある「特定候補」が大ブレークしたのだ。選管も、これは想定外だった。対策に頭をかかえた。

「特定候補」というのは勿論、外山恒一氏だ。でも「産経新聞」（４月11日）では、そう書い

ている。。名前も出したくないのだ。都知事選の連載の中で、ネットのことを取り上げている。タイトルも凄い。

〈売名助長。暴走止められず。
ネット画像に右往左往〉

あわてぶりがよく分かる。

〈３月29日、特定候補の政見放送をインターネット上の動画サイトで見た都選挙管理委員会の担当者は一瞬、目を疑った。
「こんな国は滅ぼせ」「選挙なんか多数派のお祭りだ」
特定候補が繰り返す過激な発言を収録した政見放送をそのまま録画したもののほか、アニメ画像や音声とのコラボレーション。オーケストラのBGM…。コミカルな出来栄えを競うようにいじり回された“もう一つの政見放送”がそこにあった〉

なるほど、「もう一つの政見放送」か。でも外山氏は全くタッチしてない。誰か分からん人々が勝手にやってるのだ。面白いから取り上げる。それだけだ。支持者もいるだろうが、ただ、からかってる人もいる。これを面白がってる人が皆、支持者なら、何十万票にもなった。いや、もしかしたら、当選したかもしれん。選管は、この「もしかしたら」を考えた。ネットを使って、「大激変」が起こるかもしれない。私も、その「予兆」はある、と見た。

〈公職選挙法は本来、文書や図画の頒布も制限。政見放送も映像を流す回数なども決まっているうえ、ネットを利用した選挙活動は認めてない〉

だから、石原、浅野も、外山氏もHPは持てない。でも、誰かしらん者が勝手にやる。選管はこれにも文句をつけた。特定候補の政見放送が自由に閲覧できるのは「公平性を欠く」といって、動画の削除を選管は文書で要請した。でも削除しても削除しても、次から次と現われる。モグラたたきだ。
多分、これからはもっと強権的な対策を考えてくるだろう。選管vsネット。これからどうなるのか。

(2)「公平」「平等」って何だろう

ここで気になったのは、選管のいう「公平性を欠く」という言葉だ。彼らがそんなことを言う資格があるのか。そう思った。だって選挙の報道を見てみい。全部が全部、「公平性を欠いてる」ではないか。
民主主義とは、誰だって当選できる。誰だって立候補できる。それが建前だ。でも都知事選に出るには300万が必要だ。供託金が必要だ。この大金を出さなければ、出れない。不公平だ。機会均等ではない。
この大金は、ほとんど国庫に入る。税金と同じだ。つまり、立候補者たちは、国のために莫大な金を出してくれた「愛国者」たちだ。だったら、その人たちには100%、公平な機会を国は与える義務がある。選管は言うだろう。
「だからNHKでは政見放送させている。選挙公報も好きに書かせている」…と。
でも、これを見る人は、ほんの一部だ。政見放送はNHKの夕方４時頃からやっているらしい。いつ誰が出るかも分からん。見逃したからといって、好きな時に見直すこともできん。「政見放

送は全部ビデオに録っておけ。そして、キチンと見ろ！」と言ってるようだ。それ位の熱心な人間でなければ投票する資格はない、といっているようだ。

でも、そんな熱心な有権者はいない。皆、テレビで見て判断する。新聞を見て判断する。このメディアが又、〈不公平〉そのものだ。「こいつは主要候補だ」「こいつは泡沫候補だ」「単なる売名だ」と決めつけて報道する。おいおい、お前らにそんなことを決める権利があるのかよ、と思う。こういうメディアこそ選管は注意すべきじゃないか。警察も選挙違反で逮捕すべきじゃないか。

具体的に言おう。今回、都知事選に14人が立候補した。テレ朝のサンプロは石原慎太郎、浅野史郎、吉田万三、黒川紀章の４人を呼んで政策論争をさせた。これに対し、ドクター中松は抗議した。「４人だけに限定したのはおかしい。俺も入れろ！」と。これは正しい。他の候補も言うべきだった。

じゃ、新聞はどうだ。ある新聞では石原、浅野、吉田、黒川の４人を「主要候補」として毎日の選挙運動を報道した。ある新聞では中松も入れて、５人を「主要候補」として報道した。週刊誌やスポーツ新聞は、桜金造や外山恒一を少し報道した。



選挙公報の外山氏の訴え

つまり、誰を「主要候補」とするかはメディアが勝手に決めている。「こいつは泡沫」だと初めから落選させている。「でも、実際そうじゃないか」という人もいるだろう。石原、浅野、吉田、黒川だけが真面目に選挙しようとして、他はやる気がないし、「売名」だろうと。何となく、そう思ってしまうところが怖い。

でも、300万という大金を供託金として取るようにしたのは、「泡沫を防ぐため」だった。だったら、300万出し、国の為に金を出した人々は、決して「泡沫」ではない。だから、同じチャンスを与えるべきだ。

「しっかし、やる気のない人もいるよ」というのなら、それをチェックしたらいい。たとえば300万出してもNHKの政見放送にこなかった人。実は一人いた。これは、「やる気がない」といって落としていい。でも、300万出した人だ。国は（都かな）は、「感謝状」を出したらいい。

では、あと13人だ。全くポスターを作らない人。これも落としていい。「全く貼ってない奴も多い。こいつらは、やる気ないだろう」と思われるだろう。でも、ポスターを作り、貼ったんだけど人手がなくて貼り切れなかっ、という候補もいる。だから、「一割以上貼らなかった人はダメ」という線引きをしてもいい。そうすると、７人位だ。この７人は、どんな時も公平に出せばいい。サンプロでも他の番組でも、新聞でも…だ。サンプロなどに呼んでも来ない人がいるかもしれん。それは落とす。その上で、完全に平等、公平な「機会」を与える。

NHKの政見放送も、誰も見てない時間じゃなくて、夜の10時から１時間、全員の放送をやり、そして、順番を変えて、毎日、流す。又、見逃したら、いつでも見れるようにNHKのHPでやる。ネットも全て自由にする。それでこそ、真の民主主義だ。違いますかね。

(3)だから私も立った！

「東京新聞」（４月11日付）で取材されたんで、そんなことを喋った。「こちら特報部」の

「都知事選が映した深層」という特集だ。

「守勢野党、元気なく」
「強者に寄り添う。利害で行動」

と見出しが出ていた。「守勢野党」は私が言ったのだ。

〈「総じて言えるのは現在の改憲問題にも通じることだが、保守派が攻撃的で、左派や野党が防衛一辺倒。本当は左派が『公安警察の廃止』なんて言ってもよいのに、そんな言葉は聞こえない。野党に勢いがない」〉

そして外山氏の話をした。
「僕は泡沫扱いだった外山恒一君を応援した。彼はインターネット上では注目されたが、メディアは無視。そんな不平等な扱いも問題」

300万もの大金を国家に収める「愛国者」たちなんだから、全員、同じチャンスを与えろ。全て平等にしろ。そうしたら、組織も金もない人間でも、いい人間は出れる。それこそ民主主義だろうが。
15年前、野村秋介さんは「風の会」を立ち上げて、10人の候補を出した。凄い人気だった。もしかしたら、と思った。でもダメだった。しかし、今だったら、確実に当選するだろう。「右翼の代表」が国会にいたら、いいだろう。右翼の事件が起こっても、その議員に聞けばいい。又、議席があるんだから、「もうテロはするな」とも言える。右も左も、言論の場で勝負できる。何なら、参議院は「職能代表」で選んだらいい。右翼、左翼、プロレスラー…各５人の枠にして…。



野村秋介さんの「風の会」の選挙ポスター（15年前）

そうそう。最後に紹介しとこう。私の「区議選立候補」のポスターだ。ついに選挙に出たんですよ。
「やっぱり」と思った人もいたでしょう。これでは、誰が見ても私が出てるようですね。
まき・やすとも氏は中野区で地道にがんばってます。私も応援してます。「推薦人になってくれ」と言われたので、「僕でよかったら」と快諾しました。選挙のパンフかチラシの最後に、多くの人と一緒に私の名前も出るのだと思いました。
ところが、ポスターだったのです。ギョッと思いましたが、まァ、これも面白いなと思いました。候補者が、自民が安倍さんと、民主派小沢さんと握手してるポスターがありますね。あんな感じなんでしょう。私はそんな大物ではありませんが。まき氏は熱心だから、中野区中に貼ってます。家の近くのコンビニの横にも貼ってます。ちょっと恥ずかしいです。万引きも出来ません。
でも、いい記念です。中野区在住の人たちから、「見たよ。出るんですか」「とうとう、出るんですね。頑張って下さい」と言われました。うれしかったです、。「昔、お父さんは選挙に出たんだよ」といつか子供に自慢してやろうと思います。
「間違って私の名前を書いたらマズイな」と思いましたが、告示になると、このポスターは貼れません。はがして、まき氏個人のポスターになります。それに、掲示板にも、まき氏一人です。

投票所もそうです。「あれっ、鈴木の野郎は途中で下りたのかな」と思う人はいるでしょうが。

何もしないで、「立候補気分」だけ味わいました。楽しかったです。まき氏にも感謝します。



これが話題の区議選のポスター

さて、もう一人、推薦したんです。渋谷区長選の快楽亭ブラックさんです。私は推薦文をしっかり書きました。落語家のブラックさんが当選したら、渋谷は文化の街、芸術の街になる。日本のフィレンツェになると思いました。ブラックさんが当選したら私は渋谷区に引っ越します、と宣言しました。

でも、ギリギリになって、立たなかったんですね。かわりに宅八郎さんが出ました。宅さんも知り合いです。私が「週刊SPA!」に連載をしてた頃、宅さんも連載してました。でも、小林よしのりさんと喧嘩して、「SPA!」をやめました。あの時は、小林さんもやめました。鶴師編集長もやめました。何とか仲直りさせようと私も必死に説得しましたが、私の力じゃダメでした。そして、しばらくして私の連載も打ち切りになりました。勿体ない話ですね。私はともかく、宅、小林、鶴師…という実力者が「SPA!」を去ったんですから。得をした人は誰もいません。

その後も宅さんには時々、会いました。それにしても、ここで渋谷区長選に出るとは思いませんでした。想定外の展開でした。

【お知らせ】

映画「パッチギ！ LOVE & PEACE」もよかったですが、韓国映画「まぶしい一日」もよかったですね。先週もちょっと紹介しましたが、韓国の若手映画監督によって作られた「オムニバス」です。戦争、友情、恋、笑いがあります。その中に、「在日問題」や「竹島問題」なども出てきます。なるほど、こういう取り上げ方があるのか。こんな視点があるのかと思いました。

第一話は「宝物」。祖父の遺言で済州島に祖父が埋めた宝物を探しに行く日本人少女。途中、捨てられていたバイクに乗って旅をします。「持ち主」だという青年たちに取り囲まれ、糾弾されます。「なんだって日本人は盗む。独島だって」と韓国青年は言います。

だからといって「反日映画」ではありません。独島は竹島のことですね。昔、愛国党の赤尾敏さんは、「反共のため、日・米・韓の連帯が必要だ」と言ってました。日韓連帯に竹島が邪魔になるなら、ダイナマイトで爆破してしまえ、と言ってました。小さな島にこだわって〈友好〉を壊してはダメだと。凄いことを言う人だと思いました。

そこまで言わなくても、もっと新しい解決のために知恵を出せるはずです。

第二話は「母を訪ねて三千里」。日本にいる母に会いたさにお金を貯める高校生。切ない話です。

そして第三話「空港男女」。ひょんなことから知り合った日本人の男性と韓国人の女性。空港の屋上で星を見、風を見ながら話し合います。言葉は全く分からない。でも、二人とも熱心に話します。そのうち、言葉は通じないが、心が通じてきます。ウーン、こんなことはあるかもしれん、と思いました。

言葉が通じなくても、いい人かどうかは分かる。いくら喋っても、分からないこともある。政治討論番組なんてそうですね。喋れば喋るほど、敵意が湧く。憎しみが湧く。そんなことがあ

る。
　又、いくら喋っても、その内容ではなく、その人間がじゃ何をやってるかだ。自分のことしか考えてないくせに、「人にやさしい政治を！」と熱弁をふるう人がいる。「ルールを守り、思いやりの政治を」と言いながら、他人に喋らせず、怒鳴り散らして自分だけ吠えてる論客もいる。やはり、〈人間性〉ですよ。言葉が通じなくても分かることはある。
　国際関係についても言えるでしょう。そんな、いろんな事を考えさせられる映画でした。ぜひ、いろんな所で上映してほしいです。そして、トークショーもやってほしいです。

【だいありー】

・４月16日（月）図書館。最近は吉村昭を集中的に読んでいる。三島由紀夫全集、司馬の「街道をゆく」、中里介山の「大菩薩峠」といった長大作を読んで、「次」の目標を失っていたのですが、吉村昭ですね。「月刊タイムス」（５月号）に吉村のことを詳しく書いた。全部読もうと思っている。150冊か200冊だろう。今、51冊目だ。今年中には読破できるだろう。

・４月17日（火）５時から、インターネットラジオに出る。
　そのあと、高田馬場で本の打ち合わせ。
　家に帰ってテレビを見て驚いた。アメリカでは大学で32人が射殺された。又、日本では伊藤・長崎市長が襲撃された。瞬間的に本島等・前市長の銃撃を思い出した。右翼のテロではないようだが、許せない事件だ。何件か取材の電話があった。

・４月18日（水）２時40分、ジャナ専の授業。「時事問題」。選挙の話をした。今週書いたような「投票と民主主義」だ。それと、憲法の話をした。
　毎日新聞（関西版）の社会面に私のコメントが載っていた。

・４月19日（木）今日から河合塾コスモの授業が始まる。３時から「現代文要約」。５時から「基礎教養ゼミ」。星川淳さん（グリンピース・ジャパン事務局長）の『日本はなぜ世界で一番クジラを殺すのか』（幻冬舎新書）を皆で読む。

・４月20日（金）６時からサンケイプラザで、星川淳さんの『日本はなぜ世界で一番クジラを殺すのか』の出版記念会。２日間、集中的にクジラのことを考えた。

【お知らせ】

・５月12日（土）「岡山レコン読者の集い」

・５月14日（月）一水会フォーラム。講師は水島愛一郎氏。『日本を喰い物にするハゲタカファンドの実態』場所はホテルサンルート高田馬場　３階会議室。

・６月11日（月）の一水会フォーラムは私が講師です。「一水会35年の歴史」について話す予定です。

・「北海道人」というブログで、和多田進さん（元・「週刊金曜日」編集長）と私の「往復書簡」が連載されてます。やはり、投票や民主主義について考えています。見て下せえ。

・『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書）が５刷になりました。ありがたいです。

HOME

今週の主張

バックナンバー

果して私はEvolvingなRightなのか

今週の主張4月30日

(1)香港の雑誌が特集。極東の「極左と極右」



ホンコンの英文雑誌

国際宅急便が時々くる。アメリカや中国や韓国、北朝鮮などからだ。本が送られてきたり、取材の依頼だったり、アンケートだったりする。又、「これを見てくれ」という秘密の政治的ビデオだったりする。

先週来たのは本だった。表紙を見て驚いた。ホンコンで発行されている英文雑誌だ。「Far Eastern Economic Review」という。「極東経済通信」とでも訳すのだろうか。あれっ、何だろうこれは、と思った。表紙のイラストが凄い。男が２人いる。左の男は中国の極左かな。赤旗が並んでるし。右の方は顔が三島に似ている。刀を持ってるし、日の丸を身にまとっている。そばには街宣車がある。日本の極右か。極東の極左と極右なんだろう。そんな人達を特集している。タイトルはこうだ。

China's Rising New Left
Japan's Evolving Right

中国では新左翼が立ち上がっているし、日本では右翼が進化している。そんな意味だろう。最近、日本では「右翼」ものの本が多い。売れてる。宮崎学の『右翼の言い分』、洋泉社Mookの『現代右翼』…と。週刊誌、特に実話雑誌では毎週のように、行動派の右翼の人が出ている。又、教科書、領土、拉致をめぐり、日本の右翼は増え、過激になっている。これは外国の記者やライターにも、そう見えるらしい。それで、日本の右翼の特集だ。

「Colum Murphy page 15」

と表紙に書かれちょる。コラム・マーフィーという人が日本の右翼のことを書いたんだろう。と、ページをめくって読み出した。そしたら、page17に、イラストが出ていた。ギョッとした。誰だこいつは。こ汚い男だ。そう思ったら、どうも私らしい。醜いな。格好悪いな。でも、描いた人がそう思ったんだから仕方ない。

あっ、あの時の記者か、と思った。先月だったと思う。高田馬場のサンルートホテルで会った。家のそばのジョナサンがつぶれたんで、いちいち電車に乗って馬場まで出にゃならん。不便だ。不便といえば、マーフィさんと約束するまでが大変だった。何度か、ホンコンから電話があった。日本に２日間だけ行くので、何とか会いたいと。電話はいない時ばかりかかってくる。

国際電話やＦＡＸの仕方は分からんので連絡ができんかった。
　何度目かの時に、日本の飯田橋のホテルに泊まるという。そこで、ホテルにＦＡＸして、「明日はどうか」となった。めんどうだ。会うまでが大変だった。
　ホンコンに住んでるけどホンコン人ではない。「アメリカ人でっか？」と聞いたら、アイルランドです。という。ついIRAのことが頭に浮かんだ。それはいけないことだろうし、偏見だろう。そう思いながら、詳しく聞いた。アイルランドというとすぐ過激な政治集団のIRAを連想されるのは嫌なことだろう。それにIRAについても随分と間違った報道をされるのだろう。
　そんなことを聞いた。日本の右翼だって同じかもしれない。日本人は皆、三島にあこがれ、皆、街宣車に乗っているわけではない。右翼の行動についても随分と誤解があるだろう。それにしても何で私なんだろう。もっと行動的に過激にやってる人はいるよ。そんな人を紹介しますと電話番号を教えてやった。「話を聞きたいんですが、滞在が２日間しかないもので」と言う。じゃ、私に会えなかったらどうするつもりだったんだ。

　「右翼は外見やスタイルが怖いだけで、言ってることは怖くない。むしろ保守派オピニオン雑誌に書いてる人達の方が過激だし、怖い」という話をした。「そうなんですか」と彼は聞いている。「だから右翼にも100%の言論の場を与えたらいい。そしたら変わります」とも言った。私の持論を述べた。
　「それは分かります。でも、テロの問題があります。それが一番大きなネックだ」と言う。ウーン、鋭い。右翼は、「言論の場で大いにやりましょう！」と言う。しかし話題が〈天皇〉に及ぶと、「これだけは譲れない！」と話し合いを拒否する。「テロしかない」となる。暴力で問題を解決しようとする。これでは皆が話を聞かない。相手をしない。
　何も私が言うわけじゃない。マーフィさんが言うのだ。外国の記者から見てそう見えるのだろう。これは残念なことだ。又、日本の右翼の中にも、「テロを否定したら右翼ではない」と思っている人も多い。これではいかんと思う。
　でも、IRAだって変わってきたし、南米のゲリラでも、武装闘争を捨てて議会に進出したり。という現象がある。日本の右翼も15年前に「風の会」をつくり、野村秋介さんを議会に送ろうとしたんです。という話をした。「それはいいですね」と言う。でもダメだった。期待され、人気もあったが落選した。
　「惜しかったですね。南米のようになれたかもしれないのに」と言う。

(2)25年前に取材された「クリスチャン・サイエンス・モニター」の記者が今では…



　いま、このホンコンの本を読み始めて気が付いた。表紙では、「Japan's Evolving Right」だが本文では、「Do or Die for Japan's Radical Right」
　となっている。こっちの方が強烈だ。「生くべきか死すべきか、それが問題だ」ではシェークスピアになってしまう。これは、「決起か死か」とでも訳すんだろう。ザッと読んだが、大体、私の言ってることが書かれている。ただ、細部について分からん点もある。だから専門家に聞いて、完璧に訳し、それから要点を紹介しよう。
　そうだ。コラム・マーフィさんに会った瞬間、こんなことを聞い

たんだ。

その中の私のイラスト（らしい）

「コラムニストだからコラムさんですか？」と。

我ながら愚かしい質問をしたもんだ。でも、きっと誰だって思うだろう。しかし、コラムさんは言う。

「ちゃいまんねん。それにスペルがちゃいます」と言う。

コラムさんはcolum。短評（コラム）はcolumn。短評の方が、nが多い。フーン、知らんかった。コラムを書く人は「columnist」で日本でもコラムニストと言う。nがちゃんと入っている。そうなのか。すんませんでしたねと謝罪した。

「でも、アメリカの新聞に連載をしていたんですが、その時のタイトルは“colum's column”でした」。

なんじゃい。自分でも似てることを利用して遊んでるじゃないか。「そうですね」とコラムさん。そして二人で爆笑。



「The New York Times Magazin」に出た時（20年前）

「外国の記者から取材されることも多いでしょう」と聞かれた。ウーン、そうだな。時々あるな。でも僕は現役をリタイアした人間だ。現役で活動している人や、より行動的な人がいいでしょうと、紹介するようにしている。それで、大体は、そっちの方に取材に行く。「まあ、時間もないし、お前でもいいよ」という人だけ会っている。

一水会の代表でパリバリ活動してる頃は、結構あった。もの珍しかったのだろう。『愛国者は信用できるか』は５刷になったが、その本にも、昔、外国誌に取材された写真を載せている。「The New York Times Magagin」だ。1987年４月12日号だ。ちょうど20年前か。「天皇陛下御在位60年」をめぐる新左翼との対決について僕は喋った。「右翼とは何ですか」と問われて、「日の丸と三島ですよ」と答えた。一水会の私の部屋には後ろに二つが掛けられている。左には三島。右には日の丸だ。その時は全く気付かなかったが、今見ると恥ずかしい。だって、右の日の丸は汚れて、下の方が大きく破けている。そして丸まっている。その前で大真面目にポーズをつけている。アホか、こいつはと思った。

でも、当時は全く気付かなかった。汚れ、破れていても、貫録があっていい、と思っていたのだろう。これは忘れられない写真だ。

そうだ。もう一つ、忘れられない取材がある。このニューヨーク・タイムズが20年前か。そのずっと前だ。そうすると25年か30年位前だ。『腹腹時計と〈狼〉』が出た直後じゃないのかな。「クリスチャン・サイエンス・モニター」という新聞に取材された。〈日本に新しい右翼が出てきた〉といった特集だったと思う。じゃ、「Japan's Evolving Right」と同じかな。あるいは天皇問題だったかな。その時、取材した記者のことは憶えている。25年か30年も前のことなのに、はっきり憶えている。だって、その後、日本テレビのキャスターになって、さらにその後、超有名な評論家になったからだ。櫻井よしこさんですよ。そんな昔から私は知っていたんだ。でも最近は会ってないな。

以前会った時は、インタビューされた。だから大人しく聞いていたが、今、対談でもさせられたら、すぐに論破されちゃうだろう。25年間、私は進歩はないし、むしろ退歩の歴史だが、彼女

は急成長だ。Evolvingだ。日本の代表的論客だ。
　取材された時、もう一人、女性記者がいた。そして、外国の友人たちにも紹介された。「この人、右翼よ」と紹介する。外人たちは、「オー！ノー」とか、「オー！テリブル」とか言ってた（ような気がする）。でも今は私は、「左傾」してるといわれちょる。櫻井さんは私を超えて「右傾化」しちゃった。右傾化じゃなくて、当たり前のことを当たり前に言ってるだけなのか。
　その25年前の記事を探してるんだが、見付からない。たった六畳の部屋だけなのに分からん。貴重な資料が眠ってると思ったが、こうなると家はゴミの山だ。いつか出てきたら紹介しよう。

(3)たけしか提言する「Evolving」な選挙


「フセイン人形」で遊ぶクニョニョン

　最後に、先週の続きだ。民主主義の話ですよ。ビートたけしの『裸の王様』（新潮新書）に出ていた。面白い提言だった。

〈日本で男子普通選挙を実施したのが1925年。このときに25才以上の男性全員が選挙権を持つことになる。それで、それまで総人口の２%だった有権者が20%に増えた。それで日本が立派になったなんて話は聞いたこともない。有権者が倍になって国が倍よくなるということじゃない〉

　有権者が少数だった方が、「いい政治」をやられてたのかもしれない。でも、だからといって「制限選挙にしろ！」とは言えない。和多田進さんと私が「北海道人」というブログで考え、話し合ってるのもそのことだ。たけしはかつて小沢一郎と対談した。その時、小沢はこう言ったという。

「さすがに制限選挙は無理だけど、選挙権は登録制にしてもいいんじゃないか。昔のアメリカは登録料を払った人間だけが選挙できる仕組みだった。そのくらいしないと皆、真剣に選挙に行かないかもしれない」

　では今は小沢はどう思っているのだろうか、とたけしは言う。
　僕は、同じことを岩國哲人さんから聞いた。今は民主党の国会議員だが、出雲市長だった時に言っていた。20才になったら、勝手に選挙のハガキが送られるのをやめる。ハンコだけでいいから役所に行って、登録する。許可じゃない。ただ、名前を書くだけだ。それだけでも〈決意〉や〈覚悟〉は違うという。これはぜひやるべきだ。岩國さんが小沢に教えたのかもしれん。

　たけしは、さらに言う。

〈制限選挙が無理だと言うのなら、被選挙権の方を制限できないか。最低限の知能テストとか、ＰＫＯ活動に参加したとか、いくつかハードルを越えていないと立候補の資格がない、という考え方。「政治家用センター試験」みたいなものだ。何かの歯止めを利かせないと、二世、三世議員か、役人あがりか芸能人しかいなくなってしまう〉

　さらに、「ドラフト選挙」はどうか、と言う。

〈大体、地元の政治家を選ぶから汚職が起きるわけで、全然関係ないところから立候補させるようにすればいい。投票二日前くらいに、選挙管理委員会が、くじ引きで勝手に選挙区を決めてしまう。鈴木宗男が大阪で、辻元清美が北海道の候補者になってしまうかもしれない。あまりに選

挙期間が短いから、違反をやる暇も無い〉

うん、これはいいかもしれないな。さらに、「逆比例代表制」はどうかと言う。

〈世代構成に応じて、議席を割り当ててしまう。40～50代が一番多ければ、その世代の議員を増やすというやり方。

地域への利益誘導があるのなら、世代への便宜供与があってもいい。少しは50過ぎの親父が、うっぷんを晴らせて、日本人も元気になるかもしれない〉

じゃ、「世代」の前に、「男女比」もあるよな。女性が半分だから、議員の半分は女性にする。これも正しい「比例」だ。さらに、参議院は、職能代表にしたらいい。サラリーマン、農家、金融業、出版社、そして、右翼、新右翼、左翼、カルト宗教…と。プロレスラー枠を入れてもいい。各、３～５人にする。その枠の中で、選挙をやってもいいし、ジャンケンで決めてもいい。そうしたら右翼のテロも、新左翼のゲリラもなくせる。「国会に優先的に議席をもってるのに、テロやゲリラをやるとは何事だ！」と国会で糾弾できる。そういう「失点」があった時は、その枠の議員は失格にしてもいい。そうしたら、テロやゲリラをなくすように左右の議員も必死になるだろう。テロやゲリラを計画してる団体や人のところには、「お願いだからやめてくれ」と頼み込むだろう。それでもダメな時は。その時は、しょうがない。消すんですな。そしてテロもゲリラも未然に防げる。こうして日本は明るい国になったのでした。（まずいかな）。

他に、たけしは「与党」というネーミングの党をつくったらどうか、と言っている。いいね。「与党」とか「政権党」なんて。でも、認めらんないかな。あったら面白い。本当に与党になれたらいいが、いつまでも野党の最下位だったら、「野党、最下位の与党です」なんて格好悪いよな。ということでおしまい。

【お知らせ】

・５月12日（土）「岡山レコン読者の集い」

・５月14日（月）一水会フォーラム。講師は水島愛一郎氏。『日本を喰い物にするハゲタカファンドの実態』場所はホテルサンルート高田馬場　３階会議室。

・６月11日（月）の一水会フォーラムは私が講師です。「一水会35年の歴史」について話す予定です。

【だいありー】



花粉症で苦しむクニョニョン

ニューヨークに行ってきました。４月23日（月）から28日（土）までの一週間です。「アトミック・サンシャイン＝九条と日本」というパネル・ディスカッション、美術展示、映画の企画があり呼ばれました。国際交流基金で行ってきました。パネル・ディスカッションは「平和憲法は時代遅れか？再軍備を検討する日本」です。パネリストは次の４人です。

●ベアテ・シロタ・ゴードン（日本国憲法起草メンバー）
●ジャン・ユンカーマン（映画「日本国憲法」監督）

●フランシス・ローゼンブルース（イエール大学教授）、そして私。
　司会はキャロル・グラック（コロンビア大学日本史教授）です。

　アメリカ人ばっかりの中で、一人だけの日本人でした。緊張しましたね。このディスカッションがあったのは25日（水）です。26日（木）にはジャン・ユンカーマンさんの映画「日本国憲法」の上映がありました。又、美術展など多くの催しがあり、あわただしくも、充実した一週間でした。今は帰ってきたばかりで時差ボケでボーッとしてます。来週に、ゆっくりこのレポートを書きます。お楽しみに。

【続き・だいありー】

・帰国したら、次の日（29日）、ＮＨＫスペシャルの「日本国憲法」にベアテさんが出てました。４日前に会ったばかりなので、嬉しかったです。

・「特冊新鮮組・増刊ＤＸ」（６月10日号・竹書房）に劇画「東アジア反日武装戦線」が出てました。私も登場しています。そのあとに、私のインタビュー「叛逆のカリスマ」が出ております。

HOME

今週の主張

バックナンバー

ニューヨーク・レポート（その１）

今週の主張５月７日

(1)世界史的な、意義のあるシンポジウムでした



シンポジウムの会場で

今でも信じられない思いですね。私がニューヨークに行って来たなんて。そして、世界的なシンポジウムに参加したなんて。スピーチしている間は無我夢中でしたが、ニューヨークの街を歩いている時は、「あれっ、俺は今、ニューヨークを歩いてるよ。夢じゃないのかな」と思ったりしました。「自由の女神」を見たり、グラウンド・ゼロに行ったり、エンパイア・ステートビルを見たり…。今でも、「全ては夢だったのではないか」と思えたりします。

でも、現実です。証拠の写真もあります。たった一人で、飛行機に乗り、ニューヨークに行ってきたのです。「鈴木史」の中でも画期的なことです。「日本国憲法」の第14条、24条を書いたベアテさん初め、アメリカの著名な学者、映画監督と会え、一緒に話し合ったのです。今まで、いろんな集会、討論会に出ましたが、こうした「国際会議」は初めてです。それに、「ASIA SOCIETY」が主催し、そこで正式に招待されたのです。又、国際交流基金が支援をしてくれ、渡航費、滞在費を全て持ってくれました。それに講演料まで頂き、本当に申し訳なく思っております。光栄です。

国際シンポジウムに招待され、国際交流の仕事をしてきました。こんな有意義な、光栄な形で外国に行ったのは初めてです。ありがたいと思いました。今まで、外国には、いろんなところに行きましたが、自分の勉強、観光などが主です。イラクには、反米抗議活動のために行きました。タイには田中義三さん支援で５回行きました。ロシアには格闘技サンボを習うために５回行きました。観光以外には、「支援」「抗議」「トレーニング」と、いろいろありますが、個人的な旅行です。自分から行ったのです。

今回は違います。世界史的な意義を持つ国際的なシンポジウムに呼ばれ、「仕事」をしてきたのです。



では、当日の写真を見て下さい。４月25日（水）の６時から、ASIA SOCIETYで行われました。「アトミック・サンシャイン。９条と日本」というシンポジウムです。パネラーは４人。司会がいて、まず初めに一人ずつ、７分間のスピーチ。それから、討論でした。初めに出てるのが、その討論の時の写真です。

左から、まず竹田すみ子さんです。私にだけ付いた通訳です。全

部英語なので、要点だけを同時通訳してくれました。ベアテさんなど、分かりやすい英語でしたが、全部は私も分かりません。だから、とても助かりました。「７分間スピーチ」の時も、英語でやろうかと思いましたが、東北弁訛りの英語じゃ聞き苦しかろうと思いまして、日本語でやり、竹田さんに通訳して頂きました。

スピーチする私

竹田さんの左端（壇の下）には、渡辺真也さんがおります。この写真では、ちょっと見えないかもしれませんが、実は、彼が企画し、実行したのです。弱冠27才のキュレーターです。凄い男です。本当にお世話になりました。１年前から準備し、全くのゼロから始めたのです。そして、この壮大な、世界史的シンポジウムを実現したのです。まさに奇跡です。奇跡の人です。彼については、後でゆっくり紹介しますが、初めて会ったのは、１年前です。それも東京芸大で、脳科学者の茂木健一郎さんに紹介されたんです。茂木さんの紹介がなかったら、私もこうしてニューヨークに来ることもなかったのです。不思議な縁です。全ては、素晴らしい脳の活動から始まりました。

(2)飛行機の中でグラックさんの本を読んで、予習しました



会場からも活発な質問が…

さて、写真に戻ります。竹田さんの隣りが私です。それから、ジャン・ユンカーマンさんです。ドキュメンタリー映画監督で、映画「日本国憲法」の監督です。他に、チョムスキーさんの映画「チョムスキー9.11」や、画家の丸木位里・俊夫妻を取材した映画「劫火・ヒロシマからの旅」、そして「老人と海」などを撮ってます。チョムスキーさん、それに『敗北を抱きしめて』のジョン・ダワーさんとも仲良しです。今回もニューヨークに来る前は、「ボストンでダワーさんと会ってきたんだわー」と言ってました。「それと、松坂の試合も見てきたんだわー」と言ってました。

ユンカーマンとは一度、日本で会ってたので、とても心強かったです。それに、ベアテさんが女性だというのは知ってましたが、パネラーのフランシスさん、司会のキャロルさんも女性なんです。つまり、５人のうち３人が女性でした。男は、ジャン・ユンカーマンさん私だけじゃん。これには驚きました。

さて、又、写真です。ユンカーマンさんの隣りが、キャロル・グラックさんです。コロンビア大学日本史教授です。このキャロルさんが司会をしてくれました。日本でも知られた有名な教授です。日本の人々ともよく対談をしております。2003年には、姜尚中さん、和田春樹さんと一緒に本を出してます。『「日米関係」からの自立』（藤原書房）という本です。サブタイトルは「9.11からイラク・北朝鮮危機まで」となっております。

これは実にいいい本でした。私は訪米直前にアマゾンで手に入れ、飛行機の中で読みました。この本は、作り方もユニークです。三人が会って座談会したのではありません。太平洋を挟んで電子メールによる問答形式の座談です。ヒャー、こんなことが出来るんですね。時代は変わった、と痛感しました。

姜尚中さんは「朝生」でおなじみの東大教授ですね。和田春樹さんは東京大学名誉教授。ロシア革命運動史研究などで有名です。東アジア近現代史の大局的な考察から「東北アジア共同の家」構想を姜尚中氏と共に提唱しています。

なお、この本にはキャロル・グラックさんの紹介がこう出ていました。

〈1941年生。コロンビア大学教授。歴史学。著書Japan's modern myths:ideology in the late Meiji Period,Princeton University Press.（全米歴史学会賞受賞）ほか。米国を代表する、東アジアおよび日本の近現代史の大家。『ニューズ・ウィーク　日本版』にコラムを連載中〉



キャロル・グラックさん、姜尚中さん、和田春樹さんの本

この4.25シンポでは、初めにASIA SOCIETYの代表の人が挨拶。そして司会のキャロル・グラックさんがシンポジウムの主旨を説明し、４人のパネラーの紹介をします。そして、４人の７分間スピーチ。それから、シンポジウム。「平和憲法は時代遅れか？再軍備を検討する日本」というテーマでした。そして、質疑応答になりました。

「４人の紹介」の時、私のことをこんなふうに紹介してくれました。

「日本の著名なナショナリストです。ナショナリズム運動を長くやり、本を沢山出されています。暴力を否定し、言論活動で闘っている人です。日本の右翼ばかりでなく、左翼の人々からも尊敬されてます」

これは誉め過ぎですよ。恥ずかしくなった。「右翼、左翼からも軽蔑され、馬鹿にされてます」が正しいのに。と心の中で思いましたが、キャロルさんには言えませんでした。打ち合わせの時、「飛行機の中でキャロルさんの本を読んできました」と言ったら、喜んでくれました。「帰ったら、姜尚中さんによろしく伝えて下さい」と言われました。

(3)ベアテさんと私の共通のルーツは赤坂乃木坂です


今回の企画者・渡辺真也さん（右）と

さて、写真のキャロルさんの隣りは、ベアテさんです。ベアテ・シロタ・ゴードンさんです。今年83才です。でも、元気です。60年前の「日本国憲法」起草メンバーです。日本にもよく来てました。15年前は、私は二回、講演を聞きに行きました。そのことを一水会の「レコンキスタ」に書いたので、コピーをあげました。それと、『愛国者は信用できるか』もあげました。他のパネラー、司会者にもあげました。

ベアテさんは、子供の頃、日本に住んでました。そこで、日本の女性の虐げられた生活、差別を見て、後に、「女性の権利」を憲法に書くことになりました。当時、22才です。そんな若い女性が、14条、24条を書いたのです。無謀です。でも、その無謀さがなければ出来なかったでしょう。私は改憲論者ですが、この14条、24条は文句なしに素晴らしいと思います。とても当時の日本人では書けなかったと思います。そのことは、シンポジウムでも、きちんと発言しました。

さて、ベアテさんに会ったら、聞いてみたいと思ったことがありました。子供の頃、日本に住んでたといいましたが、実は赤坂の乃木坂に住んでたのです。当時は赤坂檜町（ひのきちょう）と言いました。私が学生時代に住んでたのも乃木坂です。「生長の家学生道場」です。

「じゃ、同じ頃に乃木坂に住んでたのか？」と早ガテンしてもらっては困ります。二人の間には

20才の差があります。でも、接点はあるんです。今、生長の家の本部は原宿にありますが、元々は乃木坂にあったんです。戦前からずーっと、乃木坂にありました。戦後、原宿に移りました。そして、乃木坂の本部跡には、生長の家の出版部門（日本教文社）や頒布部門（世界聖典普及協会）が残り、さらに昭和60年頃から、「生長の家学生道場」が出来たのです。

ですから、ベアテさんが戦前、子供時代に乃木坂にいた時は、近くに「生長の家」本部があったんです。打ち合わせの時、その事を聞きました。「おー！おぼえてますよ。朝早くからお経をあげていた所ですね」と言ってました。嬉しかったです。

私は「生長の家」がルーツです。乃木坂がルーツです。乃木坂は乃木将軍の家があったから、乃木坂と呼ばれています。今も、乃木さんの家が保存されております。その隣りは乃木神社になっています。学生道場にいた時は、よく乃木神社に行って、玉砂利の上に正座して、お祈りしました。「この国を護りたまえ」と乃木さんにお願いしました。「革命勢力に日本を滅ぼされてはたまらない」と思いました。

ベアテさんは子供の頃、この辺に住み、乃木神社もよく知ってました。生長の家もおぼえていました。同じ「ルーツ」かもしれません。

ベアテさんは、素敵なスカーフを首に巻いておりました。模様が文字のように見えました。アートです。「これは何ですか」と私が尋ねたら、机の上にひろげて見せてくれました。「９条を６カ国語で書いたのです」。うわー、凄い。日本語、英語、ハングル、中国語までは分かりましたが、あとは何かな。ドイツ語とフランス語だったのかもしれません。シンポジウムの直前だったので、ゆっくり見てはいられませんでした。

(4)「日米関係だけで、アジアをないがしろにしている」とローゼンブルースさん



（左から）私。ユンカーマンさん。渡辺真也さん

さて、ベアテさんの右隣りが、フランシス・ローゼンブルースさんです。イエール大学ポリティカル・サイエンス教授。日本経済のスペシャリストです。かつては、大学でキャロル・グラックさんの教え子だったとも聞きました。だから一番若いのです。

「７分間スピーチ」の時、フランシスさんはこんなことを言っておりました。日本とドイツの敗戦処理についてです。ドイツは、生きのびる為に、まわりの国の一国一国と、きちんと向き合い、対応してきた。ところが日本はアジアの一国一国と対応するのではなく、アメリカとだけ向き合い、対応した。「日米関係」が主軸になり、アジアがおろそかになった。

又、日本では強力な野党がいない。だから今のような総保守化になっているのだ…と。なかなか、真実を衝いてると思いました。

そうだ。打ち合わせの時、ユンカーマンさんがベアテさんに映画のパンフレットを贈ってました。「日本の青空」という映画です。日米国憲法が作られる過程を描いた映画です。ユンカーマンさんの映画「日本国憲法」はドキュメンタリーで、チョムスキーや日高六郎など多くの人が登場し、憲法について語ってます。

最近、出来たこの「日本の青空」は劇映画で、「これは素晴らしい映画です」とユンカーマンさんも誉めて、推薦してました。特に民間側の「憲法研究会」の活躍が取り上げられてます。「えっ、こんな映画が出来たんですか」とベアテさんも興味深そうにパンフレットを見てまし

た。

「ベアテさんも出てるんですよ、ほら」とユンカーマンさんが指し示します。22才の時、憲法作成に携わった時のベアテさんです。女優が演じています。きれいな女優です。ベアテさんの写真を見ても、とてもきれいな人でした。「嬉しいですね」とベアテさんは言ってましたが、「私の方がもっと美しかったわ」と心の中では思っていたのかもしれません。この「日本の青空」は今、東京周辺で連日のように自主上映しています。ネットにも紹介されてますので、皆様も見て下さい。５月６日（日）は府中で、５月８日（火）は埼玉で行われます。どっちかに行こうと思ってます。

先週書きましたが、日本に帰った翌日、４月29日（日）のＮＨＫスペシャルで「日本国憲法」をやってました。ベアテさんも出てました。実にタイムリーでした。

又、ベアテさんは2004年に作られた「ベアテの贈りもの」という映画にも出ております。藤原智子監督のドキュメンタリーで、とてもいい映画でした。「The Gift from Beate」です。私は公開時、岩波ホールで見ました。ビデオかＤＶＤには出てるのでしょうか。あったらぜひ見て下さい。

この映画の基になったのは、ベアテさんの本で、『1945年のクリスマス』（柏書房）です。平岡磨紀子さんが〔構成・文〕をやってます。〈日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝〉とサブタイトルにはあります。

又、ベアテさんの父親は有名なピアニストでした。世界に名を馳せ、「リストが墓からよみがえった」と称せられた巨匠なんだそうです。山本尚志が『日本を愛したユダヤ人ピアニスト＝レオ・シロタ』（毎日新聞社）と書いてあります。



映画「ベアテの贈りもの」のパンフ

あれあれ、４月25日（水）のパネラーと司会者を紹介しただけで今週は終わってしまいましたね。まあ、急がずに、少しずつ紹介していきますよ。翌、4月26日（木）は、ニューヨーク大学でユンカーマン監督の映画「日本国憲法」の上映と講演会が行われました。私は見るのは二回目ですが、とてもいい映画です。ベアテさん、チョムスキーさんも出ています。「ガイサンシーとその姉妹たち」の監督、班忠義さんも出てましたね。又、ダグラス・ラミスさんも出ています。「この憲法は平和を求めるアメリカ人と日本人民の〈共同製作〉だ！」と言っていました。

「このラミスさんとは朝生で一緒に出たことがあるんですよ」とユンカーマンさんに言いました。そのあと、ラミスさんとは何回か会いました。どっかの講演会の時、奥さんと来てました。私を紹介してくれました。「この人は右翼の鈴木さん。でも、いい右翼なんですよ。一緒に話せる貴重な人です」。嬉しかったです。

誰かが言ってましたね。昔。「いい右翼なんているはずがない。右翼は皆、権力の手先だ。テロリストだ」と。「もし、〈いい右翼〉があるとすれば、それは〈死んだ右翼〉だ！」。凄いことを言いますね。まァ、私は右翼としては死んだも同然ですから。だから、「どうでもいい右翼」なんでしょう。

そうそう、「いい右翼」について、こんなこともありました。キュレーターの渡辺真也さんが尽力してくれたおかげで、今回の企画は実現しました。ベアテさんや、大学教授、映画監督は、大丈夫でしょうが、よく、私をASIA SOCIETYへ呼んでくれたと思います。渡辺さんも必死に

なって、私のことを説明し、説得してくれたそうです。ありがたいです。

それと、何度も言いますが、国際交流基金がよく、私の渡航費を出してくれたと思います。前は外務省の外郭団体で、今は独立行政法人ですが、公的団体です。認めるのは大変だったと思います。交流基金の責任者に会ったら、「実は私は、20年前に鈴木さんに会って取材してるんです」と言う。『文化交流の仕事』という本で、在日の人や、いろんな政治的立場の人に話を聞いた。「高田馬場で話を聞いたんですよ」と言う。そうか、思い出した。奇遇だ。その奇遇が大いに助かった。

「“右翼の人が申請している”と東京から相談された。ギョ！と思ったら鈴木さんだった。“この人なら大丈夫だ。きちんと話し合いの出来る人だから”と言ったそうです。それで決まったのかもしれない。多くの人に支えられて私の渡米は実現した。ありがたいと思った。

又、当日、手伝ってくれた玉置さんという人は、ニューヨークの語学学校に通っていて、もうすぐ妻子を呼びよせて、こっちで永住するという。「ジャナ専の授業も聞きにいったことがあるんですよ」と言っていた。驚いた。日本では雑誌の編集長をしてたのに、それを投げ打って、ニューヨークに来た。いろいろとお世話になりました。ありがとうございました。渡辺真也さんや、スタッフの方。ASIA SOCIETYの人々。国際交流基金の人たち。本当にお世話になりました。ありがとうございました。シンポジウムではどんな話をしたかって？それも、次回から書きます。

【だいありー】



長倉洋海さんと（4月30日）

(1)４月28日（土）午後３時45分、成田に着く。行く時は緊張してたし、果たしてニューヨークに行けるのか。着いても入国拒否されたらどうしようと、不安、緊張、プレッシャーで一杯でした。「鈴木さんはイラクに行って、反米デモに出てるから、入国できなかったらどうしようと心配してました」と渡辺真也さんも言ってた。だからこそ、入国した時はホッとした。

シンポジウムも大成功裡に終わり、満員だった。活発な質問も出た。終わって緊張感もゆるみ、帰りの飛行機はリラックス。でも、その分、ドット疲労が出た。14時間ですよ。成田に着いた時は、歩くと体がグラグラとしました。

(2)４月29日（日）写真を出したり、たまってたファックス、留守電の整理をしたり、「名探偵コナン」を見たり。忙しかった。

(3)４月30日（月）たまっていた書類、レポート、原稿を書く。夕方、新宿の高野４Ｆのコニカミノルタプラザで「長倉洋海写真展・シルクロード」を見る。皆、迫力があっていい写真だ。感動した。長倉さんといろいろ話をした。

(4)５月１日（火）11時、雑誌の取材。別に憲法の話じゃない。長崎の市長殺害事件について。そういえば、「白船訪朝団」を立ち上げた時、長崎市長の伊藤一長さんは、「反核宣言」のメッセージを我々のために書いてくれた。ありがたかった。その市長さんが亡くなった。残念だ。

午後も、打ち合わせ。

(5)５月２日（水）武道館。午後10時から午後4時。「生長の家」相愛会大会。昔の仲間が券を送ってくれたので聞きに行く。昔の学生運動仲間たちに沢山会った。夜、伊藤邦典君（元・楯の会）や新聞記者さんと一緒に上野で飲んだ。

(6)５月３日（木）３時から河合塾コスモ。祝日だが、予備校は祝日は関係ない。毎日が受験勉強ですよ。３時から、「現代文要約」。５時から「基礎教養」ゼミ。山本譲司さんの『累犯障害者』（新潮社）を皆で読み、話し合った。考えさせられる本だった。山本さんは元国会議員。逮捕され、獄中で必死に勉強し、今は福祉の仕事をしている。去年、京都まで山本さんの講演会を聞きに行き、会った。「昔、鈴木さんの講演会を聞きに行ったことがあるんですよ」と言っていた。又、「日本のラスプーチン」佐藤優さんに会った時も、「昔、鈴木さんの話を聞きに行った。レコンキスタも本屋で買って読んでいた」と言っていた。ありがたい話だ。

(7)５月４日（金）原稿が沢山あって、必死で書く。

(8)５月５日（土）取材。図書館。吉村昭はどうも300冊位あるらしい。脚本家の高木尋士さんが言っていた。彼はそのうち120冊は読んだという。オラはまだ50冊だ。今年中に全部読破は出来んかもしれん。ニューヨークへの飛行機は往復30時間。空港までの時間、空港での待ち合わせ時間を含めたら、40時間位ある。それに一人だし、他人と喋らなくていい。全て、「読書時間」だ。そう思い、20冊位、文庫本を持って行った。でも、たった７冊しか読めんかった。だらしがない。自己批判。

(9)５月６日（日）ユンカーマンさんに言われていたので、府中まで行って映画「日本の青空」を見た。実にいい映画だ。皆も見んしゃい。やはり、「理想」を忘れたらいかん。「現実」に合わせるだけの改憲じゃ、意味がないと思う。やるんなら、60年前よりも、もっと大きな「理想」をもってやらにゃあ。夜、取材と仕事の打ち合わせで遅くなる。

(　帰国して一週間もたつのに、まだ「時差ボケ」だ。体がフワフワして、飛行機に乗ってる気分じゃ。でも、右翼や左翼の人達の中には、「60年安保の決戦がよかった」「戦前の日本は素晴らしかった」「いや、明治維新の日本がよかった」と言ってる人がいる。「時差ボケ」どころか、「時代ボケ」「世紀ボケ」ですよ。それに比べたら、私の「時差ボケ」なんて可愛いもんじゃなかと。
　そうだ。「時差ボケ」のボケは差別言葉じゃないのかな。「ボケ」は言葉がいけないというので、「認知症」になったんだよな。「時差ボケ」も、「時差認知症」にしなくっちゃいけんだろうが。

【お知らせ】

(1)５月７日（月）「創」（６月号）発売。３月28日（水）に「憲法行脚の会」に呼ばれてパネラーとして話をした。そのことを書いた。今年初めには「９条の会」事務局長の小森陽一さんと対談したし、去年の年末にはロフトで「憲法改正阻止の会」の人々と激論した。４月にはニューヨークでベアテさんたちと憲法の話をした。９月には又、憲法集会へ呼ばれている。全部、護憲派の集会ばかりだ。私を呼んでくれるのは、それだけ許容度があるからだ。いいことだ。又、元共産党No.4の筆坂さんと本を出す。そのことを書いた。

(2) ５月10日（木）『愛国者は信用できるか』の第５刷が出ます。

(3) ５月11日（金）『アウトロー列伝』（宝島社文庫）発売。私も書いてます。

(4) ５月12日（土）「岡山レコン読者の集い」。一水会の木村代表が行く。附録で私も行く。

(5) ５月14日（月）一水会フォーラム。１８時３０分開場　・１９時開演。講師は水島愛一郎氏（経済評論家）で、テーマは『日本を喰い物にするハゲタカファンドの実態』。場所はホテルサンルート高田馬場。
　又、この日は７時からネーキッドロフトで革命家・外山恒一氏の選挙報告会があるんですね。都知事選で１万５千票をとり、続いて熊本市議選に出て善戦し。さて、これからはどんな戦いを展開するのでしょうか。前半、ロフトに出てから、一水会に行こうと思います。

(6) ５月16日（水）午後７時。片島紀男・平沢武彦の『国家に殺された画家。帝銀事件・平沢貞通の運命』出版記念会。

(7) ５月18日（木）「サイゾー」（６月号）発売。私もちょっと出てます。

(8) ５月23日（水）7:30p.m.ロフトプラスワン。「闘う居酒屋」の第１弾。

(9) ５月末に雨宮処凛さんの本が出る予定です。『14歳にわかる右翼と左翼』。私も喋っている。

(10) ６月11日（月）７時。高田馬場サンルートホテル。一水会フォーラム。私が講師で、「一水会35年の歴史」について喋ります。

(11) ７月に森達也さんの対談集が作品社から出る予定です。私との対談も入ってます。今年、私の本は出ない。著名な人の本に、ちょっと入れてもらってる。人の情けで生きている。人の本に寄生して生きている。寄生（既成）右翼だ。

(12) ８月６日（月）ロフトプラスワン。久しぶりに植垣康博さん（元連合赤軍兵士）とトークです。他に、美人画家も一緒です。

(13) ９月６日（木）～９月９日（土）、高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。詳しくは、高木さんのブログを見て下さい。

HOME

今週の主張

「まるで丸山真男ですね」と言われちゃいました
＝ニューヨーク・レポート（その２）＝

今週の主張５月14日

バックナンバー

(1)「自由のある占領憲法」の方がいいだろうよ



シンポジウムの前に記録撮影（強力・アトミック・サンシャイン--九条と日本実行委員会

ニューヨーク・レポートの第２弾だ。４月25日（水）、ベアテさんたちと憲法シンポジウムをやり、それが終わった時、新聞記者に言われた。「〈戦後の虚妄に賭ける〉と言った丸山真男を思いだしましたよ」と。

驚いた。そんな事を言われたことはない。それに、そんな大物と比べられるなんて。おそれ多い。おこがましい。

「自由のない〈自主憲法〉よりは、自由のある〈占領憲法〉の方がいい」と私は言った。ちょっと暴論かもしれないが、正直な気持ちだ。覚悟を決めて言った。当日は200人ほどの人が会場のＡＳＩＡ ＳＯＣＩＥＴＹに来ていた。朝日新聞、日経などの記者も来ていた。その記者に言われたのだ。

丸山真男は著名な政治学者だ。学生の頃は随分と読んだ。『現代政治の思想と行動』などの著作がある。戦前・戦中の日本の思想状況や、政治家、軍国主義者などの考えを分析し、批判している。宮崎学さんの『右翼の言い分』にも丸山の「右翼批判」は引用されている。戦後の自由と民主主義を擁護し、もしそれが虚妄だと言うならば、それでもいい。その虚妄に賭けてやる。と言った。

昔、読んで覚えていた。しかし、余り関心はなかった。〈虚妄〉は虚妄だろう。そんなものは語るに値しないと思っていた。ところが今、私は〈丸山的〉と言われている。あるいは、私自身の人間性が虚妄なんだろう。

丸山は、学者としては超一流なんだろうが、人間としてちょっと覚悟が弱い。と思ったこともある。学生運動の嵐が吹き荒れた時だ。東大の彼の研究室が全共闘に荒らされた。進歩的で、反軍国主義の丸山は全共闘の味方だと思ったし、一体どうした事かと思った。丸山だって、そんな戸惑い、狼狽があっただろう。「右翼の教授を襲うのなら分かるが、なぜ俺の所を襲撃するのだ！」と。

でも、全共闘にしたら右派教授も、進歩的教授も皆、同じなんだ。〈体制〉を支えている人間なんだ。東大という管理体制を支えていた保守的人間なんだ。何せ、全共闘は、「東大解体」と言った。東大の権威にしがみつく教授は全て〈敵〉だったのだろう。

研究室を荒らされた丸山はどう言ったか。「そうだ、そうだ。東大解体だ。俺の研究室も解体されていい。もっとやれ！」と言うのかと思った。ところが、一個の人間だね。長年ため込んだ

本を持ち去られ、破かれて、我を忘れた。大学者ではなく、所有権を侵され、怒り狂った一人の人間になった。

「許せない！こんなことはナチスでもやらなかったことだ！」と喚いた。



スピーチする私

それはないだろうと思いましたね、私は。ナチスやファシズムのやったことは、こんなもんじゃないよ。ダメだな、象牙の塔の学者は。と思った。

そんなことがあって、ガックリきた。そして、長い間、読み返すこともなかった。だが最近、急に「丸山再評価」の動きが出てきた。丸山論も随分と出ている。東大闘争の時の、「我を忘れた発言」だけで彼を評価しちゃかわいそうだ。そう思うようになった。

私だって、アパートに火をつけられた時は、我を忘れた。普段、温和な私ですら、カーッと激怒した。「ふざけんな。見つけたら殺してやる！」と思った。そう思う一瞬は誰にでもあるんですよ。天皇陛下でも2.26事件の時、自分の信任していた重臣たちを殺され、「朕自ら討伐に行く！」と口走られた。神ではなく、人間になり、「人間の怒り」に身をまかせた。それではダメだろうと、三島由紀夫は『英霊の声』で「人間天皇」批判をしている。しかし、三島もちょっと無理なことを言っている。

天皇を引きあいに出したら失礼だろうが、丸山の人間的〈怒り〉だけで、彼の思想や学問的業績を否定するのは間違っているだろう。そう思った。だから今年は丸山の本を集中的に読んでみようと思う。昔、随分と読んだが、ほとんど忘れているだろうし…。

(2)丸山に影響を受けて一水会を作った



ベアテさん（右）と

昔は丸山の本を読みまくり、影響も受けてきた。だから、ニューヨークでも、「丸山的発言」が出たのかもしれない。ちょっと複雑で、ビミョーな感じだ。

そうだ。一水会を作る時も、丸山の本に影響を受けた。宮崎学さんは『右翼の言い分』で、丸山の文を引用している。丸山は、「右翼の心情」について、「定職につかない。金銭にだらしがない。日常生活が出来ない…」と批判している。「それはむしろいいことだ」と、アナーキーな宮崎さんは支持している。

同じ文章を読んで、「こうはなるまい」と私は思った。それを否定することから、一水会は始まった。丸山の文から一水会は生まれたといってもいいかもしれない。そういう意味でも、丸山の影響は大きい。

丸山真男の弟に丸山邦男という人がいた。フリーライターで、『天皇観の戦後史』などの名著がある。私の初期の論文集『現代攘夷の思想』や『時代の幽閉者たちに』では、随分と取り上げている。本人にもよく会っていたし、教えられた。「賢兄愚弟ですよ」と自嘲的に言っていた。「うちも同じですよ」と私は言った。「邦男の宿命」なのだろう。

では、ニューヨークの話だ。初めの「７分間スピーチ」の時に、「この憲法は一度、見直すべきだ」と私は言った。他のパネラーや司会者は全員、護憲派だ。１対４だ。でも、自民党のような、ただ「現実に引き戻す」ためだけの改憲には反対だ。そうも言った。

60年前、この憲法を作った時は、それなりに理想や夢を持って作った。アメリカの押しつけだし、アメリカは日本で〈実験〉をしようとした。軍備のない〈平和国家〉 を作ろうとした。「二度とアメリカに牙をむかないように」という意図はあっただろう。それと共に、もしかしたら、世界から軍備、戦争をなくせるかもしれない。そう思ったのではないか。ドイツ、イタリア、日本という「悪の枢軸国」が滅んだんだ。「戦争愛好国」がなくなったのだ。「平和勢力」が勝った。だからもう二度と戦争は起こらないし、軍備を捨ててもいい。もし紛争があっても国連が治めてくれる。

…そう思ったのだろう。そういう夢や理想を持てた時代だった。だから、まず日本に「平和憲法」を与えた。この「偉大な実験」にならって、世界も見習うだろう。そう思ったのだろう。

その現実や夢は分かる。だったら、アメリカ国民にもよく知らせ、納得させるべきだった。そして、「こんな素晴らしい実験をやった。よし、我が国も続こう！」と言えばよかった。少なくとも、核は廃棄しよう！そう言えばよかった。そうしたら、日本はこの「平和憲法」を素晴らしいものとして、永久に大事にしただろう。改憲運動なんか起きやしない。ところが、アメリカは強大な軍備を持ち、さらに拡張し、国連を無視して自国の利益を無理押ししている。これではいかんだろう。

それに、こんなに素晴らしい「平和憲法」だというが、じゃ、アメリカで知られているのか。世界中で知られているのか。シンポジウムの時に聞いてみたが、ほとんど知られてないという。

「いや、９条があるから、日本は軍隊を外国に出せない。立派なことだ、と支援している外国の人々が多い」と日本の左翼は言う。しかし、嘘だ。現実にはそんな声は、ほとんど聞かない。

もし、そんな声があるなら、「私たちが出来ない理想を日本は実現した。どんなことがあっても軍隊を持つな。改憲するな！」という声が全世界で起こるはずだ。「アメリカの最大のプレゼント＝憲法を改正するなら、もう日本とは国交断絶だ！」とアメリカ中の人民が言ってもいい。「せっかく持っている平和主義の理想を捨てるなんて許せない。戦前の軍国主義に戻るのなら阻止する！経済封鎖だ！」

…という声が、アメリカだけでなく、世界に満ち満ちるはずだ。ところが、そんなことはない。当のアメリカでも、９条や日本国憲法は知られてない。これではいかんだろう。もしかしたら、日本に憲法があることもロクに知らんのじゃないだろうか。世界は日本の「夢」を知らない。「理想」を理解していない。　だからといって、日本が理想や夢を全て捨てていいとはならない。60年前は、理想や夢をもって憲法を作った。今、改憲するというのなら、それ以上の理想や夢があってやるべきだ。ないのならば、やっても仕方はない。又、自民党のような、理想や夢を忘れ、「現実」を追認するだけの改憲では意味がない。そう思う。

(3)やはり夢や理想を謳い上げるのが憲法だろうが


ジャン・ユンカーマンさん（左）と

先週の「サンプロ」に中曽根さんが出ていた。中曽根案の「前文」はかなり文学的・情緒的だ。しかし、それが「自民党案」になると、全面的に削除され、無味乾燥なものになった。中曽根さんも、不満を言っていた。

「でもな」と、テレビを見ていて思った。中曽根案にしろ自民党案にしろ、格調がない。これだったら、まだ、今の「前文」の方がいいな。確かに翻訳調だし、文章は変だけど、何か、格調が高い。

理想を謳い上げている。悔しいが、それ以上のものは出来んのだろうか。評論家の大塚英志は、「前文を自分たちで作ろう」と呼びかけて、その「試案」を集めて４、５冊、本を出している。高校や大学でもそんなことをしている。そのほとんどを読んだ。面白いものもあるが、やっぱりダメだ。現行憲法の「前文」を超えるものはない。

じゃ、文学者に書いてもらうか。日本を代表する作家といえば、ノーベル文学賞をもらった川端康成と大江健三郎だ。川端は亡くなったし、じゃ大江か。でも、今の「前文」よりも、もっと分かんない文になりそうだ。じゃ、このままでいいか。それに、今の前文は、旧仮名遣い（歴史的仮名遣い）だ。これ以上に日本的・伝統的なものはない。誰の改憲試案だって、皆、「新仮名」になっている。だったら、「押しつけ憲法」が一番、「日本的」で「伝統的」なのかもしれない。

じゃ、いっそのこと、憲法は英文で教えるか。これから国際化社会になるし、英語ぐらい話せなくてはいかん。今、六法全書を見ると、必ず「原文」の英文が出ている。外国人の書いた「原文」がある憲法なんて日本だけだ。国辱的だ。日々、それを目の前にするのもいいだろうよ。「臥薪嘗胆」だ。でも、それを超えるものを作れない日本人はもっと国辱的だ。

今の自民党が作るんじゃ、今以上に無味乾燥な、対米従属的なものになる。それに、憲法の第一の要諦は、為政者（権力者）に「しばり」をかけることだ。ところが、そんな発想は全くない。自民党は改憲できる喜びに舞い上がっている。「国民は自由や権利ばかり言ってけしからん。もっと義務を教えなくては」「愛国心を身につけてくれなくては」「独身はけしからん。必ず結婚し、子供は二人以上生むように教育しなくては…」「政府に反対するデモや集会は全て禁止しよう」…と、国民にしばりをかけることばかり考えている。これでは、「改憲の資格」はない。私は、そう思いますね。

だから、日本の「改憲」運動は一枚岩ではない。と、ニューヨークでも報告した。漫画家の小林よしのりさんは、「アメリカの言い分だけを聞いて海外派兵できるような改憲なら、改憲に反対だ」と言っている。改憲運動をリードしてきた小林節さん（慶応大学教授）は、「愛国心が持てるような国をつくるのが政治家の役割だ。それを忘れて、国民に義務を課すだけの改憲には反対だ」と言っている。中には、「歴史的仮名遣いを残すために前文は改めるな」という人もいる。改憲論者も様々だ。

この点は、会場からも質問があったので、かなり具体的に説明した。要は、憲法があって国民があるのではない。まず国民があって、国民のために憲法があるのだ。それを忘れてはならない。夢や理想を謳い上げるのが憲法だ。それがないのなら、やる必要はない。今出ている「創」（６月号）でも、そんなことを書いた。

さて、「ニューヨーク・レポート」は次回からは、市内をうろつき回って感じたことを書く。シンポジウムの内容は、思い出したら、少しずつ書く。なんせ時差「認知症」で、まだボーッとしている。それでいて、やたらと仕事は多い。無能なあたしじゃ、処理しきれん。

【だいありー】

(1)５月７日（月）午前９時、国会議事堂前。なにも、デモではない。ハンストでもない。写真撮影だ。日本共産党のNo.4だった筆坂秀世さんとの対談本を作っている。そのための撮影だ。お巡りさんにも随分と職質されたが、編集者が名刺を渡し、対応していた。右翼の街宣車も通り、声をかけられた。　長い撮影が終わって、赤坂見附で打ち合わせ。

夜６時半から、グランドアーク半蔵門。「創刊十周年『月刊日本』を叱咤激励する会」。大臣

をはじめ政治家も多かった。鈴木宗男さんも来てたので挨拶した。川内康範さん（作家）とも久しぶりに会った。サンケイ新聞の社員がいたので、「新しい社屋に入ったことがないから案内してよ」と頼んだ。「いつ？」「じゃ、明日」と決めた。善は急げじゃ。

(2) 5月8日（火）午前中、新聞社の取材。ニューヨークの話をした。午後から、サンケイ新聞社に行く。僕は1970〜74までサンケイにいた。旧い社屋だった。10年ほど前、31階建てのビルになった。しかし、勝手には入れない。昨日会った人に面会届けを出して、迎えに来てもらって入った。もう知ってる人はいない。きれいなビルになって、面影は全くない。31階から見る風景は素晴らしい。すぐ下に経団連ビルがある。野村さんたちが立て籠ったビルだ。そんな昔を思い出していた。

(3) 5月9日（水）２時40分からジャナ専の授業。憲法の話をする。ついでに、ニューヨークの話もする。ベアテさんの話とか、映画「日本の青空」の話とか。小西豊治の『憲法「押しつけ」論の幻』（講談社現代新書）も、鈴木安蔵の「憲法研究会」のことを書いていた。この民間で作られた憲法試案が占領軍のテキストになった。だから、今の憲法の発案者は日本人だった、と。なかなか面白いし、そうした面もあったろう。しかし、アメリカが占領下に押しつけたことは事実だ。その上で、この憲法をもう一度見直すべきだろう。国民投票をして、「これでいい」となったら、「日本国憲法」になる。又、自衛隊は認めるにしろ、破棄するにしろ、はっきりすべきだ。
　授業が終わって、上野昂志先生にニューヨークのことをインタビューされた。

(4) 5月10日（木）『愛国者は信用できるか』の第５刷が出た。
　３時から河合塾コスモの授業。

(5) 5月11日（金）午前中、ＦＡＸ機を買い替えた。２年もしないのにもう使えない。普通の家の10倍は使っている。無理もない。午後から雑誌の取材。憲法や今の政治について、いろいろと聞かれた。夕方、急に寒気がして頭が痛い。カゼだ。まだ時差認知症なのか。
　『アウトロー列伝』（宝島社文庫）発売。私も野村さんについて書いた。

(6) 5月12日（土）朝の新幹線で岡山に。２時から、「岡山レコン読者の集い」。岡山は久しぶりだ。たくさん集まって、活気ある集会になった。木村三浩氏が一水会の歴史と赤報隊について講演。私は前座で、ニューヨークの報告と憲法の話をした。番家氏には大変、お世話になった。

(7) 5月13日（日）朝の新幹線で帰京。仕事の打ち合せ。そして、河合塾コスモの会議。

【お知らせ・】



私の本が劇画になった。「特冊新鮮組ＤＸ」（竹書房）

　僕の本が劇画になった。生まれて初めてだ。自分も出てるので、ちょっと恥ずかしいが、でも嬉しい。前にちょっと紹介したが、「特冊新鮮組ＤＸ」（竹書房・６月号）だ。今、本屋で出ている。僕が初めて出した本は『腹腹時計と〈狼〉』（三一新書）だ。それは後に絶版になり、彩流社から『テロ・東アジア反日武装戦線と赤報隊』と改題され、出ている。この本を基にして劇画は描かれている。原作・ヒロチカ、漫画・多田拓郎だ。今回は前編で、来月に続く。

よりこの劇画の後には、僕のインタビューもある。この本を書いた頃の話をした。タイトルは、「叛逆のカリスマ」だ。



同じく「特冊新鮮組ＤＸ」より

僕は1970年に産経新聞に入社し、74年の春に辞めた。その年の夏に、三菱重工が爆破され多くの人々が死傷した。東アジア反日武装戦線〈狼〉による事件だった。さらに企業爆破事件が続く。この事件に衝撃を受けて、「やまと新聞」にルポを書いた。又、「青年群像」に原稿を書いた。〈狼〉は、今までの新旧左翼に絶望した、思いつめたアナーキストだった。当時、右翼に絶望していた僕の胸にはグサリと突き刺さり、響いた。いわば、自分の問題のように思い、この爆破事件を追い、テロや国家について考えた。

その時の僕の焦燥、悩みなどを劇画ではリアルに描かれている。あの時は、八巻方の二階に住んでいた。６畳１間のアパートだ。フロもない。クーラーも扇風機もない。窓を開け放ち、パンツ一枚で、汗をダラダラと流しながら原稿を書いていた。その様子も、実にリアルに描かれている。「まるで見たかのように」描いている。これは凄い。一緒に仕事をした右翼ライターも出ている。

この『腹腹時計と〈狼〉』は、かなり話題になり、売れた。「右翼過激派が極左を支援した」「左右接近だ」と騒がれた。しかし、右翼の人達からは総スカンを喰った。「左翼かぶれめ！」「売国奴だ！」と批判された。ただ、野村秋介さんと猪野健治さん（評論家）だけは評価してくれた。劇画を見ながら、そのことも思い出した。ぜひ読んでみて下さい。

【おしらせ・】

(1)５月14日（月）一水会フォーラム。１８時３０分開場・１９時開演。講師は水島愛一郎氏（経済評論家）で、テーマは『日本を喰い物にするハゲタカファンドの実態』。場所はホテルサンルート高田馬場。

同じ時間に、ネーキッドロフトで、革命家・外山恒一氏の選挙報告会があります。

(2)５月16日（水）午後７時。片島紀男・平沢武彦の『国家に殺された画家。帝銀事件・平沢貞通の運命』出版記念会。

(3)５月18日（金）「サイゾー」（６月号）発売。私もちょっと出てます。

(4)５月23日（水）ネーキッドロフト。７時。古木林恵の“闘う居酒屋”第1弾。「闘う反戦憲法」。私も行きます。

(5)５月25日（金）ネーキッドロフト。針谷大輔氏の「男たちの国防論vol.3」。

(6)６月３日（日）午前11:55より、渋谷・円山町のユーロスペースで映画監督の藤原敏史さんとトークをします。藤原監督の「映画は生きものの記録である・土本典昭の仕事」の上映を記念してのイベントです。

(7)６月11日（月）７時、高田馬場サンルートホテル。一水会フォーラム。私が講師で、「一水会35年の歴史」について喋ります。

(8) 7月20日（金）針谷大輔氏のイベント。ネーキッドロフト。私も出るように言われています。

(9) 8月6日（月）ロフトで植垣康博さんとトーク。

(10) 9月6日（木）～9月9日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。7日（金）は関係者の挨拶があり、私も出ます。

(11) 9月29日（土）憲法の集会のパネラーで出ます。

HOME

今週の主張

私も「自由の女神」になっちゃいました
＝ニューヨーク・レポート（その3）＝

今週の主張５月21日

バックナンバー

(1)タバコと自転車では後進国だよ、日本は



「自由の女神」の隣りで、私も女神に

ダメだな。日本は遅れているよ。と思いましたね。たとえば、ついこの前見た「タバコ」と「自転車」に関する二つの新聞記事。 何を今さらと私は思いましたね。

一つは「読売新聞」（５月９日）の一面。「喫煙、寿命3.5年縮める」「リスクの値明らかに」という記事。「厚労省研究班調査」と出ている。 以前から言われていたことだが、やっと政府も重い腰を上げたようだ。だって、2005年、日本人の喫煙と寿命の関係についてただした民主党衆院議員 の質問趣意書に対し、政府は「数値等の資料がないため、回答は困難」と答弁書を出している。つまり、この時は、調べようともしなかったのだ。国 民の健康・生命が危機にさらされているのに。

おかしいよ。国民の生命を守るのが政治の第一の任務だろうが。国内外のタバコ会社に気がねしたのか。又、マスコミもタバコ会社のＣＭを沢山も らっているからか。筆先が鈍い。

「分煙化が進んでるじゃないか」「新幹線や電車の中では禁煙になってるではないか」と反論するかもしれない。そんなことでは生ぬるい。タバコを 吸う人間の生命だけではない。煙を吹きかけられる人間を守る必要がある。つまり、「公共」の場では全て禁煙にすべきだ。喫茶店、居酒屋、公園を含め 全ての場所だ。吸いたい人は、一人でひっそりと吸えばいい。あるいは、ガラス箱の喫煙ゾーンで吸えばいい。一人でも、嫌な人がいたら、そこでは吸 うべきではない。当たり前のことだろう。

この厚労省の研究を主導した村上義孝・滋賀医大特任講師は言っている。「平均寿命が3.5年短くなることは、ほぼ20年前の寿命に逆戻りしたことに 匹敵する。たばこの影響は大きい」と。日本は対応が遅れている。何もしてない。タバコ天国だ。いや、国民の生命を考える上では、 「後進国」だ。ニューヨークを見てみろよ。と思いましたね。

もう一つは「自転車」だ。「暴走自転車」のことだ。これもやっと今になって、「危ない」「取り締まれ」という声が出た。たとえば「産経新聞」 （５月10日）には、「悪質自転車一発レッド」「都内初、きょう一斉取り締まり」と出ている。歩道を猛スピードで走る自転車のことだ。歩行者に ぶつかっても、「ドケッ！」と怒鳴って走っている。事故も多い。ぶつけられて死亡した歩行者もいる。歩行者が重傷を負うケースも急増している。車 なら免停があるし、ルール

を教えられる。しかし自転車は誰でも乗れる。マナーを教える人もいない。又、保険制度もない。「愛国者」と同じだ。免停 もマナーもいらない。誰でもすぐなれる。すぐに暴走する。

〈警察庁によると、昨年の自転車による対歩行者事故は前年比7.4増の2767件で、10年前の５倍近くにのぼった。これらの事故による死者と重傷者の 合計は335人で、前年より26.4%も増えた〉

「産経新聞」はさらに2月11日付でも書いている。「『走る凶器』に待った」「自転車限定。初取り締まり」…と。警察がやっているから 「警察力の強化」になると反対する人もいるだろうが、本当は民間でやることだった。

〈歩行者への自転車事故の増加を受け、警視庁は10日、自転車限定の初の一斉取り締まりを実施、悪いマナーは「走る凶器」 と注意を呼びかけた〉



「グラウンド・ゼロ」で

呼びかけただけでなく、「信号無視の50代男性らに刑事処分の対象となる『赤切符』を切り、正しい乗り方を書いたカードを渡す「警告」 は2144人に上った」という。

しかし、どれだけ効果があるのやら。車と同じにして、何点で「免停」「取り消し」とやるわけにもいかん。まあ、やってもいいが、 「赤切符」３回で「自転車没収」。それ以上だと、「歩くことも禁止」にするとか。

〈携帯電話を操作しながら自転車に乗っていた会社員（28）は警告カードを発行され、「いけないとは知らなかった」と驚いていた〉

まあ、皆、驚くんだろうね。僕だって、悪いとは思わなかった。やはり、遅れているよ、日本は。国民の生命を守ることにおいては、 後進国だ。ダメだね。ニューヨークを見てみろよ、と思いましたね。

(2)反米派だけど、いい点は真似たらよか



「9.11」の犠牲者の名前がプレートに書かれている

では、「解答編」。ニューヨークで見たサプライズです。この「タバコ」と「暴走自転車」の問題はニューヨークでは、とっくの昔に解決しているんです。これは驚きでした。いい点は日本も素直にマネたらいい。そう思いましたね。

まず、タバコ。公共の場所では一切、吸えない。喫茶店でも、居酒屋でも、ともかく人のいる所は全て吸えない。タバコのＣＭもない。テレビ、雑誌、屋外広告も一切ない。タバコは売ってるが、自販機は一切ない。店で、店員と会って買う。だから、日本のように、ガキは買えない。20才以上の人でも若く見られる人（日本人は多い）は、身分証明書を見せろと言われる。

これはいいことだ。でも、アメリカにもタバコ会社はある。それは文句いわないのか。言えんのだわ。値段も日本の4倍位する。作ってるが、ＣＭは禁止。仕方がないから、日本などの「後進

国」で大量のＣＭを流す。「後進国」の健康など、どうなってもいいから、バンバン流す。まるで日本はアメリカの植民地だよ。アメリカでは、じゃ「国民の健康・生命」を心配して、この強硬手段をとってるのか。それも少しはあるだろうが、それだけではない。「訴訟社会」だからだ。煙草を吸って若死にした人が訴訟をしたわけじゃない。死んだら訴訟はできん。（いや、遺族がしたかな）。それよりも、タバコを吸う人が近くにいて、煙を吹きかける。それで無理矢理吸わされて病気になった人がいる。その人がタバコ会社を訴えた。アメリカは訴訟社会で、バカ高い賠償金を払わされる。これは大変だ、とタバコ会社もおびえた。それに、人の集まる店でもおびえた。タバコを吸う人、タバコ会社だけでなく、タバコを許している店だって訴えられるかもしれん。だから、ニューヨーク中は、全て「禁煙ゾーン」になったのだ。

これはいいことだと思った。訴訟社会にもいい点はある。ニューヨークを歩いて気がついたが、ないのはタバコのＣＭだけではない。サラ金のＣＭもない。風俗の看板もない。勿論、隠してるのだろう。しかし、表へ出す必要のないものは出てない。これはいいことだろうよ。

「タバコの自販機がないのは、小銭目当てにぶち壊されるからだろう」と言われるかもしれない。それもあるだろう。だって、コーラなどの自販機もない。ビールや酒の自販機もない。でも、店で、店員と顔を合わせて買う方がいいよ。日本でもこれはマネしたらいい。タバコや酒を自販機で売る必要なんて全くないよ。広告が欲しいからマスコミも強いことは言えないのかね。

もう一つの「暴走自転車」だ。セントラルパークなどでは自転車に乗って運動している人はいる。しかし、市街では一切ダメなんだ。いや、違うな。歩道を走ってはダメなんだ。歩道は文字通り、「歩く人」の道だ。自転車は車だ。だから車道を走れ。そういうことだ。でも自動車がいて、こわい。だったら自転車に乗るな、ということだ。

理屈はスッキリしている。簡単明瞭だ。日本だって、そうさせればいい。自転車も車だ。乗りたければ、車道を走れ。それがこわかったら乗るな。あるいは歩道では、降りて、車をひいて歩け。これは当然だろう。それなのに車道を走る勇気のないバカが、歩道を全速力で走って、歩行者を怪我させる。とんでもない連中だ。歩道を走った時点で逮捕したらいいのだ。



エンパイヤー・ステート・ビルで。渡辺真也氏と

(3)ニューヨーク中を歩き回りましたよ。いろいろ見ました



MOMA（ニューヨーク近代美術館）で

では、この辺で、「ニューヨーク・レポート」は終わりだ。あ、そうか。他にも見たな。少し書いとこう。

４月23日（月）の午前11時に成田を発った。14時間乗って、翌24日（火）にニューヨークのジョン・Ｆ・ケネディ空港に着いた。と思ったら、 日付変更線があって、何と、着いたら、４月23日（月）の午前10時だった。昔に戻ってる。タイムトラベルのようだ。よく分からんが、日付変更線 というのは変だ。仕方なく、23日（月）を二回やった。

空港には渡辺真也君が迎えに来てくれた。地下鉄に乗って、ホテルに行く。汚い地下鉄だ。でも随分、昔からあるんだ。それにジュ

リアー ノ市長になってから治安はグンとよくなってるという。ホテルはガシュウィンホテルだ。有名なミュージシャンの名から取ったという。 アートなホテルだ。


モネの「睡蓮」の前で

チェックインして、中華街で昼メシ。本当なら夜中で寝てる時間なのに、昼メシだ。変だ。眠い。「準備は大丈夫なの？」と聞いたら、「準備は全て終わってます」と真也君。でも、いろんなとこに携帯をかけまくっている。ベアテさんに電話したら、「もっともっと宣伝しなくっちゃ。部屋も大きいとこにしなさい」と言われている。それで、あわてて、「やっぱり、もっと連絡し、宣伝しなくっちゃ」と帰ってしまった。「グラウンド・ゼロまでは案内しますから、あとは自分で見て下さい」と。そこには犠牲者の名前が書かれている。でも「HERO」と書かれている。ウーン、「ヒーロー」かな、と思った。

周りをグルグルと歩いて見た。さらに、地図を頼りに、街を歩いた。「自由の女神」の見える公園に行った。案外、小さい。小さな島にある。そこまで行く船があるが、どっから出てるのか分からん。歩き回って疲れた。この日は３万歩ぐらい歩いただろうよ。このイベントの実行委員会の人に携帯を持たされた。生まれて初めてだ。「どっから音が出るの？」「どこに向かって喋るの？」と聞いてあきれられた。何度聞いても使い方がよく分からん。こんな不便なものを何で皆、持ってるんだ。

そういえば、ニューヨークではメールをしてる人がいないね。日本だと電車の中で、一列、全員がメールしてる、なんてことがある。しかし、英語だと、メールが面倒なのか、スペルが多いからか。日本のようにヒラ仮名、カタ仮名、漢字があるから、やれるんだろう。それに、用もないのに、「ヤッホー」とか、「元気？」とか、意味のないメールを打ち合う習慣がないのだろう。実利的な国だから、プラグマティズムだ。いいことだ。それに、日本よりは携帯を持ってる人が少ない。かける方もかけられる方も料金がとられるし、料金がやたら高いんだそうな。

だから、携帯、メールなんて、日本や中国、韓国などを中心とした「アジア人の遊び道具」なんだよ。韓国なんて、地下鉄なんかじゃ、大声で携帯をしまくっている。日本よりもうるさい。アメリカ、ヨーロッパは携帯、メールよりも、もっと個人の自由を尊重するのかもしれない。もっと精神の自由を楽しむのだろう。

４月24日（火）は、朝はエンパイヤー・ステート・ビルに行く。又、ユンカーマンさん、真也君と落ち合い、打ち合わせ。アジア・ソサエティに行って、向こうの人や通訳の人と打ち合わせ。その後、セントラル・パークに行き、日本料理店で夕食。25日（水）は、シンポジウムだ。真也君は忙しいから、私一人で行きますよ、と言ったのに、案内してくれる。申し訳ない。
MOMA（ニューヨーク近代美術館）に行く。でかいし、広々としてるし、凄い。真也君は、前にニューヨークの画廊に勤めていた。最近独立した。キュレーター（学芸員）の資格を持っている。だから美術については詳しいし、解説してもらった。

ガラスもないし、世界の一流の美術品が、ドンと置かれている。これは驚きだ。近代美術だけでなく、ピカソ、ゴッホ、ゴーギャン…といった我々のよく知った画家のもある。写真を撮るのも自由だ。これにもビックリ。モネの「睡蓮」の前で写真を撮ったので、紹介しておこう。ヘリコプターが丸々一台、アートとして、天井から吊り下げられていたりする。驚き。

Jeff　Wallの特設展もあった。三島由紀夫の「春の雪」をイメージした作品もあった。面白かった。


ガシュウィンホテルで

たっぷり、アートを味わって、夕方、アジア・ソサエティに行く。そこでのシンポジウムの様子は前に書いたので省略する。

26日（木）は、一人で歩き回った。「自由の女神」の島まで行こうと思ってフェリー乗り場を探して、やっと着いた。ところがもの凄い人でやめた。近くに「自由の女神」の格好した人がいたので一緒に写真を撮ったら、５ドルとられた。私も「自由の女神」のコスプレをさせられた。そのあと、「アメリカ自然史博物館」に行く。恐竜の骨がある。ニューヨークに来る飛行機で、映画「ナイト・ミュージアム」をやっていた。この博物館がモデルだ。展示されている恐竜や騎兵隊が夜中に動き出し、大暴れするんだ。

夜は、ニューヨーク大学で、ユンカーマンさんの「日本国憲法」の上映と講演会。終わって皆で日本料理店で打ち上げ。

27日（金）は、午後１時、ジョン・Ｆ・ケネディ空港を出発。28日（土）の午後３時に成田着。お疲れ様でした。オワリ。

【だいありー】

(1) ５月14日（月）7:00p.m.。ネーキッドロフト。都知事選に出た革命家・外山恒一氏と、杉並区議選に出た松本哉氏のイベント。「これが革命家の選挙戦だ」。着いたら、外にズラリと長い列。何なんだ、これは。と思ったら、入れない人々だった。「当日券のない人は入れません！」と言われ帰ろうとしたら平野店長が入れてくれた。「こんなに人が集まったのは、ネーキッド始まって以来だ」と言っていた。選挙報告も熱い。外山、松本氏も熱い。

９時までいて、一水会フォーラムに行く。二次会に出る。こちらも若い人が大勢いた。水島愛一郎氏（経済評論家）の「日本経済を喰い物にするハゲタカファンドの実態」はエキサイティングな話だったようだ。聞き逃して残念。レコンで来月、講演要旨を読んでみます。

(2) ５月15日（火）一日中、家で原稿書き。夜、取材。

(3) ５月16日（水）２時40分からジャナ専の授業「時事問題」。夜７時から両国で、片島紀男・平沢武彦の『国家に殺された画家。帝銀事件・平沢貞通の運命』（新風舎文庫）の出版記念会。これは実にいい本だった。僕らが知らなかった「天才画家」の側面にスポットをあてて書かれている。権力は残酷だと思った。

出版記念会を途中で脱けて、木村氏たちと合流。最近、刑務所を出た友人を励ます会に出る。こちらも、ご苦労さまでした。

(4) ５月17日（木）河合塾コスモの授業。

(5) ５月18日（金）原稿の〆切が三つ重なって、パニックになる。寝ないで書く。夕方、足立正生氏と雑誌の対談。「サイゾー」（６月号）発売。長崎市長銃殺事件について私もコメントしている。

(6) ５月19日（土）「ザ・ニュース・ペーパー」を見る。新橋の博品館劇場で。よかった。終わって、代表の杉浦さんと打ち合わせ。６月18日に高田馬場に、ライブハウスを開くという。そこで

又、以前の「ライブ塾」のようにやる。私も出る。詳しいことが決まったら報告します。

【お知らせ】

(1)雨宮処凛さんの本がもう出る頃ですね。と思ったら、見本誌が届いた。『右翼と左翼はどうちがう？』（河出書房新社・1200円）。なかなかいい。面白い。今週、本屋に並ぶそうだ。

(2)日本共産党の元No.4の筆坂秀世さんと対談しました。その本が５月末に出る予定です。情報センター出版です。これも楽しみですね。と思ったら、これも見本誌が届いた。『私たち、日本共産党の味方です』（情報センター出版局・1200円）です。これも凄い本です。25日発売です。この２冊については来週、紹介しましょう。

(3)５月23日（水）ネーキッドロフト。７時。古木林恵の“闘う居酒屋”第1弾。「闘う反戦憲法」。私も行きます。

(4)５月25日（金）ネーキッドロフト。針谷大輔氏の「男たちの国防論vol.3」。

(5)６月３日（日）午前10時より、渋谷・円山町のユーロスペースで映画監督の藤原敏史さんとトークをします。藤原監督の「映画は生きものの記録である・土本典昭の仕事」の上映を記念してのイベントです。（先週、開始時間を11:55と書きましたが、10時からに変更になりました）

(6)６月11日（月）７時、高田馬場サンルートホテル。一水会フォーラム。私が講師で、「一水会35年の歴史」について喋ります。

(7)７月20日（金）針谷大輔氏のイベント。ネーキッドロフト。私も出るように言われています。

(8)８月６日（月）ロフトで植垣康博さんとトーク。

(9)９月６日（木）～９月９日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。７日（金）は関係者の挨拶があり、私も出ます。

(10)９月29日（土）憲法の集会のパネラーで出ます。

HOME

今週の主張

日本共産党。そして右翼と左翼。その魅惑的な世界がよく分かる本、二冊。紹介します

今週の主張５月28日

バックナンバー

(1)日本社会の縮図ですね。日本共産党は



いよいよ発売です。『私たち、日本共産党の味方です』

今年初めての本です。筆坂秀世さんとの対談本です。もう店に並んでるでしょう。それにもう一冊、紹介します。雨宮処凛さんの『右翼と左翼はどうちがう？』です。これも書店に出ています。売れてます。

では、筆坂さんとの対談本です。５月19日（土）、見本誌をもらいました。ビックリしました。素晴らしい出来です。装幀もいい。写真もいい。カメラマンがうまい。内容もいいです。対談といっても、メインは筆坂さんです。好奇心の強い私は、共産党について、あれもこれも…と聞いてます。筆坂さんは何でも答えてくれます。それから先に、グーンと話が広がり、問題点が浮かび上がります。

共産党の組織論を聞いてるうちに、これは右翼でも左翼でも宗教でも市民運動でも、どこでも共通する問題だと思いました。いや、企業や学校や趣味のサークルや、ともかく、あらゆる「集団」「組織」に言えることだと思いました。その意味では日本共産党の問題は、きわめて「日本的」な問題です。そのことを考えさせられました。共産党を論じながら、〈日本〉そのものを論じていました。

又、日本共産党は「祖国」「愛国」にこだわります。反米です。中国、ソ連、北朝鮮といった国々の「友党」とも喧嘩し、自らの「自主独立」を貫きました。選挙のポスターには富士山が描かれてました。日共系全学連の機関紙の名前は「祖国と学問のために」でした。「祖学」と言われてました。いい名前だなと、学生時代からうらやんだものです。

それだけ愛国心の強い政党です。又、党員の一人一人は、真面目です。謙虚です。目立とうとしません。だって、自民、民主、社民に入る人は、皆、「国会議員になりたい」という野望を持って入ります。そして、議員秘書になります。しかし、共産党に入党する人で、「将来、国会議員になりたい」なんて野望を持ってる人は一人もいません。筆坂さんだってそうでした。金も名声も求めず、ただひたすら世の為、人の為に運動しようとする。そして少しでも住みよい、明るい、平和な世の中をつくろうとする。そういう人々の集まりです。朝、会社に行く前に、「赤旗」を配ります。かなり上の人までやってます。大変です。それも、無給でやってます。

これは「滅私奉公」だと思いました。これこそ、日本人の美徳です。日本人の精神です。今の日本人が忘れたが、共産党の人々は持っている。これは凄いと思いました。しかし、そんな真面目

で清潔な人々が、一般には「怖い」と思われている。かわいそうです。公安（警察）も莫大な人間と金を投入して、共産党を監視し、スパイを獲得し、情報をとってます。「受難の政党」です。何とかしなくてはなりません。

これは勿論、筆坂さんも思ってます。憂えてます。そこで、二人は話し合ったわけです。筆坂さんが日本共産党をやめて初めて書いたのが『日本共産党』（新潮新書）でした。読んで驚きました。温かいのです。共産党への批判、提言はあるのですが、実に、優しいし、温かいのです。特に、党員に対してです。「党員はこんなにいい人ばかりか」「党員はこんなに頑張っているのか」と思いました。涙が出てきます。これは共産党への批判ではない。「エール」をおくる本じゃないかと思いました。

もしかして、出来レースじゃないか。八百長、謀略じゃないか。とも思いました。つまり、筆坂さんは辞めた。党も批判している。しかし、わざとこの優秀な人を野に放ったのではないか。党は歴史や面子があって言えないことを、筆坂さんが代わって言う。それによって共産党への理解、支持もグンと増える。凄い「陰謀」だ…と。

筆坂さんは勿論、笑って否定してました。それだけのことを考えられる党なら、もっと大きくなってましたよ、と。でも、結果的には、人々が日本共産党をよりグーンと理解するようになったのではないか。私はそう思いますね。

本のタイトルは、『私たち、日本共産党の味方です』。凄いタイトルですね。情報センター出版局で、1200円です。筆坂さんは何でも答えてくれました。そして、私も、「これは我々の問題でもある」と思いました。筆坂さんだから初めて出来た本だと思います。それに、出版社の人が優秀です。又、まとめた荒井香織さんも優秀です。これは、正直、舌を巻きました。資料集めから、脚注づくりから、本の構成から、よくこれだけやったと思います。優秀なスタッフに支えられて、この凄い本は出来ました。

本の帯には、こう書かれています。

〈投票用紙に「日本共産党と書けないあなたへ。　再生の道はどこにあるのか。元・最高幹部と、新右翼の論客が、「かつての革命政党」を語りつくした〉



国会前で。筆坂さんと

そして、「語られなかった共産党のリアルとこれから」と書かれています。うまい文章ですね。たしかに、「リアル」と「これから」に話は集中しました。この帯には二人の写真が出ています。

そしてページをめくると、対談中の二人の写真、そして見開きの写真は、何と国会前でのツーショットです。たしか、５月７日（月）の朝に撮影したんですね。そして、校正も急ピッチでやり、５月19日（土）には出来上がって私の手元に届いている。すごーい。奇跡です。

(2)「ここまで喋っていいんかい？」と思いましたね

国会前で二人はにこやかに微笑んでいます。いい写真です。カメラマンがうまいです。筆坂さんのコメントがついてます。

〈共産党の最大の壁は「共産主義」を前面に掲げた名前でしょう。本気で政権政党になろうと思うのであれば、真っ先に党名変更するしかありません〉

私もコメントしとります。

〈学生時代、僕らには「いい敵」がいた。全共闘であり、“共産党”だった。彼らがいたおかげで僕らも鍛えられた。√　いま、国政の場だって、そうした存在が絶対に必要だ〉

では目次を紹介しよう。

はじめに　鈴木邦男
日本共産党のあゆみ
日本共産党組織図
序章　党員は今
第１章　党組織の疲弊と原因
第２章　共産党の歴史と精神
第３章　格差社会と共産党の役割
第４章　本当の愛国者とは
第５章　共産党は再生できるか
おわりに　筆坂秀世



目次です（その1）

いやー、ここまで話しちゃっていいのかと思う話が沢山ありました。特に、「自分の意見はグッとかみ殺すテレビ出演」「ガマン強さの美徳が残る党大会」「〈癒し〉に向かう若い党員」…などは初めて聞く内情で、ビックリしました。それにこれは「内部暴露」ではない。聞いていて、共産党は何て人間らしい組織なのか、と思いました。「共産党は日本型組織の縮図である」という筆坂さんの言葉もその通りだと思いました。

しかし、すんごいタイトルですね。初めは、いろんな案がありました。「日本共産党再生論」「日本共産党再生会議」「日本共産党と日本人」…と。筆坂さんは「日本共産党と日本人」が一番気に入っていたようでした。でも、これになりました。ウン、いいと思いますよ。パッとみて、一番、分かりやすいでしょう。日本共産党について、ただ客観的に論じてるのではない。自分の問題として考えている。

又、罵倒してるわけでもない。チャカしてるわけでもない。本当に、愛し、心配している。やはり〈味方〉だ。この言葉に嘘はありません。

筆坂さんは、新潮新書を出した時に、「ここまで落ちたか」と共産党からは叩かれた。この本が書店に並んだら、さらに叩かれるでしょう。右翼と一緒になって共産党を批判するなんて、「ここまで落ちたか！」と。それを覚悟の上で、対談して下さった。ありがたいと思います。

私ですか？私はもうないでしょう。“落ちた”なんて。今さら。「やっぱり」「どうせ、そういう奴だよ」と皆、諦めているでしょうし。でも、堕天使の私の質問にも面白いものがあって、凄い

本になっています。偏見を持たずに手にとってほしいですね。

そういえば…と思い出しました。1970年に三島由紀夫と共に自決した森田必勝氏です。「楯の会」の学生長になる前に彼は、民族派の学生団体に属してました。それをやめて、「楯の会」に行きました。ところが、前の団体は森田氏を「除名」しました。「共産主義者に魂を売った」という理由です。でも、別に、共産主義者になったわけではありません。学生団体にすれば、我々の運動をやめるということは、我々の勢力を削ぐし、結果的に、共産主義者を利することになる。そういう理屈なんですね。

他の民族派団体でも、そんなことがありました。でも、やめた人はいても、（本当の意味で）「共産主義者に魂を売った」人は一人もいません。民族派運動の「生き証人」の私が言うのだから本当です。

ただ、例外は一人います。本当に「共産主義者に魂を売った」男が一人いました。誰あろう、私です。だって、こうやって堂々と、「日本共産党の味方です」と宣言してるんですから。これを読んで、共産党に投票する人が増えるでしょう。議席も増えるでしょう。日本共産党が第一党になって政権を獲るかもしれません。本当に、「敵を利した」のです。共産主義者に魂を売った国賊ですよ、私は。日本一の「国賊」であり、日本一の「非国民」です。どうしようもない私です。

そんな私を相手にキチンと答えて下さった筆坂さんには本当に感謝します。本を読み直してみて、再び痛感しました。そして、筆坂さんの「あとがき」を読んで、飛び上がりました。何と、こう書いています。

〈鈴木邦男さんと話をするといつも思うことだが、なんと汚れのないきれいな心の持ち主なんだろうと感心する。本当の右翼は、大きな声でがなりたてたりしない。静かに、そして沈思黙考しながら理詰めの話を展開していく。鈴木さんこそ謙虚な人なんだと思う。また、ものすごい読書家でその幅広い知識にも驚かされる…〉

書き写していても、恥ずかしい。こんなことを言われたことはない。私なんて、どうしようもなく汚れた人間だと思っていた。けだもののような人間だと思っていた。怒り、ねたみ、不平ばかり言っている。いやらしい事ばかり考えている。それなのに、「けがれのないきれいな心」だなんて。ウーン、どう考えたらいいのだろうか。



目次です（その2）

キリストは病人に向かって、「病はない。立ちて歩め！」と言われた。「生長の家」の谷口雅春先生は「本来、罪はない。人間は神の子だ！」と言われた。〈言葉〉によって罪や病や汚れから人間を解き放った。筆坂さんの言葉は、そんな〈神の言葉〉だと思いました。私のような人間の中にも、「１万分の１」でも「きれいな心」があるのだろうか。それを見つけてくれたのだろうか。これは、もう〈神の眼〉です。そう見られたのなら、努力して、そういう人間になりたい。そう思いました。だから、この本は、私にとっては「宗教書」かもしれません。

(3)６人の運動家の「生活」と「本音」がよかったですね



雨宮処凛さんの『右翼と左翼はどうちがう？』

では、もう一冊の本ですね。雨宮処凛さんの『右翼と左翼はどうちがう？』（河出書房新社・1200円）です。これは「14歳の世渡り術」シリーズの一冊として出ている。「中学生以上、大人まで」「そのまま大人になるつもり？」と書かれている。このシリーズでは、井筒和幸、橋下徹、森達也、辛酸なめ子さんらが執筆陣だ。これから続々と出る。井筒さんのはもう出てるね。

ところで雨宮さんの本だ。実に分かりやすい。文章もうまい。又、キチンと取材もしている。悔しいが、僕じゃ、書けないな。雨宮さんの才能に嫉妬した。いつも他人の成功には嫉妬している。心の汚れた私です。第１章「右翼と左翼と私」では、「両方、経験したから書けること」をズバリと書いている。又、「右翼って何？」では玄洋社から始まり、三島由紀夫、新右翼の流れを説明する。「左翼って何」では、自由民権運動、反安保闘争、全共闘、赤軍派…などについて、分かりやすく書いている。14才でも分かる。さらに、「両方の活動家に話を聞こう」という第４章が面白い。右翼では、木村三浩、針谷大輔、古澤俊一氏が出ている。左翼では太田昌国、足立正生、日野直近氏が出ている。これはいい。６人の思想・信条だけでなく、「生活」が出ていて、よかった。聞き手がうまいのだろう。

５月18日（金）、雑誌の対談で足立正生さんに会ったので、この本の話をした。「あれはよかったですね」と。足立さんの人生が分かって対談もスムーズにいった。

右翼側三人の「生活」告白もいい。決して運動を金にしない。いろんな仕事をしながら、運動をする。たとえば、木村氏は、納豆売りをしながら、北方領土返還運動をした。針谷氏は17才で暴走族の総長になるが、引退して、ミシンの会社に就職。さらにセブン・イレブンでバイト。よく働いていた。そして運動をする。三島事件の時は５才。お母さんが防衛庁で働いていたこともあり、三島の本を読みまくったという。24才で統一戦線義勇軍の議長になる。

古澤俊一氏は、「日生学園」という体育会系の学校で鍛えられた。野村秋介さんの本を読み、右翼の世界に入る。野村さんの秘書になり、自決の現場にも居合わせた。野村さんと会う前は、松下電器の工場に勤めていたという。野村さんと出会ってからは、松下電器をやめ、野村さんの主宰する大悲会の寮で暮らす。マージャン屋でバイトしながら運動をした。

野村さんの自決から半年後、朝日新聞社に立てこもる。この事件により、４年間、刑務所に。出所後は、ソフト関連の会社で働き、平日はＩＴ関係の仕事をしながら、毎週土曜日は街宣をしている。又、走るのが好きで、今年の東京マラソンにも出場し、完走した。偉い。

この「両方の活動家に話を聞こう！」だけでも一冊の本になるほどだ。内容がある。充実している。「右翼なんて普段は遊んで、企業を脅して食ってるんだろう」と偏見を持ってる人が多いだろうが、そんな人達にこそ読んでもらいたいですね。

そうそう、私も「右翼」のところで、ちょっと喋っています。ともかく、読んで下さいよ、この二冊は。そして、感想を聞かして下さい。

【だいありー】

(1) 5月21日（月）昼、取材。夜、志の輔さんの落語会。北海道教育大学の入試に志の輔さんの落語が出たという。「だくだく」という落語を読んで、「次の問いに答えよ」というわけだ。マンガが入試に出たという話は聞いたが、落語は初めてだろう。終わって楽屋に行って志の輔さんからその話を詳しく聞いた。

(2) 5月22日（火）図書館。

(3) 5月23日（水）ジャナ専。夜、ネーキッドロフト。古木杜恵の「闘う居酒屋」第13弾。「闘う反戦憲法」。満員だった。ジャン・ユンカーマンさん（映画監督）も客で来ていた。驚いた。ニューヨーク以来だ。嬉しかった。

(4) 5月24日（木）昼、出版社で打ち合わせ。3時から河合塾コスモ。授業のあと、生徒たちと食事。早く終わったので渋谷で北芝健原作の映画「公安警察捜査官」を見る。何と、北芝氏本人も来ていた。久しぶりに話をした。

(5) 5月25日（金）1時半から試写会。
夜、柔道。久しぶりに行ったので、体が痛い。

【お知らせ】

(1) 6月3日（日）午前10時より、渋谷・円山町のユーロスペースで映画監督の藤原敏史さんとトーク。このあと藤原監督の「映画は生きものの記録である・土本典昭の仕事」の上映があります。

(2) 6月11日（月）午後7時、高田馬場サンルートホテル。一水会フォーラム。私が講師で、「一水会35年の歴史」について喋ります。

(3) 7月20日（金）7時、ネーキッドロフト。針谷大輔氏のイベント。

(4) 8月6日（月）ロフトで植垣康博さんとトーク。「連合赤軍と日本人」。他に美人画家の菊田さんや東大の先生も出るそうです。

(5) 9月6日（木）～9日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。

(6) 9月29日（土）「9条フェスタ2007」です。私も出ます。大井町の「きゅりあん」ホールです。何と、ベアテさんも来日し、特別に講演します。

【お知らせ・】

「特冊新鮮組　DX」（7月号・竹書房）発売です。あの衝撃の漫画「東アジア反日武装戦線」（後編）が載ってます。私も出ています。

HOME

今週の主張

私は日本一の「愛社者」だ
＝わが青春の産経新聞＝

今週の主張6月4日

バックナンバー

(1)私だけですよ。クビになっても愛社精神を持ってんのは



産経新聞社前で

私は今でも産経新聞を取っている。昭和45年（1970年）に産経に入社した時から、変わらず取っている。37年間だ。凄い。昭和49年（1974年）３月に産経をクビになるが、それでも、変わらず取っている。こんな健気（けなげ）な人はいない。原稿を書く時、いつも産経を引用している。批判することもあるが、ほめる事も多い。産経が好きなんだ。私の出身母体だからだ。母校ならぬ「母社」だ。

私はクビになり、切り捨てられた。その後、産経は急速に右旋回した。しかし、私は、ひたすら産経を愛し、産経新聞を取ってきた。37年間だから、13,405日間だ。毎日、読み、線を引き、切り抜きをしてきた。私は、日本一の「愛社者」だ。

でも、ちょっと言いにくいな。「あいしゃしゃ」じゃ。愛妻家、愛国者…はあるが、「愛社者」はないのかな。「愛社精神」という言葉はあるが、「愛社者」とは言わん。変だ。　もしかしたら、「社員はその会社を愛するのは当然」と思われているからか。愛情がなくなれば、やめる。あるいはクビになる。愛情がないのに、しがみつく奴はいない。いや、いないはずだ。その点が、国家との対応と違うところか。国家はやめられん。クビにもならん。国家を別に愛さないけど、「とりあえず国民」という人は多い。「憎みながらも国民」という人もいる。だから、国は寛容なんだよ。そんな人も「国民」として許容している。

それに、国は「愛する」のも自己申告だ。国だって嫌だろうな。ストーカーのような連中に、「愛してる」なんて一方的に言われちゃ。「お前になんか愛してほしくないよ！」と言えばいい。でも、国は優しいから言えんのじゃ。

その点、会社は非情だ。非情のライセンスだ。「愛してる？じゃ、証拠を見せてみろよ」と言う。注文をとれ、契約をまとめろ、どんどん仕事を取ってこい、会社のために働け。「愛」の度合いが数字で目に見える。いくら、「愛社者」だと主張しても、「実績」が上らなければ、切られる。捨てられる。「愛するというなら、実績を上げてみろよ！」と言われる。キャバクラの女給のようですな。「愛する」と言うんなら、お金を持って来なよ！」と言うでしょうが。「実績」の伴わない愛は、愛ではないんですな。

会社をクビになった社員はもう、会社とは何の関係もありません。会社を「愛する義務」もありません。にもかかわらず、ひたすら愛している人がいる。無償の行為です。立派です。それを実行しているのが私です。「無償の愛社者」です。これからはそう呼んで下しゃりませ。

その、クビになった会社を何十年かぶりに訪ねました。クビになったことを恨みに思わず、むしろ感謝の心を持って、「あの時、クビにしてもらったおかげで今、好きなことをしていられる」と思い、感謝とお礼を言う為に訪れたんです。お礼まいりです。あっ、いかん。これは別の意味になっちゃう。

産経を訪ねたことは、前に「だいありー」にちょっと書きましたよね。５月７日（月）に、「『月刊日本』を叱咤激励する会」があって、そこで産経新聞社の社員に会った。「鈴木さんは販売局にいたんでしょう。私もそうです」と言う。「じゃ、今の会社を案内してよ」と頼んだんです。だって、昔と違い、新社屋になってからはセキュリティが厳しくて、中には入れない。「元の社員だ」と言ってもダメだ。いい機会だ。彼に手引きしてもらおう。あっ、「手引き」も変だな。犯罪じゃないんだから。つい昔の過激派だった頃の気分になっちゃう。いかんがなー。

「ではいつ来ます？」「じゃ明日」。それで、５月８日（火）に私のルーツ、母社の産経新聞を訪ねたわけですよ。

急いだのには訳がある。実は、この産経の社員と会うのは二度目だ。一度目は去年の12月だ。亡くなった三浦重周氏（「憂国忌」の世話人代表）の一周忌で会った。この時、「産経の新社屋を見たいから案内してよ」と頼んだんだ。「いいですよ。じゃ電話して下さいよ」と言って別れた。行かなくちゃ、行かなくちゃ、と思いながら半年が経った。いかんな。優柔不断な性格は。と思いながら、半分、忘れてた。そんな時に又、会ったんだ。だから、善は急げと思ったんだ。それに、ニューヨークに比べたら、どこだって近い。

(2)前代未聞。４年間に９回も部署が変わった。



現在の私。産経新聞新社屋で。社員食堂でコーヒーを飲む

５月８日（火）の午後、訪ねた。外からは見たことがあるが、凄いビルだ。大手町にズーンとそびえ立っている。31階の高層ビルだ。新社屋というけど10年近くなるらしい。でも、私は一度も入ったことはない。どこが入口かも分かんなくて、ウロウロした。やっと探し、受付で、「訪ねる人」の部署と名前を書き、私の名前を書く。彼が迎えに来てくれる。受付嬢は、やっと信用して、胸から吊るす「パス」をくれる。

「どっから見ますか」と彼は聞く。「勿論、販売局から」と私は答える。

ここで産経時代の私のことをざっと説明する。昭和45年（1970年）の５月に入社した。普通は４月なんだけど、私は不正規というか、不正というか、コネというか。そんで５月に入った。奥田部長という太っ腹の人がいて、入れてくれた。「全共闘と闘って、学生運動をやったんだって。大したもんだ。気に入った」といった感じです。

初めは、「開発センター」に配属された。組織拡張の部署だ。つまり、企業、宗教団体、団地などに行って、〈組織的〉に新聞をとってもらおうというとこだ。「産経は愛国的な新聞だからぜひ、まとめて取ってくれ」と頼むのだ。「生長の家」でも賛同し、谷口雅春先生が、「ぜひ産経を取るように」と信徒に呼びかけた。産経もそれでグンと部数が伸びた。そんな中で私も産経に入れてもらえた。「部数が増えたんだから」という「お礼」のギフトみたいでんな、私は。い

や、違うか。「部数で協力してもらったんだから、一人位、入れてやろうよ」という〈おなさけ〉で入れてくれたんだ。昔から、他人の〈おなさけ〉で生きてきた私ですよ。どうせ。

その時の同僚で山元さんという人がいる。今、銀座で画廊をしている。出世頭だ。それと、平井さんという人がいる。今、ビルの派遣・清掃会社をしている。一水会の若者たちをバイトで雇ったり、焼鳥屋をやらしてくれたりした。今、一水会が入っている「第23鈴木総合ビル」は、実は平井さんの会社があったビルだ。その縁で、入れてもらった。

そうだ。６月11日（月）には一水会フォーラムで私が講師だ。「一水会35年の歴史」について話す。じゃ、この平井さんの話からしよう。そして「愛社心と愛国心」の話をしよう。うん、これで決まった。

話を1970年5月に戻す。開発センターに入って、一週間目だった。部長に呼ばれた。「普通の人は４月に入ってキチンと研修を受ける。しかし君はそれを受けてない。だから、一人だけ受けなさい」と言う。「ハイ、分かりました」と言った。でも、一人用の研修があるわけじゃない。北区興野（おきの）にある新聞販売店に預けられた。北原さんというおやじさんがいた。大きな店だ。そこに１ヵ月、泊り込んで、「販売の実体を学ぶ」。要は新聞配達をするんだ。もしかして、人手が足りなくて私は回されたのかもしれん。でも当時は、そんなことは思わない。将来、幹部になるために、〈現場〉を見せておこうという配慮だろう。そう思った。27才の青春真っ只中だった。有能で、明るい青年だった。

いかんな、こんな調子で書くと長くなる。少し急ごう。１ヶ月、毎朝の新聞配達をして、集金をし、拡張もした。「産経新聞を取って下さいよ」と一軒一軒回るのだ。大変だった。そして１ヶ月が過ぎ、本社に戻った。そしたら、「増減課」になっていた。「明日から二部増やしてくれ」「三部、切ってくれ」と毎日、販売店から電話がくる。それを取次ぐ仕事だ。こんな仕事があるなんて全く知らんかった。そこでまじめにやっていた。すると、数ヶ月で、「計算課」に回された。オラは幹部候補生だ。だから、いろんな所を見ておけ、ということだろう。そう信じて疑わなかった。「計算課」というのは販売局の売り上げを計算し、いくら会社に収めるか。いくら補助を出すべきかを計算するんだ。朝から晩まで算盤だ。大変だった。でも小学校で珠算４級をとっていた。だから、練習帳を買ってきて、出社前に家で必死に練習した。

家といっても、この時は、「楯の会」の阿部勉氏のアパートに居候していた。「楯の会」の人たちが大勢集まり、酒を飲み、雑魚寝していた。そんな中で私一人、早く起きて、算盤の稽古をしていた。目を覚ました「楯の会」が、「鈴木さんも、会社の犬か。おちたもんですね」と皮肉を言われた。三島事件まであと５ヶ月の時でした。

(3)車に乗って、地方の販売店まわりをしてましたね、この頃は…



産経会館31階で。左下に経団連会館が見える

その「計算課」でも真面目に勤め上げ、今度は担当員になる。一つの県をまかされて販売店を回り、集金したり、部数を増やすように指導する係だ。販売局の「花」だ。一番の「戦力」だ。私は宮城県担当の井上さんの助手になった。助担というのかな。宮城県の半分を任されて、車で回った。スプリンターだったと思うが、安い中古車を買って、宮城県の田舎を飛び回り、地方の宿に泊まって、１ヶ月に一回か二回、東京に帰る。そんな生活でしたよ。

真面目だし、成績を上げてるし、次は正式な担当員だな、と思っていたら、何と、広告局に回された。まず、「ＳＤＭ」という課に行く。「サンケイ・リビング」という無料紙を配布する部署だ。いや、配布するおばさんを集める。私は三鷹、八王子などを担当した。配布組織をはじめからつくるのだ。今の「フリー・ペーパー」のはしりだ。大変だったけど、がんばった。

〈現場〉はいやというほど見て回った。そろそろ課長かな、と思ったら、「校閲課」に回された。毎日毎日、広告の校閲をして、目を悪くした。それから、「地方整理」に回された。地方版の広告を並べ、刷ってもらい、校正をするとこだ。この頃は、三島事件のあとだが、まだ産経にいた。一水会は作ったが、産経にはいた。

そして、運命の日を迎える。〈防衛庁乱入事件〉だ。会社に行く前に防衛庁に抗議に行き、逮捕され、産経をクビになるんだ。詳しくは『新右翼』（彩流社）を読んでくれよん。千歳の自衛隊の「基地祭り」でストリッパーを呼んだ。「ふざけんな！」と抗議に行ったんだ。純真だったんだ。

この頃は、まさに思想と運動の「揺籃期」でしたね。1970年５月から1974年３月まで産経にいた。４年間だ。この間に、三島事件があり、連赤事件があり、一水会をつくり、会社が終わってから、昔の仲間が集まって酒を飲んだり、勉強をしていた。

でも、「一水会」はまだサラリーマンのサークルだった。それが、クビになることで、一水会を専従的にやることになった。又、金がないから、いろんなとこに書かせてもらった。企業爆破の〈狼〉のことを書いた。昔の維新運動をした先生方を訪ね歩いて、書いた。それが、本になった。つまり産経をクビになったことで、私は踏ん切りがついたのだ。「活動家」として、又、「もの書き」として。クビになってなければ、これはなかった。今でも、産経にいただろう。

それにしても４年で、こんなに多く配置転換された社員はいない。私だけだ。開発センター、販売店、増減課、計算課、担当員助手。販売局だけで５つだ。販売員の時、夜逃げした店をまかされて、配達、集金をしたこともあった。すると６つか。広告局に移ってからは、ＳＤＭ、校閲課、地方整理。すると９つだ。たった４年間に９つの部署を回された。幹部候補生ではない。無能で、使いものにならなかったから「たらい回し」にされてたんだ。

さて、昔話はこの辺でやめる。５月８日（火）に産経を訪ねた話だ。販売局、広告局、…と私も元いた所を見せてもらった。昔の面影は全くない。当然だよね。建物も人も一新した。広告局は営業局になっていた。まるでオラは浦島太郎だな。久しぶりに帰ってきても知った人は誰もいない。と思っていたら、一人だけいました。広告局の整理部の人だ。「おっ、知ってるよ。お前」と言われた。この人だけでした。残ってたのは。あとは皆、定年なのでしょうか。お亡くなりになったのか。地方に飛ばされたのか。

販売も全てパソコンでしたね。机の前には一人一台ある。「あのー、算盤は使ってないんですか？」と聞いたら呆れられた。「皆、パソコンですよ」。でも、店の売り上げの計算はどうするんだ。それも全部、機械でやるそうだ。しかし、毎日、大きな数字が動く。数字を打ち込んでも、それを足したり、引いたりすんのは算盤が必要だろう。「いや、数字を入力すると、自動的に足し算をしてくれるんです」。へエー、便利だな。じゃ、オレたちは何の為に一日中、算盤をはじいていたんだよ、と思いましたね。

(4)クビになったおかげで今の私があるよ



産経新聞の社員旅行で。後列左から2人目が私

社内を見回してみたら、とてもきれいだ。静かだ。セキュリティは万全だ。「オレたちの頃は、誰でも入ってきて、うるさかったぞ」と昔話をしてやった。

だって、必死に算盤を入れてると、行商のおばさんが「落花生いらねえか？」なんて回ってくる。入口のチェックがないから、誰でも勝手に入ってくる。「リンゴ買わねえかね？」とか。うるさくて仕事になんない。昔の学生運動仲間も勝手に入ってくる。「へエー、今じゃただのサラリーマンかよ」といって馬鹿にする。なんだこの野郎、と思ったが、締め出すわけにはいかない。

でも、ダラけて仕事してた時もあったね。ウイスキーのポケット瓶を机の中に入れておいて、チョビチョビと隠れて飲んでた。コーラの自販機があったので、コーラのコップにウイスキーを入れて飲んでた。これだと、コーラを飲みながら仕事をしてるようにしか見えん。

まあ、こんなことは、ほんのたまにやったことだ。あとは、真面目な社員だった。朝早く起きて、算盤の練習をし、会社の近くで、モーニングサービスをとりながら本を読んだ。又、ビルの中の本屋ではサインで本を買える。給料から引かれるんだが、ただで買えるような気分になり、毎日、買っていた。それで、給料がほとんど無くなった時もあったっけ。

新しい社屋では、そんな便利な本屋もないようだ。食堂に行く。きれいだ。昔の社員食堂は、印刷の人、工場の人が出入りするから、けっこう汚れていた。これは仕方ないよね。イスにも、印刷の墨がついていた。だから、女子社員は絶対に行かない。他の会社の社員食堂に行く。

今は、きれいだ。眺めもいい。そこでコーヒーを飲み、写真を撮った。又、一番上・31階に行った。「そこが経団連ですよ。お仲間の人が立てこもったんでしょう」と言われた。はるか下に経団連会館が見える。「野村さんはいないかな？」と探したが、いなかった。

販売の人に、「販売ＯＢ会」の写真を見せてもらった。懐かしい。顔はおぼえているが名前は出てこない。誰々ですよと言われて思い出す。「じゃ、僕もＯＢ会に入れて下さいよ」と頼んだ。「では申請してみます」と言う。

ともかく、嬉しくも懐かしい一日でしたよ。

だから、その時の写真を紹介しませう。それと、昔、産経にいた頃の写真が出てきた。大事にとっておいたんだね。青春の思い出として。一枚は社員旅行だ。どこに行ったんだろう。熱海かな。伊東かな。私は27才でしょう。

もう一枚は、野球の試合だ。多分、新聞社対抗野球大会だったんだ。仇敵・朝日新聞を相手に、わが産経が闘ったんだ。私は「SANKEI」のユニホームを着て、バッターボックスに立っている。当然、ホームランを打って、朝日を打倒した。守備はピッチャーだよ。違ったか。ライト（右翼）だった。やっぱり。

というところで、おしまい。



しかし、考えてみたら、私は27才。1970年の夏ですね。そう。三島事件が起こる。３ヶ月前ですね。そんな事など全く知らず、真面目にサラリーマンをやり、社員旅行に行き、野球に打ち興じていたんです。こんな青春もあったんですね。私にも。「学生運動」と「一水会運動」の間の、ほんのひとときの人並みの「青春」でした

新聞対抗野球大会で。1970年の私

ね。

販売、広告（今は営業）を見て回り、他に編集、サンスポ、正論…なども見せてもらった。中には僕を知ってる人もいる。「『夕刻のコペルニクス』読んでましたよ」「どうしてサンケイに？」と聞かれた。そのたびに案内してくれた友人が、「鈴木さんは昔、産経にいたんですよ」と説明してくれる。「えっ、そうですか」と皆、驚いている。さらに友人は説明する。「でも、無能でクビになったんですよ」。それを、会う人ごとに言う。「お前が言うことないだろう！」とちょっと、ムッとした。オラは、謙遜して言ってんのに…。でも、事実だから仕方ないか。悲しい。

【だいありー】



元キックボクサーのガルーダ・テツさん（左）と（岡山・5月12日）

(1) 5月28日（月）朝の山形新幹線で米沢に行く。最終で帰ってきた。30年前、ここの地から、「新しい日本を創る青年集会」運動はスタートした。産経を辞めた直後だ。米沢市会議員の鳥坂茂太さんと野村秋介さんが話し合って、この運動を始めた。その頃のことをキチンと聞いておこうと思ったのだ。それと、米沢藩の直江兼続のことを調べたかった。一日中、歩き回り、聞き、勉強になった。

(2) 5月29日（火）午後2時、斉藤貴男さんと「季刊・教育法」で教育改革について対談。さすがに斉藤さんは詳しい。楽しい対談だった。

7時から、『私たち日本共産党の味方です』の打ち上げ会。筆坂さんや出版社の人たちと新宿で飲む。仕事が終わりホッとした。売れ行きはいいようだ。筆坂さんが何でも答えてくれたし、編集の人たちがもの凄く優秀なんだ。こうした人たちと仕事が出来て幸いだった。

(3) 5月30日（水）午後2時40分からジャナ専の授業。

(4) 5月31日（木）河合塾コスモの授業。

(5) 6月1日（金）朝10時、「特攻」の試写会。実にいい映画だった。驚いた。昼、取材。3時半から「新藤兼人。陸に上った軍艦」の試写会。これもいい映画だった。来週でも紹介しよう。夜、柔道。

(6)（土）取材。午後から、知り合いのライターたちと飲み会。北芝健さんと会う。

(7) 6月3日（日）午前10時。映画監督の藤原敏史さんとトーク。渋谷のユーロスペースで。監督の「映画は生きものである。土本典昭の仕事」について話す。又、映画の使命、役割りなどについて話し合った。

【お知らせ】

(1) 6月11日（月）午後7時、高田馬場サンルートホテル。一水会フォーラム。私が講師で、「一水会35年の歴史」について喋ります。

(2) 6月28日（木）6時半から飯田橋の「東京しごとセンター」講堂で、シンポジウム「監視社会

を超えて」があります。第１部は斉藤貴男さんの講演。第２部はトーク・セッションです。私も行きます。

(3) ７月20日（金）７時、ネーキッドロフト。針谷大輔氏のイベント。

(4) ８月６日（月）ロフトで植垣康博さんとトーク。「連合赤軍と日本人」。他に美人画家の菊田さんや東大の先生も出るそうです。

(5) ９月６日（木）～９日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。

(6) ９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運動」と題するシンポジウムに私は出ます。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。さらに、「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロコイ連邦紹介」…など。午前10時半から６時までやるそうです。映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

HOME

今週の主張

バックナンバー

再び、「革命の時代」が来る！

今週の主張6月11日

(1)「連合赤軍」が復活した。若松映画で…



藤原敏史監督（左）と。ユーロスペース

やっと完成したか。胸がわくわくする。若松孝二監督の「実録・連合赤軍」が完成したのだ。６月27日に試写会だ。楽しみだ。「連赤もの」では既に、「突入せよ！」「光の雨」がある。しかし、「これではダメだ」と若松さんが撮ったのだ。「これが連合赤軍だ！」という決定版を作ると言っていた。前二作と違い、連赤メンバーは全て実名で出る。それに上映時間が３時間５分だ。最近の映画では、ちょっとない。力の入れようが分かる。

「実録・連合赤軍」は、「あさま山荘への道程（みち）」というサブタイトルが付いている。そして、こう書かれている。

〈あの日、あさま山荘では何が起きていたのか。彼らを追いつめたものは何か。彼らの銃口はどこに向けられていたのか〉〈日本で、世界で、あの時代に、何が起きていたのか。彼らはなぜ、あさま山荘への道をたどらなければならなかったのか…〉



ソクーロフ監督（右）と

植垣さん、加藤さん、青砥さん、塩見さんも皆、実名で登場する。35年も前の事件だ。その点では〈歴史〉だ。しかし、生きている人も多いし、今も続いている歴史だ。最近もテレビで連赤をやっていた。植垣さん、加藤倫教さんが出ていた。加藤さんは雑誌の取材には出てるが、テレビは初めてだ。

「テレビ見ましたよ。よかったですね」と植垣さんに電話した。「いや、あれは加藤さんがメインだから」と謙遜していた。加藤さんとは僕も何回か会っている。兄弟３人で連赤に参加した。長男は、「総括」で殺される。二男の倫教氏と三男は、「あさま山荘」に立てこもる。この時、二人とも未成年だった。倫教氏は「少年Ａ」、三男は「少年Ｂ」と報じられた。激動の人生だ。

若松監督の映画「実録・連合赤軍」は、実はこの17才の「少年Ｂ」の視点から見た映画なのだ。若松監督は、この映画の前に、「17才の風景」を撮っている。母親を殺し、自転車で東北に逃げる少年の話だ。「17才シリーズ」の第一作目だ。「シリーズ2作目」が「実録・連合赤軍」だ。そして、「17才シリーズ」第三作目としては「山口二矢」を撮りたいという。これで「17才シリーズ」の三部作として完結だという。

山口二矢（おとや）は1960年に、社会党委員長の浅沼稲次郎氏を刺殺した少年だ。17才だった。逮捕され、直後、自決している。テロリストとして完璧な、完結した人生だった。沢木耕太郎は『テロルの決算』で詳しく書いている。大江健三郎は『セヴンティーン』『セヴンティーン・第２部。政治少年死す』を書いている。しかし、右翼からの抗議で、後者の『政治少年死す』は絶版のままだ。

若松監督は、「三島由紀夫よりも山口二矢だよ」と断言する。三島は世界的に有名な大作家だった。だから何をしようと世界が注目する。ところが山口二矢は何もない。ゼロだ。その行為と死だけで日本に、世界に衝撃を与えた。若松監督は「山口二矢の方が凄い！」と言う。熱い思いで山口二矢を撮る。これも楽しみだ。再び、熱い〈政治の季節〉が甦る。

(2)レーニンだって、この秋、復活する！



ソクーロフ監督の「牡牛座」

政治映画といえば、今年の秋、レーニンを描いた映画が上映される。「牡牛座＝レーニンの肖像＝」だ。

渋谷のユーロスペースでもらったチラシにはこう書かれていた。

〈「モレク神」でヒトラーを、
「太陽」でヒロヒトを描いたソクーロフが彼を育んだソビエトの祖に挑戦！〉

そうです。あのソクーロフさんの映画です。少し前の映画だが、日本では未公開だ。「モレク神」、「太陽」が日本で話題になったので、急遽、上映されることになった。今秋、ユーロスペースでロードショーだ。我々の知らないレーニンを見せてくれるだろう。だって、晩年の、病床にあるレーニンが描かれる。

〈末期の床にあるレーニンの病室。レーニンの妻のクループスカヤはベッドの脇で、ひたすら刑罰史を夫に読んで聞かせている。見舞いに訪れたスターリンは、権力掌握まであと一歩。表情は晴れ晴れとしている。
痴呆のような病状を見せるかつての権力者に対して番兵たちは、冷淡だ…〉

チラシには、「病床のレーニン」の写真も出ている。本物に似ている。「この俳優は、実はヒトラーも演ってるんです」と、その場にいた藤原敏史監督が言う。エッ！本当かよ、と思った。ヒトラーとレーニンじゃ顔が全く違う。「いや、そこがうまいところで、メークや表情で、演ったんですよ」と言う。

なぜ、ユーロスペースに私がいたかというと、６月３日（日）、ここで藤原敏史監督とトークをしたのだ。今、藤原監督の映画が上映されている。その上映前にトークをした。朝の10時から30分だ。早い時間なのに、お客さんも結構来てくれた。「映画は生きものの記録である。土本典昭の仕事」という映画だ。

土本典昭はドキュメンタリー映画の巨匠だ。1965年に水俣を撮影し、以来、17本におよぶ関連作をつくりあげている。その土本が40年ぶりに水俣を訪ねる。水俣は一変していた。そこで、「水俣」について土本が語る。又、かつての患者たちと再会する。それを藤原敏史が追い、ドキュメンタリーとして撮る。なるほど、こんな手法もあったのかと驚いた。いい映画だ。歴史的証言になってるし、考えさせられる。

それに、活字では伝えられないことをカメラは伝えられる。カメラは「最強の武器」だと思った。カメラに嫉妬した。そんな話をした。



「映画は生きものの記録である」

トークが終わって、廊下に出た時に、「牡牛座」のチラシが目についたのだ。レーニンを演じた役者は、ヒトラーも演じていたと藤原監督は言う。レーニン役はレオニード・モズゴヴォイという人だ。僕は「モレク神」は見ている。この人が、ヒトラーをやったなんて信じられなかった。でもネットで調べたら、本当だった。藤原監督はさらに衝撃的なことを言う。

「『太陽』で、天皇も彼がやる予定だったんですよ。一人で、天皇、ヒトラー、レーニンを演ずる。凄いでしょう！」

エッ！本当かよ。と思った。でも、思い当たる節がある。これはありうる。いや、ありえた話だ。だって、僕は、ソクーロフさんと７年前に会っている。「太陽」を撮る前だ。「天皇を主人公にした映画が撮れるかどうか」迷っていた。それで来日し、日本の学者、歴史家など10人以上と会った。皆、「やめなさい」と言った。「命の保障はない」と。「賛成してくれたのは鈴木さんだけですよ」と言っていた。

僕は賛成はしたが、「これだけは変えた方がいい」という注文を出した。だって、映画のタイトルは「ヒロヒト」にするという。又、俳優は全て、ロシア人でやるという。「モレク神」の時もそうだったし、と言う。それはマズイでしょう、と僕は言った。最終的には監督が決める事だが、僕は意見を聞かれたので、言った。

「やるなら俳優は日本人がいい。それにタイトルが『ヒロヒト』では、それだけで偏見を持たれる。見る人も少ないだろう。そういう呼び方を日本人はしない。別のタイトルに変えた方がいい」と。ソクーロフさんは黙って聞いていた。そして出来た映画は「太陽」になっていた。俳優もイッセー尾形ら日本人になっていた。ありがたいと思った。

(3)熱く続くよ。土本典昭、新藤兼人、特攻、ロープシン



「陸に上った軍艦」

でも、ソクーロフ監督の芸術的イマジネーションを挫いたのかもしれない。一人の役者がヒトラーとレーニンと天皇を演ずる。これも凄い話だ。一介の映画ファンとしては見てみたいが、日本で上映できたかどうか。右翼をはじめ、激しい反対運動が起こっただろう。

藤原監督の話に戻す。藤原監督と初めて会ったのは、森達也監督と一緒にいる時だった。フジテレビの「ＮＯＮＦＩＸ」で何人かの監督が〈憲法〉を撮っていた。森さんは「第１章天皇」をやることになった。藤原監督と一緒に、その撮影に入っていた。ところがテレビ局は中止にした。森さんも手を引いた。

「だったら藤原監督が仕上げて、映画にして下さいよ」と僕は言った。だから、出来るかもしれない。昭和天皇を描いたソクーロフさんは、「私はここまでやりました。あとは日本の監督がやって

下さい」と言っていた。ぜひ、あとを継いでやるべきだ。

そうだ。最近、ドキュメンタリー映画が元気がいいという話をした。藤原監督とのトークの時だ。

７月28日から、ユーロスペースで上映されるが、「陸に上った軍艦」は驚いた。いい映画だ。「新藤兼人95歳。映画監督。伝えておきたいことがある」と書かれている。新藤兼人が出演し、戦争の悲惨さ、愚かしさ、滑稽さを証言する。それに基づいたドラマも入っている。「迫真のドキュメンタリー・ドラマ」と謳っている。それを山本保博監督が撮っている。

「これは弱兵戦記だ」と新藤兼人は言う。

〈多くの戦記物語がある。だが弱兵の記録はない。なぜなら彼らは穴を掘り、殴られ、雑役に追い回されただけだからだ。そんなみじめな戦記を誰が書くか。思い出したくないのだ、戦争そのものを〉

試写を見てビックリした。えっ、軍隊はこんなバカなことをやったのか。と思った。本土決戦に備えて、敵戦車を爆破する訓練をする。二組に分かれて、敵と味方になる。一方は、木で作った戦車をロープで引いてくる。それに対し、穴を掘ってひそんでた日本兵が、やにわに出ていって、爆弾を投げる。これも木で作ったものだ。しかし、戦車に当たらないで、ロープを引く兵隊に当たる。いや、わざと兵隊めがけてぶつける。普段、鬱憤がたまっているからだ。今度は、敵と味方が変わる。そして同じことをやる。

又、敵への「斬り込み」の訓練だ。靴を逆にはき、ひもで縛って歩く。敵が見て、「日本兵は逃げていった」と思わせるためだ。直前に来て、刀を抜いて斬り込む。アホらしい。こんなことを真面目にやっていたんだ。勝てるわけがないよ。

さらに、本土決戦用の食糧獲得のために、鯉の稚魚を何千匹と川に放つ。「大きくなって食べられるようになるには、どの位かかりますか？」と上官に聞く。「そうだな。５年位かな」。本土決戦には間に合わない。その鯉のエサのためハエを全員でとる。「千匹とった人間」は外泊が一日許される。妻に会いたさに目の色を変えて、ハエとりにはげむ兵隊。滑稽だが、鬼気迫る。

他には、「飛行訓練」と称するイジメ、リンチの数々などが紹介される。ドラマだけだと「本当かよ」と思っちゃうが、新藤兼人の証言がある。だから、ドキュメンタリーが真実だと保証している。こんな手法もあったんだな、と思った。ぜひ見てほしい。もうすぐ上映だ。


北芝健さん（右）と

又、「Tokko（特攻）」というドキュメンタリー映画も最近見た。試写会で見た。これもいい映画だ。監督はニューヨーク在住の日系二世でリサ・モリモト。プロデューサーはリンダ・ホーグランド。よくある煽動的な「特攻」映画ではない。冷静に描いている。特攻に行ったが機体の故障で戻ってきた人。直前に終戦になって生き残った人。そうした〈特攻〉の証言がある。又、特攻に襲われた米兵の証言もある。これは「今」しか出来ないことだ。よく、やってくれたと思った。

日系二世の監督・リサ・モリモトの叔父は実は特攻隊員だった。しかし、生前、そのことを誰にも語らず死んだ。その謎も追いながらカメラは回る。自分の「家族の物語」であり、そして「国家の物語」だ。又、今しか出来ない。日米両国の兵士の貴重な証言がある。又、後半、アニメも入っている。ドラマ部分だ。これが実にうまくマッチしている。「こんなやり方があったの

か」とここでも思った。「Tokko（特攻）」は、７月21日（土）から渋谷シネ・ラ・アセットで上映される。これは見なかったら後悔する。

さらにもう一本。ロープシンの「蒼ざめた馬」が映画になった。今秋、ユーロスペースで上映される。ロシアの革命家だ。見沢知廉氏が好きだった革命家だ。私も昔、熱狂して読んだ。これも楽しみだ。

そうだ。北芝健さん原作の「公安警察捜査官」も面白かったが、終わってしまった。そのうちDVDが出るだろう。又、紹介しよう。なかなか思想的な映画で、私は考えさせられた。最近、２週続けて会ったので、その話をした。

【だいありー】

(1)６月４日（月）図書館。４時から雑誌の対談。「風流夢譚」事件について話をする。1961年の事件だ。これが「天皇タブー」「言論抑圧」の原点になってると思う。

(2)６月５日（火）昼、新宿で打ち合わせ。又、外国に行くことになるかもしれん。新聞を見たら、有田芳生さんが参院選に出るという。田中康夫さんも。別の党だが、ペマ・ギャルポさんも。知り合いがどんどん出る。

(3)６月６日（水）2:40。ジャナ専の授業。７時から赤坂東急。維新政党「新風」の「躍進の集い」。代表の魚谷哲央さんは、学生運動出身者で、昔からよく知っている。真面目な人で、地道に運動をやってきた。参院選に出る。頑張ってほしい。



鴻上尚史さん（中）、大久保綾乃さん（右）と

(4)６月７日（木）河合塾コスモの授業。終わって、鴻上尚史さんのインターネットラジオに出る。今月一杯出る。７日、14日、21日、28日と４回だ。大変だ。スタジオは早稲田だから近くていいが。

鴻上さんには久しぶりに会った。「鴻上尚史の生きのびるために笑う」という番組だ。実は、鴻上さんとは「SPA!」の「同期生」だ。私の「夕刻のコペルニクス」と鴻上さんの「ドン・キホーテのピアス」、それに漫画家の青木光恵さんの３人の連載が同時にスタートした。13年ほど前だ。青木さんと私の連載はとっくの昔に終わったが、鴻上さんだけは今も続いている。何と620回目だ。他の週刊誌を見ても、これだけ長く続いている連載はない。「生きのびて笑っているのは鴻上さんだけだ。チクショー。悔しい」と言ってやった。単行本だけで13冊も出てる。やっぱ、悔しい。鴻上さんの連載は、もう13冊も本になっている。

(5)６月８日（金）取材。夜、柔道。

【お知らせ】

(1)６月11日（月）午後７時、高田馬場サンルートホテル。一水会フォーラム。私が講師で、「一水会35年の歴史」について喋ります。

(2)６月15日（金）「EX大衆」（７月号）発売。足立正生さん（映画監督）と「テロとレジスタ

ンス」について対談しています。

(3) 6月28日（木）6時半から飯田橋の「東京しごとセンター」講堂で、シンポジウム「監視社会を超えて」があります。第1部は斉藤貴男さんの講演。第2部はトーク・セッションです。私も行きます。

(4) 7月20日（金）7時、ネーキッドロフト。針谷大輔氏のイベント。私も出ます。

(5) 8月6日（月）ロフトで植垣康博さんとトーク。「連合赤軍と日本人」。他に美人画家の菊田さんや東大の先生も出るそうです。

(6) 9月6日（木）～9日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。

(7) 9月29日（土）「9条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運動」と題するシンポジウムに私は出ます。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。さらに、「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロコイ連邦紹介」ノなど。午前10時半から6時までやるそうです。映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

HOME

今週の主張

バックナンバー

偉大なる革命家への謝罪文

今週の主張6月25日

(1)「熊本の乱」失敗は私の責任です



レーニンTシャツを着た外山恒一氏（左）と

ごめんなさい。すみません。私が悪うございました。謝罪します。自己批判します。私のせいで外山恒一氏が逮捕されてしまいました。「政府転覆」を企てる革命家をこんなことで逮捕させるなんて。警察はひどい。国家はひどい。国策捜査です。しかし原因を作ったのは私です。元はと言えば私が悪いのです。外山氏のブログ「ファシズムへの誘惑」にはこう書かれてました。

〈「今回の逮捕は『一水会』顧問・鈴木邦男氏の熊本３区出馬を阻止せんがために国家権力が仕組んだ謀略である」との見方が広まっているようなので、それについて。
1.外山恒一が、７月に行われる熊本３区の補選に鈴木邦男氏を擁立し、熊本の地で一騒ぎ起こそうと企んでいたのは紛れもない事実である。
2.この件と今回の逮捕との因果関係については現在、調査中である〉

本当に申し訳ない限りです。私ごときを擁立しようとした為に警察、国家の怒りを買い、逮捕されたのです。東京の新聞では「交通違反呼び出しを拒否して逮捕」と小さく記事が出てました。「何だ交通違反か」「政治事件じゃないのか」と思った人は多いでしょう。そう思わせる所が警察・国家の「手口」なのです。「公安警察の手口」です。「こんな小さな事件で逮捕されるような奴だ」と国民に思わせる為の謀略です。

本当は「政府転覆」の罪なのです。反逆罪なのです。でも、それでは逮捕できない。又、政治事件で逮捕すると、又もや「革命家・外山恒一」の名を高からしめる。都知事選以上に、「外山恒一フィーバー」が起きる。国家権力はそれを怖れたのです。左右の活動家を狙い撃ちにし、「痴漢」や「淫行」「万引き」の罪をデッチ上げて逮捕する。あの「手口」と同じです。「破廉恥罪」として逮捕し、活動家、革命家を汚辱の中に突き落とそうという陰謀です。

実際、警察は、革命家・外山氏に対し、あることないこと言いふらし、新聞もそれを鵜呑みにして記事を書いています。警察・国家権力と共謀して、革命家を抹殺しようとしています。共謀罪です。例えばこうです。

○都知事選落選の外山恒一容疑者を逮捕。

○都知事選落選の外山恒一容疑者を逮捕。交通違反呼び出し拒否。

○都知事選の落選候補。反則金納付を拒否し逮捕。

○外山容疑者、道交法違反で逮捕。都知事選で落選も。

…と、「落選」を強調しています。迫力ある政見放送で、あれだけ注目された。ネット上では何百万人もが見た。ニューヨークでも見た。「もしかしたら…」と期待も持たせた。大健闘ですよ。「落選」と一言で片付けられる事ではない。書き方があるだろうよ。いっそのこと、「都知事選健闘男逮捕」とか、「惜しかった。よくやった都知事選候補を不当逮捕」とか、書けばいい。新聞は、「不当逮捕」とは書けないか。じゃ、「逮捕」でいいや。

(2)何が「自称」なのか！基準がねえや

「自称・文筆業者」と書いた新聞もあった。これもないだろう。外山氏はこれまで８冊、本を出している。９冊目も現在執筆している。都知事選の乱につて書いてくれと、いろんな出版社からも声が掛かっている。

でも変だ。捕まると皆、「自称」になる。大きな右翼団体の幹部でも捕まると「自称右翼活動家」になる。そんな人を何人も知っている。又、左翼活動家、自然保護運動家、市民運動家…なども、捕まると「自称」になる。長い間、運動をやっている、まわりの人も認めている。それなのに「自称」だ。

ただ、政治家や国会議員は、「自称」が付かない。国家が認めたものだから、だろう。会計士、税理士、出版社、テレビ局、大企業…などもそうだ。

それに比べ、左右の活動家や、市民運動家などは、国から認められたものではない。「右翼」なんてものは全て「自称」だ、と言ってるのだ。「右翼」なんて、そんなものはない。あっちゃいけない。そういう考えがあるんだろう。国家にも、警察にも、又、マスコミにも。

でも外山氏は実際に本を出してるのに「自称文筆家」とされた。これは変だ。出版社にもレベルがあって、「ここ以上でないと自称だ」という線引きがあるのだろうか。だったら、出版社差別だ。明確な基準を言ってみろ！と、これだけでも裁判になるよ。

外山氏は、どうせ書くんなら「自称・前衛政治家」とでも呼んでもらいたい。と言っている。これもいいね。選挙に立候補する時から、この肩書きを使えばよかったのに。そうしたら、これは普段から勝手に使ってる肩書きだ。だから逮捕されたら、「自称・自称前衛政治家」になるのかな。これなら面白いよ。

私だって、痴漢で逮捕されたら、「自称・右翼」になるのかな。「自称・愛国者」とか、「自称・文筆家」とか。いっそなら、「自称・日本人」とか、「自称・人間」となるかもしれん。うん、面白そうだ。どう書かれるか、一度やってみようかな。でも今はもう捕まる度胸がない。痴漢したり万引きをする勇気もない。火炎瓶を投げる勇気もない。いかんな。覇気のないただのオッサンですよ。私は。弱いんですよ。すみません。

外山氏について、警察はさらに、こう発表している。

〈「政府転覆」男逮捕。危険思想とは無関係〉
交通違反の金を納めなかったので逮捕した。「危険思想」とは関係ないと言っている。でも、「政府転覆」男、と書いたことで自己矛盾を起こしちょる。

でも何故、こんなことで革命家を捕まえるのか。不当だ。国策捜査だ。これも全て、私のせいだ。申し訳ない。

ウーン、もしかしたら、あの事かもしれない。都知事選直後、ネーキッドロフトで外山氏の

「報告会」があった。もの凄い人が詰め掛け店に入れない。外にズラーッと行列が出来ている。私だって入れない。店長のお情けで、やっと入れてもらえた。若い男女が圧倒的だ。こんなに若者が集まることはない。女の子が「キャー外山さん素敵！」なんて叫んでいる。人気者だ。カリスマだ。

いいなー。悔しいな。「こんなに騒がれるんならオラも選挙に出たい」とつい口走ってしまった。誰だってそう思うだろうよ。その言葉を外山氏や中川氏（外山氏の軍事参謀）は聞き逃さなかった。「じゃ、熊本３区で出そう」と秘密裏に準備した。私には全く知らせないで準備していた。選挙も秘密裏にやる。そんで当選したら、「ほら、国会に行きなさいよ」と議員バッチをくれる。じゃ、行くしかないか。

…と、そんな秘密作戦が行われていたんでしょう。ありがたい話です。涙が出ます。私ごとき無能な無責任な自称男を、そこまで思い、選挙に擁立しようとして下さった。感謝感激です。しかし、日本の警察もバカではない。そんな危険な動きをつぶそうと、今回の外山氏逮捕になったんです。私が当選したら、「熊本の乱」を起こせたのに、残念です。又、私の力不足、人徳のなさのために外山氏、中川氏らに多大のご迷惑をおかけしました。何とお詫びしていいのか分かりません。本当に申し訳ありませんでした。

(3)国の弱さ、自分の弱さを愛する



『Link Club Newsletter』

『Link Club Newsletter』（７月号）に私のインタビューが載りました。なかなか面白い雑誌です。何と、10万部も出てるのです。でも書店には出てません。アップルコンピューターのユーザクラブが「Link Club」といいまして、その会員向けに発送している雑誌です。私もアップルのユーザーなので届いてます。それに、健康のため毎日、リンゴを一個、食べちょります。でも、この雑誌はコンピューターだけでなく、社会、思想、政治、映画…と各方面にわたってエキサイティングな記事が載ってます。

毎週、「A WAY OF LIFE」というインタビュー記事があります。映画「日本国憲法」のジャン・ユンカーマンさん、映画監督の森達也さん、作家の雨宮処凛さん…といったビッグな人々が今まで出ています。そのコーナーに、無名の、スモールな私も取り上げられました。ありがたいです。

タイトルがいいですね。「国を愛し、“自分の弱さを愛す”」。

「右翼がこわい？　僕だってこわいよ」という発言から始まってます。えーと、見出しを見てみますと。

〈凝り固まった思想や考えは、人間を不自由にするという〉

〈自分の弱いところを見せたがらないという風潮は、右翼や左翼だけでなく、一般の人々にも浸透していると危惧する〉

〈失敗や弱さを認める寛容性。それが日本という国の凄さ〉

〈大切なのは思想ではなく人間性。考え方が違ったほうが面白い〉

そしてインタビュアーは最後に、こう言います。

〈理想を掲げることの大切さ。失敗して弱さを認める勇気。右翼の人というイメージを超えて、平和と優しさを求める真摯な活動家として邁進している鈴木さんの姿に、心打たれる人は少なくないだろう〉



『Link Club Newsletter』のインタビュー記事

今までと、ちょっと違ったインタビューになった。場所も中野の「ルノアール」で、喋りやすかったし。それに、『言論の不自由?!』（ちくま文庫）をインタビュアーが評価してくれた。それも嬉しかった。この本は、私のかつての「テロ・暴力体験」を赤裸々に語っている。そして、その「荒ぶる世界」からどうやって訣別したか。その回心の精神的経過を書いている。さらに、天皇制論議を自由にするために、あえて、「天皇制が廃止された社会」について考えてみた。「敵の土俵」に上ってみたのだ。かなり危ない試みだ。反日・売国と紙一重だ。いや、その領域まで踏み込んだのかもしれない。インタビュアーが聞いてます。

〈鈴木さんの著書『愛国者は信用できるか』や『言論の不自由?!』を読むと、過去の活動の紆余曲折を率直に語る箇所が出てくる〉

それに対して私が答えている。

〈この２冊は、僕の自己批判の本なんですよ。というか失敗談なんだよね。普通、思想を語るときは、自分がいかに正しいかを語るじゃないですか。でもそれじゃ進歩はない。誰でも間違うのは普通だし、僕だってそう。でも、弱さをさらけ出すと終わりと思う人が多いなあ。右翼でも左翼でも、これがあれば大丈夫と思い込んで活動している人たちは、実は結構弱いんですよ〉





そうですね。「マルクス主義」さえあればとか、「皇国主義」さえあれば大丈夫と思ってる人は、その本家がコケたら自分もコケてしまう。弱いんですよ。

この雑誌には、他にも、イラク図書館館長や劇作家・坂手洋二さんも出ている。又、両面文学作家の遠山由美さん、さらに、「日本吉を紡ぐ」「日本の美意識で綴るサイト日本吉」なんて特集もある。

(4)さらに広く、深くＬＩＮＫしちょります

実はこの『Link Club Newsletter』の編集部には、その後もお世話になっている。



松岡正剛『フラジャイル・弱さからの出発』（ちくま学芸文庫）

（その一）７月号は私のインタビューだが、次の８月号は映画「Tokko（特攻）」の監督リサ・モリモトさんと、プロデューサーのリンダ・ホーグランドさんが出る。６月11日（月）に取材に行くというので、私も無理に頼んで同席させてもらった。とても勉強になりました。先週号に書きましたが、この映画は７月21日（土）から、渋谷のシネ・ラ・セットで公開されます。

（その二）さらに、６月16日（土）です。先週書いたように、松岡正剛さんがナビゲーターの「連塾・日本、という方法」に出席しました。200人以上の方々が出席してました。「あっ、うちの雑誌に出てた人だ！」と声をかけられました。「Link Club Newsletter」の編集部の人がいたんです。松岡さんも驚いていました。カバンに一冊あったので松岡さんにあげました。「国を愛し、自分の弱さを愛す」というのがいいね。と言われました。「実は僕も〈弱さ〉について本を書いてるんです」といって本を下さいました。『フランジャイル・弱さからの出発』（ちくま学芸文庫）という本でした。

「弱さは常に過激である」と本の帯には書かれてました。うん、いいですね。これは。

〈「弱さ」は「強さ」の欠如ではない。「弱さ」というそれ自体の特徴をもった劇的でピアニッシモな現象なのである〉

なるほど。そうなのか。今、さっそく読んでおります。初めに何と三島由紀夫の言葉が出ている。『夜の車』の言葉で。

〈使命、すでにそれがひとつの弱点である
意識、それがすでにひとつの弱点である〉

そうか。「弱さ」は強さであり、使命なんだ。これからも「弱さ」について私も必死で考えてみませう。そうそう。松岡さんの「連塾」で、大阪から来た女性に声をかけられました。「私も先月、ニューヨークに行ってMOMAで、モネの『睡蓮』の前で写真をとりました」と。日本人は皆、そこで写真をとるんですね。それだけ迫力があったんです。



（その三）「Link Club Newsletter」でインタビューをしてくれた中島さんから本を送って頂きました。中島さんが編集した本です。月乃光司対談集で、『病気だヨ！全員集合』（新紀元社）です。いやー、面白かったですね。一気に読みました。〈弱さ〉を通り越して、〈病気〉の人々ばかりを集めました。でも、スケールの大きい、高貴なる〈病人〉たちです。対談するのは大槻ケンヂ、雨宮処凛、今一生、石井政之、中村うさぎ…さん達です。豪華メンバーだ。どこの雑誌でやったんだろうと思ったら、「ロフトプラスワン」なんですね。

こりゃ、私や塩見孝也さんも呼んでほしかった。と中島さんに言いましたよ。右翼や左翼は立派な病人です。それなのに、「自分は

月乃光司『病気だヨ！全員集合』（新紀元社）

正しい。世の中が病んでいる」と思ってます。二重の意味で病人です。第二弾を出す時は、ぜひ呼んでほしかです。

この本は全て面白いですが、中村うさぎさんが、特に、ぶっ飛んでました。「うさぎさんは友人の結婚式でウンコを漏らしたというエッセイを読みました」（月乃）

「ウンコを漏らしても、私のプライドは、全然揺るぎませんよ」（中村）

なんじゃ、こりゃ。凄いね。それに、中村さんは、「衝動買い」「ホスト狂い」「美容整形」「デリヘル体験」…と、次から次。これでもか！というデンジャラスな日常。なぜ？なして？と思うのが普通。その疑問に、こう答えています。

〈つまり、破滅しないでちゃんとしたものにしがみつこうとしている自分への恐怖があるわけ。すごく短絡的に言っちゃうと、「守りに入ったら私終わり」みたいな。なぜそう思うのかわからないんだけど、私なんかどうにでもなってしまえ、と思わないと生きていけないような気がするんです〉



中村うさぎさんと対談した

うーん、いいですね。この覚悟。デスペレートな人ですね。〈弱さ〉を武器にした〈強さ〉ですね。ここまで言われたら、もう我々はただ、ひれ伏すしかありません。この人は神ですよ。

そうそう、中村うさぎさんとは２年ほど前、対談したな。高田馬場のうさぎ屋で。うさぎ料理を食べながら。うなぎ料理だったかな。雑誌の連載でずっと対談をやったようだ。佐川一政、植垣康博さんとも対談した。20人以上になったので単行本にすると言ってた。これも楽しみだ。

【だいありー】

(1) ６月18日（月）図書館。取材。

(2) ６月19日（火）急ぎの原稿があって、夜中に起きてずーっと書いてた。他に校正やら何やら根をつめて仕事してたら、フラフラした。夜７時から両国のベニサン・ピットで芝居を見る。演劇企画集団ＴＨＥガジラ20周年記念公演の「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・京都　かげろふ人」。天誅組を思わせる幕末の内ゲバの話だ。殺陣がすさまじい。命がけの殺陣だ。それに連合赤軍事件とダブって見えた。終わって、出演していた大久保鷹さんたちと近くの焼鳥屋で「豆乳サワー」を 飲んだ。「今から考えると左翼の運動も“愛国的、護国的運動”だった。連赤も天誅組の一種みたいだった」と中上健次が言ってた。その話を鷹さんに言ったら、喜んでいた。「そうか。中上も言ってたか」と。池袋の文芸座で20年ほど前にやった「激論・全共闘」の時だと思う。今度、本を探して、詳しく紹介しよう。

(2) ６月20日（水）朝、熱が出て、頭がガンガンする。やべー、カゼだよ。ここんとこ仕事が多くて寝不足だ。それに昨夜は豆乳サワーを飲んだし。今日はジャナ専の授業だよ。まいったな。それで、「２時間で治す！」と決意した。「生長の家」のお祈りをし、お湯を飲み、あとは、フトンを重ね、汗を出す。キッチリ２時間で治った。私は神の子だ。３時からジャナ専の授業。夕方、久しぶりに柔道。調子はいい。汗をガンガンかいたら、すっきりした。「信仰と闘いの日

々」ですよ。これで〈弱さ〉を克服してるんでしょうな。この人も。と他人事のように言う。

(4)６月21日（木）朝、高田馬場松竹で「夢十夜」を見る。夏目漱石の原作を十人の監督が撮る。なかなか意欲的な作品だ。
　３時から河合塾コスモの授業。

(5)６月22日（金）午前11時、高田馬場でロフトの梅造さんに取材される。「35周年を迎えた一水会」について。そして12周年のロフトについて。いろいろと思い出しながら、ボソボソと喋る。全てはロフトのおかげです。
　午後、打ち合わせ。取材。

(7)６月24日（日）図書館。夜、高田馬場で高木さんらと打ち合わせ。見沢知廉氏の芝居について。

【お知らせ】

(1)６月28日（木）６時半から飯田橋の「東京しごとセンター」講堂で、シンポジウム「監視社会を超えて」があります。第１部は斉藤貴男さんの講演。第２部はトーク・セッションです。私も行きます。

(2)７月20日（金）７時、ネーキッドロフト。針谷大輔氏のイベント。私も出ます。

(3)８月６日（月）７時半から、ロフトプラスワン「じっとしてたって何も始まらない。大地を揺るがせ。vol1」と銘打ったイベント。スペシャルゲストは植垣康博さん（元連合赤軍兵士）、伊藤乾さん（東大助教授）、そして私。絵画出演は菊田麻衣さん。

(4)９月６日（木）～９日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。

(5)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運動」と題するシンポジウムに私は出ます。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。さらに、「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロコイ連邦紹介」ノなど。午前10時半から６時まで。映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(6)今週は文字通り、「鈴木邦男をぶっ飛ばせ！」でしたね。これからも、どしどし、ぶっ飛ばして下さい。

HOME

今週の主張

バックナンバー

愛国者は、きれい好きだ

今週の主張7月2日

(1)中上健次と激論しましたよ、オラは



（左から）高橋伴明、中上健次、鈴木、前之園紀男、立松和平、田原総一朗（1984年6月。池袋文芸座）

その時、私は中上健次に突っかかっていった。〈全共闘の奴らがだらしがない。悔しかったらもう一度やってみろよ。今、酒飲んで、『昔は闘ったよ！石投げたよ。火炎瓶投げてた』って自慢話をしてもダメだ。俺達は警察に弾圧されながらも運動やってるよ。あんたらはどうしたんだ！〉。そういって挑発したんだ。

1984年だから、今から23年前だ。池袋の文芸座だ。私も元気よかったが、中上健次も元気がよかった。こう反撃した。

〈だからさ、いつもこの鈴木さんという人は評論家みたいなことをいうんだよ（笑）。そうじゃなくて、俺がいいたいのは、簡単にこの人もいっていることだけど、つまりいまから振り返ってみれば、左翼の運動だといわれてたものが全部右翼にみえるということなんです。つまり、この全共闘の運動でも、60年安保でもね、みんななんか右にみえちゃうんだ。

つまり頭ではレーニンだとかトロツキーだとか、いろいろ本を読んで人なみに考えたよ。だけどいまこんなふうな平和な時代を迎えていると、あの時代やっていたことは、つまり全部、護国運動だとか変わらないんじゃないのかと思ってしまう。そして、どんなことを俺たちはやれたのかと自問するんです〉



会場の青年が飛び入りでギターを弾いた

政府に反逆し、アメリカに反対し、機動隊と闘った。革命運動のように見えながら、実は、アメリカから日本を護る為の〈護国・愛国運動〉ではなかったのか。偉大な作家・中上健次はそう喝破するんですね。凄い。カッとなって、その発言を引き出した右翼青年も凄い。（私だけど）。

だったら、60年安保、70年安保、全共闘も、明治維新のようなものか。西欧列強の圧力から日本を護る。皆、憂国の志士たちだ。内部で小さいいさかいもあるだろう。そんなことはいくらでもあることだ。本質を見ろ。枝葉末節にとらわれちゃいけん、と言う。

〈たとえば連合赤軍の事件なんかは天誅組の一種だったんじゃないかと、横にスライドすればそんなふうに見えちゃうんだ。それはもう小説家の目ではあるんだけど、ひとつの小説家の目で強くこうとらえ直すみたいなものだけどね。そうすると俺、なんか、いままで生真面目に暴力だとか何とかかんとかいってることが、すっ飛んじゃうんじゃないかって気がするんだ。

だからそういうことを、左翼なら左翼がもういっぺん打って返さないとだめなんじゃないかと思う。いままでの歴史上の事件や動きと、どう違っているのか。どう新しいのか、右翼は右翼なりにそれをつかみ返さないとだめなんじゃないかっていうことを、鈴木さんなら鈴木さんにちょっと聞いてみたいわけですよ。はっきりどんなふうに思うんだということです。

俺は小説家の目でみれば、あれは右翼の運動にみえる。そういうときに、つまりそれをどうとらえ返すかっていうことをね〉



（左から）鈴木、前之園紀男、立松和平

中上は思い切ったことを言ってる。これに対し私は、当時は怖いもの知らずだったんでしょう。再び中上に喰ってかかっている。

〈全共闘と闘っている時は、こっちも命がけだ。とても彼らが〈愛国〉だとか、〈護国〉運動だと思わなかった。あれから何十年か経ち、もう全共闘もなくなった。僕らがフッと思う。「もしかしたら、あれも反米運動であり、民族主義を代行したのかもしれない」…と。僕らがそう思うのはいい。しかし、当の中上たちがそんなふうに総括したんでは余りに淋しいだろうよ。悔しかったら、もう一度、運動をやってみろ。今、続けている奴は誰もいないじゃないか。だらしがない。僕らは、警察に弾圧されながらも、必死でやってるんだ！〉

と胸を張って言ってましたね、私は。今考えたら、もうちょっと優しく、妥協点を求めて話したらよかったのに、と思う。でも、あの時は私の方に全く余裕がなかったんだ。「全共闘４人」と「民族派１人」の闘いだったし…。ギリギリの闘いだった。

(2)これが「朝生」の原点だったんだ



『激論全共闘。俺たちの原点（講談社・1984年12月発行）

1984年（昭和59年）６月に池袋文芸座で行われたパネルディスカッションだ。今から23年前だ。テレビ朝日が企画した。超満員で、朝まで激論をした。実は、これが原点になって、この数年後に「朝まで生テレビ」が始まったのだ。その意味でも、なかなか記念碑的なものだった。

「君は今燃えているか！！カゲキ世代激突討論」というタイトルだった。テレビ朝日でこの激論は放映された。そのあと、「朝日ジャーナル」に載った。そして、講談社から本になった。『激論全共闘。俺たちの原点』（990円）だ。今は絶版だが、ネットの古本屋で探したらあるだろう。

この時の出演者は、中上健次（作家）、立松和平（作家）、高橋伴明（映画監督）、前之園紀男（元赤軍派幹部）、そして私だ。司会は田原総一朗。この時の田原は、「全共闘寄り」だと思えた。だから、「５対１」で私は闘った。

写真で見ると、私はジャンパーを着ている。司会の田原さんは背広にネクタイだが、他は皆、ジャンパーだ。「闘う姿勢」を示すつもりなのか。 期せずして、そうなったんだろう。私はジャンパーの上に「ＵＷＦ」のワッペンを貼っている。そして、下にはＴシャツを着てるが、その胸のとこには 柔道のマンガが描かれている。フクちゃんが相手を投げとばしているマンガだ。講道館で買ったんだ。よく、こんなものを着て討論会に出席した もんだ。「５対１」で悲壮な覚悟で出席したと思ったのに。案外と余裕だったのかもしれん。フクちゃんのように、全共闘なんか全員、投げ 飛ばしてやるさ。と思っていたのかもしれない。なめてたんですな。ゴーマンな奴ですよ、こいつは。



『俺たちの原点』より

「僕はもう40歳になりますけど、運動をやっているし、後継者も育てている。あなた方の全共闘はもう〈過去〉だ。しかし、僕は〈現在〉だ。現在もそのまま闘っている」と豪語している。

「あれこれ言われたって何も反論できないでしょう。皆、やめてるんだから。悔しかったら自分たちの行動でもって示せばいい。かつての全共闘を凌駕するような運動をつくったらいい。できんでしょうが」

と挑発している。うーん、言いたい放題だ。又、その頃は、私に豪語させるだけの〈下地〉というか〈背景〉もあった。運動はガンガンやっていたし、若い人間はドッと入ってくる。ヤバイ闘い、過激な闘いも逃げずにやった。

この年（1984年）の前年（1983年）には野村秋介さんが府中刑務所を出所。日本民族独立義勇軍は朝日新聞社、ソ連領事館に火炎瓶を投げていた。これが後に赤報隊になる。

又、1982年には統一戦線義勇軍が過激な闘争をやり、次々と逮捕者を出した。同年９月には「スパイ査問」に端を発した「粛清事件」が起こる。「新右翼の連赤事件」と言われた。

いわば、運動の「極限状況」だった。これで一水会も終わりかと思った。そこをやっと切り抜けた時だった。しかし、血なまぐさい闘いはまだ続いていた。この討論会の翌月、「新雑誌Ｘ」の「天皇不敬イラスト事件」が起こる。『新右翼』（彩流社）の「年表」にはこう書かれている。

〈７月。「新雑誌Ｘ」天皇イラスト事件で民族派が決起。「新雑誌Ｘ」事務所、東郷健ら襲撃される。東郷健襲撃の木村三浩義勇軍議長は９月に逮捕さる。

７月19日。「反米愛国、ＹＰ体制打倒」を訴え、米大使館を襲撃、統一義勇軍の井川武志逮捕〉



同じく、『俺たちの原点』より

実力行使、直接行動は毎日のようにあり、同志は次々と逮捕される。毎日のようにガサ入れはある。まさに〈戦争〉だった。平和的日常なんかない。そんな中での全共闘との対決だった。だから、俺たちだけが闘っている。警察の弾圧をもろに浴びて闘っている。全共闘はどうしたんだ！と私は叫んだのだ。「お前らがいない分、警察の弾圧はモロに俺達に来るんだ！」。そう叫びたかった。その気持ちは分かってくれるだろう。

(3)「整理・整頓」の先に「殺人」が…

さて、何故「激論・全共闘」の話をしたかというと、先週からの続きだ。６月19日（火）に両国の「ベニサン・ピット」で芝居を見た。演劇企画集団ＴＨＥ・ガジラ20周年記念公演の「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・京都　かげろふ人」を見た。すさまじい芝居だった。作・演出は鐘下辰男。時代は幕末だ。天誅組を思わせる凄絶な闘いだ。敵との闘いもあるが、〈内部の敵〉探しの「内ゲバ」もある。うーん、連合赤軍事件のようだな、と思ってみた。

終わって、芝居に出ていた大久保鷹さんたちと近くの焼鳥屋に行って、巨乳じゃなかった、豆乳サワーを飲んだ。その時、「そういえば中上健次が昔、こんなことを言ってましたよ」と私が紹介したのだ。「今から思えば、連合赤軍も天誅組のようなものだった」と。「20年以上も前に中上が言ってたんですか。凄いですね」と鷹さんは言う。それで今回は、その「激論・全共闘」をまとめた本を探して、こうして紹介しとるんじゃよ。

そうそう。芝居の中で、やたらと掃除するシーンがある。飛びちった血を志士たちが雑巾でふくのだ。長い廊下を皆で雑巾掛けするシーンもある。川谷拓三の息子さんも見に来ていて、一緒に飲んだ。彼は、「長い廊下を客に見せるためにやったんでしょう」と言っていた。確かに広い。奥に広い舞台だ。なるほど。そういう演出的効果もあるのか。

「それと、殺人者はきれい好きなんです」と鷹さんがポツリと言った。ギクッとした。何故か分からないがギクッとした。僕もきれい好きだ。昔は「整理・整頓の鬼」と言われた。生学連書記長の時代ですよ。学生運動の時だ。今はズサンだけど、「整理・整頓」しようという気はある。雑然としていると気持ちが悪い。いらないもの、邪魔なものは、すぐ捨てたり、処分する。この「処分する」という行為がエスカレートすると「殺人」になる。いや、殺人者の心理には、そういう要因があるということだ。

私は、今までに20人以上の「殺人者」に会っている。皆、きれい好きだ。掃除好きだ。自分のまわりをきれいにしておきたいと思うんだね。

「殺人者は皆、そうですか？」と川谷さんの息子さんが問う。「いえ、衝動的な殺人は違います。カーッとなって女を殺すとか。酔っ払って殴り殺すとか。それは違います。しかし、思想的動機に基づいた確信犯は皆、きれい好きです」と私は断言した。

いや、思想に基づかなくても、「確信犯」は皆、きれい好きだ。ゴルゴ13を見んしゃい。「子連れ狼」を見んしゃい。静岡の「子連れ狼」も異様にきれい好きだ。８月にロフトで一緒にトークをするけど。それに、几帳面だ。

だから、こうも言える。「きれい好き」「几帳面」が極限まで行くと、「人殺し」になるん

だ。赤川次郎の『日の丸あげて』だったかな。団地の全ての入口に、日の丸が立っている。いや、一軒だけ出してない家がある。気になって仕方ない。整理好きなんだ。だから、その人間を殺して、自分が日の丸を出してやる。こうなるとスッキリする。整理・整頓が出来て。

学校で全員に起立させ、「君が代」を歌わせる。これも「きれい好き」「整理・整頓」好きなんです。皆、ズラーッと立っている。気持ちがいい。そうか。愛国心は「整理・整頓」心なのか。分かったぞ。だから、集団になり、暴走したら、大きな殺人（戦争）になるんだよ。凄い（真理）を発見しちゃった。『愛国者は信用できるか』なんか問題じゃない。こっちの方が重要だ。大発見だ。

スターリンもヒットラーも異常なほどにきれい好きだ。「整理・整頓魔」だ。だから、統制のとれた集団をつくった。巨大な美だ。外れたものはそぎ落とした。〈美〉を求める心だ。

連合赤軍の森恒夫も永田洋子もきれい好きだった。整理・整頓が好きだった。だから、はみ出したものが許せなかった。連合赤軍事件は、だから、「整理・整頓殺人事件」なんだよ。

(4)「内ゲバ国家・日本」の象徴ですよ。連赤は

では再び、中上発言に戻る。「連合赤軍は天誅組みたいだった」という発言だ。連合赤軍はよく知ってるだろうが、天誅組は知らん人も多いだろう。『辞林21』（三省堂）から紹介しよう。

〈てんちゅうぐみ【天誅組】　幕末期、諸藩を脱藩した尊攘急進派の集団。吉村寅太郎・藤本鉄石・松本奎堂らを中心とする。1863年中山忠光を擁して大和で挙兵、十津川郷士も加え大和高取城に向かったが８月18日の政変後、幕軍に敗れ壊滅した〉

幕軍との闘いの前に、尊皇軍同士の内ゲバがある。水戸の天狗党もそうだ。長州、薩摩でも血で血を洗う内ゲバがあった。日本の歴史はいわば「内ゲバ」の歴史なんだよ。外国との戦争よりも、国内で日本人同士で殺し合っている方が圧倒的に長い。明治維新だって、勤王・佐幕の内ゲバだ。その勤王の中で、さらに「内々ゲバ」が起こる。関ヶ原の合戦だって内ゲバだ。

2.26事件の時、「皇軍相撃は避けるべきだ」と他の同志は言う。磯部浅一は、「何をいってるんだ。皇軍相撃が恐くて革命が出来るか。日本の歴史は全て皇軍相撃の歴史だ！」と言ってのけた。凄いね。

さて、『激論全共闘　俺たちの原点』（講談社）だ。1984年12月10日発売になっている。文芸座での激越な討論が納められている。さらに、終了後、出演者は近くの居酒屋に行き、そこで又、朝まで激論をしている。それも「第二部。深夜の酒場。魂のおもむくままに」として収録されている。又、各出演者が、後からコメントをよせている。又、筑紫哲也、北方謙三もエールを寄せている。文芸座では確か、ビデオ出演だった。

さらに、学生運動の写真がふんだんに入っている。歴史書、歴史の証言としても貴重な本になっている。今だって売れるよ。ぜひ、文庫本にして復刊してほしいね。

うーん、前に、そのことも言ったような気がする。この本だって、前にも紹介したかな。でもいいだろう。いい本は何回、紹介しても。前之園紀男さん（元赤軍派幹部）が連合赤軍について、こんな大胆な提言をしていた。その危険な提言のために、この本は復刊されず、文庫本にもなってない。そんな噂がある。では、そのデンジャラスな提言だ。

〈さて、現在、どうしても避けて通ることができない問題がひとつある。それは1972年に武装闘争で敗北し、捕虜となった連合赤軍の兵士達の処遇についての問題だ。

裁判が行われて、刑事犯として彼らに極刑が宣告されたが、これはわれわれには決して受け入れることができない処遇である。国際法は内乱にも、その大小にかかわらず戦争捕虜の処遇を適用すべきことを規定しているが、彼らにも捕虜としての正当な処遇があたえられなければならないと思っている。

われわれは対ソ防衛を民族一致で前進させるためにも、政府が連合赤軍兵士を礼儀正しく処遇することを要求します〉

思い切ったことを言ってるね。連赤は〈犯罪者〉ではなく、〈戦争捕虜〉なのか。でも、一般国民は納得しないでしょうね。

どっちにしろ、中上の言うように、あれは天誅組の一種だ。50年経ったら、歴史として客観的に見られるようになる。天誅組か、あるいは「新選組」と同じになる。そしてＮＨＫの大河ドラマになるよ。そう断言した歴史家もいたんだし。

【だいありー】



『法と民主主義』（６月号）に書いた

(1)６月25日（月）日本民主法律家協会が出している『法と民主主義』（６月号）が発売。特集は〈警察の「ゼロ・トレランス」政策を問う〉

最近日本の警察はアメリカの治安政策を参考にして、次の二つに力を入れている。つまり、「割れ窓理論」（犯罪は小さな芽のうちに摘む）」と「ゼロ・トレランス」（日本なら軽犯罪法や条例違反のような迷惑犯罪に対しても重大犯罪と同様に取り締まるという考え）だ。たとえば公安警察は、左右、オウムに対し「危険な団体」「犯罪者集団」とレッテルを貼り、「微罪逮捕」「無罪逮捕」を行なってきた。又、ビラ配りにも不当な弾圧を行なっている。さらに路上での市民への職務質問、所持品検査なども厳しく行われている。

一般市民も、「過激派は何をやられても当然」と思い、監視カメラも「安全のためには必要」と思ってきている。警察の「ゼロ・トレランス」をむしろ受け入れている。「市民に支持されてる」と思って、さらにこの警察のやり方はエスカレートしている。

この『法と民主主義』では、公安警察、交通警察、生活安全警察の「ゼロ・トレランス」について、書かれている。なかなか詳しいし警察のやり口にはゾッとする。清水雅彦、内田雅敏、白川勝彦などが書いている。私も長い原稿を書いた。そのタイトルはこうだ。

〈公安警察による「ゼロ・トレランス」　＝事件の張本人、それが公安警察＝〉

(2) 6月26日（火）昼取材。夜6時半から四谷のスクワール麹町。社民党の集会に出る。

〈上原ひろ子と国会をかえよう会。結成総会＆パーティ〉

上原さんは夏の参院選に出る。今年の春までは国立市の市長をやっていた。国旗・国歌問題では右翼の街宣車が60台も抗議に来たという。「大変でしたね。すみませんでした」と謝った。僕は国立に行ってないけど、右翼としての〈原罪〉だ。

挨拶させられたので、「私は今は左翼といわれてます。実は“かくれ社民党”で、土井さんのテレホンカードを大切に持ってます」と言って皆に見せたら受けた。それに生まれは福島で、それ以来ずっと銀行は「（福島）みずほ銀行」だ。



これが私のお宝。「土井さんテレカ」です

ニューヨークでベアテさん達と憲法の話をしてきたことを話した。又、今、自民がやろうとしている「アメリカの傭兵化」「言論、表現、出版の自由への制限・弾圧」といった改憲には反対だといった。憲法は見直すべきだと思うが、今のやり方には反対だ。「自由のない自主憲法」よりは「自由のある占領憲法」の方がまだましだ。「社民党には頑張ってほしい。だから、今回だけは私は社民党に投票する」、なんて言っちゃった。福島みずほさん、保阪展人さん、石坂啓さん、斉藤貴男さんたちに会った。


社民党の上原ひろ子さん（左）と。（6月26日）

(3) 6月27日（水）2：40p.m.からジャナ専の授業。5時半から若松孝二監督「実録・連合赤軍」の試写会。安田生命ホールで。立ち見が出るほどの満員。3時間5分。でも全く長く感じない。凄い迫力だった。これは日本中に衝撃を与えるだろう。来年の2月から公開だ。半年も前に見ることが出来、幸せだ。感激した。終わって、ロフトで「完成パーティ」。森恒夫、永田洋子、吉野雅邦などを演った役者と話をした。実にいい。感動的な大作だ。これは歴史に残る傑作だと思う。平岡正明、船戸与一さんらにも会った。嬉しくて夜中の1時過ぎまで飲んで、私としては珍しい。若松監督とは『まとりた』で〈天皇新論〉について話したことがある。又、じっくり話してみたい。

(4) 6月28日（木）午前中、取材。3時から河合塾コスモ。6時半から、東京しごとセンター。「監視社会を超えて＝安全・安心まちづくりの批判的検討」と題する集会。清水雅彦さんの『治安政策としての「安全・安心まちづくり」』（社会評論社）の出版記念会を兼ねた集会だ。

第1部は斉藤貴男さんの記念講演。

第2部は「トーク・セッション」。戦争国家、差別社会、非国民の時代に立ち向かうために。私も「非国民」の一人として発言した。終わって打ち上げに行った。



『季刊教育法』（6月号・エイデル研究会）で斉藤貴男さんと対談した

(5) 6月29日（金）午後1時から、塩見孝也、前之園紀男、木村三浩氏らと打ち合わせ。7月の集会について。「連赤の映画では格好よかったね」と塩見さんに言った。これは本心です。又、「連赤について23年前は凄いことを言ってましたね」と前之園さんに言った。

『季刊・教育法』（153号・エイデル研究所）が発売。特集は〈「徳育」充実は何を意味するか〉。その中で、斉藤貴男さんと僕の対談が載っている。

〈道徳教育と新自由主義
＝教育再生会議第二次報告を契機に＝〉

(6) 6月30日（土）筆坂秀世さんと私の対談「私たち日本共産党の味方です」（情報センター出版）が増刷になった。売れてるようだ。ありがたい。

(7) 7月1日（日）あの渡辺文樹監督の衝撃の映画「御巣鷹山」を見た。凄い映画だった。

【お知らせ】

(1) 7月1日（日）発売の月刊「論座」（8月号・朝日新聞社）に私の原稿とインタビューが載ってます。

まず、1961年の「風流夢譚」事件の時、中央公論社の現場にいた粕谷一希さんに僕がインタビューしました。なぜあんな危ない小説を載せたのか。中央公論にそれだけの覚悟があったのか。事件の教訓は何か。等々について聞きました。当時の右翼の攻撃の様子。その対応など凄い話ばかりでした。8ページにわたるロング・インタビューです。

もう一つは、僕が原稿を書きました。

〈「不敬だ」といって芸術を葬り去っていいのか…〉
＝天皇に異常に熱くなる右翼の迷い＝〉

です。

「中央公論」「噂の眞相」「新雑誌X」、そして大浦信行さんの絵画…など、右翼の攻撃にさらされた事件について紹介し、体験的に書きました。天皇表現は全てタブーなのか。パロディはどこまで許されるのか。などについて迷い、悩みながら書いてます。6ページです。

(2) 7月18日（木）7：00ロフトプラスワン。「闘う居酒屋」。「出演は森達也、斉藤貴男、その他」と出ています。「その他」は私です。

(3) 7月20日（金）7時、ネーキッドロフト。針谷大輔氏のイベント。私も出ます。又、同じ時間に中野ゼロホールで田原総一朗さん司会の「時局大激論集会」があるそうです。詳細は次週に。

(4) 8月6日（月）7時半から、ロフトプラスワン「じっとしてたって何も始まらない。大地を揺るがせ。vol1」と銘打ったイベント。スペシャルゲストは植垣康博さん（元連合赤軍兵士）、伊藤乾さん（東大助教授）、そして私。絵画出演は菊田麻衣さん。

(5) ９月６日（木）～９日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。

(6) ９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさ んが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。４時から５時30分。さらに、「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」ノなど。午前10時半から６時まで。映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(7) ７月１日発売の『諸君』（８月号）に入江吉正さんが〈激増サブカルウヨクの「愛国」はホンモノか」を書いてます。なかなか力の入った、面白いレポートです。私も取材され、コメントしています〉

HOME

今週の主張

バックナンバー

天皇表現とタブー

今週の主張7月9日

(1)46年前の「風流夢譚」事件。これが「恐怖の原点」だ



「論座」（８月号）

『論座』（８月号・朝日新聞社）の特集「天皇表現とタブー」は勇気がある。実にいい企画だ。そこに私も加えてもらい光栄だ。嬉しかった。

1961年の「風流夢譚」事件について、当時、「中央公論」社にいた粕谷一希さんに僕が話を聞いた。僕自身が体験し、悩み、迷い、苦しんできた「天皇表現とテロ」についても考えた。さらに平沢剛さん（映画研究）の「日本映画は天皇をどう描いてきたか」という原稿がある。全体で22ページの特集だ。

平沢さんは実に丹念にこの問題を紹介し、問題点を衝いてゆく。映画の中でこれだけ天皇が描かれていたのか。知らなかった。これはまさに「格闘の歴史」だという。読んで、勉強になった。

さて、粕谷さんの話だ。「論座」の編集部、カメラマンと共に、６月４日（月）、粕谷さんのご自宅にお伺いした。閑静な所で、ちょっと時間を忘れる。時代を忘れる。でも、ホテルの会議室よりも、ずっとよかった。だって1961年の〈事件〉について聞いているのだ。今から46年前の事件だ。半世紀前のことだ。でも粕谷さんは、つい昨日のように話してくれる。それだけ鮮明に覚えている事件なのだ。粕谷さんの家は、木造の広い家だ。かなり前からある。静かだ。まるで46年前に戻ったような雰囲気の中で話を聞いた。

あの事件については僕もずっと考えていた。又、「天皇表現とタブー」を考える時、いわば原点というか、スタートラインにあった事件だと思う。何かあると、「やめとこう。ほら、風流夢譚事件もあったことだし」と今も言われる。天皇問題を取り上げるのはこわい。右翼が殺しにくる。そういう〈恐怖〉があるのだ。その根底にあるのは1961年の「風流夢譚」事件だ。

しかし、この事件について、誰も突っ込んだ議論はしない。どうしたら言論テロをなくせるのか。何が問題なのか。果たしてあの事件を教訓に出来たのか。…等々について誰も書かない。だから僕は、当事者に直に話を聞いてみたいと思っていた。しかし実現しなかった。46年たって、やっと実現したのだ。

そうか。いくら僕が客観的に冷静に〈事件〉の話を聞きたいと思っても、他の人はそうは思わないのか。と、今、気がついた。右翼の「原罪」だよ。「風流夢譚」のことを聞きたいと言ったら、「右翼が又、抗議に来たのか」と思う。又、「言質をとられて後で街宣車がドッと来

る」…。そういう風に思うのかもしれない。「当時の関係者に会いたい」と、いろんな人に頼んでたが、ダメだった。会ってくれる人もいない。インタビューさせてくれる媒体もなかった。
そして、やっとですよ。46年たって、出来た。随分と長い道のりだった。

1960～61年は激動の年だった。〈60年安保〉の年で、20万人の労働者、学生のデモが国会を取り囲んだ。そのデモの途中、東大生の樺美智子さんが死亡した。警官隊に殺されたのだ、と「虐殺抗議デモ」が行われた。60年10月には、社会党の浅沼稲次郎委員長が山口二矢（17才）に刺殺される。その直後、「中央公論」に深沢七郎の「風流夢譚」が載る。「夢譚（むたん）」と言うように「夢の中」の話だ。ブラックユーモアだ。夢の中で、革命が起こり、皇族が処刑される。そして天皇、皇后、皇太子…が処刑される。それも実名で書かれている。
深沢は「ブラックユーモア」だと思ったのだ。あるいは革命恐怖小説なのかもしれない。しかし、右翼はそうは思わなかった。これは近い将来の話だと思った。そうはさせじと思った。そして1961年２月１日に、小森一孝（17才）が中央公論社の嶋中社長宅を襲った。そしてお手伝いさんを殺し、奥さんに重傷を負わせた。これが「風流夢譚事件」だ。あるいは「嶋中事件」と呼ばれているものだ。
山口二矢、小森一孝は二人とも17才だった。そして二人とも愛国党にいた少年だった。ただ、愛国党を飛び出した直後に事件を起こした。
この事件が起きた時、僕も17才だった。高校二年生だった。仙台のミッションスクールに通い、讃美歌を歌い、聖書を読む毎日だった。ただ、鬱屈した毎日だった。そんな時、同い年の二人のテロリストに出会った。勿論、テレビの報道で知っただけだが…。


若松孝二監督（左）と

同じ年で、ここまで考え、思いつめている人間がいる。そのことにショックを受けた。テロに賛同する気はなかった。自分とは全く無縁のことだ。でも、それを同じ17才がやった。どう考えていいのか分からなかった。その衝撃が後に右翼になる契機になったのだろう。「なぜ？」「なぜ？」と心の中で問いつめていったのだ。

二つのテロといいながら、人々の反応は全く違っていた。右翼の反応も違う。たとえば山口二矢は「烈士」だ。「山口神社をつくろう！」という運動さえあった。又、山口二矢は決行後、逮捕され、直後、自決している。その見事さからも神格化されている。右翼の中では三島と共に、神様だ。「いや、三島よりも山口二矢の方が立派だ」という人もいる。左翼のはずの若松孝二監督もそう言っている。監督は今年、「実録・連合赤軍」を撮ったが、次は「山口二矢」をやりたいという。

(2)あんな危ない小説をなぜ載せたのか？誰が？

山口二矢が浅沼委員長を刺殺したのは日比谷公会堂だった。その後、ここで浅沼さんの社会党葬は行われている。しかし驚いたことに同じ日比谷公会堂で山口二矢の追悼祭も行われ、多くの人がつめかけたのだ。日比谷公会堂もよく貸したものだと驚く。右翼だけでなく、一般の人も多く集まった。それだけ「17才のテロリスト」の鮮烈な行為に衝撃を受けたのだ。沢木耕太郎は『テロルの決算』（新潮文庫）を書いている。
右翼の青年に与えた影響も大きかった。「俺たちもこうでなくては…」「山口二矢に続こう」と皆、思った。

ところで、この３ヶ月後に起こった小森一孝の事件だ。同じテロなのにこれに対し、評価し、支持する右翼の人はいない。「敵を倒すのならともかく、無関係な女性を殺すなんて右翼の風上にもおけない」と皆、否定的なのだ。

愛国党の赤尾敏さんに言わせれば、これは〈誤爆〉なのだ。小森は極度の近眼だ。度の強い眼鏡をかけていた。興奮状態の中で眼鏡を落とした。全く見えない。動いて自分に近づく影がある。警察だと思って、とっさに刺した。ところがお手伝いさんと奥さんだった。

だから彼は〈烈士〉にはなれなかった。いや、今も生きている。名前を変え、どこかに生きているはずだ。しかし、誰も知らない。右翼関係者も知らない。ぜひ会って話を聞いてみたいと思うが無理だろう。

彼だって、もし、嶋中社長を殺していたら、〈英雄〉になっていた。少なくとも右翼業界では〈英雄〉になった。でも、〈誤爆〉のために、全く評価されない。誰も小説に書こうともしない。見沢知廉氏が生きていたら、書いたかもしれないが、残念だ。

しかし。と、ここで思う。その後の影響力の点では、むしろ小森の方が大きかったのではないか。だって、天皇について書こうとする時、又、雑誌、本を出そうとする時、必ずこの事件が思い出される。「いや、まずいよ天皇問題は。嶋中事件のこともあるし…」と。「こんなことをやって、右翼に襲われたら大変だ」と。

もう46年も昔のことだ。でも、「右翼は恐い」という原点になっているのがこの事件だ。又、「天皇表現のタブー」になっているのがこの事件だ。〈怖さの原点〉なのだ。にもかかわらず（いや、「だからこそ」と言うべきか）、まともに取り上げられなかった。真剣に考えられなかった。話し合われなかった。余りにリスクが大きいのだ。「言論の自由」にかかわる重要な問題だ。しかし、やらない。かかわりたくないのだ、皆。遠くから、安全圏から、「言論の自由を守れ！」と言うだけだ。

僕にとってもこの事件は「巨大な闇」だった。あの当時の左翼の勢いからすると、中央公論は覚悟を決めてやったのだと思った。「右翼なんか怖くない。来るなら来てみろ」と思ったのか。国会を20万人も取り囲む「人民の力」があるんだ。反天皇、天皇処刑の小説だって載せられる。「やれ！」と思ったんだろう。

でも、その直前に山口二矢のテロがあった。「こりゃヤバイ」と思った人はいないのか。それに、「風流夢譚」は、今読んでみても、ゾゾーッとする小説だ。「これは危ない」「やめるべきだ」と思った人はいなかったのか。それを当事者から聞いてみたかった。そして、46年たって、やっと実現したのだ。当事者とのインタビューが。

それともう一つ、三島由紀夫のからみがある。この小説が出た時、三島は推薦した。元々、深沢を高く買っていたし、文壇に登場させたのは三島だ。「風流夢譚」を読んで、面白いと思ったのだ。純粋にブラックユーモアだと思い、〈文学〉だと思った。だから、推薦した。「何なら俺の『憂国』も一緒に載せたらバランスがとれていいだろう」とも言った。

(3)「不敬だ！」と右翼は攻撃したが、三島は〈文学〉だと評価し、支持した


「論座」（８月号）より

右翼は「不敬だ！」と騒いだ。しかし三島は、「不敬」とは思わなかった。あるいは「たとえ不敬でも文学として優れている」と思ったのかもしれない。ともかく、推薦した。ところが三島の「見込み」は外れた。たとえ三島の『憂国』を同じ号に載せたとしても何ら「防禦壁」にはならなかったろう。むしろ、三島共々やられただろう。

だって、嶋中社長宅が攻撃され、その後、右翼が三島の家に抗議に行ったのだ。三島が深沢作品を推薦した、という話が流れたからだ。その為、地元の警察官が数人、三島宅に常駐した。かなり長い間、警察官は三島宅をガードし、三島が外出する時もガードした。

「憂国」の小説や映画だって、たとえ一緒に載っても「防禦壁」にならなかった、と言った。その直後、「憂国」は別の雑誌に発表されたが、作品としても右翼の不評を買った。「こんなのはただのエロであり、グロテスクなだけだ！」と批判された。又、「英霊の声」が出た時は、「何が英霊だ！こんなのは怨霊の声だ！」と右翼は攻撃した。

三島は攻撃され、右翼の怖さ、卑怯さ、下らなさも知った。だからといって、「右翼憎し」で左翼に走りはしない。「こんな奴らは右翼じゃない。俺の方こそが愛国者だ。右翼だ！」と思ったことだろう。その時の鬱憤、悔しさが「楯の会」を作る時の一つの要因になっていたと思う。

三島は「風流夢譚」を〈文学〉として認め、評価した。しかし、今読み返してみても、僕はそこまで言う気はない。言えない。しかし、三島が断定するのだから、（僕らは理解できないが）本当は凄い作品で、立派な文学かもしれない。そんなことを感じる。

又、かつて、「不敬だ！」「許せない！」といって攻撃された作品にも〈文学〉や〈芸術〉はあったのかもしれない。下らない作品は多かったと思うし、「便所の落書き」のようなものも多かったと思う。しかし、21年前、富山県立近代美術館に大浦信行さんの「遠近を抱えて」が展示された時は、全国の右翼が富山に行って抗議行動をした。昭和天皇を描いたコラージュだったからだ。

しかし、今は、その作品はいろんな媒体で紹介されている。今回の『論座』にも紹介されている。発表した当時は理解されなくても、時間が経ち、〈芸術〉として理解され出したのだろう。ピカソの「ゲルニカ」のようなものかもしれない。そうした自分の「迷い」というか「疑問」のようなものを「論座」には書いた。粕谷さんへのインタビューとは別に書いた。

「不敬だ」といって芸術を葬り去っていいのか
＝天皇に異常に熱くなる右翼の迷い＝

という原稿だ。まだまだ論争はあるだろう。又、これは〈芸術〉なのかどうか。そうした論議をする〈場〉は必要だと思う。それもなしに、全ては「問答無用」で葬り去っていいわけはない。又、天皇を扱った映画、芝居、コメディについてもそうだ。右翼の抗議行動だけが問題にされるが、「天皇表現」の側にも問題はあるだろう。どんなものでも構わない。「表現の自由だ」「言論の自由だ」


粕谷一希氏（左）にインタビューす

る鈴木

と言っていいのか。その点も考えた。
　粕谷一希さんは、あの「風流夢譚」は掲載すべきでなかった、という。これは驚きだった。当事者が言うだけに説得力がある。
〈天皇制は、筋を通した「論説」で主張すべきだった〉

　と言う。これは決して敗北主義ではない。深沢七郎は芸術家だから、表現は何でもありだ。しかし、「中央公論」がそれを載せるかどうかを決めるにあたって、「配慮」が足りなかったと言う。
　普通の人なら名誉棄損なのに、皇室の人なら何を言われてもいいのか。又、国民の気持ちもある。それらを考えないで載せてしまった。では、誰が事前に読み、誰がゴーサインを出したのか。そのことについても詳しく聞いた。読んでほしい。46年目にして語られる「貴重な証言」だと思う。

(4)「風流夢譚」事件のその後。さらに奇妙な事件が…

　〈この事件〉は実は、今も続いている。今だって、天皇を表現するのは怖い。ソクーロフさんの映画「太陽」を撮る時も、日本の学者、評論家は皆、反対した。「嶋中事件のようになる」「右翼が襲ってくる」「命はないよ」と皆、ソクーロフさんに言った。「賛成したのは鈴木さん一人でしたよ」とソクーロフさんは言っていた。
　そうだ。「風流夢譚」事件直後にも中央公論社は「過激な反応」をした。当時、中央公論社は『思想の科学』の発行を引き受けていた。そこでは「天皇制特集号」を作った。反対論だけではなく、保守派の竹山道雄まで書いた。又、右翼の葦津珍彦さんも書いた。出ていたら右翼だって評価しただろう。
　ところが中央公論社は、「これは危ない」と思った。〈天皇〉とつくものは全て危ないと思った。内容のことなんて全く分からない製作部長が、勝手に断裁してしまった。「こんなのが世の中に出たら大変だ」と恐怖にかられて断裁にしたのだ。ひどい話だ。これだって「言論テロ」だろう。

　さらにこの『思想の科学』事件には、もう一つ後日談がある。断裁されたはずの『思想の科学』が公安調査庁係官を通じ、右翼の手に渡され、葦津先生の論文だけが大東塾の『不二』に掲載されたのだ。葦津先生の大論文まで断裁されるのは勿体ないと思ったのだろう。それに、公安調査庁がからんでいるというのが、「今日的」だ。堀幸雄の『右翼事典』（柏書房）にこの事件は、詳しく書かれている。それによると…。

「思想の科学」は1962年新年号に「天皇制特集号」を企画し、1961年12月18日に校了した。ところが、12月21日、発売中止を決めた。（粕谷さんは製作部長が独断で断裁したと言う）。「右翼を怖れて言論が沈黙したのである。これが第一の事件である」

　さらに続ける。

〈第二は廃刊に当って同号は二部だけ思想の科学研究会が受取り保存し、他はすべて断裁されたはずだったのが、中央公論社側から公安調査庁の保安係根本係官の手を通って三浦義一にわたり、特集号の中の葦津珍彦の論文「国民統合の象徴--神道思想家の天皇制観」が大東塾の不二歌道会の機関誌『不二』（新春号）にサブタイトルを変えて発表されたことである。研究会側の抗議

で中央公論社は二月三日、謝罪文を同会に送った。研究会側では“権力に言論を売った”として中央公論社を厳しく批判、竹内好ら幾人かが以後『中央公論』への執筆を拒否した〉

朝総連の会館をめぐる事件にしろ、公安調査庁は昔から脇が甘いのだ。しかし、なんとしても、葦津先生の大論文は発表すべきだと思ったのだ。じゃ、この時点で、「思想の科学」の「天皇制特集号」そのものを出せばよかった。彼らも、勝手に発表したらよかった。右翼だって、支持したろうよ。天皇制をめぐっての誌上での「左右激突」が行われたのだから。「権力に言論を売った」という批判にしろ、「執筆拒否」という対応にせよ、「思想の科学」側もだらしないと思う。

ということも、今だから言えることかもしれないが。ともかく、今回は『論座』に貴重な場を提供してもらい、ありがたかった。この問題は、これからも、じつくりと考えていきたい。それを読んで、僕に対する批判もあるだろう。叱ってほしい。「お前は甘い」「不敬な落書きは消すしかない」…という人もいるだろう。その上で又、考えてみたい。

又、この『論座』には、映画「Tokko（特攻）」が紹介されていた。「あなたはカミカゼを知っていますか」という題で、監督のリサ・モリモトさん、脚本のリンダ・ボーグランドさんが取材に応じていた。もうすぐ公開になる。ぜひ見てほしい。

【だいありー】



左から三上治さん、平岡正明さん、鈴木

(1)７月１日（日）日本青年社元会長の衛藤豊久さんのお宅に伺う。衛藤さんは70才で亡くなられ、６月17日（日）に告別式が行われた。７月１日、木村三浩一水会代表と共に、衛藤さん宅を訪ね、お線香を上げさせてもらった。衛藤さんと知り合ったのは僕が学生の時だ。だから40年前だ。それ以来、ずっとお世話になった。ご本人はほとんどマスコミに出ることはなかったが、野村秋介さんや僕、木村氏などが出ることには賛成し、そうした場を作ってくれた。野村さんが「風の会」を立ち上げて選挙に出たのも、仕掛けたのは衛藤さんだった。行動的な人だったし、日本の右翼運動を第一線で引っぱっていった人だ。又、とても面倒見のいい人で、僕らも本当にお世話になった。奥さんと、そんな話をした。

午後１時にお伺いし、３時過ぎにおいとました。芝浦だったので、田町まで歩いて帰る。途中「ＨＯＴＥＬ　ＪＡＬシティ田町」が見える。「ここで前に、川内康範さん（作家）に会ったんですよ」と木村氏。エッ？そうだっけ？記憶がない。会ったのは憶えているが、ここだったのかな。「そうですよ。上京する時は、ここを常宿にしてるんです」と言う。「もしかしたら、今日もいるかもしれませんよ」と言う。マサカ。そんな映画のような出会いはないさ。と思っていたら、「あっ、いました！」



ホテルの庭で、コーヒーを飲んでいる。「オー！」と川内さんもビックリしている。中に招かれ、しばらく話をした。川内さんには戦後日本の知られざる政治の話をいろいろと聞く。別れてから田町の駅前で木村氏とソバを食べる。枝豆も食べた。川内さんと会ったのには驚いた。それも、二人で川内さんの話をしてた時だったし。「うーん、偶然ですね」と言ったら、木村氏は「偶然なんてありま

せん。神慮です」と言う。私よりも宗教的だ。

左から木村三浩氏、川内康範氏（作家）、鈴木

それから、私は代々木八幡に行った。渡辺文樹監督の映画を見るためだ。これも〈神慮〉だ。神のはからいだ。この２日前の６月29日（金）、一水会事務所に行った。塩見孝也、前之園紀男、木村三浩氏に呼ばれたのだ。７月20日（金）に中野ゼロホールで「護憲か改憲か」をめぐる大集会をやる。その打ち合わせをやるので来いという。「忙しいからヤダ」と言ったが無理矢理、呼びつけられた。でも、それがよかったんですな。 結果的には。



渡辺文樹監督（右）と

帰りに、馬場の駅のそばで奇妙なポスターを見た。映画の宣伝だ。「御巣鷹山」と書かれている。あっ、昔、日航機が墜落した所だな、と思った。ところが、「日本国家の犯罪を問う！」と書かれている。実は、自衛隊が撃ち落したのだ。という話らしい。そして、「渡辺文樹監督作品」と書かれている。オッ！これは見に行かなくちゃと思ったのだ。

監督は「ドキュメンタリー映画の鬼」だ。今まで、「家庭教師」「ザザンボ」「罵詈雑言」といった凄まじい映画を撮り、社会を騒がせてきた。６年ほど前、「腹腹時計」という映画を作り、右翼からも狙われた。何と天皇暗殺の映画なのだ。上映する会場も次々断られ、その交渉の中で逮捕された。あの時は徳島まで面会に行ったな、と思い出した。そのことは『夕刻のコペルニクス』にも書いた。

それでさっそく、見に行った。代々木八幡の区民会館だった。監督自らが映写技師をやり、観客をアジる。相変わらずだ。パートナーの女性が受付けをしている。かわいい女の子がいる。監督のお子さんのようだ。映画の中にもちゃんと出ている。「今回は東京に２千枚、ポスターを貼りました」と言う。それだけで客を集めている。東京で数日間いる。さらに又、地方に行く。車に機材、家族、犬を乗せて、全国を回る。大変だ。

告知手段はポスターだけなのに、会場は満員。映画も衝撃的な内容だった。「これは事実ですよ」と監督は断言する。終わって、監督と食事に行く。おごってもらった。申し訳ない。



船戸与一さん（作家）（右）と

(2) ７月２日（月）12：00汐留の高層ビルの一室で打ち合わせ。会議なのか、国際的謀議なのか分からん。渡辺文樹監督の世界のようだ。３時から、お茶の水の「山の上ホテル」。雑誌の対談。「国家と公安」がテーマ。厳しい対談になった。これも渡辺監督の世界のようだ。夜、新宿で、塩見孝也、前之園紀男、木村三浩氏と私で又もや会議。

映画「実録・連合赤軍」はよかったですね、と塩見さんに言ったら、「うん、あれはいい」と大満足。関係者は皆、絶賛している。あそこまで、真面目に歴史として撮ったら、誰も文句をつけられない。試写会後の打ち上げの時も、平岡正明さん（作家）も、船戸与一さん（作家）も、「これはいい。歴史に残る！」と言っていた。船戸さんとは僕は前に対談をやり、それが船戸さんの対談集に入っている。実は船戸さんは「ゴルゴ13」の原作もやっていた。他にも著名な作家が、原作を書いている。だからストーリーはしっかりしてるし、いまだに人気が衰えないのだ。

(3) ７月３日（火）１時。佐高信さんと対談。佐高さんは最近、『西郷隆盛伝説』（角川学芸出版）という本を出した。非常にいい本だ。実は、山形県酒田市にも南州神社がある。なぜなの

か。賊軍とされた庄内。そこに官軍だった西郷の神社がある。西南の役には、庄内から参加して戦死した若者もいた。一方、会津からは政府軍に志願し、「戊辰戦争の敵！」と言って西郷軍に斬りかかった人々もいた。

又、西郷は「右翼のルーツ」でもある。いや、自由民権運動も西郷から起こっているから、「左翼のルーツ」でもある。そんな西郷論を佐高さんと二人で語り合った。実に楽しい対談だったし、教えられることが多かった。

午後６時から横浜に行き、ＪＲ東労組20周年記念パーティ。パシフィコ横浜で。もの凄い人だった。２千人以上いるという。松崎明さんは「週刊現代」に「革マルだ」「テロリストだ」と25週にわたって書かれた。しかし、全く揺るがない。ＪＲ東労組も揺るがない。たいしたものだ。これだけ力を持ち活躍している労組はない。権力も目障りなのだろう。弾圧に負けずに頑張ってほしい。「ＨＰのニューヨークレポートはよかったね」と松崎さんに言われた。終わって、「飲みに行こう」と誘われて11時頃まで飲んだ。

この会場で、三浦和義さんに会った。「大変でしたね」と言ったら、「あれは冤罪ですよ」と言う。「コンビニで万引きした」と、ビデオがテレビに流されたが、「編集したビデオ」で、何も盗ってはいないという。そのことを書いた新聞を訴えてるし、記事を取り消した新聞社もある。コンビニも、ビデオを編集してテレビ局に渡したことを謝罪した、という。これから裁判が始まる。全く知らなかったので、驚いた。しかし、テレビも新聞も、「その後」のことを報じてない。三浦さんに話を聞いてよかった。



重信房子さんのお父さんに話を聞いた（1974年）

(4)７月４日（水）午前９時、東京拘置所に行く。元日本赤軍の重信房子さんに面会する。感動した。重信さんはずっと接見禁止だった。６月26日（火）、社民党の上原ひろ子さんのパーティに出た時、大谷恭子弁護士に会ったら、「今、面会出来るようになったから行って下さいよ」と言われたのだ。僕なんかに声をかけてもらい嬉しかった。重信さんに会ったら、何と『論座』を持っている。別に僕が送ったわけじゃない。「今、読んだばかりです。私たちと考えてることは違いませんね」と言う。そして、お父さんの話になった。

お父さんの重信末夫さんは実は右翼の闘士で、血盟団事件の関係者だ。僕は今から33年前の1974年３月に、取材に行き会ったことがある。その時の話をした。「その時から鈴木さんの名前は覚えてます。父から手紙が来て」と言う。「世のため、正義のために闘う」という考えは父から教えられた、という。そんな話をしてたら、アッという間に時間が経ってしまった。

午後はジャナ専の授業。終わって出版社の人と打ち合わせ。７時には疲れ果てて寝た。夜中の２時に起きて、朝まで原稿を書く。何か受験生のような生活だ。

(5)７月５日（木）河合塾コスモの授業。

(6)７月６日（金）取材。図書館。ロフトプラスワンで出している月刊『ルーフトップ』（７月号）で、「ロフトプラスワン12周年インタビュー」として私が出ていた。６月22日（金）、高田馬場のサンルートホテルで喋ったものだ。

【お知らせ】

(1) 7月18日（火）7：00p.m.　ロフトプラスワン「闘う居酒屋」。ゲストは森達也、斉藤貴男、そして附録で私。と思ったら雨宮さん初め超豪華なゲストが一杯出るんだ。

(2) 7月20日（金）7時、ネーキッドロフト。針谷大輔氏のイベント。

(3) 7月20日（金）6時、中野ゼロホール。「護憲か改憲か」大討論会。司会・田原総一朗。

(4) 8月6日（月）7時半から、ロフトプラスワン「じっとしてたって何も始まらない。大地を揺るがせ。vol1」と銘打ったイベント。スペシャルゲストは植垣康博さん（元連合赤軍兵士）、伊藤乾さん（東大助教授）、そして私。絵画出演は菊田麻衣さん。

(5) 9月6日（木）～9日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。

(6) 9月29日（土）「9条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。2時半から4時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさ んが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。4時から5時30分。さらに、「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から6時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

HOME

今週の主張

バックナンバー

マルクスはステータスだった

今週の主張7月16日

(1)今村仁司さん編集の『マルクス』に書かせてもらった



今村仁司編『マルクス』（作品社）

２ヶ月ほど前の事だ。関口和広君から電話があった。「今村仁司先生が亡くなりましたね」と言う。あっ、新聞に出てたなと思い出した。今村仁司（いまむら・ひとし）さんは、マルクス研究やフランス思想研究で知られる偉い学者だ。偉い学者だから相当年配の人だと思っていた。「いくつだったの？」と関口君に聞いたら、

「1942年生まれだから65才ですよ。鈴木さんの一才上ですよ」
えっ、そんなに若かったのか。
「えっ、そんな事も知らなかったんですか。鈴木さんは今村先生と知り合いだったんでしょう」
「いや」
「だって、一緒に本を出してるじゃないですか」

そこまで言われて思い出した。そうだ、本を出してるよ。いや、今村仁司さんが編集した「思想読本・知の攻略」の第２巻『マルクス』に原稿を頼まれて書いたのだ。2001年５月10日、作品社から発行されている。６年前だ。

その時は、電話をもらって原稿を頼まれた。『マルクス』の特集に僕なんか書いていいんですか？と戸惑った。「だって、学生時代は右翼学生もマルクスを読んでたし、マルクスはステータスだった」って書いてたでしょう、と言われた。確かにそんな事を、どこかに書いたな。「その辺のところを書いて下さい」と言う。それで書いた。そして、「おもしろかったです」と電話をもらった。どちらかが今村さんだったと思う。でも、会ってはいない。と思う。それともどこかで会ってんのかなー。頭がボケてるから思い出せんがな。

「それより、関口君はどうして今村さんを知ってんの？」
「僕の大学の先生です。授業を受けたんです」

そうか。関口君は脚本家を目指し、いろんな仕事をしていた。郵便局、ソバ屋、宅配便…と。その中で、東京経済大学にも通い勉強していた。大したものだ。そこで今村仁司さんや、色川大吉さんに習ったという。だから、今村さんが編集した『マルクス』も読んでたのか。

今村さんの新聞記事を探した。５月10日の新聞に、こう出ている。

〈フランス現代思想の研究で知られる東京経済大学教授の今村仁司さんが５日、死去した。65歳

だった。葬儀は近親者で済ませた。

京都大学大学院修了。マルクス経済学者として出発後、アルチュセールやボードリヤールやフランス現代思想家に関する著作で80年代の現代思想ブームの一翼を担った。『労働のイデオロギー』『歴史と認識』などの著書がある〉



今村仁司さん

会って、いろいろと教えて頂きたかった。残念だ。今、手元に今村さんの編集した『マルクス』がある。実にいい本だ。今村さんは巻頭で二本の対談をしている。三原憲一さんと「いまマルクスの可能性を問う」。三島雅士さんと「20世紀現象としてのマルクス主義」だ。

さらに、「マルクス思想のキーワード」「主要著作完全ガイド」「マルクスと現代思想」などが付いている。これ一冊で、マルクスのことが全て分かる。そして、マルクス主義者ではない人々、毛色の変わった人々によるマルクスに関する「エッセイ」が収められている。上野千鶴子、鎌田慧、藤本義一、久間十義、三木卓、そして僕だ。こういう所に書かしてもらえるなんて光栄だと思った。

よし、せっかくだから、僕のところだけでも紹介しよう。（さらに読みたい人は作品社で買ってほしい。2000円だが、その価値はあるし、実にいい本だ）

マルクスはステータスだった 鈴木邦男



『マルクス』（作品社）より

あの頃、早大構内で毎日、全共闘の諸君と論争し、乱闘していた。もう三十五年も前だ。大学を守り、日本を革命の危機から守るんだと悲壮な決意をしていた。しかし彼らには「社会主義は歴史的必然だ。それに逆らうお前らは反動で右翼だ」と決めつけられた。「もし君らが政権を取ったらソ連のように粛清するのか」と聞いた。大口昭彦（早大全共闘議長、現在弁護士）は言った。「ソ連は間違ったマルクス主義だ。我々は君らを殺さない。包摂するんだ」。「本来のマルクス主義は人間解放の哲学だ」という。「包摂」もマルクスが言ったのか。分からない言葉だ。包みこむんだと言う。でも「粛清」だって本来はきれいにすることなのに、「殺す」ことになった。こいつらは信用できないと思った。

ただ、アジ演説では偶にいいことも言っていた。「我々は疎外されている。人間として扱われてない。産業からは“人間”ではなく、“部品”として我々は要求されているだけだ」「だから産学協同路線に反対するのだ。学問の自由を守れ！」……と。これには感動した。これもマルクスが言っているのか。だったら読む必要があるなと思った。玉沢徳一郎さん（現衆議院議員）もＯＢとして我々右派学生を応援に来た。いかにマルクス主義が間違っているかを説いていた。じゃあ原文で読んでみようと思った。彼らをあそこまで駆りたてる〈元兇〉を知ってみたいと思った。又、右派学生の中にもマルクスやレーニンの全集を揃えて読んでいる奴がいた。「まず敵を知らなければ闘えないよ。そうだろう」と言われた。それに、学生の日常会話にもマルクス、レーニン、トロッキー、吉本隆明などが出てくる。チクショウ、読まなくちゃつい

ていけないなと思った。今なら、トレンディドラマを見ないと友人との会話についていけないと焦る。それと同じ気持ちだった。だから、意地と見栄と義務でマルクスを読んだ。

又、そんな不純な動機でも手軽に読めるほどマルクスの著作はいっぱい出ていた。マルクスだけではない、いろんな〈思想全集〉が次から次へと出ていた。ともかく読んだ。読んで話せる仲間がいたし、闘う敵がいた。知的刺激があったのだ。今思い出しても、「世界の大思想」（河出書房）、「世界の名著」（中央公論社）、「世界思想教養全集」（河出書房）、そして少し後だが「人類の知的遺産」（講談社）などがあった。その全てを読んだ。月に一度ずつ出ているから知らない間に全巻読破していたのだ。その全てにマルクスは入っている。だから何度も読んだことになる。難しくてよく分からなかったが、「世界の名著」は訳も新しいし読みやすかった。うん、こうして労働者は搾取され、疎外は生まれるのか。弁証法とはこういうことか。剰余価値はこういうことかと、分かった気になった。

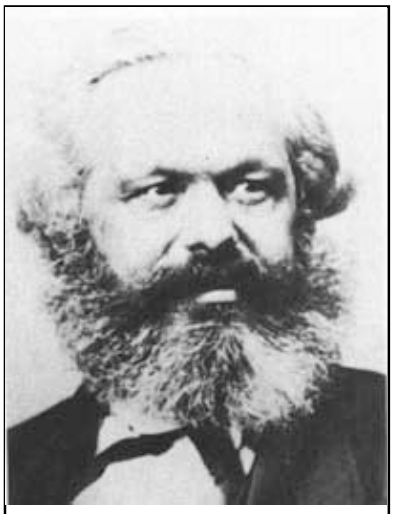
それに、『資本論』を初めて訳したのは国家社会主義者の高畠素之だというとを聞いていた。高畠の弟子だった津久井龍雄からは思想的なことを教わっていた。だから、俺たちの先輩が『資本論』を訳したんだと思った。右翼の大先輩ですら魅かれるものをマルクスは持っていたのだろう。

マルクスから始まって、レーニン、トロッキー、毛沢東、金日成の全集を読んだ。思想的なことはよく理解できなかったが、「変革の夢」や「運動論」に魅了された。「哲学者たちはこれまで世界をさまざまに解釈してきたにすぎない。だが必要なことは世界を変革することだ」というマルクスの言葉にはシビれた。極端に言うと、この言葉が「新右翼」を作った。マルクスは、彼以前の夢を見るだけの人々を空想的社会主義と批判した。彼らには運動論や変革の方法論がなかったからだ。右翼の世界だって同じだった。「右翼は一人一殺」「プランはいらない。捨石でいいんだ」といった感じで、〈運動論〉がなかった。だったら僕らも「マルクス主義者」だったのかもしれない。

事実、右派学生の間でマルクスはステータスだった。特に運動論においては他を黙らせる説得力があった。何せ、世界を変えてきた実績がある。「マルクスは、存在が意識を規定すると言った。だから……」「意識を持った人間がまず団結することだ」……と一知半解の言葉で喋り合った。レーニン、毛沢東の運動論もよく援用された。考えてみたら奇妙な現象だ。でも、よく闘い、よく学んだ。マルクスのおかげだ。

今、ソ連の崩壊以来社会主義やマルクスは人気がない。信用がない。だから、人間は自分の作った機械や金にこき使われ、人間性を失っている。コンピューターに酷使され、ありあまる〈情報〉に左右されている。人間疎外は今こそ極まっている。マルクスが人間解放の哲学ならば今こそ必要とされ、真価を試されるのではないか。と思い今、マルクスを読み直している。

(2)「心は尊皇。運動論はマルクス」だったんだ


カール・マルクス

これが６年前の私の原稿だ。うーん、段々と謎が解けてきた。学生時代、「運動論」がなかった僕らは、左翼の運動論に学んだ。人間をオルグし、学内にサークルをつくり、機関紙を作り、自治会選挙に出る。集会をやる。デモをやる…。それらも全て、左翼の「まね」からスタートした。

だって、それ以前の右翼には「運動論」が全くなかったからだ。「一人一殺だ！」「捨石（すていし）だ！」と叫んでいた。巨悪を倒して死ぬのが右翼だ。その時まで酒を飲んで「待機」していればいい。そんな理屈だった。「〈破壊〉だけでいい。建設案を考えるのは不純だ」と思われた。生きのびて〈建設〉に携わるなんて不純だし卑怯だと思われたのだ。

でも、僕たちは〈テロ〉をやる為に生まれてきたわけではない。〈思想〉を訴えるのが第一だ。「現代右翼」の僕らはそう考えた。かつての「運動論なき右翼」ではダメだと思った。学内で学生に訴えるのだ。そして左翼と闘うのだ。そうした場合、左翼と同じ土俵で闘わなくてはならない。そうしたら左翼の〈運動論〉を学ばなくてはならない。

ハッ！と今、気がついた。全共闘は黒船のようなものだったのか。それまでは、夷狄（外国人）が来たら打ち払え、で済んだ。鎖国をしていたんだし。ところが、黒船が来た。初めは〈攘夷〉を唱えるが、とても勝ち目はない。薩摩、長州では外国船と闘い惨敗した。しかたない。国を開くしかない。しかし、心まで売り渡すのではない。夷狄の軍備、知識を学び、取り入れ、日本を強固にする。そして本当の〈攘夷〉を実行する。そのための開国だ。そう思って開国をした。

学生時代の僕らも同じだった。「水戸学」や「国体論」では左翼と闘えない。「何いってんだ、アホ！」と学生にも馬鹿にされる。だから、左翼と同じ論法を使い、同じ運動論でやった。左翼と同じように、ガリ版でチラシを刷り、マイクでアジり（煽動し）、集会をやり、デモをやった。立て看板の作り方だって左翼のを見て研究して、作った。何から何まで左翼の「見よう見まね」だった。しかし、心は右翼だ。

〈でもその運動論はマルクスにならっていた。だったら僕らも「マルクス主義者」だったのかもしれない〉

凄いことを言う。「心は尊皇、運動論はマルクス」なのかもしれない。右翼の大先輩に聞いたことがある。右翼は常に正々堂々とやる。巨悪を殺し、自分も自決する。それでこそ我々の訴えることも分かってもらえる。策は弄さない。しかし、どうしても〈策〉を使う必要がある時もある。その時は、「楠公の心で、尊氏を行う」のだ。逆臣・足利尊氏の戦法にならっても、心が楠ならいいのではないか。その先生は、迷いながら僕らに言った。苦渋の選択なのだ。

しかし、僕らは苦渋も悩みもなく、左翼の運動論に簡単に飛びついた。まねた。早大でも、全国学協でも、生学連（生長の家学生部）でも。他の民族派の日学同、日本学生会議、楯の会だってそうだった。

生学連の話をしよう。生学連は宗教団体「生長の家」の学生の集まりだ。「全国600大学に真理の拠点を！」をスローガンにしていた。そして、「生長の家」のサークルを全大学に作り、日

本の大学生全員を「生長の家」の信徒にする。そういう壮大な計画だった。
だったら、一人一人に声をかけ、宗教の話をすればいい。だが、左翼が跋扈し、日本は革命の危機にある。革命になったら、宗教もない。自由もない。まず、革命を阻止しなければならない。その中で、「生長の家」の真理も広めてゆこう。そんな感じだった。
僕らは、最前線で闘った。どうしても「対左翼」の闘いが第一になる。だから、生学連の報告文や会議のレジメでも、どうしても〈左翼用語〉が多用される。「学生をオルグ（勧誘）し」「運動のヘゲモニー（主導権）を握り」「我々も一点突破・全面展開だ」…と。

(3)でも、マルクスに足をすくわれたのか？

こんなことは当然だと思っていた。僕は生学連の書記長だったから、全ての文書をそういう言葉で書いた。配下の書記局員も、僕のイデオロギーの下で教育した。まるで左翼だった。左翼の運動論で「右翼」を行うのだ。「これはスズキ・イデオロギーだ」「スズキイズムだ」とも言われた。そうか、この当時から僕は〈左翼〉だったんだ。何も今に始まったことではない。40年以上前から〈左翼〉だったんだ。
「生学連」は「生長の家」の青年局の指導下にあった。青年局の中に、婦人部、生学連、生高連（高校生の部）があった。青年局の幹部たちは、僕らの「左傾化」「暴走」を苦々しく思っていた。でも、面と向かって反対はできない。「じゃ、他にどんな組織論があるんですか」と僕らは喰ってかかる。彼らは黙るしかない。祈り、神様の話をするのは得意だ。しかし、左翼と闘った体験はない。左翼とは全く闘えない。
こっちは毎日、学内で左翼と闘っているんだ。これしかない。そう確信を持ってやっていた。その時、一人だけ、はっきりと僕らに反対し、叱った人がいる。小山孝雄さんだ。
「鈴木君、そうは言ってもな。左翼の運動論を真似し、左翼の言葉を乱用していると、心まで左翼的になるよ。言葉は神なんだから…」と言われた。ギクッとした。でもその時は、「何いってんだ！」と心の中で思った。不安はあったが、虚勢を張って小山さんに反論した。
「じゃ、他の代案を示して下さいよ。神の言葉で左翼を倒せますか？」と。
憎たらしい学生だったと思う。われながら。小山さん達の忠告なんか全く聞く気がなかった。「祈って平和が実現するんなら、やってみなよ。左翼学生を国外に吹き飛ばしてみせろよ！」と心の中で思っていた。

そうだ。左翼と憲法について学内で論争してた時だ。「９条は単なる祈りじゃないか。祈っていて平和が来るのか。中国、ソ連が攻めてきたらどうするんだ！」と僕らは言った。左翼に対する批判だ。と同時に、「祈っていて平和が来るのか」という理屈は「生長の家」の小山さん達に向けた批判にもなっていた。（と、今、気がついた）。
僕を叱った小山さんは、実に信仰的な人だった。皆、尊敬していた。いつも祈り、祈りに明け暮れていた。小山さんなら、聖フランチェスカのように鳥や花とも会話が出来るんだろう。そう思っていた。
ところが、運命は皮肉だ。その後、小山さんは生政連（生長の家政治連盟）に引き抜かれた。あまり政治向きの人ではないのに、そこに行かされ、そして選挙に出て、当選する。
初めのうちは「生長の家」が金も人間も投入していた。しかし、「もう共産革命の危機は去った」と、生政連は解散する。生政連から出た村上正邦さんと小山孝雄さんは宙に浮いて、孤立した。いきなり土台を外されたのだ。でも二人は、必死に頑張った。そして支援してくれる人や団

体を探した。その中にKSDがあり、そこで事件に巻き込まれ、二人は逮捕されてしまう。だから、生政連を解散し二人を孤立させたのが悪いんだ。

あんな信仰的な小山さんも政治というドロドロとした世界に入ったから巻き込まれたのか。「左翼の言葉を多用したら、心まで左翼になるよ」と言った小山さんは、あるいは自分の将来まで見通していたのかもしれない。いや、僕らだって「生学連」は「全国学協」を作ったが、左翼と同じように内部で対立し、内ゲバをすることになる。そしてリーダーとしては無能な私は追放された。小山さんの言った通りになったのかもしれない。

この問題については又考えてみよう。では又。

【だいありー】

(1) 7月9日（月）午前11時、新聞社で打ち合わせ。面白い企画が進んでる。何とか実現してほしい。夜7時、新橋の博品館劇場。ザ・ニュース・ペーパーの公演を見る。面白かった。『論座』（8月号）の僕の原稿にニュースペーパーのことを書いたので、教えてあげた。終わって新橋駅前で飲む。ガード下の焼き鳥屋の前を通った。「ここは昔、学生相手の安いキャバレーがあったんだ」と思い出した。「ニューヨーカー」といった。僕は硬派だったから行かなかったが、「生長の家学生道場」の何人かが行った。隣りに座ったホステスさんにいきなり手をつかまれた。そして自分の胸に持ってくる。学生はあわてた。パニックになった。帰ってきて、懺悔していた。「この手が罪を犯した！この手は穢れている！」と。そして、必死にお祈りしていた。みんな真面目だった。純心だったな、と昔のことを思い出した。

(2) 7月10日（火）急ぎの原稿があって1日、家で書いていた。


「レコンキスタ」（7月号）より

(3) 7月11日（水）午前11時半。木村三浩氏に呼ばれ一水会事務局へ。共同謀議をする。今は合法的な謀議だが、昔は、危ない、物騒な謀議をよくしていた。

『レコンキスタ』（7月号）をもらう。通算338号だ。よく続いたものだ。今月号は僕の記事がやけに多い。4、5面は、一水会フォーラムで話した「一水会運動35年の歩みと使命」の講演要旨。7面は僕の連載「平成文化大革命」。同じ面に「リンク・クラブ・ニュースレターに鈴木顧問が登場！」という記事。8面には中川文人氏の寄稿「鈴木邦男はなぜ、左翼にモテるのか？」。これは面白かった。まるで僕の特集号のようだ。ありがたい。「レコンキスタ」は1部500円。年間6000円。購読希望の方は一水会へ。TEL 03(3364)2015 FAX 03(3365)7130。

この日、午後2時40分からジャナ専の授業。「時事問題」。それから急いで護国寺の講談社へ。ちょっと早かったんで、ウロウロしてたら光文社の新海さんに声をかけられた。光文社は近くにあるんだ。「何の為に講談社に行くんですか？襲撃ですか？」と言う。まいるなー。「右翼＝襲撃」と思われちゃ。右翼の〈原罪〉だよ。

論客の潮匡人さんと対談。実に論理的で、ズバズバと核心を突いてくる。僕なんか、とうてい太刀打ち出来ず、惨敗でした。

夜、外山恒一氏から電話がある。「脱獄してきました!」。ヒャー。逮捕され、1ヵ月----やっと

釈放され、これから裁判が始まるという。「僕のせいで済みませんでした」と謝った。「8月20日にネーキッドロフトで報告集会をやります」と言っていた。楽しみだ。

(4) 7月12日（木）11:00　高田馬場のサンルートホテル。「マガジン9条」の取材を受ける。頑張ってやったけど、頭が悪いからなかなかうまく喋れん。3時から河合塾コスモの授業。

(5) 7月13日（金）２時から斉藤貴男さんと憲法について対談。斉藤さんはよく取材してるし、勉強もしてるし凄い。僕も本は読んでるつもりだが、頭が悪いからあまり理解できん。だから、話について行けなくて、申しわけないことをした。すんません。
　夜、柔道に行く。

【お知らせ】



月刊「創」（８月号）より

(1)月刊「創」（８月号）では映画「Tokko（特攻）」について詳しく書きました。又、日本赤軍の和光晴生さんのことなどを書いた。

(2)「実話ナックルズX」（８月号・ミリオン出版）に、〈山口組「右翼全国統一」作戦の全貌〉が出てました。その動きに危機感をもって、〈内ゲバを繰り返してきた行動右翼と新右翼、相容れなかった両者が今、共闘し始めた。右翼団体の原点回帰が始まった瞬間である〉 6ページにわたる詳しい特集だ。

(3) 7月17日（火）7:00p.m.一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。大原康男先生（国学院大学教授）の「いま改めて靖国問題を考える」。

(4) 7月18日（水）7:00p.m.ロフトプラスワン。「闘う居酒屋」。森達也、雨宮処凛さんを初め超豪華なゲスト。私も附録で出ます。

(5) 7月20日（金）７時、ネーキッドロフト。針谷大輔氏のイベント。私も出ます。

(6) ７月20日（金）中野ゼロホールで予定していた「護憲か改憲か」大討論会は中止になったそうです。残念です。

(7) 7月21日（土）お昼の12時から５時まで新宿駅東口で「安倍政権をぶっ飛ばせ！新宿10万人集会」が行われます。天木直人、若松孝二も出ます。３時からは「改憲か！反改憲か！バトルトーク。９条ネット対一水会」が行われます。成島忠夫、ZAKI　vs　木村三浩、鈴木邦男です。司会は塩見孝也。凄い企画です。

(8) ８月６日（月）７時半から、ロフトプラスワン「じっとしてたって何も始まらない。大地を揺るがせ。vol1」と銘打ったイベント。スペシャルゲストは植垣康博さん（元連合赤軍兵士）、伊藤乾さん（東大助教授）、そして私。絵画出演は菊田麻衣さん。

(9) ８月10日（金）7:00p.m. 一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。笹井宏次郎先生（日本国体学会主事）の「一水会35年と



ロフトで発行している「Roof

海外からみた日本」。笹井氏は一水会創設のメンバーで、その後、ブラジルに渡り活躍しておりました。

(10)８月20日（月）７時、ネーキッドロフト。外山恒一氏の「逮捕・獄中闘争報告集会」。早く行かないと又、入れませんよ。

(11) ９月６日（木）～９日（土）高木尋士さん脚本の芝居「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」が上演されます。

(12) ９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさ んが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。４時から５時30分。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

HOME

今週の主張

バックナンバー

フランスに行って来た

今週の主張7月23日

(1)フランス大統領選を闘ったルペンさんに会った！



（左から）ゴルニッシュさん、木村三浩氏、ルペンさん、私

フランスに行って来た。ルペンさんに会って来た。先のフランス大統領選挙で健闘した極右政党「国民戦線」党首のルペンさんだ。敗れたとはいえ、元気だ。国民の人気・支持も絶大だ。

成田からパリに行き、そこから国内便に乗り換えて、ニースに行く。世界有数の観光地だ。そこで「国民戦線」の大会が開かれ、世界中の民族派が集まった。世界中といっても、ヨーロッパが多い。ロシアからは極右政党「自由民主党」党首のジリノフスキーさんが来た。前に日本で会ったことがあり、２度目だ。おぼえていてくれた。

「アジア地区」からは一水会だけが招待された。木村三浩代表と顧問の私が出席した。凄い大会だった。驚くことばかりだった。「国民戦線」は日本では「極右政党」と書かれることが多い。私も、ついうっかりと「極右政党」と書いちゃった。しかし違うのだ。実に洗練されてるし、スマートだ。それに議員が多い。国会、欧州議会の議員だ。ヨーロッパの他の国々から来てる人もそうだ。「国民戦線」のルペンさん、ゴルニッシュさん（書記長）などは欧州議会の議員だ。

又、フランスの他、ロシア、セルビアでは大統領選挙を闘った。オーストリア、イタリアでは政権に参加し、議席を増やしている。だから、「右翼の集会」というよりも、「右派議員の集会」という感じだった。「スキンヘッドやネオナチと一緒だろう」と誤解されるが、そんな人達は一切いない。全く別なのだ。日本とは違う。

アレッ？いかんな。と、ここまで書いてきて気がついた。「フランスへ行って来た」と書いたけど、４年前のことじゃないか。あの時も大統領選挙の 直後だった。そして、ルペンさん達に会った。だから勘違いしたんだ。頭の中がワープしちゃった。いかんな。でも、せっかくだから、今回と、 ５年前の選挙のことを書いてみよう。



ジリノフスキーさん（ロシア自民党党首・左）と

フランスは大統領の権限がきわめて強い。かつてド・ゴールという強力な大統領がいた。大統領は直接普通選挙で選ばれ、首相の任命権、国民議会 （下院）の解散権、国民投票の施行権を持つ。フランス軍のトップであり、核兵器の発射権限も握る。

日本でも「首相公選制」という声があった。中曽根さんが主張していた。そうしたら、大統領のような強力な権限を持つだろう。小泉さんがそうなった かもしれない。それで日本は核武装したら怖い。「北朝鮮に撃込め！」なんて声も出るだろうし。

フランス大統領は、非常時には独裁的な権限も行使できる。任期は７年。かなり長い。しかし、2000年の憲法改正によって、５年に短縮された。 前回は2002年に大統領選が行われ、この時はルペンさんは決選投票まで行き、「ルペン旋風」が吹き荒れた。その直後、2003年に「国民戦線」 30周年大会が行われ、その時、私は行って来たのだ。

そして今年の４月。又、大統領選挙。残念ながら、「ルペン旋風」は吹かなかった。でも健闘した。

今回の大統領選の話からしよう。大統領選は第一回目の投票で過半数を取る候補者がいないと、上位１、２位で「決選投票」をやる。

今年の４月22日に行われた第１回の投票結果は以下だった。

１位は、与党国民運動連合（ＵＭＰ）のニコラ・サルジコ候補。
２位は、社会党のセゴレーヌ・ロワイヤル候補。
３位は、中道派のフランソワ・バイル民主連合議長。
４位は、極右国民戦線のジャン・マリ・ルペン党首。



ニースで

その結果、１位のサルジコ候補と２位のロワイヤル候補が５月６日に実施された決選投票で闘い、サルジコ候補が勝利し、大統領になった。

今、新聞記事を見てるが、第１回投票の暫定開票結果が出ている。開票率50%を超えた時点で、サルジコ候補の得票率は30%超。ロワイヤル候補が25%。バイル候補は18%。ルペン党首は11%。「同氏はこれまでに出馬した３回の大統領選挙で最も低い得票率となっている」という。

(2)前回大統領選挙は「決選投票」まで行った。



ルペンを大統領に！

ルペンさんはフランス民族派の象徴的な存在だ。圧倒的な人気もある。あまりに人気があり過ぎるので、「次」が続かないという難点もある。前回の選挙の時は74才。まだまだ元気一杯だった。２時間でも３時間でも一人で演説する。しかし、今年は79才だ。その点からも、「ルペン旋風」は吹かなかったのか。

No.2のゴルニッシュ書記長が出馬すればよかったのかもしれない。しかし、ルペンさんのようなカリスマ性はない。４年前、「国

民戦線」の党大会に行った時は、ルペンさんの写真、ポスター、ペンダントが沢山売られていた。私もポスターやペンダントを買って来た。「５年後、再チャレンジするぞ！」という決意を感じた。

と同時に、ルペンさんの娘さんの写真も、ベタベタと貼られている。「もしかしたら、次は娘を立候補させるのか」と思った。しかし、そうはならなかった。今回も本人が出た。そして４位だった。

前回、2002年４月の大統領選挙の時は凄かった。第１回目選挙でシラクは20%、ルペンさんは17%だ。接戦だ。社会党現職ジョスパン市長を抜いてルペンさんが第２位になった。そして、シラク、ルペンの二人で決選投票になった。

左翼の強いフランスでは大事件だ。あわてた左翼は、なりふり構わずに、「（保守の）シラクに投票しろ！」と呼びかけた。又、マスコミを動かし、「ルペン潰し」をやった。そのせいか、かろうじてシラクは勝った。しかし、ルペンさんの人気はウナギ上りだ。　そんな勢いのある時にフランスに行って来たのだ。私達は。



大統領選のポスター。フランスを救うのはルペンだ！と

ルペンさんは庶民派だ。漁師の息子として生まれ、軍隊に入り、インドシナ戦争、アルジェリア戦争に従軍。1972年、ＦＮ（フロント・ナショナル＝国民戦線）を創る。（奇しくも一水会が出来た時と同じ年だ）。しかし、党内闘争も大変だった。古いタイプの右翼も多かったし、非合法・武装闘争を主張する人間も多い。それらと闘って来た（この辺も日本と似ている）。又、左翼からのテロもある。警察の弾圧もある。

非難・中傷もひどかったし、デマ攻撃も受けた。ビラを貼るだけで、「ネオ・ナチめ！」と投石されることも多い。「でも実際、スキンヘッドのネオ・ナチもいるんだろう？」と思うかもしれない。フランスに行くまでは私もそう思っていた。しかし、違う。そんな人は一人もいない。さっきも言ったように、「国会議員の集まり」のような感じだった。「一水会は国会に何人いるの？」と聞かれて戸惑った。

国民戦線がデモをやると、スキンヘッドのネオ・ナチが勝手に入って来て、デモに加わる。10人か20人位でも、「自由参加のデモ」だから追い出すわけにいかない。新聞記者は、そんな若者だけを写真に撮る。そして世界に発信する。新聞を見た人は「ほら、やっぱり国民戦線はネオ・ナチじゃないか」と思う。「困ったことです」とゴルニッシュ書記長は言っていた。

日本でいえば、靖国神社の光景に似ている。大部分は静かにお参りしてるのに、戦闘服を着た人や軍人の格好をし、銃を持った人が来る。そんな人だけをカメラマンは撮って世界に紹介する。「ほらみろ、日本は又、戦争を準備している」と思われる。困ったことだ。それと同じだろう。ほんの一部の人間だ。でも、写真に写った「事実」には違いない。

国民戦線は、「ネオ・ナチだ」「排外主義者だ！」と長い間、罵声を浴びせられて来た。でも、ルペンさん達はあくまでも言論で闘い、力をつけて来た。党内闘争にも勝ち抜いた。テレビで叩かれると、それを逆に利用し、反撃し、自分達の主張を訴える。そこで国民の心をとらえ、支持層を増やした。〈思想戦〉に勝利したのだ。（映画俳優のアラン・ドロンやブリジット・バルドーもルペンさんの熱烈な支持者だ）



確かに激しいことも言う。「しかし、人種差別はない」と言う。さらに、ルペンさんは言う。

選挙のポスターは皆、かっこいい（日本とは大違いだ）

「私は人種差別主義者、ファシストなどと攻撃されたが、全くの間違いだ。私が差別主義者なら、なぜ私の党に黒人やアラブ人、ユダヤ教徒がいられるのか」。

実際、国民戦線の大会では「私はユダヤ人です」という人がいて、いろいろと話をした。又、アラブの人もいた。ルペンさんは、イラクのフセイン大統領とも親しく、「アメリカの侵略」に反対していた。ルペンさんは右で、フセインのバース党は左だ。…と思われがちだが、そんな違いは超えて、民族の自主自尊を支持したのだ。

ルペンさんは「フランスを守るために移民は一定程度制限すべきだ」とは言う。しかし排外ではないという。今のサルジコ大統領の方が、ずっと排外的だ。05年７月～07年３月に内相だったサルジコは治安優先姿勢で知られ、05年秋の暴動では移民系若者を「ごろつき」呼ばわりして物議を醸した（でも本人もハンガリー系移民２世なんだ）。サルジコは市場・競争原理を重視する自由主義経済路線を取り、親英米派だ。

(3)ルペンさん達も〈新右翼〉と呼ばれている



「ジャンヌ・ダルク祭」で演説するルペンさん

だから、日本と似ている。サルジコの方がずっと排外主義的、右翼的だ。むしろ国民戦線の方が温和だ。しかし、国民戦線は「極右」「ファシスト」「ネオ・ナチ」と罵倒される。大きな保守・右傾化の波に乗り越えられ、孤立する日本の右翼と似ている。

さらに、ルペンさんは、「国民戦線」の中でも、孤独な闘いを強いられ、やっと今の地点に来た。武装闘争派と闘い、他の右翼と闘い、左翼、警察と闘い…。「武装闘争だ！」「暴動だ！」「革命だ！」と勇ましいことを言う連中とも闘い、思想闘争に勝利してきた。「日本の新右翼のようだ」と思う人がいるかもしれない。

そうなんだ。実は、ルペンさん達も、「新右翼」と呼ばれている。たとえば、山口定、高橋進編『ヨーロッパ新右翼』（朝日新聞社）という本がある。ルペンさんたちを「新右翼」と言っている。又、畑山敏夫『フランス極右の新展開＝ナショナル・ポピュリズムと新右翼』（国際書院）もそうだ。

国民戦線のゴルニッシュ書記長は、実は日本の京都大学に留学していた。それに奥さんは日本人だ。徳島出身だ。だから日本語はペラペラだ。欧州議員として日本の国会から招待され、日本にもよく来ている。僕も、３回ほど日本で会った。木村氏が紹介してくれ、一水会の集まりにも来てくれた。

フランスに行った時も、よく話をした。又、ルペンさんとも食事や休憩の時に話をした。それに、ルペンさんは我々二人のために特別に時間をとってくれて、かなり、じっくりと話をした。ゴルニッシュ書記長が通訳をしてくれた。

ルペンさんは、国民戦線の歴史や今後の展望について話す。三島由紀夫も好きだというし、「サムライの国」日本が好きで尊敬してるという。日本は誇り高い民族だと言う。でも、

「60年間もアメリカに占領されてるなんて、日本人の誇りが許さないでしょう」

と言う。ウーン、そうだなと思った。



ルペンさん。70過ぎてこの肉体！

フランスは、異国だが、何か懐かしいものを感じる。「右翼」にとっても「左翼」にとっても、フランスは「ルーツ」だからなのか。右翼、左翼という言葉は、このフランスで生まれた。私達の生まれ故郷なのだ。じゃ、ここで「両翼祭」でも、「双翼祭」でもやればいい。「混翼（こんよく）祭」でもいい。

ご存知のように、1789年にフランス革命は起こり、その後に開かれた議会は鳥が翼を広げたような形だった。右の翼の席にはジロンド党（保守派）がいたので右翼と呼ばれた。左の翼の席にはジャコバン党（急進派）がいたので左翼と呼ばれた。

「今も議会は鳥の形をしてるんですか？」と聞いたら、「そうです」と言っていた。

「では、これは鳥の形に似てると思った人は誰ですか？」と聞いた。その人が「右翼」「左翼」を発明した人だ。でも、ルペンさんもゴルニッシュさんも「さあ…」「知りませんな」と言う。「調べて下さいよ」と頼んでおいた。

それと、もう一つ聞きたいことがあった。「王党派はもういないんですか？」と聞いた。かつて「アクション・フランセーズ」という有名な右翼団体があり、彼らは王党派だった。彼らは「王政復古」を目指していた。しかし、今はいない。その残党が国民戦線にも流れてきたが、大きな力にはなってない。

国民戦線は愛国者だが、王党派ではない。フランス革命を支持し、ジャンヌ・ダルクも絶讃する。毎年、５月には「ジャンヌ・ダルク祭」をやっている。シャンゼリゼ通りをデモをして、集会を開く。「一度、来て下さいよ」と言われた。行ってみたい。

フランス革命は王制を打倒した。そのフランス革命を基礎にしてるのだから、国民戦線も王党派ではない。イランやイラクでは、王様を国内に戻し、「統合の象徴」になってもらおうとした動きがあった。しかし、失敗した。フランスでもかつての王制を懐かしむ人はいる。しかし、ゴルニッシュ書記長は言う。

「でも歴史は戻らないでしょう。それに南北朝の対立があります」と言う。日本の歴史、文化に詳しいゴルニッシュさんならではの表現だ。

フランスの王様はギロチン台の露と消えた。しかし、残った血統の人はいた。ブルボン王朝の正統はスペインに亡命した。南朝だ。でも外国に亡命し外国人になった人はフランス王にはなれない。フランス国内にはブルボンの傍流しかいない。王政復古となると、この人をかつぐしかないでしょう。と言う。どっちにしろ、そんなことを考えてる人は、ほとんどいない。

ともかく、フランス革命を基礎にし、この時、歌われた革命歌「ラ・マルセイエーズ」が国歌になった。国民戦線の大会でも、この歌がよく歌われる。たとえば、ルペンさんが２時間、演説する。熱弁だ。そして、感極まって、突然、歌い出す。そうすると客席の皆も立ち上がり、「ラ・マルセイエーズ」を歌う。国旗の三色旗の小旗を打ち振る。勿論、我々も立ち上がり、旗を振り、歌いましたよ。実にいい歌だ。フランス人になった気分だった。

そうだ。佐高信さんと西郷隆盛の話をした時に、「ラ・マルセイエーズ」についての面白い話をした。12チャンネルで正月の３日に毎年、10時間ドラマをやっている。かなり前、「田原坂」をやった。西郷隆盛を里見浩太朗が演じた。ラストの方で戦い敗れ、城山で自刃する前夜のこと

だ。部下の若者が聞きなれない歌を歌っている。外国語のようだ。西郷が聞く。「それはどこの国の歌か？」と。

「ラ・マルセイエーズといいまして、フランス革命の歌です」と答える。「ウーン、そうか。実にいい歌だ」と言って、「よし全員で歌おう！」と言い、皆でスクラムを組んで「ラ・マルセイエーズ」を歌う。感動的なシーンだ。

「そんな馬鹿な」と思うかもしれないが、ありうる話ではある。薩摩藩の若者の中にはフランスに留学した人間が何人もいる。そして西郷軍に加わっていた。だから、「ラ・マルセイエーズ」を歌ったとしても不思議ではない。こんなに人々を鼓舞する歌があったのか、と西郷も感動したことだろう。いい話だ。私はあったと信じたい。私だって、フランスに行って、一緒に「ラ・マルセイエーズ」を歌ったんだ。西郷どんだって、歌ったに決まっちょるばい。

(注：)『辞林21』（三省堂）によると。
ラ　マルセイエーズ【La Marseillaise】フランスの国歌。ルージェ＝ド＝リール（Rouget de Lisle）作詞・作曲。1792年対プロイセン・オーストリア戦争でパリに向かうマルセーユ義勇兵に歌われた。1795年、国歌に制定。

これを作詞・作曲したリールという人の人生も波乱万丈なんですな。中公新書に出てたが。それは又、後の話で…。

【だいありー】

(1)７月16日（月）取材。打ち合わせ。


ロフトプラスワン「闘う居酒屋」

(2)７月17日（火）午後３時。横浜美術館。森村泰昌「美の教室、静聴せよ」展。森村氏の「開講式」のレクチャーが１時間ある。名画や女優に扮したセルフポートレート作品が展示されている。会場全体を１日の授業に見立て、ホームルームから放課後まで、モリムラ先生による授業（音声ガイド）が展開される。

７月17日から９月19日まで。この日は「開講式」。レクチャー後、森村さんと話をした。「今度の三島は更に凄いですよ。映画館と同じ巨大なスクリーンですから」と言う。見て驚いた。１ヶ所が「映画館」になっている。あの三島由紀夫の市ケ谷自衛隊での絶叫が再現されている。凄い。迫力がある。森村さんが三島になり切って演じている。前に、このHPにその「写真」だけを紹介した。しかし、今回は、「映画」だ。これは見なくっちゃ。

このあと、午後６時、雪ケ谷総合式場。田原康邦氏のお通夜に行く。58才の若さだった。田原氏は、生高連、生学連、の運動をし、1972年の一水会創設のメンバーだ。「第１回一水会」の会合は、田原氏の自宅でやった。中村武彦先生に講演をしてもらった。田原氏は青山学院大を卒業後、「内外タイムス」に勤め、優秀な記者だったが、もっと精神的な仕事、神様の仕事がしたいと辞めて、日本教文社に移る。生長の家の機関誌「理想世界」の編集をしていた。明るく、誰からも好かれる人だった。何とも残念だ。

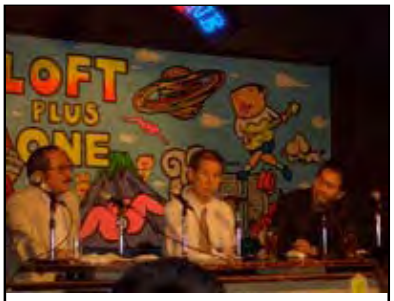
お通夜のあと、「一水会フォーラム」に遅れて行く。大原康男先生（国学院大学）が講師で、「いま改めて靖国問題を考える」。僕は学生の時から存じ上げている。「初めて座談会で一緒したのは昭和46年の〈やまと新聞〉です」と大原先生。えっ！三島事件の次の年か。「だから、皆

で三島事件の話をしましたよ」。でもその時は私はまだ産経新聞の社員だ。それなのに、そんな民族派の座談会に出ていいのだろうか。その時の記事があったら見てみたい。

(3)７月18日（水）午後２時40分からジャナ専の授業。「時事問題」。今日で前期が終わり、これから夏休みだ。
　午後７時、ロフトプラスワン。古木杜恵の「闘う！居酒屋」に出る。第１部「希望としての戦争」で、雨宮処凛、松本哉、吉田司氏らと出る。ゲストが多くて余り喋れんかった。第２部は「憲法の戦争」。第３部は「高齢化の戦争」。超満員だった。150人ほど客がつめかけて激しいバトルになった。

(4)７月19日（木）午後、骨法整体。腰の痛いのは完治したが、最近、背中が痛い。仕事が忙しくて、ずっとパソコンを打ち続けているせいか、首、肩、背中が固い。重い。痛い。それで診てもらった。凄い。すっかり楽になった。ありがとうございます。有田芳生さんを初め、多くの人を骨法整体に紹介して、皆、感謝されている。私も、たまに行って診てもらってる。助かってます。「ついでに身長も伸ばして下さい」と言った。10cmと言ったら、「２cmなら伸びます」。治療が終わったら２cm伸びていた。視界も変わった。
　夜、仕事の打ち合わせ。

(5)７月20日（金）原稿の〆切があって一日中、必死で書いている。
　夜、ロフトプラスワン。針谷大輔氏が斬る！「男たちの国防論vol.4」。犬塚哲爾氏、舟川孝氏、丸川仁氏らと共に出る。なかなか活発な論議が展開された。左翼と闘った学生運動を振り返りながら、我が「国防論」について語った。選挙中の鈴木信行氏も途中から参加してくれた。又、見沢知廉氏と一緒に闘ってきた勝又洋氏も登場し、話をしてくれた。



ロフトプラスワン「男たちの国防論」

(6)７月21日（土）「安倍政権をぶっとばせ！」新宿東口100万人集会。午後３時～５時。國弘正雄、神田香織さんらが出演。「九条ネット」の成島忠夫候補とZAKI候補、若松孝二、木村三浩、塩見孝也、そして私で「憲法トーク・バトル」。街頭で車上のバトルなんて生まれて初めてだ。それに「選挙応援」にしなくてはいけない。難しかった。７時、志の輔さんの落語会に行く。

【お知らせ】

(1)このＨＰでも紹介しましたが、リサ・モリモト監督の衝撃の映画『Tokko（特攻）』が７月21日（土）より渋谷シネ・ラ・セットで上映されています。ぜひ見て下さい。

(2)本文でも書きましたが、７月17日～９月19日まで横浜美術館で森村泰昌「美の教室、静聴せよ展」が行われています。世界の名画や女優に扮したセルフポートレート作品。それに、三島由紀夫になり切って絶叫するビデオが上映されています。これは、本当に素晴らしい出来です。今、見ないと後悔します。



「月刊タイムス」（８月号）より

(3)『月刊TIMES』（月刊タイムス社・８月号）は「連載・三島由紀夫と野村秋介の軌跡」の第32回。「民族派運動に画期印した米沢」を書いてます。30年前、米沢の地で「新しい日本を創る青年集会」を開きました。野村秋介さん、鳥海茂太さん（米沢市会議員）、阿部勉、犬塚哲爾、笹井宏次朗、私などが弁士でした。そこから〈新右翼〉の運動もスタートしました。それと米沢藩の家老・直江兼続のことも取材し、「新しい日本」との接点につき書きました。

(4) ７月24日（火）夜８時50分からJ-WAVEの「JAM The World」に出るそうです。

(5) ７月25日（水）「SAPIO」（８月８日号・小学館）は特集が「公安サンクチュアリの正体」。私も出ています。

(6) ８月６日（月）７時半から、ロフトプラスワン「じっとしてたって何も始まらない。大地を揺るがせ。vol1」と銘打ったイベント。スペシャルゲストは植垣康博さん（元連合赤軍兵士）、伊藤乾さん（東大助教授）、そして私。絵画出演は菊田麻衣さん。映画「実録・連合赤軍」の若松孝二監督も急遽、出演してくれることになりました。

(7) ８月10日（金）7:00p.m. 一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。笹井宏次朗先生（日本国体学会主事）の「一水会35年と海外からみた日本」。笹井氏は一水会創設のメンバーで、その後、ブラジルに渡り活躍しておりました。

(8) ８月15日（水）７時。ロフトプラスワン。高須基仁さんのライブに格闘家の前田日明さんが出演するそうです。楽しみです。

(9) ８月20日（月）７時、ネーキッドロフト。外山恒一氏の「逮捕・獄中闘争報告集会」。早く行かないと又、入れませんよ。私もゲストで出ます。

(10) ９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさ んが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。４時から５時30分。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(11)別冊宝島の『怪死・事件史』が今度、文庫になります。私も見沢知廉氏について書いてます。

(12)『マガジン９条』の取材を受けました。７月25日、８月１日の二回にわたって掲載されるそうです。

(13) ＪＲ東労組は敗訴しましたね。残念です。植草一秀さんも実刑判決。残念です。村上ファンドも実刑でしたね。司法の壁は厚い。

HOME

今週の主張

バックナンバー

スパイは悲しいやね

今週の主張7月30日

(1)工作員よりもクスリの方が強かったのか


安元工作員を逮捕
韓国で覚醒剤密売容疑
多くの証言…家族会「残念」
産経新聞（７月10日付）

スパイの末路はあわれだ。殺されるか。自殺するか。敵に寝返って生き延びるか。それでも、利用価値がなくなると簡単に捨てられる。スパイで、「幸せな老後」を送った人は一人もいない。

右翼でも左翼でも、スパイは「摘発」され「粛清」される宿命にある。日本共産党でも、連合赤軍でも、見沢事件でもそうだった。

さて、安明進（アン・ミョンジン）さんの場合はどうか。やはり、「使い捨て」されたのだろう。かつては「拉致問題」で毎日のようにテレビ、新聞、週刊誌に出ていた。出まくっていた。金も入った。彼にとっては「バブル」だった。しかし、最近は〈仕事〉がなくなった。もう「ネタ」がなくなった。しかし、バブルな時代が忘れられない。そして、苦しくて覚醒剤に手を出した。さらには他人にも売りつけた。それで逮捕された。新聞では、そう報道されていた。果たしてそうなのか。この事件そのものも〈謀略〉の一環だったのかもしれない。奇妙な事件だ。納得のいかない点が多い。

新聞は全て読んだ。どこも同じだ。公式的な発表しかしてない。７月10日（火）の朝刊に一斉に報じられた。ソウル警察庁が発表したものだ。

「北朝鮮の元工作員（39才）と同居の女性（33）を、北朝鮮製の覚醒剤を韓国で密売したと発表した」

この安明進さんは、「横田めぐみさんら拉致被害者を北朝鮮で目撃した」と証言した人だ。産経によると…。

〈元工作員は中国で75グラムの覚醒剤を入手、今年２月にソウル市内の飲み屋で５グラムを100万ウォン（約13万円）で売るなど最近までに４回、覚醒剤を密売していた疑いのほか、女性と覚醒剤を常用していたとされる〉

日本に来た時はテレビ、新聞、雑誌に出まくって、荒稼ぎをした。マスコミだって、ポンポンとお金を出した。それなのに今は、10万円の金を得るために、こんなにヤバイ橋を渡る。ちょっと信じられない。そんなに困っていたのか。スパイといえば、どんな拷問にも屈しない強靱な精神力・肉体を持っているはずだ。それなのに簡単にクスリに溺れる。そして、金ほしさでクスリの密売までする。そんなに「弱い」のだろうか。疑問だった。さらに産経では。

〈元工作員は調べに対し、2005年４月に中国で「金先生」と名乗る麻薬業者から「（北朝鮮東北

部の）威鏡南道戚興で新しく作られたもの」という覚醒剤を入手したと供述。業者に「韓国政府に渡すので覚醒剤のサンプルを手に入れてほしい」と依頼した疑いもあるという〉

ウーン。最後の部分が意味深だ。韓国に投降し、許されて「一般市民」になった。しかし、（事実上は）今度は「韓国のスパイ」だ。日本に来るのだって、〈仕事〉のうちだ。北の情報をとるための道具にもされた。そのスパイ活動として、「北の覚醒剤」を手に入れ、そのルートを探っていた。多分、これは間違いないだろう。

しかし、大量の覚醒剤を手に入れた段階で、試しにちょっと使ってみた。本物かどうか調べたのかもしれない。「なーに、俺は優秀なスパイだ。クスリに溺れるはずがない」。そう思った。だが、工作員よりもクスリの方が強かった。そんな所かもしれない。

こんなことは、日本の警察でもよくある。麻薬を摘発し、証拠品として保管する。その時、好奇心からつい試してみる。あるいは、「少し位なら分からんだろう」と思い、知り合いの暴力団に売る。それで捕まる刑事がかなりいる。新聞に時々出るが、あれは氷山の一角だ。実際は、かなり多い。しかし、ほとんどは、もみ消しにされている。

(2)〈拉致証言〉では恩人なのに。何故か？



安明進氏（右）

さて、もう一歩進んだ推測だ。「拉致問題」ではもう進展はない。安明進さんから「新たな情報」も引き出せない。いや、もう全て出し尽くした。利用価値のなくなったスパイは捨てられる。実際、最近は「捨てられた」状況だった。さらに、韓国と北朝鮮は今や「友好ムード」だ。安明進は邪魔だ。「じゃ、消そうか」となった。それで、本当は「公務」で覚醒剤を手に入れたのに、「密売」容疑で逮捕してしまった。そんな疑いもあるのではないか。又、クスリがらみだと、「謀略だ」「国策捜査だ！」とは言いづらい。ウムを言わせぬ力がある。

しかし、拉致被害者の家族会や「救う会」の人々も困っただろう。「安証言」に依拠していた部分が大きかったからだ。家族会事務局長の増元照明さん（51）は、語っている。

〈事実とすれば残念だが、拉致問題で大きな役割を果した事実は変わらない。被害者を救い出したいという気持ちにうそいつわりはないと思う」と複雑な様子で話した〉

確かに複雑だろう。「覚醒剤で捕まるような奴の証言なんか信用できん」「あることないことを喋ったんじゃないか」と思われちゃたまらない。又、これによって拉致被害者救出が遅れてはかなわない。そう思い、戸惑っているのだろう。実際、「あれも知ってる」「これも知ってる」と言いすぎた。スパイはそんなに広く知るはずがない。スパイを使う側が、教えない。捕まった時、喋るからだ。そこまで考え、ごくごく「狭い範囲」のことしか教えない。又、横のつながりはなく、直接の上司とのつながりしかない。

だから、日本に来ても、かなり無理をして「証言」していたんだろう。求められるまま、「あの人も見た」「この人にも会った」と言い、核問題を含め、北朝鮮のトップのことまで喋っている。そんなことは全く知るはずはないのに。それでも日本では、皆、チヤホヤして、大金を払い、「証言」してもらった。国会でも証言した。では、彼の略歴だ。

〈安氏は、1968年北朝鮮・黄海北道生まれ。朝鮮労働党工作員に選択され、工作員養成機関である金正日政治軍事大学に入学。同大学で、横田めぐみさん＝当時（13）＝や市川修一さん＝同（23）＝らを目撃したと、平成９年に初めて証言した。日本の警察当局も安氏が来日した際、被害者について参考人聴取。衆院拉致特別委でも参考人として証言していた〉

拉致問題については〈大恩人〉なのだ。それに、「工作員」というと何か、下々の、軽蔑された職業のように思うかもしれないが、違うのだ。北朝鮮ではエリートだ。エリート中のエリートだ。国家のために命を捧げる。その第一線で働いている。その誇りを持っている。人間の能力としても第一級の人間が選抜され、訓練されて工作員になる。日本の忍者とか、公安、公調とは全く違う。

そういえば、去年、「工作中に父親死亡」という記事が産経に出ていた。日本の話だ。「死亡」じゃなく、「重傷」だったかな。凄いお父さんだ。日本人でありながら工作員になり、危険な任務についていた。ところが敵と出会い、闘い、不幸にも亡くなった（あるいは重傷を負った）。

と思っていたら、ちゃいまんねん。中学生の娘が学校の宿題で、「工作」をやっていた。それを父親は手伝った。プラモデルなんかを作ることも「工作」という。それだ。セメダインや、いろんな揮発性のものを使い、さて一服とタバコを吸った。引火して大爆発。それで大事故になったそうな。別に「国家の仕事」でも何でもない。でも、「工作中の事故」なのだ。



（左から）鈴木、安明進氏、木村三浩氏、横山孝平氏

さて、この安明進事件。もう少し詳しく報道してたのが二つあった。テレビと「週刊朝日」だ。

テレビは事件が報じられた日の夕方だった。どこのチャンネルか忘れた。「救う会」の元幹部「A」さんが出ていた。「つくる会」だったかな。いや、「救う会」だった。でも奇妙だ。こんなにいい運動をやってる人なのに、顔は出さないで「A」さんだ。堂々と喋ったらいいのに。

数年前、安明進氏が来日した時、Aさんは会った。Aさんは風邪で高熱を出していた。その時、「これを飲んだらすぐに治りますよ」と「白い粉」を見せた。覚醒剤だった。「そんなのやってるのか。冗談じゃない。やめろ！」と叱り飛ばした。

そう「証言」していた。いやだなーと思った。その時、警察に密告しなかったのは、安氏のことを思ったからだろう。だったら、今も黙っていればいい。僕ならそうする。捕まったからといって、「そういえばこんなこともあった」「あんなこともあった」と告げ口するのは、いかがなものか。

(3)さらに大きな「謀略」が背後にあるのか



「週刊朝日」（７月27日号）

もう一つ、「週刊朝日」（７月27日号）だ。

〈「証言ビジネス」北朝鮮元工作員はなぜクスリ売りに“転職”した？〉

と見出しが出ていた。「富山のクスリ売り」じゃないのにな。

2002年、小泉訪朝、そして金正日総書記が拉致を認めると、メディアは安明進氏に群がった。

〈いつしか安容疑者は「証言ビジネス」で潤い、マスコミ関係者から「会うにはカネがかかる人」「インタビューのたびにギャラがつり上げられる」と言われるようになる。そして北朝鮮問題追及の急先鋒に祭り上げられた〉

05年夏には、衆院拉致問題特別委員会で、「横田めぐみさんら15人が拉致された」と証言。この安氏を、「北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会（救う会）」は、全国から寄せられたカンパで支え、東京・音羽のマンションも世話したという。

しかし、「救う会」会長の佐藤勝巳氏が札幌の会社経営者から受け取った１千万円を着服して安容疑者に渡したように装って証拠隠滅した、と救う会関係者が告発する騒ぎに巻き込まれた。

安氏は東京地検に、「１千万円のうち970万円を受け取った」と話したため、佐藤氏らは嫌疑不十分で不起訴処分になった。いろんな情報を集めるためには金がいる。領収証のない金も使う。それを使って安氏が動いていたのか。あるいは恩人の佐藤氏を救うために、「970万円をもらって、活動費にした」と言ったのか。それは分からない。ともかく、「救う会」の対立の火種となったことから、昨年暮れ、日本を離れた。

救う会事務局長の西岡力氏は言う。

「日本にとっての恩人なのに、内部のゴタゴタに巻き込み、追い出すような形になってしまった。その意味では申し訳なく思う」。

でも、クスリに手を染めたのは、もっと前からだ。昨年暮れ、日本を離れてから、金に困って、やったわけではない。「A」さんが言うように、数年前から、クスリをやっていた。個人的には36回も使っていたという。

ジャーナリストの高世仁氏は言う。

「以前から、拉致や麻薬など北朝鮮の内部事情を探るために、中朝国境へはよく行っていた」

いつまでも過去のことばかり話していてはネタが尽きる。いや、とっくに尽きていた。それなのに、「あれも知ってる」「これも見た」と〈証言〉を続けていた。これじゃいかん。今のことを取材し、語らなくては、そう思い、中朝国境へよく行った。麻薬のルートを調べていた。その過程で、自分もちょっと〈体験〉してみた。

実は、韓国の警察は知っていた。安氏がクスリをやってることを。日本のＡ氏が知ってる位だ。警察は分かるだろう。そしてじっと待った。彼が「密売」に手を染めるのを。自分が使うのと、他人に売るのでは刑が天と地ほども違う。即、死刑の国も多い。これで、邪魔になった安氏を取り除こうとしたのだという。これは、テレビでも言っていた。韓国は北朝鮮との「太陽政

策」の延長で、安氏は邪魔になったというのだ。北が韓国に「何とかしてくれ」と圧力をかけたという。ウーン、ありうる話だ。「週刊朝日」は、こう結んでいる。

〈だが、安容疑者が新たな証言の代わりに手にしたのが「将軍様」を潤す白い粉だったとは、なんとも皮肉ではないか〉

(4)実は、私も安明進氏から衝撃的な話を聞いた！



安明進氏（中央）と

と、ここで、安氏の話は終わる。かわいそうな工作員の話だ。いや、終わりにしようと思った。ところが、実は、ここまでは「序論」だ。「話のまくら」だ。これからが本題だ。

実は、私は安明進氏と会っている。数年前だ。その時、カゼをひいていた。そういったら、「これを飲めば一発で治りますよ」と言って白い粉をもらった。朝鮮人参の粉末かと思って飲んだ。一発で治った。

…という体験があったら、私もワイドショーに出れたのに。私も「Ａさん！」と呼ばれて、「はい、Ａですよ」と証言したかもしれん。しかし、私には白い粉をくれなかった。

でも、会ったのは本当だ。その証拠に、写真も出しておこう。一水会の機関紙「レコンキスタ」で喋ってもらった。木村三浩氏が主に聞いた。終わって、近くのスターバックスでコーヒーを飲んだ。その時、衝撃的な話を聞いたのだ。

北朝鮮の工作員教育をしたのは実は日本人だという。そして日本のような「サムライ」になるように教育を受けたのだという。他ではこんな話は全くしてない。

「日本人から教えられた」というのは、別に「拉致された日本人から日本語を教わった」という話ではない。そういう人もいたが。

戦争中、「陸軍中野学校」というものがあった。スパイを養成する学校だ。朝鮮の人もいた。当時は「日本人」だったからだ。その人たち、３人が戦後、北朝鮮に帰ってきた。そして、「金正日政治軍事大学」で教えたという。安氏は言う。



増村保造監督「陸軍中野学校」

「日本の武士道について教えられました。日本のサムライ映画も随分と見せられました。イザという時は自決するのだと」

「自決」用のテキストとして活用されていたのか。市川雷蔵主演の『陸軍中野学校』全５巻も何回も見たという。教材として、授業で見たのだ。私も、TSUTAYAで借りて再度見たが、何度見てもいい。名を捨て、誰に認められることもない。でも、日本を最も愛し、日本の危機を救ったのがこの男たちだ。映画を見ると、そう思ってしまう。

特に第１巻は、凄かった。よく憶えている。スパイにはエリートだけが選ばれる。選ばれた人間は、名を捨て、自分を捨てる。過去も捨てる。「失踪者」として消える。主人公は全ての消息を消してスパイになる。恋人は心配して探す。どこにも手がかりはない。その時、「一緒に探してやる」といって近づいてきた外国人がいる。

知らない間に彼女は外国機関のスパイにされる。主人公はそのことを知り、苦しむ。そして究極の選択をする。

「特高に捕まり拷問され殺されるよりは」と思い、殺す。再会した夜に、喜ぶ彼女に毒入りのワインを飲ませて殺す。「愛」ゆえに殺したのだ。 そのシーンが印象的だった。ああ、私にもこんな体験があったな、と思った（ないか）。



「陸軍中野学校」

でも、なんか他人事のように思えず、ずーっと頭の中に残っていた。うーん、似たことがあったのかもしれん。私も「証言」してないことが沢山ある。時効になったから言ってもいいのかもしれんが…。でも、「昔はいろんなことがあったが、今は言論だけでやっている」「いまは普通のオッサン」「人畜無害のオッサン」と思われている。だから、「いい人」のまま、生涯を終わりたい。しかし、それでは、いろんな事件の真相は闇のままだ。どうする、どうなる、鈴木邦男だ。それと、新理論「ベーシック・インカム」のことを聞かされた。今、「ＶＯＬ」（以文社）２号を読んで勉強している。

【だいありー】



９条ネットの選挙演説（７月21日）

(1)７月23日（月）11時、出版社の人と打ち合わせ。貧乏で、金がない。仕事は何でもやりたい。でも、私じゃ力不足ですよ。とてもとても…。と言った。この企画は大きすぎるよ。ともかく、今、考えている。

１時。新聞社の人と会う。取材。それから図書館で、いろいろ調べものをした。

(2)７月24日（火）最もハードな一日だった。朝11時から夜６時半まで、７時間半も対談。〈鈴木史〉の中の最長記録だ。「戦争と憲法」について。「これじゃ一冊の本になるよ」と言ったら、「載るのは10分の１ですから」。ともかく、ヘトヘトだった。でも、有意義な、勉強になる対談だった。誰と対談し、どこに載るのか。それは、後の楽しみにして下さい。

ヘトヘトだったのに、このあと、六本木ヒルズに行く。ここの中にある「Ｊ-WAVE」に行く。打ち合わせをして、８時55分から９時半までラジオ番組に出る。「JAM THE WORLD」だ。参院選について喋る。いろんな提言をした。

供託金は高すぎる。選挙区が１人300万。比例区が１人600万。10人出したら６千万だよ。でも、こんなことは日本だけらしい。イギリス、カナダでは、日本円にして12万円位。アメリカ、フランスでは、供託金制度がない。じゃ、日本もタダにしろ。せいぜい５万円位だな。そしたら、皆、出れる。選挙に対する関心が急に高まる。投票率もグンとよくなる。東京選挙区なんて千人位出るだろう。いいじゃないか、それで。

しかし、年金ばかりじゃなく、憲法、防衛の話をしろよ、と言ってやった。



「SAPIO」（８月８日号）

(3) ７月25日（水）取材。打ち合わせ。仕事に結びつかない用で、人と会うことが多い。いやだというとエゴイストだといわれるし。

今日、「マガジン９条」に私のインタビューが掲載された。それと「SAPIO」（８月８日号・小学館）が発売。特集が「公安サンクチュアリの正体」。私は元公安調査庁の菅沼光弘氏と対談した。「公安調査庁は本当に必要か」。４ページだ。この特集には他に、青木理、宮崎学、二木啓孝氏らが書いている。充実した特集だ。



丸岡修『公安警察ナンボのもんじゃ』（新泉社）

(4) ７月26日（木）朝一番の新幹線で仙台に。９時、宮城刑務所に。日本赤軍の丸岡修さんに面会。初対面だが、とてもいい人だ。丸岡さんの本『公安警察ナンボのもんじゃ』（新泉社）は昔読んだが、今回、新幹線の中で再読した。詳しいし、いい本だ。丸岡さんは、病気で車椅子で現われた。「中学生の時は右翼で、北一輝を読んでました」と言う。凄い。優秀な中学生だ。

「鈴木さんにもっと早く連絡をとりたかったんだけど…」と言う。「よど号のようにお前も新右翼にごまかされないように」と仲間に言われてたそうな。別に「よど号」は僕らがオルグしたわけじゃない。北朝鮮に行った彼らが、そこで民族主義に目覚め、僕らに連絡をとってきたのだ。

面会が終わって、兄貴の家に寄る。それから、山形に行く。せっかくの機会だし、親戚に預けていた子供たちに会った。ほったらかしにして申し訳ない。「お父ちゃんを許してくれ」と謝った。涙、涙の再会だった。

(5) ７月27日（金）一日、家で原稿を書いていた。夜、柔道。

(6) ７月28日（土）午後、骨法整体に行く。背中も治してもらったし、背も２cm伸びた。膝が痛かったのも治り、正座できるようになった。身体全体の調子がいい。次はＥＤも治して下さいと頼んだ。

(7) ７月29日（日）参院選挙。頼まれたところにキチンと入れましたよ。

【お知らせ】

(1) ８月６日（月）７時半から、ロフトプラスワン「じっとしてたって何も始まらない。大地を揺るがせ。vol1」と銘打ったイベント。スペシャルゲストは植垣康博さん（元連合赤軍兵士）、伊藤乾さん（東大助教授）、そして私。絵画出演は菊田麻衣さん。映画「実録・連合赤軍」の若松孝二監督も急遽、出演してくれることになりました。

(2) ８月10日（金）7:00p.m. 一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。笹井宏次朗先生（日本国体学会主事）の「一水会35年と海外からみた日本」。笹井氏は一水会創設のメンバーで、その後、ブラジルに渡り活躍しておりました。

(3)８月15日（水）７時。ロフトプラスワン。高須基仁さんのライブに格闘家の前田日明さんが出演するそうです。楽しみです。

(4)８月20日（月）７時、ネーキッドロフト。外山恒一氏の「逮捕・獄中闘争報告集会」。早く行かないと又、入れませんよ。私もゲストで出ます。他に、今井亮一氏（交通ジャーナリスト）。司会は中川文人氏。

(5)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさ んが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。４時から５時30分。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

【附録】

　選挙、やっぱり自民の惨敗でしたね。J-WAVEで言った通りになりました。しかし、ここまで負けるとは。早く政権交替したらいい。詳しくは次週に。

HOME

今週の主張

バックナンバー

子供たちとの再会

今週の主張８月６日

(1)冷酷、非情な父親でしたよ、私は



山形の「子供部屋」

先週の続きだ。子供たちに再会した話だ。７月26日（木）はハードな一日だった。朝一番の東北新幹線で仙台に行き、刑務所、兄貴の家と回り、山形に行き、最終の山形新幹線で帰ってきた。でも仙台駅では、有名な「ずんだカフェ」に寄った。全てのメニューが枝豆で出来ている。枝豆をすりつぶしたアンコのようなものだ。「ずんたシェイク」と「ずんだ餅」を食べた。子供たちにもずんだ餅を買って行こうと思ったが、子供たちは食べない。だから、自分のためだけに買って帰った。

私は日本中のお菓子を食べているグルメだが、仙台の「ずんだ餅」が最高だと思う。一番うまい。なにも郷土愛で言ってるのではない。「笹かまぼこ」もうまい。これも買って帰ろうかと思ったが、荷物が多くなるのでやめた。ところが、家に帰ったら、宅急便で関口君から仙台の「笹かまぼこ」が届いていた。お中元だ。ビックリした。心を読まれている。どうして、分かったんだよ。「笹かまぼこを買おうかどうか迷っている私」のイメージが関口君に送られたのかもしれない。

それだけ人の心を読めるんなら、小説を書けよ。脚本を書けよ。見沢知廉に続けよ。ともかく、笹かまぼこ、ありがとうございました。



「子供部屋」の中（一つの棚に３列ずつ入る）

さて、子供たちの話だ。宮城刑務所に行って、日本赤軍の丸岡修さんに面会した。昔は敵だったはずなのに、すぐに意気投合する。「同じ時代」を生き、闘ってきたという意識があるからだろう。じっくりと30分間、話をした。終わって、兄貴の家に行った。昼ごはんをご馳走になった。ただ、兄貴はいない。「知らなかったの。アメリカに行ってるよ」と言う。一人でロスアンゼルスに行って、自分で車を運転して走り回ってるそうな。

昔、ロスにいて商社の支店長をしてたから、英語はペラペラだし、車の運転もお手のものだ。去年から今年にかけて、ニューヨークやモスクワにも行っている。元気だ。私の兄だから、多分、私より年上のはずだ。９才上だったかな。じゃ、70過ぎだ。それなのに世界を飛び回っている。元気だ。私なんて、４月末にニューヨークに行っただけで、いまだに時差ボケだ。


「子供」たちと私

さて、子供たちの話だ。なかなか本題に入れない。兄貴の家から今度は山形に行く。仙山線で行く。仙台と山形を結んでいるから仙山駅だ。最近分かった。弟がいる。大学の教授をしてたが、数年前に辞めた。でも又、非常勤講師で２つの大学に行っている。

そこに子供たちを預けているのだ。いや、引き取ってもらったのだ。「早く会いに来て下さいよ」と何度も言われていたが、薄情な父親は、ずっと行かなかった。しかし、今回、思い切って会いに行った。驚いた。家の庭に、わざわざ子供たち用の「家」を作ってくれていた。ありがたい。嬉しかった。ドアを開けて中に入った。「ウワー！お父ちゃん！」と言って子供たちが胸に飛び込んできた。「悪かった。放ったらかしにして…」「お父ちゃんを許してくれ！」と謝った。涙、涙の再会だった。

…と、まあ、私のイメージの世界では、そうだったんですよ。でも、本当は、胸に飛び込んでこない。だって、本だからだ。本だけど、私の子供たちだ。でも、ちゃんと家まで建ててもらって、お前たちは幸せだね、と言った。

だって、泣く泣く、売り飛ばした本も多い。人にあげた本、捨てた本も多い。これらの本のおかげで今の私はある。それなのに、大事な子供たちを捨て、売り払った。お金がなくて、古本屋、ブックオフに大量に本を売った。高価な本も沢山あった。線を引かないで、きれいに読んだ本。さらに、全く読んでない本もある。それらも全て金に困って売った。

(2)落合→仙台→山形。流転の子供たちに涙



『本棚が見たい！３』

冷酷な父親だ。でも売る時は、謝った。「今は貧乏だけど、いつか本が売れてお金が入ったら、必ず買い戻すからね」と。「うん、それまでじっと待ってるよ」と子供たちも言ってくれた。まるで娘を廓に売る父親のようだ。冷酷な親だ。それが私だ。そして、買い戻した子供はいない。どうしようもない父親だ。冷酷非道な父親だ。

でも、どうしても手放せない本は、仙台の実家に送った。親が元気だったので、どんどん送った。２万冊近かった。廓に売られる事を免れた子供たちだ。奇跡的にその時の写真がある。『本棚が見たい！３』に載っている。

この取材が来た時、「みやま荘にはもう本はほとんどありません。仙台の実家に送りましたから」と言ったら、「じゃ仙台に行きましょう」となったのだ。ついでに、その時の記事も紹介しよう。

しかし、この「本棚」は今はない。両親が亡くなって、家を取り壊すことになった。本の大半は処分した。子供たちの大量虐殺だ。しかし、思想的な全集など、惜しい本が一杯ある。「じゃ、思想全集だけでも、もらいますよ」と弟が引き取ってくれた。といっても家に入らない。それで、別に小さな家を建て、巨大な棚をすえて、整理してくれた。ありがたい話だ。随分と出費もかさんだろうに。そこで私の子供たちは元気に暮らしている。

それなのに、ずっと放ったらかしだった。いけない父親だ。今回、久しぶりに対面した。凄い本だ。こんなに読んだのか、この人は。どの本にも線が引いてあり、付箋が貼られ、メモが書かれている。よく読んだもんだ。今なら、とても出来ないよ。そこで、写真を撮ってきた。貴重な資料だ。

そうそう、昔、「みやま荘」に本が沢山あり、台所の戸棚にまで本を入れていた事がある。「朝日ジャーナル」の「若者たちの神々」に出た時、その写真が載った。じゃ、それも紹介するか。そうすると、三つのバージョンですね、本棚は。「みやま荘」の本。仙台の実家の本。そして山形の弟の家の本だ。



仙台の実家にあった「本棚」

では、仙台の実家の本だ。取材されたのは、1996年７月31日。11年前なのか。これが、「月刊ダイヤモンド・エグゼクティブ」に載った。そして、単行本になった。『本棚が見たい！３』（ダイヤモンド社）だ。1998年２月13日発売だ。「３」があるんだから、「１」「２」もある。このシリーズは結構売れたようだ。「３」には、他に橋本治、唐十郎、櫻井よし子、有田芳生、大槻ケンヂ…などが入っている。買ってみたらいいだろう。1600円だ。とても参考になる。では、「鈴木邦男の本棚」の写真とレポートだ。

写真と本文。それに（注）が入っている。全体の写真をいくつかのパーツに分けて、番号を振り、その「地区」の本の特徴を書いている。随分と丁寧に本棚を見て、分析しているんだ。おそれいる。ありがたい。今回は、皆の読書の参考になるかもしれん。

鈴木邦男の本棚


20
鈴木邦男の本棚
待ち合わせのとき、必ず三〇分は早く行って読書の時間をつくるんです。

『本棚が見たい！３』から

待ち合わせのとき、必ず三〇分は早く行って読書の時間をつくるんです。

読書もスポーツも目標があればこそ楽しみも増すというのは正論。そこで打ち上げた花火が“毎月三〇冊”なるノルマ制読書。以後、約二〇年間続けているというから、意志の力は尋常ではない。しかも話題は、毎週欠かさずに数冊買っているという漫画雑誌から映画、演劇、テレビドラマへと、跳梁する。作家や全集の名前が出るたびに後に続く「全部読みました」の言葉。どうやって時間をとたずねるより先に、「ぼくらは本を読むのが仕事なのだから、普通の人よりももっと金をかけて、時間をつくって読まなくちゃだめだと思っています」と締められ、肩身の狭くなる愚問を発せずによかったと安堵する。読書環境は喫茶店や図書館はいうに及ばず、海外旅行の最中も車中で読書していて笑われたとか。このノルマ制読書を始めたのは会社勤めの時代からというから驚きだ。

◎

鈴木邦男さんを語るときに欠かせないのが“民族派”の前に来る“ユニークな”という形容詞だ。右翼を自称する論客がブラウン管に登場しただけでも衝撃だったが、討論の場で思想の押し売りをせず、論理は整然としている。いわばリベラルな右翼の登場は多くの人の先入観を打ち砕いたに違いない。その背景にあるのが本の虫としての顔である。毎月三〇冊の読書を自らに課す自称“元祖・ノルマ読み”だからこそ、話題は硬軟自在に跳梁し、読書の守備範囲も広域にわたる。事実、東京のご自宅で、本棚を拝見している合間に、探検隊に紹介してくれる「最近、この本がおもしろかったですよ」の多いこと。本の山から取り出す『日本文壇史』（伊藤整/講談社文芸文庫）、『日本博覧人物史』（紀田順一郎/ジャストシステム）、『基礎日本語辞典』（森田良行/角川書店）に始まり、漫画や演劇にまで話題は広がっていく。帝国劇場で『芍薬の花』の舞台を見れば「原作者の泉鏡花の作品を全部読んでやろう」と思い、実行してしまうところに本の虫の一端がうかがえる。しかし、併読・乱読・ノルマ読みが主の部屋にしては意外なほど小ざっぱりと片付いている。そこかしこに小さな本の山があるものの、書架の数はテーブルと同じ三本にすぎない。「ほとんどの本は昨年の暮に仙台の実家に送ってしまいました。この部屋では原稿を書くことを主にしようと割り切ったのです。気分によって机を変えながら書いてます」となると、本棚探検に行かざるをえない。聞けば、仙台に送るまでは六畳間にスチール本棚で一五本分の蔵書があったとか。いやがうえにも杜の都への期待がふくらむ。

さて、仙台である。歴史を感じさせる天井の高い民家には懐かしさを感じさせる落ち着きがある。しかし、板張りの部屋に案内されたとたん、探検隊一同の口から悲鳴にも近い驚嘆の声があがった。そのボリューム！　とりわけ古書店を想起させる全集ものの多さ。整然と並んだ新書や文庫の類も全巻揃っているはずだ。

「ぼくが大学生のときに中央公論社の『世界の名著』（全八一巻）、河出書房の『世界の大思想』（全四五巻）などが出て、それを全部読みました。毎月一冊ぐらいずつ出たので、飯を食わなくても買いましたね」

他に全集本は筑摩の『現代日本思想大系』『戦後日本思想大系』、河出の『世界思想教養全集』『世界文学全集』などが並び、いずれも全巻通読しただけでなく、再読したものもあるという。著書の中で『読書もある意味では格闘技」と語るのもむべなるかな。

「早稲田には刺激がいっぱいあったのです。高校卒業までに数冊しか読んでいませんでしたが、大学ではクラスの友人が吉本隆明の『共同幻想論』はいいといった話を普通にするので、読んでないと仲間はずれになってしまいます」

当時はベトナム戦争や文化大革命といった時代的な背景があり、右翼も左翼も思想闘争のための理論武装が盛んだった。加えて知的な刺激に満ちた四年間の寮生活とくれば、環境は恵まれすぎるほど。そんな鈴木青年だったからこそ、卒業後に入った新聞社にも思想運動の世界にも満たされない部分を感じたという。

「皆、全然本を読んでいない。勉強していないんです。このままでは自分がバカになるなぁと思ったので、とにかく月に三〇冊読もうと決意表明しました。そして、乱読の中から面白い人がいたら体系的に読んでみようと」

この決意を公にしたのが、一九八〇年の著書『行動派のための読書術』（長崎出版）であり、“ノルマ制読書”は約二〇年続いている。列車や飛行機に乗るときは数冊の新書や文庫を携帯し、待ち合わせの喫茶店へは三〇分早く行くようにして、どこでも読書の場に変えてしまう。これまでの記録は一ヶ月で何と一〇二冊！

そんな鈴木さんにとって、予備校と専門学校で教鞭をとるようになり、時を同じくして一般誌

への連載が始まった二年前は大きな転機だった。「学校で教えていると絶対に必要な本がありますから、いまは三〇冊にこだわりません。月二〇冊ぐらい。生徒に教えるためにも、一回読んだ本で読み返してみようと思って、漱石や芥川などを全部読み直しました」

ただし、以前の書き込み内容と再読の印象が異なることが多く、重複してでも必要なものは新しい本で読むべきだと認識する。また、手元に多くの本があると読書の中で引用が多くなり、「自分がないなぁと思ったのです。一回全部捨てなくちゃだめだろうと思った」こともきっかけになり、過去の本は仙台に送ることに決めたという。

この新しい環境は、古典へ現代小説へと、読書の幅を以前になく広げている。「内ゲバって何ですか。右翼と左翼はどう違うんですかと質問する生徒に教えていると、自分が原稿を書くうえでも刺激になりますね（笑）」

ちなみに現在は予備校の自習室が格好の読書の場になっているそうだ。

（取材・1996年７月31日）



みやま荘に本が沢山あった頃。流しの下も本棚だった

・いかにも鈴木さんらしいと思わせる『日本の名著』（中央公論社）であるが、どうしても本を処分しなければならなくなったら「他の本は全部捨てても、これだけは取っておきたい」と絶賛する『世界の名著』が右の端から顔をのぞかせている。学生時代から読書ノートをとりながら20年以上かけて全81巻を読み、今日の自分の城が作られたと述懐する。全体の見事な構成だけでなく、ていねいな装丁、刊行にあたり新訳を試みるなど、出版社の意気込みも違っていた。『日本の名著』の現代語訳に対しては「迫力がない」といささか否定的。

・いつでもどこでも時間をつくっては本を読むように努めている鈴木さんにとって、新書の中では軽く読める『講談社現代新書』は外出用に欠かせないシリーズだ。新幹線や飛行機での移動中に読み終えてしまうことを懸念して、旅行には常に数冊携行しているという。

・小説は大学に入るまではほとんど読まず、内心軽視していたという。硬派だったんですね。自分で原稿を書くようになって必要を感じ、半ば義務で読んだのが『新潮日本文学』（新潮社）全64巻。その結果が、中央公論社の『世界文学全集』などへとつながっていく。日本の作家の中でいちばん好きなのは高橋和巳と語り、ノルマ制の下地になっているのが（？）彼の「表現と勉強は１対４ぐらいがよい」という言葉。現在「毎月100枚は書いているので、その４倍は本を読もう。あるいは芝居を見たり映画を見たり、刺激になる部分をつくろう」とノルマの目安にしている。

・１巻読むと最後まで読まなくてはいけないと最も強く思わせるのが歴史全集だ。新しいシリーズが出るとつい買ってしまい「世界の歴史、日本の歴史は何回繰り返して読んだかわからない。その度に新しい発見がある」という。残念ながら限られた誌面では鈴木さんの読書領域の半分も紹介することは難しい。仙台の書庫を虫眼鏡片手に探検してみてほしい。画集、現代思想、プロレス、それに『柔術秘伝絵巻』なんて本もあるぞ。百聞は一見にしかずである。

自身の著書と最新の読書傾向がわかる東京の本棚のひとつ。プロレス関連が多いようだが、注目

は床に積まれた本の山。幸田文の本も「人に教えるようになったからこそ読み、認識を新たにした」１冊とか。２ヶ月かけて夏目漱石を読破して「時代の人」だと感じたそうだが「いつも本人は不機嫌で、父親から金を出してもらって、居候で、それで文学を目指して本ばかり読んで……環境が似ているかも」と目を細めて笑う。

【だいありー】



「J-WAVE」で。（7月24日）

(1)７月30日（月）朝まで開票速報を見てたので眠い。自民惨敗だ。「姫の虎退治」、丸川珠代、大河原、亀井…と女性が大活躍。「イメージ選挙」だ。メディアに注目される〈話題〉と〈物語〉を作った候補が勝った。「９条ネット」「維新政党・新風」「女性党」「共生新党」だって大化（ば）けする可能性はあったのに、残念だ。有田さんも落ちちゃった。

「９条ネット」は全共闘の人も多いし、赤軍関係者も応援してるんだから、昔のように、「ブルジョワ憲法打倒！」「共和国憲法を！」と言ったら、大騒ぎになり、当選したかもしれない。（いや、ムリかな）。少なくとも、もっと問題提起できたろうよ。私も熊本で出る予定だったらしい。詳しいことは８月20日に、ネーキッドロフトで。

日本国体学会が発行している『国体文化』（８月号）が送られてくる。何と「千号記念特集号」だ。凄い。里見岸雄の思想を受継いで千号だ。私もお祝い原稿を書いた。「レコンキスタ」第56号で「里見特集号」やった。それはレコン一番の思い出だし、誇りだったと思う。そのことを書いた。

(2)７月31日（火）午後、骨法整体に行く。どんどん身体が若返ってゆく。身体が固くて、なんか、甲羅を背負っているようだったが、全て取れて、体が軽くなった。膝もよくなったし、歩くのが楽しい。夜は柔道に行った。終わって、「ロイヤルホスト」でサラダバーを食べながら、３時間、読書した。体と脳に栄養補給をした。

(3)８月１日（水）「マガジン９条」に私の原稿（二回目）が掲載された。

午後１時、映画「靖国」の試写会に行った。中国人監督・李纓さんが撮ったドキュメンタリーだ。衝撃的な作品で、考えさせられた。なかなかよかった。いろんな考え、思いがあって当然だ。一つの考えだけを強制しようとするのはおかしい。靖国についても皆、思い切って発言したらいいんだ。

夜８時、ロフトプラスワン。島田洋七の「笑魂伝承」33回。最終回スペシャルで爆笑問題が特別ゲストで出ていた。面白かった。超満員だった。



「里見特集号」は一番の誇り

(4)８月20日（木）午後２時から座談会。夜までずっと。ハードだ。終わって、皆で酒を飲んだ。「お誕生日おめでとう」と皆に言われた。「何のこと？」。あっ私のことか。忘れてた。還暦を過ぎたらもう年齢はないんだよ。「でも年を重ねてシブクなるのもいいですよ」「男の顔は履歴書、って言うから」。「女の顔は請求書」と言ってた人もいた。こっちの方が真理だろう。そのあと、ロフトへ。『オタク論！』出版記念トーク。唐沢俊一、岡田斗司夫。面白

かった。

「国体文化」（8月号）より

(5) ８月３日（金）図書館で勉強をした。夜、講道館に行った。

(6) ８月４日（土）午後１時、青山葬儀場。小田実さんの告別式。平成２年の「朝生・日本の右翼」に出た時が初対面だった。元気一杯だった。その後、何度か会った。又、じっくり話を聞きたかった。残念だ。終わって、「追悼デモ」に参加した。土井たか子さん、福島みずほさん、佐高信さん、吉川勇一さんなどに会う。

【お知らせ】

(1) ８月６日（月）７時半から、ロフトプラスワン「じっとしてたって何も始まらない。大地を揺るがせ。vol1」と銘打ったイベント。スペシャルゲストは植垣康博さん（元連合赤軍兵士）、伊藤乾さん（東大助教授）、そして私。絵画出演は菊田麻衣さん。映画「実録・連合赤軍」の若松孝二監督も急遽、出演してくれることになりました。

(2) ８月10日（金）7:00p.m. 一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。笹井宏次朗先生（日本国体学会主事）の「一水会35年と海外からみた日本」。笹井氏は一水会創設のメンバーで、その後、ブラジルに渡り活躍しておりました。

(3) ８月15日（水）７時。ロフトプラスワン。高須基仁さんのライブに格闘家の前田日明さんが出演するそうです。楽しみです。

(4) ８月20日（月）７時、ネーキッドロフト。外山恒一氏の「逮捕・獄中闘争報告集会」。早く行かないと又、入れませんよ。私もゲストで出ます。他に、今井亮一氏（交通ジャーナリスト）。司会は中川文人氏。

(5) ９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさ んが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。４時から５時30分。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

HOME

今週の主張

中国に行ってきた
＝そして、ネクタイの謎

今週の主張８月13日

バックナンバー

(1)中国は広かった。暑かった！



北京市内で（８月８日）

中国に行ってきました。暑かったです。キツかったです。８月７日（火）～９日（木）の２泊３日。強行軍でした。国際的な、有意義な会談もしました。今、話題の中国新幹線にも乗りました。あれっ、本当は「山陽新幹線」というのかな。いかんな。バレちゃった。そうですよ。白状します。日本の中国地方に行ってきたんですよ。島根、鳥取…と。

昔、鳥取砂丘に行ったな、と思い出しました。新婚旅行です。違うな。植垣康博さん（元連合赤軍兵士）の取材です。獄中27年で、出てきて、鳥取の自宅に帰っていました。そこで取材に行ったのです。「創」に載りました。出獄後、初のインタビューです。朝、飛行機で行き、夜、飛行機で帰りました。一日、話を聞き、タクシーで植垣さんは鳥取空港まで送ってくれました。

砂丘の前を通ったので、タクシーを止めてもらい、二人で歩きました。「ほぉ、これが日本最大の砂丘か」と感動しました。でもラクダはいないな。アラビアのロレンスもいないな。それに砂漠だから歩きにくい。「でもあの雪山に比べたら楽ですよ」と植垣さんはズンズン歩きます。そうですね。連合赤軍の雪山の総括・行軍に比べたら、何だって楽です。〈極限〉を知った男には怖いものはありません。私など何も言えません。

鳥取から、つい連合赤軍を思い出してしまいました。元は中国から思い出したんですね。すんません。中国の話は、どう書いていいものか迷ってます。どこまで書けるのか。全てはシークレットなのか。ウーン、難しい。一週間考えて、来週、書きます。では、ネクタイの話です。



北京オリンピック・メインスタジアム（建設中）の前で

実は、中国に行く時に、10冊位、本を持っていた。重村智計の『北朝鮮はなぜ潰れないのか』（ベスト新書）、井田昌之、進藤美希の『オープンソースがなぜビジネスになるのか』（ＭＹＣＯＭ新書）など、「なぜ？」本ばかりだ。今、集中的に「なぜ？」本を読んでいる。山田直哉の『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』（光文社新書）はベストセラーになった。これは推理小説的な面白さがあって、ベストセラーになった。なかなかいい本だ。これに刺激されて次々と「なぜ？」本が出ている。いや、これ以前から出ている。好奇心の強い私としては、それら「なぜ？」本を全部読んでやろうと決意した。そして世界中の「なぜ？」本の７割を読破した。以下はその中間報告だ。

当然、当たり外れがある。「面白かった」「なるほどと思った」ものもあるが、下らないものも多い。時間のムダだった。金を返せ、時間を返せ！と叫びたい本もある。中沢信午『マリモはなぜ丸いのか？』（中公新書）は面白かった。あれは、湖のマリモという藻が集まった「ゴミ」なんだが、あんなに見事な丸になることは少ない。世界中の湖に似たようなものはあるが皆、不細工だ。なぜ阿寒湖のマリモだけが美しいのか。その謎を探っている。これは読まにゃアカン湖と思って読んだ。要はだな、ただ、藻が集まっただけじゃなく、湖底でローリングしたり、湖の水流にもまれたりして、いろんな刺激があって、ああしたスレンダーでビューティフルなボディが生まれたんだな。だから人間も見習わなきゃならん。勉強し、努力し、もまれ、それで立派な人間になる。

…と私は勝手に「教訓」を得た。やはり、野生のマリモだから美しくなるんだ。自然の脅威の中でもまれ、闘うからだ。野生のライオンやトラは長時間、長距離を走り回っているから美しい。動物園のライオンやトラは醜い。

ネコだって野生のネコは美しい。飼い猫で、やたらデブのネコがいる。まるでブタのようなネコがある。会った時、「醜いよお前は。ダイエットしろよ」と言ってやったが、全然聞く耳を持たない。それに肥満じゃ寿命も短いよ。そんなことも分からんのか。『なぜネコはダイエットしないのか』を書いてみたい。

(2)「なぜ？」本ばかりが氾濫する日本

他の「なぜ？」本だ。私の「読書手帖」から、ちょっと書き抜いてみる。

ロバート・M・サボルスキー『ヒトはなぜのぞきたがるのか』（白揚社）

ゆうきとも『人はなぜ簡単に騙されるのか』（新潮新書）

広瀬弘忠『人はなぜ危険に近づくのか』（講談社＋α新書）

千葉征爾『オオカミはなぜ消えたか』（新人物往来社）

佐高信『ニセ札はなぜ通用しないのか』（角川文庫）

香山リカ『なぜ日本人は劣化したのか』（講談社現代新書）

井上昌次郎『動物たちはなぜ眠るのか』（丸善株式会社）

原隆之『アメリカ人は、なぜ明るいか』（宝島社新書）

星川淳『日本はなぜ世界で一番クジラを殺すのか』（幻冬舎新書）

城繁幸『若者はなぜ３年で辞めるのか』（光文社新書）

福田直子『ドイツの犬はなぜ吠えない』（平凡社新書）

吉岡逸夫『なぜ日本人はイラクに行くのか』（平凡社新書）

村千鶴子『消費者はなぜだまされるのか』（平凡社新書）

半藤一利他『あの戦争になぜ負けたのか』（文春新書）

井上宏生『日本人はカレーライスがなぜ好きなのか』（平凡社新書）

武村政春『ろくろ首の首はなぜ伸びるのか』（新潮新書）

島泰三『親指はなぜ太いのか』（中公新書）

小田恒夫『ザリガニはなぜハサミをふるうのか』（中公新書）

岩井保育『旬の魚はなぜうまい』（岩波新書）

岡嶋裕史『暗証番号はなぜ４桁なのか？』（光文社新書）

小西正一『小鳥はなぜ歌うのか』（岩波新書）

黒川伊保子『怪獣の名はなぜガギグゲゴなのか』（新潮新書）

蓮実香佑『森のキノコはなぜ水玉模様なのか』（ＰＨＰガーデナーズグループ）



出石尚三『男はなぜネクタイを結ぶのか』（新潮新書）

これだけの「なぜ？」本を読んでいる。他にも一杯読んでる。本屋に行ったらこの何倍もの「なぜ？」本があるだろう。誰か時間のある人は調べてほしい。じゃ「７割」は読破してないか。世の中は「なぜ？」「なぜ？」で満ちている。澤口俊之『なぜいい女はパッとしない男に惚れるのか？』（アスキー新書）。これは凄い。藤原紀香、お前のことだよ！他にうろ覚えだが、こんな本もあった。『新右翼はなぜ枝豆が好きか』『左翼はなぜ皆、ジャガイモ顔なのか』『ヤクザはなぜヤクザ顔なのか』『教師はなぜロリコンなのか』

ウーン、まだ書店には出てないか。私のイメージの中だけの本か。

では、現実の話に戻る。最近読んで面白かったのはこれだ。

出石尚三『男はなぜネクタイを結ぶのか』（新潮新書）

この本を読むまで、その理由は簡単だと思っていた。いろんな人が言っていた。私も、「そうだ」と思い、「それしかない」と思っていた。それは、

「ワイシャツのボタンを隠すため」

これだった。つまりですな。ワイシャツのボタンが取れたり、糸がほつれたりして、落ちやすい時がある。それじゃ見苦しい。又、いつボタンがとれるか分からない。その不安を解消し、いざボタンが取れた時の「事故」隠しだ。そのためにネクタイがある。これが世の「常識」だった。他に理由はない。そう思ってきた。

ところが、出石尚三の『男はなぜネクタイを結ぶのか』を読むと、〈いや、そんなことはない〉と言うんですな。そして、説得力のある反論の数々が出てくる。ウーン、私は〈論破〉されました。こんな論破も気持ちのいいもんですな。「うん、そうか」「俺の思ってた通りか」という本は、かえってつまらん。こういう「意外性」があって、自分の「思い込み」を論破してくれる本こそが、いい本だ。

大体、「ボタン隠し」という説など全く歯牙にもかけてない。紹介もしていない。これこそ、最強唯一の「理由」だと思ったのに。それ以外に、「ネクタイをする理由」があるのか。ネクタイのレーゾン・デートル（存在理由）があるのか。「ある」と出石は言うんですな。

(3)ネクタイは「束縛」か。「誇り」か？



ネクタイのいろんな結び方

では、ネクタイをする理由だ。

〈第一〉「お守り」説。フランス語でネクタイのことを「クラヴァット」（cravate）と呼ぶ。1635年頃、ルイ13世はフランス全軍を閲兵した。クロアチア兵は首に布をまいていた。「あれは何だ」と王は側近に聞いた。兵の出身地を聞かれたと思い、「ははあ、クロアチア兵でございます」と答えた。「クラヴァット」と答えた。王は、「そうか、あの布がクラヴァットというものか」と思った。それ以来、ネクタイを「クラヴァット」と言うようになった。いや、「クラヴァット」が基になり、英語の「ネクタイ」になった。

では、クロアチア兵が首に巻いていたのは何か。実は、クロアチアの「お守り」だった。女の衣装の一部を首につけていると戦死することがない、と信じられていたのだ。母や姉、妻や恋人の服の切れ端を身につけていれば、必ずや生還するだろう。昔の日本にも「千人針」というのがあった。特攻隊のマフラーも、そういった「お守り」だったのかもしれない。

〈第二〉ルイ13世にとって、クロアチア兵の「結ぶ布」は粋に見えた。しかし、首に布を巻いたのはこれが初めてではない。たとえば古代ローマの時代に、「フォカーレ（focale）」と呼ばれるネック・ウェアがあった。初めローマ兵の首布であり、やがては演説者のアクセサリーになった。演説者は当時の知的エリートであり、大切な喉を守るという大義名分があった。うん、これが、本当の「理由」であり、ネクタイの「起源」かもしれない。

志の輔さんが出ているNHKの「ためしてガッテン」でも、やっていた。ネクタイのことじゃなく、「首を温める」ことだ。首さえ温めれば、全身が暖かく感じる。逆に、いくら厚着しても、首に冷風を吹きかければ身体全体が寒く感じる。首は大事なんだ。

骨法整体で教えてもらったが、肩こり、腰痛の原因は、ほとんどが首だそうだ。首のゆがみが万病の元になっている。私は首を治療してもらい、腰病、背中の痛みが治った。「夏でも、襟のあるものを着て、首を保護した方がいい」と言われた。ネクタイをする時は、一番上のボタンまで止めて、さらにネクタイをする。やはり、「首を守る」ためなのか、ネクタイは。

志の輔さんの落語会に行ったら、腰病で苦しいと言っていた。医者に行ってる。骨法整体なら一発で治りますよと紹介してあげた。

〈第三〉首は顔の延長だ。だから、ネクタイは「首の衣装」だ。というよりも、「顔の衣装」だ。いわば、「男の化粧」なのだ。出石は、思い切ったことを言う。

〈女の顔には化粧という衣装がある。女がファンデーションを塗り、眉を引き、紅を刷（は）くように、男はネクタイの生地を選び、柄を吟味し、結び方に工夫を凝らすのだ。

いつの時代にか、もしすべての男が化粧を施すようになったら、ネクタイへの興味は半減するだろう。ネクタイはこの上なく控え目な、そしてこの上なく効果的な男の化粧なのである〉

〈第四〉「ネクタイは男根の象徴」という説もある。本来は弱い男共が、こわい世間と闘い、女と闘うための象徴ではないのか。ネクタイの大剣（太い部分）のことを「プレイト」（剣）と呼ぶし。

又、ネクタイをしてると、「男だ」と一見して分かる効果もある。小柄で、なよなよとした男だと、女と間違われる。電車の中でも女と間違われて痴漢された男もいた。だから、「失礼ね、私は男よ！」と自己主張する為にもネクタイは有効だ。

又、ネクタイを見て、女はその気になる。セックスを連想し、燃える。この首にぶら下がりたいと思う。「私もネクタイになりたい」と思う。それが、「ネクタイを贈る」という行為になる。そして、ネクタイ（肉体）関係になる。これはフロイトも言ってる（かもしれん）。

男は女の胸元を見て、「こいつはＣカップだな」とか、「Ｄはあるだろう」「マイナスＡカップかな」と見積もる。女も男のネクタイの幅を見て「Ａカップかな」「Ｂかな」と思う。そんなことはないか。でも、男の象徴に合わせてネクタイの幅を決められたら大変だね。今のように、細いのも太いのも、「自己申告」で勝手にネクタイを結んでいる方がいい。

〈第五〉「男の首輪」だという説。

〈マイケル・フィッシュ登場以前のネクタイは、主として「紳士の首輪」であった。ちょうど犬に首輪がない場合、野良犬と見なされるように、要するに、紳士としての体面を保つための必要悪としてのネクタイがあった〉

なるほど、ありうる。紳士であること、何かに帰属することは、何かに「縛られる」ことだ。ネクタイはまさにそれを象徴している。だから、反体制を気取る人々は、ネクタイを外す。でも、それは「ノー・ネクタイ」と呼ばれる。その呼び方がまだネクタイを意識している。ネクタイの束縛からは脱れていないのだ。

女の子で、ファッションとして首輪をつけてる人がいる。ペットショップで、わざわざネコの首輪を買ってきて付けてる人もいる。「あなたのペットになりたいニャン」という意思表示なんだニャン。

(4)ネクタイは、生死を賭けた〈武器〉だったのかもしれん

さて、どうでしたか。１～５までの理由。どれか一つが理由だというより、その全てがからみ合って、ネクタイが続いてきたんでしょう。一つの理由だけなら、時代が変わり、その「理由」がなくなったら、ネクタイは廃止されるはずです。多くの理由があって、手放せなくなったのです。不思議なことに、「理由」は今でも、さらに、増えてます。「うん、こんな理由もある」「あるいは、こういうことかも」…と。これからは私の考えた「理由」です。

〈第六〉「いつでも自殺できるように」。この世が嫌になったら、ネクタイを木の枝にひっかけて首を吊れる。警察に捕まったことのある人なら覚えているだろう。捕まると、まずネクタイやベルトを没収される。自殺の恐れがあるからだ。

でも、「いつでも死ねる」という覚悟は、かえって、緊張感を持って生きることになる。いつでも責任をとる。イザとなったら生命を投げ出す。という決意にもなる。昔の武士が刀を差していたのと同じだ。小刀は自決用に持っていたんだ。

〈第七〉「平和の象徴」。「いつでも死ねる」という事は、「いつでも殺される」ということ

だ。敵はいつこのネクタイで自分を絞めるか分からない。いきなり飛びつかれて、ネクタイで絞められたら終わりだ。

女が男を殺す時、酒に酔わせて、男のネクタイで絞め殺すのが多い。男も馬鹿だ。自分を殺す道具をいつも持ち歩いているなんて。でも、男が女を殺す時も使う。自分のネクタイをほどいて女の首にかける。ネクタイじゃ細くて、切れそうだと思う人もいるだろう。でも心配はいらない。それに、手になじんで、絞めやすい。体験者が言うのだから間違いない。

そうそう。「平和の象徴」だ。いつでも首を絞めて殺される。そんな危ない状態で私はあなたの前に出ています。という事だ。「自分の弱点」はこれですよ、と示している。つまり、「平和的態度」を示しているんですな。「握手」と同じだ。自分の「利き腕」をあなたに預けますよ。危害を加える意志はありません。それを示すための儀礼ですな、握手は。それに、「何も持ってませんよ」という意味もある。ネクタイも同じ。「平和的に話し合いに来たんですよ」という意思表示だ。つまり、ネクタイは「９条」なんだな。世界的９条だ。世界遺産にしよう。

(5)だから、「なして君」と呼ばれたんじゃょ、この少年は

はい、七つですね。ネクタイを結ぶ理由は。他にもあるかもしれません。あったら教えて下さい。では、ネクタイの「結び方」はいく種類あるのでしょうか。私は二つしか知りません。それに、今は、一つしかやってません。まァ、全体でいっても、５つ位かな。いや、十はあるかな。と思ってたら、「そんなもんじゃない！」と出石尚三は言います。

〈『ネクタイの数学』（トマス・フィンク・ヨン・マオ共著。青木薫訳。新潮OH！文庫）には、85通りの結び方が紹介されている。又、『クラヴァット』（ダヴィデ・モスコーニ、リカルド・ヴィラローサ共著。フラマリオン、未訳）という本には188もの結び方が登場する〉

気が遠くなるような数字ですね。188の全部を覚えて、毎日変わった結び方をしている人がいるんでしょうか。いないよね。じゃ、誰が一番多く、結び方を知ってるか、テレビでコンテストをやってみたらいい。延々と188をやってみたらいい。

さて、今まではネクタイの「発生の理由」と「効用」ばかり書いてきました。しかし、〈害〉を説く人もいます。ちゃんと紹介しておかないと公平じゃないでしょうから。出石の本に載ってましたが。

1917年、アメリカの医師、ウォルター・G・ウォルフォードが『あぶないネクタイ』という本を出しました。頭痛、めまい、湿疹、日射病、扁桃炎、リウマチ、脳卒中、破傷風、突然死…。それら全てはネクタイを結ぶことに遠因があると。

でもこの頃は、高いカラーで、ハードカラーだった。首をギューギュー締めつけた。女のコルセットのようだ。その上にアスコットタイやボウ・タイを結んだ。だから血の流れも悪くなるし、身体の調子も悪くなる。

ちょっと話は変わる。いや、この延長線上の話だ。元タイガー・マスクの佐山聡さんはプロレスを引退し、市街戦を想定したリアル・ファイトの「掣圏道（せいけんどう）」を創始した。道着は背広型にした。昔は日本人は着物を着ていた。だから柔道着、空手着は、ダブダブの「着物型」だ。しかし、今、着物を着てる人はいない。皆、スーツだ。だったら、今はスーツを着て闘った方がリアリティがある。そう考えたのだ。

後楽園ホールで「掣圏道」はやっているが、デカイ男たちが背広型の道着を着て闘っている。

顔も恐いし、何やら、ヤクザが街で喧嘩しているようだ。でもネクタイはしていない。「普通の設定」ならネクタイもすべきだ。佐山さんにそう言ったら、「そうなんですよね。それも考えてます」と言う。又、「ネクタイを使った技も考えています」と言ったが、いまだ実現していない。ネクタイを使って首を絞めたら、危ないからだろうし、又、あまりにリアルだから、真似する人が出る。それを心配してるのだろう。だからあまりにリアルだと安心して見ていられない。フィクションがあってこその〈闘い〉なのだろう。オワリ。



（左から）私、佐山サトルさん、相原コージさん（漫画家）

〈附録〉「いい疑問は半分以上の答えになっている」という言葉があります。いい疑問、質問があるから、いい答えを引き出せる。それと共に、疑問の中に、もう答えが含まれている。ということです。疑問に思い、考える。それが大切なんですね、人生は。

私は1960年の山口二矢のテロに「なぜ？」と思い、又、「生長の家」の谷口先生がそれを弁護したことに「なぜ？」と思い、それが右翼運動に入るキッカケになりました。又、小学生、中学生の時も、先生に、「なぜ？」「なぜ？」とよく聞いておりました。秋田弁で、「なして？」「なして？」と聞いていました。だから同級生からは「なして君」とあだ名をつけられました。先生も面倒くさがって、「さー、なしてでしょう」と論点を外していました。それで、「なしてでしょう」という言葉も学校中で流行りました。

と、ここで幻聴が聞こえました。「知ってるおじさん、知ってるかい？」「なんだろ坊や、なんだろな？」という歌です。かなり昔、ＮＨＫでやってました。子供の疑問に「知ってるおじさん」が答えるんです。「子供電話相談室」みたいなもんですね。「シマウマは白い馬に黒い縞が出来たんですか。黒い馬に白い縞が出来たんですか？」といった素朴な疑問に答えるんだな。

最近も14才に向けて、「右翼ってナーニ？」「左翼ってナーニ？」という本も出てるし。これも、「なぜ？」本だ。じゃ、私も書こうかな。『「なぜ？」本はなぜ売れるのか』。オワリ。

【だいありー】



暑いのでペンギンを抱いている

(1)８月６日（月）７時、ロフトプラスワン。「大地を揺るがせvol.1」で、「連合赤軍事件」について。植垣康博さん（元連合赤軍兵士）、伊藤乾さん（東大助教授）、若松孝二監督、菊田麻衣さん、そして私。超満員でした。話も盛り上がりました。若松監督の「実録・連合赤軍」は来年早々に封切りだそうです。楽しみですね。「連赤ブーム」になるでしょう。

(2)８月７日（火）～９（水）。中国に行って来ました。日本の「中国」地方です。でも、本当は、あの中国です。だって写真を見たら分かるでしょうが。詳しくは来週。

(3)８月10日（金）午後７時から一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。笹井宏次朗先生（日本国体学会主事）の「一水会35年と海外から見た日本」。一水会創設の話から、ブラジルに渡って

の生活。波瀾万丈の闘いの日々を語ってくれました。演説もうまいし、実に迫力がある。「街宣の名手」で、笹井氏が街宣すれば、皆、足を止め、聞いたものでした。

(4)８月11日（土）午後、骨法整体。先週整体に行ったら、「夏休みの前にもう一回、来なさい」と言われた。「来週はちょっと忙しいです」と言ったら、「又、フランスに行くの？」と言われた。ギクッとした。心を読まれている。

そうだ。新聞記者にも言われたな。「フランスに行ってきたというから真面目に読んでたら、嘘だったんですね。うまく騙されましたよ」。いや、嘘じゃないよ。行ってきたのは事実なんだから。

この日、６時から劇団再生の稽古を見に行く。見沢知廉氏の「天皇ごっこ」だ。皆、かんばっている。素晴らしい舞台になるだろう。楽しみだ。

【お知らせ】



９月に見沢知廉氏の芝居が上演される

(1)８月15日（水）この日の東京新聞は「終戦特集」で、私も少し喋っております。７時。ロフトプラスワン。高須基仁さんのライブに格闘家の前田日明さんが出演するそうです。楽しみです。私も行きます。

(2)８月20日（月）７時、ネーキッドロフト。外山恒一氏の「逮捕・獄中闘争報告集会」。早く行かないと又、入れませんよ。私もゲストで出ます。他に、今井亮一氏（交通ジャーナリスト）。司会は中川文人氏。

(3)９月６日（木）～９日（日）見沢知廉原作・高木尋人脚本の「天皇ごっこ」が上演されます。woody theater中目黒で。ぜひ見て下さい。

(4)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさ んが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。４時から５時30分。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

【お知らせ・２】



「三島由紀夫と楯の会」「革命」などが載っている

(1)メルマガ「北海道人」では和多田進さんとの往復書簡をやっております。政治、哲学について、かなり真剣に、ハードにやっております。

(2)「マガジン９条」では「私の憲法論」が二回、掲載されました。

(3)今、発売中の月刊「創」では「実録・連合赤軍」の映画のこと、そして日本赤軍の重信房子さんと会ったことなどについて書いてます。

(4)８月２日、宮本邦彦警部に「都民の警察官」特別賞が贈られた。宮本さんは、半年前、線路に入った女性を助けようとして電車にはねられ殉職した。当時53才。

先月は、学生運動の同志で、一水会創設メンバーの田原康邦氏が亡くなった。「内外タイムス」の記者だったが、「人のスキャンダルは書きたくない。人のいい点を見つけ、書く仕事がしたい」と生長の家の日本教文社に移りました。とても優しくて、心のきれいな人でした。「邦」のつく人はそんな人が多いですね。「楯の会」の伊藤邦典氏もそうです。

(5)『日本人はどう走ってきたのか＝団塊世代の「夢」の検証』（1400円・講談社）が発売されました。共同通信が取材し全国の加盟紙に配信した44回の連載をまとめたものです。「革命」「学園闘争」「三島由紀夫と楯の会」などがあります。「楯の会」の伊藤邦典氏らが発言しています。私のコメントも載ってます。読みごたえのあるいい本です。

(6)木村三浩氏の『憂国論』（1700円・彩流社）が発売されました。実にいい本です。タイムリーです。民族派運動のバイブルになるでしょう。ぜひ読んでみて下さい。

(7)映画「Tokko（特攻）」が渋谷シネ・ラ・セットで上映中です。又、新藤兼人監督の「陸（おか）に上った軍艦」は渋谷ユーロスペースで上映中です。二本とも実に素晴らしい映画です。ぜひ見て下さい。

HOME

今週の主張

バックナンバー

中国的報告 2.0

今週の主張８月20日

(1)ちょうど１年後に北京オリンピックが開催だ



皇帝になっちゃった（頤和園で）

８月７日（火）～９日（木）、中国に行ってきました。２泊３日の強行軍でした。７日は午前７時07分発の新宿スカイライナーに乗って成田へ。４月末にニューヨークに行った時もこのスカイライナーだったな、と思い出しました。午前10時55分発のＪＡＬ781便で出発。13時50分北京着。向こうの時間で14時50分でした。

前日はロフトで植垣康博さん、若松孝二さん達と「連合赤軍」について遅くまでトークしてたので、余り寝てない。眠いけど北京での会議の準備をしなくてはならない。それで、資料のコピーや参考文献を必死に読んでました。そうしたら、アッという間に着きました。「この位の旅はいいね」と木村氏と語り合いました。ニューヨークに行った時は14時間だったし、疲れ切った。又、木村氏もイラクには20回以上行ってるが、それ以上の時間がかかる。



国家水泳センターで。木村三浩氏と

北京空港は少し雨が降ってました。迎えの人が来てくれました。車でホテルへ。大きなホテルでした。「向こうの人は既にいらっしゃってます」と言う。ホテルの部屋に荷物を置いて、すぐに話し合いに入りました。さらに夕食をとり、酒を飲みながら12時過ぎまで、話し合いは続きます。「今回のことはまだ発表しないで下さい」とのことなので書けない。

ただ、緊張のうちにも楽しく会議は進み、お酒も随分と飲みました。でも前の夜、ほとんど寝てない。旅の準備もあり、２時間位寝ただけ。だから、遅くなると、眠くて、大事な会議だったが私は12時に失礼して寝た。若くて元気な木村氏は更に酒を飲みながら、会議。

翌８日（水）は朝11時に、又、別の人達と会う。学者グループで、日中問題について真剣に話し合う。昼食（中華バイキング）をはさんで、話し合った。午後２時から５時までは休憩。その後、夕食をはさんで夜中まで日中の諸問題について討論。夜中まで話し合った。次の日の午前中も又、討論。そして帰国。つまり、ほとんどの時間が討論、討論だ。しかし、それは書けないので、休憩時の話をする。この時間を利用して、北京の街を案内してくれた。「どこ行きたいですか？」と言われたので、「勿論、天安門広場」と答えました。偉大な毛沢東同志のおる所だ。いや巨大な肖像画のある所だ。

「じゃ、行きましょう」と車に乗ったけど、「あっ、今日は車は入れません」。北京オリン

ピックが、ちょうど１年後の８月８日に開幕する。それを祝って、カウントダウンの１万人イベントが行われている。だから車は一切、入れない。バスで行って見てもいいが、それじゃ夕方の会議に間に合わない。「じゃ、天安門はこの次に」という事になった。

「今は天安門の上まで登れるんですよ」と言う。エッ？文化大革命の時に毛沢東が何十万人もの人民を下に見て手を振ってた所か。おそれ多い。「今や観光スポットで開放してますから」。じゃ、なおさら見てみたい。「次」の機会が待ち遠しい。案外、早く行けるかもしれないな。

「天安門を見れないのなら、オリンピックの会場を見たいな」と言ったら、案内してくれましたよ。まずは、開会セレモニーの行われるメインスタジアム。骨組みだけの巨大なオブジェのようだ。本当に１年後に出来上がるんだろうか。「これは何をイメージしてるんですか？」と木村氏。「鳥の巣」です。なるほど。そんな感じだ。私はトリ年だから、懐かしい感じさえした。

それから、スイミング会場。水をイメージした青い巨大な会場だ。他に、選手村などを見た。マンション、ホテルも建築ラッシュだ。東京オリンピック直前の東京のようだ。暑いし、凄い砂ぼこりだ。又、車が多い。高速道路や地下鉄も作ってるというが、間に合うのだろうか。大変だ。どこへ行っても車は渋滞だ。イザとなったら車は一切止めて、オリンピック関係の車だけを入れるのかもしれない。がんばれ！中国。街中、オリンピックの標語だらけだった。

(2)28年前の私は、まるで紅衛兵でしたよ



エドガー・スノーの碑で

それから北京大学に行った。広大だ。中に大きな湖があるし、お寺の塔もある。大学が湖を掘ったわけじゃないだろう。そんな地区全体を大学にしたんだろう。

中に、エドガー・スノーの碑もあった。さっそく記念撮影。スノーは中国革命について、『中国の赤い星』を書き、世界に発信した。中国にとっても偉大な人だし、恩人なんだ。

僕は「生長の家学生道場」にいる時に読んだ。道場の先輩で国領（くにわけ）秀雄さんという人がいた。中央大学で、もの凄い勉強家だった。マルクス、レーニンの全集も揃えて読んでいる。スノーやスメドレーの本も読んでいて、「これはいいよ」と言われた。「でも、共産党でしょう。アカの本なんか読む必要ないでしょう」と私は言った。反共バカダ大学生だった。「いや、そんなことはない。敵と闘うためには敵を知らなければならない」と言う。「それに毛沢東は単なる共産主義者ではない。民族主義者だ」と言う。嘘つけ、と思った。

でも先輩の熱意に負けて読んだ。感動した。ウーン、オレは狭量だったなと思った。ただのアホだったと反省した。今から思うと、いい時代に生きたんだ。今の保守主義者たちは「ペッ、左翼なんて！」と、初めから読みもしない。そして中国、韓国、北朝鮮を許すな！やっちまえ！という排外主義だ。その点、僕らは学園で敵と肉体的にぶつかり、殴り合いをし、命をかけて闘った。と同時に、敵の〈実力〉も知ったし、彼らについても勉強もした。〈偉大な敵〉だったから、学ぶ必要もあったのだ。



まるで紅衛兵ですね（28年前、中国を訪れた時）

さて、昔話は終わり。北京大学の次は、頤和園（いわえん）に行った。うーん、懐かしい。昔、来たような気がする。ここは西太后の夏の別荘だった。湖があり、涼しい風が吹く。紫禁城の裏から船でここまで来れる。いい所だ。巨大な石の船もある。建物も豪華だ。贅の限りを尽くしている。

うん、懐かしい。昔々、西太后のこの別荘を作るために駆り出された奴隷だったのかもしれん、私は。「前世の記憶」が甦ってきたのか。

「何言ってるんですか。20年前に来た時、ここも見てるんでしょう」と木村氏に言われて、ハッと我に返った。そうか。そうかもしれん。木村氏は世界中、行ってるが、中国は初めてだという。私は貧乏で、デブ性だから余り、外国には行ってない。でも、中国には、20年ほど前に行った。　家に帰って調べてみたら、何と28年前だった。1979年（昭和54年）なのだ。この前の年に、ヨーロッパを回った。それを含めて、「レコンキスタ」に何と10回も旅行記を連載して、「モスクワ、ベルリン、北京」と題して、２頁ずつ書いた。私が一水会代表だったから、好き勝手にレコンの紙面を使っていたのだ。ひどい人だ。申しわけない。

レコン37号（昭和53年11月号）から
　　39号（昭和54年1月号）までが「ヨーロッパ編」。
レコン41号（昭和54年3月号）から
　　46号（昭和54年9月号）までが「中国編」だった。



やはり28年前。上海で

写真もふんだんに使っている。私は36才の時だ。青年だ。人民服を着て、人民帽をかぶり、まるで紅衛兵だ。その時の写真も少し紹介しよう。この旅行記は、後に単行本になった。『80年代のナショナリズム』（長崎出版・960円）だ。もう絶版だが、ネットの古本屋にはあるだろう。1980年10月に出ている。

その後、この長崎出版からは『90年代のナショナリズム』（1200円）を出している。1994年５月出版だ。「新しい共生の時代を迎えて」とサブタイトルがついている。これは「旅行記」ではない。かなり真面目にナショナリズムについて考えている。目次を紹介してみる。

はじめに
第一章　冷戦終焉と民族主義の台頭
第二章　「80年代のナショナリズム」から13年
第三章　ソ連邦の崩壊とロシアへの期待
第四章　赤軍派の人々と民族主義を考える
第五章　イラク支援と義勇軍派遣

第六章　世界を震撼させたクレッソン斬首事件
第七章　ネオ・ナチと日本の民族主義運動
あとがき

目次を見ただけで、かなり真面目に書いていると分かる。一水会には在庫があるから読みたい人は申し込んだらいいだろう。

『80年代のナショナリズム』、『90年代のナショナリズム』に続いて、10年毎に「ナショナリズム本」を書こうと思ったが、頓挫した。そのうち挑戦してみよう。

この二冊は、かなり昔に書いたものだ。だから、漠然とだがこう思っていた。『90年代…』の方は、真面目に書いたが、『80年代…』は、ただの旅行記だ。表面的なもので、今ではとても読めやしない…と。どこの景色がきれいだとか、どこの食べ物がうまかったとか。どうでもいい事が書かれてるだけだ。それに、軽いタッチというか、不真面目だし、今の私から見たら、とても読めやしない。

…そう思っていた。「過去の私」を侮蔑していた。でも、頤和園のことが気にかかった。本当に28年前に、ここに来たのか。

それで、よし、『80年代のナショナリズム』を読んでみようと思った。28年前の私の文章だ。とても読めんだろう。文章も下手だし、思考だってズサンだ。舐めてかかった。ところが驚いた。結構、真面目なのだ。ナショナリズムを真剣に考えている。そして、多くの本を紹介しながら、必死に国家や民族について考えている。エッ？この頃の私の方が真面目じゃないか。国家はどうあるべきか。民族間の紛争はどうしたら解決できるか。革命とは。維新とは。…について、真面目に考えている。

(3)昆明湖で考えた。鈴木邦男はなぜ堕落したのか



1980年出版の『80年代のナショナリズム』

うーん、今よりも真剣だ。一体、何だこれは、と思った。28年前の方が感性も勉強量も優れていた。じゃ、28年間、全く進歩のなかった私ですよ。ガーンと頭を殴られた感じだった。当時は、「新しい民族主義運動をつくろう！」と燃えていたのだろう。「発言の場」だってない。本屋に並ぶ月刊誌に書くこともない。『80年代…』『90年代…』だって、本屋には、ほとんど並ばない。だからこそ、真剣に、率直に自分の考えを語り、疑問を語っている。

その後、「発言の場」が広がった。そして、世間的な知恵もついた。「今までの粗暴な右翼と思われたくない」「企業恐喝の右翼と思われたくない」という思いが先に出る。それはそれで、自分たちの運動を律することになり、よかった。だが、〈牙〉は失われた。「怖さ」はなくなっていいんだが、遮二無二のひたむきさ、突進性も削がれたのかもしれない。「暴力否定」「テロ否定」「話し合い」を最優先させ、その余りに、自己内在の熱い闘争心や熱情も犠牲にしてきたのではないか。

『80年代のナショナリズム』を再読して、そんなことを感じた。

そうだ。頤和園だ。やはり、訪ねていた。「懐かしい」という気持ちは本当だった。今回は、ただ、広いね、きれいだね、と思っただけだが、28年前は、キチンとその歴史を書き、何が問題

なのかも考えている。偉い人だ。「28年前の私」に圧倒されました。
　では、「28年前の私」に解説してもらおう。

　頤和園は800年前から築かれ、それに大幅に手を加えた清朝の「夏の離宮」だ。広い昆明湖は人造湖で、掘り下げられた土で万寿山をつくった。清朝末期の独裁女帝・西太后（1834～1908）がここで晩年をすごした地としても有名だ。「日々がお正月、毎夜が元宵節」といわれるほど贅沢三昧。淫靡な生活を送った。一回の食事の経費が「白銀千斤」、五千人の農民の一日分に当たったといわれる。
　西太后はここに老後をすごすための隠居所を作る。その経費として、何と日清戦争の為に用意された北洋艦隊の建造費をごっそり流用した。そのために清国が黄海海戦で敗れたという、いわくつきの大庭園だ。
　四人組時代、江青はここに別荘をかまえ西太后のまねをした。城山三郎の『中国・激動の世の生き方』（毎日新聞社）にはその辺のことが詳しく書かれている。
　西太后が余りにも有名だが、清朝時代の皇帝は皆、ここで避暑をしながら政務をとったのだ。

　…といったことが書かれ、さらに西太后の歴史的評価、秦の始皇帝、スターリンなどの〈独裁者〉 像の変遷などについて詳しく書いている。うーん、28年前の私の方が、頭がよかった。物事を真面目に考えていた。ただ、
　「人造湖をわたってくる風はさぞかし心地よかったことであろう」
という一文がある。実際、心地いいじゃないか。と思ったら、28年前は真冬の２月に訪ねていたんだ。だから、「推測文」だ。今回は真夏だ。確かに、ここだけは涼しい。巨大な湖だ。どうみても海のようだ。それを人間の力で作ったなんて、贅沢のスケールも違う。人民のことを考えず、こんな贅沢をするから戦争に負けるんだよ。
　頤和園の売店では、珍しく毛沢東のキーホルダーが売っていた。もう、毛さんは、ここにしかいない。それに、写真館があって皇帝の服を着て写せる。好奇心の旺盛な私は、さっそく撮りましたよ。今回の中国訪問では一番いい写真だね。４月のニューヨークでは、私が「自由の女神」になった写真がベストワンだったけど。

　ちょっと気になって、『辞林21』（三省堂）で、西太后を引いてみた。こう出ていた。

〈せいたいごう（西太后）1835～1908。中国、清の咸豊（かんぽう）帝の妃。同治帝の生母。諡（おくりな）は孝欽。同治帝。光緒帝の摂政となり政権を握る。宮廷保守派の中心人物で、変法運動を弾圧し（戊戌（ぼじゅ）政変）、また義和団を支持して列強に宣戦布告した〉

(4)ソ連、中国を見て、私は〈私〉になったのか？

　じゃ、西太后は攘夷の人でもあったんだ。悪逆非道なだけの人間と思っていたが、違う面もあったんだ。ついでに、この『辞林』でスノーを引いてみた。北京大学に碑のあった人だ。

スノー　Edgar Parkes Snow。（1905–1972）。アメリカのジャーナリスト。中国問題の権威。著『中国の赤い星』

　うん、この本は学生時代、感動して読んだ。じゃ、今どう思うか。又、読んでみたい。今、写真を見直してみた。北京大学内のスノーの碑だ。こう書かれている。

〈中国人民的美國朋友
埃徳加・斯諾之墓。
葉剣英　一九七一年十二月二十三日〉

エドガー・スノーを中国語で書いている。あれっ「墓」と書いてるよ。でも、碑のようにしか見えない。中国では碑も墓というのかな。だって、下には英文でこう書かれている。

〈IN MEMORY OF EDGAR SNOW AN AMERICAN FRIEND OF THE CHINESE PEOPLE 1905–1972〉

そうだ。学生時代、スノーと共にスメドレーの本も読んだな。又、読み返してみなくっちゃ。

〈スメドレー　Agnes Smedley 1892–1950　アメリカの女性ジャーナリスト。通信員として1928年、中国に渡り八路軍に従軍。著『女一人大地を行く』〉

いや、他にもっと有名な本があったとネットで調べた。『偉大なる道＝朱徳の生涯とその時代』だ。そうそう、これを感動して読んだ。

では、ついでに私の略歴だ。これは『辞林』には載ってない。堀幸雄の『最新・右翼事典』（柏書房）だ。700頁もある大作だ。12000円と、値段も高いが、それだけのことはある。私のことも２頁にわたって紹介されている。その中で、ちょっと気になる記述があった。
早大時代、全共闘と闘い、産経に勤め、三島事件を機に一水会をつくり…と。その辺は分かる。

〈1978年から１年間、ソ連、ヨーロッパ、中国、インドなどを歴訪〉

そうか。１年の間に、これらの国々を回ったのか。そして、こう書かれている。

〈三島事件で森田必勝（早大で二年後輩）の自決に衝撃を受け、一時去っていた右翼運動に復帰し、一水会を造った。
一方、北朝鮮に脱出した赤軍派は彼の民族主義を高く評価した。つまり「反共より日本」という立場は「右翼を超えている」といい、「赤軍派の立場とは理念は違っても民族の自主性、運命から出発する点で共通である」とした。つまり新左翼とも共感し合える柔軟性があるところに新しさがある。それらは海外歴訪の中から得たもののように思われる〉

ここまで読んできて、エッ？と思った。私の紹介はまだまだ続くが。うーん、そうかな。私としては、早大で全共闘と闘った。その体験が一番大きいと思う。しかし、その闘いから離れ、外国を見て回り、客観的に「自分の国」「自分の闘い」を見る中で考えていったのかもしれない。堀幸雄のような指摘は初めてだ。だから、まごつく。少しは影響があったと思うが、分からん。ビミョー。単純なように見えて、案外、複雑なとこもあるし、こいつは。又、ゆっくり考えてみよう。

最後に、ちょっとおさらい。
1970年に三島事件があり、1977年（昭和52年）３月３日に経団連事件があった。
この１年後の1978年３月３日、インドに行った。生まれて初めての海外旅行だ。ニューデリー、そしてダラムサラに行き、ダライ・ラマ猊下に会い、直接、お話を聞いた。

その年の10月13日～27日までの２週間、今度はヨーロッパに行った。ソ連、東西ドイツ、オランダ、フランスなどを回った。

さらに翌1979年（昭和54年）２月２日～12日の11日間。中国に行った。北京、上海、杭州を回った。

それから28年経ち、今、その時を思い出しながら中国のことを書いている。再見（ツァィチェン）。

【だいありー】



木村三浩氏『憂国論』（彩流社）

(1)８月13日（月）夜、共同謀議。帰ってきてから何かと忙しい。中国旅行中に書いたものを整理してたら自分でも分からない字がある。汚い字だし、下手クソだし、いかんな。あるいは暗号なのか。夜のＮＨＫスペシャルはよかったね。Ａ級戦犯のことをやってた。

(2)８月14日（火）午後２時、木村代表、さらに運動家の人達と会談。遅ればせながら、木村三浩氏の本を精読した。『憂国論』（彩流社・1700円）だ。「新パトリオッティズムの展開」とサブタイトルが付いている。今まで新右翼、民族派の本としては、まとまったものがなかった。だから、私の『新右翼』（彩流社）が参考文献にされてた。しかし、木村氏の本によって私の本は軽々と乗り越えられた。実にいい本だ。編集部の質問に対し、木村氏が語る。基本的な質問もあるし、鋭い質問もある。私ならとても答えられない。イラク戦争、靖国神社、天皇制、憲法改正、集団的自衛権、沖縄…などについて語る。

木村氏は世界を飛び回っている。国際的視野の中でナショナリズムを考える。日本有数の活動家だ。それと共に、民族派の思想家であることが分かる。私も勉強になった。木村氏は「反共右翼」ではない。反米愛国の「反体制民族派」だ。それは野村秋介さんや葦津珍彦先生などの影響かと思ったら、それだけでなく、立川基地のそばで育った子供時代の環境があったという。

〈だから子供心にベトナム戦争というのは一応意識があって、小学五年生のとき民族の英雄みたいな優しいおじさんのホー・チ・ミンが亡くなって、「ああ、ホーおじさんが死んじゃった」と、涙したことを覚えています〉

凄いね。小学五年で、ホーおじさんの死に涙した。そして基地の騒音から反米意識が目覚める。又、家族に社会運動にかかわっている者がいた関係で、政治運動にも関心を持つ。小学五年生から一貫して反米愛国だったんだ。私なんて、小学生の頃は秋田県の田舎にいて、何も知らず、絵ばっかり描いていた。政治も知らず、日本に天皇がいることも知らず、自分が日本人だということも知らなかった。（今でも知らない）。愚かな小学生だった。

それに比べて木村氏は偉い。家庭環境もよかったんだ。これからはこの『憂国論』が民族主義運動のバイブルになるだろう。又、詳しく紹介しよう。

夜ＮＨＫスペシャルでパール判事のことをやっていた。よかった。やはりＮＨＫはいいね。



東京新聞朝刊（8月15日付）

(3)８月15日（水）朝早く起きて、東京新聞を買いに行った。デカデカと出ている。驚いた。嬉しい。でも、少し恥ずかしい。品川正治さん（経済同友会終身幹事）と私の対談だ。それも８，９面の全部を使って掲載している。「記憶・戦後62年」という特集だ。「戦争体験に今こそ学ぶ」。

品川さんは83才。財界では珍しく反戦・護憲派だ。それも自らの戦争体験から語るだけに説得力がある。「９条守る国民出番の時」「精神総動員、新聞は歯止めを」と品川さんは言う。私はじっくり聞いて、なぜ戦争体験が生かされないのか。語り継がれないのかを聞いた。特に、最近の「戦争をやる覚悟で外交交渉をやれ！」「核を持て！」といった勇ましい論議を聞いてると、全く歴史から何も学んでないのでは、と思ってしまう。

「戦争反対」と言うことすらも、勇気が必要だ。おかしな風潮だ。さらにアジアに対する謙虚さを失い、思い上がっている。そんなことを話した。

東京新聞、それに中日新聞に載ったのだ。400万の人が見る。凄い。そんな大新聞にこれだけ大きく出るなんて一生一度だろう。そう思って、高田馬場まで行って、まとめて買い、兄貴や弟など家族にも送った。「新右翼一水会顧問」という立場の私をこうして載せてくれる。東京新聞の並外れた度量と勇気に感謝したい。又、対談してくれた品川さんに感謝したい。

この対談は７月24日（火）に山の上ホテルで行われた。午前11時から午後６時半まで、７時間半だ。一冊の本が出来る位だ。その「十分の一」が新聞に載った。こうした機会を与えてもらい、本当にありがたいと思った。

この日、12時半から有楽町の日本外国特派員協会に。「財界展望」の対談で。ベンジャミン・フルフォードさんと話し合う。壮大な話になった。「9.11テロ」は全てアメリカの自作自演だという。さらに軍需産業や軍隊、警察などは自らの存在意義を示す為に自分で「敵」をつくる、という。うん、これは言えると思った。日本の公安もそうだ。だったら、彼らに戦争ではない「別の仕事」を見つけてやればいい。その上で、どうしたら「戦争のない世界」をつくれるか。二人でそのことを考え、話し合った。９月１日に雑誌は出る。

「フルフォードさんと中丸薫さんとの対談本を読みました。面白かったです」と言ったら、「今、いますよ」と隣りの食堂に案内してくれる。同志の人たちと食事していた。「この前、朝生に出た時はお世話になりました」とお礼を言った。去年、朝生の「天皇問題」で同席したのだ。



前田日明さん、高須基仁さんと（8月15日ロフト）

対談が終わってから、河合塾コスモへ。20日の合宿の打ち合わせ。フェローや職員の人たちが東京新聞を読んでいて、「凄かったですね」と言われた。「本当は偉い人なんですね。ただのボーッとしたオッサンかと思ったら」。いえいえ。ボーッとしたオッサンですよ。アホですよ。

その後、ロフトへ。７時から高須基仁さんの「8.15終戦イベント」。夜の12時まで、１～３部の全てに出る。格闘家の前田日明、真樹日佐夫。新左翼の塩見孝也、三上治、そして格闘技ライターなどが入り乱れて激論トーク。前田さんが「オーラの泉」に出て、「三島由紀夫がついている」と

言われた。その話が面白かった。又、三島や太宰治の話を前田さんに聞いた。この人は勉強家だ。ひたむきなんだ。最近、子供が生まれたそうで、携帯で写真を見せてくれた。かわいい。「子供が出来ると人生観がガラリと変わりますよ。積極的になり、やる気になります。鈴木さんもつくりなさい！」と言われた。

(4)８月16日（木）図書館で勉強。

(5)８月17日（金）竹中労のことについて取材された。又、別の打ち合わせ。夜、柔道に行く。

(6)８月18日（土）一日、寝ていた。頭が痛い。熱中症かクーラー病か、カゼか狂犬病か、分からん。信仰が足らんから病気になる。フトンの中で原稿を書いた。

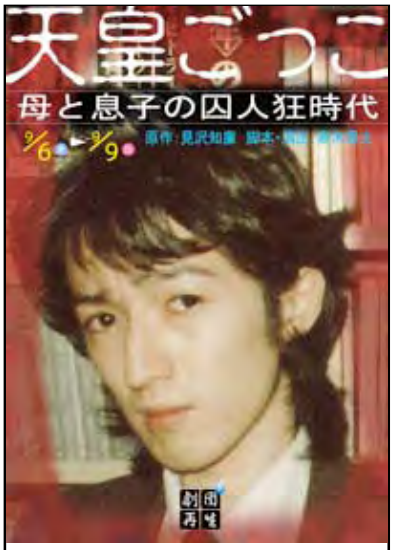
【お知らせ】

(1)８月20日（月）７時、ネーキッドロフト。外山恒一氏の「逮捕・獄中闘争報告集会」。早く行かないと又、入れませんよ。私もゲストで出ます。他に、今井亮一氏（交通ジャーナリスト）。司会は中川文人氏。

(2)９月１日（土）発売の『ZAITEN』（財界展望新社）10月号に、フルフォードさんとの対談が載ります。

(3)９月２日（日）三浦和義さんと自由ケ丘のお店でトークします。〈日本の戦争〉について。

(4)９月６日（木）～９日（日）見沢知廉原作・高木尋士脚本の「天皇ごっこ」が上演されます。woody theater中目黒で。ぜひ見て下さい。



『天皇ごっこ』のチラシ

(5)９月７日（金）発売の『マッドマックス』（10月号）で、竹中労さんについて語りました。

(6)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。又、憲法14条、24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさ んが来日し、特別講演「憲法を語る」があります。４時から５時30分。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(7)新宿の文壇バー「猫目」が一周年を迎えた。それを記念した本、『楽しいお酒』が発売された。私も頼まれて原稿を書いた。若くて美人の佳菜子ママを慕って毎日、多くの編集者、ライター、芸術家が集まっている。常連の人、70人ほどが原稿やイラスト、漫画を書いている。えッ、こんな人たちも飲みに来てるのかと驚いた。島田雅彦、康芳夫、石丸元章、秋山祐徳太子、高橋源一郎、坪内祐三、東郷隆、矢作俊彦…といった人々が書いている。これだけで立派な文芸誌だ。そんな中に、私だけが「小学生の作文」のようで恥ずかしい。文章の勉強をしなくっちゃ。

(8)中村うさぎさんの対談集が９月末出るそうです。（株）アスキーから。私も出ています。

HOME

今週の主張

バックナンバー

セミの話ですよ。夏だから…

今週の主張８月27日

(1)セミがこの世をつくり、人間をつくったのです



『ファーブル昆虫記」（岩波文庫）

知らなかった．セミは前世は人間だったんだ。「うるせーな」なんて思っちゃいけない。ミンミンと鳴きながら必死に私達に訴えているんだ。 亡くなった親戚や、先輩、同志たちですよ。セミじゃないんだ。人間なんだ。

暑さで熱中症になり頭の思考回路がショートしたと思われちゃまずい。きわめて冷静・正常ですよ、私は。８月19日（日）に、東中野図書館に行って一日中、セミのことを調べていた。ネットで調べたが、よく分からん。そんで図書館で、いろんな百科事典を調べた。又、『ファーブル昆虫記』（第５巻）を初め、昆虫の本を片っ端から読みまくった。

外ではセミがミンミン鳴いている。「分かった、分かった。その暗号を解いてやるよ。そうしたら、お互い、言葉が通じるだろうよ」とセミに言ってやった。そして、一日中、セミのことを調べた。

『日本大百科事典』（小学館）を調べていたら、あったんですな。こんな記述が。

〈【民俗】セミは伝承上、鳥類一般と近い性格を備えている。鳥と同じく前世を人間であるとする伝えも多い〉

「民俗」「伝え」と控え目に、謙虚に書いてるが、これは本当だろう。人間が死んだら、鳥になる。まず、これは事実だ。『ヤマトタケル』（現代書館）で書いたが、戦いの中で死んだヤマトタケルは白鳥になって都を指して飛んでいった。神社の鳥居は、そうした鳥になった人々が居るところなのだ。赤ん坊はコウノトリが運んでくるというが、亡くなった人が鳥になり、その「交換」に、この世に新しい命を持ってくるのだ。

だから鳥を食べてはいけない。これは人間を食うことだ。私が総理になったら、憲法改正をして、まず「鳥を食べるな」と憲法前文に書く。

人間の名前だって「鳥」のつく人は多い。元々、鳥だったからだ。それを忘れないように付けたのだ。鳥肌実、鳥越俊太郎、鳥井守幸、鳥海茂太、鳥飼久美子…と。又、鳥目、鳥肌が立つ、雄飛する、巣をつくる、…と、鳥に関連した表現が多い。右翼・左翼だって、人間を鳥に見立てたからだ。南米にある巨大な地上絵だって、昔、鳥だった証拠だ。我々の祖先は鳥なのだ。

では、セミだ。セミも羽をもって飛ぶ。だから、小さな鳥と思われていた。では日本の伝承だ。

〈〈日本では、ヨキ（斧・おの）をなくした木こりが「ヨーキー」と探しながらセミになったとか、旅で死んだ筑紫（つくし）の人が故郷を慕ってセミになり、「ツクツクシ」と鳴くとか、兄を木の上から見送っていた弟がセミになり、「見る見る」と鳴くなどという。
中国にも、夫より遅く帰った怠け者の妻が、「遅了（チーラ）、遅了（遅れた、遅れた）といいながらセミになったという伝えがある。台湾のタイヤル族やマレー半島のセマン族にも類語がある。鳴き声から鳥と同類としたのであろう〉

セミの民話は世界各地にあるんだ。セミは〈あの世〉と〈この世〉をつなぐ接点になっている。セミは長い長い地下生活を経て、地上に出て、アッという間に死んでしまう。だから、それだけの使命があるのだろう。神の使いだ。

〈フィリピンのイゴロット族では、セミが鳴くとき物音をたてると風の神が怒り、暴風雨をおこすという。インド洋のアンダマン諸島にも同じ伝えがある。セミの声を大切にしたのであろう〉

セミは偉いんだ。天地創造にも関係がある。

〈アンダマン諸島では、セミは天候や季節を支配する神の子供で、創世神話の主役でもある。鳥も魚もいなかった時代、ある夕方、祖先たちは、セミが鳴いているので雑音をたてた。神は怒って暴風雨をおこし、人間はすべて鳥や魚や亀や野獣になったという〉

そうか、人間は一度、リセットされて鳥や魚や亀や野獣になった。泉鏡花の『高野聖』みたいだな。でも、その中から再び人間に戻るものもいた。戻れない人々は、鳥や魚のままだ。かわいそうに。そんな人達を捕まえて、食べちゃいけない。

(2)よし、2024年にはシカゴに行くぞ！「17年ゼミ」を見に



（左から）若松孝二さん、植垣康博さん、私（８月６日ロフト）

さらに、日本の神話に共通したものもある。

〈また夜の起源神話にも登場する。トカゲが土の中のセミをみつけ、祖先たちの前に出し、押しつぶすと、世界は暗くなった。セミを蘇生させようと、鳥や虫が歌い踊ると、セミはまた鳴き出し、世の中は明るくなった。これから昼と夜が交互にくるようになったという〉

日本の神話と同じだ。スサノオの乱暴に怒ったアマテラスは天の岩戸の中にもぐった。そうしたら世界は暗闇になった。困った神々は集まり、歌い、踊った。特にアメノウズメだ。下半身丸出しで踊り、これがストリップの起源になった。あまりに外が騒がしいので、何かなと思ってアマテラスは外をのぞく。その時、タジカラオノミコトが岩戸の岩をどかして、アマテラスを外に出す。そうして世の中は明るくなったのだ。
じゃ、アマテラスは本当は、セミだったのか。いじめられて、引きこもっていたセミが、外の物音を聞く。美しく歌い、鳴くのは自分だけかと思っていたら、鳥や虫たちも鳴き、歌っている。そんなバカな、と思い、外に出て、鳴き出した。「どうだ、私の鳴き声が一番美しいだろ

う…」と。

そうか、だからセミは今でも、土の中に長い間、もぐるのか。そして、ある夏の日に、たまらず出てきて鳴くんだ。チクショー、鳥や虫の鳴き声に負けてたまるか！と思って。

ここで神話や民話の世界を離れて、現実の話をする。８月12日（日）の夜、７時半からのＮＨＫ「ダーウィンが来た」を見ていた。あの有名な「17年ゼミ」が出ていた。シカゴに、17年に一度、セミが大発生する。５月下旬の蒸し暑い夜だ。数も半端ではない。何と、70億匹だ。日本の人口の70倍だ。そんな膨大な数のセミが５月下旬に、シカゴに異常発生する。

街の人々は仕事にならん。鳴き声がうるさくて。電話もできん。会話もできん。外を歩くと、体中にセミが止まる。もう、セミの街だ。じゃ、シカゴの人達は町を捨てて逃げ出すのかと思ったら、そんなことはない。「17年ぶりのお客さま」を大歓迎している。外国からはセミを見ようと観光客も来る。

セミのお菓子もある。でも、セミの形をしたお菓子ではない。本物のセミをフライにして、チョコレートで包んだものだ。かわいそうに。歓迎するんなら、食うなよ。リスも木の上でセミを食べている。食うなよ。17年も地下にいて、やっと外に出たんだ。それも地上では、たったの10日間、鳴いて死んでゆく。かわいそうじゃないか。

しかし、凄いね。70億匹のセミが。見てみたい。17年後というと、次は2024年の夏だ。よし、この時はシカゴまで見に行こう。

シカゴでは、「17年ゼミ」の他に「13年ゼミ」というのもある。17も13も、素数だ。めったに出会わない。出会うとマズイのだ。知らんで交尾したら、種が違うから、卵が産まれん。子供を残せない。それで、素数にしている。でも、出会うことはある。221年後だ。この時はセミも大パニックだろうな。これも見てみたい。2228年だ。見に行こう。

今年の５月のシカゴの話だ。70億匹のセミの幼虫はモソモソと地下から這い出て、近くの木に登る。そこで脱皮する。まるでイナバウアーのような格好で脱皮する。失敗して地上に落ちたセミは他の動物や昆虫に食われる。

脱皮に成功したセミは、羽を備えたセミになる。そして、オスは鳴き続け、メスを呼び、交尾し、卵を産む。そして死ぬ。この間、たったの10日間だ。17年間も地下にいて、やっと日の目を見たと思ったら10日間で死ぬ。はかない命だ。

(3)運動家はセミだ。「左翼ゼミ」「右翼ゼミ」の生態

今まで私はこう思っていた。セミは卵を地下に産む。卵のまま何年も地下にいて、そして、卵から孵り、外に出るのだと。ところが違っていた。セミは地上で交尾し、卵を産む。それが幼虫になり、その幼虫は何と、「自らの意志」で、地下に潜る。まるで、非公然時代の共産党員じゃないか。又、過激派の地下活動家のようじゃないか。自らの意志で地下に潜るのだ。

そして、セミは17年間、地下で、ずっと意識もあり、食べ、眠り、生活をするんだ。

日本のセミはアメリカのように「17年ゼミ」「13年ゼミ」というスケールの大きいのはいない。しかし、「5年ゼミ」「６年ゼミ」といって、やはり地下生活は長い。

じゃ、これはセミといえるのか。17年間、地下で生活している。これがメインだ。そして、死ぬ寸前に、ちょっと外に出してもらえるだけだ。じゃ、本当は「モグラ」じゃないのか。僕らは、モグラをセミと見誤ってきたのだ。

あるいは〈地下生活〉は刑務所なのかもしれない。宮本顕治は獄中18年。18年ゼミだ。塩見孝也は獄中20年。20年ゼミだ。連合赤軍の植垣康博は獄中27年。皆、シカゴの「17年ゼミ」に勝っている。凄いセミ達だ。

「左翼ゼミ」達は獄中で本を読み、学び、考え、外の世界にも通信できる。しかし、本当のセミは、ただ、地下生活をするだけだ。読書もできない。会話もできない。外の世界とも通信できない。何が楽しいんだろう。「こんな生活、一年でたくさんだ！」といって地上に飛び出すセミはいないのか。いないんだな。

８月20日、河合塾コスモで合宿があったので、牧野剛先生に聞いた。「何で17年も地下生活をしなくてはならないのか」と。それは地上の環境によるという。出れる環境になるまでセミはじっと待っているのだと。だったら、昔のセミは、地下生活も一年ぐらいだったのか。それが、「今年はダメだ」「今年もダメだ」と待っていて、17年になったのかもしれない。

じゃ、〈地下生活〉はそんなに安全、安心なのか。ところが、そうではない。地下にいても天敵はいる。モグラやアリ、他の昆虫などに食べられるのだ。特に地下に潜る寸前が危ない。何と、95%（！）はその「寸前」に殺されるという。地下生活に入った左翼だって、ほとんどは警察に逮捕される。地下に潜る寸前に捕まる。同じかもしれん。

セミは地上に出て、１週間か10日しか命がない。だから、「短命」「はかないもの」の代表にされる。しかし、「そんなことはない」という人がいる。

『世界大百科辞典』（平凡社）にはこう書かれている。

〈北アメリカには幼虫期が13年または17年と非常に長い周期ゼミが知られ、これは昆虫の中でも最長寿といえるだろう〉

エッ？　セミって〈長寿〉なのかよ。と驚いたね。さっき引いた『日本大百科辞典』（小学館）にもこう書かれている。

〈セミは、はかない命の代名詞になるくらい寿命が短いとされる。ところが、実際は、成虫期間は普通10～20日間に及ぶ。一方、幼虫期はきわめて長く、数年から17年の地下生活を送る。頑丈な産卵管で植物組織内（おもに枯れ枝中）に産まれた卵は、１，２ヶ月または約10ヶ月で孵化（ふか）し、幼虫は自発的に地下に落下して、土のすきまをみつけて地下に潜る。１，２ミリの一齢幼虫は根から樹液を吸いながら成長し、四回の脱皮を繰り返して終齢（５齢）となる〉

５齢のものもいるし、13年、17年のものもいる。皆、ヨイヨイの老人なんだ。老人がやっと外に這い出して、交尾し、死んでゆく。「老幼虫」と書いてた本もあった。かなしいセックスだ。「お前たちは間違っているよ！」とセミに言いたい。いくら安全とはいえ、そんなに長い間、地下生活をしてどうする。早く外に出て、外にいる時間をもっと楽しんだらいいじゃないか！

もしかしたら、こうかもしれん。地上の木の上で卵を産みつけられ、それが幼虫になり、ポトンと地上に落ちる。その時、95%の幼虫はアリに食われる。その恐怖体験が頭に染みついているのだ。たった５%だけが、命からがら地下に逃れ、地下生活をする。そういうことなのか。日本では警察に追われているからと、「よど号」をハイジャックして北朝鮮に行った人々のようだ。17年どころではない。もっと長い生活が待っていた。

又、事件を起こし、自らの意志で刑務所に行く人達も、セミのようだ。

さらに、セミの前世は人間だ。特高に虐殺された小林多喜二もセミになった。小田実もセミに

なった。内ゲバで殺された新左翼の人々もセミになった。だから、セミをよく見ると、羽の色が違う。セクトのヘルメットの色のようだ。中核派ゼミはほんのり白い。革マルゼミは白い中にＺが浮き出ている。赤軍ゼミは、ほんのり赤い。革労協（社青同解放派）ゼミは、ほんのり青い。アナキストゼミは、ほんのり黒い。右翼ゼミは右翼色だ。そんな色はないか。じゃ、白地に赤だ。

(4)森の中の木から下り、土に潜り、又、木に戻る。人間もセミですよ

百科事典は『日本大百科辞典』（小学館）と『世界大百科事典』（平凡社）の記述を紹介したが、もう二つ紹介する。

『ブリタニカ国際大百科辞典』（ＴＢＳブリタニカ）には、世界のセミの種類が詳しく出ている。何と2000種以上だという。元々は人間だったんだから、世界の民族の数と同じなのかもしれない。

『万有百科大事典』（小学館）にはセミにまつわる伝承、民俗が紹介されている。『日本大百科辞典』（小学館）と重複する部分がある。と思ったら、同じ小学館だった。それに【民俗】の部分は同じく小島瓔禮氏が担当している。でも、『万有…』にだけ書かれてるものもある。それは、こうだ。

〈同じ趣向の昔話は中国にもあり、台湾のタイヤル族には、親にしかられた娘がセミになって泣き続けているという伝えがある。ギリシア昔話には、あけぼのの神エオスが老いた恋人ティトノスをセミに変えたという話がある〉

『ブリタニカ国際大百科辞典』では世界には2000種のセミがいると書かれている。では、日本には何種のセミがいるのだろう。いろんな本を読んでやっと分かった。中尾舜一の『セミの自然誌』（中公新書）に出ていた。日本には32種のセミが生息してるという。

この本には、さらに凄いことが書かれている。セミは種によって、長いのは17年。短いのは３年、４年、５年といわれている。でも、本当に地中に潜ったその幼虫が間違いなく５年いて、地上に出てきたのか。分からん。でも、実験し、証明した人がいたんですな。

〈日本でセミの幼虫期間を明らかにした最初の人は、東北大学の佐藤隼人氏であり、1932年、東北大学の実験園内にセミの飼育室をつくって研究した。

飼育室はコンクリートで、長さ・幅６尺、深さ４尺の箱をつくり、土中に埋めて土を入れ、この上を高さ６尺の金網張りの小屋で覆ったものである。飼育箱内には、モミジ・スギ・イボタ・ツツジ・クリ等の樹木を植え、７月19日から８月22日の間にアブラゼミ208匹（雌124匹、雄84匹）、ミンミンゼミ123匹（雌74匹、雄49匹）を放した。きわめて大がかりな実験であった〉

そして５年後に、これらのセミの幼虫は地上に出てきた。それで実証されたのだ。この時、実験箱に入れる土砂はふるいにかけられ、数日間、天日に乾かしたもので、その中に他の幼虫の混入している心配はない。念には念を入れた実験なんだ。

だったら、いっそのこと人間も埋めたらいいのに。人間もセミと一緒に地中で生活し、幼虫の生態を観察する。どっかの刑務所の地下に巨大な実験室を作ってやってもいい。

では、おさらいだ。地上に出た「老幼虫」のセミは近くの木に登り、そこで脱皮し、鳴き、交

尾し、卵を産んで、死ぬ。死骸は木の下に落ち、その木の養分になる。木に産みつけられた卵は、幼虫になり、ポトンと地上に落ちる。その瞬間を待っているアリたちによって、95%の幼虫は食われる。５%は命からがら地下生活に入る。そして５年から17年の「地下生活者の手記」だ。そして、もう大丈夫だろうと思い、地上に出て、その木に登る。そして脱皮し、鳴き、交尾し、卵を産む。その繰り返しだ。つまり、その木が大事なんだ。その木を守るため死んだセミは、その養分になる。

こうなると、セミの為に木があるのか。木の為にセミがあるのか分からなくなる。

これは人間と同じだ。大江健三郎の『「自分の木」の下で』（朝日新聞社）にはこう出ている。森の中には数多くの木があるが、人にはそれぞれ「自分の木」がある。人が「生まれる」とは、その「自分の木」から魂が下りてきて、人の体の中に入ることだ。逆に「死」とは、「身体がなくなる」だけで、魂はその木のところに戻ってゆくのだ」と。

実は、これは城山三郎の『この命、何をあくせく』（講談社）からの孫引きだ。大江の本は前に読んだが忘れてた。も一度読み返してみよう。

そうか。森に行くと「懐かしさ」を感じるのは、私達の命があるからだ。そこに「自分の木」もある。その木から出て、活動家になり、捕まって刑務所に入る。あるいは、地下に潜る。そして、命が尽きたらその木に戻ってくる。

やはり、人間はセミなんだよ。

最近、妙なことがある。セミの声が分かるようになった。あっ、三島さんが檄を飛ばしているな。あっ、森田君が喋っているな。見沢君が呼びかけているな、と。「セミ語」が分かるようになった。連赤ゼミや中核ゼミ、革マルゼミの演説も分かるようになった。

そして思う。私の一生もセミのようだったな…。右翼運動40年の、そのほとんどは仲間だけにしか通じない言葉で、仲間だけしか読んでない印刷物に書いてきた。地下生活のセミのようなもんだ。『公安警察の手口』や『愛国者は信用できるか』あたりからですよ。やっと、外に出たのは。一般の人に本屋で手にとってもらえる本を出せたのは。64年の生活の、ほとんどは〈地中〉だった。そして、やっと必死になって地上に這い出たと思ったら、もう終わりだ。かわいそうな一生でしたね。ちくしょう。ヤケで泣いてやろう。ミーン！ミーン！ミーン！

【だいありー】



（左から）中川文人さん、外山恒一さん、私、今井亮一さん（8月20日）

(1)８月20日（月）河合塾コスモに行く。午前10時50分から「現代文要約」の授業。前期、ニューヨークに行って一回休んだ。その補講を夏休み中にするんだ。暑い。土、日はバテて、家で寝ていた。セミのように。まだ頭がボーッとして、体がフラつく。でも、授業をした。

午後１時から、「合宿」。といっても、牧野剛先生も忙しいので、１日だけの合宿。夜の７時まで、ひたすら本を読む。小林敏明『廣松渉＝近代の超克』（講談社）を読む。難しい本だ。牧野先生が解説してくれる。

夜８時に、ネーキッドロフトに行く。外山恒一氏の「不当逮捕抗議・報告集会」が７時から始まっている。１時間遅れて参加する。交通評論家の今井亮一氏もゲスト。交通違反で逮捕され、１ヶ月も拘留なんてない、と言っていた。無罪を求めてさらに裁判闘争するという。さらに、こ

れからの闘いを考える。

熊本で私が選挙に出ることになり、それを外山氏が応援することになっていた。それに恐怖した権力が、その共同謀議を打ち砕くべく、「交通違反」で国策逮捕した。という。司会の中川文人氏が、その辺の事情を詳しく語ってくれた。恐るべき謀略だ。

そうだ。参院選の熊本選挙区では民主の松野信夫氏が当選。自民前の三浦一水氏が落選。この応援組織が一水会という。「一水会が出る」という噂や謀略もここから公安が流したのかもしれない。よく分からん。謀略だ。



村上正邦さん（右）と（8月21日）

(2)８月21日（火）図書館で、又もや、セミのことを調べていた。夜６時から明治記念館。「村上正邦先生の誕生日をお祝い激励する会」。村上さんもセミだ。長い間、苦労に苦労を重ねて、やっと議員になったのに、国策捜査で逮捕された。「冤罪を晴らし、早く国会に戻ってこい」と議員たちの激励の挨拶もあった。私は、村上さんに会ったのは20才だ。今から44年前だ。生長の家の大先輩だった。挨拶をさせられたので、その頃の思い出を話した。同じく生長の家出身の衛藤晟一さんも来ていた。平沼赳夫氏も来ていた。漫画家のさかもと未明さんに初めて会った。美人で頭がいい。筆坂秀世さんが紹介してくれた。「たかじん」で共演したそうな。「なんで憂国の志士になったの？」と聞いたら、「SPA!の鈴木さんの連載を読んでたからです」と言う。「それと、小林さんのゴーマニズム宣言です」。いやー、僕なんか、とっくに超えられているよ。

ペマ・ギャルポさんにも会った。「選挙大変でしたね」と言ったら、「今度は、ぜひ鈴木さんも出なさいよ」。僕じゃ、２票くらいしか入りませんよ。史上最低の得票だよ。西部邁さんにも会った。乾杯の後の挨拶は皆聞かない。食事をしたり、会場の人と話したり。僕は、聞いてもらえなくていいやと思って喋った。しかし、西部さんは一言喋って、「聞いてないからやめる！」と言って壇上から降りてしまった。凄い人だ。



（左から）香村啓文さん、私、有田芳生さん

(3)８月22日（水）昼、打ち合わせ。６時、新宿。「月刊タイムス」の香村社長、それに有田芳生さん・ジャーナリストの大川啓一さんと会食。有田さんはテレビのコメンテーターの仕事をやめて、選挙に出たのに、残念ながら落選。選挙の苦労話を聞いた。元気だった。ふっきれたのだろう。久しぶりに会えて嬉しかった。

(4)８月23日（木）６時、渡辺直也氏に会う。ニューヨーク在住のキュレイターだが、仕事で日本に来た。４月にニューヨークに僕を呼んでくれた人だ。本当にお世話になった。その後のニューヨークの話などを聞いた。日本でもいろんな企画をやりたいという。ベアテさんは体調が悪くて９月の来日は中止になったそうな。残念だ。



(5)８月24日（金）昼、一水会事務所。夜、柔道。

(6)８月25日（土）午後２時30分。紀伊国屋ホール。月蝕歌劇団を見る。「寺山修司・過激なる疾走」。なかなかよかった。

（左から）筆坂秀世さん、さかもと未明さん、私

【お知らせ】



「かりはゆく」に田中さんの思い出を書いた（クリックで拡大）

(1)「よど号」帰国支援の会で出している「かりはゆく」（８月10日号）に原稿を書きました。ネットでも読めます。「with 田中義三」の四回目で、〈田中義三さんの「意志」を感じる〉

(2)９月２日（日）12:30から自由ケ丘のお店で三浦和義さんとトークをします。「日本の戦争」について。

(3)９月６日（木）～９日（日）見沢知廉原作・高木尋士脚本の「天皇ごっこ」が上演されます。woody theater中目黒で。ぜひ見て下さい。

(4)９月13日（木）午後７時、ホテルサンルート高田馬場。一水会フォーラム。講師は小坂浩彰氏（ＮＧＯレインボーブリッジ）で、「なぜ私が北朝鮮に関わるようになったか？＝逆風としての国策捜査を受けて」。衝撃的な話が聞けると思います。

(5)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(6)９月１日発売の『ＺＡＩＴＥＮ』（財界展望新社）10月号にフルフォードさんとの対談が載ります。９月７日（金）発売の『マッドマックス』（10月号）では、竹中労さんについて語ってます。

(7)『日本怪死事件史』（宝島社文庫・619円）が出ました。僕は「作家・見沢知廉が飛び降り自殺」を書いてます。



ベンジャミン・フルフォードさん（左）と

HOME

今週の主張

バックナンバー

困難に戯（たわむ）れよ！

今週の主張9月3日

(1)「邪魔」があり、「困難」があるから進める



村上正邦さんと握手

村上正邦さんは言った。「自分は今、“困難に戯（たわ）むれる”気持ちです」と。いい言葉だ。村上さんは元参議院議員。今、裁判中の身だ。逆境だ。しかし、それを嘆くのではない。悲しみ、恨むのでもない。マゾヒスティックに「耐える」のでもない。「戯（たわむ）れる」のだ。どんな逆境が来ても、それと遊んでやろう。という、達観した気持ちだ。ふっきれた気持ちだ。少し上から自分を見る。「おっ、たじろいでいるな」「おいおい、ビビっているじゃないか」と、自分を客観的に見る。素晴らしい。やはり、村上さんは信仰の人だ。「生長の家」の人だ。そう思った。

８月21日（火）午後６時から明治記念館で、「村上正邦先生の誕生日をお祝い激励する会」が開かれた。そこで村上さんが言っていたのだ。

この「困難に戯れる」という言葉は実は谷口雅春先生（生長の家初代総裁）の言葉だ。

この集会の次の日、『月刊日本』（９月号）が届いた。「編集後記」を見て驚いた。編集・発行人の南丘喜八郎さんが「編集後記」で、この谷口先生の言葉を紹介してたのだ。何という偶然。

〈これは「生長の家」初代総裁である谷口雅春先生が著書『生命の実相』の冒頭に掲げておられる言葉である〉と解説して、こう紹介している。以下、谷口先生の言葉だ。

〈兄弟よ、海の波が巌（いわお）にたわむれるように、困難にたわむれよう。猿が木の幹に攀（よ）じのぼるのを楽しむように、困難を楽しんで攀じのぼろう。

もし軽業師が綱の上を渡らないで、平坦な大道を歩くだけならば、誰も喝采する者はないであろう。梅の花は烈々たる寒風の中で開くので喜ばれるのだ。

兄弟よ、わたしは苦しみに耐えよとは言わない。「生長の家」では苦しみに戯れるのだ〉



私も挨拶した

これはいい言葉だ。こういう力強い言葉を何回も何回も聞いてきた。読んできた。「口癖」にまでなった。人生において、きつい時、「おっ、たわむれてやるか」と思う。そうるすと気分がスーッと楽になる。

『生命の実相』のどこに出てたのかなと思って調べた。第７巻の巻頭に出ていた。このあと、こう続く。

〈盤根錯節（ばんこんさくせつ＝入り組んでいて解決の困難な事柄）は「生命」が戯れるための一つの運道具である。諸君はスキーを多難だと言うか。 いかなる苦しみも戯れに化するとき人生は光明化し、そこから剛健なる無限の生命力が湧いて来る〉

ゴルフ、スケート、そして今ならスノボー、サーフィンというとこでしょう。大波に乗って戯れるサーフィンのイメージがピッタリでしょうか。今ここに、谷口雅春先生の本が他に二冊ある。『あなたは無限能力者』と『ひかりの語録』（共に、日本教文社）だ。前者の中に次のような文章がある。いい文章だ。勇気を奮い起こさせる文だ。「汽車はレールの摩擦で前進する」という文だ。ちょっと長いが読んでほしい。私も書き写すことによってその力をもらえる。「観の転換」が計れる。

(2)スケートのように人生を楽しんだらいい

〈「汽車はレールの摩擦で前進する」

人と人との摩擦（まさつ）というものも、それがあるので人間の魂が磨かれます。世の中には邪魔があるので人間は進歩するのであります。吾々が歩くことが出来るのも、それは路面や畳や床板に摩擦があるから歩くことが出来るのであります。

一方の足を一歩踏み切ろうと思っても、若（も）し絶対に摩擦がない地面であったら、全然滑ってしまってどうしても前方に進むことが出来ないのであります。そうすると摩擦があるので吾々は歩けている。

吾々の生命も摩擦があるので進歩し、人間の深い味わいが出て来るのであります。スケートをやるにしても、その路面になるところは氷で、摩擦が少ないのですけれども、あれでも絶対に摩擦がなかったらスケートも辷れない。全然抵抗がなくなってしまったら、どうにも出来ないのであります。

生命は自己表現をする為に、自己を限定して働きかける能作者（のうさしゃ）と、それに抵抗する摩擦面とを造り出します。絵師が絵をかくのでも摩擦面があるので絵がかけるのであり、摩擦がなければ自己を表現することが出来ないのです。そうすると摩擦というもの、抵抗というものは非常に有難いものだと云わねばなりません。汽車が走るのでもレールの摩擦がある、飛行機が飛ぶのも空気の抵抗があるからである。空気の抵抗がなかったらプロペラを廻しても飛びはしないのです。

そうすると人生に於ける摩擦面を「困難」だとか「苦痛」だとか云う名で呼ぶのは間違だったのであります。 それは決して困難でも邪魔物でもなかったのでありまして、それは却（かえ）って自分を推進せしめてくれているところの味方であるということが分かるのであります〉

凄い言葉ですよね。弱気になってる人に、ただハッパをかけてるわけではない。これは物事の

本質なのです。でも僕らは、そう見てこなかった。これは「観の転換」を迫ります。見方を変えなさい、と言います。「摩擦」や「抵抗」、そして「邪魔」だというものも、全て自分が進むために必要なものです。「邪魔」があるから、どう乗り越えようかと思い、さらに意欲もわくのです。サーフィンですね。流れるプールに乗っているだけでは、サーフィンも全く面白くないでしょう。

「ストレス」も多分そうでしょう。健康の為にはストレスがない方がいい。しかし、全くストレスがないと、ただ、ボーッとしていて、かえって危ないんだそうです。適度にストレスがあり、悩み、どう対処するか。考え、行動し、進む。それでこそ人間が「生きている」といえる。何の悩みも心配もなく、メシを出してもらい、テレビを見て、ボケーッとしている。これではストレスはないかもしれませんが、「生きている」という実感もないのです。

どうですか。困難に戯れてみようと思いましたか。

(3)私は宇宙の力と一つです

では、『ひかりの語録』です。ここには人生を前向きに考え、勇気を与える言葉が沢山でています。すぐには実行できなくてもいいんです。この詩を読んで、「うん、いいな」と思い、折に触れて思い出す。そうすると元気が出ます。ポジティブ・シンキングになります。たくさん紹介したいのですが、ここでは一つだけ紹介します。それも一部分です。「生きた生命」と題する詩です。

〈名乗れ、境遇に屈従する卑怯者は誰だ。
誰がわが生命を食べ物でこねあげた塊（かたまり）だとおもってゐるのだ。
生命は蝋細工（らふざいく）ではないぞ。
石膏細工でもないんだ。
おれは旋風だ。
颶風（ぐふう）だ。
おれは環境を
徐々にわが望みのまゝに 飴（あめ）のやうに
捻（ね）じまげる。

俺は宇宙を造った大いなる力と一つの者だ。
おれは空中電気を雷（かみなり）に変じ、
太陽の光を七色の虹に変じ、
真黒な土から燃えるやうな赤い花を咲かし、
火山を爆発さし、
あの不思議な星雲から、
太陽系を生んだところの大いなる力と一つの者だ。
環境が何だ。
運命が何だ。
おれはおれの好きな時が来れば、
鰻（うなぎ）が石垣の間から抜け出すやうに、
どんな苦い運命からでも抜け出すのだ〉

いいですね。書いていてもエネルギーが与えられます。かなり長い詩です。まだまだ続きます。

どんなに閉じこめられ、、堰（せ）きとめられても、激流となり瀑布となる。この大自然と同じ生命だからです。そう書かれてます。

〈少しも出口がないやうに
おれを堰（せ）きとめれば
おれは地の中にもぐり込む。
おれはしばらく地下に沈潜して姿を見せないが、
おれは消えもなくなりもしないのだ。
やがて吹きたぎる泉となって
旅人の咽喉（のど）をうるほさずにはおかないのだ。

おれが地下にしみ込むことすら遮（さへぎ）るならば、
おれは霧となり、
雲となって
虚空へと舞ひ上る。
時が来ればおれは
旋風を呼び
雷電を呼び
肺然たる猛雨となり、
如何なる大堤をも決する洪水となって、
結局は大いなる海洋とならずにはおかないのだ〉

(4)同じ８月生まれなのに。私は愚かでした



村上正邦さんの句です

　では、８月21日の村上さんの「誕生パーティ」に戻ります。村上さんは８月21日が誕生日で、この日で満75才。若いですね。元気です。案内状にはこ書かれています。

〈村上先生は現在、ＫＳＤに関わる冤罪事件で上告中ですが、ご本人はこの厳しい暑さをものともせず、至って意気軒昂、お元気に毎日を過ごされております。　一審・控訴審までは、裁判所の正義に基づく公正な審判に期待し、一切沈黙を守ってこられましたが、東京高裁で控訴棄却の判決が下されて以降、言うべきは言い、為すべきはなそうとお考えになり、現在は村上先生ご自身が主宰する「一滴の会」などの勉強会を活発に開催し、若き友人・仲間たちと、日本国の将来を憂い、真摯な議論を続けておられます〉

　そしてこの日、村上さんの二つの句が紹介されました。

大花火　一期一会の　えにしかな　（誕生日に寄せて　正邦詠む）

空も海も　島も朝焼け　砂の音　（８月19日　屋久島にて　正邦詠む）

　「一期一会」か。いいですね。この日は多くの国会議員が来て挨拶をしてました。伊吹文明文部科学大臣、平沼赳夫さんなどが話しました。平沼さんは、「早く国会に帰ってこい！」と言っ

てました。裁判で勝利して、帰ってこいというわけです。平沼さんは最近、大病し、大変だったのですが、元気になりました。平沼さんは生長の家の谷口先生を尊敬し、『生命の実相』を生涯の愛読書だと言ってました。これは、以前、産経新聞に書いてました。だから、大病をした時も、「困難に戯れよ」と思ったのかもしれません。「おれは銑鐵（せんてつ）ではない。粘土ではない。生命だ。生きたエナジーだ」と思っていたのでしょう。そういう信念があったからこそ大病に打ち克ち、政界でも大きな存在感を示しているのだと思います。

　このパーティでは、自民党の衛藤晟一さんにも会いました。会うといつも、「先輩！」と言ってくれます。先輩らしいことは何もしてないのに、でも、嬉しいです。彼は生学連、全国学協の後輩です。いや、同志です。学生運動では私は「落ちこぼれ」ですが、衛藤氏は卒業後も着実に政治活動を続け、国会議員になりました。落選やら、何やら、何度も危機はありました。しかし、「困難に戯れよ」という言葉を思い出して頑張ったのでしょう。そうに違いないと思います。


衛藤晟一氏（左）と

　このパーティでは、西部邁さん、筆坂秀世さんにお会いして、いろいろお話をしました。又、前から会いたかった漫画家のさかもと未明さんに会えたので嬉しかったです。パーティの最後に村上正邦さんが挨拶しました。ここで、「困難に戯れよ」の話をしたのです。さらに自分の誕生日について、こんな話をしてました。

〈私は８月21日に生まれました。夏の暑い最中です。そんな時に私を産んだ母は大変だったと思います。 どんなに苦しい思いをしたか。又、時代も厳しい時代でした。それで母親に言いました。「こんなに暑い時に、 苦しい思いをして産んでくれて大変だったろう。本当に有難う」と。そしたら、母親が言いました。 「バカなことを言うな、子供は宝だ。うれしくて、ありがたくて、感謝して産んだんだ。苦しいとか、 大変だとか思ったことは一度もない」と〉


（左から）鈴木、西部邁さん、行徳哲男さん

　ジーンときましたね。お母さんも「生長の家」だったのかもしれません。偉いお母さんだ。そして、ハッと気が付きました。自分のことです。私も夏の暑い最中に生まれています。８月２日です。でも、「こんな暑い中、産んでくれた母親は大変だったろう」と思ったことは一度もありません。感謝したこともありません。ガーンと頭を打たれたようになりました。私は、日本一の親不孝者です。夏に生まれたことに何の感情も感謝も持ってなかったのです。いや、「何でこんな暑い時に生んだんだ」と心の中で文句を言ったものです。愚かでした。ひどい息子だったと自己嫌悪にかられました。

　帰る時に、「いい話でした。僕なんかダメです。教えられました」と村上さんに言いました。「皆が期待してるんだから、早く国会に戻って下さい」と言いました。私は、自分では「生長の家」の教えを支えに生きてきたと思っていたのに、村上さんに比べたら、まだまだ未熟だと思いました。申し訳ありません。

　今、『世界』（岩波書店）で、魚住昭さんが「聞き書　村上正邦」という連載をやってます。「日本政治右派の底流」とサブタイトルが付いてます。力作です。多くの人に話を聞き、村上さんの人間像に迫っています。「生長の家」への入信、信仰体験についても詳しく語っています。私も取材され、かなり長く話しました。来月で最終回で、その後、単行本になるそうです。これは楽しみです。そしてぜひ、裁判に勝利し、政治の世界に戻ってほしいと思います。

【だいありー】



有田芳生さんと。笑顔がいいですね

(1)８月27日（月）午後、仕事の打ち合わせ。夜、有田芳生さんから電話がある。「先週のセミの話、面白かったよ」と。「でも宮本顕治は獄中12年ですよ」と言われた。そうか。徳田球一、志賀義雄が「獄中18年」だったので、一緒だと勘違いしたのだ。訂正します。

先週も載せたけど、有田さんと二人で撮った写真も載せよう。写真を見て驚いた。実に、すがすがしい顔をしている。いい笑顔だ。テレビの仕事を辞め、選挙に出て、大変だったと思ったが、かえって、ふっきれたのだろう。これからは自分の時間もあり、好きな仕事が出来ると張り切っていた。積極思考の人だ。村上さんが「困難に戯れよ、と言ってましたよ」と教えてあげた。でも、有田さんの方が、元々その心境に達していたのだ。

「よくテレビの仕事を辞められましたね。奥さんは反対しなかったですか」と聞いた。毎日、出てるんだから、収入もかなりの額だと思う。それを辞めて、選挙に出るんだ。いろんなローンもあるだろうし、奥さんは反対するはずだ。何が何でも阻止すると思った。ところが、「全く反対しなかった」と言う。ウソだろう。僕だったら、辞めない。固定給には死ぬまでしがみつく。

そこで、ハッと気が付いた。そうか、「同志」だったからか。奥さんも民青、共産党の活動家だったのだ。今は二人とも辞めてるが、若い時に、「無償の行為」をやった体験は大きいと思う。共産党に入る人は、「世の為、人の為に尽くしたい」「社会の矛盾をなくしたい」「飢える人がいない、平和な世の中をつくりたい」と思い入党する。自分で党費を払い、さらに、朝早く起きて、「赤旗」を配る。無給だ。偉い。報酬を求めない無私の行為だ。その時の体験があるのだろう。だから、たとえ無収入になってもいい。又、ゼロから始めたらいい。そういう達観した境地に立てるのだ。だから、実に清々しい笑顔だった。と私は（勝手に）思いました。

左右の運動に入る人、宗教に入る人も、自分のことは考えない。これで金を儲けたり、出世しようとは思わない。ただ、ひたすら、世の為、他人の為と思う。その気持ちは貴いと思う。

そういえば、筆坂秀世さん（元日本共産党幹部）ともそんな話をした。『私たち日本共産党の味方です』（情報センター出版局）で。この本も重版して、新しい本が送られてきた。

この対談は、４回ほどやったが、実は、村上さんの事務所をお借りしてやったのだ。もう書いてもいいだろう。「おかげ様で、いい本が出来ました」と村上さんにもお礼を言いました。事務所では村上さんに何度か、お会いしました。「鈴木君、これが谷口先生からいただいた書だよ」と見せてくれました。とても大事にして、ご自分の机の後ろにかけてありました。

そうだ。有田さんと会った時、「風東　風が吹くまで昼ねかな」の気持ちですと言ってました。達観ですね。これは広田弘毅の句で、城山三郎の『落日燃ゆ』に出ています。それで城山三郎の話になり、私は「４度のメシ」の話をしました。今、本があるので、正確に書きます。城山の『静かに、健やかに、遠くまで』（海竜社）に出てました。こんな言葉です。

〈「人間は、日に四度、メシを食うものだ」
「はあ？」
「三度は、ふつうのメシを食う。あとの一度は、活字のメシを食え。つまり、読書だ」　『臨3311に乗れ』〉


焼肉屋で。有田さんと

ウーン、いい言葉だと思いました。それで有田さんにも教えてあげました。有田さんは読書家だから、実行してるでしょうが。

忙しくて本なんか読めないという人が多いです。携帯やメールに忙しくて本を読まない。でも、どんなに忙しくてもメシは食います。「忙しくて、ここ１ヶ月、メシを食ってないよ」という人はいません。死んじゃいます。だったら、本も読むべきです。メシと同じように、食べなかったら精神と思想が死にます。



私の生活が実にリアルに描かれている。『別冊新鮮組ＤＸ』より

(2)８月28日（火）『新鮮組』（10月号）が送られてきた。「鹿砦社・松岡利康。不倒の論戦」という漫画が出てました。「言論弾圧と戦った730日」。実に、いい企画です。この中には松岡氏を支持し、エールを贈った人々も出ています。岡留安則氏、高須基仁氏、浅野健一氏、そして私です。私の漫画がいいですね。だから、紹介します。

顔もソックリだし、「みやま荘」の雰囲気が実によく描けてます。破れた畳に、万年床。壁にはヒビが入り、ゴキブリが這ってます。窓ガラスは破れ、そんな中でチャブ台に向かって原稿を書いてます。壁には「清貧」とスローガン（？）が貼られてます。これもその通りです。まるで見てきたようですね。

今まで、いろんな漫画に描かれてますが、これが一番気に入ってます。原作は田口宏睦さん。漫画は村田らむさんです。ありがとうございました。

この日の夜は、青山で打ち合わせ会。ニューヨークで憲法シンポジウムを主催した渡辺真也氏を囲んで、４月の報告。そして来年１月の展示会の打ち合わせ。憲法９条をテーマにした展示会を１月にニューヨークでやり、その後、日本、韓国でやりたいという。オノ・ヨーコさん、森村泰昌さん、大浦信行さんなどの作品が出展される。凄い企画だ。それに合わせて、憲法の討論会もやるという。ジャン・ユンカーマンさん、大浦信行さんらに会う。

(3)８月29日（水）午後から河合塾コスモ。国語科の会議。現代文、小論文、古文、漢文の先生方が集まって会議。なかなか高度な論議で、とても勉強になりました。自分の未熟さ、無能さを痛感しました。教師というよりも、私は生徒ですな。学ばせてもらってます。

(3)８月30日（木）図書館。夜、早稲田の「あかね」に行く。若者たちと話し合いました。

(4)８月31日（金）取材。夜、柔道。

(5)９月１日（土）一日、原稿書いてた。森達也対談集『豊かで複雑な、僕たちの世界』（作品社・1700円）が発売になった。36人との刺激的な対談が載っている。私も入ってます。



私の「証言」から。『別冊新鮮組ＤＸ』より

(6)９月2日（日）昼から代官山のお店「晴れた空に豆まいて」で三浦和義さんとトーク。「愛国心と愛国運動」について話しました。その後、ＪＲ東労組の集まりに行く。終わって納涼会。

【お知らせ】

(1)９月６日（木）～９日（日）見沢知廉原作・高木尋士脚本の「天皇ごっこ」が上演されます。woody theater中目黒で。ぜひ見て下さい。

(2)９月13日（木）午後７時、ホテルサンルート高田馬場。一水会フォーラム。講師は小坂浩彰氏（ＮＧＯレインボーブリッジ）で、「なぜ私が北朝鮮に関わるようになったか？＝逆風としての国策捜査を受けて」。衝撃的な話が聞けると思います。

(3)９月21日（金）午後１時から日比谷公会堂。「戦場体験放映保存の会」総会。

(4)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(5)10月９日（火）７時、一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。蓮池透さんが講師で来られます。貴重なお話が聞けると思います。

(6)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。

HOME

今週の主張

バックナンバー

また、セミの話ですよ

今週の主張9月10日

(1)セミは４億年前からこの地球にいたんですよ



『素数ゼミの謎』（文芸春秋）

本が送られてきた。『素数ゼミの謎』という本だ。このＨＰを読んでる人だろう。「なして君」の疑問に答えてやろうということか。あるいは、セミ本人が送ってくれたのかもしれない。この中にオラの「秘密」があるよ…と。

『素数ゼミの謎』は静岡大学教授・吉村仁さんが書いた本だ。石森愛彦さんの絵がふんだんに入っていて楽しい。大人にとっての絵本のようだ。「子どもから大人まで楽しめる科学読みもの」と帯には書かれている。文芸春秋刊で1429円だ。

帯には、さらにこう書かれている。

「17年に一度だけ現れる不思議なセミを知っていますか。
小さなセミに隠された壮大な進化の物語」

知らなかったですね。そんなに偉大で壮大な進化の物語にセミが関係あったなんて。

まず、地球の誕生は46億年前です。ピンと来ませんが、とっても古いのです。40億年前に原始の海が誕生。38億年前に海中で最初の生命のもとが現れる。だから私達の先祖は魚です。私の先祖は「スズキ」です。

さて、ぐっと近くなって、4.1億年前。魚が大発展。両生類も登場。シーラカンス、肺魚も登場します。シーラカンスというのは「頭の古い人」の代名詞によく使われますね。赤軍派の議長・塩見孝也さんは「現代のシーラカンス」と言われ、本人も自称してます。「時代おくれ」ということです。でも、４億年も前となると、壮大です。感動です。

では進化の歴史です。3.6億年前に巨大トンボやゴキブリなどの昆虫や、両生類が地上で栄えました。セミも登場します。凄いですね。3.6億年前からセミはこの地球上にいたんです。

さらに、2.1億年前に恐竜が繁栄し、やがて滅びます。氷河が発達し、500万年前、ヒトの祖先が登場。マンモスも現れます。

そして、ここからが大事です。180万年前、「氷河時代」です。又、「原人」という人類が現れます。大型哺乳類が次々絶滅します。実は、この時、「周期ゼミ」が出来たのです。出来たというのも変かな。3.6億年前に出現したセミは、この氷河時代に革命的に変わったのです。

それまでは、土の中で幼虫時代を送っても、毎年毎年、地上に出てきて、ミンミンと鳴き、そして交尾し、卵を産んでいたんです。それが３億年以上も続いたんです。ところが氷河時代です。

いつまでたっても夏は来ない。何年も何年も夏は来ない。それで、地上に出るタイミングをなくしたんです。生理が狂ったのです。周期も狂います。

地上にいたマンモスはじめ大型哺乳類は寒いし、食うものもないし、次々と絶滅します。再び地球が暖かくなるのは１万年前です。つまり、氷河時代は180万年も続いたんですな。

その間、セミはずーっと地中の中にいたのでしょうか。いたとしたら凄い。「180万年ゼミ」です。180万年に一度、大量発生します。しかしそうはならなかったのです。何と、氷河時代も生き延びていたのです。



４億年前からセミはいた

この時、セミも絶滅の危機にありました。事実、ほとんどは死んだのです。しかし、氷河にもエアー・ポケットがあったのです。北アメリカ大陸中西部から東部にかけて、氷河の影響をそれほど受けなかった場所がいくつかあったんです。

たとえば盆地であったために氷河がやってこなかったり、暖かい海流が流れる海のそばだったので、あまり気温が下がらなかったような場所、氷河に囲まれていても、湧水が湧き出ていたために氷におおわれず、暖かかった場所などです。

こうした「避難所」のような場所がいくつか点々とあって、そこでは多くの植物や昆虫が生き残ったのです。この「避難所」のことを古生物学では「レフュージア」と呼ぶそうです。そこで祖先ゼミたちがかろうじて生き残ったそうです。

そんな生活が何万年も続くうちに、「周期ゼミむの性質が生まれたのです。こうやって書いていくと、なかなか終わらん。興味のある人は、この本を読んで下しゃんせ。ともかく、この氷河時代の〈記憶〉が遺伝子の中に残り、「13年ゼミ」「17年ゼミ」が出来たという。「レフュージア」のなかった日本にはこんなセミはいない。

もっと長い時間、地中にいたセミもいただろう。あるいは、焦って地上に出たセミもいた。しかし、それは少数者だ。だからすぐに鳥や他の虫に食われて絶滅したんです。たまたま17年目に地上に出たら、ドッと他のセミも出た。鳥や虫は襲ってくるが、食っても食っても食い尽くせない。だからセミは生き延びた。「よし、この手しかない！」と思ったんだね、セミは。「食われる以上に産み、そして集団で地上に出る」。この戦略を考えついた。それが、「13年ゼミ」「17年ゼミ」の異常発生につながるんじゃよ。

(2)「17年ゼミ」はこうして生まれた

それから、何故素数なのか、ということも詳しく書かれてます。読んでみて下さい。素数ゼミの英語の名前は「Magicicada」（マジシカダ）という。Magicは魔法、Cicadaはセミという意味。魔法のセミなんですね。マジかよ。

ともかく、周期ゼミは、ある年だけに集中して出ることにより、〈生き残る〉ことが出来たのです。この本では、こう書いてます。

〈発生する年だけに集中してたくさんの成虫が出てくるので、鳥などの捕食者（セミをエサとする敵）が狙ってきても、とてもとても食べ切れません。お得意の大合唱にも閉口して、鳥たちは去っていきました。

　また、出てくるまでに13年か17年もかかるという暮らしのおかげで、彼らを専門にエサにしようとする捕食者もいなくなりました〉

　そうか。セミには「偉大な知恵」が隠されていたんですね。でも、氷河時代と違い、今は、暖かいし、毎年出てきてもいいはずです。あるいは、３～５年で出てきてもいいはずです。でも融通が利かないんですな、遺伝子は。この本では…。

〈でもなぜか、いくら早く育っても、彼らは13年、17年後まで羽化するのを待っているようです。そう、育ったからといって早く出ていっても、今やだれも交尾する相手がいません。いったん13年、17年という発生周期を完全に身につけてしまったので、周期をずらしても何も良いことがなくなってしまったのです〉

〈結局、ほかの生き物と違って、「みんなと同時に、同じ場所に出てくること」という奇妙なルールを護らないと、子どもを残せなくなってしまったのです〉

　では、ちよっと別の視点から見てみましょう。人間も動物です。では、動物にとって最も大切なことは何でしょうか。「種の保存」です。個体は死んでも全体としての「種」は生き延びねばなりません。そのためには、

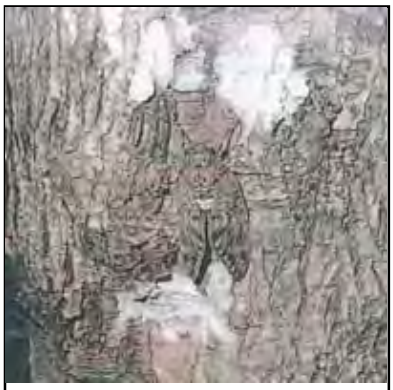
〈食って、産んで、死ぬ〉

この三つの大原則が必要なんです。これは戸川幸夫の『ヒトはなぜ子育てが下手か』（講談社文庫）に出ていました。「食う」「産む」は分かるけど、「死ぬ」のは必要なのか？と思うでしょう。「死は種の若返り法」だと戸川は言います。

「〈死〉ということも、種族をいつまでも若返らせ、永遠に続かせていくために非常に大切な役目を持っている」

　ライオンや虎は、鋭い牙や爪を持ち、ヌーやシマウマを襲って食べます。ヌーは草を食べます。しかし、ライオンに食べられないように「速い足」という武器を持ちます。さらに集団でいるのは、少し位、食べられても「種」が生き延びるためです。この「大勢でいる」「大量に子供を産む」というのも「自衛法」です。弱い者ほど、たくさん産んで、生存率を上げようとします。
　海に棲んでいるマンボウは一度に３億もの卵を産みます。日本の人口の二倍以上です。でも、99.99…%は他の魚に食われます。かわいそうです。まるで、他の魚のためにエサを産んでるようです。でも、３億がそのまま育ったら、海はマンボウだらけです。（それも面白いでしょうが…）
　だから、「自衛」「生存」をかけてマンボウは３億もの卵を産むのです。

(3)この地球は昆虫に返しましょうよ



セミの擬態

さて、東中野図書館に本を返しに行ったら、セミが鳴いてました。「ここにいい本があるよ」と教えてくれました。ホントかな、と思い、ついて行くと、ありました。『自然のかくし絵＝昆虫の保護色と擬態』（偕成社）という本です。矢島稔さん（上野動物園水族館館長）が書いてました。葉っぱや枝と同じ格好をした虫などは、よく知ってました。しかし、セミもそうだったんですね。木の幹に似た色をしたセミがピタリと大樹に抱きつき、樹皮になりきっている。その写真を紹介しましょう。分からんですね。それも、カメラのピントをセミに合わせたので、見て分かりますが、普通に見ては分かりません。それに、影で見破られないように、ピタリと吸い付くのです。

セミというのは大量に一ヶ所にいるから、それだけで、「生き残れる」と思ってましたが、こんな「裏技」も使ってるんですね。いや、13年ゼミや17年ゼミは、こんな裏技は必要ないでしょう。日本のセミの場合でしょう。

この本の巻末に、矢島さんが書いてます。タイトルがいいですね。

〈「いる」のに「いない」と主張する虫たち〉

うーん、かくれてるんですね。「潜在右翼」みたいですね。いつもは普通のサラリーマンで、土、日には上京して、火炎ビンを投げたりしている。政治的発言はしない。普通の市民の〈色〉に染まって生きている。「ネット右翼」もそうでしょう。名前も住所も明らかにしない。実際は、普通の気の弱いアンちゃんなんでしょう。でも、ネットの中では過激な右翼になる。みんな、「保護色」を持ってます。「擬態」をしちょります。人間も昆虫です。いや、昆虫の真似をしてるんです。

矢島さんは言います。地球上で知られている昆虫は約80万種だそうです。自然界は、食べる、食べられるという関係でなりたってます。昆虫は「食べられる側」の代表です。かわいそうですね。

しかし、大昔からそうだったわけではありません。昆虫が地球上に現れたのは古生代のデボン紀ごろ（約４億年前）です。セミもこの時、現れます。そして石炭紀に入ると飛躍的に発展しました。これは、その当時は温度や湿度が高く、シダ植物などがしげっていて、昆虫たちにとっては非常に暮らしやすい環境でした。天敵もないし、地球は「昆虫天国」だったのです。

ところが、中生代（約２億年前～7000万年前）になって、爬虫類と鳥類が現れ、昆虫の敵になりました。さらには哺乳類が現れ、この中には好んで昆虫をエサとする種類があったため、昆虫たちは敵にかこまれて暮らす状態になったのです。

昆虫が敵に見つからないためには、ものかげに隠れる。土や木の中にもぐる。いろんな方法があります。急にはもぐれない。逃げられない虫たちは、隠れないでいても敵に見つからない方法、「いる」のに「いない」ように見せるカムフラージュを身につけたのです。

凄いですね。虫は偉大ですよ。我々は思い上がっていたのです。この地球は自分たちのものであると思っています。しかし、元々は、「昆虫の地球」だったんです。昆虫のものです。その平和な地球を侵略し、虐殺したのが我々人間です。（その祖先の哺乳類です）。だから、謝罪し、返しましょうよ。この地球を昆虫に返すのです。

昆虫といっても多過ぎるから、じゃ、代表してセミに返しましょう。「大政奉還」です。セミがこの地球の王様になり、大統領になり、大臣になります。そして政治を執るのです。

今すぐこれが無理ならば、少なくともセミや昆虫の「人権」は認めましょう。虐殺はやめませう。そう思ったら、「そうだ、そうだ！異議なし！」とセミが叫びました。昔、人間界で新左翼の活動家だったセミでしょう。彼は、「これを読め！」と教えてくれました。図書館で、セミに導かれて見たら、こんな本だったのです。

奥本大三郎、海野和男『虫権利宣言』（朝日新聞社）



『虫権利宣言』（朝日新聞社）

ヒャー、私と同じことを考えてる人がいる。それも、人権派の朝日新聞から出ている。いいですね。かなり長いのですが第１条から４条までを紹介してみます。

第一条（自由・平等の権利）われわれは、自明の真理として、すべての虫は平等に造られ、造物主によって一定の奪いがたい天賦の権利を付与され、そのなかに生命、自由および幸福の追求の含まれることを信ずる。

第二条（差別の禁止）すべて虫は、種、皮膚の色、性、鳴き声、生態、財産、家柄もしくはその他の地位のような、いかなる種類の差別も受けることはない。

第三条（政治的団結の原則）あらゆる政治的団結の目的は、虫の、消滅することのない自然権を保全することである。これらの権利は、自由・所有・安全および圧制への抵抗である。

第四条（虫として認められる権利）すべて虫は、いかなる場所においても、法の下において、虫として認められる権利を有する。

(4)本当は、我々は虫なんです。気付かないだけです

さらに続く。いいですね。でも、この「虫権利宣言」は出来たら、虫自身によって書いてもらいたかった。どんなに民主的でいい内容でも、これは人間が作って与えたものだ。何百年か経って、「内容はいいが、押しつけだ！」「押しつけ憲法反対！」という声が虫の右派から起きるだろう。

でも虫の意志や声なんか分からんだろう…というあなた。それは違います。だって、こんな事が言われてます。世界中で日本人だけだそうですね。虫の声を「心地よい」と思い、「音楽」として聞いているのは。「チンチロリン」とか、「スイッチョ」とか、「ミーンミンミン」とか。日本人以外は、「ただの騒音」「ノイズ」としか思わないそうです。本当に「日本人だけ」が〈虫の声〉を心地よいと聞いてるのか。それは又、調べてみます。

しかし、そうだとしたら、素晴らしい話です。虫の声を「心地よい」「音楽だ」と聞く感受性があるのなら、さらにもう一歩進めましょう。言っている「内容」や「思想」も分かるはずです。「オレたちの権利を認めろ！」「勝手に殺すな！」「生きさせろ！」と叫んでるんです。です

から、彼らと〈対話〉し、彼らの声で「憲法」や「権利宣言」を書いてもらいましょう。
そうだ。「日本国憲法」も、人間の権利だけでなく、虫や鳥や他の動物、植物の〈権利〉も認めたらいい。そのために大幅に改正したらいい。

それに、ちょっと危ないことを言いますが、「虫」とは、実は「人間」なんです。いや、「自分の中にある本当の自分」のことなんです。暑さでクレイジーになったのではありません。
だって、考えてみて下さい。「腹の虫がおさまらない」とか、「あいつは虫が好かない」と言うでしょう。何も、本当の虫が体の中にいるわけじゃありません。虫は人間です。自分自身です。
「そんな話は虫がよすぎるよ」とも言います。どことなく嫌うのは「虫が好かない」と言います。第六感が働いて知らせることを「虫が知らせる」と言います。自分の中の自分。いや、それを超えた存在かもしれませんね、虫は。
「虫が付く」という言葉もあります。未婚の女性に変な男が出来ることです。別に、セミやゴキブリが取り付くのではありません。「好ましくない男」が虫といわれてます。右翼とか左翼のことでしょう。「虫酸（むしず）が走る」という言葉もあります。吐き気がするほど不快な気分になることです。どうですか、勉強になったでしょう。君達の正体は、本当は虫なんです。無視しないで聞いておくれやす。
新左翼の内ゲバの時は、お互いに「青虫殺せ！」「ウジ虫、殲滅！」と言い合ってました。虫同士の争いだったのです。

『辞林21』（三省堂）で「虫」と引いたら、いろんな意味があります。まず、
「・人・獣・鳥・魚・貝以外の小動物。多く、昆虫をいう」
から始まって、いくつもあります。面白いのは・以下です。

〈・体内に宿り、さまざまな考えや感情を起こすもとになると考えられているもの。「虫の知らせ」「浮気の虫が起きる」
・癇癪（かんしゃく）
・一つ事に熱中する人。「本の虫」「芸の虫」〉

・を見て、ギクッとしましたね。「本の虫」とは私のことです。

気になったので、次に『現代漢語例解辞典』（小学館）を引いてみます。虫の正字は蟲なんですな。意味は二つあります。二つ目が重要です。

・むし。獣・鳥・魚類以外の下等動物。特に昆虫。
・動物の総称。
「羽虫（はちゅう）＝とり」「甲虫＝かめ」「毛虫（もうちゅう）＝けもの」「裸虫（らちゅう）＝人類」「鱗虫（りんちゅう）＝さかな」

そうか。この地上に生きてるものは全て「虫」なんだ。４億年前の地球の〈記憶〉かもしれません。人間は「裸虫（らちゅう）」なのか！これは一大発見でしたね。
今年の８月に中国に行きました。近代的ビルが立ち並び、オリンピックに向け建築ラッシュです。でも、時々、シャツを脱いで、上半身、ハダカで歩いているオッさんがいます。又、シャツの下をたくし上げて、腹を出してる人もいます。オリンピックを控え、外国人に恥ずかしいので、こ

んな格好はやめさせようと政府は必死ですが、間に合いそうにありません。人間を「裸虫」と言ったのは中国ですし。

　でも、日本では、若いネエちゃんが、はじめから腹を出してます。背中も出してます。パンツも見えます。ほとんど「裸虫」です。「セミ・ヌード」です。どっちにしろ、虫です。私も本の虫です。今は右翼運動は、ほとんど引退し、「セミ・リタイヤー」です。先週紹介した、「みやま荘」における私の漫画はよかったですね。ゴキブリが這い回ってます。ハエやカもいます。バッタもいます。虫と共に生活しています。万年床です。でも、いつか仕事で金が入ったら、ベッドを買いたいと思ってます。広々としたベッドです。猫を相手に、柔道の寝技を研究できる広さのベッドが欲しかです。そうすると、セミ・ダブルですね。やっぱり、セミです。虫です。

　そうだ。盲腸のことは「虫垂（ちゅうすい）」と言いますね。虫だ。又、この漢語辞典を見てたら、「虫書」というのがあった。

・中国、秦の書体の一つ。

・虫のはいまわる形に似た書体。

　うーん、日本なら、「ミミズのはったような字」といわれる。私はよく言われる。見沢知廉氏も言われた。私は単に、「書き順」を知らなかったからで、今は勉強してますから驚くほどきれいな字になりました。見沢氏の場合は天才の悲劇です。あり余る豊饒な思想・発想のほとばしりにペンの速度が追いつけなかったんですね。天才は皆、そうです。虫師の私が言うのだから間違いありません。

　「セミの話は面白かった」と多くの人に言われたので、今回もセミの話にしました。又、やってみます。出来たら、セミをテーマにしたセミナーをやりたいですね。「子供たちとの再会」も好評でした。これで安心です。案外、謀略かもしれませんよ。又、子供の話を書いても、「どうせ本か」と思われるでしょうから。単純なように見えて、案外と複雑な男です。こいつは。人を騙すセミプロですよ。

【だいありー】



（左から）三浦和義さん、松崎明さん、鈴木（9/2）

(1)９月２日（日）午後12時から２時。代官山のライブハウスで三浦和義さんとトーク。店の名前が凝っている。「晴れた空に豆まいて」。豆は鳥や虫に食べさせるんだろう。きれいな店だ。おしゃれな街、代官山らしい、おしゃれな店だ。ロフトをもっとおしゃれにした感じ。これはいい。

　三浦和義さんが、毎月ゲストを呼んで話している。「怖いもの見たさライブ。現代人別帳」。その第14回だ。これまで13人の人を呼んでいる。河村シゲルさんが司会。私は右翼過激派時代の話をした。三島事件、一水会創設の話も。権力に弾圧された話も。

　そして、「ＪＲ浦和電車区事件」の話になる。三浦んさも私も支援している。冤罪事件だ。ある組合員を強制して脱退させ、退職に追い込んだ、として７人の組合員が逮捕された。一年も勾留され、裁判になっていたが、何と有罪判決が出た。その被告とされた一人が会場に来てくれた。その人から詳しい話を聞いた。どこにでもある組合内部の「論争」「口論」だ。暴力をふるってないし、強制もしてない。にもかかわらず、「ＪＲ東労組は革マルだ！」と決めつけ、公安

は逮捕した。「週刊現代」もＪＲ東労組の初代委員長・松崎明さんを「革マルのトップ」「テロリスト」と決めつけ20週以上も非難キャンペーンを張った。それに対し、「それはおかしい」「一方的だ」と反対するマスコミもない。一般の人々も、「過激派だから取り締まるのは当然」といった声が多い。そんなマスコミの腐敗、国民のムードについて話をした。



（左から）河村シゲルさん、鈴木、三浦和義さん（9/2）

トークが終わって、三浦さんとＪＲ東労組の集会に行く。不当判決糾弾の集会だ。そのあと納涼会。松崎明さんに、「東京新聞の対談はよかったね」と言われた。嬉しかった。「戦争反対」と言うことが勇気が要るなんておかしい状況だ。元気のいい保守派が、「核を持て！」「北朝鮮なんかやっちまえ！」「戦争も辞さない覚悟で外交をやれ！」と言っている。「もっと冷静になれ」「戦争はやめろ！」と言う人が逆に「過激派」とか「テロリスト」と呼ばれている。変な話だ。

民主党の今野東さんも来ていた。「かあさんの歌」をつくった窪田聡さんも来て、アコーデオンで歌ってくれた。昭和33年につくられた。実にいい歌だ。さらに、「赤旗の歌」「インターナショナル」「俺たちの道は」などの革命歌を皆で歌った。いい気分だ。

(2)９月３日（月）昼、打ち合わせ。図書館。『ZAITEN』（10月号）発売。フルフォートさんと私の「憂国対談」が載っていた。この日の日経新聞にも大きく広告が出ていた。



（左から）窪田聡さん（右）と（9/2）

(3)９月４日（火）午後６時。虎ノ門パストラルに行く。立松和平『道元禅師』出版記念会。高橋公、三田誠広、福島泰樹さんらに会った。加藤登紀子さんも来ていた。

10年がかりの大作だ。５年前、立松さん原作の「道元の月」を歌舞伎座でやった。私も見に行った。そこで立松さんに会った。「あれは中間発表のような小説です」と言っていた。

(4)９月５日（水）取材。夜、柔道に行った。

(5)９月６日（木）昼、元朝日新聞の井川一久氏からベトナムの話を聞く。木村三浩氏と一緒。勉強になった。３時から、河合塾コスモ。今日から後期授業が始まる。台風のため、生徒たちとの食事会は中止。

(6)９月７日（金）６日から見沢知廉氏の芝居が始まった。この日は、上演の前に「３周忌追悼の会」関係者が挨拶した。私も挨拶した。芝居は素晴らしかった。高木尋士さんの脚本がいい。役者たちもいい。見沢氏も見ているはずだ。きっと喜んでいるだろう。それを感じた。詳しくは来週書こう。

実は、大きなプロジェクトが進んでいて、この日はどうしても出席できないと思っていた。ところが、プロジェクトは直前に中止。結果として、芝居に来れて、挨拶した。見沢氏が呼び戻したのかもしれない。万有引力を感じる。外ではセミが鳴いていた。



『ZAITEN』（10月号）

(7)９月８日（土）午後６時。四谷。主婦会館。上原ひろ子さん（社民党）の選挙報告会。私も応援したのに残念だった。投票依頼のハガキを出したし、ポスターも貼った。「鈴木さん、本気ですか？」と何人かから電話があった。「本気だよ。今回だけは社民党に入れてくれ」と頼んだ。それだけに残念だった。でも、上原さんは元気だった。再チャレンジしてほしい。

(7)「実話マッドマックス」（10月号）発売。鈴木義昭氏が「刺青を背負ったルポライター、竹中労」を書いている。実にいい。「鈴木邦男が語る竹中労の思い出」も載っている。

【お知らせ】


（左から）渡辺真也氏、大浦信行氏、鈴木、ユンカーマンさん（8/28）

(1)９月13日（木）午後７時、ホテルサンルート高田馬場。一水会フォーラム。講師は小坂浩彰氏（ＮＧＯレインボーブリッジ）で、「なぜ私が北朝鮮に関わるようになったか？＝逆風としての国策捜査を受けて」。衝撃的な話が聞けると思います。

(2)９月21日（金）午後１時から日比谷公会堂。「戦場体験放映保存の会」。「あの戦場体験を語り継ぐ集い」。全国から元兵士が集まります。

(3)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(4)10月９日（火）７時、一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。蓮池透さんが講師で来られます。貴重なお話が聞けると思います。

(5)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。

【感謝】

生学連（「生長の家」の学生部）の仲間が教えてくれました。「谷口貴康さんのブログに鈴木さんのことが載ってるよ」と。拝見しました。私のＨＰなど読んで下さって本当に光栄です。ありがとうございます。昔の仲間たちも書き込みをしていて、嬉しいですね。雅春先生の教えにはどれだけ「生きる力」を与えられたか分かりません。ありがとうございます。

HOME

今週の主張

バックナンバー

見沢知廉氏と再会した！

今週の主張9月17日

写真撮影：インベカヲリさん

(1)劇団再生の「天皇ごっこ」…強烈なショックだった



「天皇ごっこ」公演

お母さんが泣いていた。客席の随所からも啜り泣きが聞こえる。私も目頭を押さえた。素晴らしい芝居だった。脚本を読んで感動した。芝居の稽古も見た。俳優の懸命さ、熱気を見た。きっと素晴らしい舞台にはなると思っていた。しかし、こんなにも凄い芝居になるとは思わなかった。よくぞやってくれた。見沢知廉氏に再会できた。ありがとう。本当にありがとう、と高木尋士氏（脚本・演出）には言いたい。そして俳優や関係者にも。

高木尋士氏率いる「劇団再生」が見沢知廉の芝居をやった。９月６日（木）から９日（日）だ。中目黒のWoody Theaterだ。私は２日目の９月７日（金）に見に行った。公演は午後８時半から始まるが、その前に７時から「見沢知廉三回忌追悼の会」が行われた。

芝居は、「天皇ごっこ＝母と息子の囚人狂時代」と銘打っている。「原作：見沢知廉。脚本・演出：高木尋士」となっている。高木氏が、見沢氏の膨大な著作を丹念に読み、関係者に話を聞き、脚本を書いた。高木氏が見て、感じ、創出した〈見沢ワールド〉だ。思い切った解釈もある。独創的な解釈もある。脚本を読んで、唸った。凄い物語だ。楽しみだ。しかし、不安もあった。

だって、出演者は全員女性だ。見沢知廉を女性が演じる。それも３人の女性が、３人の見沢知廉を演じる。奇想天外なことを考える脚本家だと思った。面白いと思ったが、果たして観客が納得するのか。「冗談ではない！」と母親が怒るのではないか。そんなことを心配した。しかし、杞憂だった。芝居の何たるかを知らない素人の杞憂だった。お母さんも観客も、感動し、身じろぎせずに見ていた。舞台に本物の見沢を見ていた。見沢の声を聞き、見沢の思想を、苦悩を聞いていた。


「天皇ごっこ」公演

変な話だが、ジェラシーを感じた。これだけ人々に愛された作家はいない。死後も作品社から「愛情省」を初め、３冊も本が出ている。いろんな雑誌に取り上げられ、漫画化もされている。この日も見に来ていたが映画監督の大浦信行さんは、「次はぜひ見沢知廉を映画にしたい」と言っていた。死後も成長する作家だ。グングン成長している。

ジェラシーを感じたのは見沢氏に対してだけでない。この芝居を作った高木氏の才能に対してもだ。この日、多くの関係者が来ていた。お母さん、木村三浩氏、蜷川正大氏、針谷大輔氏、犬塚哲爾氏、雨宮処凛さん、切通理作氏、深笛義也氏、早見慶子さん、佐伯紅緒さん…等々だ。皆、思っているはずだ。自負しているはずだ。「自分こそ、見沢知廉を一番よく知っている」「理解している」と。

ところが、そうではなかった。「負けた！」と私は思った。高木氏が一番、理解しているのではないか。又、その「理解」を、こうして人々に「表現」して見せる。チクショー、かなわないな、と思った。理解する愛情が、熱意が私には欠けていたのか。それと、自分の理解したことを他人に伝えようとする「才能」。この点では高木氏の足元にも私は及ばない。ジェラシーどころではない。敗北感を感じた。

(2)これは壮大なる〈思想劇〉だよ


「天皇ごっこ」公演

この芝居は強烈な刺激だ。大いなる挑発だ。「皆は、長年、一緒に語り合い、一緒に闘った同志だろう。だったら、皆も各自の〈見沢物語〉を書いてみろよ！発表してみろよ！」。そう言われてるように思った。観客の全員がそう思ったはずだ。

俳優の一人一人だって、見沢知廉には会ったことはない。それまで名前も知らなかった人もいる。本も読んでない。でも、舞台に上がると、〈本物の見沢〉になっていた。見沢の魂が降りていた。「親友」であり、「長年の同志」だったはずの私達は驚いた。たじろいだ。「馬鹿な。そんな…」と思いながら、芝居が創る〈現実〉の前に、慌てふためき、狼狽した。こんなはずではなかったのに。と思った。

この芝居は骨太な〈思想劇〉だ。難しい政治用語も出てくる。北一輝、三島由紀夫も出てくる。左翼も右翼も出てくる。俳優が突然、三島の「檄」を朗読する。いや、読むのではない。空で言うのだ。迫力がある。鬼気迫るシーンだ。よく憶えたものだ。俳優すべての科白が〈思想〉だ。よくやってくれた、と見沢になりかわって言いたい。本人だって見ている。そして感謝していた。

物語は、実際に見沢が体験した人生を追いながら、同時に「彼が描こうとした世界」が、「見沢知廉」を追うという構成をとっている。

３人の見沢知廉がいる。同時に舞台に立っている。舞台の左側には大きな檻が作られている。千葉刑務所の独居房にいる見沢だ。舞台の右端には執筆する作家・見沢知廉がいる。中央には活

動家の見沢知廉がいる。各々が見沢を語り、見沢の理想を、見果てぬ夢を語る。パンフレットにはこう書かれている。

獄中の彼が「見沢知廉」を裁く。

執筆する彼が「見沢知廉」を描く。

右翼活動をする彼が「見沢知廉」をアジる。



「天皇ごっこ」公演

うーん、こんな手法があったのかと唸った。３人の見沢の他に、刑務所の看守が出てくる。精神分析の医者が出てくる。愛国チアガールが出てくる。そこで右翼と左翼の論争をする。しかし、最も重要なのはお母さんだ。獄中の見沢を励まし、時には厳しく叱る。

「早く出してくれ。こんな所にいたら死んでしまう」「死にたい」という息子に、毎日、手紙を書いて励ます。時には、「死ぬなら勝手に死になさい！」と厳しいことも言う。母親だからこそ言える言葉だ。

「中にいる時にいくら文句を言っても無駄だ。今はじっと耐えて、出てきてから思い切り発言し、書いたらいいだろう」と私は言った。「クニさんの言ったことに初めは反撥しましたが、今はその通りだと思います」と母は見沢に言う。芝居の中で私の名が出て驚いた。見沢氏は私のことを「クニさん」と言っていた。

芝居の前の「追悼祭」の時に挨拶した蜷川正大氏（二十一世紀書院代表）はこう言っていた。

〈見沢氏を思い出すと、ご母堂の顔が重なる。見沢氏はそのままご母堂と同義語である。見沢氏は『母と息子の囚人狂時代』の中に、「母がいなければ、俺はあの十二年間の地獄をとても生き延びることはできなかっただろう」と書いている〉

そうなんだ。二人三脚の人生だった。お母さんがいなければ生きて刑務所を出られなかったし、「作家・見沢知廉」も生まれなかった。読者の人は皆、知ってるだろうが、お母さんはそれはそれは大変なご苦労をされた。獄中から来る細かい字で書かれた手紙を原稿用紙に写しかえて、出版社に投稿する。何度も何度もやる。その甲斐あって、出獄前に新日本文学賞をとる。『天皇ごっこ』だ。それが作家活動のスタートになった。お母さんはパンフレットに書いていた。

〈46歳で亡くなりましたが、見沢の弟に、46年間兄貴におふくろを独占されていたな、と何気なく言われ、ハッとしました。本当に見沢の事にのみ追われ過ごした日々でした〉

面会し、手紙のやりとりをし、「清書して出版社に送れ」「○○に連絡とれ」と言われる。「早く出せ！」「弁護士は何をしている」「組織に連絡しろ！」…と矢継ぎ早の要求だ。さらには、「キャンディーズのランちゃんの写真を集めて送れ！」などという要求もある。そのたびにお母さんは必死になって動き回る。

(3)日本赤軍・丸岡修氏が「追悼の辞」を



「天皇ごっこ」公演の前の「追悼の会」

これは〈思想劇〉だと言ったが、あるいは古典的な〈母物語〉かもしれない。いや、古典的な〈母と子〉の物語をベースにした壮大な思想劇であり革命劇なのだろう。私はそう見た。

思わぬ事件（スパイ査問粛清事件）によって息子は逮捕され、刑務所に入れられる。12年間も権力に奪われてしまう。「お母さんが必ず助けるからね」と言うが、でも、どうにもならない。事件も逮捕も青天の霹靂だ。全く理解できない。どう考えたらいいのか分からない。

「あたはただ巻き込まれただけなのよ。ねえ、そうでしょう。そうでしょう」と問いただす。母としてはそう思いたいだろう。でも違うのだ。確信犯だ。主犯だ。その現実をどう受け入れていいか分からない。悩む。懊悩する。

見沢氏はお母さんに甘え、注文し、反抗し、でも、全面的に信頼しているのだ。これだけの親子関係は、ちょっとない。12年という隔離された時間があるからこそ、その絆は太く、強くなったのだろう。

とても筆舌に尽くせない苦労だ。でも、出獄し、出て来た時は作家になっていた。高橋哲央（本名）から、清水浩司（活動家時代の名前）になり、そして、「作家・見沢知廉」として出獄し、デビューした。三度の脱皮を経て、大きく羽ばたいたのだ。お母さんも嬉しかっただろう。「これから親孝行してもらえる」。そう思った。見沢氏も、「おふくろ、これからは親孝行するよ」と言っていた。でも、死んでしまった。親不孝だ。

そうだ。「追悼の会」では、初めに丸岡修さんの「追悼の辞」が朗読された。丸岡さんは元、日本赤軍。数々のハイジャック事件に関与したとして逮捕され、今は宮城刑務所にいる。最近、私は面会してきた。その時、「見沢氏の三回忌には追悼の辞を送りますから」と言っていた。それを実行してくれた。見沢氏とは東京拘置所で一緒になり、手紙をやりとりしてたという。非常にいい文章だ。ここに紹介しよう。

見沢知廉三回忌追悼の辞

わが友見沢知廉に贈る

君は乙酉（いつゆう）の年に翔び立ってしまった。

あれから二年、君はどこにいるのか

君は左から右に行った

我は右から左に行った

時間軸をずらせば君と我は交差しただろう

交差しなくとも目的地で会えたかもしれない

ダイダロスの子イカロスは太陽に向かって翔んだ

人はそれを愚かと言うのだろう

しかしイカロスは希望に向かって翔んだ

誰も翔ぼうとしなかっただけだ

君の肉体は地上に落ちても

魂は今も翔び続けている

太陽のある限り君を忘れない

わが友　高橋哲央君に贈る

あほんだら

親より先に死ぬ奴があるかい

この親不孝もんが

丁亥　九月七日

丸岡修

　ジーンとくる詩だ。見沢氏は「左から右」に行った。ブント（戦旗派）に入り成田闘争などに参加した。そのあと左翼ではあき足らなくて一水会に来た。丸岡修さんは逆に「右から左」に行った。小、中学校の時から2.26事件にあこがれ、右翼活動家になろうと思っていた。中学で北一輝を読んでいた。これは凄い。実は、右翼の人だって北一輝を読んでる人は少ない。北一輝について書いたものや、誰かの「北一輝論」は読んでいても、本人の原文を読んでいる人は少ない。
　ある時、右翼の人に言われた。「鈴木さんは北一輝は読んでますか」「全部読みましたよ」「どの北一輝ですか？」「……？」
　彼は「松本健一の『北一輝』を読んだ」という。他には「村上一郎の北一輝」もある。つまり、「北一輝論」のことだ。この時はあきれた。でもこれはいい方だ。今や、松本健一も、村上一郎も読まない人がいる。それでいて、「2.26の北一輝」は知っている。又、北の「負の部分」は知っている。北一輝は天才的な思想家だ。そして、自らは関係がないのに何の弁解もしないで刑死した。2.26事件の思想的リーダーとして。だからこそ、〈伝説〉になった。
　しかし、北一輝は毀誉褒貶の多い人だ。著作し、思想的運動をしながら、ドロドロとした運動の世界に身を置き、そのための金を集めた。時には恐喝まがいに金を集めて、運動に使った。と同時に、自らの生活もかなり贅沢だった。お抱え運転手を雇い、女中を数人も置き…と。
　そういう北の「負の部分」だけを知って、「じゃ、俺達だって恐喝していいんだろう。北一輝だってやってるんだし」と言う人もいる。「順逆不二」だ。「きたなく集めた金でも、きれいに使えばいいのだ」と。北一輝を自らの生活の自己弁護に使っている。それでは北一輝も泣くだろう。
　丸岡修氏は中学の時、北一輝の輝かしい「正の部分」を見た。本人の著作を実際に読んだ。しかし、共に闘う仲間も、団体もなかった。これは残念だった。我々が知り合っていれば、野村さ

んや見沢と知り合っていれば、我々の側に入って闘ったんだったろうに。

ともかく、丸岡氏は自らの変革の情、正義感を受け入れ、運動できる場として「日本赤軍」を選んだ。そういうことだ。

(4)あるいは見沢氏の「母」物語だ



（左より）高木尋士さん、深笛義也さん、私

又、丸岡氏の詩のラストのところだ。「あほんだら」「親不孝もんが」と言っている。これはその通りだ。丸岡氏だからこそ言える言葉だ。丸岡氏は今、宮城刑務所にいる。それも、重い病を抱えている。大手術をした。一級障害者だ。面会した時も車椅子で現われた。時々、咳込む。「大丈夫ですか。帰りましょうか」と言ったら、「いや大丈夫。こうして面会できることが薬になるんです」と言っていた。どんな逆境にあっても生き抜いて闘わなくちゃ。という闘志、覚悟を感じた。見沢氏に対しては、「外に出て自由になったのに死ぬとは何たることか」という思いもあるのだろう。怒りがある。見沢を叱りつけている。

その通りだ。そう思いながら、でも、見沢は〈親孝行〉だったじゃないか。そうも思う。左にしろ右にしろ、活動の世界に入れば、「向こう側」に行ってしまう。中には地下活動をして、親兄弟と一切、接触を断つ人もいる。一生会えない人もいる。親は何とか、「こちら側」の世界に奪還しようとするが、出来ない。そして死んでしまう。そんな例が多い。左右の活動家の歴史は「親不孝の歴史」だ。

その点、見沢氏は親が、「こちら側」に奪還した。又、息子は親の期待に応えて大作家になった。こんな「成功例」はめったにない。幸せだ。親孝行だ。若くして死んだのは残念だった。しかし、大作家として何冊も本を出し、その分野ではもう誰も超えられない。新潮文庫には４冊も入っている。永遠に残り、記憶される作家だ。

又、それほど親と対話した作家は他にない。親の愛情を受け、それに全身で応えた作家もいない。親孝行じゃないか。

私の家なんて、父は明治生まれ、母は大正生まれ。だから、あまり会話はなかった。「親は友達のようにチャラチャラ話すものではない」というポリシーを持っていたのか。いや、我々の世代は皆そうだろう。見沢親子のように、話し合ったこともない。手紙を交換したこともない。だから見沢親子がうらやましい。私が産経新聞をクビになり、右翼の世界に入った時は心配しただろう。絶望しただろう。何度も逮捕され、ガサ入れされた時も心配しただろう。悲しんだだろう。「向こう側」の世界に行ってしまった。と思っただろう。

だから、非合法運動を清算し、「言論活動」に専念するようになった時は、安心したと思う。見沢親子ではないから、手紙で書いてはくれない。会っても、照れくさくて、そんな話はしない。昔ながらの親だった。でも、私が河合塾とジャーナリスト専門学校の講師になった時は、喜んでいた。「こっちの側」の世界に戻ってきたと思ったんだろう。それだけだね。私なんて。親を喜ばせたのは。あとはずっと、ずーっと、心配のかけ通し、迷惑のかけ通しだ。そして、金をせびりまくり。世界一の親不孝者だった。

それに比べたら、見沢氏は「こちら側」の世界で立派に成功した。名をあげた。これからも本は出る。今回の芝居のように、多くの人が見沢知廉のことを書く。芝居にする。映画にする。見沢氏の書いたものを読み、感動し、泣き、生きる指針にする。見沢氏は永遠だ。こんな息子を

持って誇らしいだろう。立派に親孝行したじゃないか。私はそう言いたい。こんな素晴らしい芝居を作ってもらえるのなら、私だって自殺したい。そんな誘惑にかられた。

最後に、芝居のパンフレット用に書いた私の文章を掲載しよう。このパンフレットが実に素晴らしい。こんな立派なものは、ちょっとない。見沢氏の小説と同様、これも世に残る。永遠に残る。そこに書かせてもらい、光栄だ。



「天皇ごっこ」パンフレット

「俺なら飛べる」
今も悠然と大空を飛ぶ 鈴木邦男（一水会顧問）

見沢知廉は革命家だ。2.26事件を再びやろうとした。
革命がやれるなら右でも左でもよかった。新左翼で成田闘争に参加した。しかし本当の革命は出来ないと思った。「やっぱり三島だよ」と思い、新右翼・一水会に入った。「でも思想は左のままだった」と言う人もいる。

どうでもいい事だ、そんな事は。

新右翼の方が束縛がなく、アナーキーだった。やりやすかった。自分の力を試せた。たちまちトップに躍り出た。先頭切って大きく飛んだ。右と左の翼を持っているから強い。極限まで飛び、「スパイ査問事件」を経て、舞い降りたのは千葉刑務所の独居房だった。

見沢知廉は「意志の人」だった。強靱な精神の持ち主だった。こんな男は今まで見た事はない。どんな修羅場にもたじろがない。動揺しない。多分、維新前夜や戦国時代にはこんな男が多くいたのだろう。その動乱の世の遺伝子を持ってこの世に生まれ出た。
だから平和に慣れ切った今の人には理解出来ない所もある。しかし、理解出来ない人間が悪いのだ。昔、男とはかくの如く雄々しく闘い、たじろがなかった。彼の中に〈日本史〉を見る。
見沢知廉は「愛の人」だった。仲間を大切にし、弱い者の面倒をみた。慕ってくる者は書生にして家においた。他人から借金しても、困ってる仲間を助けた。だからあれだけ本が売れ印税が入りながら、いつも金に困っていた。

見沢知廉は「夢に生きる男」だった。永久革命を夢みていた。常に考えた。「これでいいのか」と。
もっと大きな、根本的な世直しが必要だと考えた。左から右に。政治から文学に。深く、そして高く。闘いの場を広げ、人々の心を揺り動かした。人々にも夢を与えた。

それなのに、2005年９月、マンションの８階から飛び降り自殺をした。いや、そう伝えられただけだ。

実際は違う。右と左の翼を持った鳳凰は、大空に向かって飛翔したのだ。白鳥になったヤマトタケルのように。「俺なら飛べる」と思った。その通りだった。今も悠然と大空を飛んでいる。

心の目を開いたら君にだって見える。その証拠に、今年９月、僕らは目撃する。見沢知廉の「復活の日」を。高木尋士氏の「劇団再生」に見沢は降臨する。

天才・見沢との再会が、今から楽しみだ。

【だいありー】



立松和平さん（右）と。（9月4日の出版記念会で）

(1)９月10日（月）11時、高田馬場で打ち合わせ。何とか実現できたら嬉しい。力不足だけどやってみたいと思った。
　夜、柔道。乱取をやって、「投げこみ稽古」をやった。続けて100本くらい、投げつけられた。ハードだった。フラフラになったけど、気分は爽快だった。

(2)９月11日（火）図書館で勉強。

(3)９月12日（水）驚いたね。安倍首相が突然の辞意表明。２時から記者会見。発足時はあんなに支持があったのに。アホな閣僚のために足をひっぱられて…。早過ぎたんだよね。首相になったのが。「テロとの闘い」は「国際公約」だから、どうしても果たしたい。でも、小沢民主党代表との会談を断わられ、「国際公約」を果たせそうにない。だから、やめる。そのことによって「局面」を打開させたい、と言う。つまり、「自爆テロ」だな。自分が滅することによって、「国際公約」を果たしたい。それだけアメリカが怖いのか。アメリカに面子を立てるために、「自爆テロ」を決行し、それによって国民の同情を買い、局面が変わり、「国際公約」を果たせるのではないか。そう考えたのか。「捨て身」の行動だ。何か、あわれだね。

(4)９月13日（木）11:00高田馬場。元過激派の人達と共同謀議。さて、何をやるのでしょうか。
　午後３時から河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養ゼミ」。今、話題になっている「ベーシック・インカム」について話をした。『ＶＯＬ』（２号・以文社）をテキストにして、皆で読み、考えた。生徒からブドウをもらった。巨峰だ。食べたらおいしかった。
　夜、遅れて一水会フォーラムに行く。小坂浩彰氏（ＮＧＯレインボーブリッジ）の「なぜ私が北朝鮮に関わるようになったのか？＝逆風としての国策捜査を受けて」。小坂さんは80回も北朝鮮に行き、北朝鮮幹部にも独自のネットワークを持っている。その中で、マスコミでは聞けない本音や、日朝問題の深層に迫り、興味深かった。超満員で、私も廊下で聞いた。

(5)９月14日（金）昼、取材。夜、柔道。

(6)９月15日（土）午後２時。「裸の王様」のライブを見に行く。辛口の社会批評を主としたエンターテイメントだ。実に面白かった。終わって皆とビールを飲んだ。中山千夏さん、矢崎泰久さんらと久しぶりに会った。



（左から）私、三田誠広さん、福島泰樹さん

【お知らせ】

(1)９月21日（金）午後１時から日比谷公会堂。「戦場体験放映保存の会」。「あの戦場体験を語り継ぐ集い」。全国から元兵士が集まります。

(2)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(3)10月６日（土）１時から飯田橋の仕事センター。法政大学の学生の不当逮捕・処分に抗議する集会。私も出ます。

(4)10月９日（火）７時、一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。蓮池透さんが講師で来られます。貴重なお話が聞けると思います。

(5)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。

(6)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。

(7)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、 「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的シンポジウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(8)若松孝二監督の大作「実録・連合赤軍」が来年３月中旬よりテアトル新宿で上映されます。 それに先だって１月に過去の若松作品の上映とシンポジウムがテアトル新宿で連続して行われます。
　１月５日（土）の深夜は、12:30より、若松監督、森達也氏、雨宮処凛さん、そして私が出てトークをします。

【お知らせ２】

元ブント（戦旗派）の活動家だった早見慶子さんが自らの過激派時代の体験を綴った衝撃的な本を出版しました。『Ｉ ＬＯＶＥ過激派』（彩流社・1800円）。面白くて、一気に読みました。ベストセラーになるでしょう。お薦めです。

HOME

今週の主張

バックナンバー

日本人と戦争責任

今週の主張9月24日

(1)これは画期的な本だね



『日本人と戦争責任』（高文研）

変わった本だ。変わった作り方の本だ。こんな方法があったのかと驚いた。又、その方法が成功している。実にいい。

斎藤貴男さん（フリージャーナリスト）と森達也さん（映画監督）の対談本で『日本人と戦争責任』（高文研・1700円）という本だ。

ただの対談ではない。戦争体験者の文献を二人で読み、その上で話し合うのだ。その文献の主要部分も紹介されている。僕らは、60年前の〈歴史〉 を読む。さらに現代の二人の対談を読み、考える。いや、二人の対談に僕らも参加しているのだ。そんな気になる。これは画期的な本だと思った。

戦争体験者の文献といっても、いろんな人の文章を取り上げるのではない。取り上げるのは一人だ。その人の文献を紹介する。それをじっくり読んだ上で、二人が語る。本のサブタイトルもこうなっている。

〈元戦艦武蔵乗組員の「遺書」を読んで考える〉

この乗組員の名前は渡辺清。渡辺氏は、1925年（大正14）年生まれ。16才で海軍に志願。戦艦武蔵に乗り組むが、1944年10月、レイテ沖海戦で「武蔵」は撃沈され、七死に一生を得る。この時19才。戦後は、自己の戦争体験を文章化して伝えるとともに、1970～81年、日本戦没学生記念会（わだつみ会）の事務局長を務めた。81年７月23日、膵臓がんにより死去。享年56才。主な著書に『海の城』『戦艦武蔵の最期』（以上、朝日選書）、『砕かれた神』（岩波現代文庫）、『私の天皇観』（辺境社）。



渡辺清氏

この渡辺氏の著作、生き方、問題提起を受けて、斎藤、森両氏が語る。大変な対談だ。苦労も多かっただろう。だって、普通、対談といったら、好きに話し合って、２，３回やったら一冊の本になる。一回の対談で本にしてるのもある。

とろこが、この本は違う。渡辺氏の本を何冊も読み、勉強し、そして対談する。60年前の〈戦争〉に向き合い、考える。普通なら、こんな時間のかかり、手間のかかり、苦労の多い対談は引き受けない。でも、この二人は「普通」ではない。偉い。戦争と、戦争責任。なぜ、あんな戦争が起きたのか。同じ事が起きたら我々は戦争を阻止できるのか。この重いテーマに二人は必死に取り組む。

「あの戦争はやむをえない戦争だった」という人がいる。保守論壇では多い。「今さら、あれこれ考えても遅い。むしろ、よくやったと誉めてやればいい。それが日本を愛し、伝統を守ることだ」という。でも、「やむをえない」で済ませていいのだろうか。これからも「やむをえない」状態が起こったら、又、戦争をやることになる。それでは歴史から何も学んでないことになる。余りにも愚かではないか。又、平和な世の中が来ることを祈って死んでいった多くの人々を裏切り、愚弄することになるのではないか。

今、月刊誌でも新聞、テレビでも、「元気のいい」意見がもてはやされている。「改憲して軍隊をつくれ。国際貢献の為には血を流せ！」「核武装しろ！」「戦争を辞さずの覚悟で外交をやれ！」「北朝鮮なんか攻めちゃえ！」「中国とは国交断絶しろ！」…と。

こんな興奮状態の中では、「戦争はいけない」と言うことにも覚悟がいる。勇気がいる。「バカヤロー、卑怯者め！」「命が惜しいのか！」という罵声も飛んでくる。僕は今年の８月15日に「東京新聞」で品川正治さん（経済同友会副代表幹事）と対談した。品川さんは戦争に参加した人だ。だからこそ平和は大切だし、二度と戦争をやってはいけないという。この点は僕も賛成だ。その上で、アメリカ観、改憲問題、愛国心について語り合った。とても勉強になったし、考えさせられた。（事前に品川さんの本を二冊読んだ。いい本だ。紹介しておこう。『戦争のほんとうの恐さを知る財界人の直言』『これからの日本の座標軸』だ。共に新日本出版社だ）



品川正治『戦争のほんとうの恐さを知る財界人の直言』（新日本出版

ところが、右翼の人からは批判が多い。「右翼のくせに戦争反対とは何事だ」と言う。国の為に命をかけるのが右翼だろうが！…と言う。変な話だが、「戦争をやれ！」というのは安易に言える。安全圏から言える。しかし、「戦争反対」と言うのは命がけだ。いやな風潮だ。

斎藤、森両氏だってそのことを痛感しているだろう。「戦争反対」と言っただけで、「左翼」「国賊」「非国民」と呼ばれる。しかし、渡辺氏のような戦争体験者の声に謙虚に耳を傾けて考えることは必要だ。まず、当事者の話をじっくりと聞くべきだ。僕らの感想や自己主張はその後でいい。

社）

(2)凄まじい天皇批判だ。でも渡辺氏なら…



渡辺清『砕かれた神』（岩波現代文庫）

渡辺氏の文章は昔、少し読んだ。この機会に、『砕かれた神』『私の天皇観』を読み返した。かなり激しい本だ。激しい天皇批判だ。よく、この時代に出したものだと思う。今なら、かえって出版社も躊躇するのではないか。だって、渡辺氏の天皇観の劇的な変化が生々しく綴られている。ここまで言うか、と思うほど激しい。しかし、天皇批判で終わってはいない。騙された自分にも罪はあると考える。真摯な自己批判があり、自らの戦争責任をも問う。そうした精神遍歴も克明に書いている。自分が戦争に参加し、そのことで米兵を殺したかもしれない。加害者だ。戦争の被害者であり加害者だ。この視点から戦争を考える。渡辺氏は言っている。

〈たしかに僕は戦争について何も知らなかった。知らされていなかった。正義のためだと教えこまれていた戦争が、実は無道な侵略戦争であり、他国へのあこぎな強盗行為であったのだと知ったのは敗戦になってからである。

しかし、だからといって僕もその共犯者であったことにかわりはない。これだけは自分以外のどこにももっていきようのないものである。明らかに自分の罪として自分が背負わなければならないものである〉

そして、「自分の罪」を、もっと具体的に語る。「そんなことは戦争では当然だ」「そこまで自分を責めることはない」と、普通なら言うだろう。だが、渡辺氏も「普通」ではない。トコトン考える。「騙されて戦争に駆りたてられたのだ」といって自己弁護はしない。これは実に潔い。こう書く。

〈そして僕は死なずに生きてきた。しかし、「幸い」という言葉は差し控えたい。生きるべくして生きてきたのではないからである。僕の手はたくさんの「人間の血」で穢（けが）れている。僕は砲手だった。僕は射ったのだ。そして個人的には何の敵意もない米兵を倒したのだ。（今にして思えば僕はそれを同時に自分の心臓にも射ちこんでいたのだ）。また仲間の多くが死んだ。ある者は硝子屑（がらすくず）のように海に散り、ある者は断末魔の苦しみにのたうちながら艦と運命を共にした。僕はそのおびただしい死骸を海底に沈めたまま、あまつさえ、ある場合には見殺しにさえして、自分だけは生きて帰ってきた。僕はこのことを生涯忘れてはなるまいと思う〉

なにもそこまで自分を責め、傷めつけることはないのに。…とも思う。でも、〈地獄〉を見たのだ。それも、「天皇陛下のために」命を捧げようと思い、何一つ疑問を持たずに戦争に参加した。「これからは陛下のために国の守りにつきます。もうこの命は自分のものではありません。陛下にお捧げしたものです」

そう決意して戦争に行った。戦った。陛下のためだと思うから、戦場のどんな苦しみにも耐えてきた。いつ死んでもいいと思った。いや、進んで天皇に命を捧げる機会を待っていた。ところが当の天皇は…。

〈それがどうだ。敗戦の責任をとって自決するどころか、いのちからがら復員してみれば、当の御本人はチャッカリ、敵の司令官と握手している。ねんごろになっている〉

天皇がマッカーサーと会って写真に収まっている新聞を見て渡辺氏は我を忘れる。信じられなかった。体が震えた。「これが、あの天皇だったのか。生命と引きかえてもいいくらいに崇拝していたあの天皇だったのか」と。そして、こんな凄まじい憤怒の言葉になる。

〈僕は、羞恥と屈辱と吐きすてたいような憤りに息がつまりそうだった。それどころかいまからでも飛んでいって宮城（きゅうじょう）を焼き払ってやりたいと思った。あの濠の松に天皇をさかさにぶら下げて、僕らがかつて棍棒でやられたように、滅茶苦茶に殴ってやりたいと思った。いや、それでもおさまらない気持ちだった。できることなら天皇をかつての海戦の場所に引っぱっていって、海底に引きずりおろして、そこに横たわっているはずの戦友の無残な死骸をその目に見せてやりたいと思った。これがあなたの命令ではじめられた戦争の結末です。こうして三百万ものあなたの「赤子（せきし）」が、あなたのためだと思って死んでいったのです。耳もとでそう叫んでやりたい気持ちだった〉

(3)磯部浅一と三島由紀夫を思い出した



2.26事件

書き写していても、震えがくる。凄まじい天皇批判だ。天皇告発の言葉だ。でも渡辺氏なら何でも言える。何を言っても許される。その資格がある。そんな気がする。

こんな凄まじい天皇批判をしたからといって別に右翼が抗議に行くわけではない。出版社にだって行きはしないだろう。国のため、天皇のために死のうとして戦い、九死に一生を得て帰ってきたのだ。もう誰も渡辺氏には文句は言えない。批判できない。

だからこそ、戦争のことを、戦争の愚かしさをもっともっと言ってほしかった。僕も会って話を聞きたかった。天皇批判の言葉を、呪詛の言葉を聞いてみたかった。多分、僕は何も言えないだろう。反論できないだろう。「天皇制支持」の僕は論破されるだろう。考え方も変わるかもしれない。でも、それでもいい。〈話し合う〉というのは、それだけリスクの大きなものだ。ともかく、会ってみたかった。

でも渡辺氏は1981年に亡くなっている。56才だ。若いのに。26年前だ。生きていたら、今年82才か。残念だ。

この激越な天皇批判の言葉を読んで思い出した。2.26事件に参加し、敗れ、刑死した磯部浅一の『獄中日記』を思い出したのだ。日本を憂い、天皇のためにと決起した。決起将校に同情的な人々は多くいた。軍の上層部にもいた。しかし、天皇は即座に断言する。「朕がもっとも信頼せる老臣たちをことごとく倒すは、真綿にて朕が首を絞むるに等しい行為なり」と。又、「これから鎮撫に出かけるから、ただちに乗馬の用意をせよ」と。天皇の怒りは激しかった。又、「日本はロシアのようになりましたね」と言った。

武力で王制を倒したロシア革命と同じだ、と天皇は言ったのだ。天皇にそう注進した人間もいたのだろう。

磯部は天皇のために決起した。反乱を起こした。そこは渡辺氏とは違う。しかし、天皇批判の言葉の凄まじさは似ている。天皇に裏切られた思いは同じだ。

天皇の言葉を人伝てに聞き、磯部は言う。「私は数日間気が狂ひました」。そして叫ぶ。

「今の私は怒髪天をつくの怒にもえています。私は今は、陛下を御叱り申上げるところに迄、精神が高まりました。だから毎日朝から晩まで、陛下を御叱り申して居ります。天皇陛下、何と云ふ御失政でありますか、何と云ふザマです。皇祖皇宗に御あやまりなされませ」（『獄中日記』）

天皇を叱りつけているのだ。又、終戦の和平に反対し、厚木航空隊の反乱を起こした小園司令はこう絶叫する。

「天皇陛下、お聞き下さい。あなたはあやまちを冒されましたぞ。あなたの言葉で戦争をお始めになったのに、何ゆえ降伏なさるのでありますか」

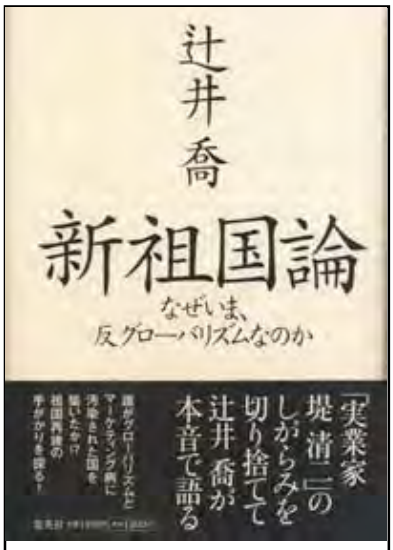
これも、「天皇に裏切られた者」の悲痛な叫びだ。又、当事者でなければ言えない言葉だ。三島由紀夫は、2.26事件の磯部について、書いている。天皇は、「人間の怒り」で磯部らを処刑したと批判した。又、終戦の「人間宣言」も三島は批判した。この時も、天皇は「人間」になってはいけなかったのだと言う。勿論、小説の上ではあるが。

「天翔るものは翼を折られ
不朽の栄光をば白蟻どもは嘲笑（あざわら）う
かかる日に
などてすめろぎは人間（ひと）となりたまいし」
（『英霊の声』）

これほど激しくはないが、戦後、天皇に退位を求める人はかなりいた。石原慎太郎だって言っていた。だからと言って右翼に襲われはしない。なんせ右翼の親分だった児玉誉士夫も天皇退位論を言っていたのだ。今とは違う。今よりも、もっともっと「言論の自由」があったのだ。奇妙なことだ。今の方が「天皇タブー」は強い。そして週刊誌が「これは不敬だ」「非国民だ」と決めつけると、皆、ワーッと攻撃に行く。いやな風潮だ。

そして、「俺こそ愛国者だ」という人間がテレビや新聞で大声で、喚き立てる。さらに、自分の「愛国」度を立証するために、「反日」「非国民」「不敬」探しをする。さらに、マスコミは、こうした「威勢がいい」「分かりやすい」人間を持てはやす。「そうだ、そうだ！」と世論も沸き立つ。「改憲だ！」「改革だ！」「北朝鮮なんか攻めてしまえ！」「核を持て！」…と。どこまでもエスカレートする。

(4)悪意ではなく、「善意」や「正義」が暴走する！



辻井喬『新祖国論』（集英社）

最近読んだ辻井喬の『新祖国論』（集英社）もいい本だった。冷静にこの国について論じている。「世論」についてこう書いている。

〈「世論調査をしたら支持率が高い」「世論が彼の政治に共感を示している」という理由で、冷静で客観的な分析の筆が折られてしまうとしたら、かつての軍属、思想警察にかわって「世論」という怪物が言論を支配しているということにならないか。かつての反民主的権力と異なって、この「世論」には顔がない〉

いくら何でも、「世論」は軍属、思想警察と同等に論じられないと思うかもしれない。しかし、「我々」がつくり、「民主主義」のもとだからと思い込んでる分、より以上に恐ろしい「怪物」だろう。それに、顔がない。

「だって皆が言ってるんだし」「これはもう世論だよ」と言われると、何となく納得してしまう。これは恐ろしい。「自分」がなくなって、顔のない「世論」に迎合しようとする。

森達也さんはかつて、僕との対談の中で言っていた。「主語が複数になると述語は暴走する」。うまい事を言う。「私」で語らないで、「我々は」と語るようになると、暴走するのだ。左右の思想運動も。そして戦争に突入する時の国民も。

『日本人と戦争責任』（高文研）は、渡辺清氏の本を読み、その問題提起に向き合いながら、斎藤、森の両氏が真摯に語り合う。その謙虚な姿勢がいい。

今、「世論」の話をしたが、これは、一般の人々が「わかりやすさ」を求めるということだ。マスコミだって、傲慢にもこう思う。「情報をナマのまま発表しては国民も頭が混乱するだろう。だから我々が整理し、分かりやすくして伝えるのだ」と。さらに、誰が悪くて、誰が正しいか、まで「解説」してくれる。コメンテーターも、ズバリと斬り、瞬時に正邪のレッテル貼りする人間が優遇される。これではダメだろう。森さんは言う。

〈発達したメディアは当然ながら競争原理に埋没し、視聴者や部数を伸ばすために「わかりやすさ」を標榜します。つまり世界の簡略化。特にテレビは、リモコンの普及なども相乗してチャンネルを変えさせない工夫をしなければならないから、刺激的でわかりやすい情報に取材内容を無自覚に加工してしまう〉

それは悪気はないのかもしれない。メディアのトップや、あるいは「一部の勢力」が共同謀議して、「日本のメディアをこうしよう」ということはないだろう。「戦前に戻そう」「戦争できる国にしよう」と画策しているわけではない。そんな「悪意」はない。メディアだけでない。政治家も、「善意」から出発してるのだろう。しかし、それが恐いと斎藤氏は言う。



『言論統制列島』（講談社）

〈悪意は後ろめたさがあるから簡単には暴走しません。でも善意や正義は暴走する。あっさりと大量の人を殺すことができる。たぶんね、ブッシュ大統領だって信仰心の篤い善意の人なんだろうなと僕は思う。知性は高くないけれどお人よし。南部にはよくいるタイプだよね。イラクの人たちを自分たちは「救ってあげてるんだ」と本気で思っている。大義を捏造しながら、結果的には彼らを救うためなんだと自分に言い聞かせているのかもしれない〉

確かにそうだろう。だからこそ、「どっちが正しい」と即断したり、レッテルを貼りつけて終わりにしたり…ではダメなんだ。それでは〈歴史〉から何も学んでない。この本は、その点、素晴らしい。戦争のいわば〈古典〉ともいわれる文献を取り上げて必死に学び、考えようとする。他にも〈古典〉になり、〈テキスト〉になる本はあるだろう。先人に謙虚に学び、考える必要がある。今の時点だけで、あれこれと「自己主張」を繰り返しても空しい。

今、日本では「敵は北朝鮮だ」「中国こそ敵だ。国交断絶せよ」「韓国も敵だ」「だから軍備の強化を」「核を持て」…という声が多い。「いつ、アルカイダが来るかもしれん」「海外テロの危険がある。だから公安は必要だ」…と言う。しかし、これは、外に目を向けさせようとしてるのではないのか。

だって、アメリカと闘っていた時だって、実は「敵は日本人だった」と渡辺清氏は衝撃的なことを言う。

〈変な言い方ですが、ほんとのおそろしい敵は日本人でしたね。それはぼくらの身近にいる兵長であり、下士官であり、上官だった。いわば味方の中の敵、その敵のほうがほんとうにこわかったですね。とにかく軍隊におけるほんとのおそろしい敵は日本兵だった。アメリカは抽象的な敵だった。目に見えないものですから…〉



『言論統制列島』より

戦争中ですら、そうなんだ。ましてや、と思ってしまう。渡辺清氏の怒りはさらに続く。戦後は、「やってはならない侵略戦争だった」とすぐに変わり、「アメリカとはお手々つないで仲よく」になった。彼は言う。

〈「きのうの敵はきょうの友」なんていう浪花節は聞きたくない。そんなことを言うくらいならはじめから、戦争をやらなければよかったんですよね〉

まさにその通りだ。渡辺清氏の引用が多くなって、斎藤、森両氏の紹介は少なくなったが、ともかく、いい本だった。先人の話をじっくりと聞き、その上で考える。この姿勢はいい。これは長く残る本になるだろう。一見、地味な本だが、革命的な本だと思う。こんな素晴らしい企画があるのなら、私も参加したかった。２年前は３人で『言論統制列島』（講談社）を出したんだね、と思い出した。

【だいありー】



『実話マッドマックス』（９月号）

(1)９月17日（月）図書館。映画「大統領暗殺」は10月６日（土）から上映が決まったという。試写を見たが、凄まじい。こんな映画を作っていいのか。日本では絶対に作れないだろう。だって、ブッシュ大統領が暗殺される映画だ。実際、世界各国で上映拒否されている。映画会社から案内が来た。公式ＨＰにいろんな人がコメントしている。

　頼まれて僕もコメントを書いた。「大統領暗殺」の公式ＨＰに載っている。ケヴィン・コスナー、ヒラリー・クリントンから始まり、田原総一朗、大仁田厚、鳥越俊太郎、外山恒一、瀬戸弘幸さんなど、錚々たる人々だ。そんな人と比べると、私のコメントは、どうも見劣りがする。恥ずかしい。

(2)９月18日（火）１日中、原稿を書いていた。夜、柔道に行く。鈴木義昭さんが「実話マッドマックス」（９月号）を送ってくれた。９、10月号に竹中労さんのことを書いている。10月号に僕がコメントしている。ついでに９月号も送ってくれたのだ。この号の巻頭には何と、あの渡辺文樹監督が出ていた。天皇暗殺の映画「腹腹時計」を上映して、地元の右翼に抗議されたのだ。“「不敬映画」に過激に攻撃する右翼”“思想を巡る緊迫の睨み合い”…と。カラー３ページでの特集だ。

　２年前、この映画を見に行った時も黒い街宣車が会場を取り巻いていた。先々月、監督に会ったら、「鈴木さんと知り合いです」と右翼に言ったんだという。「馬鹿野郎、あんな奴は敵だ！」と怒鳴られたらしい。恐い。でも渡辺監督も一歩も引かない。凄い人だ。

(3)９月19日（水）午後１時からＪＲ東労組に行く。元委員長の松崎明さんと対談。次の「月刊タイムス」に載る。戦争の話、労働組合の話などをする。松崎さんは2.26事件や北一輝にも最近、興味を持って勉強している。じゃ、北一輝や大川周明などを読んで、それを叩き台にしながら今度は話をしましょうよと提案した。斎藤貴男さんと森達也さんの『日本人と戦争責任』（高文研）のような本を作ってみたい。「いいですね。ぜひやりましょう」と松崎さんも言っていた。

　この日の産経新聞に奇妙な記事が載っていた。秋田県に天皇・皇后両陛下がご訪問され、その知事名の案内状にミスがあったのに送付してしまった。上司の決裁を受けずにミス案内状を出した職員は処分（厳重注意）された。どんなミスかというと、ワープロの入力ミスだ。それも何と、「悪天候などの理由により…」が、「悪天皇」になってたのだ。ウーン、これはワープロが「不敬」だ。こいつを廃棄処分にすればいい。昔は、活字を拾っていたから、「天皇陛下」が「天皇階下」になる恐れがある。それを避けるために、新聞社では、「天皇陛下」という四つの漢字を糸でしばっておいたそうな。でもワープロではそれは出来ん。渡辺清さんのように苛酷な戦争体験を持つワープロだったのかもしれない。それで怨念が爆発したのか。（その頃はワープロは発明されてないか）。

(4)９月20日（木）11時、打ち合わせ。午後３時から河合塾コスモの授業。「現代文要約」と「基礎教養」。

(5)９月21日（金）１時から日比谷公会堂。「あの戦争体験を語り継ぐ集い」。戦場体験放映保存の会が主催。全国から元兵士が集まって、体験を語ってくれた。何と1800人が集まった。盛況だった。戦争の悲惨さを痛感した。又、どうしたら再び戦争を起こさないようにできるか、皆で考えるべきだろう。上田哲さん病院を抜け出して参加し、元気に挨拶していた。

(6)９月22日（土）午前中、原稿を書いていた。午後から山種美術館。川合玉堂展を見る。

(7)９月23日（日）午後５時。一水会物故同志・会友慰霊祭。事務所で。運動の中で若くして志半ばにして亡くなった人がいる。悔しかったろう。残念だ。その志を継いで頑張ろうと皆で決意した。

【お知らせ】

(1)早見慶子さんの『I LOVE過激派』（彩流社）は売れます。他にはこんな本はなかったからでしょう。右も左も、どんどん出したらいい。自分の闘いに誇りを持って語っている。バブルの時代なのに、「セレブなお嬢様にならず、なぜかゲリラ活動。アジト生活、ガサ、逮捕と最底辺の生活…」と本の帯には書かれている。ぜひ、お読み下さい。類書がないので、この分野では独走中です。

(2)９月29日（土）「９条フエスタ2007」。大井町の「きゅりあん」全ホール、全教室を使って、いろんな企画があります。「これからの平和運 動」と題するシンポジウムに私は出ます。２時半から４時。重信メイ、今野東、ピースボートの人と一緒に出ます。「国家に殺された画家・平沢貞通の絵画展」もあります。その他、「戦争のない世界は可能か。イロ コイ連邦紹介」などなど、午前10時半から６時まで。その他映画上映、コンサートなど盛り沢山です。

(3)10月６日（土）18時30分～21時。日本橋公会堂（最寄り駅は水天宮前）。「4.27法大弾圧を許さない10.6集会」。私も行きます。（はじめ飯田橋の予定でしたが変わりました）。

(4)10月９日（火）７時、一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。蓮池透さんが講師で来られます。貴重なお話が聞けると思います。

(5)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。

(6)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。

(7)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、 「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(8)若松孝二監督の大作「実録・連合赤軍」が来年３月中旬よりテアトル新宿で上映されます。 それに先だって１月に過去の若松作品の上映とシンポジウムがテアトル新宿で連続して行われます。
　１月５日（土）の深夜は、12:30より、若松監督、森達也氏、雨宮処凛さん、そして私が出てトークをします。

HOME

今週の主張

バックナンバー

血盟の革命戦士たち

今週の主張10月１日

(1)この公判速記録はまさに思想大系だ。哲学だ



『血盟団事件公判速記録』

必要があって、『血盟団事件公判速記録』を読んだ。昔、読んだが、今、「月刊タイムス」で「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」を連載している。今、第33回だ。その中で、血盟団のことを書いている。そこでちょっと気になることがあって調べに行ったのだ。今年の７月26日（木）、山形の弟の家に行って、調べた。元はみやま山荘にあった本だ。入り切れなくなって、多くの本を捨てたり、ブックオフに売った。どうしても大事な本は弟が引き取ってくれた。

久しぶりに『血盟団事件公判速記録』を見た。膨大な本だ。『公判速記録』（３巻）と『上申書・獄中手記』の計４巻だ。箱に入ってる大判の本だ。発行者は小沼廣晃（ひろあき）氏。昭和７年、井上準之助蔵相を殺した小沼正氏だ。（その後、改名した）。この人には私は30年前、会って話を聞いていた。「やまと新聞」に連載し、その後、『証言・昭和維新運動』（島津書房）に収録された。

この血盟団の４冊だが、厚さが半端じゃない。どの位あるか、それをメモしてきたので紹介する。又、本が発行された年。さらに、私がそれを読破した年月日も書かれていたので記す。



全部、線を引きながら読んでいた

『血盟団事件公判速記録』（上）718ページ　昭和42年９月030日発行　昭和49年２月23日読破

『血盟団事件公判速記録』（中）869ページ　昭和43年３月４日発行　昭和49年３月８日読破

『血盟団事件公判速記録』（下）1181ページ　昭和43年10月30日発行　昭和49年４月８日読破

『血盟団事件上申書・獄中手記』783ページ　昭和46年７月５日発行　昭和49年３月20日読破

大判二段組みで、合計3551ページだ。それを全て読んだ。それも何と、２ヶ月ちょっとで読破しているのだ。昭和49年というと1974年か。三島事件から４年目。一水会をつくって２年目だ。まだ産経新聞の社員だった。よく読んだと思う。今なら、とても読めない。読書の気力がない。根性がない。欲がない。いかんな。

さらに、本には線を引き、欄外に書き込みまでしている。メモ用紙を挟んでいる本もある。真面目に読んでたんだ。どんな所に感動したのか。 線を引いてあるところをパラパラと見てみた。フーン、こんな所に感動し、「俺も続こう！」と思ったのか。33年前だ。31才の若き鈴木君は、何に感動したのか。少し紹介しよう。



井上日召

『血盟団事件上申書・獄中手記』の中から紹介する。まず、三井合名理事長・団琢磨を暗殺した菱沼五郎の公判で山本玄峰師が参考人として出廷し、菱沼氏の弁護をした。「一人一殺」の「血盟団事件」は井上日召を盟主とし、政財界のトップ20人を暗殺しようとした。そのために20人の若者をテロに向かわせる。しかし、成功したのは菱沼氏と小沼正氏の二人だ。小沼氏は前蔵相の井上準之助を射殺した。菱沼氏は団琢磨を殺した。そして、この段階で、残りの全員が捕まる。山本玄峰氏は井上日召の宗教の師でもある。静岡から上京し、出廷して、こう述べた。

「悪意を以って殺すなら蟻一匹殺しても地獄に苦しみ、大慈悲の心を以って殺すなら百人殺すも仏罰は蒙らない」

凄い言葉だ。今ならこんな弁護をする人はいない。さらに「玄峰師は、各菩薩の剣を取って自ら衛る仏教上よりの真理を色々と説き熱烈に弁論して下さった」と菱沼氏は書く。
そういえば、井上日召は「一人一殺」と言い、さらに「一殺多生」と言った。一人を殺すことによって多くの人が助かり、生きるのだ。こうなると、〈暗殺〉ではない。〈人助け〉だ。そこまでの宗教的信念を持ってやったのだ。
ちなみに、この菱沼氏はこの後、刑務所に入り、出所してからは茨城県の市会議員、県会議員になっている。最後は確か、県会議長までやっている。天皇陛下が国体にこられた時は案内もしている。国体の精華だ。運命とは不思議なものだ。

やはり血盟団の一人、池袋正釟郎の発言だ。彼はこう言っている。

〈第一線に立つ者は、独身でなければいかぬ。妻子ある者は其情に惹（ひ）かれて革命的になり得ない。之は人情である。
革命は戦争とちがう。戦争は戦死しても遺族の生活を国家が補助してくれる。生還すれば勲章、昇進、大もてである。
併し革命は失敗すれば逆賊となり、世間の冷視、支配階級の處遇を受けなければならぬ。而して革命の第一線は常に必敗の戦である。飽迄独身でなければ駄目だと井上さんは話された。
国家を革命せんとするものは先づ自分自身を革命せよ。自己の生命を革（あらた）めずして国家の革命等はおこがましい。而して我々は日本の為にやるのではなくして、国家の革命を生くるのである〉

(2)生き方の全てが「革命道」だ



池袋正釟郎

いい言葉だ。まず自分自身を革命せよ。「自己の生命を革（あらた）めずして国家の革命等はおこがましい」。まさにその通りだ。これを読んで、テロリストを志願し、一生結婚しなかった若者も多くいたのだろう。この池袋正釟郎は『血盟団事件公判速記録』（下）で、さらにこんなことも言っている。

〈革命道について申上げます。現在、此処で喋って居ること、又、房に帰って坐って居ること、それは矢張り革命道を行って居るのであります〉

そうか。生き方の全てが革命道なんだ。ご飯を食べるのも、電車に乗るのも、議論するのも、テレビを見るのも、全てが〈革命〉だ。

そういえば、昔、右翼の先生に言われたことがある。右翼は常に国士として生きなくてはならん。「国士としてのメシの食い方がある」「国士としての歩き方がある」…と。うーん、常に〈国士〉を意識して生きるというのも辛い。まあ、一日が終わって、寝る時に、「うーん、今日の国士度は40点だったな」とか、「80点はいった」とか自己採点してればいいだろう。でも、今の私は堕落して、〈国士度〉はゼロだね。左翼とばっかり付き合ってるから、〈国士度〉はマイナスだろう。〈国賊度〉の方が高い。

さて、『血盟団事件公判速記録』（中）に、やはり池袋氏の陳述がある。昭和９年５月29日（火）、「第27回公判速記録」だ。血盟団盟主の井上日召について語っている。

「常住座臥、井上さんは其のものが革命のやうな気がしました。革命があり、又、其の革命が物を言ひ、革命が酒を飲むやうな感じがしました」

「革命が酒を飲む」のか。いいなー。又、井上日召についてこうも語っている。

「初め何も知らない時は、呑気な父さんと云ふやうな感じがしました。其の後、藤井大尉から色々井上さんの話を聞かされました。日本的な革命運動をやって居る人であり、革命運動の先進であると云ふやうなことを聞かされました。それでそうかなあと思った」

確かに、「呑気な父さん」に似ている。テロリストの〈親分〉というのは、皆、一見ボーッとしていて、「いい人」に見える。生死を超え、悟り切っているからだろう。池袋氏は、さらにこう言う。

「井上さんは、吾々は国家の為に尽くすのではなくして、国家を生きるんだ。吾々を生きるんだ。吾々を生きる道である。是より外に自分は行く道はないと云ふものだけが自分と一緒に来て居るのです。言ひ返せば、国家の為にやるのではない。国家を生きるのだ。自分が革命をやるのでなく、革命を生きるのだ。そうして是より外に行く途はないのだ、と申しました」



深編笠をかぶり法廷に並ぶ血盟団事件の被告たち

他の人の陳述をみても、皆、「革命」と言っている。右翼の方が「革命」と言ってるのだ。小沼正氏や菱沼五郎氏も「革命」と言い、自らを「革命家」と言っている。これに対し、「日本は革命はなかった。革新とか維新というべきではないか」という批判もあった。右翼内部からの批判だろう。それに対して池袋氏は言う。

〈勿論、革命と云ふ語は支那から来たのであるが、元は支那の語でも日本へ来れば日本のもので、その内容は日本的なものになる。故に必ずしも支那の易（えき）姓革命を意味せぬ。況（いわ）んや西洋のrevolutionをや。元来支那の語たるが故に日本の事、特に国体の根本に関する事に、使用すべからずと云ふならば、天皇陛下万歳と云ふ言葉も元来支那の語なれば斯く呼ぶは不敬に当るかもしれぬ〉



四元義隆

うーん、なかなか論理的だ。説得力がある。実は、この池袋氏は東大生なのだ。四元義隆氏も東大生だ。東大生がテロリストになったのだ。血盟団事件において、池袋氏のターゲットは元老西園寺公望だった。四元氏のターゲットは内大臣牧野伸顕だった。

血盟団の中では、同じ東大ということもあって池袋氏と四元氏は仲がいい。実は、もう一人、親友がいた。それは重信末夫氏だ。そう、日本赤軍の重信房子さんのお父さんだ。

末夫氏は当時、都城で教員をしていた。ところが、「国家の一大事だから上京しろ」と池袋氏から電報をもらい、上京する。そして血盟団に入る。しかし、決行直前に、井上日召から、「お前は心が優し過ぎるからテロリストには向かない。テロの後の建設を担当しろ」と言われる。それで郷里に帰ったのだ。

この重信末夫氏には、私は33年前に会って、「やまと新聞」に記事を書いた。さらに、今年の７月、重信房子さんに面会し、お父さんの話をした。実にドラマチックだ。「その時歴史が動いた」のようだ。

(3)我々は国家の反逆児だ。乱臣賊子だ！



古内榮司

さて、『血盟団事件公判速記録』（下巻）から、今度は古内榮司氏だ。この人は三井銀行常務池田成彬を狙ったのだ。しかし、決行前に逮捕された。彼の公判中の陳述だ。

「吾人の行く所は国家の反逆児として、乱臣賊子として葬り去られる、其の途を行く。さうして私の心境としては、私の境涯としては、それが即ち成仏の道だ、そう思って居ります」

悟り切った心境だ。宗教的だ。哲学的でもある。それに、今気づいたが、「自分は愛国者だ」とか「無知な国民の目を覚まさせるためにやった」「国民を啓蒙するんだ」などという人間はいない。実に謙虚だ。「天誅を下したんだ」と絶叫する人もいない。冷静で、

淡々としている。そして、「愛国者」として名が残ることを求めてない。それが、国家の「戦死」とは違う。名誉も称賛もない。人を殺すのだから罪人だ。乱臣賊子だ。それでいい。むしろ、自虐的ですらある。これは何やら清々しい。

また、彼らの潔い、謙虚な発言に感心したからだろうか、この法廷では裁判官も被告らに十分に喋らせている。じっくりと話を聞いている。こうなると、時には被告は「講師」であり、「先生」である。裁判官、検事は「聴衆」のようだ。

実際、この古内の陳述のあと、裁判長は「よし聞こう」と言って、古内にもっと話を聞きたい、喋りなさいと促している。今の裁判ではこんなことは絶対にない。血盟団の公判では、立場上、仕方なく裁いているが、「被告」たちは一点の私情もない。国のために決起した男たちだ。それを裁判官も検事も認めている。その場に居合せたことを喜び、真剣に聞いている。傍聴人だって、被告たちの陳述を聞き、感動し、涙を流している。

でも、こうした光景は血盟団事件と次の5.15事件で終わりだ。この二つでは「殺人」者も誰一人、死刑にならず、かなり早く刑務所を出ている。しかし、それ以後「これ以上はやらせないぞ！」という司法の変化がある。2.26事件では、「天皇の怒りに触れた」ということもあるが、裁判は非公開。暗黒裁判で、決行者は軒並み死刑にされている。さらに、事件に直接関係がなかった北一輝、西田税も死刑になっている。

さて、血盟団の公判だ。裁判長に「よし聞こう」と促されて、古内榮司氏は再び語り始める。

「乱視賊子として葬り去られ、首を括られ、乱臣賊子としてこの国家の反逆児として立つ者がなければ此の現在の本当の国体を顕揚することは出来ぬ」

素晴らしいですね。立派です。「愛国者」として皆に誉められ、認められ、立身出世し…。そんなことを考える奴は、この国を救えない。たとえ、罪人となり、「国賊」と言われ、「非国民」と言われても、決行するのだ。あとは何とでも言ってくれ。死後の名も名誉も求めない。これこそが本当のテロリストだろう。

今、読み返しても感動する。いかんな。武力闘争、非合法路線は全て、清算し、捨てたはずなのに。こうして血盟団の人々の陳述を読むと、納得し涙ぐんでしまう自分がいる。「31才の鈴木邦男」が「64才の鈴木邦男」を叱っている。「これでいいのか！」「あれから33年、一体お前は何をやってきたのか！」…と。必死に抗弁するが、論破される。グングンと「31才の鈴木君」に押し切られ、取り込まれる。怖い。


重信房子はなぜアラブへ
元右翼の父が語る女闘士の素顔
ロマンを求めて
北一輝などを高く評価
連合赤軍 唾棄す

重信末夫さん（「やまと新聞」74年3月15日）

(4)邦家の為、一殺万生の剣を揮い…


小沼正

『血盟団事件公判速記録』（下巻）には、伊藤清弁護士のこんな弁論が載っている。これも凄い。

「邦家の為、一殺万生の剣を揮った被告人等に対して極刑を課すべしと云ふは恐らくは
　罪あらば我をとがめよ　天津神
　民は我が身の生みし子なれば
と詠じ給へる明治天皇と御同様に仁慈にまします陛下の大御心に添ひ奉る所以ではあるまいと拝察する次第である」

あっ、この歌は本当に明治天皇の歌なんだと思った。明治時代の大逆事件に際し、明治天皇はこの歌を詠まれた。自分を殺そうとした者たちも咎めず、これは私のせいだ。私を咎めよ、と言われた。

この歌のことは「生長の家」の高校生錬成の時に初めて聞いた。感動して涙が出た。と同時に、「だったら全員、助けてやれよ」とも思った。だって、大逆事件なんて、どこまで本当の計画だったか分からない。計画した一部の人間はいたとしても、冤罪の人間を大量に逮捕し、殺している。明治天皇の御心を裏切るものではないか、と思った。

「明治天皇はこんな歌はうたわれてない」という人がいた。明治天皇の偉業を讃えるために誰かが作ったのだという。真偽は分からない。それで、いろんな人に聞いた。分からない。

でも、ある日、高橋和巳の小説を読んでいたら、この歌が引用されていた。じゃ、本当かもしれないと思った。さらに、この弁護士の言葉だ。「天皇陛下の法廷」でまさか偽の歌を披露するはずはない。裁判官も聞いている。宮内省の関係者も速記録は見ているはずだ。それで、ようやく私の長年の疑問も解けた。

それにしても、この弁護士も鋭い。大逆事件の時は天皇の御心が分からなくて、処刑してしまった。しかし、今度は間違うなよ、と釘を刺しているようだ。

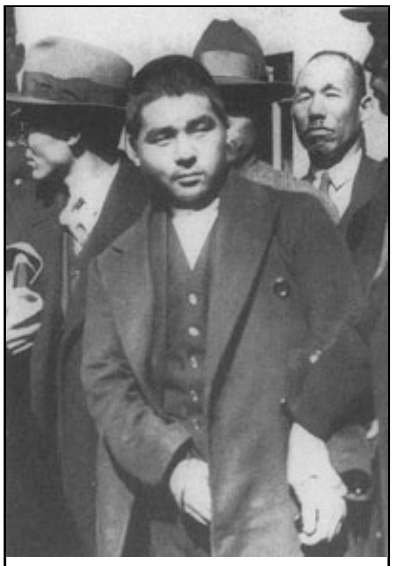
しかし、昭和天皇はどう思われたのだろう。血盟団事件、5.15事件では何もおっしゃらない。歌も詠まれない。しかし、御不満だったのだろう。そして、2.26事件ではそれが一挙に出た。自分の信任する重臣たちを殺すのは、真綿にて朕が首を絞むるのと同じだ、と激怒した。

こう見てくると、血盟団事件、5.15事件は「幸せな決起」だ。国民の皆に同情され、支持された。何十万の人々が助命嘆願書を出した。指を切って嘆願した男もいた。黒髪を切って嘆願した乙女もいた。

しかし、2.26事件は、「不幸な決起」だ。「悲劇の決起」だ。天皇のためにと思って立ち上がり、その天皇のために鎮圧された。だからこそ、その悲劇性に感銘し、三島由紀夫は幾多の作品を書いた。映画も随分と作られた。

ところで、伊藤弁護士は、「邦家の為、一殺万生の剣を…」と言っている。「一人一殺」ではなく、さらに「一殺多生」「一殺万生」になるのだ。昔は僕も信じていた。と同時に、必死に本も読んでいた。彼らの生き方を学び、倣って、自分も決起しようと思っていたからだ。だから２ヶ月ちょっとで3500ページも読破したのだ。「一人一殺」を目指しながら、「一日一冊」読書もしていた。いや、一冊以上だな。「一冊多生」「一冊万生」だ。

もう一点、「邦家」とはこの国のことだ。邦とは国のことであり、日本だ。だから邦のつく人は皆、愛国者だといわれている。日本国も名前を変えて、「大邦国」にしたらいい。国旗は「邦の丸」、国歌は「邦が代」だ。そして、邦のつく人は全員、文化勲章をあげて讃えたらいい。私達はこの「邦の道」を生きるのだ。



菱沼五郎

【だいありー】

(1)９月24日（月）朝早く起きて、マクドナルドで原稿を書く。ハンバーガーは嫌いだが、静かでいい。それから、図書館に行く。友達がいないから、本を読んでる時が一番幸せだ。本の著者たちと会話している。死んだ人達と会話してるのだ。時間を超え、空間を超えて、会話している。

(2)９月25日（火）昼、高田馬場で打ち合わせ。打ち合わせばっかりやってもダメだな。どんどん仕事をしなくっちゃ。でも無能だから、書けないよ。それに遅い。迷う。

(3)９月26日（水）ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の後期授業が始まる。後期は水曜の４時限目になった。「時事問題」。今日は「公安」と「盗聴」「スパイ」の話をした。あまり役に立つ話じゃないなと後悔した。

夜、高田馬場でお酒を飲みました。友達は一人もいないけど、そんな私をあわれに思って誘ってくれたのでせう。

(4)９月27日（木）11時、取材。３時から河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養ゼミ」。ゼミでは家永三郎の『革命思想の先駆者----植木枝盛の人と思想----』（岩波新書）を取り上げて、話をした。次の月刊「創」にも書いたけど、植木は明治時代に、憲法草案をつくり、「革命権」「抵抗権」を認めろ、と言っている。凄いですね。今の左翼なんてメじゃないよ。私も革命をやりたい。

(5)９月28日（金）革命家らしく勉強し、革命家らしく体を鍛えようと思い、柔道に行った。講道館柔道をつくった嘉納治五郎先生は愛国者で、青年の教育に力を尽くされた。講道館では月刊『柔道』という本を出しているが、昔は、このタイトルが『国士』だったという。いいですね。それに戻したらいいのに。

(6)９月29日（土）大井町。「９条フェスタ2007」に参加する。２時半から、「どうする２本の明日」と題するシンポジウムに出た。重信メイさん、今野東さんと。常石敬一さんが始まりに挨拶してくれた。

重信メイさんは重信房子さんの娘さんだ。メイは「生命」のメイ、「革命」のメイだ。「この前、お母さんに面会してきましたよ」と言った。おじいさん（重信末夫さん）は血盟団だった

し、公判記録を読み直してきたことも話した。大勢の人が聞きに来てくれた。立見だった。他にも多くのイベントがあった。天木直人さん、伊藤成彦さん、新谷のり子さん、早苗NENEさん、近藤日佐子さんに会った。又、「袴田巌さんの再審を求める会」の石井信二朗さんに会ったので裁判の話を聞いた。

【お知らせ】

(1)10月６日（土）18時30分～21時。日本橋公会堂（最寄り駅は水天宮前）。「4.27法大弾圧を許さない10.6集会」。私も行きます。（はじめ飯田橋の予定でしたが変わりました）。

(2)10月９日（火）７時、一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。蓮池透さんが講師で来られます。貴重なお話が聞けると思います。

(3)10月27日（土）一水会・岐阜レコン読者の集い。

(4)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。

((5)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後2時より高田馬場のホテルサンルートで。第1部は追悼祭。第2部は記念講演。元楯の会五期生・山口良男氏が講演し、「わが青春の楯の会----三島由紀夫・思想の根源」です。

(6)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、 「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(7)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

【お知らせ・】

(1)中村うさぎさんの対談集『うさぎが鬼に会いにいく』（アスキー・1362円）が発売されました。佐川一政、植垣康博、三浦和義、岡留安則ら11人の〈鬼〉 との討論です。私も入ってます。

(2)『週刊読書人』（10月５日号）に書きました。辻井喬さんの『新祖国論』（集英社）の書評です。とてもいい本で香りの高い祖国論です。

(3)山本直樹さんの漫画『レッド』（講談社・952円）が発売になりました。全共闘、赤軍派、連合赤軍…と、革命を目指す若者達の青春群像です。熱い漫画です。いいですね。

HOME

今週の主張

バックナンバー

〈過激派〉という素敵な人生

今週の主張10月８日

(1)何が彼女をそうさせたか



早見慶子『I LOVE 過激派』（彩流社）

これは何だ！こんな本を出していいのか！驚きましたね。だって、タイトルが、『ＩLOVE 過激派』だ。世の人々は皆、一様に「安全と秩序」を求めているのに…。「過激派から我々の生活を守ろう」と思ってるのに…。「過激派を見つけたらすぐ110番を！」とポスターが街中に貼られている。

「だからこそ、そんな風潮に反撥してこの本を書いたんです」と著者の早見慶子さんはきっぱりと言う。偉い。けなげだ。居直っている。

よくもこんな危ないタイトルの本を出したものだ。実は、他の大手の出版社にも原稿を持ち込んだ。「面白い。出しましょう」と言ってくれた。「しかし、政治的な部分はとって、恋愛の物語だけにしましょう」と言う。「それじゃ意味がない。政治活動を含めた過激な体験を書きたいのだ」と断わった。元過激派の中川文人氏は、『女テロリスト、愛欲の８年間』で出そう、と持ちかけたが、それも断わった。悪魔の誘惑には乗らない。でも、勿体ない。それも読んでみたかった。「次にやってみてもいいです。これが売れたら」と早見さん。売れるだろうよ。類書がないんだし、ぶっち切りだよ。

で、彩流社で出すことに決まった。よかったね。今の時代、彩流社があってよかった。ここは植垣康博、永田洋子、坂口弘、大槻節子といった連合赤軍の人々の本を出している。塩見孝也（元赤軍派議長）、荒岱介（元ブント代表）の本も出している。さらに新右翼の木村三浩、鈴木の本も出している。



早見慶子さん

それにしても、他の出版社はだらしがない。「お上を刺激したくない」「過激派の本なんか怖くて出せない」とビビっているんだ。しかし、毒にも薬にもならない本ばかり出して、それで出版社なのかね。世の中の流れに抗し、「いや、待てよ。こんな考えもあるぞ」「異端だけど、これは面白いぞ」という本を出してこそ、出版社の意味がある。そう思うけど、違うかね。

前置きが長くなった。始めよう。この本は面白くて、一気に読んだ。ぜひ本人に会って話を聞いてみようと思った。このＨＰ始まっ

て以来だね、私がインタビューして書くのは。

----面白かったですね。過激派の過激な日常生活が分かって。張り込み、尾行、ガサに対し、こんなふうに対応してたのかと。メモは全て水溶紙に書き、ガサの時はトイレに流すと。でも、どこで売ってんの。その水溶紙って？

「文房具さんでは売ってません。紙屋さんに特別に注文して作ってもらうんです」



このデモ隊の中に早見さんもいた(1)

----トイレットペーパーじゃ、柔らかすぎて書けない。固いけどすぐ溶ける紙を作ってもらうんだ。しかし、変に思われるんじゃないの。頼んだ時点で？警察に通報されるとか。

「だからシンパの紙屋さんに頼むんです。でないと危ない」

----フーン、でも今じゃないでしょうね。「反体制の紙屋さん」なんて。電話帳にも載ってないし。

女性活動家は皆、ジーパンだ。スカートもはかない。ミニスカートなど論外だ。さらに、「必ず、木綿のものを着るように」という上からの指令があったという。

----なぜですか？

「刺された時、すぐ刃が通らないようにです。本当は皮が一番いいんだけど、値段が高いから」

----誰が刺すんですか？

「右翼ですよ！」

----…（唖然）。（そういえば、今日も綿だ。ヤダナー）

(2)女だから出来る、「尾行・ガサ対抗策」



（左から）見沢知廉氏、早見慶子さん

紹介が遅れたけど、彼女は1980年～90年代、20代の最も輝いていた時に、過激派の雄「戦旗派」にいた。皇居にロケット弾を撃ち込んだり、成田闘争で暴れまくっていた党派だ。皇居攻撃では、全国の右翼が怒り、連日、戦旗社に押しかけた。実はその時、私らも行った。街宣車で体当りした右翼団体もあった。又、一人で抗議に行き、いきなり刃物で刺した者もいた。だから対抗策として、「木綿の服を着ろ！」となったのだ。殺伐とした日々だ。毎日が戦争だった。それにしても、よく、そんな危ない運動に飛び込んだものだ。1960年代後半の全共闘運動なら分かる。皆、流行（ハヤリ）でやった。当時は、彼らが〈正義〉だったし、カッコよかった。熱気があった。

でも、1972年に連合赤軍事件が起こった。それ以降は、新左翼運動は「全て終わった」。いや、そう思われていた。でも、頑張っていた人々はいた。「新左翼は過激派だ」「悪党だ」「人殺しだ」…という風潮の中で、「これでいいのか」と思い、過激派の運動にあえて飛び込んだの

だ。偉い。
　この本の帯にはこう書かれている。

「ちょっと覗いてみてほしい。私の繰り広げた過激派ワールド」

「1980年～90年代、バブルの時代。セレブなお嬢様にならず、なぜかゲリラ活動。アジト生活、ゲリラ活動、ガサ、逮捕と最底辺の生活…」

　８年間の活動家人生のうち、ほとんどをアジトで暮らす。同志と一緒だ。苦しいこと、楽しいことも一緒だ。でも、エッ？と思うこともある。

----ソフトクリームを食べて叱られたんだって？

「そう。ソフトクリームは米帝国主義の食べ物だからダメだって」

----日本人は氷水かラムネだね。

「それと、メイド・イン・コーリアのものは買うなって言われた。心の中では反撥した。アジアを収奪して作ってるんだからダメだって…」

----ふーん。でも、コーリアの人の為にも買ってやったらいいんじゃないの。僕も昔、コーラを飲んで「反米右翼なのにけしからん！」と叱られたことあるよ。子供とディズニーランドに行った時も「自己批判」させられたし。「査問」もされたよ。

　ガサや尾行の時、女性だからこそ出来る対抗法もある。しつこい尾行に頭にきて、「キャー、この人、痴漢よ！」と叫んだ。公安はあわてて逃げ出した。又、ガサ入れの時、女性の荷物も全て調べる。下着も見る。その中に秘密のメモがあるかもしれないと思うからだ。そんな時、ひやかしてやる。「いいわよね、仕事で女性のパンツやブラジャーを触れるんだから。楽しいでしょう」。公安は顔を真赤にして、うつむいていたそうな。公安に対するセクハラだ。でもひやかされてもいいから私もやってみたい、仕事で。

(3)これは、女ゲリラの『放浪記』だね


このデモ隊の中に早見さんもいた(2)

　この本を読んでいて、林芙美子の『放浪記』を思い出しましたよ。私は好きで、ちょうど５回目を読んだばかりだったんで。林芙美子はプロレタリア作家の友人はいたけど左翼運動には走らなかった。でも、男から男への遍歴が、どこか似ている。中川文人さんが『女テロリスト、愛欲の８年間』と名付けたように、早見さんの本には、男関係が赤裸々に語られている。そこが他の左翼回顧本とは決定的に違うところだ。

「でも、戦旗派の中では愛したのは一人だけですよ。あとは、オルグで会った男とか…。内部ではアジトで共同生活でしょう。男と女と部屋が分かれてるわけじゃなく、眠たくなった人から順に寝る。隣りの部屋では会議をしている。そんな中で寝る。雑魚寝です。男女一緒に。だから、男女の関係を意識してる余裕はない。女性だって化粧もしないし、汚れた服着てるから…」

----「女らしく」しちゃいけなかったの？

「指輪してたら、ブルジョワ的だと言われる。パーマもダメ。ピアノ持ってる人は捨てろと言われた」

ピアノはいかんだろう。でも、連合赤軍の時と変わらないね。随分と時代は経ってるはずなのに。それに、本に書いてたけど、「全ての時間は運動に使う」というのが僕らの右翼学生運動と似ていて面白かった。「オルグ以外に人と会うことはなかった」と書いていた。俺達もそうだったな。「何のためにこいつと会うんだ」と常に〈目的〉を持っていた。目的のない時間の使い方はなかった。自分の休息の為、娯楽の為の時間なんてない。左翼ならば、こんな時間は「プチブル的」「反革命的」と言ったのだろうな。

----「肉体オルグ」もしたんですか？

「しませんよ。そんなこと。失礼ね！」

----そうかなー。だって、この本には８人ほどの男が出てくるでしょう。恋愛して合体したって。だったら実際はその10倍はあるんでしょう？

「ありません！でも運動の過程で、“この人には、私がいなくちゃ”と思ったことはあって。それで、ついつい。

----倉田真由美の『だめんず・うぉーかー』を読んでると、よくあるケースですね。暴力男や、生活力のない男、嘘つき男に対して、「私がいなくては、この人はダメになってしまう」と思う。もともとダメだし、それ以上落ちようがない男なのにね。

「……」

そうだ。「自主防衛」の話だ。対警察、対右翼、それに内ゲバ対策もある。アジトの中では武装している。といって銃や日本刀を置くことは出来ない。凶器準備集合罪になる。だから、台所用品で、武器になる物を揃えておく。ホウキとか、ホースとか、フライパンとか。

----でも、個人はどうすんの？外出する時とか。

「持ってても不自然じゃないものを持ちます。たとえば、自転車につけるカギのチェーンとか」

自転車につけないで、チェーンだけ持ち歩くのも不自然だと思うけどな。ボールペンも武器になるんだろう。それに、ヨーヨーを持っていて、敵に投げつけるとか。まるで「スケバン刑事」だね。チェーンを振り回して「敵」と闘う姿も見たかったね。でも敵って「右翼」や「公安」だね。今日も持ってんのかな。

そうだ。先月、大阪から上京した人に会った。僕の本を読んで、ぜひ会いたいという。何でも高校生の時から左翼運動をしてた。反戦高協だったかな。そしたら、赤軍派のオルグが来た。「こんなショボイ団体にいないで赤軍に入れ。アラブでもどこでも行ける。好きなことは何でもやれる。女だって抱かせてやる」

凄いオルグだ。私だったら、すぐに入る。でも彼は入らなかった。余りに「条件」が良過ぎて恐くなったという。やっぱり左翼は「肉体オルグ」もしたんじゃないか。しかし、その為のオル

グ要員がいたのか。同じ女子高生か。あるいはそれ専用のオバサン部隊がいたのだろうか。これも「従軍慰安婦」なんだろうか。だったら、「我々だっていたんだから、日本軍にいないわけはない。日本政府は謝罪しろ！」と追及したらいい。リアリティがある。でも、この時、名乗ったオルグは本当に「赤軍派」かどうか分からん。又、「女を抱かせてやる」というのも冗談かもしれん。あるいは自分一人の判断で言ったのかも。あの赤軍派がそんなことをやったとは思わない。ましてや、あの清廉潔白な塩見議長が「肉体オルグをやれ！」と命令したはずがない。

(4)「あの噂は本当なの？」と聞いちゃいました



山本直樹『レッド』（講談社）より

「肉体オルグは他の党派もしてないでしょう。ただ、ある大手党派はある大物をオルグする時に、飛びっきりの美人をオルグに行かせました」

----そうか。それで「彼」はあの党派に入ったのか。ところで、戦旗派は山登りが好きですね。訓練といってよく行っている。連合赤軍も山に登ってるし。どうして左翼は山なの？海で水泳したっていいでしょう。訓練ならば。

「山はある程度登ったら、一人で引き返せないでしょう。皆で頂上を目指して登るしかない。それがいいみたい。それに、他の党派は内ゲバで殺し合ったりしている。命がけの闘いをしている。我々だけが安閑としてていいのか。…という思いがリーダーにはあったようです」

これには驚いた。連赤の仲間殺しや、中核・革マルの内ゲバを否定して戦旗派は運動をしてたと思ったのに。中核・革マル、連赤は命をかけてる。とことんやってると「敬意」というか、「うらやましさ」を持っていたのか。そして、自分たちは命をかけてないと、「やましさ」を持つ。だから危険をおかして山に登る。

「それで事故に遭い骨折したり、怪我人が続出しました」

----たしか、遭難して自衛隊のヘリコプターで救助してもらったこともありましたね。

「呼んだ人はあとで自己批判させられました」

----でも命の危険があるんだから仕方ないよね。

この本を読んで、自分の思い込みを正されたところが多い。左翼の人々も結構真面目だし、正義感に燃えて闘っていたんだ。それに男女関係も別に乱れているわけでもない。僕が右翼学生だった頃、先輩によく言われていた。

「左翼は獣だ。バリケードの中では男女が雑魚寝している。ヘルメットを枕にして乱交してるんだ。許せない！」と。「国賊どもめ！」と。

「いいなー。じゃ、僕も国賊になりたい」とボソッと言ったら先輩に怒鳴られた。

「ヘルメットを枕に乱交なんてなかったですよ」



『うさぎが鬼に会いにいく』（アスキー）

そうだろうな。残念。もう一つ、ショックを受けた話がある。成田闘争の時だ。戦旗派も農家を一軒一軒訪ねて、オルグした。中には天皇陛下の写真がかけられてる家がある。いや、かなり多かった。戦旗派は正直だから、「これは何ですか！天皇制は日本の差別の元凶であり…、打倒の対象だ！」と言う。　ところが、ある大手の党派は違う。まず天皇陛下の写真の前で深々と頭を下げ、それから話に入る。農民も信頼して話を聞く。ヒャー、彼らはそこまでやったのか、と驚いた。真面目で正直過ぎるんだよ、戦旗派は。

その戦旗派だが、今は過激派ではない。非合法闘争を全て清算し、「合法的な市民運動団体」になった。名前も「戦旗派」をやめて、「ブント」になった。なんせ、僕なんかも呼んでくれてシンポジウムをやるほどだ。

当時、代表だった荒岱介さんは言っていた。「右翼の鈴木さんを呼ぶことには反対の声があった。あんな奴を呼ぶならやめる、と。じゃ、やめてもいいよと言ったんだ」と。申し訳ない。ありがたかった。

この早見さんの本は、決して戦旗派の暴露本ではない。辞めたとはいえ、戦旗派時代はこんなに楽しかったんだよ。又、やってみたいな、という本だ。だから『I LOVE 過激派』だ。それに、こんなにオープンに楽しく、自由に書けるのは戦旗派だからだ。他の党派なら書けない。そうでしょうが。

「それは言えますね」と早見さんも素直に認めていた。

これが売れたら、シリーズ化したらいい。「右翼猛襲編」「チェーン乱舞編」「公安死闘編」「愛欲地獄編」…と。面白い話はいくらでもあるんだ。今は書けなくても、そのうち、「あの話」も。これはきっと映画にもなるよ。主演は仲間由紀恵だね。主題歌は倖田來未だね。「実録・連合赤軍」に続いて若松孝二監督に撮ってもらってもいい。大浦信行監督も「俺がやりたい」と言うかもしれないな。

時期的にもいいよ。山本直樹の『レッド』（講談社）も売れてるし、木村三浩氏の『憂国論』も評判になっている。中村うさぎさんの『うさぎが鬼に会いにいく』でも連赤の植垣さんなどが出ている。そして来年３月は、映画『実録・連合赤軍』が封切りだ。さらに革命本、過激本が出るだろう。そうだ。日本赤軍の和光晴生さんの本も出るんだ。いいですね。再び、革命の季節ですよ。私も頑張らなくっちゃ。

【だいありー】


（左から）香村啓文さん、鈴木、有田芳生さん、岩崎定夢さん（10月1日）

(1)10月１日（月）２時、雑誌社で打ち合わせ。原稿が遅いので叱られた。いかんな、ノロマで。６時、新宿。月刊タイムスの香村社長、フリーライターの有田芳生さん、同じくフリーライターの岩崎定夢さんと会う。岩崎さんは、胡桃沢耕史さんの小説『翔んでる警視正』のモデルになった人だ。「月刊タイムス」に私は「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」を連載している。その中で、胡桃沢耕史さんのことを書いた。『翔んでる警視正』のことも書いた。そしたら、

「モデルを紹介してやるよ」と香村さんに言われて今日の会食になったわけだ。
　元、産経新聞に勤めていたという。私の先輩だ。濃い顔をしてるし、男前だ。たしかに『翔んでる警視正』も名前は岩崎だ。それに挿し絵も似ている。岩崎さんは小説家志望で胡桃沢さんに弟子入りしたという。何作も書いたけど、「小説家は向かないから、ルポをやれと言われて今の仕事に入ったんです」という。胡桃沢さんの話、文壇の話などを詳しく聞いた。
　有田さんには、会うなり「鈴木さんは友達が一人もいないの？」と聞かれた。「あっ、すいません。有田さんだけです、友達は」と言った。「じゃ、次の選挙に出る時は応援演説に来てよ」と言われた。「はい、分かりました。ただ一人の友達ですから」と約束しました。

(2)10月２日（火）12時、週刊誌に取材される。今、人気絶頂の雨宮処凛さんについて取材してるとのこと。「最初の出会いは鈴木さんなんですよね」「そうですね。とうじ魔とうじさんのライブの打ち上げでしたね。“隣りにボーッとしたオッサンがいた”と私は書かれています」。
　それから、あれよあれよという間に、彼女は国民的アイドルになった。若者たちの救世主だ。「現代のジャンヌ・ダルクです」。彼女が世に出るキッカケになったのが私です。光栄です。「キッカケ」としてのみ私の名も歴史に残るでしょう。いつか孫に「雨宮処凛をおじいちゃんは知ってるんだよ」と自慢してやりますよ。
　それから、TSUTAYAに行って、家に帰って原稿。仕事が遅いから、さっぱり進まん。「無能め！」と叱りつけてやった。５時半になった。「さて、柔道に行こうかな」「バカ、遅れてるんだから仕事を続けろよ」「でも週に一度位は、体を動かさないと…。健康第一だから」「ウルセー、もう活動家じゃないんだから、毎日、原稿を書いてればいいんだよ」。c　…と、私の内部で二人が喧嘩している。

「それに、柔道行くと、疲れ切って、もう原稿書けないじゃん」

「だったらすぐに寝て、朝早く起きて書けばいいだろうよ」

「ウーン、かったるいなー」

「よし、こうしよう。柔道行ったら、帰りに２時間、本を読ませてやるよ。読む本もたまってるんだろう」

　…それで、Ａ君に説得されてＢ君は柔道に行きました。いつもこんな激論を闘わせている。
　でも、おかげで、田口ランディの『ひかりのメリーゴーランド』（理論社）を読破した。もらったんで読んだけど、よかったね。初めてだけど、食わず嫌いはイカンと思った。だから、鳥の唐揚げを食べながら、ランディを読んだ。活動家の時は、国のために命を捨てるのだと思い、熱く燃えていた。カッカとしていた。しかし、運動をやめてからは、全てに冷ややかになって、人間が冷たくなった。喜怒哀楽も感じなくなった。人間に無関心になった。
　ところが、田口ランディの小説を読んで、ホロリとした。えっ、俺にも温かい血が流れていたのか、と驚いた。小説を読んで涙する。まだまだ人間の心が残っていたんだ。この男にも。いい本だった。



「９条フェスティバル」で。（左より）今野東さん、重信メイさん、鈴木（9月29日）

(3)10月３日（水）だから、昨夜は早く寝て、今日は４時に起きて原稿を書いた。午後２時40分からジャナ専の授業。「時事問題」。なぜか最近、「安倍政権見直し論」が出ている。私のとってる産経新聞だけかもしんないが。だから、その話をした。夜は、家で仕事。

(4)10月４日（木）11時、高田馬場で編集プロダクションの椎野礼仁さんと打ち合わせ。いろいろ、お世話になってます。
　３時から河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養」のゼミ。

(5)10月５日（金）図書館で一日、勉強してました。調べものもあったので。

(6)10月６日（土）午後６時半、日本橋公会堂。「4.27法政大学弾圧を許さない10.6集会」をやる予定でしたが、急遽、中止になりました。司会の中川さんから電話がありました。権力の弾圧なのか、あるいは陰謀なのか。不明です。知らずに行った人はすみません。謝ります。

【お知らせ】

(1)衝撃の映画「大統領暗殺」が10月６日（土）からロードショー公開されてます。日比谷シャンテシネ、新宿武蔵野館などでやってます。田原総一朗、鳥越俊太郎さんなども絶讃して宣伝文を書いてます。
「これは予告だ。必ず現実になる。レンジ監督こそが暗殺者だ。逮捕も死も覚悟の上だろう。これが監督、最後の作品になる」
と、やたら過激なことを書いてた人もいました。あっ、私か。

(2)10月９日（火）７時、一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。蓮池透さんが講師で来られます。貴重なお話が聞けると思います。

(3)10月27日（土）一水会・岐阜レコン読者の集い。
　同じ日、午後７時から早見慶子さんの「ＩLOVE 過激派」の出版記念会があります。新宿の「東京ベリーニカフェ歌舞伎町店」です。会費は7000円。私は両方に参加しようと思います。無理かな。

(4)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。外山氏は罰金８万円の判決が下ったんですね。控訴するそうです。

(5)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後2時より高田馬場のホテルサンルートで。第1部は追悼祭。第2部は記念講演。元楯の会五期生・山口良男氏が講演し、「わが青春の楯の会----三島由紀夫・思想の根源」です。

(6)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、 「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(7)12月12日（水）一水会フォーラム。大下英治さん（作家）です。

(8)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

【おまけ】

(1)関口君、RedDogさん、いつもありがとうございます。毎週読んでくれてんのは二人だけですね。この地球上で。ありがたいです。関口君も、本を書けばいいのに。実力があるんだから。それとも、まず脚本を書いて高木さんの劇団で芝居にしてもらうとか。RedDogさんは二瓶絵夢さんと知り合いですか。元の職場で？
　それと、渡辺さん、ありがとうございます。芹沢光治良の『人間の運命』はいいですよね。現代の「聖書」ですね。心が洗われます。それでいて物語としても面白いし。あの長い長い小説を読破すると人生観が変わります。人間が変わります。他の人には見えないものが見えてきます。全巻読破したら、ぜひ、その光の体験を書いて下さい。私も刺激されて今、芹沢光治良の『教祖様』を読んでます。

(2)10月14日（金）発売の「週刊金曜日」に佐高信さんと私の対談が載ります。タイトルが「右翼も左翼も西郷隆盛を好きなわけ」。

(3)中村うさぎさんの本は評判がいいですね。「鈴木邦男論」は一流の文章だと言ってた人が多いのです。誉めてるようで、でも、鋭く見透かしてます。心を読まれてますね。うさぎさんこそ「神の視点」です。

(4)今出ている「AERA」（10月15日号）に「現代の肖像・松本健一」が出ています。私もコメントしています。

(5)魚住昭さんの『証言・村上正邦。我、国に裏切られようとも』（講談社）が出ました。「生長の家」を中心とした日本の「右派勢力」の台頭について書いてます。私もコメントしてます。

(6)佐伯紅緒さんの『恋するファム・ファタール』（角川ＳＳＣ）が出ました。なかなか面白いです。

(7)元・日本赤軍の和光晴生さんの『赤い春』（集英社インターナショナル）が10月26日、発売されます。楽しみです。

HOME

今週の主張

謎が解けました！
＝300万の〈被害者〉の皆様へ＝

今週の主張10月15日

バックナンバー

(1)果たして現実か、妄想か？



「尾行され歴40年」の鈴木クン。
『推理力』（双葉社）より

お待たせしました。やっと分かりました。謎が解けました！

僕も疑問だったのです。なぜ、これほど多くの人々が、「この問題」で悩み、苦しんでいるのだろうと。これはもう、あなた達、一人一人の問題ではありません。「時代の病」です。

いや、「病」と言っちゃいけないんでしょうな。だって、実際に被害にあってる人は多いのですから。「多い」どころではありません。一億二千万人の全ての人々が、何度かは感じてることです。一億二千万人の「疑惑」です。「そんなことはない」と断言するあなた。でも、あなただって、一度位は思ったはずです。「盗聴されてるのでは？」「誰かに尾行されてる気がする」…と。

でも、そんな事を周りの人に言うと、「馬鹿な！」「妄想だよ」と言われたでしょう。そう言われるのが嫌で、じっと耐えてきたんですよね、あなたも。思い余って警察に届けても、真面目に捜査はしてくれません。「そういう思い込みは多いんですよ、最近…」と言われるだけです。

しはかし、それでもあなたには「疑惑」は残るでしょう。中には、「心を読まれてる」と悩んでる人もいます。

そういう人々に対し、私も冷淡でした。いや、理解できなかったのです。「鈴木邦男だったらこの悩みを分かってくれるはずだ」「鈴木は真実を知ってるはずだ」と思ってる人もいました。ネットの書き込みもありました。でも、その時点では分かりませんでした。謎が解けませんでした。申し訳ありません。３年前、『公安警察の手口』（ちくま新書）を書きました。今、第５刷です。そして、実に多くの人々から手紙や電話をもらいました。

実際に右翼や左翼、宗教運動をやっていて、実際に「ガサ入れ（家宅捜索）」、盗聴、尾行をされた人。その被害者の生々しい体験も聞きました。又、公安警察や公調（公安調査庁）のスパイだったという人にも会いました。

でも、聞いて下さい。これは重要なことですが、そういう「活動家」「元活動家」の「実際の被害者」は全体の１割なんです。あとの９割は何と「普通の人」です。左右・宗教の運動なんかしたことのない人です。でも、そういう「普通の人々」が言うのです。

「この本を読んで分かりました。私を盗聴していたのは公安です！」

「外出すると必ず白い車が５台、いつも、ついて来ます。不安で不安でしかたなかったのですが、分かりました。公安です！」



過激派あぶり出しの謀略が…

しかし、公安だって何もないのに「一般の人」を盗聴したり、尾行したりはしません。（ここで「公安」と言いましたが、「警察の公安」と「公安調査庁の公安」をまとめて言ってます。区別する必要がある時には、その旨を書きます）

「公安に盗聴され、尾行されてる」と不安に思い、悩んでる人が、もの凄い多いのです。「じゃ、公安につけられるような事をしてるんですか」と聞くと、〈根拠〉が曖昧なんです。あやふやなんです。

「ＰＴＡの時、ちょっと思い切った事を言った。学校側が公安に言いつけたんだ」

「病院の順番待ちの時、遅いので抗議した。病院は仕返しに公安に通報した。それで、嫌がらせをしてるのだ」

「私がきれいだから、隣の人があることないことを公安に告げ口して、尾行させてるんだ」

「私が巨乳で、もてるから会社の貧乳女が嫉んで、悪い噂をふりまき、盗聴までしている」

ウーンと絶句しました。「近所に踏み切りがあるが、私が通る時だけ、あわてて遮断機が降りる。公安の嫌がらせだ」「私が外出するとアパートの向かいの人が必ず顔を出す。公安に頼まれて監視してるのだ」…と。

「そこまで公安はヒマじゃないよ」と言いたいのをこらえて私は話を聞いてます。「これは、『公安の冤罪』だよ」とも思いました。何でもかんでも公安のせいにされちゃ、公安もかわいそうだと。公安に同情したくもなりました。じゃ、今度は『公安警察の冤罪』を書こうかな、とも思いました。

でも、困ってる人にそんなことは言えません。少なくとも私の読者です。だから真剣に聞いてます。「あっ、鈴木さんも私のことを病気だって思ってるでしょう」「妄想だと思ってるでしょう」と言われます。ギクッとしながらも、「そんなことはありません」と必死に否定します。

何百人という人から手紙をもらい、ＦＡＸ、電話をもらいました。「いちいち聞いてたら仕事にならないな」と思いながら。〝ても、自分の知る限りのことを話し、相談に乗りました。その証拠に、「専門家」に紹介して「解決」したこともあります。

「そんなに言うんなら、公安のプロを紹介しますから」と言って北芝健さんを紹介したのです。相手の電話を聞き、その上で、「こんな相談があったけど北芝さんの電話を教えていいか？」と聞き、紹介してやったのです。北芝さんは元公安です。考え方は全然違います。僕は「公安をなくせ」と言ってますが、北芝さんは「公安は必要だ。もっと増やせ」と言ってます。『公安化するニッポン＝実はあなたも狙われている』（ＷＡＶＥ出版）では、激突対談をしました。

でも、とてもいい人です。信頼できます。何人かの人の相談に乗ってくれました。又、驚いたことに、実際に会って話を聞いてくれた人もいます。僕だって、そこまではやりません。凄い人だ。テレビにはよく出てるし、あんなに忙しいのに…。申し訳ない。この人には一生頭が上がらないと思いました。



元公安の北芝健さん（右）と

北芝さんとも話し合いました。なぜ、こういうことで悩んでる人が多いのだろうと。単に、「思い込み」「妄想」と決めつけていいのか…と。

そんな時、不思議な本に出会いました。古牧和都の『集団ストーカー』（晋遊舎ブラック新書）という本です。本の表紙もブラックです。知らない人から送られてきました。やはり、「集団ストーカー」の被害にあった人です。

この本の帯にはこう書かれています。

〈妄想か？　現実か？
謎の集団に監視されている人々の恐怖〉

でも、決してトンデモ本ではありません。真面目に「謎の集団」を追究します。それに、書いた人は「盗聴発見業者」です。「盗聴されてる」「調べてくれ」と言われれば、仕事として飛んで行きます。妄想のこともありますが、実際に盗聴器が発見されることもあります。だから、全てが「妄想」「病気」ではありません。その所をキチンと押えて書いてます。これは実にいい本です。本の見開きの所にはこう書かれています。

〈「誰かが私を監視している」「近所の人々が私に嫌がらせをしてくる」「会社が工作員を雇って私をリストラしようとしている」「○○という宗教団体から狙われている」「警察から狙われている」「人工衛星で居所を監視されている」…。
近年、インターネットを中心に広まりつつある謎の集団によるストーキングの被害報告。この被害の正体を追い続けてきた盗聴発見業者が見た真実とは？〉

「一般の人「普通の人」を集団で尾行したり、盗聴したり、嫌がらせをしたり…。そういう「謎の集団」を「集団ストーカー」と言うのだそうです。ネットを見たら、ありました、ありました。「集団ストーカー」の被害者のサイトが。「鈴木邦男なら何かを知ってるはずだ」「“心を読む機械”についても知ってたし」という人もいました。申し訳ありませんでした。期待に応えられずに。でも、やっと分かったのです！その〈正体〉が！その謎が！

(2)これだけ、盗聴器は仕掛けられている！



古牧和都『集団ストーカー』（晋遊舎）

ここに興味深い記事があります。「あなたも盗聴されている!?」という記事です。産経新聞の９月19日に載ったものです。最近、多いんですね。たとえば日航のスチュワーデスが４年間も盗聴されていた。犯人は日航の機長だった。「彼女の気持ちを知りたかった」と言う。又、一人暮らしの女子大生、鈴木あゆみさん（仮名・21才）の実例も紹介されている。自宅で友人６人とクリスマスパーティを開いた。次の日、買物に行くと、昨夜の男がいる。「いやー、偶然ですね」。外出先でなぜか頻繁に会う。旅行に行ったら、同じ車輌に乗っている。「いやー、偶然ですね」と男は言う。ゾッとした。そんなに偶然が続くわけはない。業者に調べてもらったら、盗聴器があった。クリスマスパーティのプレゼントの中にあったのだ。その男がくれたプレゼントだ。これで全てが分かった。

盗聴器は秋葉原やネットで簡単に買える。そして、プレゼントの中、ボールペンの中、パソコンのマウスの中…と、どこにでも隠せる。年間30万個以上が販売されているというが、実際にはこんなものではない。10倍は売れている。中国やアジア各国でも「盗聴被害」は多発している。全て、器械は日本製だ。こんな形でアジアを再び侵略している。それらを含め、年間300万個は売られている。「集団ストーカー」の被害を訴えている人も300万。数が合う。又、先の戦争で亡くなった人も300万。あの戦争で怨みをのんで死んだ人の数と一致する。怨念の300万だ。

さて、産経に出ていたが…。ＮＰＯ法人「日本情報安全管理協会」の佐藤健次事務局長の話だ。その協会は頼まれて個人宅で盗聴捜査したのは1434件。昨年一年間でだ。そのうち盗聴器発見は44個。設置場所はコンセント内、コンセントタップ、延長コードなどで60%以上を占めたという。

これは家に出入りしていた友人、元カレ、元カノ、元亭主、元女房…などが仕掛けたのだ。さらに、友人にもらったプレゼントを持って帰ったら、そこに入っていた。そんな例が多い。大体、嫌いな男でも、プレゼントはもらってくるという女のさもしい根性もいやだ。そんなものはすぐに捨てろよ。

ここで気がついたことがある。１年で1434件を調べた。実際あったのは44個だ。１割に満たない。でも、「これだけ発見されたのか」という驚き。もう一つは、「９割以上は妄想だったのか」という驚き。

だって、発見する方はプロだ。必ず見つけられる。それでも本当にあったのは５%ほどだ。でも、10%でも５%でも、あったことは〈事実〉だ。産経では、リードの部分でこう書いている。

「身の回りに不可解なことが頻発しているあなた、盗聴器を疑ってみては…」



「ガサ入れ」の公安（1982年　一水会を）

いかんなー、こういう書き方は。世の「集団ストーカー」被害者に〈確信〉 を与えることになる。ほら見ろ、産経だってこう書いている。私は盗聴されてる。尾行されてる…と。

「昨年で1434件」を調べたというが、他にも調べている所はある。『集団ストーカー』の著者のような発見業者。さらに探偵社、そして警備会社。それらを合わせると、年間何十万件だ。

そのうち、警備会社に相談する人が多い。名が通ってる会社なら安心だと思うのだ。無名の探偵などでは、「敵から買収されて嘘の報告書を出すかもしれない」「見つけても、なかったと言うかもしれない」…と不安なのだ。

総合警備保障の広報係の人が産経でこう答えている。「以前の住人が仕掛けていったり、以前の住人目当てで誰かが設置していたりするケースもある」という。「盗聴器こみ」で部屋を借りることになる。そうなると、新しい部屋に移る時は、「まず盗聴器がないかどうか」を調べなくてはならない。総合警備では、不安を持つ人のために「盗聴器探索サービス」（2万9000円～9万2400円）をスタートさせたという。まあ、10万円位かかるということだ。利用者の約8割が女性だという。

だから、不安を持つ人は10万円を出して、安心できる会社に頼むことだ。それでスッキリする。でも、それでも安心できない人もいる。

(3)ＵＦＯの陰謀。公安の陰謀



『公安警察の手口』から

又、話は変わる。ＵＦＯの話だ。目撃した人、ＵＦＯにさらわれた人。いろんな本を読んだ。宇宙人は高い知能を持ち、この地球人と仲良くしたいと思っている。又、温暖化をはじめ地球の危機を訴えにきている、という。「いつまで戦争をしてるんだ。愚か者め！」とメッセージを与える為に来ている。

「でも」と私は思った。そんな素晴らしいメッセージを伝えるのなら、それにふさわしい人を選んだらいいだろう。なぜ、変な人ばかり選ぶのか。周りの人からも、「おかしいよ」「病気じゃないの」と相手にされないような人を選んで、宇宙人はメッセージを託すのか。それが、謎だった。アメリカ大統領とか日本の首相とか、そういう人を相手に語りかけたらいい。

そう思っていた。しかし、本当は語りかけていたんだ。でも、その人達は聞かない。あるいは恐くなって、ヤケでイラク戦争をしかけたり、ヤケで政権を投げ出したりした。それに、裏で支える賢い集団がいる。宇宙人のことは隠さなくてはならない。その為には逆に「情報」を（真偽まぜて）ドッと出したのだ。国家の秘密エージェントが画策して、「変な人」達にＵＦＯを実際に見せた。この人を実際に拉致して。この人達なら、いくら言っても、「こいつが言うのなら嘘だろう」と一般の人は思う。それでＵＦＯの〈真実〉は隠された。アメリカ政府だけが真相を独占している。

同じことが日本の300万の「集団ストーカー被害者」についても言える。又、古牧和都は個別の盗聴者はいるが、「集団ストーカー」はいないという。私はちょっと違うと思う。「これも公

安」「あれも公安」…と言い出す人が出るのは困る。「公安の冤罪」だと私は思っていた。しかし違うんだな。そう思われた方がいい。よく、警察がバックアップして、ＴＶや新聞でやっているでしょう。「過激派が近くにいる」という真偽ふくめて「情報」がドッと出ることはいいことなんだ。公安にとっても。隣人が信じられない。友人も信じられん。元カレが盗聴している。公安だって盗聴している…と。



『公安化するニッポン』（WAVE出版）

そうなると、最後は「頼りになるのは警察」ということになる。そうなるように「演出」してるのだ。300万の「集団ストーカー被害者」のほとんどはナーバスになっている。 心優しい人々だろう。妄想もあるだろう。しかし、少なくとも1割近くは「本当」だ。周りの人間が盗聴器をつけている。あとは9割の人間だ。 そのうちの何人かに、ちょこちょこと公安は「悪さ」をしている。「工作」をしている。実際に盗聴し、わざと雑音をたてる。尾行して、わざと気づかせる。 なんせ、そうした専門の専従員がいるのだ。不安で不安でたまらない人達をちょっとつついてみる。「やっぱり！」と思う。それなんだ。公安にしたら、労少なくして、 多大な効果を上げられる。

では、被害者はどうするかだ。10万円出して警備会社に頼む。それでも発見できない人、10万円の金がない人。その人は、あきらめるんですな。盗聴、尾行されてもいい、と居直るんですよ。いくらでも悪口を言ってくれ。それだけ私は注目されてるんだ、と思えばいい。

キリストだって、お釈迦様だって、初めは「妄想だ」「病気だ」「気がふれた」と言われた。この地球を救った「ターミネーター」も、地球人には「そんな話は妄想だろう」と思われて精神病院に入れられた。

(4)やはり、国家規模の謀略なのです



『公安警察の手口』（ちくま新書）

だから、言っても分かんない人には言わないことだ。相談することによって、かえって友人を失う。（私を見てみろ！そうだ）。被害を言うことによって、かえって、「妄想だ」「病気」だと言われる。（私もそうだ）。だから言わない。言うとしても、「小説」にする。「演劇」にする。人々に伝わる〈文学〉にする。それしかない。

一般の人々に「伝わる言葉」を探し、それで書くということだ。その「伝わる言葉」があったのでキリストも、お釈迦様も認められ、〈言葉〉が伝わったのだ。その言葉がなかったら、彼らも「集団ストーカー被害者」で終わった。

その為にも本を読みなさい。ＴＶ、新聞、ネット、メールなんか捨てなさい。隣りの人の言葉に耳を貸さず、三島由紀夫を読みなさい。西郷隆盛を読みなさい。吉田松陰を読みなさい。司馬遼太郎、吉村昭でもいい。本を読み、そんな人達に訴え、問うたらいい。必ず答えてくれます。そういう魂のレベルの高い人達と毎日、会話を

したらいい。

　くれぐれも、「私は盗聴されている」「尾行されている」と周りの人に言わないことです。私のように、実際にされている「尾行され歴40年」の人間が言うのですから信じて下さい。放っておくんです。そして、「分かる人」にだけ言って相談するんです。苦しくても他人に言わないことです。何気なく、「盗聴されてるよ」「尾行されてるよ」と電話で言うのもダメです。それを警察は本当に盗聴していて、あろうことか、「こいつはヤク中だ！」と逮捕に来るからです。
　何も、理由もなく怖がらせているのではありません。深見填さんの『こどものためのドラッグ大全』（理論社）にこんなことが書かれてました。

〈ある覚醒剤の常用者が、「自宅の電話が警察に盗聴されているようだ。妄想じゃないんだ。どうしたらいいだろう」と相談してきたことがある。ぼくは困ってしまった。
　というのも、違法なドラッグを使用している疑いのある人間を、警察や厚生労働省の麻薬取締官がこっそり調べること（これを「内偵」という）はおおいにありうるからだ。盗聴をすることも、じっさいにある。
　「ほんとうに盗聴されているのか、それとも、それがきみの妄想なのか、ぼくには判断がつかない。不安なら、きっぱり覚醒剤をやめるべきだ」。そうアドバイスするしかぼくにはなかった〉



公安調査庁のトップと対決した

　これは、子供用に書かれた本です。でも、これだけ詳しく書かれたドラッグの本は、初めてでしょう。評判になり、売れてます。そして、ここに、〈ヒント〉が隠されています。
　「麻薬をやってるらしい」と思う人間を警察や麻薬Gメンは内偵します。「らしい」とはどんな人間でしょう。挙動がおかしい。すぐに暴れる。目付きが変…。それと同時に、「盗聴されている」「尾行されている」と口走っている人間です。ただの妄想かもしれない。あるいは誰かのプレゼントの中に盗聴器が入ってるかもしれない。あるいは、本当に尾行されてるかもしれない。
　しかし、警察は、この人達全てを、「ドラッグの使用者」かもしれないと思うのです。だから、本当に盗聴します。

　分かりましたか。「集団ストーカー」の実体は「彼ら」です。「謎の集団」は彼らです。警察や麻薬Gメン、さらには公安もやっています。300万人の「集団ストーカー被害者」を混乱させ、あぶり出す為です。そして、「信じられるのは警察だけ」と人々に思わせる為です。
　だから、どうしても不安なら、信用できる警備会社に10万円を払って、調べてもらったらいいでしょう。それでなかったら、ないのです。ただ、「彼ら」は電話局を使ってやりますから、防ぎようはありません。黙って耐えたらいいのです。しばらくしたら、「彼ら」も諦めます。

　そう、〈過激派〉と〈ドラッグ中毒・売人〉をあぶり出す為に、やられている秘密プロジェクトなのです。そのために300万の、罪のない人々を盗聴し、尾行し、混乱させているのです。

【だいありー】

(1)前に紹介しましたが、北朝鮮の元工作員・安明進さんに判決が下りました。懲役4年6月だ。アジア各国では覚醒剤は罪がやたら重い。売るとなると即、死刑の国も多い。安明進さんは自ら使用し、さらに売ったという。だったらこんな軽いはずはない。やはり、「国の仕事」として北の麻薬ルートを探っていた。その過程で警察に捕まってしまった。国策捜査だ。仕方なく判決を出した。2年ほどで出るだろう。

(2)10月6日、革命家・外山恒一氏に鹿児島地裁の判決が出た。求刑の8倍で、罰金12万円だ。バイクのスピード違反で逮捕し、１ヶ月も勾留した。さらにこの判決だ。実は参院選で熊本に鈴木邦男を擁立しようと画策。それを潰すために国策逮捕したらしい。

(3)10月8日（月）原稿。

(4)10月9日（火）元・過激派の中川文人氏と謀議。夜7時、一水会フォーラム。蓮池透さんが講師で、「二つの国の狭間で翻弄される家族達」。
　感動的な話だった。超満員だった。拉致事件、それに救援運動について詳しく語ってくれた。蓮池さんに会うのは３回目だが、いつも話が論理的だ。有田芳生さんも聞きに来ていた。『I LOVE 過激派』を書いた早見慶子さんも来ていた。この日も綿の服だ。「チェーンは？」と言ったら、「今日は雨もようだから傘にしました」。

(5)10月10日（水）ジャナ専は今日は学校の行事で休み。2時半、「シネカノン有楽町２丁目」内覧、レセプション。集まった人が多過ぎて、急遽、会場を増やしていた。井筒和幸監督と会って話をした。

(6)10月11日（木）昼、打ち合わせ。午後3時から河合塾コスモ。「現代文要約」。5時からの「基礎教養ゼミ」では早見慶子さんの『I LOVE 過激派』（彩流社）をテキストにして皆で読み、勉強した。

(7)10月12日（金）「週刊金曜日」発売。佐高信さんと私の対談が載っている。「右翼も左翼も西郷隆盛が好きなわけ」。2時から憲政会館。浅沼稲次郎・社会党委員長が右翼の少年に刺殺されて47年になる。「９条改憲反対。故浅沼稲次郎追悼10.12集会」。
　夜6時半から横浜市西公会堂。ベアラ・シロタ・ゴードンさんの講演会。「九条科学者の会かながわ」主催。ベアラさんは憲法24条を作った人だ。今年4月、ニューヨークで一緒にシンポジウムに出た。その時、「日本で昔、憲法24条の歌があったって聞いたけど、鈴木さん知らない？」と聞かれた。ウーン、聞いたような気がするな。それで多方面に聞いて、半年かけて、やっと分かった。ネットで取り寄せて、あげた。喜んでいた。

(8)10月13日（土）3時、日本青年館。「青年思想研究会・物故者を偲ぶ会」。

【お知らせ】

(1)10月20日（土）ロフト。前田日明さんのイベント。私も出ます。

(2)10月27日（土）一水会・岐阜レコン読者の集い。
　同じ日、午後７時から早見慶子さんの「ＩLOVE 過激派」の出版記念会があります。新宿の「東京ベリーニカフェ歌舞伎町店」です。会費は7000円。私は両方に参加しようと思います。無

理かな。

(3)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。外山氏は罰金８万円の判決が下ったんですね。控訴するそうです。

(4)11月20日（火）池袋ジュンク堂でトーク。『ＩLOVE 過激派』の早見慶子さん、それに『憂国論』の木村三浩氏。私も付録で出ます。

(5)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後2時より高田馬場のホテルサンルートで。第1部は追悼祭。第2部は記念講演。元楯の会五期生・山口良男氏が講演し、「わが青春の楯の会----三島由紀夫・思想の根源」です。

(6)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、 「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(7)12月12日（水）一水会フォーラム。大下英治さん（作家）です。

(8)12月10日（月）7:00p.m.「阿佐ケ谷ロフト」オープニング月間で、この日は私が出ます。

(9)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

HOME

今週の主張

バックナンバー

靖国に祀られた犬たち

今週の主張10月22日

(1)犬たちも命をかけて出撃した



軍犬慰霊像の前で

「犬死」だけはしたくない。そう思ってました。右翼過激派だった頃です。犬死とは無駄な死、無意味な死です。勿論、国の為に死のうと思っていたわけです。戦争で国の為に死んだ人々は靖国神社に祀られています。

戦争がない時はどうでしょう。国賊、巨悪を葬（たお）して、自分も自決する。それこそが国士の身の処し方だと思っていました。

「犬死」と言いますが、犬だって全ての犬が「犬死」したわけではありません。戦争で立派に闘い、死んだ犬もいます。いわば、「犬死しなかった犬」たちです。そうした犬たちに対しては国家も感謝し、慰霊しております。ちゃんと靖国神社に祀っております。

「靖国神社に祀る」という表現は正確じゃありませんね。でも、靖国神社の境内に、像が建てられ、慰霊されております。本当です。犬だけじゃありません。馬も鳩も慰霊されております。遊就館の左手前に、三つの像が建っています。「戦没馬慰霊像」「軍犬慰霊像」「鳩魂塔」です。証明するために写真を撮ってきました。私が撮ったことも証明せにゃならん。そんで、近くにいた憂国青年に撮ってもらいましたがな。



戦没馬異例象

鳩は伝書鳩として使われました。通信の手段です。でも、敵に撃ち落とされて「戦死」した鳩もおります。又、ドイツでは、イギリス軍の伝書鳩を襲うためにタカを訓練し、実際に殺させました。人間が勝手にやる戦争なのに、関係のない鳩やタカが殺し合いをしてるんです。

さて、馬は、もっぱら荷物を運ぶ為です。まあ、馬に乗って将軍が攻め落とした地区に堂々と入場する。そんな時にも使われましたが。南京に入場とか。明治から昭和20年の敗戦までに徴用された馬は、何と100万頭になります。そして、一頭たりとも内地には帰ってきません。「捕虜」にとられた馬もありません。捕らえられ、敵軍に使われる位なら、いっそのこと、と殺されたのでしょう。あるいは、食べられたのでしょう。

では犬は何のために使ったのでしょう。伝令の為、又、嗅覚に優れているので索敵、追跡などに使われました。又、爆弾を背負って敵に突っ込ませたともいいます。靖国神社の「軍犬慰霊

像」にはそんなことは書かれていません。だから、私は犬は戦地に行って、兵隊さんたちのペットとして可愛がられ、皆の気持ちを癒したのだろうと思ってました。ところが違います。そんな気持ちの余裕など無いのです。

「軍用犬」として立派に闘いました。これはＮＨＫだったと思いますが、「徴用犬」「供出犬」のことをやってました。「国の為に犬や猫を供出しろ！」と警察や軍の通達があったのです。その「通達文」も、ちゃんと出てました。確かに書かれていました。

では猫は何に使うのでしょう。「敵に突っ込め」と言っても、彼らは気ままですから、言うことなんか聞きません。あはれ、皮をはぎ取られ、兵隊さんの防寒着になったのです。犬もそうです。軍用犬として役に立たない犬はそうなったのでしょう。「これが犬皮で作られた防寒着です」と写真も出てました。ウッと唸ってしまいました。残酷な奴らですね。軍のトップは。



鳩魂塔

ウィキペディアを見たら、「特攻隊」としての犬の訓練の写真が出てました。でも日本のことは出てません。外国の話ばかりです。「対戦車犬」「地雷犬」として第二次大戦でソ連軍が開発した「動物兵器」として出てました。でも、他の国でも使ってました。だって、日本でも使ってましたし。もしかしたら、日本はソ連よりも早く、この「非人道的兵器」を使っていたのかもしれません。少なくとも、人間の「特別攻撃隊」よりずっと前に、犬による攻撃が行われたのでしょう。犬ではあまり〈効果〉が上がらなかったので人間に切り換えたのかもしれません。残酷な発想です。

ウィキペディアではこう書かれてます。

〈地雷犬とは、旧ソビエト連邦が独ソ戦においてドイツ国防省の戦闘車両を破壊するために、信管を取り付けた爆薬を背負わせた犬である。　稼働させたドイツ軍の車両の下に餌を置き、条件反射でそれを覚えたイヌを飢えさせた状態で戦場に投入し、イヌ自らが地雷となるものであった〉

地雷犬は地雷と共に、垂直の棒を背負っている。それが起爆レバーになって、戦車にもぐると、触れて爆発する。悪魔が考えた兵器だ。なんともひどい事を考えつくもんだ。日本軍も、こうやって訓練をしたのだろう。兵隊が穴を掘って潜み、敵戦車が通る時に地雷もろとも自爆し、戦車を倒す、という事も日本ではやられたが、これよりは犬を使った方が「人道的」と思ったのか。

(2)「地雷犬」の逆襲。そして、『ムツとわたし』



訓練中の「地雷犬」

でも、犬もかわいそうだ。腹がペコペコで戦場に放たれ、戦車の下に餌があると思って入ったら、あわれ自爆だ。本人は国のために死ぬ意志もないのに、無理矢理、「名誉の戦死」にされる。

でも、これは全てがうまく行ったわけではない。敵軍だけでなく自軍にも被害が続出したのだ。なぜか。ウィキペディアではこう言う。

〈しかし、精度は高いとは言い難く、たとえ訓練を積んだ対戦車犬と言えども、敵戦車が走行す

る際に発する激しい騒音に怯え、逃げ去ったり、自陣に駆け戻り自爆するなど、扱いの難しい兵器であった。
　また当初、訓練に自軍のディーゼルエンジン搭載の戦車を用いたため、臭いの異なるガソリンエンジンのドイツ戦車を避け、味方戦車に突っ込んでしまうという大きな失敗もあった〉

　うん、これはあるよね。じゃ、ソ連の「地雷犬」は全く役に立たなかったのか。「正確かどうか定かでないが」と前置きして、ウィキペディアでは、「ソ連側の記録によるとおよそ300輌の敵戦車を撃破したとされる」。
　実際はどの位か。100以下か。しかし、日本軍ではその記録も出てない。記録、文書がないから事実はなかったといっても、軍や警察の「供出犬」を求める文書は残っていてＮＨＫで放映された。『ムツとわたし』だ。愛犬を供出した人が自費出版でその記録を出している。読んだけど、とてもいい本だ。



<大和田啓子『ムツとわたし』/p>

　失敗もあったけど、最初のうちは犬も戦果をあげたのだろう。ドイツ軍も焦った。犬が走る高さは戦車砲の最低俯角よりも低く、犬を認めても攻撃を防ぐことが難しかった。
　それでドイツは、戦車に火炎放射器を搭載し、対戦車犬を焼き払った。何頭かは戦果をあげたが大多数は火炎攻撃に恐れおののいて、戦線を離脱したり、あるいは自陣に舞い戻り、自爆するなど、被害を拡大していった。
　特に1942年に起こった戦闘では、ドイツ軍の火炎攻撃に対戦車犬たちはパニックに陥り、自軍部隊に甚大な被害を与え、遂にはその部隊の撤退を余儀なくさせた。
　無心な犬をそんなことに利用するからだ。罰が当たったんだよ。「この一件から程無くして、対戦車犬は実戦の場から姿を消した」という。
　じゃ、犬は今は全く使われてないかというと、そんなことはない。今でも「軍用犬」として現役である。行方不明者や脱走兵を探すめたに。敵がどこに潜んでいるかを探すために。又、今でも地雷が残ってる所がある。それを探すために…。
又、空港や港では麻薬犬が活躍している。


『ムツとわたし』から

　さて、『ムツとわたし』だ。愛犬を供出した人の体験談だ。ＮＨＫで紹介されたが、本屋では売ってない。自費出版だ。それで調べて、申し込んで買った。大和田啓子さんが書いた本で、郡司みはるさんが絵を描いている。又、「日本語・英語２ヶ国絵本」になっていて、英訳はロナルド・Ｓ・ケアンズさんだ。日米両国の人々に読んでもらい、もう二度と不幸な戦争が起こらないようにしてほしいという願いなのだろう。英語の題は「My Dog Mutsu」だ。
　「ムツ」って変な名前だなと思った。ムツゴロウさんから取ったのか。違う。戦艦「陸奥（むつ）」から取ったのだ。そうか、当時は、ムツというだけで皆、戦艦を連想したんだ。ムツゴロウなんて思った私は非国民だ。
　ムツは秋田犬だ。秋田の人は皆、いい人だ。人も犬もいい人だ。

ちょっと横道に外れるけど、先日、立松和平さんの出版記念会で秋田の人に話しかけられた。「鈴木さんも秋田なんですよね」「ンダ」と答えた。

「秋田は自殺者が日本一なんです」といきなり暗い話をする。娯楽もないし、夢がないからなの。周りは秋田美人ばっかりなのに。

「いや、日本一繊細なんです。優しいんです。全部、自分の問題として考え、背負ってしまうんです」

そうなのか！驚きましたね。秋田の人は皆、いい人なんだ。ホロリとしました。このムツも、そんな秋田のヒトです。

このムツはもともとは大和田家の犬ではありません。ある若者が飼っていたのですが、召集令状が来て、飼えなくなった。ぜひ大和田さんに飼ってもらいたいと頼まれたのです。「わかりました。確かにお預かりしました。帰った時にはお返しします」とお父さん。子供だった啓子さんも大事にし、可愛がります。食糧難の時ですが、ムツは大事な家族の一員です。食べ物を分け合ってがんばります。ところが、お父さんも招集されます。毎日、空襲があります。大和田家にも焼夷弾が落ちますが、利口なムツは母に知らせたおかげで家は焼けずに済みました。

(3)犬はどこへ消えたのでせう。そして、他の「動物兵隊」たち

この頃から、警察は「犬を供出せよ」と命令を出します。「規則を守らないと牢に入れる」と脅します。連れて行くと殺されてしまいます。警察ではこう言います。空襲などで犬が逃げ、人を襲ったりする。その前に殺してしまおうと。それで、どこでも犬狩りがやられた。大和田家も泣く泣く犬を警察に連れて行きます。このシーンは涙、涙です。ぜひ、読んでみて下さい。さて、最後のページです。



「週刊金曜日」（10月12日号）

〈父は、軍隊から、疲れきって帰ってきましたが、まもなく亡くなりました。若者はついに、帰ってきませんでした。今ごろムツと若者、父が、天国で再会しているだろうと思うと、胸がつまってまいります。

戦争は、もうイヤです〉

読んで分かるでしょうが、ここでは軍の話は出ていません。供出を求めたのはあくまでも警察です。「軍の関与」はありません。ただ、「あとがき」で大和田啓子さんはこう書いてます。

〈太平洋戦争の時、食糧難と空襲の時に、飢えた犬が住民に危害を加えるおそれがあるからと、犬の供出命令が出されました。そして供出した犬は無惨にも殺されたのです。当時、私は、大阪市内に住んでましたが、各地で同じことがありました。毛皮や缶詰になって、戦地に送られたというううわさもありましたが、犬たちが、どのような運命をたどったかは、私にはわかりません〉

でも〈噂〉ではなかったんです。テレビでは、ちゃんと犬皮の防寒着が紹介されてました。缶詰は紹介されてませんでしたが、どうなんでしょう。「犬缶」として送られ、兵隊さんは食べたのでしょうか。あるいは別の肉として缶詰にされたのでしょうか。知ってる人がいたら教えて下さい。

又、テレビでは、愛犬を攻撃用の軍用犬として訓練し、立派に国の為に死なせます、という軍の文章が紹介されている。ビデオを録り忘れたので、誰か、ビデオを録ってた人がいたら貸して下さい。又、その軍の文章は他に出てるかと思って、いろんな本を探しているのですがありません。図書館やネットで毎日、調べているのですが、ありません。分かったら教えて下さい。

さて、犬以外の動物です。鳩は伝書鳩以外にも爆弾を積んで敵を攻撃させる、ということも考えられました。あるいは風船に爆弾を入れて飛ばすとか。でも、うまくいかなかったようです。

〔イルカ〕

イルカは頭のいい動物です。機雷探知に使われてます。以前、イルカに爆弾をつけて、敵の船に体当りさせる作戦が映画でありました。実際に訓練されてもいるようです。ウィキペディアではこんな情報も紹介されてます。

〈ハリケーン・カトリーナの襲来によってテロリストに毒矢を射掛けるよう訓練していたアメリカ軍のイルカが逃げ出したとの報道があり話題となったが真相は不明〉

どうやって毒矢を射るのでしょう。両手を使うのかな。ウィキペディアには、他にもいろいろな「動物兵器」が紹介されています。

〔象〕

昔の映画には出てきますね。その破壊力で、敵をなぎ倒す。でも火器には弱く、標的になり易く、今では使われませんね。

〔牛〕

源（木曽）義仲が倶利伽羅（くりから）峠で牛の角に松明（たいまつ）を付けて敵に突入させた。これは有名な話で、子供の頃から聞いていた。しかし、史実かどうかは疑わしいという。中国・戦国時代の斉の武将田単は数百頭の牛の角に松明を括り付けて、敵の軍勢に放ったと伝えられている。これを基に、「義仲伝説」は作られたのかもしれない。

〔コウモリ〕

第二次大戦時、アメリカ軍は日本を空襲する方法の一つとしてコウモリの使用を検討した。小型のナパーム弾を括り付けたコウモリを夜明け前を狙って日本上空で放ち、日光を避ける習性のために木造の多い日本の家屋の屋根裏にとまったところで爆発させるという計画であった。しかし、運用に危険が伴うこともあり、実戦配備されることはなかったという。

〔ニワトリ〕

冷戦時代、イギリスが西ドイツ領内に核地雷の配備を計画したことがある。その際、地下に埋めてから起爆させるまでの数日間に電子部品が冷えて故障するのを防ぐため、ニワトリを餌と一緒に地雷の中に閉じ込め、その体温で電子部品を温めようとしたが、核地雷の配備自体が中止されたために実用化はされなかった。

〔ブタ〕

古代ローマが拡張していく過程で、他国との戦闘時に遭遇した戦象への対抗策として、ブタの背に油を塗り火をつけて敵に放ち、その火勢と絶叫をあげ走り回らせることにより、象を混乱させる戦術があったとされる。

〔ネズミ〕

現在アメリカ国防省において研究中の兵器。すでに研究室では成功している技術で、脳に電極を差してラジコンのコントローラーで操作する。背中にカメラを載せている。主に災害時の瓦礫の下敷きになった被災者救出のために利用する、とされている。脳の快楽物質の分泌を制御することによって調教し、操作するので、姿勢制御が不要で、ボディのメンテナンスが楽であり作動音もないため、ロボットよりも優秀な面が多い。

〔ネコ〕

1960年代、ＣＩＡによって、スパイ活動にネコを使う計画があった。「聞き耳ネコちゃん」作戦だ。ネコには小型マイク、電池、さらに尻尾にアンテナが埋め込まれている。ソ連大使館に出入りする人間を盗聴した。しかし、近くに連れて行き放たれた瞬間、通りがかりのタクシーに轢かれ死亡した。名誉の殉職だ。金がかかるわりに効果がないので中止されたらしい。

(4)なぜ、犬ばかりがいじめられんでしょう


弱者、虐げられた側の立場で
労働運動は歴史から学べ
鈴木
不安定な時代だからこそかえって労組は必要なはず
松崎
自分の利益を優先する風潮が弱体化を招いたんです
「月刊タイムス」（11月号）

はい、これが全てです。いや、これ以外にもあるんでしょうね。人間になついて、慕ってくる動物たちを利用して、〈殺人兵器〉にするなんて、人間の方が鬼畜です。ケダモノです。もう「政権交替」して、犬にこの地球を治めてもらった方がいい。「犬の惑星」です。あっ、「猿の惑星」というのがあったか。

どちらにしろ、犬に対してはキチンと「謝罪」しないといけないでしょう。これだけ人間を愛し、なつき、人間の心を癒し、危機を救い、戦争の時には国の為に立派に死んでくれた。彼らに対する感謝、謝罪がされてない。それに、いわれない差別、虐待をやってきた。〈言葉〉の上でも。「犬死」もそうだが、犬のつく言葉は酷い言葉ばかりだ。

『辞林21』（三省堂）によると、第１番目に「食肉目イヌ科の哺乳類。最も古くから家畜化された動物で、よく人になれ、番用・愛玩用・狩猟用・警察用・労役用などとして広く飼育される」とある。こんなに人間の為に働いてきたのだ。しかし、第２番目からは、ガラリと変わる。

〈2.（比喩的に）まわし者。スパイ。「警察のスパイ」〉

人間に忠実に生きてきたのに、いきなり「スパイ」呼ばわりはないだろう。でも、僕らも使ってきたな。『権力のイヌめ！」とか。本物の犬に申し訳ありませんでした。　この「警察のイヌ」たちは捕まり、査問され、埋められる。かわいそうだ。さらに「犬」の用例だ。

〈3.卑しめ軽んじて、価値の劣る志を表す。（犬侍）
4.似て非なるものの意を表す。（犬山椒）

5.役に立たないもの、むだであることを表す。（犬死に）〉

さらに、こんな言葉も紹介されている。

「犬の遠吠え」（憶病者が陰で空威張りすること）

「犬も歩けば棒に当たる」（物事をしようとしている者は思いがけない災難にあう）

「犬も食わぬ」（誰もとり合わないこと。多く夫婦喧嘩についていう）

なんちゅうことを言うんだよ。大恩のある犬たちに向かって。そう思いますね。小学館の『現代漢語例解辞典』には、さらにいろんな言葉が紹介されている。

〈「犬儒」ギリシャ哲学の一派の名。禁欲主義の貧しい生活を犬のような生活と言ったことによる　「犬馬の労」主君または他人のために力を尽くすことをへりくだっていう語〉　「犬」の意味としては、「イ.イヌ科の動物」の次に、「ロ.つまらないもののたとえ。相手をいやしめたり自分を卑下したりしていう」

とある。つまり、「自分のこと」も言ったんだ。もしかしたら、本当は人間で例えたかったんだろう。「鈴木のような卑劣な奴」「塩見のようなバカ」と。でも、それだと角が立ってマズイ。だから、いつも人間の側にいた犬を使った。うん、「こいつ（犬）のようなバカ」とか、「こいつ（犬）のような空威張り」とか。例えに使われた犬はただ、キョトンとしていただけだ。本当は怒らにゃならんのに。

犬は何も罪がないのに、罪をなすりつけられて、悪い言葉は皆、犬がらみになった。冤罪だ！許せんとよ。闘えよ！

【だいありー】



「月刊タイムス」（11月号）

(1)10月16日（月）カゼをひいて頭が痛い。寝ていた。原稿は布団の中で書いた。オラは病弱だな。犬ライターだ。夕方、東中野までメシを食いに行く。ポレポレ東中野で、「草の乱」と「郡上一揆」をやっていた。「郡上一揆」はまだ見てなかったので見た。ＪＲ東労組の人に声をかけられた。この映画に出た人たちだ。いい映画だった。百姓のために立ち上がるが皆、打ち首だ。悲惨だ。

帰り道、すれちがったネコの眼がキラリと光った。カメラを埋め込まれている。盗撮された。又、別のネコは尻尾をピンと立てているが、どうもアンテナを埋められている。盗聴ネコだ。「集団ストーカー」に私は狙われている。「彼ら」の秘密を暴露したからだ。ヤバイ。

(2)10月16日（火）東中野図書館で一日、調べものをしていた。体がまだフラつく。『月刊タイムス』の連載では「血盟団事件」のことを書いた。四元、池袋が安岡正篤から別れる過程で、重信末夫さん（重信房子さんの父親）の存在が大きかった。その事件について書いた。又、ＪＲ東労組の元委員長・松崎明さんと対談している。『月刊タイムス』は大きな書店にありますが、手

に入らない人は直接下記へ。（一部530円）

160-0022　東京都新宿区新宿1の31の7
新宿御苑ダイカンプラザ512号　月刊タイムス社
TEL 03（5269）8461　FAX 03（5269）8460

　それと、月刊『創』では、明治の自由民権運動家の植木枝盛について書いた。明治憲法が出来た時、民間の試案が50以上あった。その中でも最も過激なのが植木試案だ。「革命権」「抵抗権」「死刑廃止」まで言っている。120年も前にだ。今の左翼よりもずっと急進的だ。



（左から）鈴木、蓮池透氏、木村三浩氏（10月9日、一水会フォーラム）

(3)10月17日（水）２時40分、ジャナ専で「時事問題」の授業。教科書検定問題で沖縄で集会。主催者は「11万人」。産経は「４万人」で喧嘩。この問題について話をした。

(4)10月18日（木）昼、打ち合わせ。３時から河合塾コスモ。

(5)10月19日（金）原稿を書いてた。夜、芝居を見た。

(6)10月20日（土）７時。ロフトプラスワン。前田日明さんのトークに出た。高須さん、塩見さん、三上さんも出た。憲法の話をした。

(7)10月21日（日）12時から、東京ウイメンズプラザで映画「シロタ家の20世紀」を見る。ベアテ・シロタ・ゴードンさんを描いた映画だ。何とベアテさんも来て挨拶した。「この前は24条の話をありがとう。面白かった」と礼を言われた。土井たか子さんにも会って話をした。

【お知らせ】

(1)10月27日（土）一水会・岐阜レコン読者の集い。
　同じ日、午後７時から早見慶子さんの「ＩLOVE 過激派」の出版記念会があります。新宿の「東京ベリーニカフェ歌舞伎町店」です。会費は7000円。私は両方に参加しようと思います。無理かな。

(2)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。外山氏は罰金８万円の判決が下ったんですね。控訴するそうです。

(3)11月20日（火）新宿ジュンク堂（８Ｆ喫茶）でトーク。18:30より。『ＩLOVE 過激派』の早見慶子さん、それに『憂国論』の木村三浩氏。私も付録で出ます。入場料1000円（ドリンク付）。申し込みは７Ｆカウンターへ。03(5363)1300**（先週、「池袋ジュンク堂」と書きましたが、正しくは「新宿ジュンク堂」です）**

(4)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後2時より高田馬場のホテルサンルートで。第1部は追悼祭。第2部は記念講演。元楯の会五期生・山口良男氏が講演し、「わが青春の楯の会----三島由紀夫・思想の根源」です。

(5)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジ

ウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(6)12月12日（水）一水会フォーラム。大下英治さん（作家）です。

(7)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。（12月10日の予定は変わって18日になりました）。

(8)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園。故田中義三さん一周忌の集い。

(9)12月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のイベントで私も出ます。

(10)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

HOME

今週の主張

バックナンバー

「神の愛」か、「祖国への愛」か

今週の主張10月29日

(1) ニコライさんの厖大な日記が発見、刊行された



ニコライ堂で

ニコライさんのことを憶えてますか。今年の４月２日に書いてます。お茶の水駅そばにあるニコライ堂を造った人だ。とても偉い宗教家だ。明治時代、日本に来て布教した。日本を愛し、日本人を愛した。日本にとっても大恩人だ。日露戦争の時も、祖国ロシアに帰らず日本に留まって布教した。宗教は国境を越える。民族も、世俗の権力も超える。神の愛は普遍的だ。それを説き、実践した。

しかし、受難が待っていた。ニコライさんにも、日本の正教会信徒たちにも。「ロシアに帰れ！」「露探（ロシアのスパイ）め！」と日本人から罵られる。又、同じく「神の愛」を説くはずの他の教会（特にプロテスタント）から攻撃される。

ただ、「外圧」や批判、中傷はいくら強くともまだ耐えられる。神の使徒としての「受難」だからだ。だが、ニコライさんの心の中で奇妙な反応が起こる。普遍的な「神の愛」の前には「国家」や「ナショナリズム」は超えたはずなのに、何故か、ロシア人としての「愛国心」が疼（うず）く。不思議だ。こんな偉い宗教家にしてもそうなのか、と私は驚いた。ロシアが日本軍にやられている。その報を聞いて、日記に書く。

「君たちは一体どうなったのだ。いつまでもこんなままなのか。そうではないはずだ。ロシア魂はこのまま引き下がりはしないはずだ。立ち直るはずだ。きっと立ち直るだろう。陸上ではまだ戦闘は起きていない。陸上ではわが軍は日本軍を打ち破るだろう」（1904年３月11日）

「打ち破る」ということは日本兵を殺すことだ。こんなに偉い宗教家なのに「殺人」を期待し、奨励している。「愚かな戦争はやめなさい」「神の前では兄弟ではないか。国家が何だ。国境が何だ」…と言うのかと思ったら、違うんですね。それだけ「愛国心」の呪縛からは逃れられないのか。

ニコライさんは1861年、25才で来日している。50年間日本にいて、厖大な日記を書き残している。伝道の記録だけでない。自分で目にした日本各地の様子、日本の庶民の生活なども詳しく書いている。それと共に、日露戦争時の苦悩も赤裸々に書いている。〈宗教と国家〉という永遠のテーマに向き合い、考え、苦しんでいる。いろんな本に出ているが、特に中村健之介の『宣教師ニコライと明治日本』（岩波新書）が詳しい。

ともかく、ニコライさんのこの「日記」は歴史上も、第一級の資料だ。

このことを書いたのが今年の４月２日のＨＰだ。そして何と、その４ヶ月後のことだ。産経新聞（８月３日付）に大々的に出てました。こんな記事が。

〈ニコライ大主教、日本での布教日記刊行。
日露の狭間で苦悩…。
明治の生活いきいき〉

そして、こう書かれている。

〈日記の原本は、関東大震災で焼失したと考えられていたが、大妻女子大の中村健之介教授が79年、レニングラード（現サンクトペテルブルグ）の歴史古文書館にあるのを突き止め、18人の訳者とともにようやく全訳を果たした〉

そうか。やっぱり中村健之介さんか。『宣教師ニコライと明治日本』(岩波新書)を書いた人だ。じゃ、この新書は、「日記」を完訳してる最中に書かれたのか。

(2)エッ、これがドストエフスキーの日本観か！



ニコライさん

しかし、大変な作業だ。訳者は18人だという。日本での布教活動を詳細に記した約40年分の日記を全訳したという。そして、このほど刊行された。

『宣教師ニコライの全日記』（全９巻・９万9750円）がそれだ。うーん、読んでみたいが、高い。でも、40年間の「全日記」だ。この値段も仕方ないだろう。

〈日記には一時帰国した際、文豪ドストエフスキーと対面したときの様子や、日露戦争開戦時に日本に残ったものの両国の狭間で苦悩する日々、さらに日本の庶民の生活などがいきいきと描かれている〉

岩波新書には「日記」のエッセンスが載っている。でも百分の一にもならないだろう。ただ、「両国の間で苦悩する日々」についてはよく出ている。だが、「ドストエフスキーとの対面」は出てなかったように思う。この部分だけでも読んでみたい。そう思ったら、産経新聞に、「ニコライの日記から」として、少々、引用し、紹介している。これは嬉しい。

〈1880年６月１日。モスクワ
ドストエフスキーが来ていて、会った。
日本については「あれは黄色人種ですからね。キリスト教を受け入れるにあたって何か特別なことはありませんか」と訊いた。やわらかみのない、よくあるタイプの顔。目が熱っぽく輝いていた〉

これは意外だ。ドストエフスキーは日本人に対して冷たい。日本人は皆、ドストエフスキーが好きなのに。日本人が世界で一番、読んでるんじゃないかな。きっと、ロシア人よりも読んでるかもしれない。日本人は皆、文句なしに、ドストエフスキーこそ「世界最大の文学者」だと思っ

ている。
　最近、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の新訳が出た。とてもいいようだ。全４巻かな。河合塾に勤めている高城さんは読んだという。偉いね。こういう勉強家が私の傍には何人かいる。
　こういう人は人生の宝だ。知的刺激を受ける。私もじゃ又読んでみようかという気になる。「喫茶店で読んだの？」と聞いたら、仕事にでる時に持って行って、電車の中や駅のベンチでひたすら読んだという。ほとんど一気に読んだという。感動した。山手線を何十周もして読んだんだろう。又、河合塾コスモの生徒で読んだという人がいた。偉い。先生の私も負けちゃおられんな。
　見沢知廉氏もドストエフスキーは好きだったね。特に『悪霊』だ。こういう古典だけでも、皆は読んだらいい。現代小説なんて読まなくっていいよ。と私は思う。それくらい日本人はドストエフスキーを愛し、読んでいるのに…。本人は「あれは黄色人種ですからね…」はないだろう。こんな部分はむしろ、訳さないでほしかったね。

　では、1893年４月21日の日記から。敦賀で。

〈信心深い日本人はその仏壇の中を信仰にふさわしい状態に保つためによく気を配っている。…ここから偶像を追い出して、イコンを納めるために仏壇を使わない理由があろうか？〉

　うーん、布教者としての「冷静な戦略」「本音」が出てますね。お茶の水に建てた巨大なニコライ堂だって、「大きな仏壇」のようなものですからね。他宗派と違ってロシア正教は、建物は立派、儀式も荘厳。そうした様式美が日本人にフィットしたのでしょう。「仏壇なんか焼いてしまえ！」という宗派もいますが、ニコライさんはそんな乱暴なことは言わない。信心深く、仏壇を大切にする日本人の気持ちを大切にする。（冷たい言い方をすれば）その気持ちを「利用する」。そして信者を増やしたのだ。

　では、日露戦争が起きてからの日記だ。

1904年１月24日

〈日本の天皇がロシア公使ローゼン男爵に対し日本退去を命じたというニュースの載った号外を持ってきた。つまり、日本とロシアとの戦争が始まろうとしているということだ。いかにすべきか。利己心からいえば、ロシアへ帰りたい〉

(3)かつては捕虜を厚遇した日本人が、何故に…


日露の狭間で苦悩…
明治の生活いきいき
ニコライ大主教 日本での布教日記刊行
産経新聞（8月3日付）

そして翌日、１月25日だ。

〈（信徒を前に）あまりにも若いこの教会を監督もせず放置してしまうというひそかな欲求を自分が持ったことで、良心が痛んだ。それで、わたしは断固として、かつ喜んで、留まる決心をした〉

ここは、ちょっと意外だった。日本は戦争が始まる時、ロシア公使に日本退去を命じた。これは当然だろう。しかし、ロシア正教のニコライ大主教には何も言ってこない。これは不思議だ。それだけ日本政府は寛容だったのか。あるいは宗教者は「戦争に関係ない」と思ったのか。他の国ではこんな時、たとえ民間人でも厳重に監視される。一ヶ所に集められ、隔離され、監視される。それをしてないのだ。

それと、ニコライさんの悩みだ。初めから、毅然として日本に留まったのかと思った。「宗教者にとって戦争は悲しむことだ。しかし、どちらにも肩入れしない。戦争している（愚かな両国民）を見て、「争いをやめなさい。神の愛に立ち返りなさい」と説くのかと思った。ところが大主教のような偉い人でも「利己心」はある。そして、「ロシアへ帰りたい」と言う。

ところがだ。「日本人信徒」のために日本に残ることを決意する。そこに至るまでの苦悩も書かれていて、正直だ。人間的だ。しかし、留まったニコライさん達を批判する人は多い。同1904年２月６日の日記だ。

〈日本の新聞も英語の新聞も…すべてが、日本礼賛と、ロシアは今度の日本との衝突において不利な状態にあるという意地悪い喜びとで、満ち満ちている。…どの国もロシアを憎んでいる！〉

でも、戦争をしている「敵国」の真只中にいるんだ。そんなことは覚悟の上じゃないか。試練として受けとめたらいい。まあ、本人も、日本人からのバッシングは予測しただろう。だが、耐えられなかったのは、日本にいるほかの国々の宗教者からの中傷・非難だった。「どの国もロシアを憎んでいる！」は悲しいね。

産経の記事の中では、こう書かれている。

〈日露戦争時も、宣教団責任者として敵国日本に残り、各地の捕虜収容所にいたロシア人兵８万人の慰安に努めた。明治45（1912）年に死去。遺体は東京・谷中の墓地に葬られた〉

ロシア人の捕虜は８万人もいたのか。凄い数だ。それに、日本人の偉いのは、このロシア兵たちを国際法に則り、いやそれ以上に適正に遇したことだ。いや、「優遇」「厚遇」したといっていい。「よく闘った。力尽きて捕虜になつたのだ。それは屈辱ではない。むしろ名誉だ」といって、キチンと遇したのだ。捕虜収容所といっても、かなり自由で、街を自由に歩いたりできた。日本人も、戦いが終わると、敵愾心も捨て、ロシア人に親切にした。これは日本の歴史上、特筆すべきことだ。日本人の誇りだ。

第一次大戦で日本も出兵し、ドイツ兵などの捕虜が日本に来た。映画「バルトの楽園」などにも描かれている。他国では見られない厚遇だ。捕虜たちは自治を許され、パンをつくったり、音楽をやり、街の市民を招いて音楽会をやっている。市内を歩くのも、ほとんど自由だ。

こうした、日本人の優しさ、寛容さは素晴らしいことだ。多分、〈外国の目〉を気にしたのだ。ということもある。「おくれた国と思われたくない」と。だから、かなり背伸びして、無理

をしても、捕虜を厚遇した。でも、これはいいことだ。

ところが、大東亜戦争になると、その「優しい日本人」が一変する。捕虜を厚遇する〈余裕〉がなくなったのだ。アジアの各地で「捕虜虐待」事件を起こす。又、自国の兵士に対しても、「捕虜になるな！」と厳命する。かつては、ドイツ、ロシア兵は「立派に戦った。だから、捕虜になるのは屈辱ではない。名誉だ」といって厚遇したのに、今度は、自国民に「生きて虜囚の辱めを受けず」と厳命する。それどころか、武器もなく、食糧もない状態にもかかわらず、「突撃」を命じ、「玉砕」を命ずる。もうこれは、かつての日本人ではない。日本人が劣化したのだ。

(4)ニコライさんや信者たちのことをもっと知りたい



ニコライ堂

ニコライさんに話を戻す。苦悩しただろう。祖国と日本の狭間で、悩み、苦しんだだろう。でも、この時代でよかった。日露戦争の時でよかった。いい日本を見ることが出来た。いい日本人を見ることが出来た。これが大東亜戦争の時だったら、大変だった。日記を残そうという意欲も生まれなかったろう。ニコライさんは、あの時代だからこそ、日本を愛し、あえて日本に留まって、そして人々の中に入りこんだ。幸せだったろう。この日記をまとめた中村健之介教授は言う。

「ニコライは漢文やお経、古事記が読めるほど日本語を学び、浄土真宗に共感を持っていた。日記を読むと、大規模な集会を開いて宣教するのではなく、農民などの庶民の間に入っていき、日本人のメンタリティを保持しながら信仰することを認めていたことが分かる」

なるほど。ニコライさんの考えも〈日本的〉になってきたのか。「日本的なもの」というのは、元々のコアはあるが、外国のものを〈ほとんど無制限に〉受け入れ、それで成り立ってきた。古くから、中国、朝鮮の文化を受け入れ、又、ヨーロッパ、アメリカの文化を受け入れた。ロシアの文化も受け入れた。

そうした混成文化としての日本文化を認め、その上でロシア正教の布教をした。だから、今に至るまで、日本人に慕われている。ニコライ堂も東京名物になっている。

それに、「遺体は東京・谷中の墓地に葬られている」という。これも驚きだ。それほど日本を愛したのだ。もし、これが日本人なら、何が何でも遺骨を祖国に持って帰るだろう。「敵国に置いたままにするなんて許せん」と思うだろう。その点、さすがは宗教者だ。偉い。宗教は国境を越える。軽々と。そこに感動した。

では当時、ロシア正教の信者はどのくらい日本にいたのだろうか。ニコライ死去前年の明治44年の信徒数は約３万2000人だという。多い。それに、教会は265を数えたという。これも多い。

この数は「当時のカトリック教徒の規模に匹敵する」と「日記」を出版した教文館の渡部満社長は言う。さらに渡部社長は言う。

「革命でロシアからの資金が閉ざされたために衰微したが、明治期にニコライが精力的に布教に努めたことが分かる。日本の（ロシア）正教受容の実態に光を当てる貴重な日記だ」

その通りだ。日本におけるカソリックやプロテスタントの布教の歴史は、これまでにいくらで

も書かれている。信長、秀吉、家康から始まり、随分と長い。時には受け容れられ、時には迫害され。しかし、その実態はかなり詳しく書かれ、記録に残されている。しかし、カソリックと同じ信者数を持ったロシア正教については我々は何も知らない。ニコライの名前は、「ニコライ堂」がらみで、かろうじて知っていても、何をした人か知らない。ましてや、３万人の日本人信者は何を考え、どう行動したのか。彼らの信仰の喜び、悩みも知らない。つまり、〈日本〉のことを知らないのだ。だから貴重な日記だ。読んでみたい。

その為にも、もっともっと仕事し、働かなくちゃ。10万円貯めて、この本を買ってみたい。読んでみたい。

そうだ、最近、日露戦争がらみで感動的な本を読んだ。前に読んでたが、その時は余り問題意識がないから、スーッと頭の中を過ぎていたのだろう。でも今回は違う。ニコライさんの悩みや、「捕虜厚遇」のことを考えていたので、「そうだったのか！」と驚きながら読んだ。吹浦忠正の『捕虜たちの日露戦争』（ＮＨＫブックス）だ。これは実にいい本だ。帯にはこう書かれている。

「もうひとつの日露戦争。なぜ、捕虜を厚遇したのか！　先進国入りを熱望する両国の内情と苦心…。新たに発掘された一級資料を駆使して日露戦争の真実に迫る貴重な一書」

2005年に出ている。1020円だ。吹浦さんは1941年、秋田生まれ。早大政経の大学院卒だ。じゃ、私と同じ時期に早稲田にいたんだ。それに秋田出身か。会ってみたい。

本の帯に「両国」と書かれている。ロシアも「先進国」になろうと必死に国際法を守り、日本人の捕虜を厚遇したのだ。こんなことは全く知らなかった。大東亜戦争後のシベリアの抑留しか僕らは知らない。なんて酷い国かと思っている。しかし、日露戦争の時は、日本に負けじと、捕虜を厚遇した。「シベリア抑留とは雲泥の差」だと書いている。

驚いたことに、日本人で捕虜になり、ロシアで収容されてる人の名前は日本軍も公表した。そして、内地の日本人が、「がんばって下さい」と励ましの手紙を書いたという。勿論、捕虜になって恥ずかしいと思った人はいた。しかし、大東亜戦争のように、「捕虜になる位なら死ね！」と死を強制する圧力はない。日本人も優しかったのだ。

〈わが国で「捕虜となるのは恥辱」という発想がでてきたのは武家社会以降である。それが特に強く、意識されるようになったのは日露戦争以降、とりわけ昭和になってからである〉

この言葉は極めて重い。重要だ。この問題は「玉砕の思想」とからめて、又、考えてみよう。この本には、ニコライさんのことも書かれている。日本にいるロシア兵捕虜の慰安に努めたという点だ。

ロシア人捕虜たちには、遠く本国から、又日本各地からさまざまな慰問品が寄せられた。中でも、聖像２万1922、十字架７万0792などはニコライさんを中心とする日本のロシア正教の信者たちから贈られたものだった。

〈開戦当時68才のニコライは駐日ロシア公使ロマン・ローゼン男爵からの強い帰国要請をも断り、ただ一人のロシア人として、日露戦争下の日本に残った〉

〈反露機運が横溢する中で、ニコライ自身は聖堂から外に出ることはできなかったが、正教徒たちは懸命に捕虜を支援した。1898年（明治31年）の内務省による調査では、当時、日本のキリスト教徒はカトリックが最大で５万3924名、ついでロシア正教徒２万5231名、組合教会（プロ

テスタント）以下がそれに次いでいた。ロシア正教徒の勢力や影響力は今よりはるかに大きかったことがわかる〉

では、おわり。この問題は、これからも考えていきたい。

【だいありー】



前田日明さん、高須基仁さん、鈴木（ロフト。8月20日）

しかし、テレビ局が一番悪いんだよ。亀田問題だ。わざと下劣な敵愾心を煽り、大袈裟なパフォーマンスをさせる。「殺してやる！」とか「ゴキブリめ！」とか事前に言わせる。プロレス化している。政治討論番組もそうだ。普段、おとなしい政治家や評論家も（バラエティ化した）政治討論番組に出ると、「自分も何か怒鳴らなくちゃ」とか、「場を盛り上げなくちゃ」と思う。それで怒鳴る。そんな〈空気〉があるのだ。いかんよな。

それに「処分」のことだ。すぐ、「出場停止」にする。「一年間出場停止」とか。朝青龍だって「二場所出場停止」だ。これはないやね。この時優勝した力士も、「朝青龍がいないから優勝できた」と思うと、心苦しいだろう。又、成長期の亀田を一年間も試合させない。酷だ。

だから、二人とも試合させたらいい。そこで潰してみろよ。それをやろうという力士、選手もいない。情けない。「処分」するなら、朝青龍は十両に落とす。亀田は３回戦ボーイに落とす。そこから這い上がって来い！といった「処分」の方がいいと思う。

(1)10月22日（月）一日、原稿を書いてた。

(2)10月23日（火）図書館に行く。仕事がはかどらない。能力がないからだろう。努力してるつもりなのに…。



何故か皆で「インター」を歌った（ロフト。8月20日）

(3)10月24日（水）２時40分、ジャナ専で「時事問題」の授業。沖縄の「集団自決」の話をした。

７時から四谷のスクワール麹町。福島みずほさんの出版記念パーティ。パーティの前に、みずほさんと雨宮処凛さんとのトーク。お二人は『ワーキングプアの反撃』（七ッ森書館）で対談している。私も読んだ。いい本だ。

トークでは、みずほさんが、「雨宮さんは元右翼というので初めギクッとしたんですが…」。でも今は大ブレイクだ。大作家だ。同じ「元右翼」でも、どうしようもない奴がいる。アホがいる。もう終わっちゃった奴だ。私ですよ。

パーティでやけ酒を飲んでたら、市民運動のおばさんに声をかけられた。「鈴木さんも元右翼なんでしょう。じゃ雨宮さんを紹介しますよ」。ウーン、困ったね。「いえ、一度、会ったことがありますから」と言った。おばさんは気を悪くしたようだった。人の好意を無にしちゃいけんな。ちゃんと紹介してもらえばよかった。

ポラロイドで、みずほさんが皆と写真を撮っている。オラもミーハー気分で撮ってもらった。佐高信さん、中森明夫さんに会った。会場は超満員だった。みずほさんはやる気満々だった。「新生みずほで頑張ります」。新生みずほ銀行みたい、と本人も言っていた。辻元清美さんは

「初めてスカートをはいた」と言っていた。それで一緒に記念撮影をした。グリーンピースの星川淳さんにも会って、捕鯨のことなど、いろいろ話をした。



（左から）鈴木、小坂浩彰さん、蓮池透さん（10月9日・一水会フォーラム）

(4)10月25日（木）11時、高田馬場で取材される。「集団自決」について。３時から河合塾コスモ。３時、「現代文要約」。５時からの「基礎教養」ゼミでは藤巻一保の『吾輩は天皇なり＝熊沢天皇事件』（学研新書）をテキストに話をした。

(5)10月26日（金）２時、四谷の主婦会館。来年５月４日～６日に幕張メッセで１万人の「９条世界会議」をするそうだ。その記者会見。興味があったので見に行った。8.15に東京新聞で対談した品川正治さんに会った。ジャン・ユンカーさんにも。

(6)10月27日（土）岐阜の一水会フォーラムに行く。貧乏だし、仕事が忙しいので行かないつもりだったが、岐阜の花房氏より電話。「来なさいよ。会うのはこれが最後だから」。不吉なことを言う。それで脅迫されて行って来た。会って写真だけ撮って帰ろうとしたら、引き止められた。今日中に原稿が二つあって、７時に出た。東京に10時に着いた。あっ、そうだ。早見慶子さんの『I LOVE 過激派』の出版記念会があった。電話したら、今、二次会だというので参加した。70人位だが、この時、残っていたのは15人。凄い。本が面白いからだし、どんどん売れるだろう。

【お知らせ】



高木尋士さん、鈴木、ベアテさん（10月12日）

(1)安明進さんが何と、執行猶予付き判決で釈放され、謝罪会見をした。韓国で覚醒剤を使用し、売買したとして逮捕され、「懲役４年６月」の実刑判決を受けたが、今月19日の控訴審判決で「懲役３年、執行猶予６年」に減刑され、即日釈放された。

　このＨＰで私も書いたが、これは北朝鮮の麻薬ルートを探っていて、その過程で捕まったのだ。だから、１年かその位で出て来る。と書いたが、もっと早かった。やはり、いろいろと裏がありそうだ。

(2)今出ている『ＳＡＰＩＯ』（11月14日号・小学館）は、「永遠に残したい名作戦争映画１００」の特集。私も協力して、アンケートを出しました。これは面白い企画です。読んでみて下さい。

(3)11月２日（金）ネーキッドロフト。外山恒一氏のイベント。外山氏は罰金８万円の判決が下ったんですね。控訴するそうです。

(4)11月20日（火）新宿ジュンク堂（８Ｆ喫茶）でトーク。18:30より。『I LOVE 過激派』の早見慶子さん、それに『憂国論』の木村三浩氏。テーマは「生きること、死ぬこと」。私も付録で出ます。入場料1000円（ドリンク付）。申し込みは７Ｆカウンターへ。03(5363)1300。先着40名だから早く申し込んだ方がいいでしょう。

(5)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後2時より高田馬場のホテ

ルサンルートで。第1部は追悼祭。第2部は記念講演。元楯の会五期生・山口良男氏が講演し、「わが青春の楯の会----三島由紀夫・思想の根源」です。

(6)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、 「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(7)12月12日（水）一水会フォーラム。大下英治さん（作家）です。

(8)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。（12月10日の予定は変わって18日になりました）。

(9)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園。故田中義三さん一周忌の集い。

(10)12月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のイベントで私も出ます。

(11)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

HOME

今週の主張

バックナンバー

47年前の暗殺。＝全てはここから始まった＝

今週の主張11月５日

(1)学生道場と飛田給。「生長の家」の同志だった



花房東洋氏（右）と最後の写真

花房東洋氏に「脅されて」岐阜に行って来た。10月27日（土）に、「一水会岐阜フォーラム」が開かれた。花房氏は受け入れ側の責任者だ。東京から木村三浩・一水会代表ら５人が行った。向こうは20人だ。僕は欠席した。いや、欠席の予定だった。ところが、直前に花房氏から電話がかかって来た。「必ず来て下さい。これが最後だから」。

それで、仕方なく行った。「これが最後」って、どういう意味だろう。聞こうと思ったけど、やめた。恐かった。僕は当面、死ぬ気はない。とすれば、花房氏が自決する予定なのか。だったら、生前に記念写真を撮っておかなくてはならない。「最後の言葉」も聞いておかなくては。

あるいは、と思った。花房氏には特殊な能力がある。昔、宗教団体で長期修業して、その神秘的能力を身につけた。だから、人の未来や死相も見えるのかもしれない。それで、「最後」と言ったのか。縁起でもない。やはり、触れないでおこう。解明したくない〈謎〉は人生に一杯ある。

午後２時過ぎに岐阜護国神社に着いた。すぐに花房氏と写真を撮った。「野村秋介さんも亡くなる直前に、ここで写真を撮ったんです」と言う。「青年日本の歌」の顕彰碑の前でも撮りましょうと、そこでも撮った。「青年日本の歌」というのは、一般的には「昭和維新の歌」として知られてる歌だ。5.15事件の決起将校・三上卓さんが作った歌だ。花房氏は三上さんに師事していた。

写真は撮ったので、「仕事」は終わった。帰ろうとしたら、とめられて、フォーラムに出席させられた。木村氏の講演、花房氏の挨拶、質疑応答、そして、懇親会…と。私も挨拶をさせられたので、花房氏の「思い出」を語った。

実は、花房氏との付き合いは長い。何と、40年前に知り合っている。花房氏は三上さんに師事していたといったが、愛国運動のスタートは、「生長の家」だった。

僕は「生長の家学生道場」に入っていた。花房氏は京王線・飛田給にある「生長の家」の錬成道場にいた。そこには、病気を治したいとか、真理に触れたい、あるいは、いろんな悩みを抱えて苦しむ人々がやってきた。毎月10日間の「一般錬成」があった。他には大学生錬成、高校生錬成もあった。僕は高校生錬成、大学生錬成で何度も行った。花房氏は長期の練習生だった。

後に国会議員になる村上正邦さんは「一般錬成」に来た。そこから入信し、「生長の家」から選挙に出る。

学生道場は、都内の大学生だけ30数人いた。毎日、修行をし、さらに「生長の家」の行事には駆り出されていた。時は1960年代の後半だ。左翼運動が盛んだ。「日本の共産革命を阻止しなくては」と「生長の家」でも大々的に運動をしていた。街頭で演説をし、ビラを撒き、又、各大学に行って左翼学生と対決した。学生道場は人数が多いし、行動力があるので重宝された。

そんな時、学生道場、飛田給、生長の家本部の三者で、「特別行動隊」が組織された。日本の危機に備え、集団行動・訓練をするのだ。さらに、「お山を護る」ということもあった。谷口雅春先生は原宿のちょっと小高い所に住んでいた。我々信徒はそこを「お山」と呼んでいた。共産革命が起こった時、そこを襲われる。だから生命をかけて護るのだ。そういうことだった。

「まさか」と思うかもしれない。宗教団体の総裁の家を左翼が襲うはずがないと。今では信じられないが、当時は、「生長の家」は愛国運動の中心だった。政治的、思想的、社会的に日本の愛国運動をリードしていた。その辺のことは魚住昭さんの『証言・村上正邦。我、国に裏切られようとも』（講談社）に詳しく書かれている。だから、危機感は単なる杞憂ではない。

学生道場の学生、飛田給の練習生、本部職員。この三者連合で、何度も集まり、協議し、訓練をした。学生道場は学生だ。親の仕送りで大学に行ってる。その点、あまい。飛田給の練習生というのは、シビアーな人達だった。何ヶ月も、あるいは何年も飛田給にいる。そこで修行している。そういうと真面目な修行僧のようだが、違う。刑務所帰りとか、ヤクザ、不良、チンピラ…そういう人々が大勢いた。又、野尻さんという網走刑務所帰りの人がいて、そこのボスだった。

勿論、改心して、生長の家に入ったのだが、一種、独特の〈凄み〉があった。「網走番外地は俺がモデルだ」と言っていた。又、後に野尻さんの手記を基にしたヤクザ映画も作られていた。とてもいい人で、私もお世話になった。

野尻さんは面倒見のいい人だった。「家の息子は、手がつけられない不良だ」「鑑別所帰りで、荒れている」…そんな不良が、ドッと来ていた。親が連れて来る人もいるし、自分で来る人もいる。その中に花房東洋氏もいた。

三者連合の「特別行動隊」の訓練でも、彼らは、ちょっと〈異様〉だった。学生道場、本部職員は信仰を持ち、真面目にこの国のことを考えて、日本の危機に対処しようとしている。

でも、飛田給の人達はちょっと違う。大いに違う。「何でこんなチンピラ、不良どもと一緒に訓練をするんだ」と思った。口には出さないが、思った。

その当時のことを花房氏はよく憶えていて、会うたびに言われる。「鈴木さん達は学生だからエリートだ。それで、僕らのことを、“何だこの不良どもが”という目で見ていた。いじめられた」…と。そんなことはしなかったと思うけど、でも、心を読まれていたのだ。

(2)山口二矢を突き動かした谷口先生の本



浅沼さんの遺影の前で

岐阜でも、花房氏のそんな「生前の思い出」を語った。「あっ、この前は谷口先生の本をありがとうございました」と言った。数カ月前、谷口雅春先生著『天皇絶対論とその影響』（光明思想普及会）という本を譲ってもらったのだ。昭和16年発行の本だ。僕が生まれる２年前だ。今から66年前に出た本だ。

この本は絶版で、どこにもない。ネットの古本屋にたまに出るが、やたらと高価だ。花房氏が持ってると聞いて、おがみ倒して、もらった。「形見分け」のようなものだ。

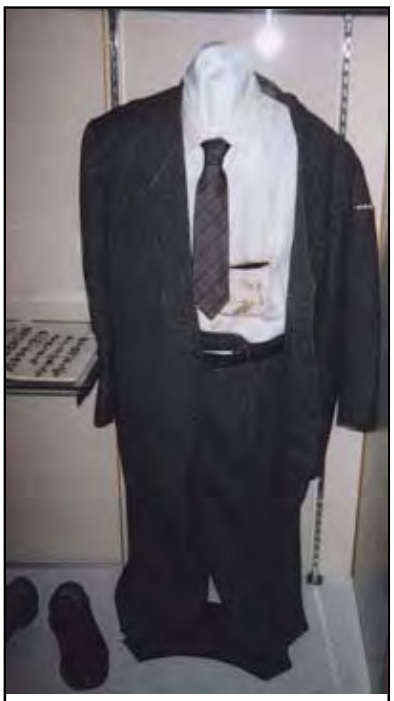
この本は、「生長の家」信徒だけでなく、世の愛国者たちに甚大な影響を与えた。後々までも。この本が発行されてから、19年後の昭和35年（1960年）。社会党の浅沼稲次郎委員長は、愛国党の17才の少年・山口二矢（おとや）によって刺殺される。この時は、愛国党を飛び出してから、事件を起こしている。しかし、愛国党の赤尾敏総裁の影響力は大きい。それと共に、あるいは、それ以上に谷口先生の影響もあった。山口二矢は谷口先生の『天皇絶対論とその影響』を読んでテロを決意した、と供述していたからだ。

もっとも、この本は、テロを教唆した本ではない。あくまでも〈天皇信仰〉について書いている。でも山口少年は、この本を読み、悩みから解放され、決意した。　沢木耕太郎の『テロルの決算』（文春文庫）には、こう書かれている。

「彼には思想の根がなかった。少なくとも彼にはそう自覚されていた。左翼に対する反撥心だけでは、ギリギリのところで不安になる。自分自身がよりどころにする根が必要になってくる。かつてはそれが赤尾敏であり、愛国党であった。今やそこから遠く離れ、より普遍的な根を必要としていた。

そのような時、二矢はこの本を読んだのだ。そこに天皇をあらためて発見した。『天皇絶対論とそのエ影響』は、根を求め、道を求め、絶対的なものを欲している若者には、自分自身にも不思議なほど、心の奥深くまで喰い入ってきた。

《私はこの本を読んで今まで自分が愛国者であることを誇りにもち、自分の役割が国家にとって重要なものであると自負していたことに深く恥じ、私心のない忠というものでなくては本当の忠ではないと思いました。今まで私が左翼の指導者を倒せば父母兄弟や親戚友人などに迷惑がかかると考えたことは私心であり、そういうことを捨てて決行しなければならないと決心しました》」



事件当日着ていた服（血がついている）

迷ってる山口少年の背中を押したのだ。この事件の時（1960年）、私も17才だった。高校２年だった。仙台の高校で、ボーッとしていた。国のことなんて考えてない。自分がこの厳しい学校からいかにして脱出するか。それしか考えてない。脱出して、どこでもいいから東京の大学に行きたい。そこには〈自由〉があると思っていた。

そんなセコイ、自己中心主義のガキだった。それなのに同じ年の人間が、「国のために」人を殺し、自決する。なぜなんだ、と思った。それに、谷口先生は、山口少年の行動を認める発言をしていた。さらに、山口少年は谷口先生の本を読んで「絶対の忠」に目覚め、行動した。それが分からなかった。

その「疑問」「謎」が後に、私が右翼青年になる契機になる。

(3)浅沼さんの追悼集会で再確認したこと



当日持っていた万年筆など

話は変わる。岐阜に行く少し前、10月12日に、「故浅沼稲次郎社会党委員長追悼の集い」に出席した。永田町の憲政記念館だ。旧社会党ゆかりの人々が集まり、超満員だった。47年前のことを、もう一度、考えたくて出席した。60年の事件のあと、私は右翼になるが、かといって、浅沼さんが嫌いなわけではない。むしろ、好きだし、尊敬している。立派な人だと思っている。

この日、会場の後ろには浅沼さんの遺品も展示されていた。事件の日、着ていた服、ワイシャツ、靴などだ。ワイシャツの左には血の痕も。生々しい。47年も前なのに。正確に心臓を目がけて短刀を構え、体当たりしたのだ。

又、この日、浅沼さんが持っていたボールペン、名刺、身分証明書なども展示されていた。「この日の為に、特別に頼み込んで展示させてもらいました」と社民党の人は言う。「じゃ、今まではどこにあったんですか？」と聞いたら、「憲政記念館の地下の倉庫にずっと眠ってました」と言う。もったいない話だ。「浅沼稲次郎記念館を作って展示しなさいよ」と私は言った。



浅沼さんのハンチング、ステッキ

この日の集会だが、実に感動的だった。今の社民党の人だけでない。民主党に行った横路孝弘、江田五月さんもいる。新社会党を作った矢田部理さんもいる。元首相の村山富市さんもいる。普通なら同席しない人々だ。浅沼さんが呼んだのだ。

浅沼さんをずっと取材していた今津弘さん（元朝日新聞論説副主幹）の話がよかった。「大衆政治家・ヌマさん」の姿を彷彿とさせる。浅沼さんは死ぬまで下町のアパート住まいだった。取材で行くと、「二人で銭湯に行ってらっしゃい」といって奥さんが手拭いとシャボンを渡してくれたという。シャボンというとこがいいね。石鹸ですよ。（注：元々はポルトガル語なんですな。sabao）

浅沼さんは着流しで、よく犬を連れて散歩に行った。犬が好きだった。それでなのか、ウォルト・ディズニーの「ワンワン物語」には、頼まれて声の出演をしている。愛すべき大衆政治家だ。



愛犬と散歩する浅沼さん

先日、新宿のジュンク堂で本を探していた。別の本を探していたのだが、この時、「人間の記録」シリーズ（日本図書センター）というのが並んでいた。そこに『浅沼稲次郎』があった。手に取って頁を開いた。写真がある。アッと思った。愛犬「太郎」を連れて散歩している写真だ。昭和34年。殺される１年前だ。堂々とした体躯。着流し。サンダル履き。

「まるで西郷さんじゃないか」と思った。上野の西郷さんにそっくりだ。

そして、突飛なことを考えた。もしかしたら、土井さん（社民党元党首）は、浅沼さんに西郷さんを見てたのではないか、と。

ちょっと説明する。「週刊金曜日」（10月12日号）で佐高信さんと対談をした。「右翼も左翼も西郷隆盛を好きなわけ」というタイトルだ。右翼は皆、西郷さんが好きだ。そこから頭山満の玄洋社

も始まったし、いわば右翼のルーツだ。右翼のリーダーは皆、「小・西郷」になろうとする。

でも、佐高さんが言うには、左にも西郷好きは多いという。佐高さん本人もそうだし、『西郷隆盛伝説』（角川学芸出版）という本も出している。そして、こう言う。

〈土井たか子さんも尊敬する人は西郷隆盛だと言うんですよ。どこがいいんですか、と聞いたら、茫洋とした感じ、物事を決める上で捨て身なところだという。西郷は勝者にして敗者でしょう〉


ベアテさん（右）と

この対談の時は、へエーと意外に思っただけだ。10月12日の「浅沼委員長追悼集会」で土井さんも挨拶していた。その後、ジュンク堂で『浅沼稲次郎』の写真を見て、きっとそうだと思ったのだ。浅沼さんはまさに西郷だったんだろうと。確信を持った。

この集会のあと、横浜に行った。ベアテ・シロタ・ゴードンさんの講演を聞きにだ。４月にニューヨークで一緒に憲法討論会をやったし、来日してるので、これは会わなくちゃと思ったのだ。それに頼まれたものもある。その話は、「創」（12月号）に詳しく書いたので見てほしい。

ベアテさんは日本国憲法の第14条、第24条を書いた人だ。「男女の平等」だ。ニューヨークで会った時、「憲法24条の歌」が日本にあると聞いたけど…と言う。「えっ、ないですよ。そんなもの」と言った。「そんなもの」とは言わなかったな。「聞いたことはないな」。少し考えて、ウーン、そういえば…と思い出した。「あったら、ぜひ探してほしい」という。自分が作った憲法24条を讃える歌が日本人に歌われている。胸が騒ぐのだろう。「ともかく探してみます」と言って、帰国した。

それから半年。探しに探しまくって、やっと見つけた。そしてＣＤに焼いて、この日、ベアテさんに持って行って渡した。でも、「こんな軽い歌なの？」とガッカリされるんじゃないのか。だって守屋浩が歌ってたんだし。しかし、僕の責任じゃない。ともかく渡した。「ニューヨークの約束」は果たした。

(4)ベアテさんは喜んでくれた。安心した


土井たか子さん（左）と（10月21日）

そして、９日後。又してもベアテさんに再会した。東京女性映画祭で、「シロタ家の20世紀」という映画が上映されて、見に行ったら、ベアテ・シロタ・ゴードンさんも来賓で来ていたのだ。あれからずっと日本にいて、各地で講演してたという。「明日帰ります」という。そして、「レコード聞きました。とても面白かった。よかったです。鈴木さんに礼状を書こうと思っていたところです」と言う。嬉しかった。

この会場で、土井たか子さんとも会ったのだ。ベアテさんは日本にはここ10年ほど前から来て講演している。何十回と来ている。何万人もの日本人に講演している。そのキッカケを作ったのは土井さんだ。よく会っている。

土井さんに浅沼さんの話をした。まるで西郷さんだった。浅沼さんに西郷さんを見てたのでしょうと聞いた。ところが、「エッ、そんな写真があるの？」と言う。ちょっとガッカリ。「似

てるの？」。ウーン。私の勘も時に狂う。たまには推理が外れることもあるさ。「でも、西郷さんは好きなんでしょう。どうしてですか？」と聞いた。

「だって、いいじゃない。理由はないわよ」。昔から好きだったという。「それに私は案外、保守的なのよ」と謎めいたことを言ってました。佐高さんと対談した「週刊金曜日」を送りますよ、と言った。西郷さんに似た浅沼さんの写真も送らなくちゃ。



（左から）辻元清美さん、私、雨宮処凛さん（10月24日）

そうそう。この後、右翼の人達と会った時のことだ。つい、うっかりと、「浅沼さんの追悼集会に行ってきた」と口を滑らせた。そしたら、皆に糾弾された。「何だ、国賊の追悼集会に行くとは！」と。「済みません」と謝った。時と所を選んで喋らなくちゃならないな。失敗した。

山口少年に刺殺されたとはいえ、浅沼さんは決して「国賊」ではない。あの打倒すべき時代の「代表」として死んだのだ。ちょうど5.15事件で死んだ犬養毅首相のようにだ。犬養首相は、殺されたが「国賊」ではない。愛国者だ。右翼の頭山満とも親しかったし、右翼の応援もしていた。しかしその「時代」の象徴として斃れた。浅沼さんも同じだ。

「追悼集会」が終わって、再び、展示品を見ていた。社民党の衆院議員の阿部知子さんに声をかけられた。「中村草田男の句がよかったわね」。今津弘さんが紹介してたのだ。事件直後に詠んだ句だという。「ちょっと聞き取れなかったんです」と言ったら、メモを見ながら教えてくれた。

「十代の　愛国とはなに　銀杏（いちょう）散る」



福島みずほさん（右）と（10月24日）

ウーン。いい句だ。私もずーっと、この事件のことを考えて生きてきた。同じ年の少年がなぜ、あそこまで決意し、人を殺し、自決出来るのか…と。愛国は、最後は殺人になるのか。それをずっと考えてきた。山口二矢の読んだ谷口先生の『天皇絶対論とその影響』も読んだ。仙台の「生長の家」の地方講師で持ってる方がいたので、借りて読んだ。しかし難しくて分からなかった。山口少年と違い、〈忠〉を自分の問題として考えていなかったからだろう。

それから、「20代の愛国」を考え、実践した。30代、40代、50代…と考え、実行してきた。そのスタートラインにあるのは、山口二矢、そして浅沼さんだ。その事件から47年。もう遠い遠い話だ。日本の神話の中の殺し合いのようにさえ思える。数年前、『ヤマトタケル』（現代書館）を書いた。ヤマトタケルが九州に行き、クマソタケルを討つ。そして都に帰る途中、イズモタケルを討つ。そんな、神々の争いのようにさえ思える。

【だいありー】

(1)10月29日（月）前の晩、なつかしい人達と飲み、嬉しかった。こういう出会いもあるもんだと思った。ありがたい。誰に会ったかは秘密にしてようと思った。迷惑をかけてはいけない。ところが、ご本人がブログで紹介してくれた。だからいいでしょう。谷口貴康さんです。感動しました。僕の本も読んでくれたとのこと。嬉しいです。午前中、〆切の原稿を必死で書く。それか

ら、新宿の本屋を回った。

(2)10月30日（火）近くのパスタ屋「パーゴラ」で枝豆スパゲティを食べた。ふいに句が浮かんだので書きとめた。

「六十代の　愛国とはこれよ　枝豆を食う」。字余り。鈴木腐多夫（くさたお）

　季語は枝豆ですな。豆と「マメだ＝健康だ）をかけたのでしょう。長生きして国のために働こうという意味だ。独特の自虐的句風の中に静かな覚悟を秘めた秀句だ。

　午後２時から６時まで、山の上ホテルで対談。なかなか楽しい対談になった。終わって、スタッフの人達と食事。又、スパゲティを食べた。緊張したのでビール一杯で酔っ払った。弱いんだ私は。家に帰ってすぐ寝た。起きていられなかった。３時間寝て、それから起きて仕事をした。受験生のようだ。受験生は酒なんか飲まんか。いや、時間の使い方ですよ。

(3)10月31日（水）午後２時40分からジャナ専の授業。防衛問題の話をした。それと60年の浅沼刺殺事件の話をした。

(4)11月１日（木）12時、講談社に行く。やっと本が出来た。嬉しい。見本誌をもらった。11月８日（木）に全国書店で発売だ。
　『超・日本国憲法』（講談社）だ。私は、『チョー日本国憲法』を提案してたんだが、チョー馬鹿にされ、「軽い」と却下された。４人で作った本だ。チョーきつかった。潮匡人、斎藤貴男、林信吾、そして私だ。４人で座談会もしたが、それは最後の最後。それまでに、総当たり個人戦のバトルがある。私は潮、斎藤、林さんと各々闘った。必死に闘ったが、ボロ負けですよ。こんな日本を代表する強敵に勝てるわけがない。必死で頑張ったけど、圧倒されてます。さらに、４人全体でやる。各々、個人戦を闘い、そして集団戦（バトル・ロワイヤル）だ。一体誰がこんな苛酷な試合方式を考えたんだ。もうやめた。出ないぞ、と「あとがき」に愚痴を書いてやった。
　でも、他の人達の個人戦は、さらに苛酷だ。ゲラを見て、「ヒャー、こんな壮大な闘いだったのか」と初めて分かった。負け戦とはいえ、こんな歴史的な闘いに参加させてもらい光栄でしたよ。ぜひ、読んでみて下さい。超面白いです。超満足するとでしょう。
　午後３時から河合塾コスモの授業。

(4)11月２日（金）昼、取材。夜７時からネーキッドロフト。革命家・外山恒一氏のイベントを聞きに行く。真面目に日本の革命史を講義していた。勉強になった。
　しかし、「鈴木さんが熊本から選挙に出る話は本当だったんですか？」とよく聞かれる。外山氏に聞いてくれよ。私はただの「駒」ですよ。革命家の戦略の中で動いている。全体のことは分からんバイ。

(5)11月３日（土）ベアテさんは子供の頃、赤坂桧町（ひのきちょう）10番地に住んでいたという。乃木神社のすぐそばだ。「乃木神社の隣りに生長の家本部があったことを知ってましたか？」と聞いたら、「オー！知ってました。知ってました」「朝早くから大声でお経を唱えてました！うるさかった！」。
　その本部が後に、原宿に移り、本部跡は「生長の家学生道場」になったのだ。そこに私がいた、という話をしたら、ベアテさんは驚いていた。ところで、学生道場は桧町何番地だったんだ

ろう。昔の道場生の布（ぬの）清信君に電話して聞いた。「桧町５番地ですよ。防衛庁は３番地です」。よく憶えているよな。何でも当時、『赤坂桧町３番地』という本があったという。防衛庁を告発した本だ。今の守屋問題のようなことがあったのか。その防衛庁も今はない。巨大な美術館になっている。桧町に行って、そんな過去の思い出を訪ねて来た。

【お知らせ】

(1)11月６日発売の月刊「創」（12月号）には、「47年前の暗殺・憲法歌」を書いてます。今回の「主張」はその「予告編」です。アッと驚く事実も紹介されてます。

(2)11月12日発売の「月刊タイムス」（12月号）には、「コンドームの広告に出た三島由紀夫」を書いてます。37年探して、やっと見つけた広告です。「楯の会」が「起ての会」とパロディにされ、「使用感などさらになし」と揶揄されてます。この広告を見て、三島は笑っていたとも言われた。でも、激怒した「楯の会」もいたはずだ。又、野村秋介さんの「風の会」が「週刊朝日」で揶揄された事件とからめて論じてみました。これは、今までほとんど知られなかった話だし、思いがけない「証言」も次々と得られた。「月刊タイムス」は、大きな書店にはあるが、読みたい人は下記へ。１部530円。

新宿区新宿1の31の7　新宿御苑ダイカンプラザ512号　月刊タイムス社
電話03（5269）8461　FAX 03（5269）8460

(3)11月20日（火）新宿ジュンク堂（８Ｆ喫茶）でトーク。18:30より。『ＩLOVE 過激派』の早見慶子さん、それに『憂国論』の木村三浩氏。テーマは「生きること、死ぬこと」。私も付録で出ます。入場料1000円（ドリンク付）。申し込みは７Ｆカウンターへ。03(5363)1300。先着40名だから早く申し込んだ方がいいでしょう。

(4)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後2時より高田馬場のホテルサンルートで。第1部は追悼祭。第2部は記念講演。元楯の会五期生・山口良男氏が講演し、「わが青春の楯の会----三島由紀夫・思想の根源」です。

(5)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(6)12月12日（水）一水会フォーラム。大下英治さん（作家）です。

(7)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。（12月10日の予定は変わって18日になりました）。

(8)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園。故田中義三さん一周忌の集い。

(9)12月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のイベントで私も出ます。

(10)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

【お知らせ２】

(1)発売中の『わしズム』（秋号）は「全体主義の島・沖縄」特集です。論議を呼ぶでしょう。又、「わしはこんな本を読んできた」では木村三浩氏も登場。「私の人生を変えた一冊」は高橋和巳『邪宗門』と言ってます。凄いですわ。

(2)元日本赤軍・和光晴生さんの『赤い春』私はパレスチナ・コマンドだった』（集英社インターナショナル）が出ました。感動的な本です。文章もうまいです。ぜひ読んでみて下さい。

HOME

今週の主張

バックナンバー

『超日本国憲法』登場です！

今週の主張11月12日

(1)空前絶後の憲法バトルですよ



『超日本国憲法』（講談社）

『超日本国憲法』（講談社）が、11月７日（水）、全国で発売になりました。ともかく型破りな本です。こんな本の作り方があったのかと驚きました。私も全くの想定外でした。今までにないというだけでなく、これからも、もうないでしょう。だって厳し過ぎます。時間がかかり過ぎます。手間がかかり過ぎます。

「これは面白い。マネしてみよう」と思っても多分、不可能です。企画会議で否決されるでしょう。講談社だから出来たのです。超有能な編集者・岡部ひとみさんだから出来たのです。それと、アイデアマンの林信吾さんの企画力があって初めて出来たのです。さらに、林さん、斎藤貴男さん、潮匡人さんという、現代日本を代表する強豪論客の激突・死闘があって出来たのです。そんな強豪の中で私も必死に闘いましたが、客観的に見たら、やられっ放しです。

ローマのコロシアムの闘いのようでしたね。出版社もそれを意識したのでしょう。本の帯にはこう書いてます。

〈改憲vs護憲を超えた論理のバトルロワイヤル〉
〈憲法全文掲載〉
〈新右翼・超タカ派・左翼が入り乱れての憲法論争〉

「バトルロワイヤル」というのは、そんな題名の映画がありましたね。ルールなき殺し合いです。プロレスの試合では、10人ほどが同じリングに上がり、無秩序に闘う。フォールされたり、外に投げ捨てられた奴は失格。次々と、サバイバル戦を勝ち抜くのです。

この『超日本国憲法』もそうです。本屋で、表紙を見て、４人の顔（イラスト）が出ている。「なんだ４人で座談会しただけだろう」と思うかもしれません。でも、違うんです。４人が一堂に会して闘うのは最後の最後です。そこに行く前に、各人の個別戦、総当たり戦があるのです。こんなキツイのは初めてでした。途中では下りられません。「こんなキツイのはいやだ。もう二度とやるもんか。バカヤロー」と思いました。特に私なんて、やられっ放しですからね。

ところが、ゲラを見て驚きました。ヒャー、こんな壮大な戦争だったのか、と思いました。自分の闘いだけで、もういやだと思ったのですが、他の個別戦はもっと凄絶でした。まさしく殺し合いの戦場でした。潮vs林、潮vs斎藤、林vs斎藤は、「ここまでやるのか！」と思いました。そして、全体討論をやり、それを三部に分けて配置する。又、「憲法全文」も載せている。

ウーン、こんな流れの中で闘っていたのかと、分かりました。他の人達もそう思ったでしょう。

この本のラストには「戦いすんで」と題し、４人が「あとがき」を書いている。潮匡人さんが、この本が出来たキッカケを書いています。潮さんは月刊『正論』誌上で、林信吾さんの『反戦軍事学』（朝日新書）を徹底批判した。それが戦争の始まりで、『週刊朝日』誌上で潮vs林の激突対談が行われた。

又、潮さんの『憲法九条は諸悪の根元』（ＰＨＰ）では斎藤貴男氏を徹底批判。その遺恨試合をやろうとしたのが、この本です。その遺恨の３人に、何ら遺恨のない私も巻き込まれ、４人のバトルロワイヤルとなったのです。

(2)格闘家が企画したから超過激な憲法バトルになったんだ



『超日本国憲法』より

企画がスタートしたのは今年の４月です。４月末にニューヨークで私はベアテさんたちと憲法シンポジウムに参加しました。日本に帰ったら、もっと苛酷な死のロードが控えている、と思うとおちおちニューヨーク観光なんかしてられませんでした。その割には、美術館やら、エンパイヤステートビルや、自由の女神などを見て歩いたな。いやいや、それも恐怖心をまぎらわせようと思ってのことです。だから、「自由の女神」になり切って写真を撮っても、目は笑ってないでしょう。

４月29日に日本に帰国し、５月一杯、いろいろ打ち合わせがありました。そして、６～８月で私は四つの闘いに出ました。

1. ６月13日（水）林信吾さんと。
2. ７月11日（水）潮匡人さんと。
3. ７月13日（金）斎藤貴男さんと。
4. ８月２日（木）全員の座談会。

最後の全員の討論会は期せずして８月２日、私の誕生日です。終わって全員で打ち上げ。それがバースデー・パーティを兼ねてました。８月２日に行き着くまでに、他の人達も個別の死闘が行われていました。６月中旬から７月中旬に、ちょっと間隔がありますが、企画者の林信吾さんがフランスに行っていて、小休止だったのです。「外人部隊の取材ですか」と聞いたら、「少林寺拳法」の国際大会の取材だと言ってました。ご本人も有段者です。だから私はずっと、口の利き方に注意してました。いきなりキックが飛んでくるかもしれないんで…。少林寺拳法の達人が「日本国憲法」について論じるわけです。そうそう、「日本拳法」というのもありますな。元警察官の北芝健さんがやってます。じゃ、林vs北芝で今度は闘ったらいい。少林寺vs日本の「拳法バトル」だ。ついでに憲法論もやればよか。

潮さんは元自衛官だから軍事に詳しいのは当然ですが、林さんもやたら詳しいのです。ご自分の本の「著者紹介」には、ピストルを持った写真を載せてます。まるで「００７　カジノロワイヤル」です。あっ、それで、この本ではバトルロワイヤルなんだ。この人の携帯電話も変わっている。頑丈なグリップ（握り口）が付いている。「手を入れてがっちり握って、武器にもなるのか

な」と思ったら、「バンパーですよ」。車のバンパーと同じ役目なんだ。交通事故に遭ったり、あるいは道で落っことしても大丈夫なようにだ。「ほら、平気でしょう」と、携帯を床に叩きつけて見せる。携帯は、バンパーの所で、しっかり「受身」をとっていた。凄い。携帯までが格闘技をやってるよ。

林さんは格闘家だから、こんな本の作り方のヒントが浮かんだんだろう。参加者全員を総当たりにして、さらに最後に全員で闘う。大相撲みたいだな。いや大相撲は「全員で闘う」のはない。総当たりだ。うん、これでもいいね。各人は３試合ずつ闘う。各人の星取表を作る。この人は３戦全勝。この人は２勝１敗。この人は１勝２敗…と。一番白星が多い人が優勝。同じ白星だったら、「優勝決定戦」だ。私は全敗だから、一番惨めだな。

そんな惨めにしない為に、「勝ち抜き戦」がいいかな。２人ずつ、２リーグにして、勝った人同士が優勝決定戦。これだと試合数は少ない。私は第１戦で負けだから、１回出るだけで済む。キツイ試合を４試合もやらなくていい。でも、そうはいかんね。やはりこの「総当たり戦」＋「全体戦」がベストだね。最も苛酷で、最も「各人の能力・強さ」が分かる。

この方法は面白い。誰も考えなかった。でも、この本でやっちゃったから、真似されるかもしれませんね、と私は言った。編集の岡部さんに。そしたら岡部さんに即座に言われた。「誰も真似しませんよ。こんなキツイ方法を」と。

そうか。各人の討論が６回。これに全体の討論が１回。計７回だ。こんなにやりたくないだろう、出版社も。だから、この方式は空前にして絶後だ。さて、編集の仕方もうまい。まァ、目次を紹介してみよう。

(2)「四人の知性と論理に信頼して」この本を作った！



林信吾さん。『反戦軍事学』（朝日新書）の「著者紹介」より

まず初めに「超日本国憲法・前文」。面白いですね。この討論そのものも「憲法」だから「前文」があるんです。代表の人が起草して、他の３人が承認したものです。画期的です。

〈憲法が、神ならぬ人間の手によって書かれたものである以上、いたずらに「人類普遍の原理に基づくもの」として、無批判に賛美するべきではありません。憲法によって、国民には様々な権利と義務が課せられています。これはすなわち、我らと我らの子孫のために、憲法について自由闊達に論じ合う権利を有しているということなのです〉

格調の高い「前文」は続く。そして後半、４人を紹介して、こう言う。

〈民間憲法臨調（「21世紀の日本と憲法」有識者懇談会）のメンバーにして元自衛官の軍事専門家でもある潮匡人。
格差問題に警鐘を鳴らし続けるジャーナリスト、斎藤貴男。
新右翼「一水会」顧問で、天皇制や愛国心に関して刺激的な発言を続ける鈴木邦男。
軍事・政治に関して幾多の著作を世に問うてきた、ジャーナリストの林信吾。
憲法改正論議と真摯に向き合ってきた、この四人の知性と論理に信頼して、ここに対談集『超

日本国憲法』を企画する〉

　いいねえ。「四人の知性と論理に信頼して」というのが。「日本」は憲法で「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようとした」んでしたね。さて、どちらがいいでしょうか。目次です。

超日本国憲法・目次

超日本国憲法・前文

座談会「改憲護憲論議を超えて」(1)
日本国憲法の欠陥、憲法前文の精神とは…。

〔日本国憲法（前文）〕

憲法対論(1)「憲法前文は美しいか」（潮匡人vs斎藤貴男）

座談会「改憲護憲論議を超えて」(2)

天皇は元首であるべきか。「自衛軍」と「天皇の軍隊」

〔日本国憲法　第一章・天皇〕

憲法対談(2)「右翼と天皇」（林信吾vs鈴木邦男）

〔日本国憲法　第二章・戦争の放棄〕

憲法対談(3)「九条と集団的自衛権」（潮匡人vs林信吾）

憲法対談(4)「逃げるな護憲派」（斎藤貴男vs林信吾）

憲法対談(5)「神と国家と靖国」（潮匡人vs鈴木邦男）

〔日本国憲法　第三章・国民の権利及び義務〕

憲法対談(6)「改憲派の真の狙い」（斎藤貴男vs鈴木邦男）

〔日本国憲法　第四章・国会〜第十一章・補則〕

座談会「改憲護憲論議を超えて」(3)
改憲条項は適正か。理想の憲法を求めて。

戦いすんで

(4)自衛隊が「軍隊」になったら、何が変わるのか…



『言論統制列島』（講談社）

ザッと見ただけでも、内容の凄さ、激越さが分かるでしょう。「逃げるな護憲派」なんて、凄いタイトルですね。護憲派の「代表」として斎藤さんが責められています。「右翼と天皇」の所では私も林さんに猛襲されております。斎藤さんとの討論も厳しかった。潮さんもキツかった。潮さんは、改憲して、「天皇の軍隊」にすべきだと言います。さらに、国軍になって、海外に出るようになったら、「従軍神父」や「従軍僧侶」が必要だといいます。しかし、それは出来るでしょうか。そんなことを議論しました。

今の自衛隊は軍隊のようであって本当の軍隊ではない。それを感じました。改憲し、正式に軍隊になったら、常に生死の問題に直面する。戦闘の前に、あるいは運悪く負傷し、息を引き取る前に、神父や僧侶を必要とする人もいる。又、イザという時、過去のような「特攻」や「玉砕」はあるのか。そのことも潮さんに聞きました。このあたりは、かなりスリリングな話になりました。

又、戦前・戦中、日本には軍事裁判所があり、刑務所がありました。軍隊内の犯罪は軍隊内で裁き、刑を下し、あるいは処刑するのです。２.２６事件は、そこで裁かれ、決起者は死刑になりました。

今の自衛隊は軍隊ではないから、脱走しても、射殺されることはありません。犯罪を犯しても、日本国憲法・法律で裁かれます。ところが、正式な軍隊になれば、軍隊独自の裁判所、刑務所を作ることになる。それでは、「国家内国家」になるのではないか。そんなことも潮氏に聞きました。

「自衛隊を軍隊にする」というのは、単に憲法で自衛隊を認めることではないのです。日本そのものを大きく変えることなのです。そのことを痛感しました。詳しくは本文を読んで下さい。

今まで、憲法の「全体」について論じた本はありませんでした。全て、「部分」についての本です。「九条をどうする」が主です。あと、「改憲すべきだ」「護憲だ」という方法論だけです。全体について論じ、その上で、ここを変える。ここは護る、といった論議はなかったのです。又、この本を読んで、「初めて憲法の全文を読んだ」という人もおります。とても勉強になります。

私は、講談社からはこれで３冊目です。お世話になっております。

第１回目は05年の『言論統制列島』（1500円）です。斎藤貴男、森達也、そして私の討論集です。３人が拳を突き出している戦闘的な表紙でした。巻頭カラー写真もふんだんにあり、タッチしている写真。「エイエイオー！」をやっている写真…と。実に楽しい本になってます。238ページです。

第２回目は06年の新書の『愛国者は信用できるか』（700円）です。５刷もいきました。私の本の中では最も売れましたし、まだ売れるでしょう。

そして第３回目は07年の『超日本国憲法』です。１年に１冊ずつ、いい本を出してもらってます。全て、岡部ひとみさんの担当です。お世話になりました。才能があり、企画力がある人です。それに、いつでも一生懸命です。

(5)14年前、リレー式の憲法本を出した！



『僕の憲法草案』（ポット出版）

それと、実は憲法については、昔、もう一冊出してます。まるまる憲法についての本です。出版社は別です。『僕の憲法草案』（1900円）という本で、1993年、ポット出版から出ています。今でもあります。もう14年前に出したんですね。これも共著です。橋爪大三郎、景山民夫、伊藤成彦、呉智英、私の５人です。

これも、変わった作り方の本です。５人で討論したのではありません。各人の討論もありません。各人が別個に喋ります。そして別個に書きます。「じゃ、論文を集めたものか」と思うかもしれませんが、それも違います。何と、「リレー討論」という、これも画期的な方法でした。

つまり、最初に、橋爪大三郎さんが「僕の憲法草案」を語ります。編集者がそれをまとめます。そのゲラを読んで、景山民夫さんが「僕の憲法草案」を語ります。次に、橋爪、景山さんのゲラを読んで私が語ります。さらに３人のゲラを読んで伊藤成彦さんが語ります。それが「第一部」です。「リレー討論・憲法草案を考える」です。この試合方式は私が考えました。やはり格闘家だから考えつくのかもしれません。

さらに「第二部」では、この４人のゲラを基にして、もう一回りします。今度は個別に書くのです。これも、なかなか、スリリングでした。景山さんは作家で、当時、「幸福の科学」に入っていました。だから、「国家が宗教を避けて通るのはやめませんか」という斬新な提案をしていました。橋爪さんは社会学者です。伊藤成彦さんは中央大学教授です。４人の間では、かなり激しいバトルがありました。

そうだ、これで終わりません。「第三部」として、呉智英さんが登場し、全体の統括というか総括をします。それが何と、「異見。憲法草案を嗤（わら）う」というものです。４人が必死に話し合い、バトルをしたというのに、高みから見て、嗤（わら）うのです。これこそ、最も手強い敵です。４人の討論なんて、「安酒場での豪邸建築議論の滑稽」だ、と言い、こう決めつけます。

〈この本の読者や執筆者には悪いんだけど、「憲法草案」だの「憲法私案」だのという出版企画はねえ、私は笑っちゃうんですよ。

だって月給20万ほどで社員寮暮らしの安サラリーマンたちが家を建てるなら白金台の六百坪がいいか芦屋の八百坪がいいかっていうんで、「北の家族」でチューハイ飲みながら喧嘩腰で議論しているようなものでしょう（笑）。

議論だけならまだしも、家の設計図まで引いちゃおうっていうんだよ。酒に酔って朦朧とした頭で（笑）。こりゃ友達がいなくなるよ。精神が不自由な奴じゃないかって思われて（笑）。おまえが憲法草案なんか作って何の意味があるのって、誰でも思うよね〉

なかなか、シビヤーですね。言ってくれますね。辛口評論家の呉さんらしい。でも、このあとは、呉さんも、真面目に憲法を論じています。

「憲法学者は軽蔑されている」「民主主義・人権思想を疑え」といい、こんな暴論も吐きます。

〈私が自衛隊の最高幹部でしかも非常な人気があり、私の命令一下部隊が生死を共にしてくれる、というのなら、これはいいんです。クーデターを起こして、憲法を私の好きなように変えてし

まえばよろしい。天皇制を廃止して、フランスでナポレオンがやったように皇帝制を敷き、私が皇帝に就く〉

ウーン、これだって安酒場の議論のようだけどなー。それに、今は、国民全体が論じてますよ。３年後には、改憲論議も本格的にやられる。国民全体の問題になる。ただ、呉さんの言葉で当たっているのは、「これりゃ、友達がいなくなるよ」だ。これ以来、私には友達がいません。

まァ、この本も読んでみて下さい。

『超日本国憲法』は、売れ行きがいいようです。本が売れて大金が入ったらどうしませう。白金台に六百坪の豪邸を建てるかな。子供達も呼びよせて。

【だいありー】



田中義三さん追悼座談会（11月6日）

(1)11月５日（月）東中野図書館。１日いた。

(2)11月６日（火）３時半、ＡＮＡコンチネンタルホテル東京（旧全日空ホテル）。全日空が別の会社に売っ払ったのか。でもＡＮＡがまだ付いている。合併か。「いや、全日空がＡＮＡに変わったんだよ」と革命家の三上治さん。うーん、突飛なことを言う革命家だ。ここで座談会。12月22日に田中義三さんの一周忌の追悼集会をやる。それまでに「追悼集」を出す。その目玉の「追悼座談会」だ。出席者が豪華だ。田原総一朗さん、雨宮処凛さん、木村三浩さん、三上治さん（革命家）、花園紀男さん（革命家）。そして私（廃人）だ。

田原さんは北朝鮮から帰ったばかり。かなり反応があったようだ。「日本の方が遅れてる」と嘆いていた。田原さんの挑発を受け、刺激的な話になった。日本をどうする、どう変える。という話にまで行った。　５時で一旦終了。忙しい田原、雨宮さんが帰り、残りの４人で第２部をやる。近くのソバ屋に場所を移して。２時間ほど。厳しかった。

討論中に、三上さんは花園さんに、「そうだろう、花ちゃん」。60過ぎの老革命家（元赤軍派幹部）に向かって、「花ちゃん」か。女の子の名前みたいだ。ゾウの花子さんみたいだ。でも花園さんは本名だ。だから、私も、図に乗って、「花ちゃん」と呼んでやった。才神時雄の『松山収容所』（中公新書）を読んでたら、ロシアの捕虜が日本の女性の名に驚くシーンがある。お菊とか梅子とか、あやめ、かえで…とか、皆、花の名前だ。花の名前で女性を呼ぶなんて、なんて優しい心の民族だろうと。私も初めて気がつきましたね。日本人て、何て優しかったんだ。猛々しい武装革命家だって、「花ちゃん」と呼ぶし。

２時間後、木村氏と私は中座して、他の集まりに。民主党の国会議員や、エジプト人、経済人、女医さんなど10人と会食。民主党の人は、「小沢さんは留任します。明日、その会見をします」。又もや、ドンデン返しだ。福田首相の捨身技で、小沢さんは吹っ飛んだと思ったが、空中で回転して、スックと立った。しぶとい。



「創」（12月号）より

「小沢さんを慰留したんだから、もう社会党系の人はものを言えない。さらに小沢さんの力は強くなりますよ」と言っていた。（翌朝の新聞を見たら、その通りだった）。

小沢さんは、したたかだ。それにシビアーなリアリストだ。今の浮ついた民主党では次の衆院選は勝てない。たとえ勝っても、弱体だ。自民党は実力者が揃っているし、すぐに潰されるだろう。そうしたら、完全に死に絶える。それよりは、ここで福田さんの言う大臣ポストをいくつかもらって、大連立をした方がいい。将来、民主がもっと力をつけて単独与党になる時のためのトレーニングにもなる。そう思ったんでしょうな。そして中選挙区制に戻す。

民主の実態をよく見た決断だった。「大人の考え」だ。でも、民主の若手は「子供」だ。「このまま行ったら民主は天下をとれる」「そうだ。行け、行け！」と叫んでるだけだ。やってらんないよと激高した小沢さんは思ったのだろう。しかし、留任した。小沢さんの「言い分」を皆は呑んだのだろう。とすると、又もや、動乱があるだろう。


（座談会が終わって）（左より）三上氏、鈴木、花園氏、田原氏、雨宮さん、木村氏

(3)11月７日（水）２時40分。ジャナ専の授業。「時事問題」。民主党激震の話をした。４時半から、今一生さん（フリーライター）の特別講演会。久しぶりに会った。「出版界、成り上がり伝説」。自分のことだ。彼はある日突然、ブレークして、本が売れに売れた。ライターの世界にも「大激震」はある。

この日、月刊『創』（12月号）発売。私は「47年前の暗殺。憲法歌」を書いている。「編集部発」では私の担当の小林嬢が「今月のくにをさん」を漫画で描いている。佐藤優、雨宮処凛など新連載陣がグッと増えて、私は「ところてん」のように突き出されてしまう。そういう恐怖におびえている漫画でした。まさに私の心境を読んでます。

(4)11月８日（木）昼、取材。３時から河合塾コスモ。現代文。５時からの「基礎教養ゼミ」では白井聡の『未完のレーニン』（講談社選書メチエ）を取り上げて、皆で読んだ。映画「グッバイ、レーニン！」の話から始まっている。レーニン時代のよき面影を忘れられない（病気中の）母のために、「社会主義は健在だ」と思わせる。テレビのニュースも自分で作って…。面白い映画だった。そこから始まり、レーニン再評価や、冷酷な「レーニン問題」などについて書いている。いい本だ。中沢新一さんの『はじまりのレーニン』（岩波現代文庫）をきっかけとして書いたという。編集プロダクションの椎野礼仁さんに会ったので、『私こそレーニン』を書いたらどうかと、勧めておいた。

(5)11月９日（金）４時から山の上ホテルで対談。

(6)11月10日（土）３時、目白・椿山荘。国体学会のパーティ。国体学会は里見岸雄の思想を継承し、広めるために「国体文化」という機関誌を出している。それが千号を迎えた。それを記念しての集会だ。私も挨拶をさせられた。

『国体文化』（11月号）には私の送った写真が載っていた。成瀬巳喜男監督の映画『放浪記』の一場面だ。作家・林芙美子の自伝的小説だ。高峰秀子演ずる主人公がフラリと本屋に入ると、そこの棚には何と里見岸雄の『萬世一系の天皇』が並んでいる。当時、ベストセラーになった里見の本だ。そんな時代考証もしっかりやっている。その場面を撮り、送ったら、『国体文化』に載っていた。



『国体文化』（11月号）より

(7)11月11日（日）午前11時から５時まで、『古事記』の勉強会。テキストの３冊を読破して参加した。３年前（2004年８月２日）に私は『ヤマトタケル』（現代書館）を出した時、古事記、日本書紀はかなり読み込んでいたので、今回の勉強会は楽しみだったし、とても勉強になつた。

【お知らせ】

(1)11月12日発売の「月刊タイムス」（12月号）には、「コンドームの広告に出た三島由紀夫」を書いてます。37年探して、やっと見つけた広告です。「楯の会」が「起ての会」とパロディにされ、「使用感などさらになし」と揶揄されてます。この広告を見て、三島は笑っていたという。でも、激怒した「楯の会」もいたはずだ。又、野村秋介さんの「風の会」が「週刊朝日」で揶揄された事件とからめて論じてみました。これは、今までほとんど知られなかった話だし、思いがけない「証言」も次々と得られた。「月刊タイムス」は、大きな書店にはあるが、読みたい人は下記へ。１部530円。

新宿区新宿1の31の7　新宿御苑ダイカンプラザ512号　月刊タイムス社
電話03（5269）8461　FAX 03（5269）8460

(2)11月16日（金）この日発売の「週刊読書人」に私の原稿が出ます。早見慶子さんの『I LOVE 過激派』（彩流社）の書評です。

(3)11月20日（火）新宿ジュンク堂（８Ｆ喫茶）でトーク。18:30より。『I LOVE 過激派』の早見慶子さん、それに『憂国論』の木村三浩氏。テーマは「生きること、死ぬこと」。私も付録で出ます。入場料1000円（ドリンク付）。申し込みは７Ｆカウンターへ。03(5363)1300。先着40名だから早く申し込んだ方がいいでしょう。

(4)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後2時より高田馬場のホテルサンルートで。第1部は追悼祭。第2部は記念講演。元楯の会五期生・山口良男氏が講演し、「わが青春の楯の会----三島由紀夫・思想の根源」です。

(5)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジ

ウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(6)12月12日（水）一水会フォーラム。大下英治さん（作家）です。

(7)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。

(8)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園。故田中義三さん一周忌の集い。

(9)12月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のトークライブ。「国家・死刑・戦争」で、出演は佐藤優、森達也、綿井健陽、阿曽山大噴火、そして私です。

(10)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

(11)法務大臣の鳩山邦夫もアホですね。「死刑は法相のハンコがなくても自動的にやりたい」「私の友人の友人はアルカイダ」「ペンタゴンにはごちそうしてもらった」。言うことが小学生の「自慢話」レベル。アホというか、ガキっぽいですね。邦夫君は皆。

HOME

今週の主張

これは私達の「栄えある精神史」だ。
＝『証言・村上正邦』を読んで考えた＝

今週の主張11月19日

バックナンバー

(1)君の場合は…



魚住昭『証言・村上正邦　我、国に裏切られようとも』（講談社）

君は夕方、喫茶店に入るんだよね。そうだ、この本を読まなくちゃと思って。コーヒーをオーダーして、君は、本を読み始める。面白いからと人に勧められた本。書評を頼まれた本。仕事で読む必要のある本。ノルマで読む本…一杯あるんだよね。この本は厚いし、しょうがない。毎日30分ずつでも読もうかと、キッカケ作りのために喫茶店に入る。

「毎日少しずつ読めばいいや。そうしたら一週間位で読み終わるし」と君は思う。「そのかわり、これが終わったらもっと楽しい本を読ませてあげるからね」と君は、もう一人の君に語りかけ、説得する。

そして読み始める。ところが思いがけない事態が起こる。グイグイと本の中の世界に引き込まれる。面白い。エッ、そうだったのか、という大発見もある。君はあわてる。でも嬉しい。周りはうるさい。普段なら、「本を読めないや。出よう」と思うところだ。でも、どうしたことだろう。君には全く気にならない。それだけ本にひきつけられたのだ。「いくらでも騒げ！」と思う。競馬やテレビや上司の悪口を話している客。つまらん事にあくせくしてるよな。お前らにはこんな楽しみは分からんだろう。君はそう思う。ペッと軽蔑する。

まさに幸福の時間なんだよ、これは。いい本に出会い、時間を忘れて本に没頭する。これこそが人間に与えられた最高の幸せだ。君はそう思う。どんな肉体的楽しみもこの前には色あせる。人間と他の動物の違いも、この一点のみだ。どんなに賢い犬や猫でも本は読まない。

君はさらにもう一杯コーヒーを注文し、読み続ける。夕食を食べなくちゃ。友達との約束もある。エーイ、やめちゃえ。「急用が出来た。又にしよう」とメールをする。あとは切る。これ以上の「急用」はない。こんなに凄い本に出会ったんだから。

そういえば、読書好きの人は皆、ケータイを持ってない。「私も捨てようかな」と君は思う。「書を捨てて街へ出よう」と昔、寺山修司は言ったけど、今ならきっと、「ケータイを捨てて本を読もう」と言ったよね。

あっ、もう２時間もいちゃった。でも、君はやめられない。とまらない。もう50ページ。もう100ページと、次々に〈欲〉が湧く。そして４時間も読んじゃった。バンザーイ。読破したぞ。制覇したぞ！自分で自分を誉めてやりたい。この幸せな時間の為にこそ人間は生きてるんだ。と君は思う。確信する。悟る。いい本に出会い、買い、読む。時間もかかる。お金もかかる。そのお

金を稼ぐ為にこそ人間は仕事をする。これが人生の真理だ。
　そうか、「本を買う為」に人間は働くのか、と君は改めて思う。悟る。「本を読む為」に我々は生きているんだ。そう確信する。その時、君はこれこそが最大の幸せだと気づく。その幸せを知らない人は、かわいそうだ。

(2)「今は憲法を変える時期ではない」と村上さん



村上正邦さん（右）と。（07/8/21）

　そうですね。私もそう思うんですよ。いつもというわけじゃないが、「おおー！」と叫びたくなる本に出会う。そうしたらダメだ。他の仕事も、約束も、腹が減ってることも…全てを忘れる。魂を持っていかれる。本と一体になる。私が本になる。アイ・アム・ア・ブックだ。人に会ったって、これだけの感動はない。だから、どんどん人付き合いは下手になる。嫌になる。そして友達は一人もいない。でも本があるからいい。お金をかけて、自分のいうことを聞いてくれるのは本だけだ。「何か淋しいことを言ってますね。このオッサンは」と君は思うかもしれないが…。
　そんな気にさせる本にかなり出会ってきた。

　最近衝撃を受けたのが、この本ですよ。魚住昭さんの『証言・村上正邦。我、国に裏切られようとも』（講談社・1500円）だ。
　タイトルを見ただけで、かわいそうだ。「国に裏切られた人」の話だ。名前に「邦」のつく人は皆、愛国者だと言われている。この人もだから、国のためにと思い、必死で頑張り、運動し、生きてきた。政治家になり、参議院議員になり、「参議院のドン」とまで言われた。しかし、国策捜査で逮捕された。今は裁判中の身だ。
　いや、こういうふうに他人事としては書けないな。「生長の家」の11才先輩だ。私だって、「生長の家」に残っていたら、選挙に出たかもしれない。不遜な言い方をすれば、これは「もう一人の私」の物語だ。

　この「証言」は初め、月刊『世界』（岩波書店）に連載された。本来は岩波から出るべきなのに、何故か講談社から出た。『世界』連載時に私も取材された。この時は、「聞き書　村上正邦。日本政治右派の底流」というタイトルだった。今、「右傾化」といわれるが、それを作った基は「生長の家」の人々ではないのか。それが魚住さんの感触だ。「生長の家」が政治に進出し、玉置和郎、玉置猛夫、村上正邦、小山孝雄、寺内弘子、と国会議員を誕生させた。憲法復元運動、優生保護法改正などにも取り組んだ。「日本会議」を作る推進力にもなった。
　今、「生長の家」は政治から手を引いた。しかし、「生長の家」の人間は各方面に散り、歴史教科書、拉致問題、教育問題…等の各分野で中心的な役割りを果たしている。日本の「右派勢力」を作ったのは実は「生長の家」だ、と魚住さん喝破する。そして、実に多くの人々に会い、その説を実証していく。
　魚住さんのこの感触は正しいだろう。ジャーナリストの本能的実感か。魚の感触か。そして魚眼レンズで見つめ、各方面から証言を引き出して、書いていく。


民族派学友維新へ怒涛の進撃
全日本学生文化会議全国大会
文化の日に向け京都で開く
民族派全学連準結成
生命の実相
「生学連新聞」（昭和44年11月号）

本を読む前は、「村上さんが自分で書けばいいじゃないか」と思った。ところが、違うんだな。魚住さんという異質のライターがいることによって、これだけの証言が引き出された。村上さんは右派だ。魚住さんは左派だ。「国家観、歴史観が異なる二人が解き明かす政治の現況」と本の帯には書かれている。

魚住さんは、「右派勢力」や、今の右傾化には反対だろう。「なぜこうなったのか」という疑問もある。だからこそ、村上さんに向かって、ズケズケと言える。遠慮なしに聞ける。

ただの「証言」ではない。村上さんの言ったことをただ書くわけではない。又、本人ならば、「あまり言いたくないこと」「何を今さら」「自慢話と思われるから嫌だ」と胸の奥に秘めていることも、巧みに引き出す。このやり方はさすがだ。

村上さんは「生長の家」をバックに政治家になった。僕らも選挙を手伝った。僕の運動人生とも、重なる部分が多い。だから、全て知ってると思った。ところが本を読んで、エッこんなことがあったのかと新発見が多かった。玉置さんとは一枚岩だと思ったが、いろいろ揉めたこともあったんだ。なぜ「生長の家」が政治から手を引いたのか、その真相も分かった。

「生長の家」は改憲運動には特に力を入れてやってきた。他の民族派団体をも巻き込み、支援しながらやってきた。しかし、村上さんは、今、こう言う。

〈でもね、今の自公連立時代、今の二世三世議員たちのやることを見ていると、彼らの手で憲法改正なんかやってほしくないですね。彼らは自民党の世襲制度のなかから出てきた議員たちですから、一般庶民の生活も知らなければ苦労も分からない。彼らは親の財産をそのまま受け継いで努力も何もしない。彼らが政治を支配している限り、日本の国は堕落してしまう〉

こんな奴らに憲法改正なんかやってもらいたくない。これは小林節、小林よしのり、木村三浩氏らの考えとも共通する。私もそう思う。又、村上さんは公明党に対しても厳しいことを言う。

〈連立与党の公明党は相対主義ではなく、一元主義の世界、独裁の世界の住人たちです。一元的な価値観を持った公明党の手で憲法が変えられたら、これもまた大変なことになる。だから私は今は憲法を変える時期ではないと思っています〉

(3)初めは「生長の家」を利用しようと思って…



「生学連新聞」（昭和47年3月号）

村上さんは昭和７年（1932年）福岡県生まれ。31年拓殖大学卒業。37年、「生長の家」の誌友（信徒）となる。40年、玉置和郎参院議員秘書を経て、55年参院全国区で初当選し、平成10年（1998年）までに４選を果たす。平成４年労働大臣、７年参院自民党幹事長、11年参院議員会長に就任。13年ＫＳＤ事件をめぐる受託収賄容疑で東京地検特捜部に逮捕される。１、２審で有罪。現在、最高裁へ上告中。

玉置、村上の二人は元々は「生長の家」の信徒ではない。早川崇（後に自治大臣）という代議士のところへ村上さんはよく遊びに行っていた。そこに和歌山から出てきた玉置和郎さんが出入りしていた。村上さんより８才上だ。そこで二人は意気投合する。玉置さんは言う。「俺はゆくゆくは国会議員になりたいんだ。しかし、俺には銭も何もない。あんたのような人が必要だから一緒に銭もうけする会社を作ろう」

それで二人で動く。でも、選挙に出るといってもどこから出るんだ、と聞くと、「全国区だ」と言う。そのためには、しっかりした支持団体を持たなければいけない。

〈党組織委員会の宗教団体の窓口をやっている職員に尋ねると、宗教団体のなかでいちばん政治に熱心で、候補者を持っていないのは生長の家だという返事だった。

生長の家の谷口雅春という人は明治憲法復元を目指していて、大変な影響力を持っている。この組織が支持してくれれば大丈夫だというので、玉置が「じゃあ、そこへひとつわたりをつけてくれ」と頼んだ。

その担当職員が、生長の家の理事で、後に理事長になった中林政吉さんと、道元研究の大家として知られ、駒沢大学で教鞭を執っておられた田中忠雄さんにわたりをつけてくれて、そのお二人が「いっぺん玉置さんに会おう」という話になったんです〉

そうか。そういうことだったのか。でも、ここまで赤裸々に書いていいのかと思った。早い話、「票田」として生長の家を利用しようとしたんだ。中林さん、田中さんと会い、「面接試験」を受け、いよいよ谷口雅春先生に会う。その時、生長の家で病気が治った体験を持つ三木武夫の親書ももらってゆく。

〈私も玉置のお供をして原宿の生長の家の本部へ行きました。総裁室へ行って、玉置は「三木先生からの親書ですと恭（うやうや）しく手紙を差し出した。谷口先生はそれを見ておられた。

そのときにはもう私は、嘘はいっぺんに見抜かれるという感じがしました。何しろ票ほしさに会いに行っているんだから〉

いいねー、これは。正直で。議員の時だったら、こんなことは書けなかっただろう。まるで、弥次さん、喜多さんのようだね。ヒヤヒヤ、ハラハラ。何とか口先一つで票をもらおうとする。さて、この最大の難関をどう切り抜けたか。



生学連の理論機関誌「生学連」

〈谷口先生にじっと顔を見られると、ウッという感じがしてね（笑）。
「よろしい。錬成を受けなさい」
と谷口先生に言われた。生長の家には幹部錬成というのがあるんです。全国から幹部だけを集め、一週間の夏期講座が高尾山で開かれる。それをまず受講しなさいと谷口先生が言われた。玉置はかしこまって、「ありがとうございます。ぜひ、ご指導を」
とか言ってさ。ほんとに冷や汗がピュビュー出てきたよ。魂胆は見透かされているに違いないと思ってね（笑）〉

この時の谷口先生のお気持ちはどうだったんだろう。この政治を変えなくてはならないと思っていた。憲法を改め、優生保護法を変える。その為には政界に人を送らなくてはならない。多分、そこまでは考えておられたろう。しかし、自民党や民社党の議員を「推薦」するだけでは何の力にもならない。その議員は他の宗教団体の推薦も受けるだろう。「生長の家」の為に働いてくれるのは十分の一か二十分の一だ。やはり「自前の議員」が必要だ。生長の家の信徒数からすれば、国会議員を一人か二人は出せる。でも、「生長の家」本部を見渡しても、「信仰」の人はいるが、「政治」の人はいない。信仰を持った政治家を育てなければならない。そう思ったはずだ。その時に、玉置、村上のコンビが飛び込んで来た。鍛えたらモノになると思ったのではないか。

勿論、今は票ほしさで来ている。しかし、厳しい錬成を受けて、逃げ出さずにやり抜いたら考えてみよう。そう思ったのではないだろうか。

玉置は谷口先生の期待に応えた。太った体で、ずっと正座をし、祈り、愛行をし、勉強し、谷口先生の講演の時にはいつも一番前で聞いて、必ず質問をする。その真摯な態度に谷口先生も「率直で、ういやつ」と思う。

(4)昭和37年夏。飛田給で運命の三人は出会った


全国学協結成大会（昭和44年5月4日。九段会館）

谷口先生は「これは見込みがある」と思い、講演会にはいつも連れて歩き、挨拶させた。「玉置和郎（かずお）」の名前を信徒に覚えさせた。

玉置さんは一生懸命だ。家なんてかまっていられない。ある時、奥さんから電話がかかってきた。「すぐ帰って。家が火事なのよ」と。聞くと、隣近所には類焼はない。燃えたのは自分の家だけだという。すると玉置さんは、
「そうか。燃えたものはしょうがないじゃないか。本来物質はないんだよ」
と言って、帰らなかった。凄いね。たしかに「生長の家」では、「物質はない」と教えている。心が実在だ。しかし、そこまで悟れるのは偉い。私なんて、何十年も教えを受けているが、アパートに火を付けられた時は、あわてふためき、狼狽した。「物質はない」なんて悟ったことを言えなかった。（それに自分の家じゃない

し）。玉置さんはさらに言うんだよね。「帰らなくていいのか」と村上さんが聞くと…。
「谷口先生は物質は本来ないと説いておられる。そんなものにこだわっちゃ駄目だよとおっしゃった。握れば一点、開けば無窮だ。いいよ、帰らんで」

これも凄い。それに、いい言葉だ。「握れば一点、開けば無窮」か。「つかんではダメだ」とも言われた。
物を持っている。ある地位にある。ある収入がある。「これは失いたくない」と皆、しがみつく。さらに、その上を求める。失いそうになったら、悪あがきする。僕も何度もそんな体験があった。でも、「つかんではいけない」という教えを思い出した。すると、フーッと楽になった。必要なら、神様が又与えて下さる。それよりも、もっといいものがあるんだと。仕事をクビになった時とか、絶望した時とか、そう思って乗り切ってきた。
「これしかない」「これを失ったら終わりだ」と思ったら、もう身動きがとれない。もう終わっているんだ。「物質はない」と思い、つかんでいるものを捨てる。開けば無窮なのだ。

ところが、玉置さんも、好スタートとはならなかった。生長の家の票は80万以上といわれていたが、何と玉置さんは30万２千票しか取れずに落選したのだ。まだまだ信徒に信用されていなかったのだ。
しかし、だからといって、「生長の家」を辞めたわけではない。さらに、その試練を経て、「生長の家」の信仰に励む。

落選し、玉置さんは大悟した。信仰が足りなかったと。そして村上さんに言う。

〈「村上さんな、あんたは俺の心の影だ。女房以上の存在なんだ。だから、俺と一緒になって生長の家に入ってくれ。そうでなきゃ、俺は本物になれない。あんた一人、生長の家に入れきらんようじゃ駄目なんだ」
そこまで言われちゃ断われない。私も飛田給（東京都調布市）の道場に行って十日間の錬成を受けることになった。昭和37年夏の暑い盛りのことです〉


全国学協結成大会で挨拶する鈴木委員長（昭和44年5月4日。九段会館）

この時、私も飛田給に行っていた。大学生の錬成があったからだ。大学１年生だ。村上さんが十日間の錬成を受けに来ていた。便所掃除をしたり、身を粉にして働き、修行していた。「そんなにまでして票がほしいのか」と私は冷たく見ていた。かわいそうでもあった。その時、長期錬成に来ていたのが花房東洋氏だった。（少し前にこのＨＰで紹介したが）。不良で手がつけられなくて、「生長の家」に送り込まれてきたのだろう。あるいは何か事件を起こし、「少年院か、生長の家か」と迫られたのかもしれない。当時は警察でもそんな粋な計らいをする人がいた。それだけ「生長の家」も信頼されてたんだ。どんな不良でも更生させる…と。
昭和37年夏。はからずも村上、花房、鈴木というヤンチャな、野心に燃えた男達がここ飛田給に揃ったわけである。しかし、「桃園の誓い」にはならない。三人がバラバラで、「チェッ、なんだあいつは」と軽蔑の眼差しを向けていたようだ。

(5)壮大な「世直し」を考えていたんだ



赤坂乃木坂の「生長の家学生道場」で

この本の90ページには私の「証言」も入っている。「それまでして票が欲しいのか」と思ったと言っている。

〈でも村上さんは本気だった。本当の信者になり一から始めたのだ。早起きして便所掃除したり、長時間正座してお祈りしたり…。政治家でそんな人はいないから、「何もそこまでしなくても」と同情したほどだ。彼は僕より11才上だったが、「信仰を持った人間が日本を変えるべきだ。鈴木君は学生運動を変えろ。俺は政治を変える」と言って僕らをよく励ましてくれた〉

当時、「生長の家」は壮大な「世直し」を考えていた。経営者を中心に「栄える会」を作った。教員を中心に「新教育者連盟」。さらに芸術家の「芸術家連盟」…と。学生運動、政治だけでなく、あらゆる分野で、信仰による世直しをやろうとした。

その頃、教えを受けた人で、今も活躍している人が多い。政治家の井脇ノブ子、衛藤晟一、日本会議の事務局長の椛島有三氏、安倍首相のブレーンといわれた日本政策教育センターの伊藤哲夫氏などだ。又、大学教授なども数多くいる。「証言」の中で、私は、最後にこう言っている。

〈谷口雅春先生は「今、日本は危機だ。宗教家も勇気を持って立ち上がれ！」と叫んでおられた。生長の家は当時の愛国運動の中心だった。そんなときに活動できたことを僕は今も誇りに思っている。

また、「世の中は思い通りになる」「祈りは必ずきかれる」「一番大事なのは言葉だ」「病はない」…と教えられた。苦しい時はそうした教えを思い出して力づけられてきた。もし生長の家と出会わなければ、僕はたぶん自殺していただろう。どれだけ救われたか分からない〉

さらに、「あとがきにかえて」でも魚住さんは私の「証言」を長く紹介してくれた。ありがたい。この本は、村上正邦さんの本であると共に、「生長の家」の愛国運動史であり、戦後日本の「右派勢力」の歴史でもある。又、ある部分、「私の歴史」でもある。勝手にそう思って読んだ。

このあと、玉置和郎さんは当選し、政界の暴れん坊として、「青嵐会」を作り大活躍する。村上さんも議員で大活躍する。他に、玉置猛雄、寺内弘子、小山孝雄といった人々も「生長の家」から政界に入り、次は、「僕らの世代」のはずだった。学生運動で活躍した人間が政界に入って、「世直し」をする。そう思っていた。ところが、「生長の家」はある日突然、政治から手を引く。

そして、村上さん達も梯子を外された。さらにＫＳＤ事件に巻き込まれる。しかし、村上さんは今も信仰の人だ。前に紹介したが、「困難にたわむれよ」という谷口先生の言葉を今、噛みしめている。必ずや光明が訪れるだろう。

【だいありー】


狼に説き聞かせている聖フランシス

(1)11月12日（月）３時、九段会館。全愛会議・第50回記念全国大会」。運動の先輩、同志達と会った。

終わって新宿に。明日の対談に備えて「ALWAYS　続・三丁目の夕日」を見る。よかったね。感動しましたよ。

夜、石川県の布清信君と電話。「おといの中日新聞、よかったね」「なにそれ？」。僕が出てコメントしてたらしい。あっ、そういえば取材されたな。東京新聞（中日新聞）に。今度上京するとのこと。「昔、“お山の集い”をやってたでしょう。その記録が『理想世界』に載ってますから、持って行きます」と言う。

布君は生長の家学生道場の後輩だ。お山というのは谷口雅春先生のお宅だ。そこに月一回、我々学生道場生はおうかがいし、直接、指導を受けた。そこで私は「生学連新聞を作らせて下さい！」と直訴し、新聞が出来た。最近、その縮刷版を昔の仲間から借りた。懐かしかった。時代を反映して、やたらと戦闘的だ。左翼的な言葉も多用している。先輩の小山孝雄さんに、「左翼の言葉を使っていては左翼になる。いけない」と注意された。小山さんはとても信仰的な人で、聖フランシスのような人だった。この人なら小鳥や狼にも説教できるだろうと思った。しかし彼は政治家になり、ＫＳＤ事件に巻き込まれる。

(2)11月13日（火）４時から「山の上ホテル」で対談。

(3)11月14日（水）２時40分から、ジャナ専の授業。「時事問題」。東京新聞（11月10日付）が送られてきた。「こちら特報部」で私は話している。「君が代斉唱時の起立」の問題だ。「外形的な強制は下らない。ますます国旗・国歌への尊敬の念が失われる。大声で歌っている人も、保身や出世のためかもしれない。内面の思想を調べるなんてできない。美的感覚として強制することを愛国心と間違えるとおかしなことになる」「これは思想信条の自由だ。立つも立たないも自由にさせたらいい」。

ウーン、左翼の人よりも過激なことを言ってるよ、この人は。

(4)11月15日（木）３時から河合塾コスモ。牧野剛先生が選んだ本で、辺見庸の『いまここに在ることの恥』（毎日新聞社）をテキストにして皆で話し合う。

(5)11月16日（金）一日、原稿を書いていた。進まない。終わらない。この日発売の「週刊読書人」に私の原稿が載った。早見慶子さんの「Ｉ　ＬＯＶＥ 過激派」（彩流社）の書評だ。

(6)11月17日（土）３時半、石川の布清信君と会う。この後、一水会事務所に案内して、木村氏達とも会う。さらに新宿に。犬塚氏、桜マミさん達と会う。「生長の家道場」時代の話を聞く。当時は私は荒々しくて、喧嘩っ早くて、恐かったそうな。フーン、と他人事のように聞いちゃった。そんな私が懐かしい。でも、もう戻らないもんね。

【お知らせ】

(1)11月20日（火）新宿ジュンク堂（８Ｆ喫茶）でトーク。18:30より。『Ｉ LOVE 過激派』の早見慶子さん、それに『憂国論』の木村三浩氏。テーマは「生きること、死ぬこと」。私も付録

で出ます。入場料1000円（ドリンク付）。申し込みは７Ｆカウンターへ。03(5363)1300。先着40名だから早く申し込んだ方がいいでしょう。

(2)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後2時より高田馬場のホテルサンルートで。第1部は追悼祭。第2部は記念講演。元楯の会五期生・山口良男氏が講演し、「わが青春の楯の会----三島由紀夫・思想の根源」です。誰でも参加できますからどうぞ。

(3)11月25日（日）日本にルーブル美術館やMOMAのような巨大な美術館を作ろうというプロジェクトが進められ、その一環として、 「芸術立国。皇居美術館の提案」という衝撃的 シンポジウムが行われます。御厨貴さん（東大教授）、原武史さん（作家）、そして私がパネラーです。

(4)12月12日（水）一水会フォーラム。大下英治さん（作家）です。

(5)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。

(6)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園。故田中義三さん一周忌の集い。

(7)12月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のトークライブ。「国家・死刑・戦争」で、出演は佐藤優、森達也、綿井健陽、阿曽山大噴火、そして私です。

(8)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

(9)２月10日（日）午後７時半。阿佐ケ谷ロフトで、「ユーストーク」のイベント。「愛国心」について。私も出ます。

【お知らせ２】

木村三浩氏の衝撃的な本が出ました。絶讃発売中です。『「男気」とは何か＝軟弱なる時代に学ぶべきこと＝』（宝島社新書・700円）です。木村氏の闘争の歴史であり、民族派運動の歴史にもなってます。面白い本です。読んでみて下さい。売れるでしょう。

HOME

今週の主張

バックナンバー

男気ですよ！右翼は！

今週の主張11月26日

(1)〈右翼〉の定義って何だろう



木村三浩『「男気」とは何か』（宝島社新書）

〈右翼〉とは何だろう。いろんな人が定義している。「天皇を守る人」だ。いや、「日本を守る人」のことだ。「道義を大切にする人」だ。「忠に生きる人」だ…と。血盟団事件の井上日召は「ワシのことを右翼と言うな。ワシには翼がない！」と言っていた。鳥の鷲（わし）には翼があるが、このワシには翼がない。戦後、占領軍に取り調べを受けた時、「I Have no wing」と言った。

野村秋介さんも「俺のことを右翼と呼ぶな」と言っていた。昔、「朝日ジャーナル」で下村満子編集長と対談し、「右の翼しかないなんて、差別だ。右翼と呼ぶな。これからは日本浪漫派と呼んでもらいたい」と言っていた。いいねえ。でも、「日本浪漫派」という言葉は定着しなかった。

「日本自虐派」の私は、「どうとでも呼んでくれ」と言っている。どうせこんなものは記号だ。渾名（あだな）だ。右翼でも左翼でも何でもいい。名前なんかこだわらん。自分の名前だってこだわらん。邦男と書かれようと国男、邦夫…なんだっていい。邦男だって、いつも間違われている。兄貴に叱られた。

〈お前の名前の「クニ」は、よく「邦」と書かれているが違う。本当は、左側が上に突き抜けない「クニ」だ。キチンと直せ。名前に誇りを持て〉



でも、活字は皆、「邦」になっている。左が突き抜けない「クニ」は活字にないんじゃないの。よく分からんが、どうでもいいやと思ってる。それに、いちいち名前を直してもらっては面倒だ。「右翼だからクレームをつけるんだ」と思われてもいやだ。この前、布（ぬの）君や木村、犬塚両氏らと桜マミさんの店に行ったら、「クンタ！」なんて呼ばれた。「クニちゃん」とも。何とでも呼べよ。イラクに行った時は、KUNIOが読みづらいらしく、「クニョン」とか、「クニョニョン」と呼ばれた。其れ以来、日本でも「クニョニョン」と呼ぶ人が多い。

さて、そんないい加減な私でも〈右翼〉の定義を求められることがある。そんな時は、「日本人の原型」と言っている。あるいは、「自分こそ日本を代表すると思っている人間」だ。ちょっと長い定義だな。「日本人の原型」「日本の源液」がいいかな。

一水会代表の木村三浩氏は、〈右翼〉のことを、「男気（おとこぎ）」と言う。男気の世界が

右翼の世界だと。うん、これが一番ピッタリするかもしれない。男気があるから日本のために死のうとする。困難にもたじろがない。逃げない。そして、仲間を大事にする。困っていたら助ける。分かりやすい。

男気をキーワードとして右翼の世界を語っているのが、この本だ。

木村三浩氏の『「男気」とは何か』（宝島社新書700円）だ。サブタイトルは「軟弱なる時代に学ぶべきこと」だ。11月24日、野分祭の日に発売だと言ってたが、15日にはもう書店に並んでいた。ネーミングがいいし、目立つ。読んで分かりやすい。だから売れるだろう。

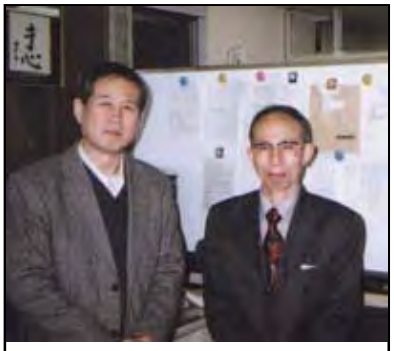
「これは売れるよ。いい本だ。５万部はいくだろう。ブレークして、10万以上のベストセラーになるかもしれない」と私は言った。

本の帯にはこう書かれている。

〈「右翼」とは「男気」の世界である。
右翼活動家に学ぶ「男らしさ」とは。
「男気」なくして人生もなし！！〉

さらに、裏の帯には…

〈君たちの周りに、「男気」のある人間はいるか？
責任を取らない上司。
愚痴だけで行動しないサラリーマン。
匿名批判だけで満足しているネットの連中。
自分のことしか考えていない政治家…。
「男気」の世界、お見せします〉


布清信君（右）と（11月17日）

いいねー。日本の右翼は勿論、世界の「男気」の人々も紹介している。イラクのサダム・フセイン。ロシアのジリノフスキーなどだ。今年８月に一緒に中国に行ったが、「中国有力者との対話」も載っている。

(2)これはもう一つの「パッチギ」だ


木村三浩氏（左）と。北京市・頤和園で

自らの闘いの半生についても詳しく書かれている。国士舘高校に通い、毎日のように朝鮮高校生と闘っていた。その頃の話は詳しく知らなかったので、この本の中で興味深く読んだ。結構、カラッとした闘いで、その後は、会ってお互い、「あの頃はよく喧嘩したなー」と言い合ってたという。知らなかったね。もっと陰湿な闘いをイメージしてたので。何やら早大における全共闘と右翼学生の殴り合いのようじゃないか。映画「パッチギ」を逆から見たら、こうなるのか。じゃ、国士舘高校から見た「パッチギ」を撮ってみても面白い。

木村氏の民族派運動に入ってからのことは知ってるが、その前の国士舘高校のことは知らなかったので面白かった。又、家族のことも興味深く読んだ。軍人だったお父さん、優しかったお母さん。それにお姉さんの影響が大きかった。お姉さんは新左翼だった。お母さんが早く亡くなり、12才年の違うお姉さんが母代わりをして面倒をみてくれた。右翼少年の弟（三浩氏）に戸惑いながらも、温かく見守ってくれた。お姉さんは「社青同」（社会党青年部）の周辺で運動をし

ていた。そして、木村氏はこう言う。

「あたたかく見守ってくれる人が左翼だったというのが、私の左翼アレルギーをつくらなかった理由かもしれない」

そうだったのか。木村氏は新左翼の友人が沢山いる。塩見孝也、植垣康博、荒岱介さんらとも友人だ。田中義三さんとも心を許し合っていた。僕は学生時代、左翼とは、論争では負けていたので、殴り合いばかりしていた。でもスカッとしていた。又、左翼にも凄い奴、尊敬するべき奴は沢山いた。だから、「新左翼コンプレックス」を持っていた。

木村氏は統一戦線義勇軍の時代から、ヘルメット、覆面で過激なデモをしていた。僕と同じように「新左翼コンプレックス」があるのかと思ったら、違っていた。新左翼のお姉さんの影響だったんだ。いい話だ。

12才というと、うちもそうだよ。同じマトンだ。羊年だ。僕が小学校４年（10才）の時に姉は嫁にいった。函館だ。姉は22才の時。それからは、ずっと会ってなかった。たまに、子供を連れて里帰りをしていた。

そして高校３年で、私が教師を殴って退学になった時、心配して駆けつけ、ずっと側にいてくれた。退学処分を解いてもらうために毎日、教会に通い、懺悔の日々を過ごした。「カノッサの屈辱」のようだった。その時、私を毎日、教会に連れて行ってくれた。「どうにでもなれ。教会になんか行くもんか」と捨て鉢になっている私をなだめすかして連れて行ってくれた。

姉には本当に世話になった。礼も言ってなかった。又、両親、兄、弟にも迷惑をかけた。一家の厄介者だった。どうしようもない次男坊だった。

木村氏の本を読みながら、私は姉のことを思い出してしまった。木村氏の場合はお母さんが早く亡くなり、その分、お姉さんの存在がもっと大きかったんだろう。「巨人の星」みたいだ。でもお父さんはチャブ台をひっくり返したりはしない。

「左翼アレルギー」はなかったが、左翼と闘うことは沢山あった。右翼だから、衝突することは多い。左翼と衝突する。乱闘にもなる。中核派とぶつかったこともある。東郷健を襲撃したこともある。命の危険もあった。そしてこう述懐する。

〈私と我々のグループが起こした左翼との対立は、誰よりも直接的だったと自負している。
最近はすっかり優しく見える鈴木顧問も、左翼・極左勢力とのすさまじい暴力的対立を切り抜けて生き残った上で、今があるのだ。もしかすると鈴木顧問も、20代、30代で、極左の誰かを殺して刑務所に行っていたかもしれない。あるいは、極左に殺されていたかもしれないのである。
その危険を背負っているのは私も同じだ〉

(3)「君たちは革命マシーンになれ！」とハッパかけてたらしい。私は



木村三浩『憂国論』（彩流社）

確かに、よく生き延びてきたなと思う。本当は死んでいて、今の私は幻なのかもしれない。でも、一水会代表の時は、私もまだ過激だった。なんせ、「二輪車理論」で進もうと思っていた。合法部隊と非合法部隊の二輪車だ。パクられるのは男の勲章だ。「君らは革命マシーンになれ！」と若者にハッパをかけていたらしい。「休みたければ墓に入ってからゆっくり休め！」とも言ってたらしい。最近は政治家と同じで、昔のことを思い出せない。守屋元防衛次官に名指しされても、「２年前のことだから、同席したかどうかは覚えてない」なんて政治家は言ってる。まァ、私はさすがに、２、３年前のことは覚えているが、20年、30年前の過激な非合法時代のことは忘れた。「あいつを殴れ」「こいつを殺せ」「拉致して半殺しにして、山に埋めろ！」なんてことも言ったというが、記憶にない。木村氏も書いてないから、そんなことは言ってないんだろう。

赤報隊事件も記憶にない。「鈴木顧問は赤報隊とは関係ないと思う」と木村氏は書いてるから関係ないのだろう。ホッとした。自分の遠い記憶の中では、何か関係があったように思っていたので、これは安堵した。

さて、「テロ」の話だ。自分のことは自分が一番よく知ってると思う。しかし、違うんだ。案外、外から見る方がよく分かるのかもしれない。木村氏は言う。

〈一見、気骨あるようには全然思えない鈴木顧問は、実は気骨の塊だ。テロはいけないと否定しながら、実に短気だし、素質は十分すぎるほど持っている〉

ギクッとした。テロリストの素質は十分にあると太鼓判を押されたのだ。実を言うと、私も、かつては「テロリスト志願」だった。又、自分で自分を抑え切れないところがあった。それで何度も何度も失敗している。だから、人間を変えたのだ。性格を変えるのではない。そんな、生易しいことではない。人間が全く変わったのだ。別人が乗り移ったようなものだ。細胞も全く変わった。

この本には、他にも、「テロリスト志願」の私の「危ない側面」に触れたところがあったな。（と、パラパラと本をめくる。あっ、ここだ、ここだ）

〈鈴木顧問の憂国精神と、それを基本とした内に秘めた怒りがどの程度のものなのか。左翼やマスコミが、どれだけ理解しているのだろうか。

私は近くで見てきたから、鈴木顧問の内部にあるマグマをよく知っているつもりだ。鈴木顧問が「テロを放棄する」と断言してしまったのは、個別の「赤報隊事件」を契機としてというより、普遍的なことだと思うが、自分に強いタガをはめないといけないと考えたからだろう〉

ここも読んでいて「ギクッ」とした。確かに、荒れ狂う〈マグマ〉はある。それに「タガ」をはめようとした。確かに言える。自分のマグマが怖いから、もう、デモには出ない。我を忘れて機動隊と乱闘してしまう。そんな自分が怖い。

また、酒もやめた。酒を飲んでカーッとなって喧嘩したこともある。人を殺したこともある。（ないか）。それまでは浴びるほど飲んでたのに。ある日を境にして、やめた。そして、「自分は酒が嫌いだ。こんなものを飲むと気持ちが悪くなる」と自分で自分に暗示をかけた。そうしたら、本当に酒が嫌いになった。タバコもやめた。パチンコをもやめた。マリファナもやめた

（これは元々、やってないか）。

いけない。この本の自分の所だけを紹介してしまった。気になったもので。でも、野村秋介さん、蜷川正大さん、犬塚哲爾さん、阿部勉さん…などの先輩についても書いている。それらのいい先輩がいるので今の木村氏もいる。又、「無二の親友」見沢知廉氏のことも書かれている。これは本を買ってじっくり読んでもらいたい。美わしい同志愛の物語でもある。

しかし、世界を飛び回り、日本にいても超多忙な毎日なのに、よくこれだけの本を書けたものだ。感心した。人知れず努力しているのだろう。努力といえば、木村氏は非常な勉強家だ。国士舘高校を出たといったが、その後、随分たって、大学に入ろうと思いたった。そして、猛勉強の末、慶応大学に入学し、通い、卒業した。大したものだ。

卒業後も、慶応には講演で行ったり、知り合いの教授を訪ねたりしている。ある時、学内で小田実さんにバッタリ会った。小田さんは、この時、特別講師をしていた。短期間、集中的に講義してたのだ。「どうして木村君が」と驚き、お茶に誘われ、いろいろ話したという。

(4)31年前の合宿。集会。貴重な歴史的証言だ



米沢集会で受付をする桜マミさん（1976年）

小田さんとは因縁がある。平成２年（1990年）の２月23日、「朝まで生テレビ」で一緒に出た。「日本の右翼」の時だ。右翼７人が出て、迎え撃つのは大島渚、野坂昭如、小沢遼子、色川大吉、小田実さんらだった。大激論になった。とりわけ厳しいのは左翼側の小田実さんだった。今から考えると、皆、勇気があったと思う。

今の討論番組と違い、皆、怖かっただろう。普通なら出ない。下手なことを言えない。右翼は後で襲ってくるかもしれない。殺されるかもしれない。そう思ったんだろう。それなのに生命の危険を顧みず、出席したんだ。小田さん達は本当に偉いと思う。

テレビ司会者の水口義朗さんは木村氏にこう言った。

〈木村君と小田実は、ちょっと似てるんじゃない？　世界が危ないと思ったら、すぐ現場のイラクに出て行く行動力は似ていると思うよ〉

これは言える。小田さんは若い頃、『何でもみてやろう』を書いて若者を魅了した。世界中をみて歩いた記録だ。後、北朝鮮に行き、キム・イルソン（金日成）さんにも会っている。

木村氏のこの本はいろんな人に勧めている。石川県の布清信君にも勧めた。11月17日（土）に上京したので、まず本屋に行って、木村氏のこの本と、魚住昭さんの『証言・村上正邦』を買ってもらった。石川に帰ってから電話をよこし、「一気に読みました。よかったですね」と感動していた。「木村さんと鈴木さんとは一体ですが、でもテロについて考えの温度差があって、そんなところも正直でよかった」と言う。

そうだ。17日（土）は、本屋に行った後、「生長の家学生道場」の話をいろいろ聞いた。彼は道場の２年後輩だ。「鈴木さんは自治会委員長で皆を叩き起こしていた。ストライキのある大学に道場生を連れて行って闘っていた。又、僕らが入った時、夏休み中に谷口先生の『生命の実相』40巻を全部読め！と言われた」。

へエー、そんなことを言ってたのか。私は。話を聞いた後、一水会事務局に行き、その後、木

村三浩、犬塚哲爾、野里氏らと合流した。布君は、木村、犬塚氏とは旧知の仲だ。そして、新宿の桜マミさんのお店に行った。マミさんに会うなり、「久しぶりです」と布君は言う。エッ、知ってんの？　「石川県の合宿で会いました」という。いつの話だよ、と聞いたら、

昭和51年（1976年）８月６、７、８日だという。ゲッ、31年前じゃないか。よく覚えてるね。「その次の日、８月９日に、鈴木さんは七尾の私の家に来てくれたんです」「エッ、記憶にないよ」

それで家に帰ってから、『レコンキスタ・縮刷版』を調べてみた。確かに布君の言う通りだった。山本次郎（評論家）、鳥海茂太（米沢市議会議員）、そして私の三人がレポートを発表し、質疑応答だ。かなり密度の濃い合宿だったようだ。参加者は20人。この時、桜マミさんも参加してたという。

合宿では、山本氏は「内乱論」の話をする。延々15時間に及ぶ連続講義だという。凄い。鳥海さんは、「地方運動論」。私は何を話したんだろう。「レコン」から紹介してみる。

〈鈴木氏は「天皇と敗戦と失地回復」（「土とま心」第４号）、「断絶なき草莽・恋闕の心」（「朝日ジャーナル」８月13日号）、さらに自ら作製のレジメを資料に天皇論を展開。全員で資料を輪読しては鈴木氏の論に傾注するといった具合。鈴木氏は天皇擁護論と打倒論者の天皇観の位相はむしろ逆転し、“護持勢力”がむしろ自信を喪失してきていることを指摘する。そうした中で天皇を精神的拠点とする我々が維新的状況を切り拓くべく、目下急務とする作業にも言及し、戦術、戦略を踏まえた闘いの方向性を具体的に指示した。（この項約５時間）〉


同じく桜マミさん

驚いた。私は随分と真面目な話をしている。31年前か。この頃の方が、もっと勉強し、真面目な論文を書いている。「朝日ジャーナル」といえば、かなり左翼的な雑誌だ。そこに、よくもこんな極右的なタイトルの原稿を載せてくれたもんだ。「断絶なき草莽（そうもう）・恋闕（れんけつ）の心」だよ。それに今なら、私もこうした原稿は書けない。探して読んでみよう。

「レコン」の縮刷版を見ていたら、この石川合宿の２ヶ月前、山形県米沢市で集会をやっている。鳥海茂太さんと野村秋介さんが中心になってやった、「新しい日本をつくる青年集会」のスタートだ。これ以来、仙台、福島、会津若松などで開催した。

米沢集会には、阿部勉、犬塚哲爾、笹井宏次郎氏も参加し、講演している。それに何と、桜マミさんが受付をしている。かわいい。この時は、ポルノ女優で現役の頃だったのか。せっかくだから、このＨＰにも写真を載せよう。この時から、31年もたってるのに桜マミさんはちっとも変わらない。31年前と同じ美しさで、同じ若さだ。同じ体型だ。まるで由美かおるみたいだ。嘘だと思うなら新宿のスナック「フィポナッチ」に行ってみたらいい。

【だいありー】



新宿ジュンク堂のトーク。左より鈴木、早見、木村氏（11月20日）

(1)11月19日（月）「朝日新聞」の朝刊に『超日本国憲法』（講談社）の広告が出ていた。これで、さらに売れるだろう。昼、打ち合わせ。その後、閉じこもって原稿を書く。

(2)11月20日（火）夕方6:30から新宿ジュンク堂８Ｆの喫茶室でトーク。早見慶子さん（元戦旗派運動家）の『I LOVE 過激派』、木村三浩氏（一水会代表）の『憂国論』（共に彩流社）の刊行を記念してのトーク。テーマは「生きることと死ぬこと…」。私が司会をした。木村氏はさらに『「男気」とは何か』（宝島社新書）を出した。又、元日本赤軍の和光晴生さんは『赤い春』（集英社インターナショナル）を出した。これは新しい〈革命文学〉の誕生だと思う。二人とも命がけの闘いをやってきた。その中に於ける死生観を聞いた。又、これからの運動の方法論も聞いた。超満員だった。質疑応答も活発に出た。

　終わって、近くの居酒屋で飲んだ。楽しい会になった。

(3)11月21日（水）原稿の〆切があって寝てない。２時40分からジャナ専の授業。「時事問題」。パール判事の話をした。雑誌社の人が授業風景を撮影に来た。恥ずかしかった。渡辺長武さん（アマレス・金メダリスト）が他の授業の講師で来ていた。久しぶりに会った。

　７時から志の輔さんの落語を聞きに行った。安田生命ホール。最近、忙しくて行けなかったので、久しぶりだ。よかった。



トークが終わって３人で

(4)11月22日（木）昼、打ち合わせ。河合塾コスモは今日は休み。７時から、自由人権協会（ＪＣＬＵ）の創立60周年記念レセプションに出る。その前に６時から、作家の井上ひさしさんの講演があった。「あの時はすみませんでした」と謝った。会うたびに謝っている。いつまでも謝らなくてはならない。昔、「井上ひさしは売国奴だ！許せん！」と思い、連続して脅迫電話をした。でも、さっぱり怖がらない。それどころか、〈理論闘争〉を仕掛けてくる。そして僕らは、ことごとく論破された。それで、皆、「もう電話するのはヤダ！」と言って、中止になった。本当は、こっちが論破され、こっちの方がダメージが大きいのに、会えば「すみませんでした。ごめんなさい」と謝罪している。江田五月さん。福島瑞穂さんにも会った。

((5)11月23日（金）昼、図書館。帰って来てずっと原稿を書いていた。



「国体文化」一千号記念祝賀会で（11月10日）

(6)11月24日（土）三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」。午後２時からサンルートホテル。毎年、この日になると身も心も引き締まる。あの日のことを思い出す。全国から多くの同志が集まってくれた。第２部は、記念講演で、元楯の会五期生・山口良男氏が講演。「わが青春の楯の会～三島由紀夫・思想の根源」。感動的な話だった。その後、場所を移し、遅くまで語り合った。

(7)11月25日（日）午後４時、新宿オゾン。「芸術立国・皇居芸術館の提案」というシンポジウムに参加する。御厨貴さん（東大教

授）、原武史さん（作家）などと一緒。なかなか衝撃的で、面白い討論会だった。とても勉強になった。

【お知らせ】

(1)12月12日（水）一水会フォーラム。大下英治さん（作家）です。

(2)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。

(3)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園。故田中義三さん一周忌の集い。

(4)12月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のトークライブ。「国家・死刑・戦争」で、出演は佐藤優、森達也、綿井健陽、阿曽山大噴火、そして私です。

(5)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

(6)２月10日（日）午後７時半。阿佐ケ谷ロフトで、「ユーストーク」のイベント。「愛国心」について。私も出ます。

HOME

今週の主張

バックナンバー

これぞ最強の「右翼撃退法」だ！

今週の主張12月３日

(1) 人権と自由。そして、ユーモア



井上ひさしさん（右）と（11月22日）

井上ひさしさんに謝罪した。先週もそのことは書いた。もう少し詳しく書く。11月22日（木）、日本プレスセンターで、社団法人自由人権協会 （ＪＣＬＵ）の「ＪＣＬＵ創立60周年記念」集会が行われた。７時30分から記念レセプションで、その前に、６時から７時半まで、井上ひさしさんの記念講演が行われた。

〈井上ひさしと『憲法』を熱く語ろう。
＝自由と平和を改めて考える＝〉

というテーマだった。聞き手は山田健太さん。ＪＣＬＵ理事・事務局長で、専修大学文学部准教授だ。10階の大ホールは満員の人だった。500人ほどが入ったのだろう。日本を取り巻く情勢、言論の不自由、そして憲法の話をする。人間はどんどん変わってゆく。しかし、平和は守ってゆかなくてはならない。そんな話をしていた。

山田健太さんが面白い話をしていた。学生にレポートを提出させたら、携帯電話にメールでよこした学生がいた。２千字だ。400字原稿用紙で５枚分か。その位は、簡単にメールで送れるんだ。でも、読むのが大変だ。ジャナ専でも後期のレポートがある。そろそろ、テーマを決めないといけん。その時は、「メールで送るのはやめて下さい」と言わなくっちゃ。

講演後、駆け寄って井上ひさしさんに挨拶した。「あの時はどうもすみません」と謝ろうと思ったら、「あっ、鈴木さん。毎月読んでますよ」と言われた。「創」を読んでるという。恐縮した。嬉しかった。それから例のことを謝った。

何年前のことだろう。僕が産経新聞をクビになってすぐかな。じゃ、30年近く前か。何のことか忘れたが、「井上ひさしはけしからん！」となった。右翼仲間で集まっていた時だ。「井上は国賊だ！」「非国民だ！」「許せん！」となった。酒も入っていたかな。それで井上さんの電話を調べて、抗議電話をした。抗議というより脅迫電話か、嫌がらせ電話だ。

「こちらは右翼の○○○という団体だ！」と言うと、普通ならそれだけでビビる。恐れ入る。そうすると我々は更に怒鳴る。快感だ。そんな事を前にも何回もやったのだろう。「国賊なんか脅しつければいいんだ！」「震え上がらせてやれ！」と思ってやった。これは、「正義」の運動だと思ってやった。（本当は卑劣な脅迫電話なのに）。

だから、その日も、「井上の野郎、許せん！」「よし！俺が電話で糾弾してやる！」と一人が電話した。ところが、いつもと様子が違う。井上さんが出たが、全く怖がらない。ビビらない。

「私の発言の何が不敬なのか言って下さい。冷静に議論しましょう」と言う。さらに、「皆さんは右翼ですよね。天皇陛下を大切だと思ってるんですよね。だったら当然、歴代の天皇さまの名前を全部、知ってますよね」と言う。電話した右翼はビックリした。全く知らない。さらに井上さんは言う。「不敬な私でも言えますよ。言ってみますから間違ったら直して下さい」と言う。右翼は焦った。「ウルセー！バカヤロー！」と言って電話を切っちゃった。

「じゃ、俺がやる！」とかわって電話した右翼も、撃退される。井上さんは言う。「せっかくだから、聞かせて下さい。右翼の人は何を食べてるんですか。どんな生活をしてるんですか」と根掘り葉掘り、聞いてくる。脅迫してるのに、逆に取材されちゃってる。こりゃダメだと思い、彼も「ウルセー！」と言って切った。



『ヤマトタケル』（現代書館）

日を改めて電話した。奥さんが出た。でも、奥さんにも、やり込められた。「次、お前やれよ！」「ヤダよ、あいつ、うるさいから…」と皆、敬遠し出す。逃げる。ビビる。それで、とうとう、ギブアップした。完全に撃退された。私ですか？傍観してたんじゃないかな。あるいは電話をして撃退されたのかな。どうも記憶が不確かだ。ただ、仲間達が次々と井上さんに撃退されていった事実は鮮明に憶えている。

しかし、「天皇の名前を言えるか」には、まいったな。僕だって全然知らない。「教育勅語」は右翼のたしなみとして、昔、暗記したことがあったけど、天皇の名前は知らない。井上さんは、僕より10才ばかり上だから、子供の頃に憶えさせられたんだろう。これは〈最強〉だね。どんな右翼が抗議に来ても撃退できる。「チクショー、井上の野郎！」と言いながら、皆、悔しがったが、どうしようもない。「井上の野郎、汚い手を使いやがって！」と怒ってる右翼もいるが、汚いのはこっちだ。

歴代の天皇の名前を憶えていれば、最強だ。最強の「右翼撃退法」だ。護身術になる。なんなら「教育勅語」でもいい。こっちの方は、文章だから憶えやすい。名前の方は大変だ。文章じゃないし、ストーリーもないから。

(2)「天皇の名」は日本刀よりも強し！

この話はどっかに書いたな。と思って探したら、あった。３年前に出した『ヤマトタケル』（現代書館）だった。何と、井上ひさしさんのイラストまでついている。紹介しよう。井上ひさしさんと、もう一人、矢崎泰久さんが並んで、「天皇の名が私たちを守ってくれました」と言っている。

そうか。矢崎さんも右翼撃退の武勇伝があるんだ。かつて、『話の特集』の編集長をやっていた時、「不敬な記事がある」と、日本刀を抜いた右翼が怒鳴り込んできた。右翼は「俺達は天皇を守っている。天皇を侮辱する奴は許せん！」と言う。



『ヤマトタケル』（現代書館）より

「わかりました。天皇を守るんだから歴代天皇の名前は全部知ってるでしょう」と言ったら、その日本刀右翼は20代くらいまでしか言えなかった。矢崎さんは戦争中に全部憶えさせられた。その場で暗唱して、漢字まで書いてみせた。それで右翼は「恐れ入りました」と言って帰っていった。マンガのような話だが、実話らしい。

でも、その右翼だって偉いよ。20代まで言えたなんて。私なんて、自慢じゃないが全然知らない。最初の神武天皇は知ってるが、あとは知らない。だから、「エセ右翼」と言われるんだよな、ネットで。

何も、自分で見たわけじゃないが、先日、雑誌社の人にインタビューされた。「鈴木さんは“エセ右翼”とネットで批判されてますね。頭に来ませんか？　40年も右翼をやってるのに」と。「全く来ませんね。むしろ光栄です。全国民にそう呼んでもらいたい」と言っちゃった。

では話を戻して、「自由人権協会」のことだ。今年60周年を迎えての記念講演とパーティだ。60年前から入っている人はいるのだろうか。聞き損ねた。僕は、この協会の主催するシンポジウムに一度呼ばれた。去年の８月に自民党の加藤紘一さんの実家が右翼の人に焼き打ちされた。その問題をめぐってシンポジウムが行われた。当の加藤さん、半藤一利さん（作家）、弘中惇一郎さん（自由人権協会代表理事）などだ。なかなかいい討論会だった。その時、お世話になったので、ぜひ出席しなければと思った。実は、この日は他に行く予定があったんだが、そこは欠席しちゃった。

井上さんの話は力が入って、８時近くまで延びた。それから下（９階）のパーティ会場に移る。三浦和義さんなどに会う。終了間際に江田五月さん（参議院議長）と福島瑞穂さん（社民党党首）が駆けつけた。福島さんはよく会っている。社民党の集まりには私もよく出ている。

江田五月さんは久しぶりだ。前にテレビの討論会で一緒に出た。「朝生」だったと思う。「あの時はどうも」「久しぶりでした」と挨拶した。江田さんは、「今日は今野東さんの落語会に行って来て、それで遅れたんですよ」と言う。「えっ、実は僕も招待状をもらって行く予定だったんですよ」と言った。今野東さんは民主党の議員だ。９月29日に「９条フェスティバル」で今野さん、重信メイさん、私の三人で討論会をやった。今野さんは仙台出身で、落語好きだ。いや、プロ級だ。この日は日本青年館で、「難民支援チャリティー寄席」をやっていたんだ。「人権落語でとてもよかったですよ」と江田さんも感心していた。

それと、初対面だったが、「アムネスティ・インターナショナル日本」の理事長・講　美佳さんに会った。 僕は去年、アムネスティ大阪で呼ばれて、「死刑廃止」の話をして来た。「あの時はありがとうございました。私も行きたかったんですが」と言っていた。 見沢知廉氏も体調の悪い時に福岡のアムネスティに呼ばれて刑務所の話をしている。

(3) レペタさんのおかげで「法廷メモ」が自由になった



（左より）山田健太さん、江田五月さん、鈴木

やはり初対面だが、ローレンス・レペタさんに会った。大宮法科大学院大学の教授だ。この人は我々にとっても恩人だ。というのは、この人が運動して、裁判所でメモを取れるようになったのだ。知らなかったが…。

日本に来て、たまたま裁判を傍聴したら、「一切、メモをとってはならない」と言われた。そんなバカなと思って調べたら、そんな規制をしてるのは世界中で日本と韓国しかなかった。これはおかしいと思い、自由人権協会の弁護士さん達と裁判を起こした。そして

1989年に最高裁の判決が出た。それで、僕らは晴れて、堂々とメモが取れるようになったのだ。ありがたいことだ。

それまでは司法記者クラブに入った記者だけがメモを取れた。又、彼らの連れて来た画家だけが法廷画を描けた。一般傍聴人は両方できない。それがこのレペタさんのおかげで、1989年からメモもデッサンもできるようになった。田中義三さんの裁判の時は、それで大いに助かった。又、画家の水屋夕暮さんにデッサンしてもらい、それを「ＳＰＡ！」に載せたこともある。それもこれも、レペタさんのおかげだ。ありがとうございました。

自由人権協会の代表理事は弘中惇一郎さんら３名だ。弘中さんは叶姉妹の弁護人もやってたし、よくテレビに出ていた。「人権問題の裁判が増えて、被告も原告も両方とも自由人権協会の弁護士ということがあるんですよ」と言う。エッ？そんなことがあるのか。たとえば、一方は「プライバシーの侵害」で出版社を訴える。人権問題だ。訴えられた方は、「知る権利」で闘う。これも人権だ。人権同士がぶつかって闘う。同じ「自由人権協会」の人間同士が闘う。

でも、その「仕事」の争いは「自由人権協会」には持ち込まないのだろう。ちょっと僕らからは信じられないが、弁護士のルールなのだろう。

「でも、同じ弁護士事務所の弁護士同士では、敵味方になることはないでしょう？」と聞いたら、さすがにそれはないそうだ。そうか。大相撲だって、同部屋の力士同士は本場所で闘わないが、同門対決はある。そういうことかもしれない。

同じ部屋でも例外的に闘うことがある。優勝決定戦だ。前に、貴ノ花と若ノ花が闘った。やりにくそうだった。しかし、部屋では毎日、 ぶつかり稽古をしてるのに、本場所ではやれないのか。全く違うものがあるんだろう。

(4) 野分祭であの牧田氏が「爆弾発言！」



（左より）鈴木、伊藤好雄氏、牧田吉明氏（11月24日）

次は野分祭（11月24日）の話を少し補足しておこう。次の「レコンキスタ」にその情報が出るだろうが、実にいいお祭りだった。式典は厳粛に行われ、第２部の山口良男氏（楯の会第５期生）の講演もよかった。「楯の会」の活動だけでなく、三島について本格的に書いたものもあり、本として発表したいと言っていた。なかなかアカデミックで、大学院のゼミのような内容の濃い話だった。

三島は「楯の会」を作る前は、ガードマン会社などとも提携し、民間防衛組織の構想もあった。スイスの民間防衛をヒントにしたものらしい。初めは１万人規模。そして、もっと大きなものを考えた。それが次には祖国防衛隊になり、さらに百人の「楯の会」になった。なぜか。

三島は「憲法草案」の中で、徴兵制を否定している。「国防は国民の名誉ある権利であって、義務ではない」と言うのだ。その点について講演後、会場から質問が出た。「今の時代、志願兵だけで果たしてこの国を守れるのか」と。山口氏は、三島の考えを丁寧に説明し、答えていた。その後、伊藤好雄氏（元「楯の会」一期生。野分祭実行委員長）が、「三島さんはスパイを警戒したんですよ」と言っていた。徴兵制にしたら、誰が入って来るか分からない。それに当時は、圧倒的に左翼的なムードが強かった。左翼的な若者がドッと入って来る。明確な左翼でなくても、心情的に左の若者が多い。今とは全く情況が違う。それで、１万人の民間防衛構想もやめた。

「あっ、それはありうるな」と思った。「70年決戦」を呼号する新左翼、その中でも中核派な

どは「自衛隊引き出し作戦」を考えていた。学生の暴動が警察力だけで抑え切れない時は、政府は自衛隊に対し、治安出動を命じる。自衛隊は人民（暴徒だが）に向かって銃を向けることになる。そうすると自衛隊の正体が暴露されるし、これが必ず革命の突破口になるという。三島は逆に、この動乱を逆手にとって憲法改正を目論んだ。しかし、両者の思惑を越えて、自衛隊は出なかった。

中核派はこの「自衛隊引き出し作戦」に失敗すると、次は、自衛隊に入り、乗っ取ることを企てる。実際、小西誠さんらの「反戦自衛官」事件も起きる。小西さんらは三島の作戦を逆手に取ったのかもしれない。

ともかく、三島の「心配」は本当になったのだ。三島は時代を見通していた。「徴兵制にしたら必ず左翼がドッと入り、掻き回される」という三島の予測は当たった。さらに治安出動などに出されたら、一般の隊員も「反対」に回るだろう。「政府の軍隊」ではなく、「革命軍」になってしまう。

三島は「楯の会」の募集の時も、「スパイに気をつけろ」と言っていた。募集の責任者だった持丸博氏（「楯の会」一期生・初代学生長）から聞いた話だ。「まさか。スパイなんか入るかよ」と僕は笑っていたが、案外、ありうる話かもしれない。「自衛隊の潜入撹乱」に成功した中核派だ。「楯の会潜入」だって考えたかもしれない。

それが成功していたらどうだろう。これも又、面白い展開になっただろう。楯の会が分裂したか、あるいは三島とは別の意図をもって暴走暴発したか。その前にスパイを発見したら、査問するのか。その後は…。ウーン、見沢事件に似て来た。



（左より）木村三浩氏、堀辺正史先生、鈴木

そうだ。講師の山口良男氏はこんなことも言っていた。昭和45年６月の安保決戦期には必ず左翼の暴動が起こる。そして、「楯の会」の出番が来る。だから山口氏はいつでも出動できるように三島からの指令を待っていた、と。ところが、左翼は警察力で封じ込められ、暴動を起こす余力はなかった。それで、「楯の会」の出番も来なかった。

そうしたら、「それは僕のせいです」と言う男がいた。二次会の席で「爆弾発言」をしたのは、あの「爆弾男」の牧田吉明さんだ。「ピース缶爆弾」の牧田氏といえば、「あっ、あの人か」と思い出す人もいるだろう。「45年６月に、爆弾を作って50個、赤軍派に渡したんだ。でも赤軍派は使い方が分からなくて、全部不発になった。それで暴動も不発になり、三島を失望させることになった」と言う。スゲー話だよ。又、ゆっくり聞いてみよう。

他にも民族派の先輩や、懐かしい人、珍しい人々が来てくれた。骨法道場の堀辺正史先生も来られていた。大病をしたというが、元気そうなので安心した。先生は『わしズム』で毎回、小林よしのりさんと武士道についての対談をしている。又、近々、本を出すというので楽しみだ。

【お知らせ・スペシャル】

急遽、決まりました。何と、社民党で私が講演します。社民党の青年部に呼ばれたのです。三宅坂の社民党本部に乗り込みます。三島由紀夫が東大全共闘に呼ばれて、闘った時のような気分です。闘志満々です。頑張ります。12月15日（日）です。詳細はレギュラーの【お知らせ】を見て下さい。



社民党で講演をする

【だいありー】


（左より）御厨貴さん、鈴木、原武史さん（皇居美術館シンポジウムで。11月25日）

(1)11月26日（月）東中野図書館で勉強。調べもの。モーリス・ペジャールさんが22日に亡くなった。忠臣蔵をバレエ化した「ザ・カブキ」（1986年）や、三島由紀夫をテーマにした「M」（1993年）などを創作した。両方とも見たが、素晴らしかった。残念だ。

(2)11月27日（火）午後3時、汐留のロイヤルパークホテル。取材。元日本共産党No.4の筆坂秀世さんと、ベストセラー『反転＝闇社会の守護神と呼ばれて』（幻冬舎）を出した田中森一さんに会う。といっても三人の座談会ではない。個別の取材だ。二人は取材が終わり、私はこれから。その交差した短い時間に少し話をした。会えて嬉しかった。あの本は凄まじかった。皆実名で出てくるし。又、ゆっくり話を聞いてみたい。

しかし、汐留は、高層ビルばっかり建っていて、田舎者の私は迷ってしまう。帰りは新橋の喫茶店で本を読む。今月は忙しくて、ノルマが危ない。そのあと大衆食堂で食事してたら、中国人の店員さんの会話が聞こえた。「この娘は日本語ウマイ。日本語バラバラよ」。エッと思ったら、「バラバラじゃない、ペラペラよ」。そうだよな。又、別の中国娘が「中国ではペラペラのことをバラバラというのよ。それで間違えたんよ」。そしたら客のオッサンが、「日本では、バラバラとは殺人のことだよ」と教えていた。「ソーですか」と中国娘。しかし、中国では「ペラペラ」を「バラバラ」というのは、本当かな。河合塾コスモの福田さんに聞いてみよう。彼女は中国育ちで、中国語ばらばらだから分かるやろ。（注：その後、聞いたら本当だった）

(3)11月28日（水）２時40分。ジャナ専。「時事問題」。ダライ・ラマとチベット独立運動の話をした。私が生まれて初めて海外旅行をしたのはインドだった。右翼の人達と行った。リーダーは高橋尚樹氏で、「チベット独立運動」をしていた。それで、デリーから列車で二泊三日の旅をして、ダラムサラに行った。そこに「チベット亡命政権」があり、ダライ・ラマ猊下にお会いし、

お話を聞いた。この亡命政権の村で５日ほど滞在した。そのことを思い出しながら授業をした。
　夜６時半。新宿南口の紀伊国屋サザンシアター。井上ひさしさん原作の「円生と志ん生」（こまつ座）を観る。和多田進さん（元「週刊金曜日」編集長）に誘われたのだ。和多田さんとは今、「北海道人」というブログで「往復書簡」をやっている。お世話になってます。芝居もとても面白かった。井上ひさしさんの原作も読んでいたし、楽しめた。井上さんの作品は、ほとんど読んでいる。今年は最長編の『四千万歩の男』（全５巻・講談社文庫）を読破した。
　夜ニュースでやってたが、香川県の祖母・孫二人の行方不明は、殺人事件だった。それに、殺された姉妹は茜ちゃん（５）、彩菜ちゃん（３）。むごい。それに、又しても「ア行殺人事件」だ。

(4)11月29日（木）昼、取材。
　３時から河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養ゼミ」。ゼミでは養老孟司、池田清彦、吉岡忍の『バカにならない読書術』（朝日新書）をテキストに使った。この読書術はよかった。いろいろと考えさせられた。

(5)11月30日（金）忙しくて原稿が書けない。苦戦している。
　夜、阿佐ヶ谷ネーキッドのオープニング記念パーティ。ロフトの常連ゲストが勢揃いしていた。（そうだ。私は仕事が忙しくて行けなかった）

(6)12月１日（土）午後１時、大久保グローブ座。西田征史作・演出の「恋愛模様」を観る。河合塾コスモから早大に行った服部晋君が出演してたので観に行く。彼は役者として頑張っている。存在感がある。大成するだろう。
　夜６時から高田馬場。月刊「マスコミ市民」の人達、それに小倉英敬さんと食事。小倉さんは元外務省にいて、10年前「ペルー事件」の時は４ヶ月も人質になった。その時の話を聞いた。今は大学の先生だ。

【お知らせ】

(1)12月12日（水）一水会フォーラム。午後７時。高田馬場サンルートホテル。講師は大下英治さん（作家）で、「大連立の乱と政界再編」。

(2)12月15日（土）午後３時から。社民党の「社民ユース東京」主催で、私の講演会があります。

〈鈴木邦男、大いに語る
「憲法と天皇」

　です。場所は永田町の社民党本部（社会文化会館）３階会議室です。参加費は1000円です。
(3)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。

(4)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園。故田中義三さん一周忌の集い。

(512月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のトークライブ。「国家・死刑・戦争」で、出演は佐藤優、森達也、綿井健陽、阿曽山大噴火、そして私です。

(6)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以

前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

(7) 1月16日（水）一水会フォーラム。7時、高田馬場サンルートホテル。講師は井川一久氏（元朝日新聞編集委員。元ハノイ支局長）。

(8) 2月10日（日）午後7時半。阿佐ケ谷ロフトで、「ユーストーク」のイベント。「愛国心」について。私も出ます。

(9)『月刊マスコミ民』（12月号）で私が出てます。〈「強い国家」より「個人の自由」〉と題し、9ページ、喋ってます。

HOME

今週の主張

聖夜に、『愛国者の座標軸』が生誕します！
＝それを記念して、今週は本の話三昧です＝

今週の主張12月10日

バックナンバー

今年、最後のサプライズです。いや、私の人生最大のサプライズです。12月24日、クリスマスに私の本が出ます。ミッション・スクール出身の私に出版社が合わせてくれました。『愛国者の座標軸』（作品社）です。今まで書いた本が何と60冊になり、それを記念した出版です。又、「活動家人生45周年記念」でもあります。「これが鈴木邦男だ！」という集大成です。なんと、344ページです。定価が2600円です。でも、優に２冊以上の分量です。今年の春から準備し、苦労に苦労を重ねて出来ました。それ以上に、編集者の皆様には大変なご苦労をかけました。これ一冊さえ読んでもらえば、私の全てが分かります。自信を持っての出版です。本の帯にはこう書かれてます。

〈「日本一の愛国者」は、現代日本の争点をどのように見てきたか。過激でいながら人に優しい「新右翼のカリスマ」による現代の社会／政治状況を読み解くための基の書。入魂の評論集！〉



『愛国者の座標軸』（作品社）

本当に「入魂」です。身も心もこの本のために捧げました。12月14日に見本誌が出来、12月24日に全国書店に並びます。詳しくは次号から書いていきます。では今週は、私の本の出版記念で、やはり本の話です。

(1)思想全集はこう読め！


（左から）高木尋士氏、深笛義也氏、鈴木

「日本の思想を大系的に読んでみたいんです」と高木尋士さんは言う。「それはいいことだね」と私は答えた。その意欲に感動した。高木さんは脚本家だ。今年の９月、見沢知廉氏の『天皇ごっこ』を芝居にして大反響があった。大好評だった。その人だ。なかなかの勉強家だ。吉村昭の小説は、ほとんど読破している。

「筑摩書房の日本思想大系がいいと言ってましたよね、鈴木さんは。でも、そのシリーズのどれから読んだらいいんでしょう」と言う。そうか、『本棚が見たい』（ダイヤモンド社）を読んだんだ

な。それと、山形の弟に引き取ってもらった厖大な本のことをこのＨＰに書いた。そこでも書いた。「じゃ」と言って、思想大系の一覧表と、どれから読んだらいいかをメールで書いて送った。それを紹介しよう。

筑摩書房で出している「日本思想大系」は三つある。「近代日本思想大系」（全34巻）。「現代日本思想大系」（全35巻）。「戦後日本思想大系」（全16巻）だ。総計85巻。頑張ったら、１年間で読破出来るだろう。まあ、それが無理なら、「３年計画」か「５年計画」で挑戦してみたらいい。それだけの価値のある人生計画だ。

これは35年ほど前に出た本だ。全て絶版だ。しかし、ネットの古本屋にはあるし、そんなに高くない。これは「宝の山」だ。読んだら精神の砂金を発見する。現代の本なんて読む必要はない。今、日本に思想なんかない。思想家もいない。35年前のこの「思想大系」にはある。日本の思想も、思想家も、全てここにある。

この三つのうち、〈今〉に近いものから読んでいったらいい。そうすると、「戦後日本思想大系」、次に「現代日本思想大系」、そして、「近代日本思想大系」だ。

「分かりました。じゃ、“戦後日本思想大系”全16巻をまず買います」と高木さんは言って、ネットの古本屋で全16巻を買った。そんなに高くはない。 ２万円ほどで全部を買えたという。安いものだ。では、その一覧だ。こうなっている。

〈戦後日本思想大系〉（全6巻）

1.戦後思想の出発（1974年）
2.人権の思想（1974年）
3.ニヒリズム（1976年）
4.平和の思想（1973年）
5.国家の思想（1974年）
6.革命の思想（1974年）
7.保守の思想（1968年）
8.経済の思想（1975年）
9.科学技術の思想（1975年）
10.学問の思想（1974年）
11.教育の思想（1975年）
12.美の思想（1975年）
13.戦後文学の思想（1974年）
14.日常の思想（1976年）
15.現代日本論（1974年）
16.現代人間論（1974年）

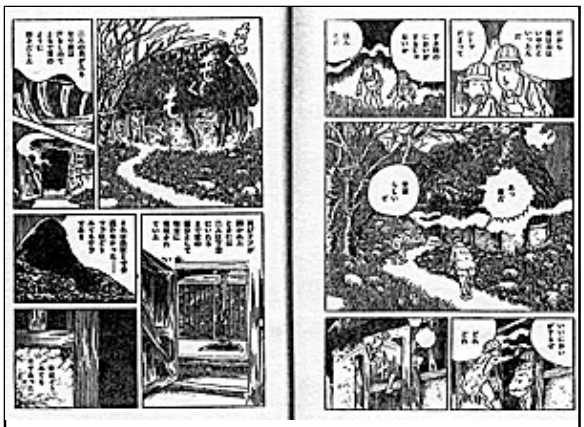


『保守の思想』（1968年）

なかなか魅惑的な本だ。魅惑的な分類だ。おっ、読んでみたいと思うだろう。１巻は400ページ近い。二段組みだ。函に入っている。１巻には、20から30人ほどの論文が収められている。「なぜ、この人をこの分類に入れたか」という〈解説〉も入っている。それらを含めて、思想界

におけるナビ（＝地図）のようなものも書かれている。

(2)まず、「ニヒリズム」から入ったらいい、と勧めた



水木しげる『１万人目の男』（『ニヒリズム』より）

高木さんは、ドストエフスキーなどが好きな、ニヒルな青年だから、「第３・ニヒリズム」がいいだろう。これは面白いし、読みやすい。何も初めから読まなくてもいい。面白そうな論文から読み、読み終えたら目次の上に○をつける。その○が２つ、３つ…となったら、「よし！一冊全部読んじゃえ」という欲が湧く。そして一冊、読破だ。

次は「第５・国家の思想」「第６・革命の思想」が面白いだろう。脚本家の仕事にも関係するし、見沢知廉氏とも関係がある。「第14・日常の思想」というのもいい。次には、「第１・戦後日本の思想」に挑戦したらいいだろう。それで５巻だ。次は、「第７・保守の思想」「第15・現代日本論」「第16・現代人間論」も面白い。これで８巻だ。その頃になると、「読破する楽しみ」にどっぷりと浸かる。この頃の本は凄いや。今の時局的、情況論的な本なんて読む必要はないや、と思う。そうすると、もうすぐだ。一週間に一冊、読んでたのが、３日ほどで一冊読めるようになる。一日で一冊読めるかもしれない。しかし、無理することはない。一週間に一冊位でいい。そうしたら、もう16巻は読破だ。一つの山脈を踏破したような気持ちになる。征服感、充実感だ。以前の自分とは違う。それを発見して驚くだろう。

私は高木さんに、その山脈を征服するための道をアドバイスした。このルートを通ると楽に山頂に到達出来るよ、と。でも高木さんは、それを無視した。無謀にも、１巻から読み始めた。まあ、それもいいだろう。「これは凄い。面白い！」と叫び、１、２、３、４と、どんどん読み進めた。「『現代の本なんか読む必要はない。これだけ読め！』といった鈴木さんの言葉が分かりました」と言う。「どれも面白いんですが、特に『第３・ニヒリズム』ですね」と言う。そうだろうよ。高木さんは、マンションでフクロウし一緒に住んでいる孤独で思索的な青年だ。酒や煙草、女といった肉体的快楽には背を向けて、精神的・哲学的快楽に喜びを見出している。（私と同じだ）。そんな青年には、「ニヒリズム」だよ。「ニヒリズム」こそがバイブルになる。

「ニヒリズム」の目次を少々紹介しよう。梅原猛が「解説・ニヒリズムの系譜」を書いている。第１章は「価値の崩壊とニヒリズム」だ。坂口安吾の「堕落論」「白痴」。太宰治の「トカトントン」、石川淳の「焼跡のイエス」が入っている。

（ウーン、「トカトントン」がニヒリズムの思想に入っている。梅原が入れたのだろう。凄い。驚いた。この小説は格闘家の前田日明さんも大好きだという。前田さんも大変な読書家だ）。



『超読書術』（かんき出版）（筑摩の思想シリーズについてはこの本にも詳しく書いた）

第２章は「ニヒリズムとは何か」。西谷哲治の「我々にとってニヒリズムの意義」。唐木順三の「現代とニヒリズム」。和辻哲郎、務台理作、高坂正尭、西谷哲治の座談会「実存と虚無と頽廃」。椎名麟三の「三つの訴訟状」。三好十郎の「『日本製』ニヒリズム」。

第３章は「ニヒリズムと人間の立場」。竹山道雄の「焼跡の審問官」「死について（抄）。椎名麟三・堀田善衛の往復書簡「現代をどう生きるか」。黒澤明・橋本忍の脚本「羅生門」（映画の脚本が、「思想」として認められて入っている。これにも驚いた）。

第４章は「革命とニヒリズム」。埴谷雄高の「永久革命者の悲哀」。武田泰淳の「私と共産主義」。高橋和巳の「暗殺の哲学（抄）」。（ウーン、これもいいよね。高橋和巳は全部がニヒリズムだ。私だってニヒリズムだ）。

第５章は「さまざまなニヒリズム--死と日常」。原口統三の「二十歳のエチュード（抄）」。山崎晃嗣の「高利貸となり得ざりし弁明」。（東大生が「光クラブ」という高利貸をやり、後に自殺した。三島由紀夫は『青の時代』に書いた。衝撃的な事件というか現象だった）。伊藤整の「死者と生者」。水木しげるの「一万人目の男」（これはマンガだ。これも思想として入れている。画期的なことだと騒がれた）。そして執筆者略歴・関係年表が付く。

どうです。凄いでしょう。「ニヒリズム」一巻で、これだけの内容だ。今時なら、その辺の新書を100冊読んでも、この１巻にかなわない。今出てる本なんて読む必要はない、と私が言うわけですよ。私も、もう一度、全巻再読破に挑戦してみっか！

それにしても、筑摩はだらしがない。こんないいシリーズを何故、復刊しないんだ！筑摩の社員には会うたびに言っている。１年に２、３冊ずつでもいい、出せよ。何なら、試しに「ニヒリズム」「国家の思想」「革命の思想」だけでも出してみなよ。あるいは文庫化するとか。

そうだ。７巻の「保守の思想」だ。これも、ちょっとサワリを紹介しよう。橋川文三が解説を書き、こんな人達が書いている。白鳥邦夫、三宅雪嶺、徳富蘇峰、柳田国男、津田左右吉、鈴木大拙、柳宗悦、唐木順三、岡潔、保田與重郎、鈴木成高、田中耕太郎、福田恆存、安部能成、和辻哲郎、武者小路実篤、古島一雄、吉田茂…などだ。深いね。感嘆する。昔は日本に思想家がいたんだ。綺羅星（きらほし）の如くいた。今なんて、思想家は一人もいない。時局的なライターはいるが、思想家はいない。

それに、このシリーズの凄いところは、そうした巨大な「知の大家」だけに寄りかかっていない。どんどん学際的に境界破りをする。又、マンガや脚本、そして政治家の文（吉田茂など）も入れる。大いなる冒険だ。今の政治家の文で、「思想」として残るものがあるか。何一つないだろう。ＴＶの政治バラエティに出て、喋り散らかしてるだけだ。活字にもなりはしない。嗚呼！政治家は退化している。国民も文化も退化している。劣化している！だから、思想は、こうした昔の本（さらに、もっと昔の本も）を読んでいればいい。そっちの方が、「新しい」し、「革命的」なんだ。

この「保守の思想」には、何と、右翼最大のイデオローグ、葦津珍彦（あしず・うずひこ）先生の「国体問答」も載っている。筑摩の三つのシリーズ全てに言えることだが、左右を弁別していない。これは驚きだ。当時は左翼全盛だ。「右翼になんか思想はあるか、ペッ！」と思われて

いた時代だ。右翼だって、「オレ達には理論がない。でも情熱と暴力がある」と自虐的に思い込んでいた。それに対し、筑摩は、「いや、あなた達の先輩には、こんな素晴らしい思想家がいるんですよ。自信を持ちなさい！」と教えてくれたのだ。右翼にとっての〈大恩人〉だよ。筑摩書房は。

(3)右も左もアナキズムも。思想のルーツはここにある



仙台の実家にあった私の本

当時、学生だった僕らは、それで目を覚まされた。さらに、右も左もこだわらず、凄い〈思想〉、凄い〈思想家〉達を紹介され、貪（むさぼ）るように読んだ。今、「貪るように読む」なんてことがあるか？ないだろう。メシなんか食わんでもいい。眠らなくていい。友人なんかいらん。この本が読める、それが幸せだ。そう思った。そして次、次と読みたいと「欲」が出た。こうした精神的欲こそが、〈本物の欲〉だ。

今、私が「右も左も超えた」と豪語するのは、こうした優れた左右の思想家に触れ、読んできたからだ。又、革命思想、ニヒリズムなど、自分と縁のないと思っていた思想家にも感動し、魂を揺り動かされたからだ。それまでの小さな自分なんて、粉々に打ち砕かれたわさ。一端の「右翼の活動家」だと思ってた自分が、ただの「無」だと思い知らされた。吹き飛ばされた。読書とはそういう「冒険」であり、生存を賭けた危険な試みなのだ。たかが本などと、なめてかかると大変だ。読書は闘いだ。戦争なのだ。

では、もう二つのシリーズを、ざっと紹介しよう。そうだ。高木尋士さんは、「戦後日本思想大系」（全16巻）の12巻まで読破したという。早い。「今の本と違い、力強いし、覚悟が違いますね。思想に命をかけてますよ」と言う。どれも素晴らしいが、「ニヒリズム」の他は、「革命の思想」「教育の思想」「美の思想」に成功したという。「今年中にこのシリーズは読破します！」と言う。では、次の「現代」シリーズに入る。そうだ。その途中報告をインタビューしてみようか。これは年明けにやってみよう。では、「現代」の紹介だ。

〈現代日本思想大系〉（全35巻）

1.近代思想の萌芽（1974年）
2.福沢諭吉（1975年）
3.民主主義（1974年）
4.ナショナリズム（1975年）
5.内村鑑三（1975年）
6.キリスト教（1975年）
7.仏教（1975年）
8.鈴木大拙（1975年）
9.アジア主義（1977年）
10.権力の思想（1974年）

11.実業の思想（1969年）
12.ジャーナリズムの思想（1975年）
13.文学の思想（1975年）
14.芸術の思想（1975年）
15.社会主義（1975年）
16.アナーキズム（1974年）
17.ヒューマニズム（1974年）
18.自由主義（1975年）
19.河上肇（1975年）
20.マルキシズム（1）（1975年）
21.マルキシズム（2）（1973年）
22.西田幾太郎（1977年）
23.田辺元（1975年）
24.哲学思想（1975年）
25.科学の思想（1）（1975年）
26.科学の思想（2）（1975年）
27.歴史の思想（1973年）
28.和辻哲郎（1977年）
29.柳田国男（1975年）
30.民俗の思想（1975年）
31.超国家主義（1975年）
32.反近代の思想（1972年）
33.三木清（1977年）
34.近代主義（1975年）
35.新保守主義（1974年）

これも凄い。素晴らしい。高木さんに対しては、まず「31・超国家主義」と「4・ナショナリズム」を読めと勧めた。さらに、「32・反近代の思想」、「9・アジア主義」、「35・新保守主義」を勧めた。〈右翼〉といわれるものも、こうやって思想的に区分けしている。これは前代未聞の試みだ。さらに、「16・アナーキズム」にも、（右翼といわれる）権藤成卿などが入っている。単純ではない。「戦後」シリーズの「ニヒリズム」に保守派といわれている竹山道雄が入ってるし。

多分、一人の人間の中に、右派的な部分、左派的な要因、アナーキーな気分、ニヒルなムードなどなどが混在しているのだ。「私って、右翼度60%かな？」といった感じで思っていればいい。

この「現代」シリーズで、マルキシズムや哲学や仏教、キリスト教などの思想に私は触れた。さ

らに、この他のものを読みたい人には、いくらでも思想書が出ていた。「日本の名著」「世界の名著」「世界の大思想」「人類の知的遺産」など、いくらでもあった。それらの思想的全集は今はない。新書とハウツー本とゲーム本ばかりだ。

(4)いつかは私も、このシリーズに。と夢をもって

今は、愚かな大衆に迎合した愚かな本しかない。もはや本屋も死んだ。では、「近代」シリーズです。

〈近代日本思想大系〉（全34巻）

2.福沢諭吉集（1975年）
3.中江兆民集（1974年）
4.陸羯南集（1987年）
5.三宅雪嶺集（1975年）
6.内村鑑三集（1975年）
7.岡倉天心集（1976年）
8.徳富蘇峰集（1976年）
9.丘浅次郎集（1974年）
10.木下尚江集（1975年）
11.西田幾太郎集（1974年）
12.鈴木大拙集（1974年）
13.幸徳秋水集（1975年）
14.柳田国男集（1975年）
15.長谷川如是閑集（1975年）
16.石川三四郎集（1976年）
17.吉野作造集（1976年）
18.河上肇集（1977年）
19.山川均集（1975年）
20.大杉栄集（1974年）
21.大川周明集（1974年）
22.折口信夫集（1975年）
23.田辺元集（1975年）
24.柳宗悦集（1975年）
25.和辻哲郎集（1974年）
26.林達夫集（1974年）
27.三木清集（1975年）

28.戸坂潤集（1976年）

29.小林秀雄集（1979年）

30.明治思想集（1）（1976年）

31.明治思想集（2）（1977年）

32.明治思想集（3）（1990年）

33.大正思想集（1）（1978年）

34.大正思想集（2）（1977年）

35.昭和思想集（1）（1974年）

36.昭和思想集（2）（1978年）



山形に引き取られた私の本

「13の幸徳秋水」「16の石川三四郎」「21の大川周明」「6の内村鑑三」は読んで衝撃を受けた。そして、「9の丘浅次郎」だ。実をいうと、皆には読んでほしくない。私だけの宝物にしたい。日本に進化論を紹介した人だ。北一輝もこの人には随分と影響を受けている。私もそうだ。ものの考え方の基盤を教わった。

さて、右に出版年を書いたが、1975年が異常に多い。１年で何十冊も出た。それを当時、すぐに買って読破してたんだ。当時の若者は、皆、貪り読んでいた。その「貪り」を邪魔する「悪魔の兵器」（携帯、メール、パソコン）がなかったからだ。今の若者は不幸だ。貪り読む本がない。それに、邪魔する「悪魔の兵器」ばかりだ。どうする、どうなる日本！だ。

さて、「近代」大系の１巻はどうしたの？と言われそうだ。別に間違って（２）巻から書いたわけじゃない。どうも、出なかったようだ。それに、「32.明治思想集（3）」を見てほしい。1990年に出ている。他の刊行から15年も遅れて、１冊だけ出ている。マラソンで皆、ゴールに着いたのに、一人だけ何時間も遅れて着いたようなものだ。観客も皆、帰っちゃったよ。

このシリーズは、「近代」を出して、次は「現代」。そして「戦後」と刊行したのではない。全体を計画し、論文が集まり、「解説」などの書き上がったものから刊行したのだ。

多分、1960年代の中頃に、企画されたものだ。だって「戦後」シリーズの「7.保守の思想」は1968年に出ている。1960年代後半といえば、ベトナム戦争、中国文化大革命とあり、世界的にも「反戦運動」「若者の叛乱」が起こった。日本では全共闘真っ盛りの時代だ。若者は闘っていたからこそ、勉強していた。自らの運動の知的武装のために。又〈敵〉を知るために。そして、この世界を知るために、知に飢えていた。本を読んだ。勉強した。

その中で、筑摩はこの壮大な思想大系を企画した。「近代」「現代」「戦後」と一緒に計画し、そして、出来たものから刊行した。遅くなったものもあり、とうとう出来ないものもあった。もしかしたら、編者が死んだのかな。又、調べてみよう。

ウーン、何か、今回は高木尋士さんにあてたメールの紹介になっちゃったな。まァ、個人的なメールだから、他の人は読まなくていいよ。あっ、読んじゃったか。たまにはこういうのもいいだろう。そうだ。浅羽通明さんが、ちくま新書から『ナショナリズム』『アナーキズム』を出している。とてもいい本だ。力作だ。私が今、紹介した「思想大系」も、随分と引用し、紹介している。まず、この二冊を読んだらいい。そして、この大系を「戦後」→「現代」→「近代」と、

読み進んだらいい。抜けられなくなる。どんどん欲が出て、仕事も、家族も、恋人もほったらかして読んじゃうよ。いいんじゃないか。これからはこの本が君の家族であり、恋人になる。

100年後、筑摩書房が、これに続く新シリーズを出すだろう。「新・近代日本思想大系」「新・現代日本思想大系」「新・戦後日本思想大系」…と。その時、私の論文の一つでも載ってたらと夢想する。無理でしょうな。でも、「アナーキズム」か「ニヒリズム」にでも入るかな、『腹腹時計と〈狼〉』が。いや、『愛国者の座標軸』が入るかもしれない。そんな意気込み、覚悟で、私は書いた。もし入ったら、その時は、私のおごりだ。ドンチャン騒ぎをしましょう。100年後だから、何だって約束しちゃう。

【だいありー】



筆坂秀世さん（後）、田中森一さん（前）、鈴木

(1)12月３日（月）日帰りで仙台に行く。兄貴に会う。帰り、仙台駅で、月刊「Will」の編集長の花田紀凱さんとバッタリ会う。仕事で来たようだ。「あれ？どうして」と逆に聞かれた。「仙台が実家なんですよ」と説明した。

駅の売店で、「ずんだ餅」と「ずんだチョコ」を買う。ずんだとは枝豆をつぶしたアンコだ。バラエティ豊かだ。ずんだシェーク、ずんだ饅頭、ずんだポッキー、ずんだセンベイ…と。私も、ずんだ人間だ。

(2)12月４日（火）11時、高田馬場で古沢俊一氏にインタビュー。「月刊タイムス」の連載のため。古沢氏は野村秋介さんの運転手をやってた人だ。自決の現場にも立ち会った。その時の話を詳しく聞いた。野村さんの講演を初めて聞いたのは四谷公会堂だったという。「その時、野村さんは『鈴木邦男とは絶交する！』と言ってましたよ」と古沢氏。そんなこともあったな、と思い出した。夜、久しぶりに柔道に行く。体が痛い。

(3)12月５日（水）２時40分、ジャナ専の授業。「時事問題」。

夜、ゴールデン街で飲む。久しぶりだ。阿部勉氏（「楯の会」一期生）が生きてた時は誘われてよく行ったが、今は行くことがない。今日は、自治労の高橋公（元全共闘）さんに呼ばれた。高橋さんの会社の人、そして木村三浩氏と。この朝、たまたま本を整理してたら、『諸君』の2000年12月号に高橋さんが出ていた。「全共闘」と「楯の会」の激突座談会だ。「全共闘」は高橋公さん、長谷ゆり子さん、小阪修平さん。（小阪さんは去年、「朝生」の「連赤とオウム」に一緒に出た。でも今年、亡くなった。残念だ。長谷さんはゴールデン街でお店をやっている。あっ、この日、会ったのが長谷さんの店「飛翔」だった）。

「楯の会」側は、松浦博、本多清、山口良男氏（山口氏は今年の「野分祭」で記念講演をしてくれた）。「この第２弾をやったらどうですか」と私は提案した。何とか、やってみたい。遅くまで、三島論、憂国論を闘わす。

(4)12月６日（木）昼、打ち合わせ。３時から河合塾コスモ。コスモの授業は今年はこの日が最後。

(5)12月７日（金）図書館。８時から今村裕巳氏主催の忘年会。出版、建築、芸能など各業種の人

が集まった。盛会だった。南青山のクラブで。

(6)12月８日（土）昼、取材。午後から東京都美術館。龍まんじさん（バロン吉元）が大賞をとった「現創展」を見る。ついでに、「フィラデルフィア美術館展」も見る。

(7)12月９日（日）午後１時から３時、河合塾コスモの全体会議。３時から九段会館で「早雪忌」（三浦重周氏を偲ぶ会）。三回忌。大勢の昔の仲間達と会った。

【お知らせ】



12月15日（土）社民党で講演する

(1)月刊「創」（08年１月号）が発売中。私は連載で、「革命運動の倫理性」を書いた。早見慶子さんの『I LOVE 過激派』（彩流社）、木村三浩氏の『憂国論』（彩流社）、『「男気」とは何か』（宝島新書）、和光晴生氏の『赤い春』（集英社インターナショナル）と続けて出版され、売れている。「第３次革命文学の誕生」だと思った。その運動の歴史と倫理性について書いた。

(2)三島由紀夫・森田必勝氏は昭和45年（1970年）11月25日に自決した。しかし、同年１月の「平凡パンチ」「週刊大衆」は「今年の予測」で、「11月に自決」「国会で過激派と戦闘」と書いていた。予想は当たった。でも警察はノーマーク。不思議な話だ。当時の関係者に取材しながら書いた。『月刊タイムス』（１月号）に。

(3)12月12日（水）雨宮処凛さんのデビュー作が文庫になり、この日、発売です。『生き地獄天国』（ちくま文庫・600円）です。私が「解説」を書いてます。

(4)12月15日（土）午後３時から５時まで、社民党本部３階会議室で、私の講演会があります。「鈴木邦男、大いに語る。憲法と天皇」です。社民ユース東京の主催です。社民党本部（社会文化会館）３Ｆです。地下鉄「永田町駅」下車、３番出口から徒歩４分です。参加費は千円です。

(お問合せ、社民党への入党希望者はこちらへ。

sdp-tokyo@nifty.com（社民党・東京都連合）

(4)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。７時半。「政治の力学。日本はどこへ向かうのか」。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。

(5)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園。故田中義三さん一周忌の集い。

(612月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のトークライブ。「国家・死刑・戦争＝この１年を振り返る＝」で、出演は佐藤優、森達也、綿井健陽、阿曽山大噴火、 そして私です。

(7)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、 監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

(8) 1 月16日（水）一水会フォーラム。７時、高田馬場サンルートホテル。講師は井川一久氏（元朝日新聞編集委員。元ハノイ支局長）。

(9) 1 月21日（月）午後７時から、阿佐ケ谷ロフト。早見慶子さんの『I LOVE 過激派』出版記念トーク。塩見孝也さんも出るそうです。私も出ます。

(10) 2 月10日（日）午後７時半。阿佐ケ谷ロフトで、「ユーストーク」のイベント。「愛国心」について。私も出ます。

HOME

今週の主張

バックナンバー

「元右翼」二人の「天国と地獄」

今週の主張12月17日



『愛国者の座標軸』（作品社）表紙・表

『愛国者の座標軸』（作品社・2600円）は、12月24日発売です。14日（金）に作品社に行き、見本誌に対面しました。想像した以上に素晴らしい本です。愛国運動45年間の〈全て〉がここにあります。凝縮されてます。これ一冊読めば、私の運動・思想の全てが分かります。ちょっと高い本ですが、それだけの価値があります。２段組で352ページもあり、普通の本の２、３冊分です。厚さ３センチです。立ちます！

もし、買ってつまらないと思ったら私に返して下さい。お金は返します。送料も返します。それだけ自信をもっております。普段は自虐的な私も、この本についてだけは、自尊的になりました。　先月、紹介した時は、まだ見本誌も出来ていませんでした。表紙だけが出来ていたので表紙の「表」を紹介しました。今週は「裏」も紹介します。そして来週は、本の内容について書きましょう。今週は、私が「解説」を書いた、雨宮処凛さんの『生き地獄天国』についてです。そこから始めます。

(1)これは「現代の聖書だ！」と私は断言した

雨宮処凛さんの『生き地獄天国・雨宮処凛自伝』（ちくま文庫・600円）が発売された。12月12日（水）に全国の書店に並び、爆発的に売れている。一気にベストセラーだ。

これは、７年前（2000年）の10月に太田出版から刊行された『生き地獄天国』に最終章を加筆したものだ。新しい読者は勿論、７年前に読んだ人も読み返している。そして感動を新たにしている。これは今後もずっと読み継がれる。百年、二百年。いや、一千年後までも読み継がれ、人々に、生きる勇気と希望と愛を与え続ける。その意味では、これは単なる「読みもの」ではない。「現代の聖書」だと私は思う。そのことを、この文庫の「解説」に私は書いた。〈この「聖書」を携えてこの世界を変えるのだ〉と言っている。こんな風に。



『愛国者の座標軸』（作品社）表紙・裏

〈これはもう現代の「聖書」だ。認めたくはないが、これは事実だ。苦しみ、悩み、絶望して死ぬ。そして復活した。奇跡の物語だ。彼女は語りかける。生きる

ことに疲れ、生きる意味を見失い、居場所がないと思っている多くの人々に語りかける。「悩むことはない。恐れることはない。私もそうだったのだ。涙に濡れた顔を上げなさい」と。優しく慰め、時には荒々しく叫ぶ。「私を見なさい！」と。〉

これは、私の文章でありながら私の文章ではない。神の啓示を受けて、ひとりでに書いたのだ。自動書記だ。聖なる言葉を書く人は皆、そうだ。でも、「認めたくはないが…」という所に、わずかに、この人の自我が出ている。人間的な悔しさ、嫉妬、妬みが見える。愚かだ。未熟だ。元はといえば、「この業界に紹介したのは自分だ」という自負がある。それなのに、自分を軽々と乗り超えて、羽ばたき、天翔けり、〈神〉になってしまった。そして、市民運動のおばさん達には、「あなたも元右翼なんでしょう。頑張りなさいよ。雨宮さんを紹介するから」と言われている。そんな悔しさ、失望感、やるせなさが出ている。

でも、こんな〈人間的な感情〉が出ているのはここだけだ。あとは、５ページにわたって、真面目に「解説」をしている。なぜ「聖書」なのか。そして、その「聖書」誕生までの凄絶なドラマを紹介している。私は、バプテスマのヨハネかもしれない。いや、そんな役どころではないな。イエスに付き従うペテロか、マルコか。まさか、ユダではあるまい。「奇跡」と「復活」と「癒し」をテーマに「解説」を書いた。あとは実物を買って読んでほしい。この文庫本の裏表紙には本の内容がこう紹介されている。



雨宮処凛『生き地獄天国』（ちくま文庫）

〈現在、フリーター等。プレカリアート（不安定層）問題について運動、執筆し、注目される著者の自伝。息苦しい世の中で死なないために。激しいイジメ体験→ビジュアル系バンド追っかけ→自殺未遂→新右翼団体加入→愛国パンクバンド結成→北朝鮮→イラクへ→右翼をやめるまで。文庫化にあたり、その後現在に至るまでを加筆。解説・鈴木邦男〉

何度読んでも凄まじい本だ。よく、ここまで自己を曝け出して書いたものだと思う。体験も凄まじいが文章もうまい。７年前よりも、グンとうまくなっている。同じ本なんだから、そんな筈はない。でも、そう感じるのは、私が７年前よりもキチンと精読したためだろう。又、「解説」を書くために二回も読んだからだろう。７年前は、文章のうまさや本の構成などにまで気が付かなかったのだ。

そうだ。７年前に太田出版からこの本が出た時も「解説」を書いたな、と思い出した。家中をひっくり返して探した。あった。「解説」ではなく、いわば「書評」だ。「週刊 ＳＰＡ！」の私の連載「夕刻のコペルニクス」で取り上げたのだ。タイトルを見て驚いた。

〈これ以上、雨宮処凛にいい思いをさせるな！〉

ヒャー、ひどいことを書いている。心の狭い奴だ。「新右翼のスター」になった雨宮さんに対し、モロに嫉妬し、追い落としを計っている。そう思うかもしれないが、違うのだ。いつもの「タコペ」的手法だ。これを書く前に、何回も雨宮さんと話し合った。これは雨宮さんのデビュー作だ。売れてほしい。でも、普通に取り上げて「ぜひ買って下さい」では能がない。注目されない。だから、思い切って叩く。罵倒する。そうしたら、〈これは一体なんだ〉と思い、買

う。そういう戦略なんだ。だから、最後はこう結んだ。

〈100万部はいくわよと雨宮は豪語する。そしたら印税だけで１億円以上。世も末だ。こんな本、買うな。これ以上、この女にいい思いをさせるな。買ったら地獄に堕ちるぞ！〉

「戦略」というよりは、書いた人の「本音」のようにも見える。いやいや、あくまでも、「戦略」だ。愛に溢れた「戦略」だ。嘘だと思うなら、この全文を読んでほしい。

(2)愛に溢れた「売り込み戦略」のはずだった

実は、「夕刻のコペルニクス」は、６年間続いたが、ある事件があって、連載打ち切りになった。単行本は１から３巻まで出ている（文庫は２冊）。扶桑社からだ。しかし、雨宮さんについて書いた分は単行本に収録されてない。「第４巻」を出す分量はあるのだが、出してくれない。「楯の会」の人間５人についてのインタビューなど、貴重な証言もあるのに、残念だ。　まあ、そんなわけで、単行本に入ってないので、読んでない人も多いと思う。だから紹介しよう。



「アエラ」（12月17日号・朝日新聞社）より

『夕刻のコペルニクス』第301回
これ以上、雨宮処凛にいい思いをさせるな！

よく聞かれる。「雨宮処凛さんは右翼出身のスーパースターでしょう。映画『新しい神様』は大ヒットし、本も爆発的に売れてるし。どうして取り上げないんですか」。理由は簡単だ。嫌いだからだ。生意気だし、皆にチヤホヤされて舞い上がっている。右翼デビュー、３年で映画に主演し、『生き地獄天国』（太田出版）まで出した。25歳のくせに自叙伝だよ。ふざけてる。俺なんて30年も右翼やってて、いいことは何一つない。

「でも右翼デビューのきっかけは鈴木さんだったんでしょう。本に書いてました」。そうだよ。人を「踏み台」にしやがって。有名になり大女優になりゃ、知らんぷりだ。『新しい神様』を撮った土屋豊監督だってそうだ。以前はただのアマチュアで、「あなたは天皇の戦争責任についてどう思われますか？」という単調で地味な映画を撮っていた。街角で通行人にマイクを突き付けるだけだ。面白くねえよ。「右翼に襲われませんかね」と相談されたから、「誰が襲うかよ、こんな暗い映画。観るだけでも大変だよ」と言ってやった。ところが『新しい神様』が大ヒットした途端、俺のことなんて完全に忘れてやがんの。冷酷な奴だ。忘恩の徒だ。

思い出した。『新しい神様』の撮影の時に俺も出た。うるさいだけの右翼バンド『維新赤誠塾』のライブを聞かされて感想を求められた。「もっと人に聞かせる工夫をしろよ。マジで反米愛国を言うんなら茶髪をやめろ。パフォーマンスでやるんなら客に君が代斉唱なんかさせんな」と愛情を込めて提言してやった。ところがこのバカ女は逆上した。「私をけなした！　皆、誉めてくれるのに。許せない」と。そして俺の出演シーンはカットされた。心根の狭い女だ。もう、こいつについては何も言うまいと思った。

『新しい神様』の推薦文を頼まれた時も嫌だった。ちょっとでも批判・提言したら、また逆上する。だから心にもなく絶賛して書いた。 苦心して書いた。８回も書き直した。そしたら何と言ったと思う、この女。「なーに、あの小学生の作文みたいなの」。 普段は穏和な俺もカーッと

なったね。殺してやろうかと思った。それからすぐだよ。「今度、自叙伝出したの。読んで」と送ってきた。 誰が読むかこんなもの、と床に叩きつけた。でも、「鈴木さんとの出会いも書いてんのよ」と言っていた。気になってそこだけ読んだ。 とうじ魔とうじ主催のイベントに行って二次会の時、「私の隣にボーッとしたオジサンが座っていた」。何だこれは。それが縁で右翼の世界 に入る。「突撃隊」に入り街宣したり、右翼バンドを創り、「ミニスカ右翼」と呼ばれたり。目立ちたがり屋のイヤな女だ。

ガキの頃からイヤな奴だったんだろうな。読んだら、イジメられっ子だったという。当然だ。俺だって同級生だったらイジメてた。それから非行少女に。万引、カツアゲ、シンナー、自殺未遂。そしてビジュアル系バンドの追っかけ。「ファック隊」になり下がり、バンドを追っかけては抱かれる毎日。コンサートの後はインサート。バンドの「従軍慰安婦」だ。乱交もやった。爛れた日々だ。そして思う。こんな世界、滅びてしまえと（お前こそ滅びろ）。だからオウム事件は「世界の終わり」かと心躍らせた。ひねくれた女だ。そしてオウム、右翼、左翼と知り合い、北朝鮮、イラクに行き……。今の雨宮ができた。奇跡だ。〈右翼〉で人間が救われるのか。現代思想の入門書にもなっている。

あっマズイ。捨てるつもりがつい読んじゃった。今、10万部も売れている。100万部はいくわよと雨宮は豪語する。そしたら印税だけで１億円以上。世も末だ。こんな本、買うな。これ以上、この女にいい思いをさせるな。買ったら地獄に堕ちるぞ！

(3)長く滞在すると、かえって本質が見えなくなる



「夕刻のコペルニクス」（301号・「週刊SPA!」）

どうでしたか。７年前は、「戦略」とは言いながら、酷いことを言っている。ここまで言うか、と思う。でも、こういう「売り込み戦略」は「ＳＰＡ！」誌上で他にもやった。それも何回も。頼まれてやったこともある。「分かった。売り込みましょう。そのかわり、ただ、誉めちゃマズイ。徹底的にけなします。それで、気になって、本を買っちゃう。そういう高度の作戦でやりましょう」と私は言う。「いいですよ。いくら叩かれてもいい。思い切り、叩いて下さい。ぶって下さい」と言う。「ぶってぶって姫」みたいだ。だから、ぶった。叩いた。

しかし、当人からいつも文句が来た。「ここまでぶつことはないだろう」「許せん！」「告訴する！」と。そのたびに謝罪文を書いた。なんだ、馬鹿野郎、お前から頼んだくせに。と思った。

その点、雨宮さんは偉い。別に頼まれたわけじゃない。こっちが勝手に取り上げた。取り上げるに当たって、「戦略」をバラした。そして解してもらった。でも、今思うと、あるいは、「戦略」は嘘で、本当に批判し、罵倒したかっただけかもしれない。なんせ、この男、単純なようで複雑だ。計算がないようで計算高い。善意のようで悪党だ。だから、「戦略」だって、そのまま信じるわけには行かな

い。
　でも、雨宮さんは偉いね。「面白かったわよ」「ありがとう」と言ってくれた。笑ってくれた。その瞬間、私は思った。「負けた！」と。そして、こいつは、とてつもないスターになる。大化（ば）けする、と思った。そして、その通りになった。やはり、私は予言者だ。神の出現を予言した。バプテスマのヨハネですよ。誰だ！「ユダだ」なんて言うのは。

　そうだ。この雨宮さんの本については、月刊「創」（08年１月号）の私の連載（「言論の覚悟」）でも取り上げた。雨宮さんの本、早見慶子さんの『I LOVE 過激派』（彩流社）、木村三浩氏の『憂国論』（彩流社）、『「男気」とは何か』（宝島社新書）。和光晴生氏の『赤い春』（集英社インターナショナル）などが売れている。これは、「第三次革命文学の誕生だ」と書いた。「革命運動の倫理性」という題で書いた。
　その中で、雨宮さんの本についてこんなことを書いた。
　雨宮さんはこの本の中で、「右翼をやめる経過」を詳しく書いている。又、今年５月に出した『右翼と左翼はどうちがう？』（河出書房新社）の帯には、こう書かれていた。

〈両方の活動を経験した著者が、学校では教わらない右翼・左翼のテロ、革命の歴史や現状をとことんかみ砕く〉

　エッと思った。「両方を体験」したのか？ほんの短い期間、いただけじゃないか。私なんて、40年もやっていて、やっと分かった。やっと「左右を超えた」と言っている。でも一般的にはまだ「右翼」と思われている。「ペッ！右翼のくせに」と思われている。それなのに…と思う。
　でも、これは私が間違っていた。長くいると、かえって分からなくなる。鈍感になる。麻痺する。本質が見えなくなる。私も運動に入った時、いわゆる「右翼」にショックを受けたし、違和感をもった。でも、長くいると、そんな気持ちも忘れてしまい、「まあ、いいや」となってしまう。本当は、それが一番怖いのだ。そのことを知らされた。詳しくは、「創」を読んでもらいたい。
　そうしたら、読者の人からメールをもらった。ハンドルネーム「まんぼう」さんだ。かわったネームだ。こう書かれていた。

〈「創」に書いておられた「長く滞在すると、本質がかえって見えなくなる」という話、うなずけました。たとえば、何十年も右翼運動をやっていて、テロをする人っていないですね。「テロを肯定しながらテロをしない右翼」になるのでしょう。右翼の本質がテロと言ってしまうと身もフタもないかもしれないけど、山口二矢だって、小森一孝だって、17才でテロを決行した。正しいとは言わないけれど、運動の期間が短いほうが、鋭い感性を持てるということか。テロに直結しやすい。そういうのはあるのかもしれないと思いました。三島だって、右翼活動家ではないですね。あくまでも文学者としてこの国を考え、楯の会を作って、たった二年で市ヶ谷事件を起こした。楯の会だけに集中して、何十年も続けていたら、事件はなかったでしょう。 野村秋介さんのように、出所してから十年間、じっと黙って計画的に自決するなんてことは、普通はできないですよね〉

なるほど。鋭いですね。確かにそうです。私がテロを否定して右翼業界の顰蹙を買ったのも、長くこの世界にいたからでしょう。 右翼やテロについては、猪野健治さんの『日本の右翼』と、かわぐちかいじの『テロルの系譜』が参考になりますよ、とメールを返した。 アレッと思った。この二冊も、ちくま文庫だ。雨宮さんの本と同じだ。アレッ、それに両方とも私が「解説」を書いている。



かわぐちかいじ『テロルの系譜』

(4)「解説」の方が自分の本よりも真剣に書いてる

そうか、雨宮本の前にも、ちくま文庫で「解説」を書いてたと思ったら、この二冊か。と思って本棚を探したら、もう二冊あった。やはり猪野健治さんの『やくざと日本人』、それに斎藤貴男さんの『不屈のために』だ。じゃ、全部で五冊も「解説」を書いてるんだ。凄い。それに、「解説」を書くのはある意味、自分の本よりも苦労する。気を使う。何度も読み、書き直し書き直して、必死でやった。大体、書き出しから根性が入っている。覚悟が違う。
じゃ、ちょっと紹介してみるか。「解説」の最初の何行かだけでも。



斎藤貴男『不屈のために』

かわぐちかいじ『テロルの系譜』

斎藤貴男『不屈のために』

〈引き受けてから、「しまった！」と思った。「テロといったら鈴木さんでしょう」と編集者におだてられて引き受けたが、猛烈に後悔した。確かに昔は「テロリスト志願」の右翼青年だった。テロは必要だと思った。しかし今は違う。それらを全て清算した。だから、自分の中の荒ぶる魂に封印し、飛び出そうとする狼を檻の中に閉じこめた。 それなのに…。〉

〈やはり、〈言葉〉なんだ。人を生かすのも殺すのも。人を励まし、生きる勇気を与えるのも言葉だ。人間の集団である国家が再生するのも、あるいは暴走し、戦争するのも、言葉によってだ。そんなに大事な言葉なのに人々は真剣に考えない。「言葉なんて」と、軽く考えている。 だから、いい加減な言葉がはびこる。氾濫する。そして我々は麻痺する。「これでいいのか。気を付けろ！」と斎藤貴男は警告する〉

猪野健治『やくざと日本人』



猪野健治『日本の右翼』

〈これは、やくざを通して見た日本人論だ。そして、学校では絶対に教えない日本史だ。やくざなんて関わりになりたくないし、 嫌いだ。そう思いながらも僕らは心の中で「やくざ」や「任侠」にある種の憧れや共感を持ってしまう。これは一体何だろう。 幡随院長兵衛や清水次郎長、国定忠治などは今もヒーローだ。こうしたやくざ抜きには歌舞伎も大衆演劇、浪曲、講談も成り立たない。 ということは、やくざが日本の文化を支えているのだろうか。嫌だ。忌ま忌ましい。やくざなんかに「日本人」を代表されたくない。でも…。そして、不意に学生時代のことが思い出された〉

猪野健治『日本の右翼』

〈この本は日本人全てに読んでもらいたい。著者の猪野健治だってそう思ってるはずだ。日本の右翼が読むだけでは勿体ない。 それに、今の時代、「日本とは何か」「日本人とは何か」を考えると、人は必ず〈右翼的〉になる。だって右翼とは、「俺は日本人だ」 「俺こそ日本人の典型だ」と自負する人々だ。いわば、日本人の「原液」だ。濃く、時には危険な原液だ。それだけに魅力があり、 時には暴発する。日本人が自らのアイデンティティを考える時、直視しなければならない歴史であり現実だ〉

　この四冊と雨宮さん本。計、五冊の「解説」を「ちくま文庫」で書いた。真面目に、必死に書いている。何とか、読んでもらおうと考えて書いた。「こんな解説のせいで売れなかった」と言われたら大変だ。それで懸命に書いた。　「ちくま文庫」以外にも、「解説」は書いてる。それらは又、紹介してみよう。そうだ。「解説」だけでなく、私の本も一冊、ちくま文庫から出ている。『言論の不自由?!』（2000年・640円）だ。ということは、ここにも「解説」がある。書いた人は、まさか私ではない。誰だろう。みてみよう。



猪野健治『やくざとと日本人』

鈴木邦男『言論の不自由?!』（解説）

〈81年末、喫茶店でコーヒーを飲みつつ新聞を読んでいた私は思わずカップを落としそうになった。
　社会面に大きく----鈴木邦男逮捕・捜査令状を破り捨てる----とあった。これはすごい！
　左翼セクトでさえ公安の令状を破る人間はいない！一水会に行こう！と決めた〉

　この「解説」を書いた人こそ見沢知廉氏なのだ。ありがたい。長い解説だ。愉快な解説だ。ぜひ読んでもらいたい。

(5)「脱右翼」の仕掛け人・中川右介さんが再び復活



鈴木邦男『言論の不自由』

この『言論の不自由?!』の末尾にはこう書かれている。

〈本書は、1990年11月23日、ＩＰＣより刊行された『天皇制の論じ方』に、大幅な加筆、削除、再編集を施したものである〉

そうか。思い出した。このＩＰＣからは、三冊、本を出している。『天皇制の論じ方』の他に、『平成元年のペレストロイカ＝がんばれ、ゴルバチョフ』。そして、『脱右翼宣言』だ。

そして、奇妙なことに、アマゾンで見ると、この『平成元年のペレストロイカ』は「18禁」になっている。18才未満の人は読んじゃいけないのだ。そんなに危険か。いやらしいのか。よく分からん。今まで出した60冊のうち、これだけが「18禁」だ。名誉なことだ。

さて、この三冊を出してくれたＩＰＣだが、社長は中川右介さんという。右介というが、思想は左翼だ。ＩＰＣは、ソ連の本も随分と出している。この右介さんには弟がいる。中川文人さんだ。やはり極左だ。革命家・外山恒一氏のイベントでいつも司会をやっている。今、法政大学の大弾圧に抗し、闘っている。中核派も含めて抗議集会を開こうとした。僕も行く予定だった。ところが直前で中止になった。どうも私のせいらしい。いつもトラブルの原因は私だ。来年は、このＨＰで中川さんと対談して、その真相を語ってもらおう。

さて、中川右介さんのＩＰＣは、今はない。この後、右介さんはカメラ雑誌編集長等を経て、現在は「クラシックジャーナル」編集長だ。そして出版社「アルファーベータ」代表取締役だ。　最近は自ら、本も書いている。『カラヤンとフルトヴェングラー』（幻冬舎新書）。『ブームはどう始まり、どう終わるのか』（岩波アクティブ新書）等だ。

そして昨日、本屋に行ったら、又、新しい本が並んでいた。何と、『松田聖子と中森明菜』（幻冬舎新書）。凄い！「あなたはどっちが好きだった？」と迫っている。元左翼の右介さんがだよ。でも、売れている。この右介さんとも対談したいね。

ということで終わり。今週も本三昧だった。

【だいありー】

(1)12月10日（月）月刊「創」の〆切はいつもは20日だが、正月進行の為早くなり、10日が〆切。必死で書く。それと、死刑囚・小林正人氏を励ます本を作るとのことで、支援者に頼まれて原稿を書く。

(2)12月11日（火）午後１時、京橋の映画美学校。衝撃の映画『靖国』（李纓監督）の試写会だ。実はこの試写を見るのは二回目だ。実にいい。大きな問題提起になっている。終わって監督の記者会見。「反日映画だと批判する人もいますが」と聞いたら、「断じて反日ではない。親日、愛日の映画だ」と断言していた。終わって監督と個人的に話す。全体的に素晴らしいが、ラストの南京事件の写真、映像を批判する人がいる。監督は「厳選して使った。自信がある」と言う。多くの人に見てもらいたい。「これは問題提起だ」と監督も言っているのだし。

(3)12月12日（水）この日、雨宮処凛さんの『生き地獄天国』が発売される。どこの書店でもうず高く積まれている。売れている。それに、何と、この日出た『アエラ』（朝日新聞社・12月17

日号）の「現代の肖像」に雨宮さんが出ている。〈「生きさせろ！」と叫ぶワークプアのミューズ〉と。グッドタイミングだ。僕も取材されてコメントしている。２ヵ月も前に取材された。それが延びて今週になった。そして重なった。かえってよかった。やはり幸運の女神がついている。

２時40分からジャナ専門の授業。「時事問題」。夜７時から、一水会フォーラム。高田馬場サンルートホテル。大下英治さん（作家）。「大連立の乱と政界再編成」。話はうまいし、面白い。ずっと聞いていたかったが、８時半、抜けて渋谷に。『靖国』の監督・李纓さんと雑誌の対談。９時から、靖国問題について、日中問題について、戦争について語り合った。12時まで。

とても勉強になったし、楽しかった。監督は三島由紀夫の本を読んで日本語を勉強したという。初めに読んだのは『音楽』。さらに、「太陽」のソクーロフさんとも親友だという。それで僕との対談にも応じてくれたのだろう。ありがたい。

(4)12月13日（木）昼、取材。午後、骨法道場に行く。原稿ばっかり書いてるし、疲れもたまったので。膝や肩も治った。スッキリした。「１ヵ月に一遍位は来なくちゃダメですよ」と言われた。

夜６時半から日本教育会館。「警察・検察の不法・横暴を許さない連帯！　第６回講演・討論集会」に行く。「在日朝鮮人・朝鮮総連への強制捜査に見る不当・不法。その背後にあるもの」。弁護士の星正秀さんの講演がよかった。感動した。バランス感覚のある人で、二次会でかなり突っ込んだ話をした。土屋公楠さん、川上徹さん、山中幸男さん、樋口篤三さん、ＪＲ総連の人などに会う。

この日の朝刊に出てましたが、弁護士の橋下徹さんが大阪府知事選に出るんですね。もう圧勝でしょう。「たかじん」で何度か会ってます。爽やかな人ですし、勉強家です。

(5)12月14日（金）河合塾コスモは今学期は終了したのだが、この日は特別授業。12時半から３時まで、「基礎教養」の読書ゼミ。３時から「国語科」の教師の会議。現代文、小論文、古文、漢文の先生が揃って、国語科の授業について話す。

７時、作品社に行く。飯田橋。今日、『愛国者の座標軸』の見本誌が出来た。嬉しい。この後お祝い。担当してくれた青木さん、岩崎君などと共に。私の生涯の「記念碑」になる。いい本を作ってもらい、幸せだ。これからの企画についても相談する。この後、会う予定だった人達と連絡がうまく取れず、行けなかった。申し訳ありません。やっぱり携帯は必要だと痛感した。

(6)12月15日（土）午前10時半。『古事記』の勉強会。午後３時から、社民党本部に行く。私の講演会だ。「憲法と天皇」。東大全共闘に呼ばれて勇躍、乗り込んだ三島由紀夫のような気分だ。でも時代的背景から考えると、そんな緊迫感はない。「社民党、がんばれ！」という講演になった。

「実は、昔から私は社民党の味方だったのだ！」という衝撃的な話をした。最近、昔の仲間から本をもらった。「生長の家学生道場」の機関誌『壮士』（第４号）だ。当時、（今から42年前だ！）大学４年生（22才）の私も書いている。何と、「社会党政権実現のために」という80枚の大論文だ。「この頃から、敵にエールを送ってたんですよ」と言われた。驚いた。じゃ、『私たち、社民党の味方です』を出さなくちゃならんな。社民党でとても気持ちよく話せた。その時の話は又、書きましょう。終わって打ち上げ。楽しかった。

「ＳＡＰＩＯ」（12月26日号・小学館）を買った。小林よしのりさんの「ゴーマニズム宣言」

がよかった。感動した。「沖縄のことなんかどうでもいい保守シンポ」。凄い。我が意を得たりと思った。皆も、読んだらいい。

【お知らせ】

(1)12月18日（火）阿佐ケ谷ロフト。７時半。「政治の力学。日本はどこへ向かうのか」。二木啓孝さん、吉田司さんと。私も出ます。

(2)12月22日（土）７時。早稲田奉仕園地下のリバティホール。故田中義三さん一周忌の集い。「追悼集」も出来るそうだ。

(3)12月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のトークライブ。「国家・死刑・戦争＝この１年を振り返る＝」で、出演は佐藤優、森達也、綿井健陽、阿曽山大噴火、そして私です。

(4)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

(5)１月16日（水）一水会フォーラム。７時、高田馬場サンルートホテル。講師は井川一久氏（元朝日新聞編集委員。元ハノイ支局長）。「ベトナム独立戦争の陰に日本人の血涙」。知られざる貴重な歴史が聞けます。

(6)１月21日（月）午後７時から、阿佐ケ谷ロフト。早見慶子さんの『I LOVE 過激派』出版記念トーク。私も出ます。

(7)２月６日（水）７時、阿佐ケ谷ロフト。久しぶりで塩見孝也さん（元赤軍派議長）と一騎打ち。連合赤軍事件について。

(8)２月10日（日）午後７時半。阿佐ケ谷ロフトで、「ユーストーク」のイベント。「愛国心」について。私も出ます。しかし凄いね。12～２月の２ヶ月で、阿佐ケ谷ロフトに私は５回も出ますよ。出過ぎだね。反省。断わったら、もう呼んでもらえないと思うので何でも引き受けちゃう。

HOME

今週の主張

バックナンバー

最高最強の本が出来た！

今週の主張12月24日

(1)岩崎君は400万字の原稿を読んで、まとめてくれた！



『愛国者の座標軸』（作品社・2600円）が発売になりました。今日、12月24日（月）、書店に並びます。表紙に私の写真がデカデカと出ているので、ちょっと恥ずかしいですが、でも嬉しいですね。超豪華なクリスマスプレゼントをもらった気分です。作ってくれた作品社の皆様、それに、買ってくれる皆様に感謝します。それと、このＨＰの歴代の管理人の方々に。

何故、管理人かというと、この本は実はこのＨＰが基になって出来たのです。このＨＰを始めて、何と８年になります。一水会の代表を辞めてから、始めたようです。運動の一線から引いて、ホッとした気分と、淋しい気分もあったのでしょう。何人かの人に勧められて、「じゃ、試しにやってみるかな」と思い始めた。それ以来、８年だ。

「今週の主張」「だいありー」「お知らせ」と合わせて毎回、400字詰の原稿用紙で20枚ほど書いてきた。元旦でも連休でも、１度も休まず書いてきた。８年ですから、500回近くになる。厖大な分量だ。20枚×500回だから１万枚だ。１万枚×400字で400万字だ。

今年の６月頃だった。「このＨＰを本にしませんか？」と作品社の青木誠也さんから話があった。思ってもみなかった事なので驚いた。「ありがとうございます。ぜひお願いします」とすぐ返事をした。チャンスは逃したくなかったからだ。「でも…」と不安もあった。こんな膨大な分量をどう載せるんだ。全部は載せられないだろうから、取捨選択するんだろう。では、誰がどうやって選ぶのか。そう考えただけで頭がパニックになる。

「それは岩崎君にやってもらいましょう」と青木さんが言う。それで７月４日（水）にジャナ専で会った。私の授業の後だ。そのあと、高田馬場のルノアールで打ち合わせをした。

なぜジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）で会ったかというと、青木さんは作品社の社員だが、ジャナ専の講師でもある。又、岩崎孝正君は、ジャナ専生で、今年３月に卒業した。青木さんの授業にも私の授業にも出ていた。とても優秀な学生だ。特に竹中労（伝説のルポライター、革命家）の研究では日本でも屈指で、とても詳しく、僕も教えてもらっている。「早く一冊の本にまとめろよ」と私は勧めている。　つまり、ジャナ専の講師二人と、優秀な卒業生の

「ジャナ専コンビ」で、本の企画は進められた。先走って言うが、本のデザインをしてくれたのは前田奈々さんで、やはり、ジャナ専の講師だ。又、「著者紹介」の写真は、ジャナ専の教室で撮った。黒板を背にして講義している。

さらに、表紙の写真だが、これは、ジャナ専のスタジオで撮った。カメラマンは倉光潔さんで、とても優秀な人だ。私のような汚い素材を使って、こんなに素晴らしい写真を撮ってくれた。感謝感激です。本の見開きには、「カヴァー写真・倉光潔」と出ており、その横に、「撮影協力・日本ジャーナリスト専門学校」と出ている。ジャナ専の皆にお世話になって出来た本だ。

スタジオといったが、ジャナ専には立派なスタジオがある。僕も今回、初めて知ったが…。僕は文芸創作科で教えているが、他に編集者養成科、スポーツマスコミ科、写真科など、沢山の科がある。そのために、スタジオがある。



（左から）鈴木、青木誠也さん、岩崎孝正君（12月14日）

こんな立派なスタジオは大出版社でもあまり持っていない。たいていは、外のスタジオを借りて撮っている。ただ、講談社は独自のスタジオ・ビルを持っている。単行本、新書の他、月刊・週刊だけでも30位の本を出している。そのたびにスタジオを予約し、借りるのは大変だ。じゃ、自分のところで作っちゃえと、スタジオ用のビルを建てたのだ。１階から６階まであって、全部、スタジオだ。中には調理用のスタジオもある。料理雑誌も出してるからだ。

森達也、斎藤貴男、私の三人で作った『言論統制列島』は、ここで写真を撮った。腕を突き上げたり、スクラムを組んでいる写真だ。又、斎藤貴男、潮匡人、林信吾、私の『超・日本国憲法』も、ここで撮った。さらに、『愛国者は信用できるか』の中に使った、「歴代天皇御真影図」もここで写真を撮ってもらい、載せた。

ちょっと話が外れたが、『愛国者の座標軸』の写真は全て、ジャナ専のスタジオで撮った。表紙（表）の腕組みしてる写真、表紙（裏）のちょっとハニカンでいる写真。「いや、中にもありますよ」と青木さんに言われて、パラパラとページをめくったが、ない。「表紙を取って下さい」と言われて取ると、そこには又、私が。ポケットに手を突っ込んでハニカンでいる私が、何と５人。表紙、著者紹介と合わせて、８人の私がいる。自分の写真がこんなにあるなんて。まるで、タレント本のようだ。

これはいい。これからは全部、この写真を使わせてもらおう。このＨＰの扉とか、「創」の連載の題字下にも。その時は、倉光さんの許可を取らなくちゃ。

(2)「コメント」は苦労した。「脚注」は凄いよ。面白い！



『脱右翼宣言』（ＩＰＣ・1993年）

あっ、いかんな。このままじゃ表紙の話だけで終わっちゃうよ。実は、この本が出来るまでは本当に大変だった。難行苦行の連続だった。それが終わり、ホッとしたので、今は表紙の話ばかりになっちゃった。

では、制作過程です。順を追って説明する。

1. 500編の「今週の主張」から50編を厳選する（岩崎君の仕事）。
2. さらに、「オーマイニュース」で私が連載していた「愛国の座標軸」を加える。
3. この全てに、「単行本収録にあたってのコメント」を書く（私の仕事。一編に２枚として、これだけで百枚！）。
4. 下に「注」をつける（青木さんの仕事。人名、事件など。並の注ではない。私の原稿についても、鋭い突っ込みを入れ、時にはチャカしている。読んでいて、私も思わず笑ってしまった）。

単に、ＨＰを整理し、まとめたものではない。それは分かってくれるだろう。　350ページもあり、校正は毎日やっても、やっても終わらない。こんな経験は初めてだ。さらに一つずつに「コメント」を書く。書いて読み進めたら「本文」に書いている。まずい、と思い戻って消す。そんなこんなで、全く進まない。もうヤダ！と何度も投げ出しそうになった。でも、作品社の人達、岩崎君はもっとキツイ仕事をしてるんだ、と考え直し、机に向かった。

それにしても岩崎君は偉い。500編のうちから50編を選び出したのだ。400万字を読んだのだ。その上で、50編を取り出したのだ。「どうやって選んだの？」と聞いたら、「タイトルに合うようなものを中心に選びました。ギリギリまで入れようかどうか迷ったのも沢山ありました」と言う。では、その選考に洩れたものも聞いてみたい。

政治的、運動論的なものを中心に選んだのだろう。これは、とても自分では出来ない。自分なら、下手な文でも、下手ながらに愛着があって捨て切れない。これも自分の子供だ。「捨てないで！」としがみつかれると、邪険にふりほどけない。泣きの別れだ。修羅場だ。その点、岩崎君は、「仕事」だから、割り切ってクールに切る。仕事人だ。必殺仕事人だ。

私だったら、「三島全集を読破した！」「大菩薩峠を読破した！」という方が世界史的な偉業だと思うから、優先して入れちゃう。あるいは、セミの話とか、ネコの話とか。でも、それじゃ、単行本としての確固としたポリシーがない。それで、岩崎君は、テキパキと切り捨てたのだろう。

これが実にうまい。校正していて、ついつい読んじゃった。引きずり込まれる。自分の文なのにいい。そんな文章ばかりを集めたし、「一つの流れ」になるようにまとめている。でも、何度も言うが、読むのは楽しいが、「コメント」がキツかった。次の時は何とかしなくっちゃ。（と、もはや８年後のことを考えている。あるいは４年後か）。

さて、下の注だ。「脚注」というのだろうか。これは青木さんがやってくれた。人名、事件などの解説をしっかりやっている。でも、面白いというか、奇妙な注もある。

▼「私もアップルのユーザーなので」……え？

▼「万引きもできません」……ポスターのあるなしに関わらず、やめてください。

▼「成瀬巳喜男」……映画監督。作品に「舞姫」「めし」「流れる」など。ちなみに、いつもの調子の鈴木の冗談のようだが、「やるせなきお」の異名をとったというのは本当。

▼「早稲田ナショナリズム」……まれに鈴木にも垣間見られる。

▼「君が代博士」……（1943～）一水会顧問。著書に『愛国者の座標軸』など。

▼「子供や孫にも」……こ鈴木さん、独身でしたよね。

▼「都旗って何だ」……こんなのです（と図版が入っている）。ちなみに「地色を江戸紫とし、白地の紋章を中央に配す」という規定があります。東京だから、“江戸”紫なのかな。

（ウーン、これは勉強になる。鋭い「注」だ。多分、江戸だから江戸紫だろう。そういえば、何かのシンポジウムで、「砂時計を逆さにして、東京は江戸に戻せ」と言ってた人がいた。アナクロニズムだ）

▼「広末涼子浄化計画」……コカ・コーラの「からだ巡茶」のコピー。「浄化」の語が薬事法に抵触するおそれありとして東京都から指導を受け、以降「気分浄浄」と変更。広末の前にＣＭのほうが浄化されてしまった。

（これも知らなかった。凄い。とてもとても勉強になる）

(3)『脱右翼宣言』の「脚注」を思い出した



大下英治さん（右）と。（12月12日・一水会フォーラム）

注を読むだけでも面白い。時間を忘れる。こんな調子で紹介していたらキリがない。でも、この「注」作りも大変だったんだろう。「いや、楽しかったですよ」と青木さんは言っていた。でも、やはり大変だ。私なら、とても出来ない。

そうだ。こんな楽しい「注」作りをした人が以前にもいたな、と思った。誰だったろう。そうだ。『脱右翼宣言』（ＩＰＣ）の中川右介さんだ。先週紹介したが、中川文人さんのお兄さんで、今、『松田聖子と中森明菜』（幻冬舎新書）を出して、売れている。この人が1993年、ＩＰＣの代表だった時に、私の『脱右翼宣言』を出してくれた。そして、「注」まで書いてくれた。でも、「鈴木さんも書いて下さいよ」と言う。じゃ、「分担してやるんだな」と思って書いた。ところが違う。バッティングしてるのが多い。つまり、一つの事物、人名、事件について二人が書く。相補うこともあるが、時には全く逆なことも書く。「注」同士が喧嘩している。「注」の内ゲバだ。これは画期的な注だ。例えば、こんなのだ。

▼「風流夢譚事件」……（中略）この件で愛国党の小森一孝が中央公論社の嶋中社長宅に侵入し、お手伝いさんを刺殺、夫人に重傷を負わせた（鈴木）

今の中央公論社しか知らない世代には、あの出版社がそんな内容のものを載せるとは信じら

れない（中川）。

▼「皇太子の結婚。おめでとう広告」……こういう広告は何の意味があるのだろうか。（中略）こういう広告を嬉々として集め載せている朝日新聞社が左翼であるはずがない（中川）

「おめでとうございます」と、とにかく言いたいんでしょう。他にそう言う場もないし、新聞の商業主義に利用されているかもしれないけど、まあいいんじゃないですか。そんなにかたく考えなくても（鈴木）

▼「連続企業爆破事件」……（中略）詳しくは鈴木邦男氏の『腹腹時計と〈狼〉』を。この本は今も出てるんだろうか（中川）

５年前に改題・増刷して彩流社から出ていますよ。中川さん、知らなかったの。困るなー。『テロ＝東アジア反日武装戦線と赤報隊』という本ですから、買って読んで下さいね（鈴木）

▼「日の丸・君が代」……若い人は、嫌いかと思ったら、サッカーのワールドカップ予選の時、応援で日の丸を振り、君が代を歌っているではないか。これには正直、ぶったまげた。右翼以上だ（鈴木）

同じくぶったまげた。サッカーは嫌いになった（中川）

▼「オードリー・ヘップバーン」……鈴木さんの話によると、今の天皇・皇后がいちばん好きな映画は『ローマの休日』なんだそうだ。あまりにも出来すぎた話（中川）

ちなみに皇太子さまは「望郷」とヴィスコンテの「ベニスに死す」がお好きだという。新聞記者に聞いた話だ。ヴィスコンテ監督の映画はお好きなようで。だったら悲劇の国王を描いた「ルートヴィッヒ」もお好きなのだろう（鈴木）

…と、こんな調子で、二人が丁々発止で闘いながら「注」を書いている。面白い。

ウーン、「注」の話から、脱線し、『脱右翼宣言』に行っちゃった。じや、軌道を戻す。『愛国者の座標軸』だ。

このタイトルだが、私が今年、「オーマイ・ニュース」に連載した時のタイトルだ。名付け親の青木理さん（元共同通信社）の了解を得て、もらった。ただし、「オーマイ・ニュース」の時は「愛国の座標軸」だった。それが、いつの間にか『愛国者の座標軸』になっている。

「二人とも『愛国者…』の方がいいと言ったじゃないですか。それで変えたんですよ」と岩崎君。「エッ、そうだっけ？」と二人はキョトン。でも、『愛国者の座標軸』の方がキチンと決まった感じでいい。岩崎君のお手柄だ。

このＨＰは８年前から始まった。だから８年分を岩崎君は見た。しかし、余り古いのはマズイと思い、2003年以降のものに絞った。本のはじめは「『日本の夜明け』は来るのか」だ。スタートからしていい。

そして、「国賊征伐隊」事件。イラクの人質事件。元一水会会員が人質になった。ジェンキンスさん。靖国問題。日教組の委員長と対談した。二つの放火事件。何で死んだ！見沢知廉。重信房子さんに判決。英霊を静かに眠らせよ。テロはなくせる。驚きました「皇太子妃」反対運動がこんなに激しかったなんて。不敬芝居に天の声。ニューヨーク・レポート…等々。そして、最後が「スパイは悲しいやね」だ。

(4)前代未聞のサインをしてやった！



映画『靖国』の李纓監督（右）と対談した（1月12日）

ＨＰがあって本当によかったと思いますね。だって、依頼された原稿を書いてるだけでは、とても書けなかった。その時々に、自分が思ったことをすぐに書ける。それも枚数制限なく書ける。そういう〈場〉があったから出来た本だ。それはありがたいと思う。

昔々、偉い哲学者たちは、ひたすら原稿を書いた。月刊誌も週刊誌もない。連載する場なんてない。本になる可能性もない。それでも、ひたすら書いた。そうした中で、カント、ヘーゲルなどの稀代の哲学者が生まれ、偉大な本も出来た。だから我々も本当はそうすべきなのだ。そういう風に本を書くべきだ。現在、このことがＨＰなら出来る。誰にも見てもらわなくていい。思った瞬間に、思った枚数を書ける。

そして、いろんな挑戦が出来る。来年は、「対談」や「インタビュー」などもやってみたい。又、こういった易しい文だけでなく、昔のような難解な文も書いてみたい。そのために、私の40年前の論文なども紹介してみよう。

12月14日（金）に作品社に行って、この本と対面したと言った。そこで見本誌をもらった。青木さんが、岩崎君と私を誘い、近くの店に行き、出版パーティをしてくれた。嬉しかった。半年間の苦労が報われた思いだ。

その時、岩崎君が「サインして下さいよ」と言う。彼の名を書こうとしたら、「親父に」と言う。親父さんの名前を入れ、日付と私の名前を書いた。「何か一言、書いて下さいよ」と言う。それで、「息子さんには本当にお世話になりました。おかげ様でこんな素晴らしい本が出来ました。息子さんは就職も決まり、きっと有能な編集者になるでしょう。これから、ますます楽しみですね…」と書いた。

「何か、手紙みたいですね」と岩崎君。私もこんな長いサイン（？）を書いたのは生まれて初めてだ。本の表紙といい、厚さといい、内容、分量といい、皆、生まれて初めての経験だ。では、いいお年を。あれっ、もう一回あったかな、今年は。８年間、一度も休まずに書いてたんだ。浮かれて落としちゃたまらない。では、メリークリスマス！

【だいあり一】



社民党で講演した（12月15日）

(1)12月17日（月）午後から雑誌の取材。我がみやま荘で。慌てて掃除して記者に上がってもらった。　夜７時から一水会忘年会。新宿で。若い人も増えて、活発になった。一水会のＨＰもリニューアルされて、やたらと格好いい。機能的だ。レコンの読者、会員も増えるだろう。楽しみだ。

その後、美人ママ・桜マミさんの店で二次会だ。私は、ウーロン茶だけで、酔ったふり。家に帰って朝まで仕事ですよ。

(2)12月18日（火）昼、打ち合わせ。夜、７時から阿佐ケ谷ロフト。二木啓孝さん（フリージャーナリスト）、吉田司さん（作家）、私。テーマは「政治の力学＝日本はどこへ向かうのか＝」。阿佐ケ谷ロフトは初めて来た。いい場所だ。家からも近い

し。新しくて気分がいい。スペース的にも手頃だ。でも脚が静かで盛り上がらない。それで私が暴言を吐いて、盛り上げようとしたが、かえって盛り下がり、皆の顰蹙を買った。これから２月まで、もう４回もある。心配だ。これからも暴れてやる。高須基仁さんにならって、ヒールになってやる。

(3)12月19日（水）３時40分、ジャーナリスト専門学校。「時事問題」。今日で今学期は終わり。夕方、打ち合わせ。

(4)12月20日（木）２時、骨法整体に行く。膝は治ったが、今日は、肩と背中をやってもらった。楽になった。本当にありがとうございました。

(5)12月21日（金）大阪。読売テレビの「そこまで言って委員会」。久しぶりに出た。テーマは「大決着！死刑廃止論」。三宅久之、宮崎哲弥、桂ざこばさんのレギュラーに、金美齢、田嶋陽子、原口一博、谷澤忠彦、そして私。激しい闘論になった。キツかった。日帰り。



『新刊ニュース』（08年1月号）

(6)12月22日（土）午後１時から草月ホール。松岡正剛さんがコーディネートする「連塾」に参加する。浅葉克己、清水博、しりあがり寿さんらの講義。知的刺激にあふれた場だった。８時まであるが、途中で抜け出して、江東区清澄の「シュウゴーアーツ」に行く。森村泰昌さんの「荒ぶる神々の黄昏----なにものかへのレクイエム・其の弐」。そのオープニングパーティに出る。森村さんは前回、三島由紀夫、ヒトラーに扮してパフォーマンスをやってたが、今回はレーニンだ。凄い。感動した。

　ここも途中で抜けて。午後７時から早稲田奉仕園。故田中義三さんの一周忌の集い。「追悼集」も出た。素晴らしい出来だ。次週にでも紹介しよう。

(7)「週刊新潮」（12月20日号）の「ワイド特集・あかんべえ」に〈反日映画「靖国」は「日本の助成金」750万円で作られた」が出てました。僕は「反日映画」だとは思わないけどな。厳しい指摘もあるが、日本を愛する「親日映画」「愛日映画」だと思った。李纓監督とは、二回会い、対談した。その時の写真を載せよう。

(8)「週刊読書人」（12月21日号）の「2007年の収穫から」に、「おすすめの本３冊」を書いた。又、『新刊ニュース』（08年１月号・株式会社トーハン）の「2007年印象に残った本。作家が選んだこの３冊」にも書いた。

【お知らせ】

(1)12月27日（木）７時から阿佐ケ谷ロフト。「創」のトークライブ。「国家・死刑・戦争＝この１年を振り返る＝」で、出演は佐藤優、森達也、綿井健陽、阿曽山大噴火、そして私です。

(2)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、森達也監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

(3)１月７日（日）７時半、阿佐ケ谷ロフト。講師は木村三浩氏。新年初頭に送る「男気」トークライブ。拳を交えることで学んだ「友情・信頼とは何か」を、憂国の視点を交えて語ります。

(4) 1 月16日（水）一水会フォーラム。７時、高田馬場サンルートホテル。講師は井川一久氏（元朝日新聞編集委員。元ハノイ支局長）。「ベトナム独立戦争の陰に日本人の血涙」。知られざる貴重な歴史が聞けます。

(5) 1 月21日（月）午後７時から、阿佐ケ谷ロフト。早見慶子さんの『I LOVE 過激派』出版記念トーク。私も出ます。

(6) 2 月６日（水）７時、阿佐ケ谷ロフト。久しぶりで塩見孝也さん（元赤軍派議長）と一騎打ち。連合赤軍事件について。

(7) 2 月10日（日）午後７時半。阿佐ケ谷ロフトで、「ユーストーク」のイベント。「愛国心」について。私も出ます。しかし凄いね。12〜２月の２ヶ月で、阿佐ケ谷ロフトに私は５回も出ますよ。出過ぎだね。反省。断わったら、もう呼んでもらえないと思うので何でも引き受けちゃう。

(8)まだ日程が決まってませんが、筆坂秀世（元日本共産党No.4）と２月にトークをやります。面白い話が聞けそうです。

HOME

今週の主張

バックナンバー

社民党で講演した。「衝撃の事実」を話した

今週の主張12月31日

(1)41年前に、衝撃の大論文を書いていた！



社民党で講演（12月15日）

12月15日（土）、社民党で講演をした。「右翼の人が社民党本部に来て講演したなんて、鈴木さんが初めてですよ」と言われた。多分、これからもないだろう。

「でも僕は昔から社会党のことは密かに応援してたんですよ！」と言って、二つの証拠を見せてやった。一つは、土井たか子さんの特製テレカ。「そしてもう一つがこれです！」と、一冊の本を取り出して見せた。

『壮志』という雑誌だ。「生長の家学生道場」の機関誌だ。大学４年生だった私（22才）も書いている。タイトルは何と！

「社会党政権実現のために」

となっている。昭和41年（1966年）12月23日発行だから、今から41年前だ。「そんな昔から私は社会党のことを考え、応援していたんです」と言ったら、満員の聴衆が「オオー！」と言って、どよめいた。

だから、いい雰囲気の中で話を出来た。気分がよかった。質疑応答も楽しかったし、打ち上げも楽しかった。初めに『壮志』を紹介したのがよかった。神の愛だ。

それに、不思議なことに、この社民党の講演会に合わせるかのように、この『壮志』は〈発掘〉されたのだ。41年も前の古文書となると、僕の意識の中ではまさに〈発掘〉だ。それも偶然に発掘された。土の中から発掘された「ミロのヴィーナス」のように。昔の学生運動仲間が探してくれた。驚いた。全く忘れていたんだ。大論文だ。23ページも書いている。今、ちょっと数えたが、二段組みだから、１ページには400字で７枚ほどが入る。23×７＝161。エッ！400字で161枚も書いたのか。凄い。これだけで新書版が一冊出来るよ。

この『壮志』は「Vol.4」になっている。毎年、年末に出ていたようだ。多分、自治会費の中から出したのだろう。僕の２年後輩の布清信（ぬの・きよのぶ）君という人が今、石川県七尾市で仏壇屋をやっている。先祖は江戸時代の布屋清兵衛という道具屋だったという。由緒のある古い家だ。彼はもの凄く記憶力がいい。40年前の学生時代のことを克明に覚えている。電話して聞いた。

「当時、寮費は月に6500円でした。その他に自治会費が1500円。計8000円を納めてました」

と言う。この6500円には朝食、夕食代がつく。前の月に納める。金がなくなると、朝、腹一杯食べて、昼を抜き、夜まで水を飲んで飢えをしのぐ。「鈴木さんは本ばっかり買ってたので、すぐ金がなくなり、腹を空かせて本を読んでました」と布君。だったらお前が食い物を恵んで「飢えた子」を救ってやれよ。薄情な奴だ。



社民党本部の１階。浅沼さんの銅像の前で。右は公演の案内

「我慢出来なくてよく実家に電話して、１ヵ月分早く送ってもらってました。鈴木さんの仕送りは２万円でした。現金封筒が届くと、焦って破り、中のお札まで一緒に破ってました」

へエー、よく覚えてるもんだ。自分でも忘れてるのに、他人の仕送り額まで覚えてるなんて。

「当時２万円の仕送りはリッチでした。寮費と自治会費を払っても１万２千円残りますし。でも、本ばっかり買ってたので、いつもピーピーしてました」

じゃ、自治会費は何に使ったんだろう。これが、『壮志』を作ったり、春の旅行に行く時の費用になったらしい。

(2)天意実現の「理想社会主義者」だった！



『壮志』（昭和41年12月23日発行）

では、『壮志』の話だ。「大いなる志」だ。いいね。学生時代は皆、そう思っていたのだ。毎号、特集がある。この「Vol.4」は、何と、「特集・霊的文化大系への試み」だ。「霊的」というと、今の人には異様に響くかもしれないな。しかし、この頃は、「信仰的」とか、「精神的」という意味で使っていた。つまり、「生長の家」の真理、信仰を基盤にして、政治、経済、社会、芸術、スポーツと、各分野に進出する。そういう考えなのだ。「霊的政治学」「霊的経済学」……というふうに、各分野に真理・宗教の光を当てる。それらを統合したものが、「霊的文化大系」だ。何とも壮大なことを考えたものだ。

「生長の家学生道場」は、「生長の家」の将来を背負う学生が生活し、修行している。そうした自負もあったし、周りからの〈期待〉も大きかった。

では、道場生はこの『壮志』にどんなことを書いていたのか。「国家としての不変性」、「ゆうとぴあ」、「神武天皇建国論」、「情（こころ）」、「日本的なるものへの郷愁」…などだ。皆、堂々とした論文だ。学生だけではなく、道場長の大森知義先生も「日本的なものの再発見」を書いている。さらに、何と、谷口雅春先生も登場している。「日本文化について」という題だ。これは学生道場生が谷口先生に「霊的学問大系」について質問し、先生が答えている。一問一答だ。何人もの学生が質問しているが、A、B、Cとなっていて学生名は出ていない。僕もい

るはずだが、どれなのか分からない。（布君に聞いてみよう）。初めに「Ｂ君」がこんな質問をしている。

〈Ｂ　生長の家は天意実現理想社会主義だと言われておりますが、例えば天皇中心の社会が実現したとしても、理念は永久不変であっても、その社会体制はやがてまた滅びるのではないかと思うのですが〉

凄いことを言っている。「理念と現実」について質問している。それ以上に驚いたが、生長の家は「天意実現理想社会主義」だという。「社会主義」だったのか。凄い。そういえば、ちょっと思い出したが、創価学会が作った公明党は、初め、綱領で「人間社会主義」と謳っていた。当時は、「社会主義」という言葉に夢があったのだ。皆が、平等に幸せになる。という夢や希望があった。今ならとても、「社会主義」と使えないだろう。

さらに、Ｂ君は、「霊的文化大系の中で法律はどのように位置づけられるものでしょうか」と訊いている。又、Ｆ君は、「結局、日本文化の特質とはどういうものなんでしょうか」と訊く。それらに対し、谷口先生は丁寧に答えている。又、Ｃ君のこんな質問もある。

〈Ｃ　柿本人麿が「大君は神にしませば」という歌を詠んでますが、天武天皇は壬申の乱で血をもって御即位になったということから、結局この歌はあこがれの念をこめているのであって、天皇＝神ということを過去の事として感じている。つまり天皇非即神の考えが現われていると言われます。だいたい天皇即神の考えは推古帝からだと言われていますが、このように人麿なんかも天皇を神そのものとは観ていなかったのではないかと思われます〉



生長の家学生道場の後輩・布清信君

この「Ｃ君」も鋭い。深い。皆、よく勉強している。又、臆することなく谷口先生に質問し、自分の意見を発表している。これは驚きだ。今の学生とは違う。この先生の文が、いわば「巻頭」で、あとは学生の論文がビッシリ並んでいる。これらの文は又、紹介してみたい。しかしこうした全体の「霊的文化大系樹立」の試みとは唯一つ、違っているのが私の論文だ。ポツンと一つだけ、浮いている。霊的文化大系というなら、「天意実現政治について」とか、「革命と宗教」とか、考えそうなのに、何と、「社会党政権実現のために」だ。40年も前から私は〈異端〉だったのか。ひねくれ者だったのか。「左傾」していたのか。でも、学生道場の委員長だよ。

(3)41年前、学生道場では「里見ブーム」だった



『民間学事典』（人名編・三省堂）

ウーン、謎だな、この人は。と思いながら、パラパラと『壮志』をめくっていた。そして、布清信君の原稿「神武天皇建国論」を読んだ。よく勉強している。大学２年生なのに、国学院で、樋口清之先生について学んでいた。それを元にしながら、さらに、生長の家の真理で、歴史を究めようとしている。最後に「参考文献」を書いている。律儀だ。「古事記」「日本書紀」、そして樋口清之、和辻哲郎、肥後和男…といった人の著書があげられている。勿論、谷口先生の本も。そして、アッと声を出して叫んでしまった。こんな本があったからだ。

里見岸雄『万世一系の天皇』

えっ、布君は41年前に、すでに里見の本を読んでたのか。

私は里見には大きな影響を受けている。でも、一水会を作り、笹井大庸、宏次朗兄弟を知り、彼らから里見の本を紹介され、読んでからだ。特に、『国体に対する疑惑』、『天皇とプロレタリア』は、心臓が止まるほどのショックを受けた。「一見、左翼的」なスタイルを装いながら、右翼的正論を吐く。この手法は凄いと思った。その後の私の書物はこの影響を受けたものがかなり多い。『腹腹時計と〈狼〉』、『がんばれ！新左翼』『わたしたち、日本共産党の味方です』、『こんな日本、大嫌い！』…と。

そうだ。里見について私が短く書いた文がある。それをまず読んでもらおう。『民間学事典』（人名編）（三省堂・7600円）だ。

〈里見岸雄　1897（明治30）～1974（昭和49）。右翼思想家。

東京生まれ。田中智学の三男。早大哲学科卒。1922年（大正11）欧州に留学し、帰国後24年に里見日本文化研究所を設立。36年（昭和11）、日本国体学会を設置。敗戦後は日本国憲法の改正を主張。55年、立正教団を創立し機関誌「国体文化」、「立正文化」を発行。

天皇・国体が体制側、資本家側のものになり、労働者を反天皇に追いやっている状況を憂え、天皇は一般国民、プロレタリアにこそ必要な理念だと説いた。『天皇とプロレタリア』『国体に対する疑惑』という著書の挑発的題名から里見の意気ごみはわかるだろう。これらの本はベストセラーになった。マルクス流にいうならば、「空想的天皇主義」に対し、里見は「科学的天皇主義」を提唱したというべきか。左右両翼の国体論はもちろん、政府官憲の「思想善導」をも痛烈に批判した。国体学会は現在もつづいており、月刊で機関誌「立正」を発行している〉

月刊誌「立正」は、さらに、「国体文化」に戻り、その「一千号記念大会」には私も出て挨拶した。又、その号に、祝辞も書いた。又、林芙美子原作の映画『放浪記』（成瀬巳喜男監督）には、林が本屋に入ると、里見の『万世一系の天皇』が置かれている。そんなシーンがあったと、「国体文化」に紹介した。今も、里見との〈縁〉は続いている。不遜を覚悟で言えば、自分こそ一番、里見の思いを継いでいるのでは、と思っている。

それにしても、41年前は私だって、里見は知らない。それなのに布清信君は既に読んでいた。凄い奴だ。それで、布君に電話した。そうしたら、さらに「衝撃的事実」が分かった。それは、次号で。

と言いたいが、出し惜しみしないで報告しよう。何と、布君は、こともなげに言う。

「学生道場では当時、〈里見ブーム〉で、皆、読んでましたよ。鈴木さんも読んでました」

エッ！私が読んでたのか。「錦正社から里見岸雄の『天皇とプロレタリア』『国体に対する疑惑』が出ていて、鈴木さんも感動して読んでました。一番初めは、吉田晴彦さんですね、読んだのは。それから井上稔さんが読み、道場中が読み出したんです」

(4)アジャー大学の晴彦君の活躍



森村泰昌さんの作品「ゲバラ」の前で。ご本人と（12月22日）

ウーン、ビックリだ。それに、「あの晴彦が！」と思わず叫んでしまった。吉田晴彦氏は、根っからの活動家タイプだ。優秀な男だ。演説したり、人を動かすのは好きだ。しかし、本を読むのは余り好きじゃない。そんな時間があったら、体を動かして活動したい。そんなタイプだ。だから、その彼が…と思ったのだ。彼は学生道場を出てから、生長の家本部に入り、運動に専念。そして、生長の家の理事長にまでなった。凄い人だ。

でも、余り本は読まなかった。いやいや、普通の学生よりは読んでいた。ただ、猛烈な読書家ぞろいの学生道場にあっては、比較的読んでないと思えたのだ。彼は活動中心だった。ある日、道場生の部屋に皆が集まった。中国文学を専攻している学生の部屋だ。本箱を見て、晴彦氏は言った。「何だ。軟弱な奴だ。女の本なんか読みやがって！『じゅん子』とは何だ。ダラシがない！」

その部屋の学生は『じゅん子』と題する小説を持ってたんだろう。でも、いいじゃないかと思って見た。ところが、中国戦国時代の思想家『荀子』（じゅんし）なのだ。一瞬、凍りついたね、皆が。こいつは馬鹿か、と思って。いくら読書が嫌いといっても、荀子も知らんのか。孔子、孟子、老子も知らんのかもしれん。「こうこ」「もうこ」「ろうこ」と読むかもしれん。

「やっぱり、アジャパーだね」と先輩の小山さんが言った。花菱アチャコ（コメディアン）の「アジャパー」をもじって言ったのだ。晴彦氏は亜細亜（アジア）大学に通っていたから、それにかけて小山さんは言っていた。「アジャー大学パー学部軽率学科残念Ｈ組への49番」…と。

ヒャー、小山さんも凄いことを言うと思った。でも別に貶している訳じゃない。愛情だ（どこが？）。そのあとも、時々、「ジュン子！」と言ってからかわれていたが、本人は全く気にしていない。

又、晴彦氏は、100万人に１人といわれるほどの高度の音痴なのだ。だから、飲み会では、いつも引っぱりダコだ。「ぜひ来てくれ」「ぜひ歌ってくれ」…と。どこに行っても大声で、堂々と歌い、皆、笑い転げていた。私も、あれ以上の音痴は聞いたことがない。ギネスブックに申請したら認められたろうに。又、本人は、「自分は歌がうまいから皆に呼ばれるのだ」と思っていた。これも凄い。それだけ自信満々だし、皆に、愛された。だから、トップの活動家になったし、出世し、生長の家本部の理事長にまで登りつめた。



森村泰昌さん扮する「独裁者」の前で

さて、里見岸雄の話だ。私は、このあと、かなり経ってから里見を知ったと思ってたが、布君は、「確かに鈴木さんは里見を読んでいた」と言う。じゃ、布君の記憶の方が正しいだろう。だったら、当時、里見を読み、ショックを受けたが、それは胸に秘め、隠してたのか。そうか！じゃ、「社会党政権実現のために」を書いたのも、里見の影響なのか。ウーン、人生は不可思議だ。推理小説のようだ。

『新右翼』（彩流社）でも書いたと思うが、自分の体験した歴史を書いていくと、どこかで、「整合性」を求めてくる。〈筋〉が通るように書く。いや、読んでる人に分かりやすいように書くうちに、（知らず知らず）そうなる。大学を出て、産経に入り、クビになり、一水会をつくる。一水会は、初め、学生運動のＯＢ会だったが、日蓮宗の田中智学門下の笹井兄弟達に会う。そこで、田中智学やその三男、里見岸雄の本を読み、衝撃を受ける。そして、「里見的戦略」を身につけて、『腹腹時計と〈狼〉』や『がんばれ！新左翼』を書く。…スッキリと〈筋〉が通っている。

しかし、「事実は違う」と布君は言う。何と、41年も前から、里見の本を、私は読んでいた。だから、「社会党政権実現のために」を書いた！ウーン、自分でも知らなかった「自分史」だ。『壮志』に書いた奇妙な論文の意味も分かった。

「いや、それも違います！」と布君は言う。エッ！謎解きが出来たのに、まだ何が不満なんだ。名探偵コナンのような奴だ。布君は言う。

「里見の影響もあったかもしれませんが、鈴木さんがあの論文を書いた動機は、谷口先生の『万教帰一』です！」

エッ！と又もや驚いた。どうしてオラの心が分かるんだ。それも自分では全く記憶がないことなのに。優秀なカウンセラーだ。私の無意識の中にズカズカと入りこんで、秘密を探り当てる。驚きの連続だ。布君の話を聞いてるうちに、うーん、こいつの言ってる方が正しいな、と思った。それにしても、「万教帰一」なんて久しぶりに聞いた言葉だ。全ての宗教は登り口は別々でも、同じ所を目指している。という教えだ。

「鈴木さんは自分では気付かないでしょ・か、この万教帰一の真理を生きているのです。だから、左翼の人だって、アナキストだって、殺人犯だって、皆、同じように、均しく接し、そこから〈真理〉 を探ろうとしてるんです。谷口先生の霊的文化体系の樹立を身をもって実行してるんです」

(5)勉強家の道場生ばかりだった



「第９条下における戦後美術」のパンフレット。森村泰昌さんの「解説」を私が英文で書いた

ウーン、知らなかった。そんな壮大なことを考えていたのか、この人は。まさに『壮志』ではないか。

「そうです。鈴木さんこそが壮志です」。

ウッ、私よりも私のことを知ってるよ。布君は。なんか怖い。

そうだ。万教帰一に関して少し書いたことがある。前出の『民間学事典』（人物編・三省堂）だ。谷口雅春先生について私が書いている。

〈谷口雅春　1893（明治26）～1985（昭和60）宗教家。「生長の家」創始者。

神戸生まれ。早大英文科中退。1917年（大正６）、大本教に入信。機関誌『神霊界』を編集するが、21年脱会。32年（昭和７）、『生命の実相』を出版しベストセラーになる。30年、「生長の家」を創設し、「万教帰一」「病はない。人間神の子、実相を見よ」と説く。戦争中は聖戦を支持し、戦後公職追放。46年、日本教文社を創立し、出版活動に力を入れる。「生長の家」の本だけでなく、フロイトやユングの全集、さらに青年に祖国への誇りを回復させようと「国史」シリーズを刊行。熱烈な愛国者で、その方面の著書も多い。『天皇絶対論とその影響』は山口二矢（浅沼社会党委員長を刺殺した青年）も愛読していた。明治憲法復元、優生保護法改正などを訴えた。64年には生政連（生長の家政治連盟）をつくり、玉置和朗などを国会に送った。また、生学連をつくり民族派学生運動も育成した。後継者は女婿の谷口清超〉

ウーン、それにしても壮大な物語だ。41年経って初めて解かれた壮大な謎だ。学生道場生は月に一回、谷口先生のご自宅（我々信徒は「お山」と呼んでいた）におうかがいし、お話を聞いた。『壮志』の巻頭に載ってるのも、その時の質疑応答だ。月に一回、２時間。30人全員で行き、正座して聞いた。毎回テーマを決めて、学生が質問をし、それに答えてもらう。

「鈴木さんは委員長だから、それを仕切っていました。『布、お前はこれを質問しろ』『佐藤、お前はこれだ』と割り符って。最後に、自分がまとめて、先生におうかがいをたてる。谷口先生は、『鈴木君は、よく勉強してる』といつも、誉めてましたよ」

ゲッ。そんなことをやってたのか。この人は。自分だけ格好いい役を独占して。いやみな野郎だな。チクショー、聞かなきゃよかった。でも、そんなはずはないと思うけどな。真面目に熱心に運動をしていた。ひたむきな学生だったと思うよ。鈴木君は。

とにかく、学生道場生は、皆、よく本を読んでいた。勉強していた。先輩の国領（くにわけ）さん（中央大）は、マルクス・レーニン全集を読破していた。「敵を知らなかったら、闘えないだろう」と言っていた。やはり、先輩の川島さん（国学院大）は、勉強家で、いい男だった。仲代達矢にそっくりだった。ニヒルで、もてた。女の子がキャーキャー言っていた。でも、一切相手にしない。活動ばっかりだ。そしてあとの時間は全て、本を読んでいた。本を買うために家庭教師のバイトをしていた。教えていた女子高生が川島先輩に惚れた。首ったけだ。「一緒になりたい」と思った。でも川島先輩は相手にしない。本ばかり読んでいる。又、近づいてきた女子大生が言った。「そんなに本が大切なの？私とも遊んで…」と。本に嫉妬したんだ。「本と同じように私も可愛いがって」と迫った。そこで、川島先輩、少しも騒がず、冷然と言い放ったそう

な。

「じゃ、お前も本になれば」

　ウーン、凄いですね。クールですね。土方歳三みたいですね。でも、この女も馬鹿だ。本になればよかったのに。そして、ページをめくってもらえばよかったのに。そしたら、いつも一緒だ。では、いいお年を。

【だいありー】



たかじんの「そこまで言って委員会」

(1)12月24日（月）図書館で勉強。

((2)12月25日（火）午後、取材。忙しくて本が読めない。川島先輩と違い、迫ってくる女はいないけど、仕事が遅いので、本を読む時間がとれない。ノルマが達成できんよ。又、今年一年の読書集計を出さなくてはいけないし。焦る。

(3)12月26日（水）仕事の打ち合わせ。遅れてる。でも夜は講道館。久しぶりに柔道の練習をする。気分がいい。今年のこれが稽古納めだ。

(4)12月27日（木）昼、打ち合わせ。夜、７時半から阿佐ケ谷ロフト。「創」のイベント。第１部は「マスコミの報じない裁判の現場」で綿井健陽さんと阿曽山大噴火。
　第２部は「連赤事件とマンガ『レッド』」山本直樹さん（漫画家）、塩見孝也さん、そして私。
　第3部は「国家と死刑」。佐藤優さん、森達也さん、そして私。
　超満員だった。入れなくて帰ってもらった人も50人程いたという。申し訳ない。この日、森さんの新刊『死刑』（朝日出版社）も出版され、タイムリーだった。佐藤さんとは初めてのトークだった。よく勉強してるし迫力もある。会場も盛り上がった。終わって、「創」の篠田さん達と夜中の２時近くまで仕事の打ち合わせ。

(5)12月28日（金）、取材。夜、打ち合わせ。

(6)12月29日（土）フランス国民戦線の書記長、ゴルニッシュさんが来日。木村三浩氏と会いに行く。ホテル・ニューオータニ。久しぶりだ。元気だった。フランスの様子、欧州議会の様子などを聞く。詳しくは来週に。



たかじんの「そこまで言って委員会」

【お知らせ】

(1)『愛国者の座標軸』（作品社・2600円）は12月24日に発売になりました。本屋で自分の表紙を見るのは、ちょっと恥ずかしいです。でも嬉しいですね。神田の東京堂では私のサイン入りの本が並べられています。



阿佐ヶ谷ロフト（12月27日）

(2)今年４月、ニューヨークで「憲法９条」をめぐるシンポジウムが行われ、私も参加しました。ベアテさん、ユンカーマン監督なども一緒でした。これを受けて、来年１月にニューヨークで「９条下における戦後美術」展が行われます。オノ・ヨーコさん、江沢孝太さん、森村泰昌さん、大浦信行さん、照屋勇賢さんらの作品が出品されます。そのパンフレットが送られて来ました。三島のパフォーマンスをした森村泰昌さんの「解説」を私は書いてます。英文で６ページです。苦労しました。大学院の時は英語とドイツ語でレポートを書いてましたが、それを思い出して必死に書きました。ともかく、立派なパンフレットです。

(3)１月５日（土）深夜、12時30分より、新宿テアトル。若松孝二監督、雨宮処凛さんと私でトーク。３月下旬に封切られる若松監督の「実録・連合赤軍」を前にして、監督の以前の作品上映とトークが行われる。その一環として我々のトークもあります。

(4)１月７日（日）７時半、阿佐ケ谷ロフト。講師は木村三浩氏。新年初頭に送る「男気」トークライブ。拳を交えることで学んだ「友情・信頼とは何か」を、憂国の視点を交えて語ります。

(5)１月16日（水）一水会フォーラム。７時、高田馬場サンルートホテル。講師は井川一久氏（元朝日新聞編集委員。元ハノイ支局長）。「ベトナム独立戦争の陰に日本人の血涙」。知られざる貴重な歴史が聞けます。

(6)１月21日（月）午後７時から、阿佐ケ谷ロフト。早見慶子さんの『I LOVE 過激派』出版記念トーク。私も出ます。

(7)２月６日（水）７時、阿佐ケ谷ロフト。久しぶりで塩見孝也さん（元赤軍派議長）と一騎打ち。連合赤軍事件について。

(8)２月10日（日）午後７時半。阿佐ケ谷ロフトで、「ユーストーク」のイベント。「愛国心」について。私も出ます。

HOME